

三千佛堂・庫裡・三重塔・寶藏・鐘樓・鎌倉地蔵堂・千體地藏堂・懸井觀音堂・山門等あり。本堂には本尊阿彌陀佛、脇士千手觀音、不動明王、元三大師堂には元三大師(慈惠僧正真意)自作坐像等を各安置す。三重塔には釋迦、彌陀、藥師、彌勒の諸尊を奉安す。寺寶中、本尊木造阿彌陀如來立像一軀・紙本着色眞如堂縁起三卷・同普賢菩薩像一軀は國寶に指定せらる。本尊は藤原末期或は鎌倉初期の作なるべく、附屬の古座は藤原式なり。眞如堂縁起は掃部助久國の書、大永四年の作なること跋文に見ゆ。普賢菩薩像は道佛折衷畫といふべく、一老翁五彩車に乗り、白象之を曳く。以て直に普賢と定むべからず。技法繊細巧敏明の道畫畫ほど俗化せざるより推して元畫といふべきか。其後兩者共目下恩賜京都博物館に寄託中なり。他に阿彌陀佛像一軀(張思恭筆)・不動明王像一軀(傳弘法大師筆)・二十五菩薩來迎圖一幅(傳惠心僧都筆)・十六羅漢像一軀(傳舟筆)・後醍醐天皇吉野より御寄進の佛舍利等を藏す。なほ本堂の傍に彌陀阿彌陀如來あり、高さ八尺、享保四年木食正禪の遺立に據り、正禪血書之法華經を納む。又本堂後東傍には式算廟存す。附近正門より西半町餘にして陽成天皇陵(神樂岡東陵)・後一條天皇陵(菩提樹院陵)・後冷泉天皇中宮二條院皇子内親王廟等あり。

●十夜法要(十一月六日夜より十六日朝迄)。

大興寺(芝樂師堂)京都市左京區淨土寺眞如町。

●臨濟宗東福寺派。●靈芝山と號し、後に芝樂師堂の名を以て著る。も

と天台宗の寺刹にして上京大宮五辻南(上立賣)芝樂師町に存す。建久七年、後鳥羽天皇の勅達に係り、淨月寂照を開基とす。降りて足利尊氏の信敬厚く、寺領として丹波、伊勢兩國の内三箇莊を寄す。豐臣氏以後は朱印領六十石なり。元禄六年、三轉して現地に移り。以て今日に及ぶ。

年中興せられ、天台宗を改めて時宗となりしも元龜の亂に燒亡す。元禄六年、現在の地に移る。現に藤澤清淨光寺末なり。

東北院 京都市左京區淨土寺眞如町。

●時宗。●靈水山と號し、世々禁裡勤願所なり。寛仁二年、藤原道長京極土御門に法成寺を建てしが、其女上東門院(一條天皇中宮)其東北に本院を營みて法華三昧を修せしめ給ふ。天皇東北院御所の稱を勅許あらせらる。時に本院、四圍十六町、寺領大和國に十萬斛を有したりと云ふ。長元三年八月二十一日供養會を修し、深覺、慶命、尋圓、明尊等當時の名僧を請じて百部の法華經を供養し、精米六十石を施す。儀式一に御齋會に准せらる。次で上東門院遷りて、に御座あり、續世繼に「山のかた大池のすかたもなへてならず。松の風花の梢も外にはすくなくてなむ見え侍る、此堂土御門の末にあたりて上東門院と申す也」と見ゆ。長久元年後朱雀天皇の皇后に、に觀し給ふ。承安元年、火災に罹りて燒失し、爾後、東京極に移され、西は寺町東は川原切、北は今出川、南は廣小路を限りて再建さる。屢次、主上の行幸あり、又禁裡表上の御には假の皇居となりし事あり。其後漸く衰微し、明徳の頃には千手堂のみ残存せし事相國寺塔供養記に見へたり。永祿二

慈照寺(銀閣寺)京都市左京區銀閣寺町。

●臨濟宗相國寺派。●東山慈照禪寺。北山金閣寺と共に銀閣寺の名を以て夙に著る。此地も天台宗名刹淨土寺の所在地たりしが、足利將軍義政、別墅造營の志あり、寛正六年十月此地を相し、文明十二年に至り始めて其工を起す。同十五年其工を竣へ、六月二十七日其台階を移す。後土御門天皇之に東山殿の號を賜ふ。同十七年六月、僧録司相國寺月翁周鏡を戒師に請じ落髮して法號を喜山道慶と稱す。延徳二年正月七日義政の薨すや其遺命に従ひ、東山殿を禪刹となし、其遺骸に因りて慈照寺と號し、相國寺に屬せしむ。僧録石を勸請開山とし寶處周財(高山將監の次子にして義政の猶子なり)を第二世とす。爾來、維山周嘉(義親の仲子)、明房瑞昭(近衛家出)、濕磨等神(九條家出)、維高妙安(久我家出)、陽山瑞暉(近衛家出)、龜伯瑞壽(二條家出)等多く攝家より出て本寺を營す。寺誌に據るに往古東求堂、西指庵(藏師の遊所)、和漢御會所(學文所又は和歌其他の會所)、集芳庵、吟月樓(大書院)、安靜亭(紅葉殿)、

非清琴(泉殿)、夜泊船(船屋)、龍首橋(橋亭)、超然亭(大支關)、洗摩閣(浴室)、銀閣の十二樓ありしと云ふも、天文間兵亂の爲め之等義政等義政の經營の花殿月樹及び愛草の名寶珍器類の大牛一時に燒亡し、僅かに東求堂銀閣寺のみ其難を免る。慶長十七年、第十世明叟、周辰入寺し、法見光源院支室周圭と共に幕府に具狀し伽藍を再興し、堂閣を修理す。明治維新後、住持元續等寺運の興隆を圖り、明治二十七年義政の遺法に則り、品香の式を傳へん爲め當寺に存する古繪圖に依り、かの十二樓中の非清琴を復興せり。舊寺額三十五石を領す。因みに本寺、花道に於て東山流、東山傳流、東山公正流、八代流等に分る、無雙眞古流の家元たり。



(圖 庭 寺 園 銀)

月待の景、鏡鏡の清池を見、遠く慈照寺、城址、淨土寺の故址等を歴然として指呼し得べし。右折して客殿に昇り、廻廊を廻りて非清亭に至る。即ち品香の所なり。東求堂は義政の居所にして、義政總帳西芳寺の風致を賞し、其西求堂に模して造營せるものなりと云ふ。桁行前面五間、後面四間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、棟杵の建築にして、純然たる書院造に成り當代住宅建築の代表的なるものと云ふべし。西方の正壇に彌陀、觀音、勢至の三尊を安置し、側壇に足利氏累代の位牌を置き、其北方の正壇に義政法體の台像を安んず、其東なる同仁齋は四疊半の茶室にして、本邦茶亭の蓋鴉なりと云へり。邊轉して客殿に至る間廊下に存する手水鉢を製形、燈籠を大形と稱し、新界に其名高し、前面の林泉は相阿彌の造營として夙に著聞し、一木一草、一石一塵の布置、總てこれ茶道の典義に出づ階前堆積したる砂を銀沙灘と名づけ、其前にあり、圓形をなせる堆砂を向月臺と稱す。東向すれば仙袖橋其左右老樹の間に點頭、蹲虎等の奇石點在す。鳥を白鷗といひ、又布袋、坐禪、大内等の怪巖を排列せり。香爐峰を過ぎ仙桂齋を流り、數歩にして臥雲橋に至る。洗月泉は一條の素懸斷崖に懸り、下に龍蟠、臥牛、瀧響等の奇石、千代の檣等の奇樹あり、其南邊の落照閣は櫻欄に紅葉によし。右阿すれば龍首橋あり、此邊彌陀、釣月、回廊峰、瀧錦、天柱、壽星、山名、細川、高山等の奇石を排列す。北面して池邊に臨めば落星石あり、浮石あり、仙人洲あり、迎仙、分界の兩橋相對して之に架す。又謝公場あり、臨湖齋ありて優行四間梁間三間、重層、寶形造、棟杵の建築にして、義政金閣に擬して造る所、銀箔を置かんとして遂に果さずして薨すと云ふ。初層を心空殿と名づけ、圓通大

師を安置す。軒一重疎椽、舟肘木、純然たる書院造にして四室に分たれ、外面に明障子を嵌めたり。上層を潮音閣と稱し、金閣と同じく方三間の唐様建築にして、内に觀音を祀り、外面に火燈窓と棧唐戸とを用ひ、四方に縁勾欄を廻らす、東求堂と共に國寶建造物たり。昭和六年往時の手洗ハツの石組、漱蘇亭礎礎石、義政茶之井露路の石階等を發見せり。寺寶として義政木像一軀・義政筆十首和歌二幅・描金現像(銘布留野、眞相下繪)一具・菱鏡香爐形、眞相下繪、彌阿彌作)・横川禪師墨蹟一幅・君察親左右帳記(眞相著)一卷・月舟筆普明國師像一軀・同十六羅漢像二幅・夢空國師墨蹟、池大雅筆山水圖六曲屏風一雙・吳筠筆冬夏山水圖傳眞相筆花傳書・錢鑿筆筆鴨圖七ツ組並(銘七賢、義政筆)一組等多數藏す。就中、義政木像は、室町時代



(圖 堂 求 東 寺 園 銀)



背像彫刻の遺品として注意すべく、簡潔なる技巧を以て、よく其性格を表せり。君薨後左右輔記は義政在世時、東山殿の實行を勤めし相阿彌の記述に係り、殿中の修飾儀注を録し、夙に好事家の貴重とする所なり。○義政正當忌日法要歌茶(一月七日)、開山忌(十一月十五日)。

三福寺(夢見)

京都市左京區新高倉通仁王門北入。

●淨土宗西山派。



(寺 福 三)

堂宇を中興し、改めて九品山阿彌陀院三福寺と號す。嘉吉三年四月、當寺に於て後伏見天皇御年忌法會を修せらる。大永二年七月、當寺と圓福寺との間本末に關し紛争を生じ、之を上司に訴ふ。足利幕府當寺は末寺に非ずと斷じ、其獨立無本寺たる事を確證し、一時暫願寺預けとなる。之れ現在深草派に屬する所以なり。因みに東山義は久しからずして其法脈を斷てり。天正年間、豐臣氏の命により、京極中御門の東に移轉す。寶永五年三月八日、市中の大火に罹焼し、現在の地に移轉再興す。現在の堂宇は享保以後の建築に係る。近世寺領二十石を有せり。●境内五百六十三坪餘。堂宇は本堂・地藏堂・東禮・客殿・茶室等を具ふ。地藏堂安置の地藏菩薩立像は丈高三尺五寸、上東門院藤原彰子佛師定朝をして彫刻せしめ給ひしものなるが、門院之に新念して遂に後一條天皇を御安産ありしと傳ふ。初め宮中に奉安せられしも、後本寺に遷され、織豊時代以後供養料として紀伊郡橋本大路村に於て寺領二十石を寄せられたり。俗に夢見地藏と云ひ、授子安産の靈驗顯著なりとして衆庶の信仰厚し。尙ほ當寺林泉に其秀美を以て著聞す。●國府大般若會(一、五、九月三回)節分會(二月)、開山忌(四月二十六日)、地藏菩薩緣日(八月二十四日)。

要法寺

京都市左京區孫橋通新高倉。

●本門宗。

●一に要山と稱し、當宗七大本山の隨一なり。花園天皇延慶元年、蓮門六老僧の一、日興の法弟日尊の構へし法華堂に淵源す。建武年間、後醍醐天皇に一宗の教義を奏聞し、曆應二年、六角油小路に地を賜はりて道場を建立し、上行院と號せしが、後ち日尊の弟子日



(堂 本 寺 法 要)

刹を合併して要法寺と號す。文祿年間、故ありて二條寺町に移轉せしが、寶永五年、火災に罹り堂舎燒燼せるを以て現在の地に移り、以て今日に至る。現に塔頭九院、末寺九十餘箇寺を統ぶ。因みに慶長年中、本地

院日性(世稱房圓賢)に依り、本寺に於て四書、孔子家語、真觀政要、周易等を木活字にて刊行す。同十二年には直江山城守兼權の委託にて銅活字により文選開版さる。我國古印刷史上、要法寺版と稱せらるゝもの即ち之れなり。●境内約五千坪。堂宇は本堂・開山堂・客殿・庫裡・書院・寶藏・經藏・鐘樓堂・樂器門・高麗門等を具備す。本堂は明和七年の再建にして、西南の隅木に、俗に知恩院の倉、要法寺の鐘と並稱せらるゝ像を存す。寺寶中、鏡金唐草透彫經筒一合は天文二十四年五月二十八日の銘ありて、現に國寶なり。其他、歴代天皇の宸翰・日蓮筆茶經數幅等を藏す。尙ほ境内松樹多く、就中、臥龍松最も著名なり。●日興正當會(二月七日)、日尊忌(四月七日、八日)、高祖會式(十月十二日、十三日)、日日上人正當會(十一月十五日)、日辰上人正當會(十二月十五日)。

頂妙寺

京都市左京區仁王門通川端東入。

●日蓮宗。

●開法山と號し、現に當宗本山の一なり。明應四年土佐の國守細川勝益、日觀に隨依し、洛中四條北御馬場之地を寄せ、一寺を建立し日觀を開基とす。これ本寺の起原なり。日觀、俗姓千葉氏、下總に生れ、九歳にして同國中法華寺六世日蘭の門に入る。文明五年四十七歳の時入洛、細川勝益の歸依を受け、明應四年其外護に依りて本寺成る。時に勝益、足利義高に仕して權あり、子高國及び其子氏綱亦日觀に歸し、爲に寺門大いに振ふ。永正六年、將軍義隆の命に依り長者町新町に移り、更に寺觀を擴大す。大永三年、更に高倉橋木町に移す。天文五年、所謂天文の法難の爲め堂宇



(堂 本 寺 妙 頂)

機失す。同二十一年には叡山衆徒の請に依り、第三世、日興、天台三大部を講じ、座主觀井宮二品親王より勅賞を得たり。尙ほ日興は、常光院日講、久遠院日講等と共に安土家論に於ける日蓮宗の代表者の一たりき

其式次を備へず。寛文年間、現寺地を定む。現に末寺二十七箇寺を統ぶ。●本堂は南面し、内陣中央に本尊法華首領佛・釋迦佛・多寶如來・脇士文殊・普賢・不動・愛染四天王菩薩を安置す。權門は堂前にあり。東に持國天、西に多聞天を配す。共に運慶の作と傳へ、靈驗を稱して靈者多し。依りて他と異り二天の前に特に拜殿を設く。此外、堂宇には祖師堂・大黒天堂・妙見宮・鐘堂・寶庫等あり。因みに本寺の梵號は天王寺六時堂の前の鐘と同調と稱し、古來著名なり。

檀王法林寺(檀王)

京都市左京區川端通三條上ル。

●淨土宗。

●詳さには朝陽山拈檀王院無上と號し、俗に檀王と略稱す。往古は蓮華藏院と號し叡山三千坊の一として天台宗を奉ぜしが、龜山天皇文永五年、淨土宗第三祖記主門下の上首望西橋了惠道光、勅を奉じて之を再興し、悟眞寺と號す。蓋し道光は鎮西流京都三箇三條派の祖源にして、之より當寺淨土宗三條派の本寺として弘願念佛發揚の根本道場となる。三條派名亦本寺所在地に因む所なり。因みに三條派は他の藤田、小幡の二流と共に久しからずして其法脈を斷てり。後ち應仁の兵燹に遭ひて衰頹し、且つ鴨川の水害を被り一時三條東洞院に移轉せしが、幾許ならずして舊地に復す。慶長年間、真定袋中、琉球布教より歸りて後ち之を再興して現寺地に定む。次で眞仙國王の重興あり。延享年間、十二世眞好眞權現在の本堂を再建す。明治維新後漸く荒廢せしを、二十二世護善に至りて再興を遂げ、以て今日に至れり。●境内地千七百七十八坪餘。堂宇に本堂・大佛堂。



地藏堂・寶藏・庫裡・大小方丈・書院・主夜神廟・鐘樓等を具ふ。主夜神廟は發中が夢中に感得せしと傳ふる婆羅門婆羅主夜神を祀り、一山の鎮守たり。寺寶中紙本墨書七知經一卷(奥に天平六年寫經司門部王の銘あり)は現に國寶にして、聖武天皇の勅願により書寫せしめられたる一切經中の一巻なり、他に阿彌陀佛野山影向圖・山王祭圖四曲屏風等を藏す。

西方寺

京都市左京區仁王門通新高倉東入。

●淨土宗。  
●草創並に沿革不詳なり。  
●寺寶中、木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶なり。繪箔文六の像にして鎌倉期の作に係る。

寂光寺

京都市左京區仁王門通新高倉東入。

●顯本法華宗。  
●空中山と號し、當宗の一本山なり。久遠院日淵(始め日鏡と號す)妙滿寺第二十六世を開きしが、天平八年、別に出水近衛町に本寺を創建す。日淵は頂妙寺日現、妙覺寺日語等と共に安土宗論日蓮宗の代表者として著名なり。同十八年、豐臣秀吉の命により、寺町竹屋町に移す。徳川家康二世日海(本因坊算砂)を遇するや、本寺をして本山に列せしむ。寶永五年三月美上後、更に現寺地に轉す。當山第二世日海は塔頭本因坊に住し、鳥鷲の名手なり。初代本因坊算砂と云へるは即ち是なり。織豐三氏の扶助を受け、其名海外に



(堂本寺笑寂)

聞へ、朝鮮國より贈れる菩提並に乾坤宮の額を今尚ほ珍藏せり。四代道兼の時、本因坊を江戸に移す。

妙泉寺

京都市左京區仁王門通新高倉東入。

●顯本法華宗。  
●落陽十六本山の一にして、妙滿寺五代日鏡の開基に係る。もと竹屋町富小路に在りて、大梵刹たりしが天文の法亂に燒亡、後寶永五年、假に寂光寺境内に



(堂本寺傳妙)

移り、以て現在に至る。  
●本堂奉守の祖像は、佐渡の製茶點松の一節を取りて彫刻せるものと傳ふ。

妙傳寺

京都市左京區東大路通二條角。

●日蓮宗。  
●法鏡山と號し、當宗本山の一なり。文明九年、日意の開創に係り、鎌倉本覺寺を東山延と云ふに對し、西山延或は關西山延と稱したり。日意は、初め天台

光福寺

京都市左京區田中馬場町。

●淨土宗。  
●千栗山齋院安養殿光福寺と稱し、俗に千栗寺の名を以て聞ゆ。乙訓郡安養谷東善寺の中興にして、西山派祖道空三代之法孫道空、衆生濟度の緣として歡喜念佛を創唱し、文永二年、龜山天皇より六尊念佛の號を賜れり。第四世信光、天文年間、同じく安養谷に齋院を開創せしが、天正十年、現地に之を移し、丹波國宇津に存せし武藏寺を合併し、齋院院武藏寺と號せり。第七世宗心、豐臣秀吉の歸依を得、法化漸く振ふ。文祿二年、秀吉、宗心の送りし大根の千栗を軍糧に最適なりとて大いに喜び、太鼓と鉦を與へ方百四間を除地し千栗山光福寺の號を附し、諸國に於ける六尊念佛の總本山と定めたり。寛永十四年、知恩院下に屬し以て現在に及ぶ。

知恩寺

京都市左京區田中門前町。

●淨土宗。  
●長徳山功德院と號し、百萬遍の俗稱を以て著聞す。



(堂影御寺恩知)

當宗四大本山の一にして、開光大師二十五靈場第二十番の札所なり。後鳥羽天皇の朝源空(法然)專修念佛の法門を唱道するや、比叡を出で、白川、西山廣谷、東山吉水等を経て、賀茂の河原院に唱名教化す。蓋し



建費黄金五百兩を賜はる。歸洛の後も勸進大いに努めしが、延寶七年に至りて遂に竣工、輪奐の美善に復す。この間十有八年光譽の著す思ふべし。四て本寺中興となす。四十一世玄譽、經藏庫經藏等を新築す。延享四年四月、四十六世道譽、影堂再建の業を起し、四十八世實譽の代、寶曆六年九月、落慶式を舉ぐ。文政十一年三月、茶所より出火して阿彌陀堂焼燬せしが、同十三年三月、再建成る。かくて法統連綿、六十八世現住彦明は一宗の碩學として知恩院専修道場主を兼ね、塔頭七院末寺二百八十箇寺を統ふ。

●境内面積一萬二千二百四十七坪、堂宇には本堂・阿彌陀堂・勢至堂・納骨堂・開祖本廟・純守堂・御影堂・大方丈・小方丈・書院・支那・居間・庫裡・經藏・鐘樓・寶藏・茶所・表門等を具ふ。本堂(瓦葺唐風開八間、桁行九間)慈覺大師作本尊釋迦牟尼佛、弘法大師作脇士毘沙門天王、智證大師作不動明王を安置す。寛文年間再建、正面に後柏原帝尊輪守の額を掲ぐ。阿彌陀堂(梁間六間、桁行八間)は表門の内左側にて東向に建つ。勢至堂及び納骨堂は何れも光譽滿堂の建立に係り、文化七年の改築なり。開祖本廟は寛文二年の遺業、開祖の靈骨を奉安す。前面の石門は念佛の二字より成り、卽是涅槃の四字を扁額とす。門外に十三層の塔一基あり。御影堂(桁行十六間、梁間十四間)の内陣は三部に區別され、中央に靈界を定め、其最奥に須彌壇を築き、壇上に宮殿を懸え、内には法然四十三歳開宗當時の坐像眞影を安置す。右脇陣の正面に中央は二世源智の像、其左右には滿堂の像連に利劍の名號(厨子入)を置き、左脇陣の中央には阿彌陀佛、其左右には歴代人の靈牌を安す。大方丈には後茶眞院の宮輪(加茂御房)の勳額を掲ぐ。庫裡及び經藏は何れも元禄年間建立、經藏には黄髮殿一切經を収む。

所藏の寺寶頗る多く、就中、絹本着色、雲龍鏡揚圖雙幅・同十體阿彌陀像一幅・同善導大師像一幅・同佛涅槃圖一幅・同淨土曼荼羅圖一幅は何れも現に國寶たり。假令鏡揚圖は鏡揚山と、雲龍仙とを一雙づきに描く。上方に「願輝」秋月の二印あり、人體の畫法頗る寫實的にして毛髮鬚眉迄一々細筆を以て描く。しかも其衣帶に至りては一變して太き墨線を用ふ。併してこの兩畫法渾然融合して畫風頗る雄大闊達なり。我國に於ける唯一の願輝眞筆と推定され、眞に支那道釋人物畫中有數の名畫なり。十體阿彌陀像は定印の彌陀を中心に九體の彌陀が白雲に乗じて來迎する圖なり。描繪彩色等藤原式なるも、彌陀の冠裳、蓮座の形狀其他若くは法の一部に南宋佛畫の影響を窺ひ得。蓋し鎌倉初期の作にして、和漢折衷派の一名品なり。善導大師像は起立合掌念佛の儀なり。上方に小化佛ありて一々の念佛に一々の化佛ある傳説を表現す。描法寫實的にして、衣上の鍍金模様の精巧なり。上方に贊文あるも畫の製作年代とは無關係なり。現在善導像中の最古最優品なるも、鎌倉中期以後の作と推定する。佛涅槃圖及び淨土曼荼羅圖又何れも鎌倉期の作なり。其他に傳運慶作阿彌陀如來立像一幅・傳善導大師阿彌陀如來一幅・後水尾帝尊輪守名號一幅・空海筆利劍名號(金泥)一幅・絹本着色後水尾重源傳來五祖之圖一幅・繪宣十四尊者を藏す。

●源智忌(二月十二日)、御忌會(四月二十一日)二十五日、此期間有名なる百萬遍念佛會あり。勸賜利劍の名號を本尊と名し、輪廻六十回、重さ三百貫、一千八十顆の十念珠を唱念と共に一百遍回らす。もと結業十人の定めれば卽ち念佛百萬遍回るを得るなり。近來結業十人に限らず、其の多き時は二百人に餘るといふ。嗣堂法要(十一月二十五日)、成道會(十二月八日)、別時法要(毎月十五日及び二十五日)。

栖賢寺

●臨濟宗大德寺派。同宮山或は朝陽山と號す。應安、永和の頃、赤松



(景全寺賢栖)

蓮華寺

京都市左京區上高野八幡町。

天台宗

●境内地一千餘坪、寺城山に倚りて境内老樹多く、眞に幽邃の靈地なり。堂宇に本堂・金風閣(如意輪堂・釋迦・庫裡・土藏・鐘樓等を具ふ。鐘樓には昭和六年六月歸還に係る。千人鐘を懸く、其重量六百貫、高さ五尺六寸、口徑三尺三寸、鐘樓と共に千餘人の結縁合力により成れるものにして、鏡面に其名を刻銘す同七年五月十五日撞初會を修せり。什寶には古器、古文書等多數を藏す。尙ほ海に當寺尼崎の舊址は、天正の頃、秀吉、明智光秀と戦ひて燒に危難を免れし舊跡なりと云ふ。

●晚天坐禪會(七月中旬)、觀音講(毎月十七日)。

赤山禪院

京都市左京區修學院。

天台宗

●仁和四年、天台座主安惠の創建に係り、延暦寺別院たり。初め其師圓仁唐土に渡り(承和五年)、登州(山東省)の赤山院に寓せしが、山神大山府君の擁護により、求法の本望を全うす。歸朝に當りて赤松の舊跡を免る。仍りて之を西坂本に勧請し、東坂本の山王神と共に法華圓教の鎮守とす。仁和四年に至り、一山の僧徒力を聚せ、二百貫を以て南大納言の山莊を買得し以て其廟堂を建て赤山禪院と號す。正暦四年、宣命ありて從四位下に叙せらる。爾來、天台の別坊として寺運振ひ、屢次、歴代天皇の臨幸ありしが、維新後、大いに衰頹す。明治十八年、再び延暦寺の直轄となり漸次舊觀に復したり。蓋し赤山明神の信仰は、山王權現のそれと共に平安朝以降台徒及び一般庶民の間に著しく、殊に當院大山府君の如き、陰陽家の大山府君祭と相俟つて、延命禱災、富貴榮達を稱せられ、往古來都人觀賽する者頗る多かりき。

●聖明山と號し、當院由緒寺院なり。承應年間、後水尾天皇御遺營に係る修學院三體宮の一にして中の離宮たる樂只軒是なり。延寶八年、後水尾天皇崩御後、

殊院

京都市左京區一乘寺竹内町。

天台宗

●寺域千七百七十餘坪。風に林泉の勝を以て著聞す。本堂には本尊聖觀音菩薩を安置す。開山堂は普明院宮木像・毘沙門堂は毘沙門天を各本尊とす。寺寶には高僧筆蹟等數多く、就中、紙本墨畫林丘寺御手鑑(後水尾天皇宮輪等帖交)一帖は御手鑑目録一冊を附して國寶に指定せられ、現に恩賜京都博物館に寄託中なり。



(堂本寺丘林)



僧最澄の開創に係り、初め比叡山上に在りき。圓仁、安慧、最圓、玄照等相承し、天慶年中、第九世是實、寺基を西塔北谷(今本郷八幡)に遷して東尾坊と號す。天曆年間、北野天滿宮創立せらるゝや、第十五世忠尋、これが別當に補せられ、爾來本院の僧世と社務を掌れり。天仁年間、大僧正忠尋寺號を變殊院と改む。永久年間、第二十三世慈順、別院を北山村に建てしが、康永年間、足利義滿金閣造營の事ありて之を禁斷の傍に移す。文明年間、後土御門天皇の皇子伏見宮貞常親王の御子大僧慈運(第三十三世)、後奈良天皇の皇子覺慧法親王(第三十四世)等住持し給ひしより、爾來、歷朝皇子法統を繼ぎ、永く親王の法室となり門跡に列せらる。明暦二年、真向法親王奏請して寺を四明西院に徙し、大いに殿堂を營み庭園を築きて興隆に努めらる。これ即ち現寺地なり。近世寺領七百二十七石を附せられしが、明治四年門跡號の廢止と共に之を停止し、同九年六月宮内省より百五十石を下賜せられ、同十八年門跡號を復す。舊塔頭に階梯、法堂、惠明、靜慮の四院ありしが、明治五年、本院に合す。諸國末寺現に十萬寺あり。

●寺域三千八百餘坪。叡山の西麓南邊寂雅の勝區たり。堂宇には書院並に佛閣・小書院・持佛堂・御座之間・庫裡・庫裏支圖・上台所・講堂等あり。多く明暦二年の建築に係る。庭園は小堀遠州作と傳へ、清寂閑雅の境たり。前に蓮池を周圍にせる中島あり、露地といひ、明暦二年真向親王の御建立なる辨天堂及び天滿宮あり。寺實中、國寶指定に係るもの次の如し。絹本着色不動尊像一幅は關城寺の黃不動に依りて、代表せらる。藤原朝此種の著しき作例の一にして、形相頗る怪異なると共に、描繪亦雄勁なり。今東京博物館に委託せらる。紙本墨畫夏山水圖二幅は雪舟の筆、一

は寒氣凜烈たる山屋の雪景を、一は青風蘆葉を渡る水邊の夏景を描き、共に墨一尺五寸、幅九寸六分の小幅ながら、よく畫聖雪舟を窺ひ得る名品たり。同松雲圖一幅は雪村の筆、墨筆を以て奔放に描き去り、一種他になき氣格の存するを見るべし。絹本着色叡山山水圖一幅は明の朱端の筆なり。紙本淡彩東北院歌合一卷は鎌倉以降多く作られし職人畫の歌合中最古のもの、これは建保二年の秋東北院の念佛に種々の職人が集り、月と戀を題として歌を誦み、經師之を判じたるに象りて一職人毎に其風體を描きし畫を拵みし一種の繪巻物ともいふべく、畫粗末なるも、筆致頗る純達自由なり。絹本着色松雲圖一幅(附武田信玄書狀一通)は明初之作と推せられ、元龜元年六月二十三日本院覺慧法親王が天台座主となりし時、祝賀として七月十九日武田信玄より贈りしものなりと云ふ。文書には紙本墨書慈圓僧正願文一卷(傳春日表白、貞應三年仲秋)・筆蹟には紙本墨書後醍醐天皇宸筆御消息(七通)一卷・同光嚴天皇宸筆御消息(一)幅(貞和五年三月十一日)・同後花園天皇宸筆御消息(一)幅(外題に寛正四・五・三)・同後土御門天皇、後柏原天皇御歌巻物一卷(後柏原天皇宸筆、飛鳥井榮雅題)・紺紙金泥後奈良天皇宸筆般若心經(安房國宛)一卷(附、御寫經始日次勅文一通、報恩院源雅書狀一通、平盛經請文一通、報恩院源雅書狀一通、生清書狀一通、心經疏遺諸國覺一通)・紙本墨書後陽成天皇宸筆御消息(二十九通)一卷・同源氏物語三冊(蓮生、滿雲、關屋、各卷に晴雲山人明鏡の奥書あり)・色紙墨書古今集一卷等あり。

北山別院

●見宗本願寺派。京都市左京區一乘寺師堂町。

●聖水山と號し、もと養源庵と稱す。京都四箇別院の一なり。傳へ曰ふ、往昔叡山三千坊の隨一にして、觀覺の里坊たりしと。又曰ふ觀覺六角堂に參籠せし時常に當院境内の泉水を以て茶湯を取ると。聖水山の號これに原由せり。本願寺九世實如、此聖跡を復興す。初め延暦寺に屬せしが、後南禪寺、十念寺(西山派)と變轉す。寛文十年、南禪寺、十念寺各官府に訴へ、自家の末寺と稱す。されど官府其訴を採らず、之を没收せしかば一時廢庵の運命に在りしと、延寶五年十月、叡里村の里正牛兵衛なる者、正覺寺廢庵を以て官府に請はしめ、眞宗の寺院となさんとし、翌六年京都町奉行能勢日向守頼宗之を允許す。即ち同年寺宇を興し、養源寺と稱す。延寶八年七月、本山家司上原兵庫、慶永に本山の御坊となさん事を勸む。慶永之に従ひ、遂に本山の別院たらしむ。享保十七年五月本山山科の本願寺遺跡に坊舎を興さんせしと、幕府之を許さず依りて本寺の殿宇を移建す。其後址、小庵一字僅に存せり。明和二年、法知佛殿を復興し、面目を一一新す。安永二年六月、村中より失火し、頓燒の厄に遭ふ。同五年、假堂を造營し、香積、書院等次第に成り、文政五年本堂の再建成る。安政年間、本願寺二十世廣知京都岡崎願成寺の請を容れ、堂宇を彼地に移し、次いで再建に從ひしが、時に世上雖然、工半途にして止む。明治四年、二十一世明如現今の本堂を造立す。

●寺域千二百五十坪。堂宇は本堂・庫裡・支圖・書院・表門・鐘樓・佛飯所等を具ふ。觀覺の舊蹟たる聖水は境内東山の麓より湧出す。又覆掛石と稱するものあり。同じく觀覺の遺蹟たり。寺實に阿彌陀如來木像一幅・觀覺畫像一幅・蓮如畫像一幅・能成院(能勢日向守頼宗)畫像一幅(德力善畫)等あり。

●實如忌(四月四日、五日)、報恩講(十月四日、五

圓光寺

●臨濟宗南禪寺派。京都市左京區一乘寺町。

●瑞巖山と號し、下野國足科學校の僧元信三聖の開基たり。徳川家康三聖を重用し、崇傳と共に諸寺を營し、其幅機を議せしむ。慶長六年、伏見指月に當寺を創設し學校に充つ。時に家康、印板杖十萬、朝鮮書牘二百冊を寄せ、之を主管せしむ。當時俗に洛陽學校と稱したり。本尊は運慶の作千手觀音を安置す。其後相國寺内に移りしが、元和七年、同様に攝る。同九年細川忠利再建す。寛文七年、徳川氏より今の地を下附し朱印地二百石を寄せたり。

●寺域二千百十三坪。寺實中、絹本着色元信和尚像一幅(白遺)及び應舉筆紙本墨畫竹園六曲屏風一雙は國寶に列す。後者は應舉四十四歳の作にして、從來の墨竹法に元明の畫法を加味せし名品なり。

妙泉寺

●日蓮宗。京都市左京區松ヶ崎町。

●松峯山と號す。中納言源保光の開創に係り、もと歌喜寺、又地に因みて松崎寺と號せりと云ふ。初め天台宗なりしが、永仁年間、時の住持實眼、時に入洛せし朗門の目録に歸依し、寺號を現稱に改め、日蓮宗の傳とす。此時一村の住民悉く日蓮の門に歸すと云ふ。天文五年の法胤の爲め堂宇燒失せしが、天正三年、豊臣秀吉築第厨庫を寄せて本堂となし、之を中興せしむ。舊時實成、實泉、玉禪、大乗、止靜の五院ありしが、明治九年之を本寺に合併す。

●境内九百六十二坪。本堂・開山堂・妙見堂・七面

妙圓寺

●日蓮宗。京都市左京區松ヶ崎町東町。

●七福神めぐり第一番札所に於て松ヶ崎大黒天の俗稱を以て著る。天正年間本願寺僧日生の開基に係る。傳ふ。元和二年本願寺日蓮宗に隱退して中興す。元



(殿本天黒大寺圓妙)

●寺域松ヶ崎山麓にあり。景致優る。本堂、客殿・庫裡・大黒天日英の感得の靈像にして最澄の作なりと傳ふ。境内に中興記念松あり。

●大黒天縁日(二月二十七日、四月二十八日、六月二十七日、八月二十六日、十月二十五日、十二月二十四日の各甲子の日)各日前晩の十時宵甲子祭を修し七種供養の福當を行ひ、續いて開運祈禱會を執行し福壽圓滿守護の御幣を授く。此日實者遠近より殺到し、境内股賑を極む。此外、一日と十五日及び子の日に例月祭を執行す。

●現に當派別格寺たり。

五鳳院

●臨濟宗妙心寺派。京都市右京區花園妙心寺町。

●妙心寺子院の一たり。花園法皇の御影堂にして、一に花園御殿又は顯徳殿と稱す。此地、往時花園法皇の隱宮にして藤原殿と稱せしが、延元二年、藤原を改めて妙心寺を創建し、關山慧玄を請じて開山とす。然して法皇亦方丈の側に別院を建て、清居し給ふ。是れ本院にして、今拈華室といふはその御常居に當る。後ら應仁の兵燹に罹り燒亡し、明暦二年今の堂宇を建立す。現に當派別格寺たり。

●境内二千三百三十六坪。寺域妙心寺法堂の東南約八町の地にありて、南面す。堂宇に本堂・開山堂・唐門・四脚門等あり。本堂(東西九間半、南北三間半)には花園天皇法衣の寫影を奉祀し、實業玉鳳院の額を掲ぐ。又内陣東西の壇に歷聖尊牌を安す。内陣口螺鈿の唐戸四枚は唐玄宗居殿の具なりと傳へ、文殊役殿料

京都府(京都市)



品なりと云ふ。紫銅二重塔内に南都圓照寺文智尼公(後水尾天皇皇女)御刻爪字観音を納む。脇壇には徳川氏累代、織田信長、武田氏一族の牌を置く。堂内東壇に存する枯華室は花園法皇御座間にして狩野益信筆機繪、雪江筆扇額あり。開山堂(微笑庵)及び四脚門(微笑庵前門)は共に國寶建造物なり。開山堂は歩廊を以て本堂に連り、



(寶蹟)(堂山開院皇玉)

に連り、禮堂を接ぐに合の間をか以てす。國寶建造物となれるは、其禮堂にして三間四、單、屋、根入母屋造本瓦葺、正平十五年(延文五年)の建立に係ると云ふ。様式手法等總て唐様に則りて権衡整美、細部形式に尙ほ輕快なる鎌倉期の遺風を傳へ、其平面に於て所謂開山堂式の特徴を發揮し、美濃永保寺開山堂と共に室町初期新堂建築の好例とすべし。廟堂には開山慈玄の牌を安置す。四

脚門は四脚平入唐門、屋根檜皮葺、應永十六年の建立と傳へ、後小松天皇皇居の唐門を賜はりて移建せしものと云ふ。屋臺頗る輕妙にして、権衡整ひ後世の唐門に見る厚重の感なく、眞に優美なる線勢を示せり。唯軒の稍や高きに失する憾あれど、總體の手法よく室町初期の特徴を示し、實に當代平入唐門の範とすべく、大和法隆寺北室院唐門に比して其形狀様式通に優れたり。蓋し以て四脚唐門中最古のものとすべし。唐門は寛文年間、隆屋辰五郎の建立なりと云ふ。寺寶中、木造豐臣兼光所用玩具船一箇は國寶に指定せられ、目下恩賜京都博物館に出陳中なり。

### 聖澤院

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

●妙心寺塔頭にして、四派本庵の一なり。大水三年天隆和尚德樹當院を創立し、其師東陽(大道真源禪師)を請じて始祖とす。其後文祿元年、七世唐山の時、檀越早川主馬頭之を再興す。

●境内九百九十二坪、東西九間、南北六間の本堂あり。寺寶中、絹本着色摩利支天像一幅は國寶に指定せられ、現に恩賜京都博物館出陳中なり。鎌倉末期の作にして、描線頗る銳細、彩色技巧亦精緻を極む。圓は朱絲衣上に金泥を以て衣襷線及び機杼を描き、其他冠、圍扇、椅子等悉く金泥を用ふ。宋元畫の影響甚大なるを看取し得べし。その他狩野與以筆畫豐饒十牛圖十幅、海北友松筆兼山贊三平石齋圖一幅、青磁向獅子香

爐一箇等を藏す。境内に早川主馬頭墓あり。

●開山(東陽)忌(九月二十三日、二十四日)。

### 春光院

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

●妙心寺塔頭なり。天正十八年、堀尾吉晴の建立にして、碧潭座元を請じて開山とす。爾來堀尾氏菩提寺たりしが、寛永年間、堀尾忠晴歿し、其嗣子なきを以て同氏除封さる。依りて山城淀城主石川憲之、同族の故に依り其香華を奉す。後ち堂宇を改修して今日に至る。

●寺寶中、絹本着色東方朔桃圖一幅・銅鐘一口は共に國寶なり。東方朔桃圖は現に恩賜京都博物館出陳中にして、明の張路(字は天驕、平山之號)筆と傳ふる明中期の北宗畫なり。銅鐘は天主教徒により輸入せられし歐羅巴製銅鐘にして、銘に一五七七の耶穌紀元と教會記號を鑄出せり。尙ほ境内に堀尾吉晴、寺澤聖高等の墓碑を存す。

### 春浦院

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

●妙心寺塔頭。元祿十年、一柳末禮の建立する所に於て、空山を請じて開山とす。爾來一柳、細川兩氏の菩提所なり。

●寺寶中、紙本着色福富草紙二巻は現に國寶に列し恩賜京都博物館に出陳さる。福富の畫が滑稽諷刺中に勸戒の意を寓せし繪物語なり。短圖を畫中に書入せしことは既に前代より見ゆれど、本巻に於ては畫圖に明白なる分段を與へず、畫面餘白を自由に詞を以て埋め

### 退藏院

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

●妙心寺塔頭。應永十一年、波多野出雲守重通、妙心寺三世無因宗因に歸依して城中に退藏院を創し住せしむ。後柏原天皇御宇、現地に移り、後ち龜年禪師之を中興す。舊寺領八十石を有せりと云ふ。

●境内千五百九十坪、大玄關は世に稱譽の玄關と呼ばれ、其構造頗る珍奇なり。又古法眼元信の築ける假山水の庭園は夙に名園として著聞し、名勝庭園に指定せらる。所藏の紙本淡彩瓢圖一幅は國寶に指定せられ、目下京都博物館に委託す。もと小屏にして其表裏に畫と賛とを貼りしが、現在一幅の上下ととし掛幅とせり。賛に當時の詩僧三十餘名の題語あり。其中、周鼎崇の序文により、此畫は足利義滿、僧如拙をして描かしめしことを知る。其畫は極めて剛き筆を用ひ、所謂宋元墨畫式に描かれ、彩色には僅かに淡黄色を用ふるのみ。其技法未だ醇熟を経ざるも、清雅の風情を具へ、多數に存する如拙畫中の眞作として、貴重なる遺品なりとす。また詩文によりて此畫の五山文學に對する關係の密接なるを推知すべし。

### 開山忌

(六月四日)。

### 大心院

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

京都市右京區花園妙心寺町。

●妙心寺塔頭。明應元年、細川政元の上京區大心院町に建立し、景堂を以て開山とせしが、天正年間に至り現在の地に移る。後ち蒲生中務大輔堂宇を再建し以て今日に及ぶ。

●寺寶中、絹本着色羅漢像一幅は現に國寶なり。因幡陀尊者の像にして十六幅中の一なるべし。圓は支那粉本に依り描法亦努めて之に模せしが如きも、大和繪流の鋒銳たる所に表はれ、流暢通達、典麗温雅、寫貌賦彩亦甚だ巧みにして邦人の手になりし羅漢像中の逸品とすべし。明光以前鎌倉末期の作たる事論を俟たず、因みに長野縣諏訪郡上諏訪町教念寺藏羅漢像二幅は當寺羅漢像と同筆者屬幅と推知せらる。

### 天授院

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

●妙心寺塔頭にして、長慶天皇天授六年、妙心寺二世授翁宗弼の開創と傳ふ。一に授翁を以て萬里小路房に充つるも疑はし。文明年間、雪江宗深法嗣四人の中東海派開祖悟溪宗頓の塔所となる。現に當派別格寺たり。

●寺寶中、紙本墨書法華經譬喻品(正中三年萬里小路宣房筆)一巻は現に國寶に列す。

### 天球院

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

●妙心寺塔頭。寛永八年、池田光政並に同忠繼、其叔母天球院(池田信輝第三女、壽永大姉)の菩提所として建立せしものにして、江山之が開基たり。されば明治維新迄は岡山、鳥取兩池田家の菩提所として、其厚

き保護を蒙り。

●境内千三百八十坪、本堂(附支廳)は桁行七間、椽間六間、單層・屋根入母屋造・機瓦葺・もこ柿葺の建築にして、現に國寶建造物なり。寛永七年より同十二年に至る間、池田光政の建立に係り、江戸時代方丈造の一棟本とすべく、其支廳は特に注目すべし。堂内の金地着色竹虎圖二十面(襖貼付十六、戸襖貼付四)、同梅遊園圖十八面(襖貼付八、戸襖貼付十)、同藤草花圖十八面(襖貼付八、戸襖貼付十)及び着色杉戸繪十六枚(雪中梅圖二、表梅畫裏人物圖二、表鶴裏高士觀水圖二、表松圖二、表牡丹裏枯木鳥圖二、表竹裏枯木畫圖二)の諸畫は紙本墨書(正中二年六月萬里小路宣房筆)法華經陀羅尼品一巻と共に何れも國寶に指定せらる。襖繪並に杉戸繪は其畫調正に京狩野風にして、自然の描法頗る精緻、飽滿絢爛の効果を期せり。山樂一派の筆に成れるは既に疑なきもの、如く、以て大阪落城以來失意の境遇にありし京狩野猿蓑の筆作となすべし。尙ほ境内に池田光政及び同忠繼の墓あり。

### 東海庵

京都市右京區花園妙心寺町。

#### 臨濟宗妙心寺派

●妙心寺塔頭にして、所謂四派本庵の一なり。文明十六年、齊藤越前守利勝の室利貞禪尼の創建に係り、雪江宗深法嗣四人の中、東海派開祖悟溪宗頓を開祖とす。其後、天正年間、再建を遂げ、以て現在に至る。現在當派別格寺たり。

●什寶中、紙本水墨傳元信筆瀟湘八景圖四幅(奈良帝室博物館出陳中)、絹本着色十六羅漢像十六幅(恩賜京都博物館出陳中)は國寶に指定せらる。後者は其畫



妙心寺 京都市右京区花園妙心寺町。
臨濟宗妙心寺派。
正法山と號し、當派の大本山なり。此地も法金剛院の所屬たりしが、花園上皇に、離宮を營み、名づけて蘇原殿と稱す。上皇深く禪學を好み、延元二年遂に之を捨て、禪寺となし給ひ、宗峰妙超(大徳國師)の法嗣關山慧玄(美濃掛深の山中より請はれて開祖となる。是れ本寺の草創なり。次で興國六年、上皇、河内國下仁和寺莊地頭職を慧玄に附し、當寺造營料に充てらる。時に上皇亦別に一室を方丈の側に造りて之に移御し、禪法の要を問ひ給ふ(後の玉鳳院はこれなり)貞和四年十一月十一日、上皇崩御の後、崇光院亦深く慧玄に御歸依あり、翌應永二年、特に再任の御旨を賜ふ正平十五年、慧玄寂するや、之を當寺に葬り、嚴美庵(開山堂)を建立す。其後、授翁宗弼、無因宗因相繼ぎて住持たり。應永六年、大内義弘、足利義滿に叛するや、義弘が本寺住持關山宗朴の禪弟たるの故を以て、拙堂義弘に譲せりとの説を受け、義滿の爲に寺領を没收され、住持拙堂は青蓮院に幽閉せられ、本寺亦青蓮院門跡の所轄となり。其後、寺號を龍興寺と改め、南禪寺德雲院の延用宗器之に住す。かくて他門に管せらるゝ事數十年、殿堂荒廢し、繞に開山堂を存せのみなりき。永享年間、延用等其復興を圖り、尾張犬山瑞泉寺の日峰宗舜を以て妙心寺の住持となし、大いに

力をもつて堂塔伽藍を修葺す。爾後、宗舜は管領細川持之の歸依を受けて、寺境に養源院を營み、嚴規を制定して四方より來集せる僧徒を誦進し、以て宗風を發揚す。嘉吉年間、近江の莊園遺附せられ、文安年間、足利義政美濃の封邑を割きて施入し、寶徳二年、細川勝元、本寺住持義天玄詔に歸し、境内に龍安寺を創す。應仁の亂起るや、本寺又兵火に罹り、六世雪江宗深以下亂を丹後に遷す。文明年間、開祖關山に及び、後土御門天皇勅して本寺を再興せしめ給ひ、宗深亦百方計畫し、漸く舊觀に復す。以て本寺の中興となす。同十八年、細川政元管領を繼ぐや山内に大心院を建立して香華所となし、且つ交勝元の遺念に依りて一山の保護に努む。永正年間、美濃の人齋藤利國の室一條氏(利貞)地域を寄す。即ち現寺城



(寶圖)(門山寺心妙)

て、桁行五間、總間前後五間後面二間、重層屋根切妻造本瓦葺、妻を正面とし正面中央唐破風の廂を突出せしめ入口とせり。唐破風廂下の幕段間雲龍の彫刻は尙ほ幾分桃山期の遺調を存し、唐破風の線勢必ずしも窮風の麗なり。内部後方に接して唐破風の小室を設けて内を浴槽とし、更に左側に一小室を附す。總間の櫓檜、繪、彫、刻、その他、の裝飾的裝置なし。其形式手法に桃山時代の遺影を留め、然も従来の浴室の平面及び構造様式を存し徳川初期の建築として見るべきもの頗る多し。浴室の東に衝廊、寶藏、長興院、養源院並列し、北に鐘樓、東に衝廊存在す。鐘樓は寛永十六年の遺營に係り、桁行三間、總間二間、重層、屋根入母屋造、本瓦葺袴腰の建築にして、腰に廻縁高欄を附す。其櫓檜美にして斗

西部の地はれなり。かくて寺城大いに擴まり、加之、大和越智氏及び土岐氏等の歸依を受けて寺運漸く振起し、後柏原天皇、時に寺格を陞せて五山に次せらる。當時一山の事、中興宗深の遺命に依りて龍安、大心、天授、退藏、養源、如是、衝梅、龍泉、東海、靈雲、聖澤の十一箇院の評議に決す。また宗深は兼に法嗣四人を簡ひ、景川宗隆に嚴美庵を、悟溪宗順に天授院を、特芳禪覺に龍安寺を、東陽英朝に養源院を附す。是れ妙心寺四派の遺調にして、後ち龍泉、東海、靈雲、聖澤の四本庵となり、四派の執事は皆んご一山の全權を掌握し、一山の住職亦、これが爲に進止せらるゝこと、なれり。蓋し本寺住職、三世無因宗因、以來一度大徳寺に住する例なりしか、永正六年二月、劉林宗棟當山に入らんとして、勤旨を承け之を改む。次で相庭宗松初めて勤旨茶衣を拜す。茲に於て當寺の寺格大いに隆み、次で大休宗休の時、後奈良天皇の御歸依厚く、寺勢頗る掲る。元龜、天正以來、織田、豐臣兩氏を初め諸國の武將歸依する者愈々多し、慶長年間、山門、勤使門成る。徳川幕府亦四百九十一石餘の朱印狀を附し本寺の寺運此時に當り最も隆盛なり。當時寺城方五町に及び、七堂具備し山内に塔頭子院八十八箇寺、寮舎三十三宇、武將の建立するもの三十八、僧の開せしもの四十一なりと云ふ。萬治二年、住持慈雲、法堂方丈及び庫裡を修理す。明治維新後、寺領は土地となり、塔頭亦廢合せられて約半數を失ふ。明治九年九月獨立して臨濟九派の隨一となる。次で同二十九年二月宗制、寺法等を定めて一派の基礎を確立す。現に子院中、玉鳳院は花園法皇遺詔により特別の例格を留存し他に龍泉、東海、靈雲、聖澤の所謂四派本庵を初め三十九箇院の塔頭子院本寺の内外に相列す。現に當派本山として末寺三千四百八十六箇寺、教會說教所百四十六

廣所を統べ、臨濟宗諸派中最大の宗勢を維持せり。
●境内總面積十萬餘坪、一山伽藍の配置、其中總線上に總門・寶池・山門・佛殿・法堂等相並び、大徳寺と共に最も完備せる禪宗伽藍の典型にして、諸堂古來態度が再建を経たりと雖も、尙ほよく舊時の制を保てり。堂宇中・佛殿(本堂)・法堂・山門・浴室・鐘樓・經藏・勤使門・大方丈・支圓・殿堂・小方丈・庫裡は何れも國寶建造物に指定せらる。先づ城域の南端、下立賣通に臨み、南總門と並びて勤使門あり、切妻造、檜皮葺の四脚門にして、慶長十五年の建立に係る。其裝飾僅かに木鼻、幕段、大瓶束等に繪物を施せるのみなれども、軒の伸長頗る自由、木割又雄大にして、よく桃山時代の精神を發揮せり。門前に石橋あり、其欄干擬寶珠に「慶長庚戌十月十二日藤原朝臣大工對馬守國久」の銘あり。以て勤使門と同時の遺營なるを知るべし。總門を入れば右に龍泉庵、左に慈雲院を見、山門、浴室に到る。山門は型の如く勤使門の北一線上に在り、前に池ありて石橋を架し、後に佛殿ある事又制現の如し。山門は慶長五年桃山盛時の建立に係り、塔中子院を除きて本寺數多の堂宇中最古の建築とす。形式五間三戸(側面二間)の總門にして、左右兩溜に山廊を附し、重層、屋根入母屋造本瓦葺、山廊は共に單層切妻造本瓦葺なり。上層軒下稍々高きに失して櫓檜齊美ならざる憾ありと雖も、其構造手法總體に堅實にして雄大の氣を表し、よく桃山期の特質を發揮す。蓋し京都大徳寺山門と共に當代山門建築の神となすべし。尙ほ關上の正面には觀音、左右には月夜長者、善哉童子、十六羅漢の木像を安置し、天井の天人華蓋の圖は狩野權右衛門の筆に係る。其の東に天正十五年、當山住持密宗の明智光秀菩提願の爲に創建せる浴室あり。俗に明智風呂と云ひ現今のものは明曆二年の再造にし



(寶圖)(堂法寺心妙)

て、桁行五間、總間前後五間後面二間、重層屋根切妻造本瓦葺、妻を正面とし正面中央唐破風の廂を突出せしめ入口とせり。唐破風廂下の幕段間雲龍の彫刻は尙ほ幾分桃山期の遺調を存し、唐破風の線勢必ずしも窮風の麗なり。内部後方に接して唐破風の小室を設けて内を浴槽とし、更に左側に一小室を附す。總間の櫓檜、繪、彫、刻、その他、の裝飾的裝置なし。其形式手法に桃山時代の遺影を留め、然も従来の浴室の平面及び構造様式を存し徳川初期の建築として見るべきもの頗る多し。浴室の東に衝廊、寶藏、長興院、養源院並列し、北に鐘樓、東に衝廊存在す。鐘樓は寛永十六年の遺營に係り、桁行三間、總間二間、重層、屋根入母屋造、本瓦葺袴腰の建築にして、腰に廻縁高欄を附す。其櫓檜美にして斗

供の制亦見るべし。經藏は寛文十三年五月、大阪の淀屋辰五郎の遺營する所にして、桁行三間、總間三間、重層、屋根寶形造本瓦葺、上層方三間、屋頂寶珠重疊を冠し、屋蓋の勾配甚だしく急ならず。總體の構造様式簡明にして裝飾等を缺くこと雖も、形態整齊にして、通行禪宗寺院の經藏と其外觀等を稍々異にせるは注意すべし。内部は瓦敷、化粧檜根莖、中央に繪藏あり、内外八百箇に納むる一切經經は朝鮮本即ち高麗版に據りて十二人の本寺學匠、八歳を費して筆寫せしもの、其數頁に六千五百二十七卷の多き上る。繪藏の前に佛大士、周圍に天龍八部衆の像を安す。尙ほ見覺藏の扁額に伏見天皇宸筆と云ふ。經藏の傍に雪江松あり、寛正三年當寺第六世雪江宗深の栽する所にして幹根蟠風枝條繁茂せしが、昭和五年枯死し、今は其孫樹小雪江松とて存する。經藏の西に佛殿あり、桁行五間、總間五間、重層、屋根入母屋本瓦葺。段組石壇上に立ち天正十三年の建立にして、文政十三年の遺營に係る。内部總瓦敷、天井に龍圖を施す。内陣後面中央の柱間を板壁とし前に佛壇を設け、中央に釋迦三尊、東壇に大元帥明王、密守菩薩、由緒ある君臣の木像、西壇に塗磨、百丈、慧玄の各木像等を安置せり。蓋し本庵の構造様式等全く舊制に倣ひて禪宗佛殿の典型をなすこと雖も、其棟高きに失して櫓檜狭高、又細部手法等に徳川末期の色調を帯びて莊重雄大の感乏しく、總體に過ぎざるの憾あり。堂の前なる四株の松を四派松と呼び、東は龍泉、東南は靈雲、西北は東海、西南は聖澤を表すこと云ふ。法堂は佛殿の背面に在り、流麗を以て連結し、後方に流麗櫓數間にして殿堂あり。法堂は桁行七間、總間六間、佛殿と同じく重層、入母屋本瓦葺にして、天井の龍の圖は狩野權右衛門の筆に係り、筆勢の雄渾古今無双と稱す。明曆三年の建立にして、棟樑には



日向國産の杉を用ひ、檼木柱は花井紹隆なる者、河高士山麓より伐採して寄附せしものと云ふ。其外觀悉く佛殿に同じく、正に禪宗佛堂の舊型を襲す。然も佛殿に比し木割桁や雄大にして堂宇の規模宏壯、細部の手法等亦佛殿の如き雄辯の風を有せず、よく徳川初期の特徴を示せり。法堂の西に聖澤院、其南に天授院、退蔵院列在す。寢堂は玄關、方丈等と共に承應三年の建立にして、桁行三間、梁間三間、單層、入母屋造本瓦葺、高き段組石段上に建つ。住持諸法式修行之時茲に禮を行ふ。堂の様式手法簡單なれどもよく麗まり姿態雅緻美なり。其の内部亦裝飾なれど、頗る清涼の氣あり。この東に玄關あり、大方丈の玄關にして、其右側前方に南面して突出す。桁行五間、梁間一間、正面大唐破風を附し、五間の扉を以て、後方大方丈に達す。唐破風の線勢、桃山期に見るが如き伸長の自由なしと雖も、門の形態簡快、よく禪制方丈玄關の特徵を示し、裏腹の彫刻亦稍々美麗にして徳川初期の色調を帯ぶ。大方丈は桁行前四間後六間、梁間左七間右五間、屋根入母屋造栴檀の大建築にして、前に前殿あり。總て書院造の形式に據り、構造簡潔、室内の裝飾必ずしも華麗ならざれども、雅麗の趣あり。よく徳川中期書院造の特色を示せり。内部總疊敷、前面三室、佛壇の間に兩脇一間都合六室より成る。安置せる正面の彌陀三尊像は、もと石清水八幡宮奥ノ院に安置しありしを、維新の際八幡宮の別當寺なる善法律寺を経て、本寺に奉安せりと傳ふ。入口唐戸の上なる方丈の額に明の張即之の筆、室内襖の畫、中の間並に東の間の間は狩野探幽、裏西北の間の間は狩野登信、同東北の間の間は狩野主馬の筆なり。大方丈の西北に庫裡あり、桁行左側六間右側九間、梁間八間、單層、屋根切妻造本瓦葺、大棟一部を破りて燈出櫓を作り、其妻

部を正面とす。妻部の様式手法頗る整備し、我庫裡建築中、其手法最も完備せるものと稱せらる。入口唐破風の曲線亦自由にして幾分桃山期の餘影を存し、總體に豪快莊重の氣を幾ぐと雖も、形態整備し、よく當代以後に行はる、庫裡の典據となれり。大方丈の東に小方丈あり、住持常居の室とす。桁行前四間後六間、梁間左側七間右側五間、單層、屋根入母屋造栴檀、室を表裏三室に區分す。其構造様式頗る簡單にして、大方丈に對稱たるものあり、よく徳川中期に行はれたる一般的書院造の形式を備へ、簡易素朴却つて拘すべきものを存す。小方丈の南に東海庵、東に小路を距て、大心院、其南に玉風院あり。寢堂の西なる鐘樓内の銅鐘は、現に國寶にして、其音聲樂律中の黃鐘調に合すさて風に喧傳さる。其形狀殆ど圓錐に近く、上圓及び下圓に唐草文様を鑄出し、内面の陽文に「戊戌年四月十三日壬寅收精所評造香米運廣國鐘」の銘を存す。狩野探幽の說に依れば、戊戌年云々は文武天皇二年に當ると云ひ、本邦最古鐘として考古學上重要な遺品なり。寺傳には敏達天皇七年と云ひ、聖德太子が四天王寺六時堂前に於て聖觀音を尊まれし時、樂律を整調するに此鐘を用ひ給ひ、爾後傳へて經緯淨金剛院にありしが、轉々して本寺に傳はるといふ。藏する所の寺寶又頗る多く、寫經、名書、珍什物からざる中、國寶に指定せられたるもののみを舉ぐれば、前述銅鐘一口の外、紙本着色三幅及び寒山拾得圖六曲屏一・同呂望及び高山四遊圖六曲屏一・同琴棋書畫圖六曲屏一・同花卉圖六曲屏一・同戰子陵及び虛溪三笑圖二幅屏一(以上雙海北友松筆)・絹本着色唐室和尚像一幅(實祐一上午自贊)・同大聖觀音像一幅(在實)・同大觀音像一幅(元徳二年自贊)・絹本着色普賢菩薩像一幅・絹本着色花園天皇御像一幅(後花園天皇御筆御贊)。(附、紙

本墨畫同御像一幅)・紙本着畫中邊曆左右雙千布袋像三幅(中文禮左右廣間贊)・絹本着色十六羅漢十六幅・紙本着色龍虎圖六曲屏一雙・俱利伽羅龍守刀一口(中身銘尙宗、豐臣兼丸所用)・小形武器三種(甲二領、冑一領、鞍一背、豐臣兼丸所用)・紙本着畫桃圖天皇園山國師靈驗勅書一幅(實祐六年十月二十日)あり。其中、三體及び寒山拾得圖・花卉圖・普賢菩薩像・中邊曆左右雙千布袋像・俱利伽羅龍守刀・小形武器は恩賜京都博物館出陳中なり。前二者は當寺所藏に係る他數種の友松屏風(東京、奈良兩博物館出陳中)と共に單に友松の代表作たるのみならず、所謂桃山藝術の特色を發揮せるものにして、何れも友松の名印を有す。普賢像は南宋馬麟の筆と傳へ、釋迦三尊三幅對の一なるもの、如し。衣紋には特に強き墨線を用ひ、全體の彩色は淡墨を以てす。蓋し南宋畫なる事疑ひなきが如し。邊曆、雙千布袋三幅の中、中幅邊曆は無款、上に南宋滅翁文禮禪師の贊あり。他二幅、布袋圖に李隆の落款あるも共に南宋畫漢黃潤禪師の贊を有す。何れも漢墨の流筆墨を以て描き要所のみ角墨を點す、就中、李隆の作は稀有の名作たり。又龍虎圖屏風は友松と傳ふるも、恐らくは其門弟の筆にして慶長頃の製作に係るべし。六羅漢像は明畫なり。尙ほ此外六千餘坪の庭園は名園として著聞し、現に指定庭園なり。尙ほ寺内に專門道場、専修學院、寺外に臨濟宗大學、花園中學校ありて何れも當派の經營に係れり。又正法山十境ありて其景趣夙に聞ゆ。

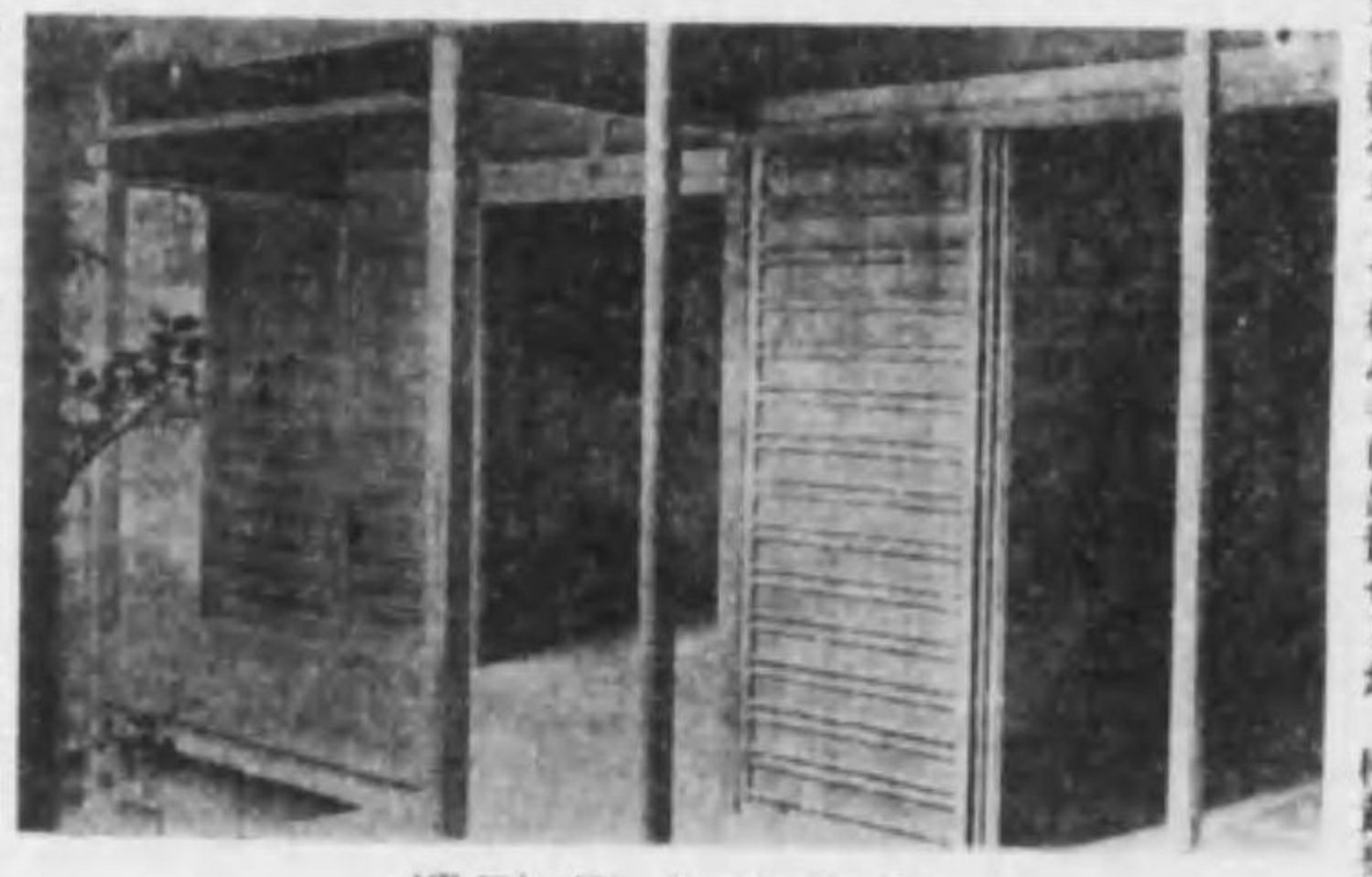
●臨濟忌(一月十日)、開山降誕會(二月七日)、恒例授戒會(四月八日より五日間)、楞嚴會(五月十五日―七月十五日)、山門儀法(六月十八日)、山門施餼鬼會(七月十五日)、邊曆忌(十月五日)、虛堂忌(十月七日)、花園法皇御忌(十一月十一日)、開山正當忌(十二月二十

龍泉庵 京都市右京區花園妙心寺町。

●臨濟宗妙心寺派。●妙心寺塔頭にして、所謂四派本庵の一なり。文明十三年の創立にして、開基は妙心寺六世雪江宗深の法嗣四人の中、景川宗隆なり。嘉永元年堂宇を改築す。●什寶中、胸切痕の名を以て喧傳せらる。紙本着畫猿猴圖一幅(長谷川等伯筆)は國寶に指定せらる。もと一雙の屏風にして前田家の所藏なり。他半壁は今米國ボストン博物館之を所有す。畫風頗る豪放不羈、猿の如きも牧溪に學びて然も必ずしも彼に據らず、縱横の巨筆を揮ふ。以て等伯の代表作とするに足る。

靈雲院 京都市右京區花園妙心寺町。

●臨濟宗妙心寺派。●一に元信寺と稱す。妙心寺塔頭に於て、所謂四派本庵の一なり。同寺庫裡の西にありて、東面す。初め僧大休宗休勤を奉じて妙心寺に出世せしが、僧越樂師寺僧後守室清範尼之に歸依する。こ深く大永六年、財年、財を投じて一院を建立し、大休を請す。即ち當院の蓋廟なり。大休即ち其師特芳を勸請して開山に推し、自ら二世となる。後ち後奈良天皇又深く大休に歸依せられ、天文年間、屢次當院に行幸あり、同十九年、謝得法の寫經を賜ふ。依りて同天皇尊像を正殿に安置す。現存せる書院(御幸の間)は即ち其遺跡なり。當院はもと派内七百五十箇寺の法



(寶圖) (院書紀靈雲)

儀を總轄する派頭なりしが、明治六年御住地となり、現に當派別格寺たり。●境内地千餘坪。堂宇に本堂(西七間)庫裡・書院等を具ふ。書院は一に御幸の間と稱し、桁行三間・梁間四間・單層屋根切妻造・栴檀の建築にして現に國寶建造物たり。大永六年の建立と傳ふるも、妙心寺論に依れば舊方丈天井裏板に天文十二年の銘ありと云へば、當院亦同時の建立ならんか。東側に前を設け縁を以て庫裡及び方丈に覆きて南面し、平面正しく方形を爲さずして前面一部矩形をなせり、軒は大棟樑を分布し、木割、柱、長押等極めて纖麗、勾配緩き輕たなる屋蓋との調和頗る美にして輕快輕雅の氣自ら溢れり。内外仕切には舞貝月障子をたて、前面、西面並に北面一部に兩縁を設く、室内は四室(上段、下段、脇の間二室)に分れ、總て疊敷、上段の間は西北隅にありて玉座に充て横長三帖、天井玄頓、四壁紙張、中央に體欄縁の御座を置く。下段の間は五帖半、西北に袋戸、遠州を設け天井玄頓、脇の間は四帖半、天井平簾なり。其構造様式等悉く書院造の特徴を發揮し、正に其好典型と稱すべし。寺寶中、傳狩野元信筆紙本着畫山水花鳥圖四十九幅、紙本着畫後奈良天皇靈驗勅書(三行七行)一幅は共に現に國寶たり。前者は何れも元信、大休に參禪の際、描きし所の書院禪障子壁張の繪と傳ふるも今割出して掛幅とし、其二幅は東京、十幅は京都、八幅は奈良の三博物館に出陳中なり。畫材は山水人物花鳥等に於て、落款なきも、其畫風より元信の筆なること推知するに難からず。技巧頗る變化に富み、就中草卉の妙云ふべからざるものを存す。尙ほ庭園又名園の間と稱し、風指定庭園たり。●大休忌(九月十日)、特芳忌(十月二十四日)、元信忌(十月)。



法金剛院

京都市右京區花園扇畑町。

●律宗

五位山と號し、律宗別格本山たり。承和年間、清原夏野の開創に係る。もと此地、夏野の山莊にして、林泉優雅を極め、嵯峨、淳和、仁明天皇の臨幸を賜はると云ふ。後ら之を棄て、佛寺となし、淨土寺と號す、天安二年、文德天皇新成殿に別御ありて葛野郡田村山に奉移せしが、當寺山陵に近きを以て勅して沙彌三十口を置き、奉爲に法華三昧を修せしめらる。依りて號を天安寺と改め、定額寺に列す。貞觀元年八月文德天皇の祥忌に當り、聖德皇后慈に僧六十口を請じ、法會を執行せらる。其後久しく荒廢せしが、大治五年、鳥羽天皇の皇太后待賢門院の御願により再興され、法金剛院と改む。



(堂本院期金法)

同年十月、供養會を行ひ曼荼羅供を修す。時に鳥羽上皇並に門院臨御あらせらる。堂宇は攝摩守基隆の遺述に係ると云ふ。保延元年三月、北斗堂供養ありて再度御幸あり。次で周防守憲方更に殿宇を造營す。翌年十月、崇徳天皇並に上皇、門院の臨幸ありて三重塔及び金泥一切經の供養を修せしめ給ふ。同五年三月、法金剛院の東に新堂を供養す。左衛門權佐親隆の遺述なり、康治元年二月、待賢門院本寺に落髮して眞如法と號し茲に住せらる。世に仁和寺の女院と稱す。久安元年、女院之が御室の覺法親王に讓られ、同年八月二十二日、三條高倉第に崩す。即ち本院北の三昧堂に奉し奉る。其後、崇徳天皇の皇后上西門院重仁に御養を營み永祿元年二月十七日出家して眞如法と號し、入住せらる。養和元年四月、回鑪に據りて待賢門院の御所爲有に歸す。弘安二年、南都唐招提寺の僧傳(圓覺)來りて堂宇を中興す、因みに傳(圓覺)は又壬生寺の中興にして、大念佛會を創始すと傳へたり。(壬生寺項參照)戰國時代に入り天正、慶長兩度の天災に遭ひて殿堂退轉す。寛永二年復興せられ、天台、眞言、禪、淨土兼學の道場となり。當寺境内二萬餘坪あり。もと仁和寺の直屬たりしが、明治四年以後天龍寺末となり、更に轉じて律宗に屬す。明治維新までは亭子院等五箇の塔頭支院ありしが、明治六年、地蔵院を除く外悉く本寺に合併せらる。

●堂宇に本堂・東禮・寶藏・山門・鐘樓等を具ふ。本尊丈六の木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶に指定せられ、待賢門院御再興の時の遺立と云ふ。像は通行定印の坐像にして、飛天光を負ひ、定額一流の作たるは明かなり。宇治平等院鳳凰堂の阿彌陀像に比し其威嚴を缺くも、更に一段の優麗を加へ、眉目温雅、衣裝整美、其巨像なるを莊嚴の至れるを藤原末期の代表と評せらる。

地蔵院

京都市右京區花園。

●律宗

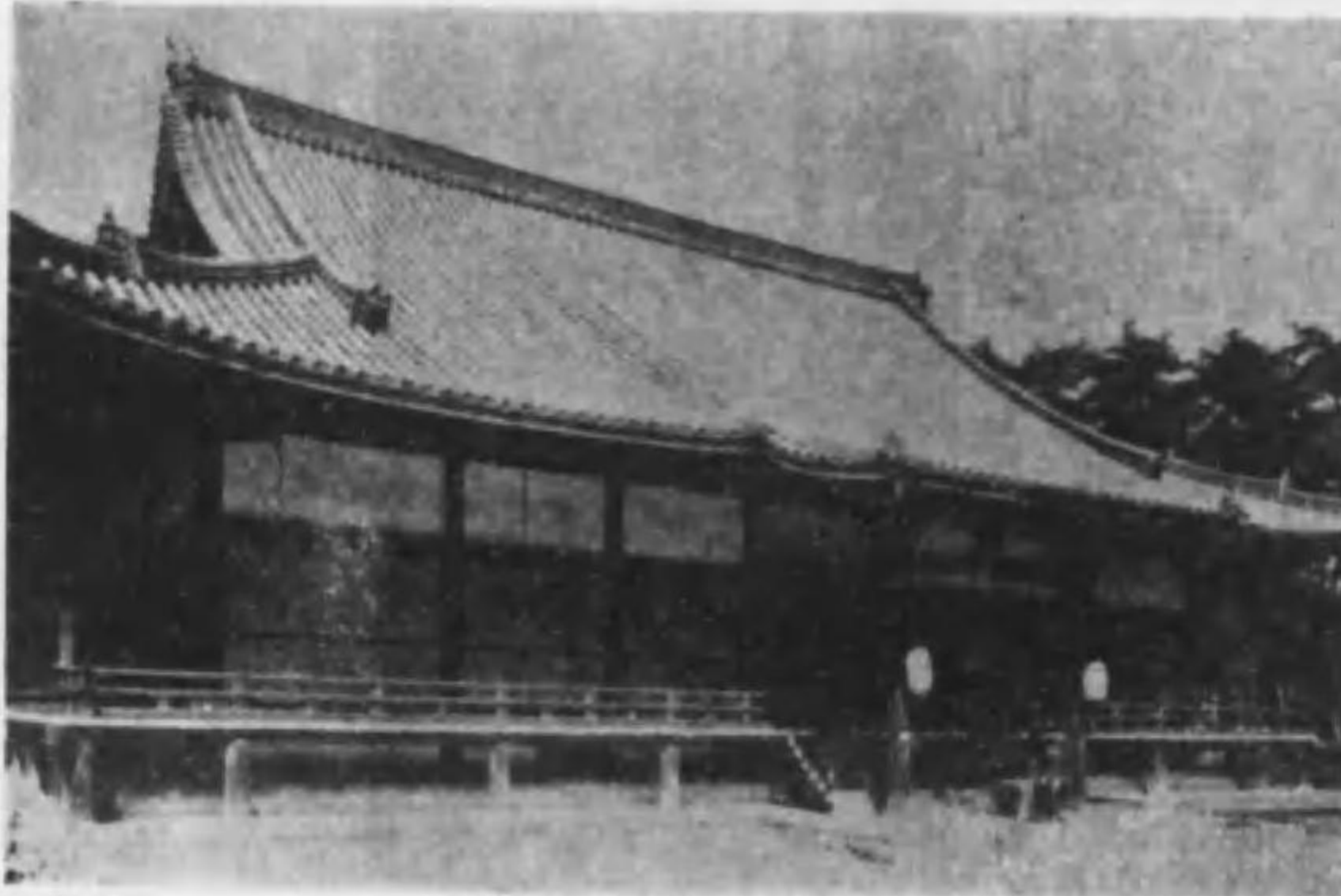
同宗法金剛院の末寺たり。●寺寶中、木造地蔵菩薩坐像一軀は國寶に列せらる藤原末期の作に係る巨像にして、現在腰郭以下大破せ

仁和寺(御室)

京都市右京區御室大内。

●古義眞言宗

●大内山と號す。古く「にわじ」と訓じ、世に仁和寺門跡又は御室御所と稱す。當宗大本山にして、法皇門跡諸寺院中の首位にあり。初め仁和二年八月、光孝天皇實許無窮國師所願の爲め此地小松郡大内山の麓を相し、御室草創の工を起さしめ給ひしが、其工未だ竣らざるに翌年八月、仁壽殿に崩御あり。仍りて宇多天皇、先帝の御遺旨を繼がせられ、同四年八月、遂に堂宇建立の工を竣へ、大内山仁和寺の勅號を賜ふ。時に天台宗慈覺の門徒山崎之が別當たり。昌泰二年十月二十四日、宇多法皇、益信に從ひて當寺に落髮あり法名金剛覺空理と稱す。延喜元年十二月、法皇初めて東寺灌頂院に於て益信に就き兩部具支灌頂を稱傳し、次で同四年三月二十六日、當寺の南に一室及び圓堂を設け之に遷御し法務の御所となし給ふ。世に之を御室と稱し、爾來法親王相承け、御室門跡の名に起る。承平元年七月、法皇當寺に崩せらる。や、寺背宇多野山陵に奉養す。天曆六年三月十四日、朱雀天皇亦御落飾ありて當寺に入御、八月崩御し給ふ。同年九月、寛空を當寺別當に補す。次で寛朝、清信補傳す。寛朝は宇多法皇皇孫と傳ふ。益信に起りて宇多法皇、寛空、寛朝と次第する法流を世に廣澤流と稱し、當寺の本流を特に仁和寺御流と呼ぶ。永祿元年、花山上皇御願により寺内に子院遍照寺並に五層塔を建立す。寛仁二年、三條天皇第四皇子師明親王、清信に就きて灌頂を受け性信と號して入寺あり。即ち當寺二世とし、世に大御室と稱す。茲に於て上下の階依々集まり法勢大いに



(寶蹟)(堂金寺和仁)

善巧房寛助は灌頂を大御室に受け成就院に住す。法威甚だ隆盛にして世に法圓白の稱あり。弟子亦甚だ多く是れより廣澤流六分して仁和寺御流の外西院流、保壽院流、華藏院流、忍辱山流、傳法院流となる。爾來此諸

掲る。永保二年三月、二品に叙せらる。即ち僧家叙位の初例とす。次で覺行(白河天皇皇子)入りて三世を繼ぎ中御室と稱せらる。時に二品に叙せられ、入道親王に對し法親王の稱を用ふ。法親王の稱即ち茲に始まる、

流盛なるに従ひて當寺僧々勢あり。次で覺法(高野御室、白河天皇第四皇子)入寺あり。天治元年多寶塔成る。仁安二年十二月、五世覺性(崇金台寺御室、鳥羽天皇皇子)の時、總法務の職に補せらる。六世覺賢(喜多院御室)、七世道法(後高野御室)とす。此間歷代皆僧家の高位に居り、皇室御修法の大阿闍梨、勸願寺の供養導師、六時寺及び諸院の檢校等に補せられ、一品若しくは二品に列して准三后の封戸を領し、且つ牛車の宣旨を賜はり、勸會四大灌頂を管するを例規とせり。蓋しこれ當寺の極盛期にして、當時寺境二里四方、堂塔坊舍を連れて塔頭寺院六十餘宇に及びしと云ふ。然るに應仁、文明の頃、京師大いに亂れ、當寺亦兵火を蒙りて一山燒燼せしより、寺運退轉、一時廢に寺基を双ヶ岡西麓に移して續に法燈を傳へたり。徳川氏の世となるに及び、當寺二十一世後南御室覺深の時、初めて中興の業を全うす。即ち寛永十一年、徳川家光より寺領二十餘萬兩の寄進を受け、新に地を東福門院の舊址に相して之に移る。偶々同十四年、皇居造營の、とあり、紫雲殿、清涼殿を賜はりて金堂、御影堂を造立し、且つ殿上舍、唐門、四脚門等を下賜せられ、正保三年、遂に三十餘宇の堂塔坊舍並に圓堂、眞光等十餘の塔頭寺院造營の工を竣ふ。時に幕府寺領千五百餘石を寄せ、院家亦漸次復興せらる。二十二世性承能く中興の業を紹述し、以下補傳して三十世純仁(櫻殿定院御室)に至る。文政十年、四國巡遊を懐し、寺背大内山に八十八箇所の佛堂を造る。純仁は伏見宮邦家親王第五皇子にして弘化五年御室を嗣ぎ、文治二年補傳す。慶應三年十二月、勸諭を奉じて復舊あり、征討大將軍として討幕のことに携はり給ふ。即ち小松大將宮彰仁親王是れなり。明治二年、子院菩提院住職を以て寺務總職に任す。同四年寺領を奉還す。同十二年四月



大成會議の後、東寺を總本山とし、當寺は大本山とし、其管下に屬せり。同十六年、仁和會を創立して小松宮を總務に奉ず。翌年七月、別處榮遷、門跡に任ぜられ、後、釋雲照、泉智等之を繼ぐ。尙ほ、維新の際門跡の號を廢せられしが、十八年再び其稱を許さる。同二十年五月十五日、回祿の災に罹りて寢殿、四脚門等二十餘宇の殿宇烏有に歸し、金堂、御影堂、觀音堂等、其災を免る。次で翌年より復舊の工を起し、書院寢殿等漸次成る。同三十三年八月十日、眞言宗各派分離に際し、獨立して同宗御室派を公稱し、大覺寺、金剛峯寺と共に各々古義眞言宗別派の大本山となる。同年更に宗制寺法を定めて一派の基礎を確立す。大正三年初秋、寢殿、觀音堂、勅使門以下諸堂亦遺舊の工を竣ふ。然るに同十四年十二月、御室、高野、大覺寺の三派合して古義眞言宗を公稱し、金剛峯寺を總本山に推して、當寺は大覺寺と共に同宗大本山として其管下となる。現に塔頭蓮華寺、尊壽院の二院を有す。



(寶鏡) (塔重五寺和仁)

境内地約十四萬坪。寺域大内山麓にありて南面し古松鬱蒼たる中に一山の傑閣巨殿雄々として聳ゆ。本堂(金堂)・御影堂・五重塔・觀音堂・大覺堂・不動堂・經坊・鐘樓・寢殿・觀音殿・書院・白書院・庫裡・茶所・仁王門・中門・勅使門・平唐門・台所門・寶寶館・御室會館・飛濤亭・遠勝亭等を其主なるものとす。就中、本堂・御影堂・五重塔・仁王門は現に國寶建造物たり。本堂は境内の正面にありて南面す。慶長十一年、徳川家康内裏修理の際の遺營に係り、後寛永十四年、再び皇居造營の際、徳川家光其舊營寢殿を賜はり之を當寺に移して改築せしものなり。桁行七間、梁間五間、前面一間向拜附、單層、屋根入母屋本瓦葺の大字にして、其移建改築の際、舊態を改めて佛寺式となせるものありと雖も、軒三重、棟、斗拱を存せず

木刻亦精緻、廻縁に施せる高欄に莊重の風なく宮殿式の輕快雅麗の性質を帯び、殊に正面各間悉く上げ部戸左右兩側に板唐戸を建てしこと等尙ほよく桃山時代宮室建築の風を存し、其様式手法裝飾等悉く桃山期の特徴を示す。内部後壇上中央に阿彌陀三尊を安置し、左壇光孝天皇御像、右壇に藥師像並に家光の像を置く。蓋し本堂は南禪寺方丈(舊清涼殿)と共に當代宮室建築の様式を窺ひ得る貴重なる遺構なり。御影堂は一に祖師堂とも稱し、本堂の西にありて同じく南面し、四圍土壁を繞らす。同じく慶長年間遺營に係り、寛永十一年、後水尾天皇の舊清涼殿を賜ひて移建改築せられたるものにして、桁行五間、梁間五間、單層、屋根葺形造檜皮葺、前面一間向拜附、四方高欄廻縁を繞らし、頗る輕快雅麗の均衡を保てり。内部後壇中央に空海像、脇壇に宇多天皇御影、性信法親王御影を安す。全體の構造様式頗る簡素にして通行佛堂建築に倣はず、寢殿造の遺風を傳へて輕快清麗、よく桃山期住宅建築の特徴を示す。前述本堂と共に當代遺構の貴重なる一例となすべし。五重塔は本堂の東南、寺境の東邊松林中に聳立す。寛永十四年の建立に係り、各層

文一通、紙本墨書、心方卷第一、第五、第七、第九、第十各殘卷(昭和七年十二月指定)は悉く國寶に指定せらる。其中、孔雀明王畫像は現に京都博物館陳列中にして、其描線優美、墨線に滑りて金、胡粉の勾繪を用ひ、極細部に至る迄淡い筆勢を施して色階を染め以て立體感を強調する等處で南宋佛畫に通有なる畫法にして本圖は特に其精緻を誇り、孔雀の寫實的描法亦頗る美麗なり。聖德太子畫像は、鎌倉末期上宮法王崇禋の思漸隆盛なるに應じて成れるものにして當代形體畫中の典型的作品とす。描線は之を宋畫に倣ひ彩色に胡粉、金泥の盛上を多く用ひて鮮麗なる効果を期し、畫觀亦よく聰明眞情の感を受ふ。同木造坐像は玉眼入、肉身金泥、麗衣極彩色、右手を上げ左手を膝上に横へたる太子像中の異類にして鎌倉末の寫實的作風なり。彌陀三尊像は當寺創建當時の本尊なりしを、本堂改築の際、脇壇に移すと云ふ。三幅共後箔、彌陀は定印、其九重古座は一部のみ原形を存す。兩脇侍は蓮肉共に一木彫、丈割合に短く肉豐かに、衣紋は一種の節奏をなし、天平木像の遺風を留む。三十帖菓子、空海及び橘逸勢等外數氏の書寫に依り、其内三十帖菓子目録及び第二十七帖は空海の書として疑ふべからざるもの眞に天下の絶品と云ふべし。もと之れ東寺に藏せしが眞然高野に入ると共に同山に納まる。後東寺の觀賢之を再び取返し、爾來東寺經藏に安置せられしが、文治二年十月、仁和寺守覺親王之を借出し給ひてより、本寺に傳へらるゝに至れり。別尊雜記は一に聖尊雜記又は五十卷抄と云ふ。高野宮喜院心覺の撰述に係り、聖教に關する行法圖像等を結集せるものにして著者の原鈔本たり。第三卷第六卷晴雨經法の裏書に承安二年六月十八日心覺記とあり。裏書及び本文朱書は心覺自筆となすべく、圖像の描寫自由暢達を極む。寫心方

は、全三十卷、丹波康賴、永觀二年に撰述する所、本書は其貴重なる古寫本なり。其他經論、樂筆、書畫、工藝品數百點を藏せり。尙ほ境内中門を入る所、觀音堂の前面に櫻樹の老幹一面に蟠居するあり、世に御室櫻と稱して古來風山櫻と併稱し、恒春遊覽を兼ねし賽客隨を絶たず。寺後大内山麓頂東邊に宇多天皇大内山御陵あり、西方に光孝天皇後田邑陵存す。蓋し大内山の稱は往時宇多天皇皇宮を此地に營み給ひしに因めり。又成就山に八十八所靈場を設く。附近に南院址、北院址あり。南院址は當寺の南双ヶ岡西麓にありて一に古御所と云ふ。北院は當寺の西御影堂に接す、一に喜多院と云ふ。

方三間、五層塔婆、屋根本瓦葺、屋根相輪を冠し全高約百八尺の大塔にして、よく徳川初期の特徴を存す。外部總丹塗、木端に繪あり、木割斗拱檜々莊重なりと雖も、各層屋根の比例相輪の規模等均衡を失し、一律にして變化に乏しき處あり。仁王門は一に南大門と稱し、五間三戸樓門、屋根入母屋造、本瓦葺にして、寛永十四年建立と云ふ。寺寶中、絹本着色傳張思慈筆孔雀明王像一幅・同聖德太子立像一幅・木造文殊菩薩坐像一幅(舊眞乘院本尊、維新の際金堂に移入、鎌倉末期高野風の作)・同阿彌陀如來及び兩脇侍像三幅・同増長天多聞天立像二幅(藤原朝彩色像)・同吉祥天立像一幅(藤原朝彩色像)・同聖德太子坐像一幅・同厨子入愛染明王坐像一幅(藤原朝彩色像)・影法精美にして附屬八角形厨子亦佳作なり。唐草蔕繪寶珠一箇・銅製佛具(舍利塔一、五結鈴一、三結鈴一、九頭龍鈴一、五結鈴一)五箇・絹本着色傳不空三藏筆尊勝陀羅尼梵字經一帖・漢紙金泥櫻町天皇御筆般若心經一紙・紺紙金泥光格天皇御筆濟仁親王御書繼業師經一卷・紺紙書御室相承記六卷・同傳箱入弘法大師筆外筆聖教三十帖菓子・同後宇多天皇御書御消息(德治二年九月二十日)一卷・同後醍醐天皇御書(四月十五日)一卷・同消息(高野御室消息一通、華藏院宮法印消息一通、返事案二通)二卷・同般若經理通品一卷(興善建仁二年正月十六日藤原眞經書寫)・同承久三年四月日記一帖(殘題)・同黃帝內經(卷之二十四)二十六卷・同後鳥羽天皇御作無常講式一卷(興善建仁元年七月十三日書寫)・同別尊雜記(圖像入、心覺鈔本五十七卷(内十一卷後補)・同孔雀明王同經塚具等相承記讀文一卷(仁平三年八月十九日覺法信法手印起讀文一通、建仁二年八月一日道法起讀文一通、貞應元年一月十八日道讀手印起讀文一通、寛元四年三月二十一日道深手印起讀

了。德(寺) (大根契寺) 京都市右京區鳴鶴宇多野谷。眞宗大谷派。開創年代詳ならず。一に大根契寺と云ふ。寺傳に依れば、曾て觀音當地に留錫、慶應法橋の請に依りて自像を刻し、又其師法然の遺跡を曉曉月輪寺に訪ひ建長四年、本寺に止留す。時に信者等大根を煮て賢應せしに觀賢大いに喜び庭前の薄の礎にて十字の名號を書して報ゆ。明應三年、遂如其古蹟を慕ひて來錫し、更に六字名號を書して留むと云ふ。寺寶に前述の名號等を藏す。尙ほ本寺の附近にその緣起に由來せる薄原、大根畑と稱する地名あり。西(寺) (淨土宗) 京都市右京區宇多野。



庫裡・支那・書院・唐門・中門・辨天堂・知足軒・渡... 聖徳太子御願七箇寺の一にして、山城第一の古刹なり。

源光庵

源光庵(常盤谷) 京都市右京區大森馬塚町。臨濟宗天龍寺派。

正面兩端間に火燈籠を施せる等町時代建築の特徴の存するは水鏡修補の影響なりとす。然も尙ほ其平面形...

り。も。常盤院と稱し淨土宗に屬せしも、後ら現宗に轉す。現に保元二年七月、洛南木輪の地より移安せしと...

廣隆寺

廣隆寺 京都市右京區大森蜂岡町。古義眞言宗。

蜂岡山と號し、聖徳太子御願七箇寺の一にして、山城第一の古刹なり。仁和寺に屬せる別格本山にして...



(實圖) (聖 講 寺 隆 廣)

大正十二年聖徳太子一千三百年遠忌記念に建てられた... 一、同阿彌陀如來坐像一軀、同不空罽索觀音立像一軀...

落慶供養會を修す。次で承安二年、寺内塔供養會を行ふ。正應年間、澄觀(中觀)本寺桂宮院に住し、大いに...

輪觀音中御像一軀、同佛聖徳太子作如意輪觀音半像一軀、同十二神將立像十二軀、同樂師如來立像一軀...



一部に當初の作を傳ふ。桂宮院安置の聖德太子坐像は牡丹透彫の禪宗風格に凭れる所謂太子十六歳の像にして、鎌倉末期の作なり。同じく阿彌陀如来立像は藤原末期の作にして形態に慶派の手法を傳ふ。來由記に隋煬帝進獻せり。寶篋殿所在の如意輪觀音半跏像二軀は本寺所藏佛像中最も著れ、其形相略々同様にして一は聖德太子作、一は百濟國貢獻と傳ふ。寶財帳に居高二尺八寸金色彌勒菩薩像二軀と録し、供養願文に金色彌勒並に金剛如意輪とし、又由來記に金剛彌勒菩薩(推古天皇十一年百濟貢獻)並に金剛救世觀音(推古天皇二十四年新羅國貢獻)とあるは、蓋し共に現在の此像を指すものにして、當寺創建を距ること遠からざる作なり。前者は山形寶冠を附し、其形式表現に於て朝鮮式佛像の特徴を示し、殊に現に李王家博物館所藏金銅像中の一體に酷似す。其面相、肢體、衣褶等の彫法に飛鳥古調を示し、更に柔和美麗の風姿を加ふ。後者は其様式手法上階々降りて飛鳥期より天平への過渡期作品の特徴を示す。大體の形相尚ほ朝鮮式生硬を有するも、漸く唐式佛像の優麗を加へ、均衡優美輕快の感を深む。兩像共台座は近年の補作なり。十二神將立像は何れも丈高四尺以内、來由記康永七年長成或は長勢作とあれど、當像は鎌倉期直前未だ多分の古致を存せる藤原末期の優品たり。藥師如来立像は道昌中興の際、當寺に移すと傳へ、清和天皇御不豫の節、其靈驗ありしより以來、勅封秘佛として當寺最高の尊佛とす形相通りの藥師像と異り、服裝亦吉祥天に酷似す。是れ當像を醫士善進善名吉祥王如来と稱するに依る。蓋し道昌中興時の作なるべし。地藏菩薩立像はもと塔頭十輪院にあり、俗に埋木地藏と稱す。寛喜二年埋木地藏菩薩記に、治承三年佛師院尙修理と見ゆ。弘仁より藤原への過渡期作品にして、毘沙門天立像亦同傾向

の優品たり。持國天廣目天增長天立像は寺傳定朝弟子長勢の作とあり、略々背すべく、極彩色、瞳子に黒燐石を嵌入す。吉祥天立像一軀は藤原末期の特徴を示し他の三軀は弘仁期の作なり。聖觀音立像は刀法整麗、豐麗端嚴の肉體と麗衣の寫實的技巧正に道昌中興期の遺作と見る。男女神坐像は共に藤原前期神像彫刻の一例たり。大日如来坐像(胎藏界)一軀、日光菩薩立像二軀共に藤原末期の作なり。不動明王像は弘仁期の家傳なる作にして永萬願文に見ゆる等身不動明王是れに當るが如し。菩薩立像は共木彫出の寶冠を戴き左手寶珠を執りて舟形の光背を負ふ。衣袂の刀法銳敏にして弘仁藤原過渡期の作とす。佛頭は高さ三尺二寸、藤原時代巨像の頭部たり。彌勒菩薩坐像は天平期聖像最盛期の技法を示す一例にして、中古修補の痕著しきものあるも、其眞に堂々たる肢體、奔放なる衣褶のうねり自由にして然も端嚴を極めたる相觀は一種の鋭さを含みて尙ほ獨特の美を保つ。蓋し天平末期の作とす。能惠法師繪詞は東大寺僧能惠地獄に赴き關覽王に般若經を授くとの傳説を描きしものにして、又好みて冥界を語る時人の心境を示す一例なり。物語の筋を運ぶこと頗る急にして、畫中人物の發語を其人物近く書き、爲めに畫趣を損するを顧みず、以て繪巻物近き二轉化なり。其大和繪流の筆法頗る優麗にして輕淡なる彩色と相俟ち又優作たるを失はず。尙ほ當寺に存する梵鐘は高一尺二寸、(奉施人藥師佛、建保五年七月日樂志時)の銘あり。鐵製たるは珍とすべし。他に藤原運靈入道信西の銘を有する名鐘ありしが、元和の頃、故ありて眞宗本派本願寺の有に歸せり。

●眞宗本願寺派。●本派京都四箇別院の隨一なり。觀覺示寂の遺跡と稱し、御影鈔卷下に長安馮翊の邊、押小路の南、萬里小路の東とあるもの即ち是れなりと云ふ。觀覺の弟尋有の禪房たり善法院亦此處に在りしとす。山城名勝誌卷七に拾芥鈔を引きて、山ノ小路は萬里小路に當り今之西院村の西北、山ノ内村は其眞座主以來山門の領地に當れりと云ひ、又山ノ内村は眞座主以來山門の領地に當り、中古草堂あり、普賢寺と號し、最嚴の畫像を安置したりと稱す。爾來醫星窟、是等の名蹟久しく湮滅に歸せしが、安政四年、本願寺二十世尙如舊地を調査せしめ、遂に當地に堂宇を建立す。蓋し該地は近古農田たりしと雖も、小字を御堂田と稱すと、且つ確實なる資料ありしに依り、鑑證と定めたるなり。(觀覺往生地に就きては上京區法泉寺項參照)

●境内五百五十坪。本堂・香積・書院・表門等の堂宇あり。本堂安置の宗祖像は安靜御影の復寫にして、扁額遺淨殿は廣如の筆と云ふ。●廣如忌六月一日、二日、報恩講(十月七日、八日)。



(景全院別坊角)

西明寺 京都市右京區梅ヶ畑權尾町。古義眞言宗。

●權尾山と號し、現に大覺寺末にして、當宗準別格本山なり。空海の草創と傳へ、其高足智賢の住地たり、正應三年、後宇多上皇の勅願に依り自證堂宇を中興し愛染明王を安置して平等心院と稱す。爾後再び荒廢して高尾神護寺に合併せしが、慶長七年に至り、明忍俊正來りて之を復興し、釋迦像を安じて以て天下三僧坊の一とす。元祿十二年、徳川綱吉の母桂昌院堂宇を造進し、爾來法威頓に揚りて、近世三尾中第一の伽藍と稱せられたり。●寺境幽邃にして清澗川の清流に臨み、本堂・文殊堂・庫裡・客殿・鐘樓・經藏・山門・鎮守堂等の堂宇を具ふ。本尊釋迦如来立像は明惠の作と傳へ、他に傳聖德太子作千手觀音像を安す。境域楓樹に富み、高尾、權尾と共に風に三尾の名あり。

高山寺 京都市右京區梅ヶ畑權尾町。古義眞言宗。

●權尾山と號す。御室末にして、當宗準別格本山なり。もと天台宗にして、僧尊意の開基に係りしが、後ち大破せしを、建永元年十一月、高辨明惠、後鳥羽上皇の院宣を奉じて之を再興し、高山寺と號して華嚴の道場となすと云ふ。貞應三年、上皇加茂の別宮石水院を此地に移して春日、住吉の神殿となし給ひしが、次で伽藍塔堂次第に成る。承久の亂、官軍多く當山中に遁る、や、北條氏兵を遣して、明惠を虜ふ。明惠即ち奉時を説服して兵士の亂入を禁ぜし事、著名なる話柄なり。寛喜二年正月、官符を下して四至境界の標示を定められ、次で關白兼平、家基等數箇所の莊園を寄進す。曆應二年十月、光明院の臨幸あり。應仁亂後、堂宇莊園共に荒廢せしが、織田、豐臣、徳川の諸氏各々

●境内九百五十坪、清澗の清流に沿ひ、所謂三尾中の最北にあり。境域頗る巨幅に富み、老幹古枝交錯して錦雲萬丈の絶景を織る。堂宇に本堂・五所堂・(石水院)・經藏・阿彌陀院・羅漢堂・三重塔・東經藏・西經藏・鎮守四所明神社等あり。就中、五所堂は國寶建造物に列せらる。堂は桁行三十尺、椽間三十八尺五寸、軒高十尺五寸、檼高二尺三寸、單層、屋根入母屋造、妻入向拜附、柿葺、總角柱、四方菓子縁附にして、本堂の東南屋上にあり。貞應三年、後鳥羽上皇の別宮加茂石水院を時りて此地に移建せしものにして、永享十一年、永正十六年、寛永十四年、嘉永二年の數度に可引修理を加ふと云ふ。今、高山寺及び「日出光照高山寺」の扁額二面を掲ぐ。本堂は一山中の中間にあり、善仁和寺の金堂を移せしものにして本尊釋迦如来を安す。經藏院は明惠廟所にして其像を安置す。此處にも三間の客殿ありて塔坊或は法鼓臺と稱せり。承久亂時、加茂能久明惠の爲め加茂の地に建立せしを、靜謐の後ら此地に移せしものと傳ふ。阿彌陀院は一間四面にして平教護の東山別業より移すと云ふ。羅漢堂は明惠の禪室、三重塔は寛喜元年建立に係る。當寺は明治維新に際し、寶篋多く四散の厄に遭ひしも、尙ほ優秀なる寶物數多く殘存す。就中、紙本墨畫(傳鳥羽僧正筆)四卷・同將軍塚繪卷(傳鳥羽僧正筆)一卷・絹本着色不空三藏像一幅・同佛眼佛母像(明惠上人贊)一幅・同善像佛傳佛物善像像一幅。



同文殊菩薩像一幅・紙本着色華嚴經起六卷・乾漆樂師如來坐像一幅・木造泊犬一對・紙本着書冥報記(唐の唐臨撰)三卷・同玉篇一卷(紙本着明上人の書寫あり)・同篆隸萬象名義六册・同御勅上生經(石川年足筆)一卷・同史記(卷第三、第四)二卷(卷第三奥書建曆元年七月十五日・同論語(卷第四、第八)二卷・卷第四奥書嘉元元年九月二十五日書寫)・同物語(卷第七、第八)二卷(紙本着目に清原真人康祐とあり)・同莊子七卷は總て國寶に列せられ、總て東京帝室並に恩賜京都兩博物館出陳中なり。東京博物館出陳中のもの中、

像中の佳作なり。華嚴經起六卷は、新羅の義湘、元曉二僧の入唐より義湘の華嚴宗將來の目的を達する事實を描けるもの、第四卷裏貼(元龜元年)に義湘の繪四卷元曉の繪二卷とあるも、現存のものは、一度散佚後補綴拾集せしものにして前後錯雜、中間脱落せり。然も其畫法巧緻を極め、唐土の人物家屋等の描寫亦縱橫自在、特に活動的趣致に富む。法助親王、明惠、道家、兼經等の筆と傳ふる寄合書の調書以外に畫中簡單なる説明を挿入す。蓋し之れ鎌倉初期華嚴宗復興の氣運に乗じて成れるものなるべし。樂師如來坐像は其銳利なる眼光、豐麗の肉體、流暢なる衣裳の刀法等何れも乾漆佛像の技巧其極に達せる感あり、天平末期爛漫時代の藝術を示すものとす。寺内に明惠七所の遺跡と稱するあり、練若臺、五所堂(前述)、楞伽山、定心石、窟、三加禪、禪河院是れなり。又明惠廟墓、佛足石等あり又蓮華谷の地には藤原信實、宅磨法眼師賢等の古墳多し。尙ほ此地古來茶園を以て開闢。建仁の頃、榮西の支那より傳ふる種子を明惠に贈り、之を栽えしに始まり、蓋し本邦茶園の濫觴とす。今に深淵、三本木等の園名を存す。

號あり、延暦十二年清慶の奏請により能登國聖田五十八町を施入すとあり、和氣氏系圖にも當寺も清慶字佐八轉の號告を蒙りて建立すと云ふ。要之、當寺は清慶の本願によりて成り、和氣氏の氏寺たりしこと明なり。初め高雄山寺と稱す。延暦二十一年、和氣廣世、眞綱本寺に南都の僧善議、勸進等を屬請して法華會を開く。最澄延暦寺より入りて其證義者たり。是れ高雄法華會の始にして、後世水、恒例たり。同二十四年、最澄唐より歸朝するや、本寺に三摩耶灌頂の壇を建てて其式を行ふ。蓋し本朝灌頂の始なりと云ふ。大同四年空海唐より還るや、聖弘仁元年十月二十七日、其將來せし所に據り本寺に仁王經密法を修し、次で同三年十一月十五日、蓋に灌頂の壇を開きて最澄以下百九十餘人に金剛界灌頂を授け、十二月十四日、更に胎藏界の灌頂を行ふ。即ち空海授戒の始なりとす。又其弟子果隣、實景を以て本寺の三綱とす。古來眞言の道場たり。天長元年、眞綱、仲世の奏請に依り、神護國祚眞言寺と改號し、勅願に預る。後ら、之を略して神護寺と呼ぶに至れり。因みに當寺八幡神に關係を有するは疑ひなきもの、如く、猶又神護の寺號は本邦神明佛法護護の思想に根柢を有し、且つ本地垂迹説發展上看過すべからざるものなりとす。既に空海高野山に入るに及び、本寺を弟子眞濟に附す。貞觀三年、眞濟境内に五重塔(一説多寶塔)を建て、五大虚空藏菩薩を奉安して春秋二季に大法會を修す。又忠延、眞體、眞訓、圓明等皆當寺に住す。共に空海の弟子たり。同十七年八月、和氣禪範、禪林寺眞願の遺志を繼ぎて梵鐘一口を鑄造す。橋原相文を撰し、菅原是善銘を勸し藤原敏行之を書す。世に三鐘の鐘と稱するもの是れなり。創建以來、堂舍僧房壯大なりしが、後ら次第に頽廢す。仁安元年、僧文覺登山して本寺の廢壞を慨歎し

即ち後白河法皇に懇請して御手印を得、以て四方に勸募す。即ち法皇莊園を賜はり、源賴朝等亦寺領を寄せ壽永元年遂に堂宇再建の工を竣ふ。時に子院塔頭二十五坊に及びり。建久十年三月、文覺不軌を謀るによりて佐渡國に流され、寺及び寺領は東寺長善延景に附せらる。之より東寺の所管に歸す。其後寛喜年間、修理を加ふ。永仁五年、御室性仁法親王當寺玩玉院に修り給ひ、高麗御室と奉稱す。應仁亂後、當寺莊園等武家の押領する所となり、爲めに寺產を失ひ、堂宇亦廢頽せしが、大永年間、僧慶圓對して修理遂行す。次で豐臣氏寺領若干を寄す。徳川時代に至り、寺領三百五十餘石を附せられ、元和年間、讃岐國屋島寺の龍巖壽命を受けて當寺に入り、金堂、講堂、仁王門以下諸堂を再建し、更に板倉御重鐘樓を建つ。明治維新の際、寺領上地となり、塔頭七院亦悉く廢絶して一山邊かに衰頽す。同七年、寺内の護法善神社を別格官幣社に列せられ、同十九年十一月三日、當市上京區島丸通下立賣上ルの地に遷座す。今の護王神社是れなり。其後讚岐八栗寺龍輪、大阪大藏寺寂照相續ぐに及び、専ら一山の興隆に努めて大いに堂宇を改修す。同三十三年、地藏院を再興し、翌年上地林の遷附あり、次で又講堂以下の大改修を遂げたり。當寺古來我國密乘根本の道場にして、其靈異世に聞え、今尙に上下の尊崇を蒙む。

此地弘法大師住居の跡なりと云ふ。屋基の勾配著しく軒端可成りの反轉あり、前面にのみ縁を設け階段を置く。雄麗の均衡頗る輕妙にして、恰も夏殿風の趣あり樓式手法全く桃山期の特徴を示せり内部中央に板彫空海像を安す。本堂は又金堂といひ、七間四面にして南向し、元和九年、再建の再建に係り中央に樂師如來を安す。講堂は其北に在りて南向し元和九年の再建にして、五大尊を安置せりより一に五



(寶圖) (堂 師 大 寺 護 神)

治七年當寺へ合併の際、當寺に移せし所なり。鐘樓は講堂の北にあり、板倉御重再建に係り、銅鐘一口を懸く。寺寶頗る多く、就中、絹本着色十二天像十二幅、同山水圖六曲屏風一雙・同源賴朝外三人背像四幅・傳藤原隆信筆・紫綾金銀泥繪兩界曼荼羅圖二幅(傳弘法大師筆)・絹本着色釋迦如來像一幅・同足利義持像一幅(應永二十一年怡雲和尚書)・紙本着書神護寺繪圖一(寛喜二年)・同高山寺繪圖一(寛喜二年)・同寺領繪圖四幅(主殿寮御領小野山與神護寺埴相論指圖一、紀伊國持田庄圖一、紀伊國神野眞國庄圖一、足守庄圖一)・木造樂師如來兩脇士立像三幅(傳中尊弘法大師、脇士院向作)・同五大虚空藏菩薩像五幅(傳弘法大師作、講堂安置)・乾漆樂師如來坐像一幅(講堂安置)・板彫弘法大師像一面(大師堂安置)・木造風沙門天立像一幅(方丈安置)・銅鐘(銘文藤原行華)一口・紙本着書二荒山碑文一卷(傳弘法大師筆)・同文覺四十五箇條起請文一卷(中山忠親筆、後白河天皇寫筆御啟)・同文覺上人書狀案一卷(六月十一日)・同神護寺略記一卷・同弘法大師筆灌頂歷名一卷(附紙本着書後宇多天皇寫筆御施入狀一卷)は總て國寶に列せらる。其中、十二天像は勝賢作と傳へ、全部同一者の作なるは疑問なるも、宅磨派の繪なるは論を俟たず。肉體に強き胡粉の反筆を施し、或は特に頼に朱筆を施す等極めて寫實的な手法に據れり。衣紋亦頗る巧細、從來の作に見ざる華文等を表す。蓋し此作鎌倉中期を降らざるべし山水圖六曲屏風は鎌倉初期の作にして、密教灌頂の際に用ふる山水屏風なり。京都東寺のものが支那風なるに對し本圖は純然たる和風にして、藤原時代貴族の家居、狩獵等を寫す。極細線を用ひて彩色重厚、畫法亦前代を承けて扇面古寫經等に見る古様に據る。但し全體の趣致特に樹木の筆法には看過し得ざる時代の特質



を示せり。源頼朝外三人(平重盛、藤原光能、文覺上人)官像に神護寺略記具注野に依れば、他に後白河法皇、業房の官像ありて共に藤原右京大夫隆信筆と云ふ。頼朝、重盛の二幅最も傑出し、畫法卓越、以て本邦官畫中の巨擘とすべし。特に頼朝の像を以て描かれたる相親は突々たる生彩に瀰り、武人の面目瞭然たるものあり、墨を以て袍を塗り、墨の具を以て衣履及び織紋を描き、太刀、平緒に金、朱青を點する等簡素なる手法の中に眞に高雅なる氣品を保つ。此二幅以て隆信筆を信すべきも、他二幅は其畫法時代等より見て別者の作なるが如し。兩界受茶羅圖に就きては古來數説あり空海將來日録中、唐李眞等の筆に係るもの即ち是れなりと云ひ、又神護寺略記に引ける承平實錄帳に、淳和天皇御願に成れるものにして、空海將來圖本に據り本邦に於て描かしめしものならんとす。要之、本圖は其技巧傑出して自由の氣瀰り且つ雄大なる趣致の存する所、唐佛畫の特色を物語るものにして、後世に於ける新圖に見る精緻なしと雖も、筆致雄健、其自由なる寫形の中に尙且つ高古の氣品を盛りて餘りあり。蓋し本邦最古最秀の兩界受茶羅として大和子島寺本と併稱せらるる所以とす。足利義持像は上に應永二十一年怡雲贊あり、中に「征夷大將軍從一位行内大臣壽像」とす。土佐行秀作と傳へ、室町初世實錄の一例とす。瀧頂像名は弘仁三年四月授瀧頂の歴名にして、空海書法の妙見るべし。以上は現に二見山碑文其他古文書、繪圖等と共に恩賜京都博物館出陳中なり。釋迦如來像は目下東京帝國博物館出陳中にして、純然たる藤原式佛畫の好例とす。木造樂師如來立像は丈高五尺六寸三分體軀四肢極めて肥大、螺髮部亦大にして眉宇によく後遇の相を現じ、衣履の刀法深銳、天衣波紋を描きつつ垂下す。即ち平安初期佛畫の通例とすべきも、本像

の如きは又其典型の傑作に屬す。弘仁年間實錄帳に檀像樂師如來立像と見ゆるものはこれにして、寺傳延暦創建當時の作とす。蓋し認め得べく、蓋し初期密教精神の體現なりとす。兩脇土日光月光兩菩薩立像は本尊厨子外にあり、藤原中期佛畫の特徴を示す。寺傳院向作とせるは院尙の誤傳にして模古の作とも推知し得べし。五大虚空藏菩薩像は高さ各約三尺、五方に配して五色を以て塗る。貞觀三年、眞濟五重塔を建立して五大虚空藏を安置すと云ふは即ち是れなり。各像印を結びて坐し、刀法剛健なる弘仁彫刻の中に一味の優麗を存し、河内觀心寺如意輪觀音像と共に既に藤原期勃興の氣運を孕めり。作の優なるは、年代の的確なる、以て美術史上貴重なる遺物たり。乾漆樂師如來坐像は高さ二尺二寸六分、脱活乾漆法の最も進歩せる技法を示し、肢體、衣帶飄洒の手法共に自在を極めて風手麗如、天平末期の作たるは明にして、其寫實派の代表的遺品とす。本像古來樂師傳ふるも釋迦とすべし。板彫弘法大師像は高さ三尺二寸四分、右に五結、左に珠數を執り禮盤上に坐す。其板面に牛肉彫りし彩色を施せるは蓋し珍奇の遺品なり。玩玉院の文書に依れば正安四年佛師法眼定喜、土佐金剛寺のものを作し、法眼圓顯之に彩色を加ふと云ふ。附屬馬廐厨子亦當初の作を傳へたり。思沙門天立像は藤原末期の精巧なる作品にして、極彩色、甲冑を著け袴を懸下に束り、冠々首を傾けて夜叉を踏む。其形相若く武人の風あり、源平の頃の作とも推知せらる。銅鑿は貞觀十七年八月二十三日治工志我部海繼の鑄造に成りし所謂三絶の鐘なり尙は當寺鐘樓の側に護法善神社並に清慶墓を存し、又寺内南方に猿屋(岩屋)と稱するあり、最澄修法の遺跡なりと云ふ。此地風に紅葉の名所として所謂三尾中の一と稱せられ、殊に塔頭地蔵院よりの眺望を以て

通照寺

京都府右京區嵯峨野町。

古義眞言宗。仁和寺末にして、當宗準別格寺なり。初め藤原池の西北にあり、天曆年間、宇多法皇の皇孫、寛朝、寛空に就きて眞言秘密教を受けしが、後寺村す。冷泉・圓融三天皇の勅願に依り、貞元二年、本寺を創す。後、暫く益信、宇多法皇、寛朝、寛朝と次する當宗廣澤流の中心寺となれり。蓋し廣澤の流名は本寺所在地に基因する所なりとす。寛朝の後法弟權少僧都清淨法燈を繼承し、次第して東寺長者法印範範に至る。爾後漸く衰微して寺宇亦頗廢甚しかりしが、元亨元年、後宇多法皇當寺に臨幸あり、御願に依り堂舎を再興して茲に住御せられ、禪助に就きて受法し給ふ。法皇の後

前記、定住法親王と稱す。應仁、享祿の兩度、兵變に罹りて堂塔什寶の大半焼燬し、觀音堂のみ殘存して續に法燈を傳へしが、寛永十年、仁和寺宮廟にて今の地に移し給ひ、文政十三年に至り、信徒有志により堂宇再建の工を發ふ。現在のもの即ち是れなり。寺寶中、木造十一面觀音立像一軀、同不動明王坐像一軀は國寶に列せらる。共に當寺草創當時の作にして又よく藤原時代佛畫の特徴を示す。殊に前者は檜材一木彫成、刀法温健なる佳品とす。寺城南方に廣澤池あり、方四町餘、寛朝の開闢する所と傳へ、古來觀月の跡地として聞えたり。又寺山半腹に寛朝遺跡と稱する座禪石あり。開山忌(六月十二日)。

二尊院

京都市右京區嵯峨二尊院門前長神町。

天台宗。小倉山阿耨菩提寺と號す。圓光大師二十五靈場第十七番なり。初め承和年間、嵯峨上皇嵯峨院御幸の御此地に一寺を建立して華嚴寺二尊院と號せしめ給ふ。其後久しく退轉せしが、法然淨土宗を闡くに及び、又當寺を再興して以て弘法の道場とし、高足信空に之を授く。爾來年を追ひて興隆に赴けり。足利尊氏天龍寺建立に際し、其地にありし淨金剛院並に龜山天皇の塔を當寺に移す。次で義教亦堂宇を重修す。然るに應仁の亂に方り、當寺亦兵燹に罹りて一山燒亡す。永正、大水の頃、長門國阿彌陀寺の廣明來りて當寺十六世を嗣ぐや、後奈良天皇の御歸依後からず、又三條西實隆父子の外護に依りて遂に堂宇を再興す。即ち現在の堂宇とす。舊寺額百二十石あり。因みに本寺古來天台、眞言、律、淨土四宗兼學の道場にして、四箇院の一た

りしが、中興後専ら淨土宗を奉じ、維新後更に現宗に契め、現に延暦寺末たり。寺境小倉山麓に位置す。本堂・足曳堂・法然廟所等の堂宇を具ふ。本堂は永正十八年の遺營に係り、快慶作と稱する釋迦、彌陀二像を安す。即ち寺名の起れる緣由なりとす。又後柏原、後奈良兩帝宸筆小倉山の「二尊院」の扁額あり。足曳堂には宅間得實筆と傳ふる法然影象を安置す。世に足曳影像と稱するものは是れなり。堂の西北には嵯峨土御門、後醍醐諸天皇の御塔を存す。又山上に法然行業碑あり。延暦二年、支部より將來せしものと云ひ、其文は宋景濂作と傳ふるも、今磨滅して明ならず。尙は本尊木造釋迦如來立像、阿彌陀如來立像二軀並に寺寶中、絹本着色淨土五祖像一軀・同釋迦三尊像(蓮土王跨云々)三幅・同三條西實隆像(贊)一幅・同三條西公修像(贊)一幅・同十五王像十幅は總て國寶に列せらる。本尊畫像は鎌倉末期慶派の系統にな



(堂本院社二)

る作なり。十五王像十幅は現に奈良帝國博物館出陳中にして、他は恩賜京都博物館出陳中なり。其中、淨土五祖像は法然傳に、法然淨土門の祖師曇鸞、道綽、善導、懷感、少康を以て五祖とし、後業坊重源入宋に託して五祖一舖の圖像を將來せしむ。今二尊院に有するものは是れなりと云ふ。人物には皆像畫風に筆韻を施し、衣上細密なる金泥紋を描く。其南宋畫たるは論を俟たずと雖も、強烈なる對比色を用ひず、柔和の感深きは寧ろ日本風の趣あり。釋迦三尊三幅は支那或は朝鮮の畫にして、彩色美麗、盛に筆韻を用ふるも金泥文を用ひず、畫法の精妙以て拘すべし。各幅に「蓮土王跨雲孫百二十三祖合家存等發心緣繪」の朱印あるは寄進者の名にして、恐らく宋末より元朝間の作と推知す。他に七箇條起請文・妙義集・二尊院緣起等を藏す。七箇條起請文は文久元年十一月七日、法然が延暦寺の抗議に對し書き遺りし起請文にして弟子百數十人の文名あり眞宗開祖聖又釋空として其名を連ぬ。妙義集は最澄空海の筆蹟を見らるべく、二尊院緣起は其外祖後奈良天皇宸翰、畫は狩野元信の筆、圖書は伏見宮眞眞親王並に三條西公修筆なりと云ふ。當院背後は小倉山莊あり、又寺城附近に二條、豐司、三條西諸氏歴代・毛利秀就室高政院竹子・角倉了良父子・伊藤仁齋・伊藤東涯・熊谷直之・佛人去來等の墓及び落柿會・野々宮古址等を存す。

祇王寺

京都市右京區嵯峨二尊院門前長神町。

古義眞言宗。往生院の舊址にありて、大覺寺末の尼寺なり。草創年代詳かならず。久しく荒廢のまゝなりしが、明治三十五年之を再興す。往生院は初め淨土宗にして、祇







嵯峨山と號し、本宗大本山たり。空海轉行の地と傳へ、もと嵯峨天皇の仙洞なりしかば、嵯峨院或は嵯峨御所と稱せらる。歴代法親王住持の門跡地たり。嵯峨天皇屢次茲に行幸あり、空海に就き密教を授け給ふ。弘仁二年三月、天皇其殿舎を棄て、一寺を創建し、空海に勅して五大明王の秘法を修せしめらる。空海即ち五大明王を刻みて之を安置し、長日の供養をなす。今の五大堂（本堂）即ち是れなり。また傍に五覺院を建立す。弘仁九年春、靈苑天下に流行し、死者數知れず、天皇深く靈苑を闢ませ給ひ、親ら般若心經を書寫せられ、空海をして之を講讀せしめ給ひしに、靈驗顯著なりしかば、敬感斜ならず、直に心經殿を建立せしめ給ふ。同十四年四月、天皇讓位ありて、承和元年、嵯峨院に入御あり。同七年五月、淳和天皇崩御の後皇皇后（嵯峨天皇皇女正子内親王）亦此處に入りて上皇に侍す。同九年七月、上皇茲に崩御あり。貞觀十八年八月、正子内親王聖宮を改めて精舎となし、これを淳和天皇第二皇子恒寂法親王に附して大覺寺と號せしめ給ふ。親王即ち丈六佛像を作りて之を安置し、又經論章疏及び定額僧を定め給ふ。依りて親王を當寺の開山とす。時に正子内親王より大覺寺の匾額を寄せ、又清和天皇三十町の領を附し給ふ。又寺傍に濟治院を建立す。延喜十八年、宇多法皇、當寺を寬空に賜ひしが、幾許ならずして之を定昭に譲り、以て當寺別當に補す。後ら定昭は南都興福寺に一乘院を開創し、南都の法眼となる。爾來二百八十餘年間、一乘院の譽播となり威風凛に哀ふ。文永五年、其信の時、後醍醐法皇（法護法皇）入御あり一乘院を攝す。正應二年、龜山法皇（法護金剛院）入御せらる。更に徳治二年、後宇多法皇（法護金剛院）茲に遷御あり。世に中興大覺寺法皇と奉稱す。次で、文保二年二月、後醍醐天皇御即位の當初より四年間、法皇院



(實圖) (殿 寺 覺 大)

中に政を留せ給ふや、御法體の故を以て御冠を玉座上に懸けさせ給ひしに依り、今尚ほ其室を正覺殿と御冠の間と稱す。所謂大覺寺統の名蓋に起源す。元亨元年新たに伽藍僧房を營造す。其規模壯大なること當時の

縁澤頂を受け給ふ。正中元年、後宇多法皇崩御あるや遺詔によりて蓮華峰寺に本遷し、八角堂を建立す。延元元年八月、殿舎燒失し、翌年再建する。文中二年、塔婆を建立す。元中九年十月、南北兩朝の合一成るや後龜山天皇、皇太子眞泰親王と共に當寺に入御あり、神器を當地に於て後小松天皇に譲り給ひ、應永元年二月、御清海の上大覺寺法皇（法護金剛院）と稱へ奉り、寺内小倉御殿に住し給へり。以來兵亂相續ぎ、從つて寺門の衰頽を見し、足利義滿に至り、保護淺からざりしより、漸次復興す。徳川氏に及ぶや、千十六石餘の朱印狀を受け、嵯峨御所として色衣の免許、四大官の許狀等を出し、門跡地第三位たり。弘化三年、慈性法親王故ありて東京輪王寺へ轉せられしより、明治六年、中御門神池に至る間久しく無住なりしかば、維新の頃、寺運微かに衰へて一時東寺に屬せしが、後ら漸次興隆の緒に就く。同四年、一旦門跡の稱を廢せられしが、十八年、再び其稱の公許あり。同三十三年、眞言宗各派分派に當り大覺寺派を公稱して其本山となりしが、大正十四年十二月高野、御室、大覺寺の三派合して古義眞言宗と總稱し、金剛峯寺も龜山本山、當寺及び仁和寺を大本山となす。當寺現に末寺六百六十七箇寺あり、又もと子院二十二箇院を有せし、維新の際、廢絶して、今僅に覺勝院を存するのみ。●境内地一萬八千七百坪、清淨幽邃の靈地をなす。堂宇には五大堂（本堂）・御靈殿・心經殿・心經殿前殿（御影堂）・寶殿（正覺殿）・唐門・書院・經藏・寶藏・聖天堂・大日堂・護摩堂・鏡守堂及び明智光秀の元陣屋なりしと傳ふる庫裡堂に庭湖館・華道會館等あり。就中、客殿（正覺殿、對面所）及び寶殿は現に國寶建造物たり。客殿は桁行前庭七間後庭八間、總間四間、單層、屋根入母屋造、檜瓦葺にして右側後方に附

を設く。前庭を除きて周圍に雨縁を附し、且つ一部高欄を作る。後宇多天皇朝政を此處に見給ひし建物なりと傳ふれど、現存の堂宇は其樣式構造等明かに桃山時代の建立なるを示す。形態均整整美にして書院造に幾分庭園風を加味せる趣あり、内部床邊疊敷、十一室に分ち、中央三室を一區として奥上段の間となし、御廳と稱す。即ち後宇多天皇朝政を聽せ給ひし玉座なりと云ひ、所謂御冠の間是れなり。其後障子には狩野元信筆墨山水を描き、鴨居敷居には藤繪を施し桐竹風の模様を作る。世に之を嵯峨時繪と稱す。南面佛間十二枚の大襖繪は悉く狩野山樂筆牡丹開圖の筆にして其他各間障子壁張付等皆水滸、山樂、探幽の筆に係る。就中、御の間、松梅園、梅の間、紅梅園は山樂の優作なり。新撰土運入の際、其破損甚だしく、後ら大修理を行ひしに、樹枝の配置、筆致構圖等今尚ほ雄渾瀟灑の風を傳ふ。蓋し本堂は南禪寺方丈等と共に當代書院造建築中貴重の遺構とすべし。寶殿は桁行六十六尺一寸、總間四十四尺八寸四分、單層、屋根入母屋造、檜瓦葺、舊紫寶殿を賜はりて移建せしものにして、貞享三年、嘉永五年、明治五年の三度改修を加ふ。江戸初期の建造物たり。其内部裝飾等亦客殿と等しく桃山風の豪華なるものにして、特に御松の間、牡丹の間、紅梅の間の金地彩色襖繪、鶴の間の墨畫等頗る優作なり。又佛金具は江戸初期の特色を發揮せる極品とす。尙ほ五大堂は天明年間の再建に係り、御靈殿は明正天皇の舊黒戸御殿を移建せしものにして後水尾天皇御法體の聖像を奉安す。心經殿は正しくは勅封心經奉安殿と稱す。鐵筋混凝土、八角造にして大正十四年の再建なり。内に嵯峨天皇御心經を初め、後光嚴、後花園、後奈良、正親町、光格諸帝の宮輪三箱を勅封として奉安す。開前殿亦同年の新築に係り、嵯峨天皇、後宇多天皇、恒

寂親王の尊影並に秘藏空海像を安す。唐門は嘉永年間慈性法親王御建立にして建春門を稱すと云ふ。本尊木造五大明王像五幅及び寶中、絹本着色五大虚空藏一幅・同後宇多天皇御筆弘法大師傳（正和四年三月二十一日）一幅・紙本墨畫後深草天皇御筆消息一幅・同花園天皇御筆消息（七月二十五日）一幅・同後宇多天皇御筆高麗茶羅御修羅記（延慶二年正月十九日）一通・同後宇多天皇御筆御遺告一卷・大刀（鎗國忠）一口は總て國寶たり。其中、五大明王像は藤原式に幾分細細なる寫實味を加へたる鎌倉期の作たり。五大虚空藏像は現に東京帝室博物館出陳中に於て、鎌倉佛畫の一面を代表する佳作なり。其手法尙は前代の傳説を遺存せるも、裝飾文様等細部の技巧に著し、勁渾なる描線を以て輪廓を示し、更に色彩配合の美と俟て、眞に壯麗の感あり。弘法大師傳は以て法書中の逸品とすべく、又後深草天皇御筆消息、後宇多天皇御筆高麗茶羅御修羅記、大刀一口は現に恩賜京都博物館寄託中なり。境内に大澤の池あり、又の名を庭湖と稱し、嵯峨天皇離宮當時其林泉の一部にして現に名勝指定地なり。池中に菖の島、天神島の二島及び巨勢金剛の配置と云ふ庭湖石等あり。現今當寺内に舊嵯峨御所華道總司所を設け、新道に於て一派をなす未生御流は、嵯峨天皇の菖の島所生の菖花を投挿せられし古事に源起すと傳ふ。この池の北半町に、有名な名古曾地あり、今はこの池に附屬して名勝指定地たり。池畔の鎮守五社明神は伊勢兩宮・賀茂・春日・松尾の五社を祀り、もて離宮の鎮守として空海勸請と傳ふ。五社明神の北に大師加持水と稱する圓井あり。當寺附近に嵯峨天皇御廟山、蓮華峯寺・長刀坂・直指庵・釋迦堂・廣澤池等名勝多し。因みに當寺境外佛堂として、觀音寺、觀音堂あり。觀音寺は當寺二世寬空の開基と傳へ、往時寺

勢頗る隆盛なりしもの、如く、現に觀音寺の地名を存す。●勅封心經會（十二月三十一日初夜開白、一月二日中結願）、物故考道會（四月十五日）、愛宕神社、野々宮神社、神興加持會（五月一日）、寶殿前にて兩社の神輿を加持す）、後宇多法皇御國忌（七月二十五日）、奉燈會（八月二十日、二十一日）、青弘法と稱し、弘法大師を祀り、萬燈を獻す）、開山當忌（九月二十日）、嵯峨天皇忌（毎月十五日）、御影供（毎月二十一日）。直指庵 京都市右京區北嵯峨北ノ段町。●淨土宗。●僧侶間の開創と傳へ、初め黃檗宗に屬す。次で隱元隆琦本邦渡來の後暫く當寺に住せしことあり、後ら萬福寺に入る。依りて今當寺を以て黃檗宗發祥の地と稱せり。其後現宗に歸す。降りて安政變後、近衛家老女村岡當寺に入りしが、明治六年八月歿して茲に葬る。大正十一年四月、老女五十回忌に改葬す。●境内二百五十餘坪。寺境頗る閑靜なり。堂宇は今一庵室を留むるのみ。寺寶として隱元筆扁額二面、老女村岡遺品及び其日記等を藏す。村岡の筆する諸記録は幕末維新史料として價值多し。念佛寺（愛宕念佛寺）京都市右京區嵯峨愛宕町。●天台宗。●等覺山と號し、一に愛宕念佛寺、又は單に愛宕寺と稱す。創立年代詳ならず開山は空海とも或は叡山南谷五佛院の承襲なりとも云ふ。續日本後紀、天長三年



の條に醍醐天皇皇女綾子内親王を愛宕郡愛宕寺に葬る  
とあり。即ち當初愛宕郡大原にありしが如く、初め眞  
言宗を  
奉じ、  
東寺に  
屬せし  
が、中  
世天台  
宗養源  
院の末  
寺とな  
る。中  
興開山  
千觀は  
一に念  
佛上人  
と云ひ  
しに因  
みて當  
寺亦念  
佛寺と  
稱するに至る。應仁亂後、附近の愛宕寺を併せて愛宕  
念佛寺と號す。中比より東山区松原通大和路東入の  
地にありしが、近年市區改正に際し、現寺地に轉す。  
◎堂宇中、本堂は方五間、單層、屋根入母屋造、本  
瓦葺にして、現に國寶建造物なり。堂の上壁に文保二  
年八月十二日重修とあり、其後數次の補修を経て、更  
に移建後の改修加はると雖も、尙ほ鎌倉末期の風を傳ふ  
るもの尠しとせず。周圍廻縁を繞らし、屋根の流れ緩  
やかにして、稍々輕快なる趣を保持す。内部は後部



(寶國) (堂本寺佛念)

三間二面を内陣、他を外陣とす。内陣天井は之を折上  
小椋格天井として一段高く單調を破り、其手法鎌倉後  
期の特徴を示し、地方絶無の精巧を稱す。内陣後方須  
彌壇を設け、壇上に本尊千手觀音、左右に地藏、毘沙  
門等を安置す。須彌壇格柵間の彫形亦よく當代の特色  
あり、蓋し本堂の構造簡單、規模亦大ならずと雖も、  
其様式手法等當時行はれたる和樣建築の一遺構として  
見るに足るべし。本堂安置の木造千觀内供坐像は現に  
國寶にして、極彩色、玉眼嵌入、鎌倉期の作に屬す。  
◎當寺近世迄天狗酒盛と稱して毎年正月二日、紙圍  
の大神人、方丈に聚りて酒宴を開き、宴終りて後、本  
堂に牛王加持を修し、太鼓を打ち鐘を吹くと云ふ。  
月輪寺 京都市右京區嵯峨清涼月輪町。  
◎天台宗。  
◎圓光寺 圓光大師二十五靈場第十八番の札  
所なり。天應元年、慶後、光仁天皇の勅を奉じて創建  
す。傳へ、其草創の際、地中より得たる寶鏡の銘に人  
天滿月輪とありしに依り、爾來月輪を以て寺號を覽む  
と云ふ。後ち光勝當寺に入りて之を中興す。其後源空  
亦此地にありて念佛を專修せしが、時に九條覺實之に  
歸すること深く、入道して圓觀と號し、本寺に遺世す  
然るに承元元年、源空等淨土の一門配流に遭ふや、源  
空及び圓觀、圓澄と當寺に別居し、各々木像を刻みて  
以て形見となすと云ふ。本寺の所謂三祖師の尊像と稱  
するもの是れなり。因みに古來當寺を以て九條覺實月  
輪殿とせしが、近年東福寺内山を以て之に充つるに  
至れり。  
◎境内は山林を含みて二萬五千二百餘坪、愛宕山頂  
を下ること東十三町の地に位置し、眺望甚だ宏闊なり



(寺輪月)

堂宇に三祖師堂・荷葉寶骨堂拜殿・龍王堂等を具す。  
寺寶中、木造千手觀音立像一軀・同十一面觀音立像一  
軀・同聖觀音立像一軀(以上恩賜京都博物館寄託中)・  
同空也上人立像一軀(祖師堂安置)・同傳善盛立像一軀・  
同傳龍王立像一軀(龍王堂安置)・同阿彌陀如來坐像一  
軀・同傳九條覺實坐像一軀は總て國寶に列せらる。千  
手觀音像は一木造、姿態の均衡頗る齊美にして弘仁時  
原兩時代過渡期の作なり。十一面觀音、聖觀音兩像亦  
略々同時代の作に係り、前者は一木造彩色像、其刀法  
珠に輝  
麗、天  
平の彫  
技を思  
ばし、  
空也上  
人像は  
六波羅  
紫寺寶  
像彫刻  
に彫刻  
たるも  
のあり  
鎌倉期  
の作た  
り。傳  
善盛、  
龍王立  
像並に  
傳九條覺實像は共に弘仁末期の作にして、前二者は其  
形相吉祥天に酷似す。後者覺實像と寺傳するは、後世  
の附會にして、彫像文殊の類と推知さる。阿彌陀如來

坐像は藤原末期の作とす境内に龍奇水、時雨樋、空也  
座等の遺跡あり。  
◎五月五日より同月中、十月五日より一週間。  
川寺 京都市右京區嵯峨天龍寺道路町。  
◎臨濟宗天龍寺派。  
◎靈龜山と號し、往時京都市十刹の第二位なりしが、  
今天龍寺塔頭の輪番所にして、特例地なり。初め此地  
に龜山天皇の龜山殿別館川端御所あり、天皇之を皇女  
昭慶門  
院に附  
し給ひ  
世に川  
端女院  
と云ふ  
其後、  
門院の  
養子世  
眞親王  
(後醍  
醐天皇  
皇子)  
之を傳  
領し給  
ふ。親  
王の薨  
後、元  
弘三年  
八月、後醍醐天皇更に之を夢窓疎石に勅授ありて、親  
王の御菩提を弔はしめ給ふ。康安元年、同様に權る水



(寺川端)

和三年、一時當寺を十刹より附せて五山の一に列せし  
が、後ち再び十刹に下せり。應仁年間、火災に罹り、  
慶長年間、再建せられしも、遠く舊觀に及ばざりき。  
◎寺境名の如く大堰川に臨みて嵐山渡月橋畔にあり  
本堂・開山堂・中門等の堂宇を具ふ。本堂は南面し、  
中央壇上に本尊彌勒佛を安置し、傍に足利尊氏念持佛と  
傳ふる地藏尊を安置す。開山堂には夢窓圓師像を安じ  
下に石龜を設けて其遺骸を葬る。中門には足利義滿筆  
と云ふ三會院の額を掲ぐ、三會院は即ち世眞親王並に  
疎石の塔所なり。本堂背後に親王の御墓あり。寺藏監  
輪に「右當寺者龜山法皇仙居、都督大王遺跡也」とあり

天龍寺 京都市右京區嵯峨天龍寺芒馬町。  
◎臨濟宗天龍寺派。  
◎靈龜山と號し、本派大本山にして、京都五山の一  
なり。應仁二年、足利尊氏の開創に係り、夢窓疎石之  
が開山たり。初め、此地に醍醐天皇の離宮ありしを、  
檀林皇后捨て、禪寺となし、檀林寺と號す。後ち建長  
年間、後醍醐天皇其廢址に就きて離宮を造營し給ひ、  
地名に依り、醍醐殿とす。又龜山殿とも稱す。上皇此處  
に崩御の後、龜山上皇仙居し給ひ、御孫尊治親王(後  
醍醐天皇)を養育し給へり。應仁二年(延元四年)  
八月十六日、後醍醐天皇吉野の行宮に崩せらる。や、  
同年十月、光嚴上皇、足利尊氏に院宣を下し、親皇仙  
跡にして天皇の離宮たりし龜山殿を改築して以て寺と  
なし、同月十三日、靈龜山禪院寶聖禪寺の賜諱あり、  
天皇の御歸依僧疎石を之に請ひ給ふ。即ち疎石入りて  
一山を管領し先帝の遺業を所り奉る。翌三年四月、御  
靈の造營若手せらる。や、尊氏また深く天皇の菩提に  
心を懸け、自ら土石を運搬して工を督し、且つ備後國

三谷西條地頭職、日向國々宮莊、阿波國那賀野山莊、山  
城國物集女莊等を寄附して以て遺營の料に充つ。同年  
七月、光嚴院より改めて天龍寶聖禪寺の號を賜ひ、且  
つ丹波國弓削莊を下賜あり。然も當時兵亂の後に上  
下困窮の極にあり、依りて翌年十二月、元寇以來中絶  
せし元との通商を復興して以て本寺遺營の資を得んと  
し、僧主本を以て之が綱目たらしむ。即ち天龍寺給の  
起原とす。同年、天龍寺を以て五山第二と定む。康永  
元年三月、禪師の式を修す。同年四月二十三日、五山  
の制改まるや、當寺鎌倉圓覺寺に準じて其第二たり。  
翌二年八月、佛殿成り、光嚴上皇上院號を親書せられ  
併せて御筆額額を賜ふ。次で法堂、山門、寮宮等落成  
す。貞和元年七月、延壽寺業徒當寺の慶讚勸會を停め  
疎石配流のこを奏して賑然たり。同年八月二十九日  
落慶供養法會を修するに方り、光嚴院御幸あり、尊氏  
直義陪從す。其盛儀古今無比、諸堂の結構壯麗を極め  
總門を遙に醍醐野の東に置き、一百五十の塔頭子院參  
道の兩個に羅列し、路西隱一の大禪刹となり、動願所  
に準ぜらる。其境域三十六町九畝歩、東は釋迦堂大路  
を堺し、西は龜山を負ひ、南は嵐山を庭園とし、北は  
淨金剛院に至ると云ふ。延文三年正月、同様に罹りて  
諸堂宇概ね燒亡するや、即ち住持春風妙大いに經營  
し、熾許ならずして再興の工を竣へしが、貞治六年三  
月、再び炎上し、春風重直て再建を遂ぐ。其後康安六  
年九月、康暦二年十二月の兩度火災に遭ひしも、都度  
造營せらる。至徳三年七月、五山の座位を變革するに  
方り、當寺其第一に列す。應永、正長、永享の間は、  
實に當寺の全盛期とす。然るに足利氏の末、兵亂に遭  
ひて寺領減ぜられ、加ふるに文安四年、應仁二年兩度  
の炎上に遭ひて寺勢稍々衰ふ。其後、再建せらるると雖  
も、もとより舊觀に復すべくもあらず。豊臣氏以來寺



領千七百二十石を有す。文化十二年正月、重れて同様に  
の異に罹り、更に元治元年七月、當寺長州藩の屯營に  
充てられし爲め、薩摩藩の兵火に罹りて法堂、本堂、  
禪堂、聖廟(多寶殿)、祖師堂及び塔頭六箇寺等悉く灰  
燼に歸す。其後、歴世の住持、滴水、龍綱、峨山等皆  
密經營し、明治二十七年、峨山の時、土木を起し、同  
三十二年、再興の工成る。即ち現在の堂宇なり。大で  
聖廟多寶殿再建を畫す。大正十四年、現住清淵書院を  
改築す。昭和三年、御即位の大禮了るや、建物の一部  
を多寶殿再建の材料として賜ひしより、同五年、其工に  
着手し、同七年十二月、立柱式を舉行、其落成漸く近  
し。維新後、管長制定以來、宗務本院を本山に置き、  
以て末寺二百十二箇寺、教會所四を統ぶ。尙ほ當寺近  
世境内三萬七千餘坪、塔頭二十餘箇院を有せし、今  
多く廢合し、現に臨川寺、鹿王院、西芳寺、地藏院(以  
上城外、前三寺の如きは各獨立せる大刹なりしが、近  
時塔頭となれり)金剛院、寶壽院、壽寧院、慈濟院、  
松岩寺、妙智院、弘源寺、三秀院、永明院の十三院を  
有するに過ぎず。

●境内地一萬八千餘坪。喬松古柏蒼鬱として、幽邃  
閑寂を極め、自ら名刹の面影を存す。堂宇に法堂・庫  
裡・大方丈・書院・禪堂・雲居殿・山門・勸使門等を  
具ふ。更に近く大方丈の西北に再建せんとする本殿  
(多寶殿)は桁行七間、礎間六間、單層、屋根入母屋造  
檜皮葺、所謂紫雲殿造なり。境内中央の大方丈は桁行  
十八間、礎間八間にして、其南方にある法堂(兼佛殿)  
には本尊釋迦、脇士文殊、普賢を安置し、後壇には松  
麿、臨濟、百丈等の像を置く。天井麗麗の圓は鈴木松  
年の筆なり。書院は一に瑞瑞軒と稱し、慶應二年、舊  
臨川寺客殿を移して假法堂とし、明治三十一年、之を  
修理して書院となせしものにして、大正十四年再修以



(堂法寺龍天)

來多寶殿殿上以後大方丈に安置せし後醍醐天皇尊像を  
茲に奉安せり。雲居殿は即ち遺佛場にして、法堂の西  
に在り。文殊菩薩を安置す。寺寶中、木造釋迦如來坐  
像一軀、紙本墨書蓮部院御繪圖一鋪、同往古諸繪圖  
一鋪、紙本墨書蓮部院御繪圖一鋪、同往古諸繪圖

一幅、同清涼法眼禪師像(數)一幅、同雲門大師像(數)  
一幅は總て國寶に列せらる。釋迦如來坐像は釋尊なる  
藤原末期の作にして、衣紋の流麗なる刻線に、よく當代  
の特徵を示す。觀音菩薩像は宋元過渡期の作、殆ど文  
様を描かず、線描を本位とす。殊に着衣の線は専ら、肥  
瘦を以てよく重疊の状を描出せり。清涼法眼禪師像、  
雲門大師像は共に所謂禪僧四緣諷を表す禪會の圖の一  
にして、本圖は即ち禪宗五派中、雲門宗祖文偃及び法  
眼宗開祖文益の禪會圖なり。一は遠山、一は老松を添  
ふるのみにて祖師各々一僧に對す。兩祖師像の相貌態  
度眞に禪宗祖の面目を發揮せるものと云ふべく、勁健  
なる顔面描法を驅使せる眞正の筆致は深玄なる韻致を  
存す。恐らく南宋時代馬遠一流の作たるべく、本圖當  
寺に傳來せるは萬治の頃にして、泉州某の寄進に係れ  
り。其他、後醍醐天皇尊像を初め、石、足利氏に關す  
る書畫及び佛像、佛畫、古器物等の所藏尠からず。當  
寺大方丈裏の林泉は二千六百餘坪、現に名勝庭園に指  
定せらる。開山礎石の意匠に成り、清涼幽雅を極む。  
其中央に曹源池と稱する林泉あり。池畔には奇巖怪石  
多く、古柏老松參差し、對面には龜尾瀨あり。又池中  
の小嶋を辨鳥島と稱す。後醍醐、龜山兩上皇の御陵は  
大方丈の西南に在り、寶形造の御廟即ち是なり。又其  
西北の山中、古木鬱蒼たる所に御茶見所あり。山門よ  
り法堂に至る前庭は約五千坪、中央に池水あり、石橋  
を設く。池の東西に金剛院、寶壽院、慈濟院、松岩寺、  
妙智院、弘源寺、三秀院、永明院の塔頭八院相並ぶ。  
又礎石の邊に係る天龍寺十境あり、即ち普明院、絶唱  
溪、雲底廟、曾源池、拈華廟、渡月橋、三根院、萬松  
洞、龍門亭、龜頂塔是れなり。就中、拈華廟は天下の  
絶勝嵐山にして、現存の櫻楓松樹は、維新前當寺に於  
て栽培し來りしもの、殘存なり。尙ほ當寺に於て五十

年毎に再修する後醍醐天皇御忌と開山忌は、この嵐  
山の裏山を間伐して經營萬端の費に充て來りしもの  
にして、遠忌山の名稱の存する所以なり。此他寺内に小  
書院、仲國塚等の遺跡亦尠からず。  
●後醍醐天皇御忌(五十年目)、例忌(九月十五日)  
後醍醐天皇御法要(毎月十五日)。

妙智院

●臨濟宗天龍寺派。  
●天龍寺塔頭の一にして、兼彦周貞靜居の地たり。  
周貞、別稱は怡齋と云ひ、後ち謙齋と改む。管領細川  
氏の家老井上宗信第三子にして、元龜元年、京都に生  
る。永正六年、鹿苑寺心齋等安の門に入り、同八年、  
之に隨ひて天龍寺に赴く。尋で等安丹波性智院に退く  
や、又之に侍す。天正十五年、天龍寺に齋染し、爾來  
當院に居る。天文年間、再度遣明使となりてより大内  
義興、織田信長等の歸依後からず、後ち武田晴信に請  
ぜられ、甲州に化する事數年、歸洛後は本院に靜居し  
て禪寂二昧に入る。天正七年、本院に寂す。壽七十九  
なり。  
●寺寶中、絹本着色無等周位筆夢窓國師像一幅、同  
嘉靖二十年柯雨窓費兼和尙像一幅、兼彦入明記及  
び送行書畫類(紙本墨書入明略記一卷、同初渡集四册、  
同再渡集二册、同釋經錄一册、同曉過西湖詩一幅、同  
王壽筆送別圖一幅、同歸別二字一幅、同柯雨窓送別  
詩一幅、同衣錦堂詩序並詩一卷、同謙齋記一卷、同送  
別天客詩並序一册、同城西欄句一册、紙本墨畫衣錦堂  
繪圖一幅、絹本着色野泉筆兼彦歸朝圖一幅)十四種は  
總て國寶に指定せらる。此外、兼彦入明に關する古文  
書を多數藏す。

常寂光寺

●日蓮宗。  
●小倉山と號す。此地も龜山天皇小倉殿址と傳へ  
文祿五年、大本山本願寺第十六世院日續(廣橋大  
納言團光男)隱退して本寺を創建す。近世末寺古松、  
春照の  
二院ありしも  
今廢絶す。  
●境内  
内地約  
三千坪  
小倉山  
を以て  
二尊  
院の南  
境に位  
置す。  
●寺城頗  
る閑靜  
にして  
東方庭  
曠野あり、本堂・妙見堂・書院・庫裡・多寶塔・仁王  
門・歇仙廟等の堂宇を具す。就中、多寶塔は現に國寶  
建造物にして、三間二層塔、屋根栴檀(現今栴檀)  
一に並尊閣と稱す。其位置寺背山腹にありて眺望殊に  
優れ、形姿頗る輕快なり。寺傳元和六年建立と云ひ、  
樣式手法上江戸初期の建造と推知す。前面に靈元天皇



(堂本寺寂常)

靈業、並尊閣の三字勅額を奉撰せり。本堂は二世通明  
院日蓮伏見山城建築の一部を得て遺立せしものと云  
ふ。妙見堂には能勢妙見の分體を奉祀し、其拜殿は昭  
和三年の建立に係る。書院は昭和七年、東門は大正三  
年の新築なり。仁王門はもと本願寺客殿の南門にして  
貞和年間建立に係りしを、元和二年、當寺に移建せ  
しものなり。若狭小濱町長源寺より移せし仁王尊像を  
安す。歇仙廟には藤原定家、同家隆、徳川家康等の木  
像三軀を安置し、其茶席時雨亭は定家の遺蹟に係る  
と云ふ。簡素清酒なる茶室にして世に聞ゆ。寺寶として  
大塔宮護具親王、藤原定家、家隆等の筆蹟・高倉天皇  
より小倉局に賜ふと傳ふる車琴等を藏す。寺地歇聖定  
家の遺跡として著聞し、今史蹟名勝地、風致地區に編  
入せらる。  
●國師會(二月一日)、節分會(二月四日)、御會式  
(十一月十三日)、妙見祭(毎月一日、十五日)。

雲華院

●臨濟宗天龍寺派。  
●由緒寺院にして、一に竹之御所の名あり。京都尼  
寺五山の一たり。初め天龍寺二世無極志玄の妹智泉尼  
同寺開山夢窓石に就きて禪學を修せしが、後ち京都  
三條東洞院の地に一字を創し、瑞雲山通玄寺と號す。  
即ち當院の濫觴なり。足利義滿の時、寺格を陞せて尼  
寺五山の一とす。智泉尼老後、更に寺内に一字を建立  
して雲華院と號し、茲に遷隱す。其後、通玄寺を併せ  
て雲華院と稱するに至る。戰國の擾亂に一時衰頹せし  
も、延寶年間、後西院天皇皇女大成尼、入山ありて堂  
宇を重修し、以て中興の業を成じ給ふ。文化四年、竹  
之御所の號勅許あり。文政中、住持秀峰尼(光格天皇



皇女)の寂後、久しく無住となり、大いに荒廢す。明治五年、舊鹿王院の子院址に移りて堂宇を再建す。即ち現寺地たり。近世、寺領六百八十三石を有せり。因みに當寺三條東洞院の舊地は近衛天皇皇后藤原多子の宮址と傳へ、平家物語に、藤原實定、待賢の侍従に「ものかはさ君かいひけん鳥のれの今朝しむいかになしがるらん」との歌を云ひ遺すと見ゆるは即ち其地にして、依りて當院尼院となりて後、常に有髪の女子一人を置きて、待賢の侍従を表せり云ふ。また本寺尼僧代々天龍寺、松岩寺の僧を戒師として、出家するを例とし、其寂後は、大徳寺内昌林院に埋葬す。今尙は歴代住持の墓塚同院に存す。

鹿王院

京都市右京區嵯峨北堀町。

臨濟宗天龍寺派。覺禪山と號し、當派別格寺たり。京都市十刹の第五に列す。康曆元年、足利義滿、相國寺、春屋妙菴の請に依りて、此地に一字を創建し、大徳田實輔寺と號せしが、嘉慶元年、義滿更に一小院を境内に營み、以て妙菴の塔所となし、鹿王院と稱す。即ち當院の起原にして、其後、實輔寺次第に荒廢して遂に廢絶し、本院のみ殘存す。徳川氏の世となり及びて、漸く再興の寺運開け、寛文年間、酒井忠知堂宇を重建す。爾來天龍寺に屬し、以て現在に及ぶ。



(堂山開院王鹿)

(觀覺比丘東陳水滸贊)一幅・同夢窓國師像(至德丙寅仲夏妙佐贊)一幅・同釋迦三尊及び三十祖像(明兆筆、周歷贊)七幅・絹本墨畫山神迦像一幅・紙本墨畫關石圖(梵芳筆、自贊)一幅・紙本墨畫後醍醐天皇宸筆御消息(十二月二十九日、後宇多天皇御加筆)一幅・同鹿王院文書(四月六日元龜天皇宸筆及び七月八日光明天皇宸筆)御消息 外二通 一巻 一巻 同金剛院文書(八月二十日) 光天皇宸筆御消息外七通 一巻は總て國寶にして、其中、圓覺比丘東陳水滸贊夢窓國師像、後醍醐天皇宸筆御消息、鹿王院文書、金剛院文書は現に恩賜京都博物館寄託中なり。妙佐贊夢窓國師像は夢窓國師像中の傑作にして風格抜き得て崇高なり。贊の筆者妙佐は鎌石法孫にして鹿王院七世とす。山神圖は元朝の作なり。若の圖中可印記は後世の補たり。關石圖は即ち梵芳五鴨子の僅

寶隆院

京都市右京區嵯峨。

臨濟宗天龍寺派。小楠公及び足利義隆の菩提寺なり。初め、白河天皇の勅願に依り草創せし所にして、善入寺の勅號を賜ふ。爾來、綾小路親王より入道彈正親王に至る數代、皇孫相次いで入寺し給ふと云ふ。後、夢窓禪石の法弟默庵周諷入りて當寺を中興す。時に楠木正行、深く默庵に歸依せしが、正平三年、正行四條院に自及するや默庵即ち京都六條河原に集されし其首級を、生前の遺言に依り當寺に歸す。將軍義隆の時、故ありて觀林寺と改め、一時相國寺妙菴の堂宇する所となりしが、貞治五年、再び默庵の所營となる。義隆亦禪師に歸依厚く、大檀越となりて佛殿以下諸堂を營建す。貞治六年十二月、義隆歿するや、生前の勅願により其遺骨を小楠公首塚の傍に埋め、且つ其法號に因り寺名を寶隆院と改む。爾來、足利氏歴代の崇敬厚く、屢次寺領を寄せ、寺運隆盛を極めしが、應仁の亂以後漸く衰微し、徳川時代に至りて寺領極減し、本寺天龍寺よりの配當

長福寺

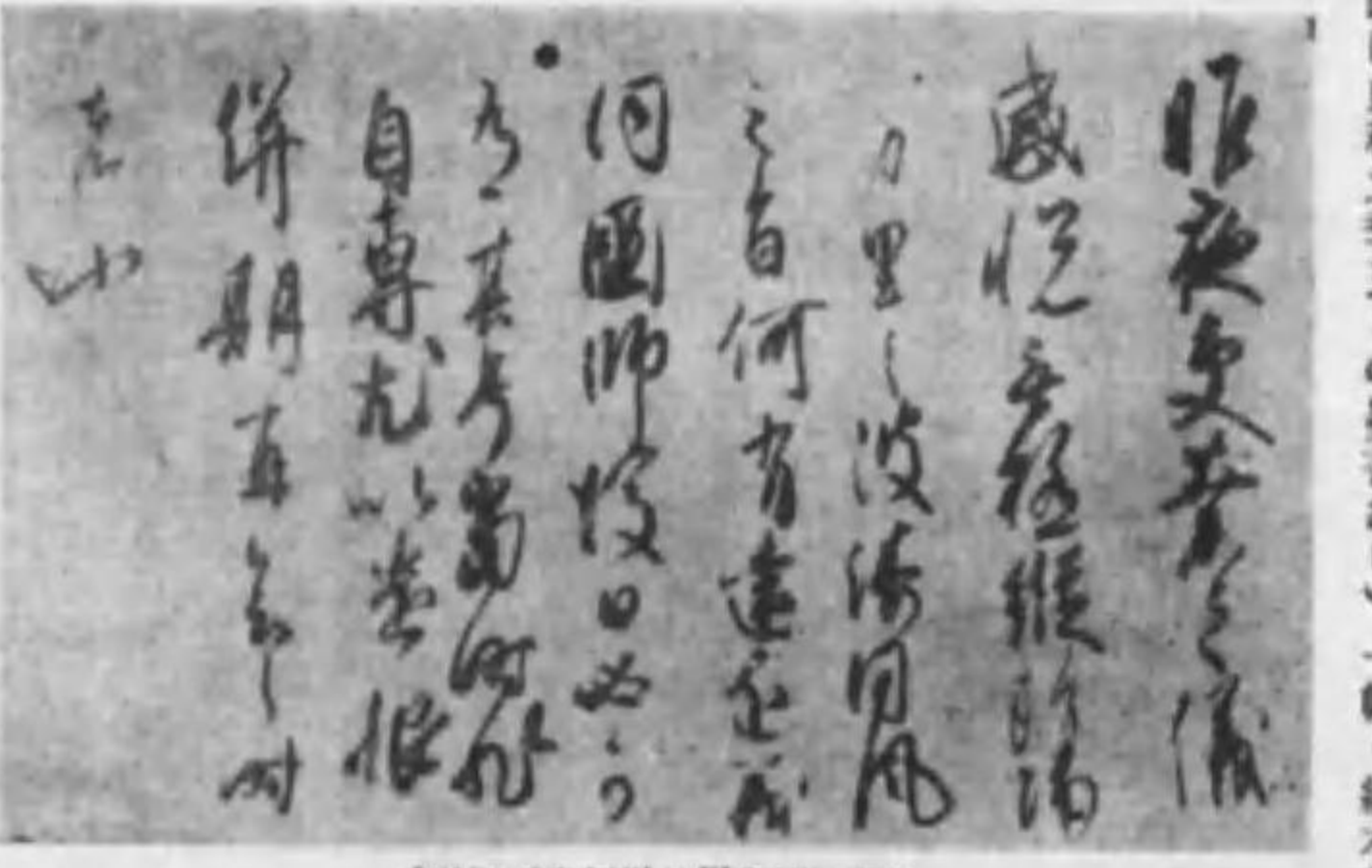
京都市右京區梅津中村町。

臨濟宗南禪寺派。大梅山と號し、一に大寺と呼ばふ。當派別格なり。仁安三年、梅津の開墾者梅津惟隆十三代の後裔眞理尼、其境内に一寺を創建し、長福寺と號して以て天台宗を奉ず。即ち當寺の起原なりと傳ふ。延元四年、梅津の長者豐前左衛門清景、堂宇を再興して月林道映を請じ以て當寺の中興開山とす。時に現宗に轉ず。花園法皇月林に御歸依厚く、屢次當寺に臨幸して法問のことあり。月林首領に寫筆の費を賜ひ、其塔に圓明の勅額を下賜あり。且つ寫影並に勅願所繪圖を附し給ふ。法皇崩御あるや、御遺命にあり、當寺東方蘇原の地に奉獻す。即ち蘇原法皇と奉稱する所以なり。南北朝の頃、



(殿佛寺福長)

又數次寫繪、繪旨、院宣、令旨を賜はり、勅願所に充てられ、守護不入の靈地と定めらる。爾來、月林の法高梅津門徒の法統連續たり。足利氏の時、禪寺十刹の一に列す。織豐二氏の歸依亦厚く、徳川時代には南禪寺金地院の發願所となれり。舊寺領三百五十石を有し又二十有餘の塔頭子院を存せしむ。維新後多く廢合分離す。近時諸堂を改修して新々寺觀を整へたり。



(寶圖(文行遠敏道皇天圖花))

關は昭和六年五月の新築なり。寺寶中、絹本着色佛涅槃圖(畫面に貞和二季云々の墨書あり)一幅・紙本着色花園天皇御像一幅・紙本墨畫花園天皇宸筆御消息(二月九日)一巻は國寶に指定せらる。其中花園天皇御像は僧家信の筆に成り、夙に本朝畫史山州名跡誌等に著録せらる。傍に「予之隨實法印豪信故爲信賴息所圖也于時歷應改元無射之候也」の墨書あり。御能筆の譽高き同天皇の御眞蹟として同じく道映送行文、共に入木道史上夙に著名なり。妙心寺所藏の御像と同じく御法體なれど、畫風遙かに簡潔にして、寧ろ大和繪白描に近し。豪信の畫買なる作例として珍重さる。其他、後村上天皇宸筆・花園天皇宸筆・月林首領・長福寺古圖・花園天皇國師號之承文等を藏す。長福寺古圖中に見ゆる別傳院とは花園法皇の御影堂なり。



●開山忌（二月二十五日）、山門大施餼集（八月）、梅津清景忌（九月四日）、達磨忌（十月二十四日、二十五日）、成道會（十二月八日）、観音講（毎月十八日）。

●智福山と號し、俗に經藏虚空蔵と云ふ。同宗仁和寺末たり。本尊虚空蔵菩薩、古來本邦三處虚空蔵の一として著聞す。和開六年、元明天皇の勅願により、行基の創建せし所にして、もと木上山（或は日照山）葛井寺と號す。天長六年、空海の上足道昌、虚空蔵菩薩像を刻して之を安置し、以て當寺本尊となす。次で貞觀十六年、



（堂本寺輪法）

●黄髮宗。  
●嵐山大悲閣と號す。初め清涼寺の西中院にありて後醍醐天皇の御祈願道場たり。其後寶曆せしを、慶長十九年、角倉了以、現在の地に移して、大悲閣を建立し、二尊院虚空真侍を請じて中興開山とす。又了以自ら之に住し、以て其開聖せし諸川の通舟の便益を祈願す。當時天台宗を奉ぜしも、文化五年、角倉玄寧、大願を以て當寺を重興するや、黄髮宗に轉ず。明治維新の際、總に大悲閣を願きて、境内、山林、什寶等多くを失ひしも、同四十二年に幸り、寺地を擴張して漸次諸堂を整へ、以て其法燈を存續するを得たり。  
●境内二百餘坪。寺域富山樹林地の一部を占め、下方大堰の清流を望みて幽邃閑寂の靈地なり。堂宇に大悲閣・本堂・庫裡・方丈・鐘樓・鐘守堂等をも具ふ。本尊千手觀世音は源信の作と傳へ、他に寺寶として、角倉了以・貞椿木像、了以筆保津川開闢に關する古文書、石川丈山・藤井竹外等の筆蹟あり。境内に了以時あり碑文は林羅山の撰に係る。  
●節分會並に福茶會式（二月四日）、花祭並に神護會（四月三日）、虫供養會（八月十六日）、了以忌及び川施餼集（九月二十二日）、普茶會講員追善會（十一月）、観音會（毎月十七日）。

●法輪寺（虚空蔵） 京都市右京區嵐山中尾下町。古義眞言宗。  
し、天平年間、僧行基、聖武天皇の勅願によりて創建する畿内四十九院の隨一なりと云ふ。大同年間、空海本寺に住す。時に平城天皇皇子高岳親王空海に就きて落飾の儀を授けし所にして、本寺に入り給ふ。其後荒廢せしが、建久年間、攝津守中原師員堂舎を修葺して寺を西方、彌土の二寺に分ち、源空を請じて之に居らしむ後、現

法流を盛に傳ふ。徳川綱吉生母桂昌院は曾て其立身祈願成就の報謝として當寺の堂宇を修葺す。元禄六年十月、徳川綱吉亦寺額五十石の朱印狀を寄せ、境内門前諸役を免す。其後更に渡月橋を改築し、黄金五百兩を寄せて其維持費に充てしむ。別に松尾神社別當職として蘇十七石を有せり。天保以來、維新に至る迄、廣隆寺別當寺を兼務す。元治元年、兵燹に罹りて堂宇の大牛を烏有に歸せしが、明治十七年、本堂再建の工を設ふ。大正三年、更に客殿、玄關、廻廊、庫裡、山門等の再建成り、以て漸く舊觀を復せり。因みに當寺古來所謂十三詣を以て著聞す。中興道昌の時より始まる所傳へ、御歴代中幼帝十三に達し給へば、必ず當寺に勅會供養あり。毎年三月十三日より四月に至る間、洛中洛外十三歳の男女當寺本尊虚空蔵菩薩に參詣する時は福徳智慧を受くこと稱す。十三日は虚空蔵菩薩の縁日に當れり。當日境内にて十三品の菓子を開き、參者之を購ひて本尊に供したる後小兒に食せしむ。蓋し智福圓滿の眞言十三字なるを以て、十三品として圓滿の呪を唱へ、加持せしものとす。  
●境内地二千二百五十坪、西北嵐山の翠巒を負ひ、前方大堰の清流に啓けて寺境幽邃閑寂、眺望宇内に冠たり。堂宇に本堂・大悲閣・客殿・玄關・廻廊・庫裡・大門・鐘樓・清澗權現社等をも具す。本尊虚空蔵菩薩は古來漆器製法、工務技術の守護佛として、新道の崇敬者多し。寺寶中、木造持國天多聞天立像二軀は現に國寶に指定せらる。共に極彩色を施し、鎌倉期の作と推定さる。他に巨勢金剛筆求開持板本尊及び二童子・開如意寶珠・能作性珠・磨金塔・後醍醐天皇聖筆智福山勅額・日本大勅運繪旨七通・徳川氏寄進朱印狀八通・左甚五郎作双龍・道昌所持舍利符契・錫杖等あり。當地古くより天下の名勝嵐山の名を以て著聞し、從つ

て寺内堂に附近に古跡亦少からず、壽橋、其五郎、葛井、求開持堂址、勅額樓、普水機切碑、小督局經碑、伊勢玄無碑、玉堂琴士碑、空也念佛常行堂址、道命庵址、西行樓、宗紙庵址、藤原俊成墓塔、蛇谷、渡月橋等を其主要なるものとす。境内に櫻楓多く遊覽を覺らし覽者四時を絶たず。

●華嚴寺 京都市右京區松室地家町。  
●臨濟宗水源寺派。  
●妙徳山と號す。風潭僧侶の開創に係る。風潭は明曆三年、越中西國渡道生村（一に攝津池田）に生れ、比叡山にて得度の後、専心天台の教義を研學し、また安樂院光禪に就きて三大部の講義を聽修す。次で心を華嚴の章疏に潛め、密かに華嚴宗の再興を企圖す。享保八年、現在の地に本寺を創建して大華嚴寺と號し、次で諸堂遺營を計畫せしも、未だ成らずして元文三年寂す。慶應四年、慶應入りて住するや、即ち臨濟宗に改む。大正元年、四方を勸進して、遂に本堂再建の工を發ふ。是れ即ち現今の堂宇なり。依りて慶應を當寺中興開山に推す。  
●境内地六百坪、嵐山の南方地家山中腹に位置し、眺望極めて佳なり。堂宇に本堂・庫裡・桂華閣等をも具す。寺寶として風潭木像・同畫像・同所持品及び同華嚴等を藏す。



（寶鐘）（亭南池寺芳西）

●西芳寺（古寺） 京都市右京區松尾神ヶ谷町。  
●臨濟宗天龍寺派。  
●洪羅山と號し、俗に古寺と呼ぶ。初め西方寺と稱す。

●西芳寺（古寺） 京都市右京區松尾神ヶ谷町。臨濟宗天龍寺派。洪羅山と號し、俗に古寺と呼ぶ。初め西方寺と稱す。

●西芳寺（古寺） 京都市右京區松尾神ヶ谷町。臨濟宗天龍寺派。洪羅山と號し、俗に古寺と呼ぶ。初め西方寺と稱す。



唐の天井は所謂土天井なり。之に南壁せる茶室は所謂土足座式茶席に擬す。各部の構造悉く清漢様模倣し形式頗る瀟灑、装飾極めて清麗、桃山期精神の一面を表現せしものと云ふべく、當代に於ける奇抜なる茶室建築として看過すべからず。待合及び廊下は桁行三間、梁間一間、單層、屋根切妻造、檼瓦葺、本家の西面南端より西方に横ける狭長なる一屋にして、西端一間一面を待合に充つ。其西壁及び南壁に接して縁を作り前面を開放して前に菅束石あり、飛石之より北方に連りて本家茶室前に及ぶ。廊下は待合の東に横き、本家茶室南隣に至る。構造様式悉く簡素清麗、本家と合して作せる形態平面頗る奇抜巧妙、本邦茶席建築中比類なき遺構とす。湘南亭と相對して潭北亭あり、近年眞清水藏六の復興せる茶室なり。又近く千宗淳をまつれる少庵堂あり。寺寶中、絹本着色夢窓國師像(白費)一幅は國寶に指定せられ、其他磁石、東洋、隱元等の筆蹟・急須和傘西芳寺縁起一巻等を藏す。尙ほ寺内に黄金池十境・洪隱山十地等ありて、景観殊に優れたり。

●開山忌(三月三十日)。  
●臨濟宗天龍寺派。

●衣笠山と號し、俗に谷の地蔵と云ふ。此地もと天台宗の一寺ありしが、貞治六年、細川頼之其廢址に新一字を創建し、夢窓疎石の法弟覺性周峽を之に請す。周峽即ち疎石を以て開山に推し、自ら第二世たり。後ち天龍寺に屬す。應仁の兵燹に諸堂宇概ら滅上す。當寺も龍濟軒、延慶軒の二院を存せしが、今は其廢宇を止むるのみ。

●本堂に地蔵尊を安置す。境内に細川頼之、周峽等の墓あり。

●淨住寺 京都市右京區山田堂宇町。

●黄髮宗。  
●聖山と號す。當宗別格寺たり。當寺草創に關し寺傳に、弘仁年間、嵯峨天皇の勅願によりて、圓仁之を開創すと云ひ、又一説に洛西柏原常住寺(野寺)の廢址に就きて建立し寺號を改めしものなりと云へど詳ならず。弘長年間に至り、聖室中納言入道定然、西大寺觀音を請じて之を中興し、以て戒律弘敷の道場とす。爾來、聖室家の菩提寺たり。正慶二年の圖に據れば、本堂は東向にして、其前面に鐘樓、鼓樓、西方に舍利殿、其南北に二基の寶塔を建て、南に四十九院、其東方に戒壇、其他食堂、鐘守堂等を具し、舍利殿には道宣所傳の内牙舍利を安置すと云ふ。元弘、正慶、弘治數度の兵燹に罹りてより、寺門頗る荒廢に歸し、當寺の舍利、奉獻天候、銅燈臺等は之を洛北報恩寺に傳へたり。元祿六年、觀牛道機、聖室大納言孝重の援實を得て大いに伽藍僧堂を起し、改めて現堂に歸す。  
●本堂・開山堂等の堂宇を具す。本尊如意輪觀世音は觀牛師傳得の天然佛なりと云ふ。開山堂は本堂後方小丘上にあり、其下に悅山碑を存す。寺寶には聖室氏及び中興觀音關係のもの多く、就中、感身覺正記三巻は觀音自傳の古寫本にして、同傳研究の風強なる資料たり。

●淨土宗。

●淨土宗。  
●堂(桂地蔵) 京都市右京區桂春日町。

●俗に桂地蔵と稱し、洛陽六地蔵第五番札所たり。地蔵堂を本堂とし、北隣して樂師堂あり。本尊地藏菩薩は保元二年七月二十二日、水輪の里より分移せしもの、一と云ふ。

●西山別院(久遠寺) 京都市右京區川島北裏町。

●眞宗本願寺派。  
●久遠寺と號す。當派京都四箇別院の一なり。天曆年間、最澄の開創に係ると傳へ、後ち久しく廢絶せしが、本願寺三世覺如の父覺惠寺宇再興の志ありて果せず、覺如其の遺志を承けて、正和三年、遂に其工を發へ、以て舊寺號を存して久遠寺と號す。元亨元年、後醍醐天皇勅して眞宗の道場とし正慶二年二月、光嚴院御願所の繪旨を賜ふ。元弘三年六月、護良親王令旨を奉じ、大谷本願寺と共に覺如之が留守職を兼帶す。延元元年、大谷崩壊亡するや、翌年覺如當寺に住し本願寺、改邪抄等を撰す。同三年、從覺亦茲にありて末燈抄を重寫す。正平六年正月十九日、覺如寂するや、即ち本寺に歸る。應仁以後、京師頗る亂れて、當寺亦其兵燹に罹り荒廢甚しかりしが、水鏡年間に至り、法林寺開基周善大いに保護を加へ、武將の歸信亦淺からず。後ち十三世眞如之が再興を企てしも遂に成るに至らず。寛文十年八月、法林寺第四世善益、寂如の命を受けて水鏡、元龜、慶長の官符及び寺地を本山に還附し、延寶元年、再興の工を起し、次で本堂、鐘樓、香檜等竣工す。天和三年、妙春尼地を寄せて境内を擴張す。寶曆元年八月、十七世法如本山本堂を當寺に移し、本寺の舊堂は之を黒谷慈覺寺に寄す。爾後漸次鐘樓、書院、接待所、集會所等を増修せり。文化八年、觀賢五百五十回忌に方り、十九世本如本山錦壽殿を當寺に

移建し、嘉永二年、覺如五百回忌に際し、二十世廣如更に表書院を改築す。明治三十二年、二十一世明如諸堂大改修を加へ、寺觀大いに葺まり、以て現在に及ぶ。

●境内地四千七百坪、堂宇に本堂・輪書所・大庫裡・小庫裡・玄關・廣間・書院・講員詰所・茶所・鐘樓・鼓樓・表門・裏門・中門等を具す。寺寶として後醍醐、光嚴兩天皇繪旨・護良親王令旨・豐臣秀吉書翰等を藏す。

●金剛寺(矢田) 京都市東山區三條通白川橋東入。

●淨土宗。  
●一切經山と稱し、もと東山阿彌陀堂一切經谷にあり、僧行基之を開創し、自作の阿彌陀如來を本尊とす。傳ふ。一に出世の彌陀又は出陣の彌陀として著聞す。應仁の兵火に阿彌陀堂表上せし際、本尊の首部谷間に埋め置かれしが、後ち一老尼淨財を慕り彌陀身を建立し、知恩院境内に安置すと云ふ。慶長年間現寺地に堂宇を再興し以て今日に至る。

●東山別院(佛光寺別院) 京都市東山區栗田口町。

●眞宗佛光寺派。  
●一に東山別院所、佛光寺別院所、佛光寺別院等と稱す。開創年代詳ならず。明和五年、阿彌陀堂を建立し、惠心僧都作と傳ふる阿彌陀佛像を安置す。  
●境内別院に觀賢聖人眞骨並びに肉附齒牙を、足利尊氏寄進に係る舍利塔に收めて奉安す。阿彌陀堂の南方に梵釋閻羅四門律師の碑あり。本堂内陣天井に掛けの百花百草圖は石田幽江、徳の松、芭蕉、孔雀、麒麟の圖は狩野水龍の筆なりと傳ふ。

●青蓮院(粟田口) 京都市東山區神宮道三條南入。

●天台宗。  
●延暦寺三門跡の一にして、初め十樂院と號し、世に之を粟田口御所と稱す。天養元年十二月、僧行玄(藤原實男)の開創に係る。仁平三年十月、鳥羽天皇勅して院の御所に准じ、殿舎を造營し、第七皇子覺快



(景前院蓮青)

法親王を入寺せしめ、青蓮院と號す。青蓮院の名はもと觀山に存せし坊名に因むと云ふ。爾來歷代尊貴の枝葉法統を繼ぎ歴聖の御尊信厚く天台宗三昧院流の本寺として、寺運隆盛を極めたり。建久、正治年間、僧慈圓(慈覺)住持し、大いに宗風を振興す。養和三年三月、觀賢九歳にして慈圓に就きて得度せしが、爾來本願寺歴代の宗主本院に於て制度するを例とす。元久二年四月、後鳥羽上皇本院の地を獻じて最勝四天王院を建立し、殿堂は吉水に移し吉水坊と稱せしが、貞應元年舊に復し、嘉祿三年五月、殿堂及び吉水坊を現地に移築

せり。南北朝の頃伏見天皇の皇子尊圓法親王本院に住し給ふ。親王最も入木道に長ぜられ、世尊寺行房、其弟行尹に師事し、更に上代の書法を參酌して一派をなす。青蓮院流或は尊圓派と稱せられ、之れ後に江戸時代に入りて専ら行はれし御家流の源をなすものなり。應仁年間兵火に罹り諸堂宇烏有に歸す。文明以來漸次修築し、徳川氏亦堂宇の建造に力を致せり。即ち東山豐國社の神供所を本堂に、伏見城中豐臣秀吉裝束の室を白書院に充て、其他櫻町天皇より尊法親王に賜はりし小御所、東福門院の舊殿等、後光明天皇の舊殿、中和門院の舊門等を移建せり。寛永年間、南無知恩院の建立に當り、其境内の一部を之に割く。天明八年皇居表上し、光格天皇暫く本寺を皇居とし給ふ。明治初年住持尊法親王復御して久遠宮と稱せらる。同二十六年九月、本堂、書院、庫裡、玄關等焼亡せしが、其後朝廷の賜金其他勸財を以て再建し、同二十八年四月竣工して舊觀に復せり。舊境内三十一町、寺領千三百三十二石を有す。  
●現に境域九千六百六十八坪なるも、舊時は五萬八千五百九十九坪。南無知恩院より將軍塚に至る一帯の地を占むる廣大なる地域を領したりと云ふ。所在の堂宇は監殿(本尊)・靈驗光堂・白書院・小御所・義華殿、法香殿・好文亭・富春亭・御成門及び觀賢聖人植髮堂等なり。寫殿は明治二十八年の再建にして、中央には惠心僧都作と傳ふる本尊阿彌陀如來、左右に慈圓、觀賢の佛像を安置す。其濱松の間なる襖貼付十二、壁貼付二、月襖貼付三の金地着色瀟灑圖十七面は國寶に指定せらる。桃山風の金碧富麗なるも、構圖全く他と異り、一種閑雅なる趣致に富む。筆者不明なるも、京狩野派の手になりし事疑ひなきが如し。寫殿の東南に靈驗光堂ありて靈驗光佛を安す。靈驗光法は天台四箇大法の一に



して、皇室安泰、鎮護國家の秘法とし、古來天變地妖、玉體の御不例等に動を奉じて祈禱せりといふ。庭園は相阿彌の築く所と云ひ、夙に名園の聞へ高し。植髮堂は北隣に在り、觀覽九歳の童形植髮像を安置す。眞宗門徒の參詣多し。寺寶中絹本着色不動明王二童子像一幅・同寶賢延命像一幅(以上二幅恩賜京都博物館寄託中)・紙本墨書後光天皇宸筆御消息(九月十日)一幅・紺紙金泥光格天皇宸筆大澤頂光明眞言(文化十歲次癸酉十二月二十二日)一卷は國寶に指定せらる。就中、不動明王二童子像は、高野の赤不動、三井寺の黄不動と共に青不動と稱し不動の三絶として世に喧傳せらるる所、美々たる迦維羅國中に、羯迦羅、制迦迦の二童子を従へ劍束を執りて岩上に坐す青身の不動像にして、美光の朱丹と、明王の青黒身の巧みなる配色は愈々本圖の雄偉感を増大せしむ。然も細部の畫法何れも纖細優麗、よく藤原期佛畫の特質を表せり。此外、醍醐御宮繪、法親王及び藤氏歴代消息、狩野諸氏の筆畫等寺寶極めて多し。尙ほ院の南、道路の東側に、花園天皇十樂院あり。

一心院

京都市東山區新橋通東大路東入。

●淨土宗。●群仙山と號し、當宗別院にして、所謂捨世地の本寺たり。天文十七年、三蓮社總持の開創に係る。稱念は武藏品川の人、大永元年、九歳にして出家し、増上寺第七世觀雲の門に入り、吟霜と稱す。後稱念と改む。觀雲寂後、下總國飯沼弘經寺第七世觀雲に從ふ。其後、武藏國岩槻淨安寺に住し、大いに念佛の法門を開闡す。天文十三年、東海道を巡歴し、同十六年入洛す。時に當國鞍馬市原黑瀬某之に歸依し、市原野邊に草庵を結ぶ。吉水禪房是れなり。爾來、教化大いに揚り、洛中の貴賤道俗靡然として之に歸向す。教風漸く盛大ならんとして、舊佛敎徒の感懐、に集り、爲に建永二年三月專修念佛停止の令出で、源空門下或は斬せられ、或は遠流に處せらる。源空また承元元年二月配所に赴けり。同三年八月、恩免に浴して攝津郡尾寺に入り、建永元年十一月、遂に入洛せしむ。吉水の諸坊既に荒廢に歸したれば、青蓮院門主慈圓の沙汰として、大谷山山南禪院に入り爾來此處に止住す。之を大谷禪房と稱す。現勢至堂の地即ち其舊址なり。翌二年正月二十五日八十歳にして此地に示寂す。門弟等傍に廟堂を建て以て遺骸を納む。示寂の後、念佛門徒々傳播せしに依り、嘉祥三年六月、山門の大衆暴暴して草庵を破却し、其廟堂を破かんとす。依りて門弟等私に之を廢壊に移し、次で西山聖生野に茶毘せり。文曆元年、弟源智奏請して舊地並に諸堂を復し、以て源空の遺骨を移安す。時に四條天皇勅して華頂山、知恩院、大谷寺の三額を賜ひ、永世勸願所の繪旨を下し給ふと云ふ。以て現知恩院の起原とす。其後、源空門下、鎮西の聖光(鎮西流)、西山の善慧(西山流)、長樂寺隆寛(長樂寺流)、九品寺覺明(九品寺流)等各其所解を立て、正義を主張す。源智の法弟源寂、聖光附法の弟子眞忠(記主禪師)に歸して鎮西義に依附せしより、本院亦其流に屬する事となりぬ。源智以下道宗、道隆、覺生、觀明、了信、如空と次第せしが、第九世眞忠、後伏見天皇の勅を奉じて源空の傳を總修すと云ふ。所謂勸修御傳是なり。第十二世野阿、京師兵禍多きを厭ひ、慶安三年、朝に奏して源空の影像(自作三幅内の一)及び御傳の副本を護持し、大和富麻呂に退隱し往生院を創して之に居る。現に同寺眞ノ院と稱するものは是なり。永享三年、當院初めて回縁に驅るや、足利義教

藥院

京都市東山區新橋通東大路東入。

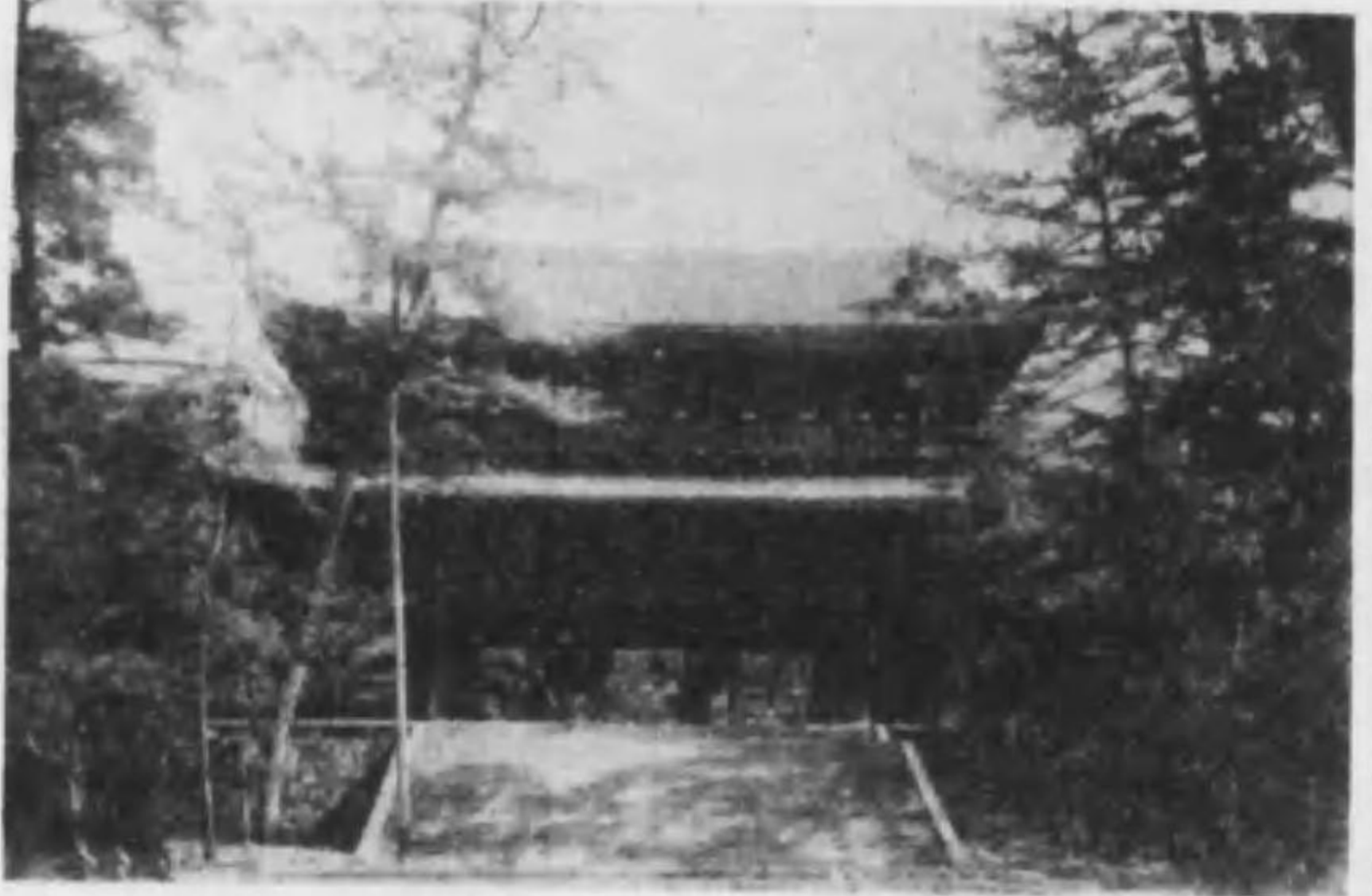
中の地に一字を建立し、稱念を請じ、專稱庵と號す。聖十七年青蓮院宮尊法親王より、寺城を賜はりて當院を創建し、青蓮院高麗堂安置の阿彌陀佛を移して本院とす。後世、自ら一派をなして一心院流(捨世地)と稱し、百有餘寺の門徒を統ぶるに至れり。永祿八年四世登樂天皇の代に、青蓮院宮より御供養料十八石を賜ふ。華頂宮第二代尊法親王、本院を以て永く華頂宮御菩提所と定め給ひ、爾後第六代尊法親王に至る迄、何れも當院内に歸り奉り、其御供養料十五石を受く。華頂宮第四代尊法親王、一心院の額額を賜ふ。寶曆二年、稱念二百回忌を籌むに當り、第五代尊法親王より白米一石寄進せらる。天保九年、第六代尊法親王法親王群仙山の額額を下賜せられ、以後、これを當院山號となす。維新の際、織田信長寄進の朱印二十三石餘、粟田青蓮院宮御供養料十八石、華頂宮御供養料十五石を土地し、一時寺門退轉せしむ。第五十六世常樂諸基、第五十七世延慶隆教の二人、銳意復興に努め、四方に淨財を募りて堂宇其他の經營を圖り昭和七年二月、書院改築の工に著す。

知恩院

京都市東山區新橋通東大路東入。

●淨土宗。●具さには華頂山知恩院大谷寺と號す。宗祖源空(法然)往生の地にして、圓光大師二十五靈場第二十五番及び洛陽四十八願所第二十四番の各札所、現に淨土宗本山たり。文曆年間、源空を開山とし、其法弟觀房源智堂字を創立する所なり。高倉天皇安元元年春、源空專修念佛を主唱し、比叡山黒谷の地を出で、暫く西山廣谷(現樂生光明寺)に住せしが、後東山吉水の

邊に草庵を結ぶ。吉水禪房是れなり。爾來、教化大いに揚り、洛中の貴賤道俗靡然として之に歸向す。教風漸く盛大ならんとして、舊佛敎徒の感懐、に集り、爲に建永二年三月專修念佛停止の令出で、源空門下或は斬せられ、或は遠流に處せらる。源空また承元元年二月配所に赴けり。同三年八月、恩免に浴して攝津郡尾寺に入り、建永元年十一月、遂に入洛せしむ。吉水の諸坊既に荒廢に歸したれば、青蓮院門主慈圓の沙汰として、大谷山山南禪院に入り爾來此處に止住す。之を大谷禪房と稱す。現勢至堂の地即ち其舊址なり。翌二年正月二十五日八十歳にして此地に示寂す。門弟等傍に廟堂を建て以て遺骸を納む。示寂の後、念佛門徒々傳播せしに依り、嘉祥三年六月、山門の大衆暴暴して草庵を破却し、其廟堂を破かんとす。依りて門弟等私に之を廢壊に移し、次で西山聖生野に茶毘せり。文曆元年、弟源智奏請して舊地並に諸堂を復し、以て源空の遺骨を移安す。時に四條天皇勅して華頂山、知恩院、大谷寺の三額を賜ひ、永世勸願所の繪旨を下し給ふと云ふ。以て現知恩院の起原とす。其後、源空門下、鎮西の聖光(鎮西流)、西山の善慧(西山流)、長樂寺隆寛(長樂寺流)、九品寺覺明(九品寺流)等各其所解を立て、正義を主張す。源智の法弟源寂、聖光附法の弟子眞忠(記主禪師)に歸して鎮西義に依附せしより、本院亦其流に屬する事となりぬ。源智以下道宗、道隆、覺生、觀明、了信、如空と次第せしが、第九世眞忠、後伏見天皇の勅を奉じて源空の傳を總修すと云ふ。所謂勸修御傳是なり。第十二世野阿、京師兵禍多きを厭ひ、慶安三年、朝に奏して源空の影像(自作三幅内の一)及び御傳の副本を護持し、大和富麻呂に退隱し往生院を創して之に居る。現に同寺眞ノ院と稱するものは是なり。永享三年、當院初めて回縁に驅るや、足利義教



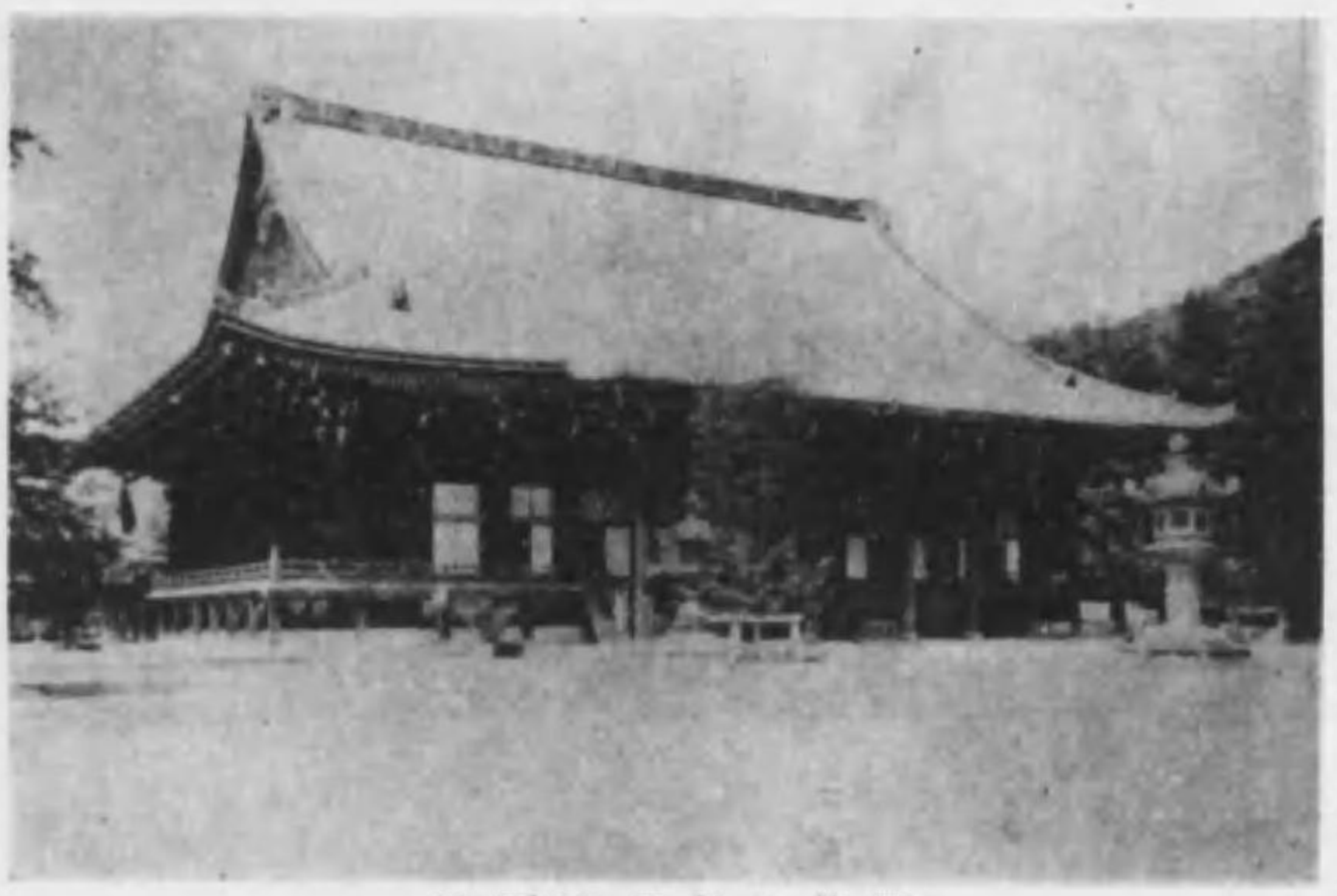
(寶圖)(門山院恩知)

即時追尊の令を下す。第二十世源空、人別一文宛四十八萬人を勧進し、數年を出でずして、佛影堂舊に復す。嘉吉二年、大聖院堂東より上洛し、初め百萬遍を興し、寶徳二年當院二十一世となる。講學布教以て

鳥有に歸す。因て額を近江國伊香立に掛け、一字を創して假稱し、新知恩院(別項參照)と稱す。長享二年九月、青蓮院尊法親王知恩院に敷地山林を還附し、令旨を殊琳に下して舊跡を再興せしむ。一に文明十餘年足利義政再興すと云ふ。延徳三年七月、管領細川政元所領安堵の狀を寄す。永正十四年八月、當院また回縁に攝りしが、第二十四世源空同元年十二月、東福寺山内萬壽寺の堂宇を移建して、阿彌陀堂となす。第二十五世超譽存牛學徳を以て開へ、紫衣の繪旨を賜ふと云ふ。大永の初年、百萬遍の住持傳譽、權貴に依附して自ら本山に遷り、當院を其別院に准せんせしが、青蓮院尊法親王の御庇護に依り、事當院の利に歸す。當院の規格、に定まる、同四年正月、後柏原天皇風詔を下し、開祖源空の御忌を修せしめ給ふ。第二十七世德樂光然の代、享祿三年御影堂を再興す。後奈良天皇嘉祥して知恩院、大谷寺の勅額を賜へり。天文十七年、總持稱念當院の南に一心院(別項參照)を創め、大いに本院の教化を扶く。天正元年、織田信長、足利義昭と隙を生ずるや本院を其本陣に充つ。時に白銀五百枚、鳥目五百貫文、米三百石を寄せ、臨時諸堂の修葺料に充つ。同年十月、愛宕郡百萬貫文の地を寺領に寄せたり。同三年九月、正親町天皇所謂破破の繪旨を下し本院を以て一宗の本寺とし、門徒衆徒の香衣執奏を專管せしめらる。同七年二月、織田氏更に寺領百石を加増す。豐臣氏に至り、同十三年十一月、寺領百九十石の朱印狀を附し、翌年十一月、二百石、文祿二年九月更に二百四十六石七斗二升に加増す。同十九年十二月、青蓮院領地山林の一部を得て境域を擴む。徳川家康厚く當院を崇信し、超譽曾住の由緒を以て慶長八年十月寺領七百三十石餘を給し、又生母傳通院の菩提の爲め、大いに境域を擴張し大殿諸堂を整繕せしむ。即ち現今



の中下二段に存せし青蓮院の領地、及び常在光院、太子堂、金剛寺、觀音廟所等を悉く他に移し、中段に大御影堂、衆會堂、大小方丈、大小庫裡等を造營し、下段には塔頭子院を設く。茲に於て富山の境域、上中下三段より成り、北は青蓮院に隣り、西は白河筋に沿ひ南は圓山及び祇園神廟に接し、東は華頂山を負ふ廣大なる地を占むるに至り、前後七年を費して遂に諸堂落成す。同十二年、家康の奏請により、當院に宮門跡を置き、天和五年九月、後陽成天皇皇子其輔親王(法名其純親王)入りて其一世となり給ふ。華頂宮即ち之れにして家康門跡領として千四十五石を奉る。爾來法親王相繼いで一山を管し、愛宕一宗の首座となり給へり。これより先き元和三年將軍秀忠、三門及び經藏を經營し、宋版一切經五千六百餘卷を納む。同六年、秀忠武藏國天徳寺城營を第三十世に補す。これより從來青蓮院門首によりて定まりし住持の連退は台命による事となれり。寛永十年正月九日、方丈より火を出し、阿彌陀堂、勢至堂、三門、經藏のみを残して他悉く烏有に歸す。同年四月即ち將軍家光令を出して再興せしむ。同年十二月工を起し八年にして御影堂、衆會堂、大小方丈、大小庫裡等悉く落成す。結構意匠に倍進し、壯麗を極む。現今の諸堂即ち之なり。第三十八世萬無圓山の地を得て延寶六年三月大鐘樓を築く。第四十三世應譽、寛永七年阿彌陀堂を山上より大殿の西に移し、廟堂を修理し、拜堂を立つ。茲に於て富山の境域結構ともに完成を告ぐ。寛政三年の調査に依るに寺域すべて四萬五千七百五十餘坪を有すと云ふ。新くて皇室の殊遇と幕府の外護とに依り、近世以降寺運隆盛を極めしが明治維新に際し、尊秀法親王復舊せられ、こゝに知恩院の宮廟絶す。時に廢佛毀釋の聲盛んにして、寺地の一部及び寺領公收せられし、第七十五世敏定、第

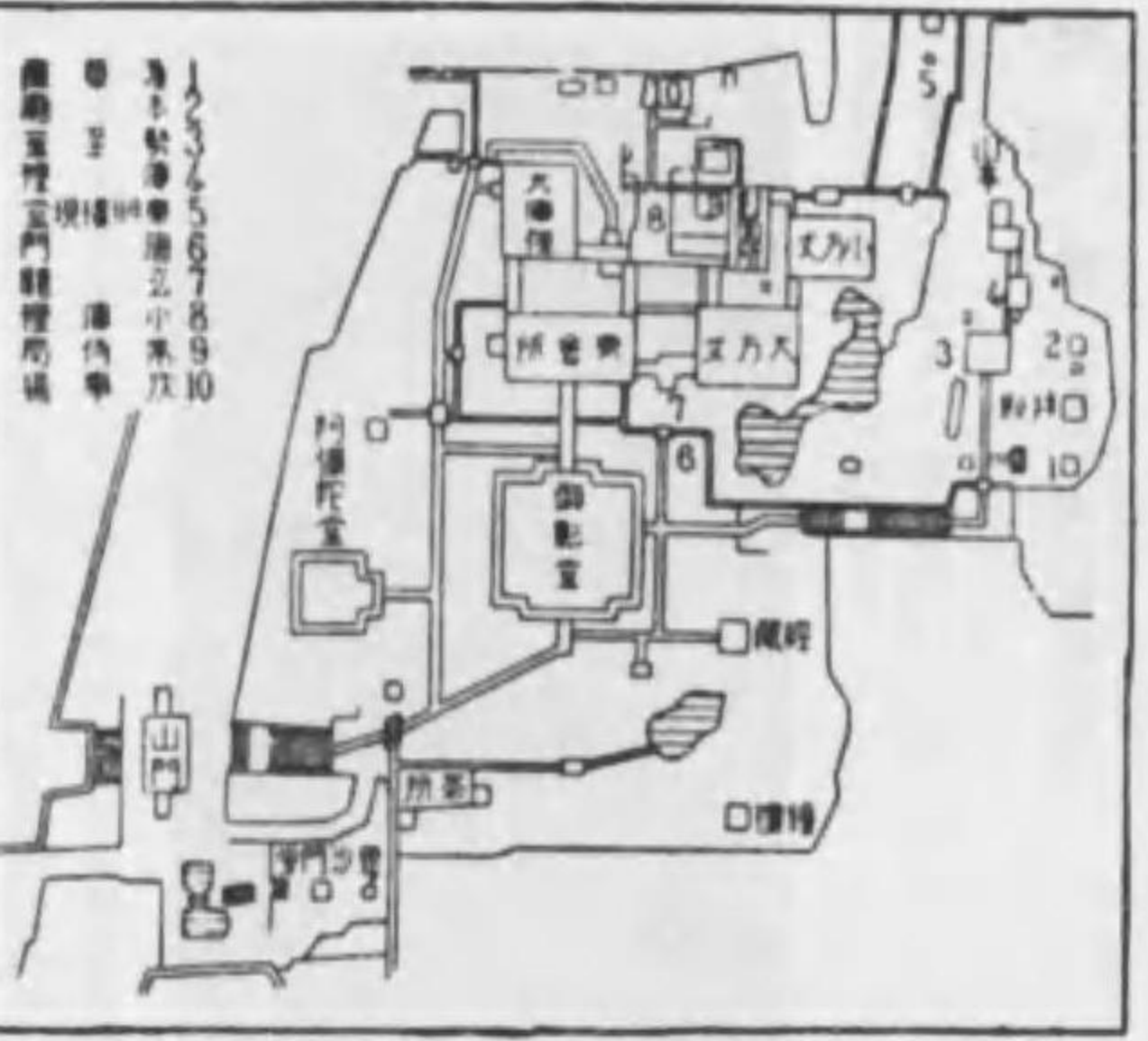


(實蹟)(院影御院思知)

七十六世行成等の名僧よく寺運の維持と宗勢の發展に努めしかば、教運愈々興隆せり。次で從來の備前白旗派名を廢し、單に淨土宗を公稱す。明治九年西山の各派獨立し、同十一年、全國を東西に分ち一宗兩管長制を設けり。同十八年、東西兩部を廢し、五本山各一年交替管長を設けしが、同二十年圓宗會議の後之を廢し、一宗統治の法を確定し、富山他四大本山を總稱し、淨土一宗の總本山となれり。明治三十六年、阿

彌陀堂新築の工を起し、爾來諸堂の修復に努め、漸次其莊嚴を完成し、洛東華頂山一大偉觀を現出す。現に宋寺七千二百二十二箇寺、教會所二百五十七を統べたり。寺境華頂山西麓に在りて四萬四千五百三十三坪の地を占め、老松鬱蒼として東山三十六峯の翠色を草むる淨境なり。地勢高峻よ、京洛の市街を一眸中に收めて臨望殊に見るべし。新橋通を真東に突當れば石段上に三門あり。三門(國書)は五間三戸の樓門、屋根入母屋造、本瓦葺の建築にして天和五年徳川秀忠の建立に係る。初層は本繁垂木二手先結組、上層は眞垂木三手先結組にして全懸梁間六間半、桁行十四間半、端々堂々たる禪刹風の大樓門なり。夙に我國三門中最大なるものとして著はる。階上は極彩色にして、中央に寶冠釋迦牟尼佛坐像、左右に善財童子・須達長者・十六羅漢木像を安置す。樓上掲ぐる所の華頂山の扁額に寶元天皇の宸翰なり。是より石階數十段を登りて御影堂(國寶建造物)に達す。一に本堂又は大殿と稱し、桁行十一間、椽間九間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺、同じく寛永十年徳川家光の再建にして、外形莊重、江戸初期に於ける佛寺建築の代表的なるもの、一なり。内陣中央の宮殿に圓光大師坐像(丈二尺一寸傳自作)、帝道圓昌の木牌を奉安す。本堂東南屋檜下の傘は防火の咒と云ひ、世に知恩院の傘と稱して喧傳せらる。これより方丈、衆會堂に至る間の渡廊所謂張張りにして、歩めば恰も鶯の啼ぶる如き聲音を發す。衆會堂は俗に千疊敷と稱せられ、本尊阿彌陀如來を安置す。祖師堂の西に阿彌陀堂あり。明治三十六年起工、同四十三年落成する所にして、椽間大谷寺の額に、天文年間後奈夏天皇より賜ふ所なり。衆會堂の東側に大方丈及び小方丈存す。本堂と同じく寛永十年の建立に係り、共に現に國寶建造物なり。大方丈は桁行九間、椽間六間、

單層、屋根入母屋造、椽皮葺の建築にして玄關(桁行二間、椽間一、單層、屋根向唐破風造、椽皮葺)步廊(桁行十間、椽間一、單層、屋根切妻造、本瓦葺)を附し、小方丈は桁行五間、椽間五間、單層、屋根入母屋造、椽皮葺にして、桁行七間、椽間一、單層、屋根切妻造、椽皮葺に成る步廊あり。是等も舊二條城内行幸殿の一部なりしが、徳川家光之を移建せしむと云ふ。内部は現二條城と同じく書院造、上段の間付、襖畫は狩野與以、尙信、信政等と傳へられ、金襴彩色、結構善美を極む。大方丈玄關に面し唐門あり。四脚門、屋根入母屋造、前後唐破風椽皮葺の建築、同じく寛永十年の造立にして又國寶建造物なり。此外の國寶建造物に御影堂東南の經藏(方五間、單層寶形本瓦葺)及び山上大谷禪坊舊址にある勢至堂(七間四方、單層、屋根入母屋造本瓦葺)あり。經藏は、元和二年の建立にして形式整然たる江戸初期禪宗建築の傑作、内に宋版一切經を藏す。勢至堂は上述の如く南禪院の故址富山の根元大谷禪坊の後に於て、現に本地堂と稱せらる。現在の堂宇は後柏原天皇の勅建と傳へ、清梵なる趣致に富む。本尊は源空の本地勢至菩薩なり。其他、所在する堂宇には權現堂・大庫裡・小庫裡・大鐘樓・小鐘樓・廟堂・拜堂・一心院(別項參照)・奉平亭・鎮守堂・表門・裏門・黒門(古門)・得淨明院(當宗別格寺)等あり。塔頭支院は黒門總門間に眞正院(舊稱清新軒)・先求院・舊學林・福壽院(舊稱松壽院、靈雲院)・清徳院・松宿庵・通照院(舊稱西養軒)・常務院・信重院・保徳院・忠厚院・入信院(舊稱智相院)・光照院等あり。黒門南に崇奉院(別項參照)。通照院の後方に光玄院、後方櫻馬場に沿ひて樹昌庵、紙成院(舊號九間院)・徳林院・源光院(舊稱寶宿庵)・眞寂院(舊稱九勝院)等あり。富山古來一宗の本寺、宮



(圖略院思知)

門跡として、朝暮各方面の崇敬を蒙れば、諸所の靈寶什器極めて多く、數へて總計二千五百餘點の多きに上れり。今其中國寶に指定せらるるは紙本墨書法然上人繪傳四十八卷・絹本着色阿彌陀二十五菩薩來迎圖一幅・同觀經變茶羅圖一幅・同紅玻璃彌陀像一幅・同阿彌陀經變茶羅圖一幅・同法然上人繪傳一卷・同毘沙門天像一幅・同地藏菩薩像一幅・同純李園金谷園圖二幅・蓮花圖二幅・同牡丹圖一幅・押出鍍金三尊佛表啓一卷・同天平年間寫經生日記一卷・同大權炭經(卷三)一帖・同上宮聖德法王帝說一卷の十七點なり。以下、これを略せん。法然上人繪傳は傳へて畫は土佐吉光、詞は伏見、後伏見、後二條の各天皇及び尊圓親

王軍八軍に成り、探者は叡山横川の嵯昌(後の知恩院第九世)なりと言へり。後伏見天皇の勅修なるに依り勅修御傳と云ひ、卷數に従ひて四十八卷傳等の別稱を存し、富山圖一の重寶たり。詞書の一葉ならぬ同時に繪圖又數人の手に成りしなるべく、初め二三卷殊に優秀なり。全體として畫法稍々一種の型に陥ひる點なきしもあらぬも、尙ほ生彩に富み、且つ現存繪卷中尤も清麗なるものとして、繪畫史上注目すべき作品なりとす。紙葉織目毎に足利尊氏の花押存せり。阿彌陀二十五菩薩來迎圖は、知恩院の早來迎と稱し、夙に來迎圖中の異相として著名なり。彌陀及び二十五菩薩が雲に乗じ行者の庵室をさして疾風の如く飛來する圖にして、畫風上明かに鎌倉中期以後の作なり。藤原期の整然たる來迎圖が、當代に入りてかくも變化せし根柢に活動的な鎌倉時代精神の脈うつものあるを看過すべからず。觀經及び阿彌陀經變茶羅圖は、共に當座變茶羅の模寫にして、室町期の作に係る。紅玻璃阿彌陀像は、普通の朱文金紋、右肩を偏袒して定印を結びし金剛界の彌陀にして、題名の如く紅玻璃彌陀の儀軌に依らず、周圍に種字を著しし一種の阿彌陀變茶羅なり、畫法宋畫の影響を受けし鎌倉新派にして、彩色頗る鮮麗なり。毘沙門天像はこれ亦毘沙門天變茶羅にして、鎌倉期の作に係る。法然上人繪傳は前記四十八卷繪傳と全く別種のものにして、一に黒谷上人繪と云ひ、法然が踏蓮の奇蹟の段より佛尾寺引聲念佛の段に至る各觀畫十三段を存す。前の繪傳に比し、其描法自由粗野なれども、筆力生新にして觀畫共に頗る簡素なり。卷末に釋弘願の署名あり。弘願の名は東本願寺藏觀變人繪傳貞和二歳の奥書にも見ゆ。以て創作期察すべし、地藏菩薩像は、藤原末期の作にして、形相他に類なき珍奇なる圖なり。純李園金谷園圖は、この二名圖に於け



る案を掲げし巨幅にして、二幅共に明代最秀の畫家として著名なる仇英の印あり、畫風細緻巧麗、技法又見るべし。蓮花及び牡丹の兩圖又支那畫にして前者は宋畫、二幅共に紅蓮を描きて種々な趣致に富む。後者は明初の院畫なり。三尊佛二面は、天平期の雄作、菩薩處胎經は、第二帖に大統十六年の識語ありて、珍重すべき古寫經なり。大唐三藏玄奘法師表啓は、玄奘の表啓を載録せし希觀の古抄本にして、慈惠寺三藏傳と共に玄奘傳研究の貴重なる資料なり。大權威經は、咸亨四年蘇慶節造の識語あり、初唐寫經の一として注目せらる。尚ほ卷首十四行は後補に係る。上宮聖德法王帝説は、もと法隆寺に傳へられしが、後ち富院に歸せしものにして、同本の古寫本として夙に著名なり。此外、寶物、古文書の重要なもの二百餘點を數ふ。境内附近東山の各跡地にして、幾多の史蹟名跡に富む、西山門より東、東大路に至る間の櫻馬場は櫻花多く、又四時眺望に富む。觀覽臺跡は現樂臺跡の地にあり、今其跡に小塔を存す。

仲源寺(目疾)

●淨土宗。●寺傳に依れば、佛師定朝、丈六の地藏像を作り、四條橋の東北の地に一小堂を營みてこれを安置す。これ本寺の遺蹟にして、後ち堂舎大破し、尊像久しく河原に露坐ありしに依り、時人塵の地蔵と稱す。後細河天皇安貞二年、加茂川氾濫して市街の被害少なからず、時に中原爲兼、防鴨河使として、之が救済に努めしが、

●御忌大會(四月十九日—二十五日)、高部會(十月十九日—二十五日)、佛名會(十二月六日より三日間)。



(門表寺源仲)

安養寺

●時宗。●正法寺末にして、延暦年間、最澄の開創と云へど詳ならず。往時天台宗の別院たりしが建久年間、慈圓(慈圓之を中興して青蓮院に屬せしむ。永徳年間、遊行阿闍梨に住す。爾來靈山正法寺に屬して時宗となす。寺傳に法然の作房吉水庵室址なりと云ひ、名勝類

と推定せられ、現に國寶なり。●節分會(二月)、地藏會(八月二十三日)。

大谷別院(東大谷)

●眞宗大谷派。●東本願寺の祖廟にして俗に東大谷と稱す。慶長七年、教如東本願寺を創立し、祖廟を本寺の西南隅に築き宗祖親鸞以下歴代の遺骨を納めしが、承應二年九月十四日塚如、今の地に移す。敷地はもと栗田口青蓮院の舊領に屬せしが、徳川家綱之を寄附すと云ふ。寛文十年八月二日、第十五世常如改築の法要を修す。元禄十二年七月、第十六世一如佛閣の再建を企て、同十五年三月、第十七世眞如の時落成す。延享三年八月、第十八世從如の時、九代將軍家重更に敷地一萬坪を加附せり。此地維新の際土地せられ、次で市有に歸したるものにして、現今の大谷共同墓地之なり。

●寺地圓山公園の南に隣接し、京洛九街一帯の中に在りて頗る風趣に富む。境域四千八百九十坪。本廟は南北五間、東西三間半の石壇にして、上に觀覽臺と傳ふる虎石を安す。松柏鬱鬱として四圍を蔽ひ、最も



(院園谷大)

長樂寺

●時宗。●京都市東山区圓山町。

京都府(京都市)

幽寂を極む。其前に竹皮唐門・雲形透地・燈籠・拜堂・武家墓あり。石階を降りて本堂あり。堂は南面し桁行七間半、梁行七間、内陣の須彌壇に本尊阿闍梨佛像を安置す。安阿闍梨の作なりと云ふ。其左右に今上天皇並に大正天皇の聖尊を奉安、東の脇壇に觀覽臺像、西の脇壇に第二十一世最如畫像、東の餘間には聖德太子及び七高僧畫像、西の餘間には歴代法主雙幅の畫像を安置す。又書院・禮堂・支圓・輪番所・參勤者控所・鐘樓・納骨所・表唐門等存す。又庭園の隅に茶亭あり。嚴如の意匠になり轉々亭と號す。

建仁寺

●臨濟宗建仁寺派。●京都市東山区大和大道通四條下ル。

●臨濟宗建仁寺派。●東山と號し、當派の本山にして、京都五山の一たり。將軍源賴朝、僧榮西に稱依して洛中に禪刹を建てんとし、建仁二年、京都四條以南、五條以北、鴨河以東の地を施入す。榮西、宋の百丈山の規模に准じて經營し、元久二年に至り其工を竣ふ。同年三月宣寺に列

し、年號を以て寺名とす。これ實に京洛最初の禪刹なり。偶々延暦寺の徒の異議を唱ふるに遇ひ、寺内に眞言、止觀の二院を構へ、以て圓密禪戒四宗兼學の地とせしが、第十一世道隆以來専ら禪苑となる。創始以來源氏、北條氏等の歸依厚く、堂房完備し、寺運盛なりしが、寛元四年、康元年、正嘉二年の三度災上す。此年(一號正嘉元年)辨圓遷り住して之を監誓し、佛殿堂、函丈等を復興し規模大いに革まる。建武元年、勅して當寺を以て五山の第二位とす。野應三年十月、佐々木高氏妙法院を燒くに及び當寺の輪藏、圓山塔、瑞光庵等類燒す。同四年八月、足利尊氏改めて當寺を五山の第四位とせり。應安六年春、大學堂、西來院等燒失す。至徳三年七月、足利義滿當寺を以て五山の第三位に晉む。室町時代を通じて、本寺、五山禪林文學の淵藪として斯道の巨擘續出せり。天文二十一年十一月十三日西門、方丈、講堂、法堂、佛殿、山門及び五頭首總那寮等類燒し、同十八日、細川晴元の兵五條口に放火し塔頭十知院、大龍庵等亦悉く延燒して一山の堂宇殆ど烏有に歸せり。天正年間、安國寺惠理名刹の荒廢を傷み、其住持せる安國安國寺の方丈を移して本寺の方丈とし、又東福寺の茶堂を遷して本堂となす。爾來建誓相繼ぎ、稍々舊觀に復す。慶長十九年七月、豐臣氏寺領八百二十餘石を附し、元和元年七月、五山法度制定せられて黃衣地となる。塔頭は其時六十四院を數へしも、天保九年迄に二十九院を失ひ、其後更に十一院を減じ、十院を併合して現に兩足院(別項參照)、靈洞院(別項參照)、禪居庵(別項參照)、大統院、靈源院、西來院、大中華、正傳院、福聚院、清住院、興雲院、久昌院、大昌院等を存するのみなり。現に末寺七十三箇寺、教會設教所二を統ぶ。●境内二萬三千四百七十七坪にして、松杉鬱鬱たり







衣の髪摺は編織を用ひ、藤原前期の遺風を止む。本寺創立の時空也の刻して安置せしもの傳へ、現に國寶なり。此外、寺寶中の國寶を略述すれば、木造運慶造慶聖像二軀(恩賜京都博物館寄託中)は、寺傳に各自作と傳へ、慶派の作に係る鎌倉期の優作なり。刀法頗る寫實的にして後世實像彫刻の一規範となりし點注目すべき作品なりとす。同僧形坐像一軀(恩賜京都博物館寄託中)は、平清盛の官像と傳へ同じく鎌倉期實像彫刻の一優作なり。同天王立像四軀の中、増長、廣目、多聞の三天は同期の作、持國天は鎌倉期の補作にして何れも筋骨秀でて頗る古致に富む。食堂に安置せらる、木造地藏菩薩立像一軀は、古く六波羅地藏堂の本尊にして俗に鬘掛の地藏と稱せられ、右に桐香爐を持ち、左に毛髮を持つ。彩色に切金を混用し、光背は二重輪舟形、頭光は銅鍍金、身光は鐵、左右に鍍金寶相華蓮影の翼を九箇所に出し、各に圓相を嵌め、内に釋迦を中心にして十王の類を配す。(現存せらるは八圓相)藤原末期の二佳作なり。同空也上人像は、康勝の眞作なる事其胎内墨書銘に依りて明かなるが、胸前に鍍金を懸け、左手に撥木を持ち、右手に鹿角の杖をつき、膝以下を露して草鞋を穿し空也の念佛行脚像なり。顔面の寫實性に優れ、殊に稱念の口中より細き針金を出し、其に六體の小化佛を置きしは空也の稱名毎に口より化佛の出入せしもの傳へを忠實に表現せしものにして、全態として洗練されし寫實的刀法に依り聖體空也の全貌を彫出して餘蘊なく、先述の運慶造慶及び平清盛等の各像と共に、鎌倉初期實像彫刻の風尚を知る好例の遺作なり。此の外、同じく鎌倉期の作に係るものに木造地藏菩薩坐像一軀(東京帝國博物館出陣中)、同開闢王坐像一軀・同吉祥天立像一軀等を藏す。尙ほ本堂前に



(寺 運 羅 波 六)

阿古屋の古墳あり、其形狀他と頗る異にし、特に其窆石は飛鳥期以前の石棺蓋と稱せらる。  
●坐敷茶(一月一日、二日、三日)は俗に大福茶と呼ばる。村上天皇御饗重かりし時、空也祈念を凝し、本尊

### 大谷本廟(西大谷) 京都市東山区東大路通五條。

●眞宗本願寺派。眞宗本願寺派本願寺に屬し、宗祖親鸞の廟所たり、親鸞、弘長二年十一月二十八日寂するや、鳥邊野に茶毘して骨を大谷に納む。此地、大谷本願寺通記第一に「大谷は城州愛宕郡洛東山の西麓、鳥邊野の北邊に在り。今の知恩院の地是れなり。弘長二年親鸞を創築す、地は今の勢至堂の山上、元祖空師の靈墳の側なり」といへり。文永九年冬、此墳墓を更に吉水の北畔(現崇奉院の地)に遷し、佛閣を建て、風像を安す。所謂大谷廟堂之れにして、以て本願寺の起原とす。廟は初め親鸞聖人影堂と稱し、敷地を大谷北地と呼べり。此地も小野宮禪念の所有たりしが、禪念之れを妻覺信尼(親鸞女)に讓與す。建治三年十一月、覺信尼は影堂敷地を門弟中へ寄進し、廟堂、影像と共に門弟の共有とせり。弘安三年十月、覺信尼、影堂留守職を覺惠に譲る。覺惠の異母弟唯善異圖を抱き影堂を領せんことせしかば、留守職たる覺惠は門弟等と闘り、正安四年、影堂並に敷地安堵に就て龜山院より宣旨を受けしや、徳治元年、唯善再び横領を企てしにより、覺惠は大谷の地を放れ、翌年二月、假寓に示寂せり。長子覺如(本願寺三世)覺惠の後を襲ひ、延慶元年十一月、六波羅使願の成敗、伏見院の宣旨を蒙り、更に翌年七月、本所青蓮院門主の裁決に依りて唯善を驅逐す。延元元年、大谷の影堂等悉く焼失せしが、同三年十一月に至り、高田の專空等之を扶けて影堂を再建す。寛正六年正月及び四月、山徒の來難ありしが、宗徒井上顯如護衛して遂に變なきを得、顯如は其功に依りて顯如護衛の恩命を受く。元龜二年第六代善了の時、織田氏の難を避り栗田口の大江惣兵衛の家に移し、後ら同地常光

院境内常圓が家の後園に之れを守護したり。此間廟地は全く他の有に歸し、武家須和某の知行所となり、次で豊所伊阿彌が所領となる。天正十七年、顯如の後裔妙祐、京都所司代に訴へて之を舊地に再興することを得、豊臣秀吉其墓地の租を免す。徳川氏初め知恩院境内を擴張せらる、や、本願寺第十二世准如、慶長八年十月奉命を奉じ、廟地を鳥邊野延年寺山に遷し、新に靈墳を築く、之れ即ち現在の地に於て、爾來大谷の稱遂に此山に歸す。元和元年七月、徳川家康先規に準じて護符を授け、寺領合して一石餘なり。爾後、幕府繼代の度毎に例に遵じて護符を改授す。萬治三年、親鸞四百年忌を修するに先ら、佛殿を舊地の西三十歩に營み、祖廟を其背後に遷して大いに之を修補せり。寛文元年二月、九條西光寺の請に依り、墓石を祖廟の外に置くことを許さる。門下の諸墓を置くことを實に此に權與す。此年三月佛殿成る。同二年、顯如及び准如の墳を祖廟の左右に改築す。之れ歴世宗主の墳を築くの蓋焉なり。延寶元年十一月、従來の本尊を西山に遷し、福井別院の本尊を是に安置す。元祿七年、同第十四世寂如新に靈廟を經營す。是より先き墳ありて未だ廟なく、唯瑞垣を以て四方を繞らせり。九月廟宇成りて慶派を修す。同九年新に本尊を刻し、舊像を山科に遷し新像を安す。寛永六年六月、親鸞四百五十年忌近きを以て廟前の拜堂を新構し、九月落成す。慶長八年廟地轉運以來茲に至る百七年、境内の構造殆ど完備す。寛文以來廟外の信徒の墓塔逐年増加し、寶曆年間、既に八千箇所を數へし、云ふ。慶應三年三月、二天門に放火する者あり。佛殿、玄關、對面所、奥書院、輪番所、納骨所、香檜等に延焼し、廟堂、拜堂、茶所、總門のみを存す。同年六月、朝廷再建の諭旨及び白銀七百枚を賜ふ。明治三年十一月佛殿成り、境内を擴張



(廟 本 谷 大)

して千餘坪となり、連枝壇臺の南に約四百坪の新墓地を新設する等凡て舊觀を改め一層の莊嚴を加ふ。  
●皎月池に架せる圓通橋を渡りて石階を上れば唐門あり。之を入れば佛殿・鐘樓・鼓樓・總開所・對面所・御成殿・齋所・茶所・土藏所・講堂所等具はり、更に奥に祖廟・拜殿等あり。  
●覺信尼坐像一軀・歴世宗主連座畫像二幅・龍谷山額・明著堂額等あり。  
●淨土宗。  
●袋中真定隱棲の舊跡たり。袋中、俗姓佐藤氏、陸奥岩城郡の人、永祿八年三月同國龍滿寺存洞に就きて剃度す。爾來、會津の圓住、福島の月空等に學び、更に

### 歡喜光寺 京都市東山区東大路通五條上ル。

●時宗。紫香山と號し、もも本宗六條派の本寺たり。伏見天皇正應四年、宗祖一蓮の從弟聖戒、當國親喜郡八幡に一字を建立し、善導寺と稱せしに創まる。正安元年、九條忠教、厚く聖戒に歸し、京都六條河原源融の邸地方四町の地を寄せて堂舎を造營し、寺基を此處に轉せしむ。これより六條通場紫香山河原院歡喜光寺と號し時宗十二派中六條派の本山となる。天正年中、豊臣秀吉、市中の寺院を京極に集むるや、本寺又寺町通錦小路に移す。元治六年、兵燹に災上せしが、直に再興さる。本寺六條河原以來、もも同地に祀られし菅原道眞廟を其鎮守堂として次第し、京極移轉の時も之を共に移せしが、明治初年、獨立して錦天滿宮(現新京極錦小路)とせり。明治四十年五月、現在の地にありし法國寺(天正年間、後陽成天皇御母新上東門院、其父勳修寺晴右追善のために創建し、僧滿情を開山とす)二



本寺を合併し、本寺を稱して今日に至る。現に開宗總本山清淨光寺末たり。

●境内千三百六十五坪。寺寶中、絹本着色一週上人繪卷十二卷に著はれ、現に國寶に指定せらる。一に六條道場本、古くは錦天神社本と稱せられ、一週上人繪卷中の白眉たり。卷末に「正安元年己亥八月二十三日西方行人聖戒記之畢、畫圖法眼圓伊、顯三品經伊羅筆云云」と見え、筆者、並びに製作年代を推知し得べし。圓伊は本繪卷によりてのみ其名を傳へらる、人にして畫圖の周密なる、山水世態描寫の自然なる、描法の圓轉自在なる繪卷史上有数の傑作なり。現に十二卷中、第七卷畫部は原富太郎氏の所藏に歸し、圖のみありて畫は模本たり。全卷に貫り補筆の跡を認む。現に恩賜京都博物館に出陳せらる。

高臺寺 京都市東山区下河原通八坂島居前下。

●臨濟宗建仁寺派。●鷲峰山又は岩橋不動山と號し、具には高臺聖壽禪寺と云ふ。承和四年建立の雲居寺、藤原家建立の金山院の舊蹟にして、其後、細川滿元此の地に岩橋院を建立せしが、慶長の初め豐臣秀吉の夫人淺野氏、其實母初日局の爲に一寺を寺町に創建して康徳寺(開山曹洞宗長岩寺)と稱す。秀吉薨するに及び、淺野氏落飾して高臺院湖月尼と稱し、更に一寺を建立して秀吉の冥福を祈り、終焉の地と爲さんと欲す。即ち徳川家康此地を相し、慶長十年、酒井忠世、土井利勝に命じ大いに伽藍を建立せしめ、同十一年落成す。時に徳川幕府領地を寄せ、寺町康徳寺を移して塔頭に列し五雲院と改め、本寺を高臺寺と號し曹洞宗可成を第一世とす。元和年中、建仁寺三江住持となり臨濟宗に歸す



(寶圖) (堂山開寺臺高)

次で淺野氏の経緯叙法席を繼ぎしが、後ち改めて輪番地とす。寛政元年火災に遇ひ烏有に歸せしが、後ち再建す。文久三年七月、松平春嶽本寺を本營とするや、浪士の爲に焼かれ、本堂唐門等焼亡す。明治十八年、三度回廊に罹り、佛殿、大方丈、小方丈等を焼失し、開山堂、豐公及び北政所、靈廟、表門等を殘すのみとなり。大正元年、方丈を再建し、現に塔頭六院を有す。●寺域一萬七千餘坪。表門は高臺山下。●高臺寺下河原八坂島居前。●高臺寺前通に西向す。●初山城に在りしを加藤清正此處に移すといふ。桁行三間、梁間一間、屋根切妻造、本瓦葺、四脚兼門にして、構造様式彫刻等豪華華麗よく桃山藝術の精神を表現す。現に國寶建造物なり。本寺堂宇は前項表門より東數町上、靈山山下敷地上に立ち並び、開山堂(國寶)は大正元年

の再建になれる方丈の傍なる小方丈の東に在りて樓船廊を以て相連結す。桁行五間、梁間三間、單層入母屋、本瓦葺、内外裝飾頗る華麗にして柱檼彫刻の美を極め、天井又絢爛たり。内部床一段高く壇を設け、壇上開山三法の像を安置し、禮堂後方兩脇の佛壇には木下二位法印及び其室雲亮院尼の像を安置す。全體として其手法雄麗豪爽、桃山期建築の特色を表せり。前面の林泉は古色深く小堀遠州の作と傳へ都下有数の名園たり。これより東方長き臥龍廊を上れば靈屋(國寶)南面して建つ。開山堂と共に建長十年の建立に係り、桁行四間、梁間三間、單層、寶形檼葺にして、内部の裝飾又華麗を極め、相間には土佐光信筆三十六歌仙を掲げ、其書は後陽成天皇の皇弟智仁親王の筆に係る。天井小壁紙張及び舞貝戸裏の紙張りも、欄、鳳凰或は狩野右京の筆に成れる山水畫等を以て飾る。後方須彌壇は三區に分たれ中央壇上厨子に本尊隨求菩薩を安置し、左右に秀吉像及び夫人北政所座像各並ぶ。政所座像の下は其處所なりと云ふ。この須彌壇の木階、柱檼、唐戸、壁張等悉く彫刻を施し、特に須彌壇木階の花檼檼、壇縁の樂器散し檼檼等の彫刻は所謂高臺寺彫刻の極品とせらる。鐘樓は境内東南隅にあり、弓籠禪師撰文に係る銘を有する鐘を懸く。後方獨秀亭の曲邊中に坐亭、時雨亭の二茶席あり、伏見城より移築せしものと云ひ、共に千利休の意匠として著名なり。寺寶中、國寶指定せられるものを略述すれば次の如し。絹本着色十六羅漢像十六幅は現に八幡宮恩賜京都博物館、奈良博物館に出陳せられ、元亨釋書に建暦元年泉浦寺後佛宋より將來せしものと見え、貫休(禪月大師)の筆と傳ふ。此種畫品中の名品なり。藤調度類十四種(椅子二、歌書單筒一、手文庫一、藥味壺一、刀掛一、掛盤三、飯器杓子附一、碗類十四、鉢子一、湯桶一、天目蓋



(寶圖) (門表寺臺高)

一、拭掛一、杖一、手提燈一)は所謂平輪に屬し、器物に適應して草木或は種々なる紋様を密布していきさ、かゝも繁褥に隔らす。高麗雄麗なる氣品を存し、技術また精緻を極む。此外、絹本着色、豐臣秀吉像一幅(南北雙、附、絹本着色高臺院像一幅、紙本着色高臺院消息一幅、絹本着色小早川秀秋像一幅)、紙本着色豐臣秀吉消

雙林寺 京都市東山区下河原高臺寺北門前。

●天台宗。●金玉山と號す。延暦年間、左大史尾張連定經の創建にして最澄唐土より將來の經典等を置き靈鷲山沙羅雙樹林寺及び法華三昧無量壽院等と稱す。後に延暦寺別院となる。鳥羽天皇の御所依違からず、皇女綾雲女王を此處に住せしめられ、雙林寺宮と號せらる。弘和二年、時宗八世國阿京師に入る。住持勝行と云へる者、これに歸し、本寺を國阿に附す。依りて國阿時宗

に改め東山道場と稱せしむ。爾來、當宗國阿派の本寺たりしが、維新の際天台宗に復せり。曾て全玄僧正、西行、平康賴、願阿等境内に庵住せし事ありと云ひ、豐臣秀吉曾て此地に遊び、花見の宴を催すと傳ふ。●附近に芭蕉堂、大雅堂址、西行塔、平康賴、紙圍女御(白河法皇寵妃)邸址等あり、芭蕉堂は天明寛政の頃佛師の名匠中化房圓更茲に祖堂を興し、盛に蕉風を唱ふ。西行塔は本寺の西にあり、西行庵は守塔の一字にして堂前に名高き西行欄あり。性昭塔は西行塔と同所にあり、平康賴の墳墓たり。治承の初め平清盛討伐の謀策露顯し、流刑に處せらる。後ち歸洛し、茲に龍居士と傳ふ。林泉幽邃を極め、東山風指の名勝地として著聞す。

金剛寺(庚申堂) 京都市東山区下河原金剛町。

●天台宗。●大黒山延命院と號す。俗に庚申堂の名を以て顯はる、創草沿革不詳なり。●本尊は青面金剛(庚申)にして脇壇に不動明王、聖德太子、大黒天、妙見宮、歡喜天、天滿宮、辨財天、淨觀所を合祀す。大阪四天王寺、東京淺草寺のそれと共に日本三庚申と稱せらる。●毎年二月に庚申祭を行ふ。當日は賽者接踵して殿賑を極む。

法觀寺(八坂塔) 京都市東山区八坂上町。

●臨濟宗建仁寺派。●靈應山と號し、一に八坂寺と稱す。寺傳に依れば聖德太子金佛觀音の示現により、此地を穿ちたるに石



(寶圖) (塔重五寺觀法)

四、圓成禪尼塔を修補造營し延元三年、足利氏亦之が修營をなし、興國三年完成す。時に足利直義全國に安國寺及び利生塔を建設し、本塔を以て山城國利生塔に充つ。夢窓國師語録中に其度證文を取めたり。永享十二年、足利義教之を再建す。後ち大破せしより元和四年、京都所司代板倉勘重奉命により大修理し、以て現今に至る。●往昔は堂宇整備せしが、現に五層塔一基を存するのみなり。一に八坂塔と稱し、五層塔、本瓦葺、永享十二年の再建に係る。各層勾配緩やかに、反轉あり最上層のみに高欄ありて、他階これを缺けるは前や推



観を損すと雖も、すべてに雄勁の氣現れ、繪彫彫刻等一切なきは室町時代に於ける和様建築として注目すべし、内部最下層四面の扉に天部の像を描き、中央に本尊五智如来像を奉安す。寺寶中、紙本着色八坂塔繪圖一幅(現に恩賜京都博物館寄託せらる)は國寶に指定せらる。室町末期の本寺の規模結構を知るに共に、當時の風俗を考ふべき好資料たり。尙ほ此外足利義政畫像等を藏す。

慈心院(總求堂) 京都市東山区清水一丁目。

●法相宗。●講坊と號し、清水寺一支院にして、豐臣秀吉の歸依厚かりき。延寶五年、後水尾天皇の勅願所となる。●清水寺三重塔北方に位置す。毘沙門天立像一軀(木造)は藤原時代の作にして國寶に指定せらる。北方に摩利支天堂(文明十年の建立)あり、往時は春日權現を祀りしと云ふ。

清水寺 京都市東山区清水一丁目。

●法相宗。●音羽山と號し、本宗中本山にして、西國三十三所觀音第十六番札所なり。寶龜年間、大和國高市郡小島寺の住僧延鎮、山城木津川上に草庵を結び、觀音を安置せしが、延暦三年、長岡遷都に際し、延鎮亦山城東山に移る。時に坂上田村麿厚く之に歸依し、自らの八坂の第宅を捨て、堂舎を建立し、北觀音寺と號す。同二十年、田村麿征東の軍旅に就くや本寺に觀音を新念し、桓武天皇亦御願平癒を御祈誓ありて靈驗あり、故を以て同二十四年官符を賜はり、大いに堂塔を建立せし



(實圖) (門西寺水清)

め勸願所に列せらる。此時別當三綱等の職制を布く。大同元年、菅宮殿を賜ひて本堂となし、音羽山清水寺と改號す。弘仁二年、鎮護國家の道場となし、延鎮の門流を以て寺司に田村麿の苗裔を以て寺家の職たらしむ。爾後、歴代皇室の御禮崇厚く、圓融天皇天祿元年、細河天皇寛治四年には行幸ありき。又富壽寺、長久宮、法相を兼學して南都興福寺に屬し、北隣の祇園(感神院)は北嶺延壽寺に屬せしかば、天徳二年以後屢々兩寺の大衆衝突の地となり、兵燹に罹りしこと多し。源平の兵亂後大いに寺運衰微せしが、建久年間再興す。古は成就院、眞乘坊、智文院、光業院、義業院、圓養院、延命院、慈心院(目代)、實任院の九院の輪番にして、別に本坊と稱するもの存せざりしが、文明永正の頃、塔頭成就院に顯阿あり、遂に本寺の權、成就院に歸す。寛永十年、徳川家光大いに講堂を再建す。これ即ち現在の堂宇なり。現在の塔頭は實任院、成就院(別項参照)、慈心院(別項参照)、延命院、智文院(別項参照)、眞乘寺(別項参照)、大日堂、眞福寺なり。現在二十有餘の信徒講社を有し、當寺の信仰極めて盛なり。

●寺城東山中腹に在り、南阿彌陀ヶ峯、稻荷の聖蹟を認め、西京洛の直戸を斷絶し、遙かに愛宕嵐山の翠のなりと云ふ。本堂の西に法華三昧堂あり、俗に朝倉堂と稱す。本尊千手觀音、脇土地藏、毘沙門を安置す。永正七年、越前國朝倉正真影の建立にして、洛陽三十三觀音の第十三番札所なり。本堂の東に西に西にして奥千手堂即ち奥ノ院存す。本尊十一面觀音、脇土地藏、毘沙門及び二十八部衆を安置し、壇前に弘法大師木像、南廂に夜叉神を祀る。もこの堂宇は大同二年の建立にして其昔延鎮僧都が住坊の跡にして、洛陽三十三觀音第十一番札所とす。阿彌陀堂は總山寺、本地堂、丈六堂等と稱し、奥ノ院の北に相違ふ。本尊阿彌陀如来坐像(七尺)、脇侍觀音、勢至の三尊を安置し、壇前に圓光大師を安置す。大同二年の創建、文治四年圓光大師始めて不斷念佛三昧を修せし道場にして、京洛六阿彌陀の一とす。壇上に後柏原天皇の勅額を掲ぐ。この堂と奥ノ院の間に露佛釋迦如来を祀る。前に水燈あり、金明水と稱す。釋迦堂は阿彌陀堂の北に在り、釋迦三尊を安置し、側に大黒天を安置す。堂前に西向地藏堂あり。阿彌陀堂と釋迦堂との間には百體地藏尊を祀る。本堂の後扉上に鎮守地主権現あり、本尊文殊菩薩を安置し、文殊樓とも稱せしが、維新後、大己貴命、素戔鳴命、稻田姫命外二柱の神を祀る。圓融、白河兩天皇の行幸を仰ぎしことありき。云ふ。其西北に成就院(本坊)あり。三重塔の北方に壽佛慈心院の本堂たる總求堂あり。仁王門の北に實任院あり、清水寺の執行なり。荒廢に及びしを近年改築し面目を新たにす。本尊は千手觀音なり。奥ノ院の下八十級の石段を下れば、其名も高き音羽の瀧あり、三條の清冽なる細線流々として落下す。清き口の上に小堂あり、瀧の宮と稱び、弘仁四年の草創、不動明王を祀る。傍に華中庵と紫水軒ありて前に陶工仁清、乾山の記念碑を存す。この瀧より西大谷までの谷を錦雲溪と稱し、世に新高瀧の稱あり。

堂宇の間巨大なる柱にて支へられ、前面及び左右に高欄を設く。峻嶒に臨み展望廣闊、脚下に新高瀧を俯瞰し、眺望字内に絶す。四注造の主殿の四面に形状高低大小を異にせる小屋蓋を施し形態複雑多様にして然も環境との諧調宜しきを以て優得て優置獲致言ふべからず。現に國寶建造物たり。内陣は石疊みにして須彌壇上本尊十一面觀音立像(國寶)、脇土左に壽軍地藏尊、右に壽軍毘沙門天を安置し、又二十八部衆の像を安置す。なほ西の側に阿彌陀如来、後堂に多聞天を祀り、外陣の前後兩壁には幾多の古額を掲ぐ。門は本堂の西に在り、往昔此傍に壽佛慈心院ありしより一に壽門と稱す。前に石橋あり、壽橋と稱び、傍に湧出す清水を鼻の水と云ふ。中門より本堂へ通ずるに廊下を以てす。寛永十八年、宮中の長橋を賜はりしも



(實圖) (堂本寺水清)

音羽の瀧の水落ちて更に二の瀧となり、淡香池となり、月瀧池となり、更に岩間を走りて影の池となりて西大谷に流る。一帯の溪間萬株の老楓枝を交へ、秋は宛ら錦の雲のたなびけるが如し。舞臺と谷を隔て、華産寺即ち子安觀音あり。尙ほ經堂の南に忠僕茶屋あり。維新の際、西郷隆盛の僕重助の聞きし茶店なりとて著はる。寺寶中、國寶に指定せられしもの次の如し。本堂本尊木造十一面觀音立像一軀はもと竹林院にありしものと云ひ、藤原時代前期の製作とす。本堂外陣の懸額角倉船圖一面及び奥ノ院口懸額末吉船圖三面は何れも木造にして、本邦海外貿易史上の好資料とせらる。



(實圖) (額懸船吉末寺水清)

●觀音供(本堂十七日、奥ノ院十八日)、修正會(二月一日より七日間)、修二會(二月一日より三日間)、



星雲(節分)、開山忌(三月十七日)、釋尊降誕會(五月八日)、田村忌(五月二十三日)、星供養(はしくたり、舊七月九日)、千日講(八月十日)、慈恩會(十一月十三日)、月照會(十一月十六日)、佛名會(十二月三日より三日間)。

成就院

京都市東山区清水一丁目。

●法相宗。清水寺の本坊にして、舊くは大本願と云ふ。永正七年、後柏原天皇の勅願所となる。時に住僧頼阿権あり、清水寺別當の位置遂に以後本院に附す。近年玄關、書院、庫院等に大改修を加へ、寺觀を一新せり。本院安政年間住僧に著名なる勤王僧月照(忍向)あり。月照、姓玉井氏、攝津大阪に生る。十五歳にして本院藏海に從ひて剃度し、天保六年、師席を襲ひて成就院を領す。夙に勤王の大志を懷き、安政元年二月、遂に院を門弟信海に譲り、出で、天下の志士と交遊す。殊に西郷隆盛と肝膽相照し、其大義を翼賛す。安政五年十一月幕吏に追はれて鹿兒島にあり、同十五日夜半隆盛及び平野國定等と共に月下に船を泛べて小安を渡る。宴饗にして突如隆盛と密語し、遂に相擁して海に投ず、隆盛は蘇生せしむ、月照は終に寂す。時に享壽四十六歳なりき。明治二十四年、勅して正四位を贈らる。●音羽の翠翳を負ふ、静景の地に在り。所在の堂宇には本院・講堂(東福門院の御建立、千手觀音を安置す)・玄關・書院・庫院等あり。林泉は夙に名園の間へ高く、相阿彌の作と云ひ、一に松永貞徳の遺る所とも稱す。豐公寄進の鎌ヶ樋の手水鉢、烏帽子石、鶴龜石、手鏡燈籠、蜻蛉燈籠、三角燈籠、わび助燈籠等あり、玄關前に秀吉手植の菩提樹、門前に辨天堂、鬼子

母神堂、月照、信海、南洲、國臣、正徳、忠僕重助等の記念碑あり。●俗に子安觀音の名を以て著はる。洛陽三十三所觀音第十四番札所にして、現に清水寺塔頭なり。光明皇后の御願寺にして當觀音に祈禱ありて、孝謙天皇を御安産あり。天平三年勅して三層の塔を當國郡の里に建立せらるる傳ふ。もと清水寺仁王門下にありしを近年現地に轉す。●清水寺舞臺と谷を隔て、松林中に聳ゆる朱塗の三重塔即ち本堂なり。千手觀音を本尊とし、脇士に地藏菩薩、毘沙門天を安置す。本尊は子安觀音と稱し、婦女子の信仰厚し。他に書院・庫院等の堂宇を存す。

來迎院

京都市東山区清水一丁目。

●法相宗。清水寺塔頭なり。俗に經書堂又は太子堂と稱す。聖德太子の開削に係る傳へ、往昔住僧本院にて一字一石の法華經を書寫して納めしより經書堂の名流布するに至る。●本尊は聖德太子自作の坐像にして、脇壇に阿彌陀三尊を安置す。因りて又太子堂とも云ふ。當院より北へ下る坂を三年坂(一に産婆坂に作る)と呼び、古來清水詣りに種々の物語を傳ふる坂なり。●法相宗。清水寺塔頭なり。俗に經書堂又は太子堂と稱す。聖德太子の開削に係る傳へ、往昔住僧本院にて一字一石の法華經を書寫して納めしより經書堂の名流布するに至る。●本尊は聖德太子自作の坐像にして、脇壇に阿彌陀三尊を安置す。因りて又太子堂とも云ふ。當院より北へ下る坂を三年坂(一に産婆坂に作る)と呼び、古來清水詣りに種々の物語を傳ふる坂なり。

●俗に大佛殿と稱す。天正十四年、豐臣秀吉地を洛東阿彌陀峯の下に相し、奈良東大寺大佛に倣ひて大佛殿を創建せんとし、始め前田玄以、後高野山木食庵其に命じて事に當らしめ、五畿内、中國二十一箇國の人夫を集めて造營に與らしむ。同十六年五月、定礎式を行ふ。其地盤南北五十五間、東西三十七間、高さ一間半なり。大佛は高さ十六丈、其工早きを望み、木像となして金漆を塗り、五彩を飾せり。其後、小田原征伐にて工事延引せしが、同十九年五月、立柱式を行ひ、漸次、十一間七面、高さ二十丈の大佛殿を始め鐘樓堂、仁王門、廻廊、南門等の威容を整ふ。其位置現在の豐國神社を中心にして西面せり。堂宇成るや、大方廣佛華嚴經に依りて方廣寺と號し、照高院道澄法親王之が別當職たり。文祿四年九月、落慶法會を修し、千僧供養の盛儀を行ふ、しかも其翌慶長元年七月、大地震に遭ひて堂宇等崩壞す。依りて一時信譽普光寺本尊を遷して本尊に奉安せしが、同三年八月、其修理を設へ、同二十日大佛開眼供養を修す。同七年、大佛殿失火に炎上し、堂宇灰燼に歸す。徳川家康、秀頼に嘆むるに其再興を以てせり。依て秀頼同十五年六月、工を起さしめ、同十七年春に至り落成す。其規模華嚴經に從ひ、樓柱凡そ二百七十、極高二十五間、桁四十五間、梁間二十七間五尺、大佛は木像を改めて金銅下し、高六丈三尺ありしと云ふ。同十九年三月、秀頼下野國佐野郡天明里の鑄工をして洪鐘を鑄造し、南無寺清辨に命じて銘を撰せしむ。同年八月將に落慶供養を修せんとするや徳川家康鑄鐘中の國家安康の一句を以て、之を停め遂に大阪陣を生ず。豐臣氏滅亡と共に徳川氏大佛殿所領を奪ひて妙法院に附し、照高院門主の管領を止め、妙法院の所屬とす。爾來本寺衰頹甚しかりしが、寛文二年、再び震災にて大佛崩壞す。幕府依

寶生院

京都市東山区渡谷通東大路東入。

●天台宗。草創沿革不詳なり。●寺寶中、木造毘沙門天立像一軀は藤原朝の作にして現に國寶に指定せらる。●天台宗。草創沿革不詳なり。●寺寶中、木造毘沙門天立像一軀は藤原朝の作にして現に國寶に指定せらる。●天台宗。草創沿革不詳なり。●寺寶中、木造毘沙門天立像一軀は藤原朝の作にして現に國寶に指定せらる。●天台宗。草創沿革不詳なり。●寺寶中、木造毘沙門天立像一軀は藤原朝の作にして現に國寶に指定せらる。

正林寺

京都市東山区渡谷通東大路東入。

●淨土宗。一に小松谷御坊と云ひ、圓光大師二十五靈場第十四番なり。本寺地小松谷は昔時中尾御殿の城内に屬し僧最澄遺徳の地たり。後平重盛邸宅をこゝに營み、世に小松殿と稱す。承安四年、重盛此處に燈籠堂を營み、四十八人の女を選んで禮敬念佛を勤行せしめし、と源平盛衰記に「小松大臣の常に住玉ひける所をば、四方各十二間四十八の間に四十八の十二光佛おはし其お前毎に常燈を燃されければ、晴衣の星の隠もなく深邊の曇に似たりけり云々」と記せり。後文安年間燈籠堂は東洞院高辻に移す。現寺町四條下淨教寺是れなり(同寺參照)。平家没落の後九條覺實之を傳領して別荘となせしが、別に一字を建立して之を法然に附屬す。承元元年、法然院所に赴くや、此處より鳥羽の街道を経て川舟にて伏見に下ると云ふ。後應仁の兵亂に罹りて一時廢絶せるを、正徳年間知恩院の義山中興せんとして果さず、其弟子慧空道命を奉じて再興

妙法院

京都市東山区東大路通渡谷下門跡。

●天台宗。延暦寺に屬し其別院にして、一に新日吉門跡と稱す。延暦年間、最澄の親立に係り、もと觀山にありて延暦寺三千坊の一に屬し、天台座主三院の一にして、圓仁、真源、惠亮以來天台法燈繼承の名刺たり。後白河法皇、法住寺及び新日吉社を建立して、之を本寺の住持昌雲に附せらる。因て法皇を推尊して中興の祖となす。昌雲小坂小路の住居にありて之を營す。次で其嗣實全に附し妙法院と號す。後天台座主となる。次に高倉天皇の第二子尊性法親王天台座主に補ひ、綾小路に移り綾小路宮と稱せり。爾來皇族の入りて住せらる。こと多く、門跡に列せられ、法親王の住居となる。延元二年、尊澄法親王法衣を脱し宗真親王と號し給ふ。室町時代、歴代將軍により寺領を安堵せらる。慶長十九年方廣寺鐘銘に不詳の辭ありとし、鐘供養の事停止せられ。同寺別當照高院道澄法親王亦北白川に屏居し給ふや、本寺常胤法親王代りて別當に補せられ大佛殿及び豐國社の事を營し、現地(照高院道澄法親王宮地)に移りて寺地を擴げ、堂宇を莊嚴し、領地を



(京都市東山区大寺大佛殿)

て大佛を木造と改め、舊儀を修補し銅像を造る。所謂文鏡、大佛殿と稱するは是れなり。寛政十年七月、雷火の爲め、堂宇大佛什寶悉く燒失す。尋で假殿再建せられしも、遂に舊規に復するに至らざりき。天保十四年、尾張の國より牛身の木像を運送して安置す。現今の大佛是なり。明治十七年、鐘樓を建立して秀頼の遺徳に係る洪鐘を懸垂せり。●本堂は寛政燒失後、日殿院方丈を移して、假本堂となせしものなり。鐘樓は明治十七年の建立にして本堂の側に在り、秀頼遺徳の國家安康銘を刻せる洪鐘、こゝに懸る。鐘は高さ一丈四尺、徑九尺二寸、厚さ九寸、總重量二萬七千貫に達すと云ふ。寺寶には豐臣秀頼額文を初め大佛建立に關する古文書等多數を藏す。尚ほ境内南方に豐國神社、背後阿彌陀峯頭には豐國廟等あり。又坂外正面通に耳塚存す。高さ三間餘の丸



寄せられ寺遷座に物興せり。時に寺領千六百餘石、門前百八箇町に及びしと云ふ。第三十六世釋法親王學徳一世に高く、天台座主となり叡山を中興せらるに及び、本院の門風頓に伸張す。天明八年、京師大火に襲はる、や、皇后逃れて茲に行啓あり。文久元年、伏見宮邦家親王の王子敦宮孝明天皇の御猶子となり富院を相續し給ひしが、同二年復歸せらる。同三年三條實美等七卿、本寺の寢殿にて西奔の議を決す。所謂七卿の都落ちこれなり。慶應年間、有栖川宮の第二王子閑宮入院御相續の事決せしが、未だ幾許ならずして王政維新となり、爾後皇族門跡廢せられて此事なし。明治元年、政府富院を以て外資の旅館に充て、同年三月、新日吉社を分離し、同三年、寺領を還附し、改めて現米九百八十五石を下賜せらる。翌年五月、遂に門跡號を廢止す。同六年天台宗の選舉により住持を定め、特旨を以て現米二百五十石を下賜せらる。後ち門跡號復歸せり。現に蓮華王院(別項參照)、方廣寺(別項參照)、大興德院、香雪院等を所管す。

●境内一萬千八百八十五坪。本堂・寢殿・庫裡・玄關・大小書院・舊蓮華殿・唐門・表唐門・北門・浴室・藏書室・聖天堂・大聖堂等を整備す。就中大書院は桁行五間、梁間六間、單層、屋根入母屋造、棟瓦にして桁行七間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、棟瓦にして内廊と外廊の間に仕切り四室に分れ、正面二間の奥室を上ノ間と云ひ、床の壁張付は狩野松榮の筆、袋間の花卉は小栗宗丹筆、脇構の山水花鳥は狩野山樂の筆、仕切構の山水花鳥人物圖は狩野孝信の筆に成るものと稱し、頗る華麗絢爛を極む。庫裡は桁行十一間、梁間



(寶國)(關支院法妙)

十二間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺にして、寺の北門より入りて突當りに在り、玄關の北に續く。豐臣秀吉千僧供養の舊迹物なりと傳へ、其臺宏宏大實に秀吉の性格を反映せる如き感あり。以上三建築は本院の境外佛堂たる蓮華王院本堂、同南大門(別項參照)と共に國寶建造物に指定せらる。尙ほ電車通に面して唐門あり。櫻町天皇御下賜と云ふ。其後に本尊菩薩を安置する本堂存す。寢殿は般舟三昧院より移建すと云ふ。後花園天皇以降の兩院の尊像を奉安す。七瀬部落の記念碑院内にあり。庭園は小堀遠州の築く所にして、東山の自然を巧みに取入れし、閑雅幽邃なる名庭園として著名なり。寺寶中絹本着色後白河法皇御像一幅・木造二十八部衆立像二十八軀・紙本墨書後小松天皇御消息(六月三日)一通・羊皮紙寫經國語ア副總督贈豐臣秀吉書一通は何れも

國寶に指定せらる。其中、後白河法皇御像は、神護寺の頼朝、重盛等と共に風に鎌倉時代官儀畫の逸品として推重せらる。所、簡潔なる筆致を以て巧みに法皇の俊邁なる御尊手を寫し奉れり。二十八部衆立像はもと蓮華王院安置千手千眼觀世音像(其項參照)の眷屬たりしものにて、建長三年後深草天皇の勅を奉り大佛師法慶、小佛師康圓、康清等の作に係り、現に此中八軀は京都恩賜博物館に出陳せらる。何れも玉眼入全身鍍金彩色にして、形相變化の妙を盡し、其寫實的彫法殊に精美なり。鎌倉期の代表的傑作となすべし。

智積院

京都市東山区東大路七條通東。

●新義真言宗智山派。

●佛頭山と號す。舊くは一乘山、五百佛山等と稱し現に當派本山なり。もと紀州根來山大傳法院に屬し一山の學頭寺たりき。平安朝末、新義真言宗祖覺鑊、高野山を出て、紀州根來山大傳法院を興し、新義真言の法基を確立す。降りて南北朝時代學頭眞覺房長盛法印本院を開創して、之れに居る。第二世玄昭房日秀の時、妙音院と共に二能化寺院となる。戰國時代末、根來一山内、客衆(客方)と常住衆(常住方)の二派あり、天正の頃、即ち客衆に智積院を寄附、常住衆に妙音院を寄附りて一山兩分さる。是れ即ち當宗兩派分派の端緒なり。天正十三年三月根來山大傳法院、豐臣秀吉の來襲に遇ひ、一山の諸堂一朝にして破却せられ、衆徒亦諸方に四散し、新義真言の法燈正に滅せんすとす。依りて玄宥、專譽の二學頭各衆徒を率ひ一先高野に入りしが、贊許もなく下山し、諸方を流浪す。後ち專譽は一時和泉國分寺に隱棲せしが、直に豐臣秀長に招ぜられて大和長谷寺に入り、豐山の法源を形成す。玄宥亦慶

長三年、京都に入り、洛北北野に法續を建つ。徳川家康厚く之を崇敬し、慶長五年、豐國神社境内の三寺宇並びに岡村の地に寺領二百石を附す。玄宥、此處に於て三字を合して、上下の二字とし、上ノ寺を僧坊に、下ノ寺を講堂に充て僧房を建立し、智積院中興第一世となり、新義真言宗智山派の寺基を確立す。爾來、本院其本寺として朝暮の歸依も後からず、外調亦殊に厚し。同十八年、第三世日譽の時、智積院法度を制定され、一山の規模確立す。元和元年、大阪役後、家康二條城に凱旋するや、戰勝祈禱の報賽として寺領三百石を加増し、採地として豐國領一萬石の内高野郡上桂村を附す。こは後ち秀忠宇治郡大風寺村と換地せり。同五年、秀吉の子葉君通福の爲め開創せし神靈禪寺並に豐國神社所屬安舎、器具等の寄進あり、次で茶臼山の陣舎を移建して一山所化の學寮とす。斯くて一山の結構完備し、堂宇學寮等の大度廣殿巍然として法光京洛の一角に輝き、諸國よりの究學僧雲集するに至る。寛文五年、運使江戸圓福寺より入りて第七世となるや、一山の教學、に揭り、所化在山三千餘人に達し、寮舎狹隘を告ぐるに至りし爲め開山堂以南の地二千八百八十九坪の地を受け、同七年、密嚴堂、三神社、拜殿、鐘樓、浴室を造營す。延寶元年、密嚴堂時に經藏を建立せしが、天和二年五月、八世信盛の時方丈回廊に欄り豐公の遺跡たりし神靈禪寺の重閣赤烏有に歸す。同年冬直ちに再建を企て、幕府の執奏により東福門院の對屋等大小六棟を賜り、貞享二年重建の工を竣小。元祿五年、妙法院所屬三河山の地三千四百三十二坪を借用し、數十軒の學寮を建設し、以て諸國より雲集する學徒所化の收容に充つ。第九世智鏡の時、覺眼、深壽、義山、觀應の四哲を高野に派し、傳法大會の格を得得せしめ、同九年九月十五日覺眼を齋養せし、運壽を聖



(關支院法妙)

者として大傳法會を復興す。元祿十四年、柱昌院より金堂造營の費として黄金千兩を寄せられ、寶永二年、春金堂始めて落成す。第十一世覺眼に至り、妙法院坊官より前借せし地所の返済を求めしが、學寮移建の餘地なきより、同五年遂に本院の所領に歸す。從來本院能化は次第より昇進せしが、第十六世覺淨の後ち快規、龍天兩學匠能化職を争ひ、龍天遂に第十七世となりてより、能化公選の主張盛んとなり、寶曆三年、快規其



金地着色松花圖(床間及び遠階壁貼付六(十二枚)袋  
棚小襖貼付四、壁貼付三)・葛圖(襖貼付二)の十五面  
間二ノ間及び三ノ間を連結せる金地着色櫻楓圖(壁貼  
付四(七枚)襖貼付二)六面・三ノ間なる金地着色松梅  
圖(襖貼付)四面・藤竹ノ間なる金地着色蜀葵及び菊  
圖(床間及遠階壁貼付六、袋棚小襖貼付四)十面及び壁  
殿東ノ  
間なる  
金地着  
色櫻及  
葛圖(一  
床間及  
遠階壁  
貼付六  
(七枚)  
襖貼付  
四(七  
枚)の十  
面、同  
西ノ  
間なる  
金地着  
色竹圖  
(襖貼  
付)四、  
檜及び柏圖(壁貼付二六面は、往々位置の錯雑せる、  
大なる畫面よりの切縮のため、往時の威厳を損ふも  
のありと雖、胸廓豪華、桃山時代藝術の粹を此處に見  
るべし、中にも大書院櫻楓圖の如きは其尤なるものに  
して、大畫面の統一に於て最も成功せるものと云ふ可  
し。又現に屏風に仕立てらる、金地着色松花圖四曲



(泉林院精寶)

屏風一雙・同松梅圖二曲屏風一雙も亦襖畫の一部に  
て前者は櫻楓圖と同筆、後者は前者に比し、技法稍々  
劣れり。筆者に就ては或は狩野一門と云ひ、或は長谷  
川等伯と傳へて置ならず。以上悉く國寶に指定せらる  
尙ほ寺寶中、絹本着色孔雀明王像一幅・絹本墨畫龍圖  
一幅・紙本墨畫金剛經一卷(靈即之卷)等は國寶なり  
これか略述すれば孔雀明王像は、鎌倉初期の嚴密描法  
になる作品にして、讀作少き孔雀明王像中の一佳品な  
り。龍圖は古來王經筆と傳ふるも、大略宋元間の製作  
に係るものと推せらる。金剛經は、奥書に依れば、張  
即之が寶祐二年(我朝建長六年)六十八歳の時母及び夫  
人の冥福の爲に筆寫せるものにして、隨實なる彼の眞  
蹟として珍重すべし。其他寺寶として覺鑒筆五大尊像  
以下佛畫類極めて多し。本院庭園、泉石の布置、堂宇  
との調和、殊に妙にして、風に都下有數の名園として喧  
傳せらるゝ所なり。  
●覺鑒忌(十二月十二日)

**慈芳院** 京都市東山区東大路五條。  
●臨濟宗建仁寺派。  
●創草沿革不詳。  
●寺寶中、山中長像像一幅(紙本着色)は紹隆の贊あ  
りて現に國寶に指定せらる。  
**正法寺** 京都市東山区清閑寺町。  
●時宗。  
●靈鷲山、又略して靈山と號し、一に無量壽寺と云ふ  
も、古來靈山寺の名を以て著はる。もと本宗靈山派の  
本寺にして、現に本宗大本山なり。延暦年中、傳教大



(靈山寺法正)

師の創建に傳り後延暦寺の別院となる。日本紀略に  
寛弘元年三月十八日、靈山堂供養と見ゆるは蓋し本寺  
のことなるべし。寛平年中、宇多天皇釋迦堂を建立し  
其御祈願所となし給ふ。治承二年、京洛佛寺七十四所  
の一となる。元久年中、法然念佛の道場となせしこと  
法然上人行狀繪圖に「ごころごころに別時念佛を修し  
不斷の  
稱名を  
つとむ  
ること  
みなも  
つとむ  
るに、上  
人の在  
世より  
おこれ  
り。そ  
のなが  
に、上  
人元久  
二年正  
月一日  
より、  
靈山寺  
にて三  
七日の  
別時念佛をはじめ給ふに云々」と見ゆ。永和二年、  
時宗八世國阿入寺して中興し、遂に時宗靈山派の本寺  
となれり。後小松天皇繪旨を賜ひて國家の安全を祈ら  
しめ給ひ、足利義昭亦國阿に歸依し、四半地城を標示  
し、東は觀音寺東谷峯堀切、西は大踏道、南は清水谷、  
北は雲居寺谷を限りて境内と定む。時に末寺四十二、

塔頭十四箇院ありしが、後世漸次衰微し、元禄年中に  
は既に其六坊を失へり。明治維新に及びては衰頹其極  
に達し、塔頭僅かに三院を數ふるのみ。後靈山寺  
は眞宗興正寺の別院となり、畿かに壽子院清林院を以  
て本寺に充て、號して正法寺といふ。然るに明治二  
十五年十二月火を失して本堂、庫裡等烏有に歸し、僅  
かに佛堂一字を殘す。近時復興漸次意觀に復しつゝ、あ  
り。  
●境内千九百九十八坪、寺地、東山の麓にして、  
京洛市街を一望に收め、眺望殊に秀れたり。釋迦堂の  
本尊釋迦如來は臥像なるな以て臥釋迦と稱せらる。此  
外、開山・地藏尊・毘沙門天・辨財天・三面大黒天等  
を安置す。堂後に國阿の墓所あり。境内と隣りて維新  
の際國事に斃れし諸士を祀れる靈山招魂場あり、明治  
十二年の竣工に成る銅碑存す。靈仁親王の墓額、三條  
實美の撰文書に係り、高一丈四尺五寸、厚二尺五寸  
なり。山上には木戸孝元、梅田雲嶺、梁川星巖等其他  
勤王數百家の墓碑あり。

**靈山別院** 京都市東山区清閑寺町。  
●眞宗興正寺派。  
●明治十二年、興正寺第二十八世本當の草創に係る  
之より先き明治九年、興正寺、本願寺より獨立して派  
名を公稱するに至り、累代家主の嫡骨の地を現地に求  
め同十二年廟園を築き、山内眞眞影堂の拜殿並びに講  
の間に南の(正法寺項參照)、建造物を移し、靈山別院  
と號す。寺域、これ靈山寺(正法寺)の故址なり。  
●本堂・鐘樓・奥殿・輪香所・支圖・對面所等を具  
ふ。

**清閑寺** 歌の中山(京都市東山区清閑寺町)。  
●新義眞言宗智山派。  
●俗に歌の中山と稱す。桓武天皇延暦二十一年、紹  
德の開基に係り、初め天台宗に屬すといふ。往昔法華  
三昧堂、寶塔等備りて頗る隆盛なりしが、其後衰頹す。  
一條天皇御宇、佐伯公行、隆盛を再興し、長保二年、  
勅願所と定めらる。大治四年、祝融の災に罹りて堂宇  
烏有に歸せしも、後再建せらる。治承五年一月十四日、  
高倉上皇六波羅池殿に崩御あるや、即ち當寺に奉安す。  
爾來、寺名揚る。又同天皇の靈妃小局母また此處に歸  
らるる傳ふ。建永元年七月、法華堂の修葺成り、降り  
て慶長年間、性盛の時之を重修す。  
●境内清閑庵、三方翠巒に倚り西方峻かに展げて  
洛街に臨む。堂宇は現在僅かに本堂・觀音堂・庫裡を  
具ふるのみ。本堂は東面し、佛菩薩遺眞作本尊千手觀  
音立像、弘法大師像及び三條小親治宗近持念佛と傳ふ  
る不動明王像を安置す。前庭中、高倉天皇御遺愛と  
傳ふる楓樹並に要石あり。本堂背後の丘上に郭公亭あり。  
曾て西郷隆盛、月照と國事を密議せし遺蹟なりと  
云ふ。尙ほ當寺北方に南面して六條天皇清閑寺小堂殿  
あり。高倉天皇御陵は小堂殿の東北の低所にありて清  
閑寺法華堂殿と稱へ、この地を俗に上の山神と云ひ其  
西面の壙を中壙と呼ぶ、即ち法華堂址たり。他に小督  
塔あり。俗に權中納言成範の女小督局の塚なりと傳ふ  
當地楓樹頗る多し。清水寺より當寺に通ふ山徑を俗に  
歌の中山と稱す。寺説に依れば昔當寺三世眞燕、一夕  
門前に佇みしが、一美女の獨り過ぐるに逢ひ、忽ち愛着  
の心生ぜしが、物言ひかくべき便なくして清水へ道の  
は何れぞと問へば、女、「見るにたにまよふ心のほか  
ななくてまよふ道のをいかしてはるへき」と云ひ捨て、姿

を消すに及び、その行業足らざるを恥て遂に名僧と  
なれりと傳ふるに因りて名づくこと云ふ。

**永明院** 京都市東山区本町十五丁目。  
●臨濟宗東福寺派。  
●東福寺塔頭。弘安年中、東福寺開山辨圓(聖一國  
師)の法弟にして東福寺第六世順空(圓應禪師)之を草  
創す。現に當派特例地にして、隸下に正覺院、光明院、  
南明院等あり。  
●寺寶中、絹本着色圓應禪師像一幅(明光筆)は國寶  
なり。

**海藏院** 京都市東山区本町十五丁目。  
●臨濟宗東福寺派。  
●東福寺塔頭。正慶年中、虎園國師(師建)の開創に  
して、其塔所なり。室町時代、多くの寺跡を領し寺運  
極めて隆盛なりき。慶安四年五月、後水尾天皇皇女を  
本院に奉養す。現に東福寺特例地にして、其隸下に退  
耕庵、龍眼庵、靈源院、盛光院、勝林庵等あり。  
●境内千五百七十八坪。本堂・庫裡・土藏・浴室等  
あり。寺寶中、絹本着色虎園和尚像一幅は國寶にして  
康永二年の自贊あり、虎園六十六歳の時、河津平氏明  
か元の畫工をして圖せしめたる三幅中の一なりと云ふ  
紙本墨書楞伽經私記一卷亦國寶なり。他に元亨釋書  
(虎園の著なり)の版本等を藏す。境内に後水尾天皇皇  
女の御陵墓あり。  
●開山虎園忌(七月二十三日、二十四日)。



願成寺

京都市東山区本町十五丁目。

臨濟宗東福寺派。嘉慶年間、東福寺第四十四世眞盛禪師の開創なり。本寺はもと深草寺願成の地に在り、平城天皇皇子阿保一品親王の御建立に係る。足利義持、これを京師十刹の一に列し、時に頗る寺運隆盛なりしと傳ふ。寛延年間、今の地に移る。境内八百餘坪。所藏の絹本着色佛道禪師像一幅は正安三年の自費あり、國寶に指定せらる。開山忌(五月二十一日)。

桂昌院

京都市東山区本町十五丁目。

臨濟宗東福寺派。元亨年中、東福寺十二世雙峯國師(宗源)之を創建し、後宇多天皇より「萬年桂昌精舎」の匾額を賜はる。天保年間南昌院址、即ち現今の地に移轉せり。舊時南昌院、大仙院、佛樂院、建福院、今廢せらる。什寶中、絹本着色雙峯國師像(自費)一幅は國寶に列せらる。

退耕庵

京都市東山区本町十五丁目。

臨濟宗東福寺派。東福寺塔頭。貞和二年の建立に係り、開山は虎關の法嗣東福寺第四十三世性海靈見なり。性海は嘗て將軍足利義滿の面前へ、岩面禪髮、裸體にて伺候せし怪僧なり。現に海藏院に屬す。寺地北谷にあり。小野小町五郎地蔵を安置す。什寶中、絹本着色性海和尚像(康暦元年自費)一幅、紙本

墨書水明智覺禪師垂誡(性海筆)二幅、同聖一國師墨書鈔疏(性海筆)一幅は國寶に指定せらる。

同聚院

京都市東山区本町十五丁目。

臨濟宗東福寺派。文安年間、文漢元作の建立に係り、本山百三十二世琴江を開山とす。現に要蓋處下に屬す。什寶中、木造不動明王坐像一幅は、藤原期の作に係り、國寶に指定せらる。一に十萬不動を本寺、もと法性寺五大堂の一にありしものなりと云ふ。

東福寺

京都市東山区本町十五丁目。

臨濟宗東福寺派。慧日山と號し、本派の大本山にして、京都五山の第一なり。嘉祿二年、關白九條道家の發願に係る。即ち法基を奈良東大寺に亞ぎ、盛業を鎌足發願の興福寺に取て寺號を東福寺と名付け、延應元年、之が大佛殿を立柱す。時に道家圓朝(聖一國師)に歸依する事厚く、即ち之を請じて宗統第一祖となし、大いに大功を業し、經營日に勵かなりしが、建長四年二月道家、將に此の福業を遂げんとして長逝す。依りて其子實經先考の遺業を繼ぎ、拮据經營、事に當る。時に將軍藤原賴朝、賴朝等亦大いに之を助力せり。建長七年、遂に諸堂宇竣工す。時に實經玉體善美を畫し、佛殿本尊釋迦の像亦奈良の大佛と相對し、世俗之を新大佛と讚稱す。文應元年、元庵普寧來朝するや、佛面之を本寺に延いて止住せしむ。其後、子院禪坊の増修漸く繁く、一山の輪奐落都の一偉觀たりき。文永二年、實經、供養修營料として四十一莊を寄せ、同五年、寺中に常樂庵

を營む。同十年法堂成る。弘安二年には北條時宗加賀熊取庄を附す。翌年十月、辨圓示寂するや、寺内常樂庵に葬り稱して開山塔といふ。同四年、東山法照法燈を嗣ぎ第二世となる。正應二年、朝廷より寺領の御寄進あり。元應元年、兵燹に係り、大殿大半を烏有に歸す。正中二年、之を再興せしむ。建武元年正月、再び回縁に繼る。當時唐土五山に傲ひ鎌倉及び京都に夫々五山を定むるや、本寺、京都五山の第二位に配せられしが、後ち第四位に下る。貞和二年六月、藤原經通佛殿を再建し、翌月勅して武藏船木田新庄の地を寄せらる。應永年中、足利義持山門を修補して妙雲閣と稱せしが、天正十三年地震のため破損す。尙ほ室町初頭、本寺南明院に明光あり。夙に繪に巧みにして宅磨派の手法と北宋派の風格を採りて佛畫の一家を形成す。所謂東福寺の光嚴司是なり。同年豐臣秀吉諸堂を修營し、寺領千八百五十石(内萬壽寺八十五石)の朱印狀を附す。徳川家康亦之の先規に従へり。慶長七年六月秀吉の遺命により、北政所佛殿を修補し、慶永年間徳川家光諸堂を重修す。享保十四年四月、象海豐漢、禪室に師家たるに及び、一千七百の雲納を接待して、應仁亂後中絶せる五山の風格を再興し、五山連環結構に先驅し、慧日の宗風を江湖に布けり。明治維新の際、上知檢斷の事あり、同十三年六月には、永源寺一派獨立分派せし爲め、末寺五百五十餘箇寺の内、百三十箇寺を減じ、寺門漸く衰頹の兆ありき。明治十四年十二月十六日、方丈の西南隅より火を失し東庫裡、西茶室、法堂、佛殿等半夜にして燒燬す。此時、本尊大釋迦は隻手を殘すのみにて烏有に歸す。因て禪室を假佛殿として京城山萬壽禪師の本尊釋迦像及び脇侍阿彌、迦葉三尊を移安す。同十八年、方丈を再建す。近年、佛殿重興の工に着手し、昭和七年遂に竣工、伽藍漸く舊觀に復す。

往時は塔頭七十餘宇、北谷、栗葉谷、中谷、南谷の四區に分散せしが、其後、漸次融合せられ、現に特別地たる萬壽寺(北谷、同項參照)、海藏院(同項參照)、栗葉庵(栗葉谷、同項參照)、龍吟庵(中谷、同項參照)、永明院(南谷、同項參照)の五寺を始め、各寺下に退耕庵(同項參照)、龍眼庵(同項參照)、盛光院、勝林庵、靈雲院(同項參照)、大機院、同聚院(同項參照)、一華院、善慧院、莊嚴院、桂昌院(同項參照)、即宗院、願成寺(同項參照)、尊陀利華院、東光寺、天得院、正覺院、南明院、光明院の二十箇院あり。現に當派大本山として末寺四百二十五箇寺、教會所二を統ぶ。舊寺城十二萬餘坪を有せしが、現今約六萬坪なり。法性寺大路を東に入り思遠池を渡りて三門あり。三門は五間、三月樓門、重層、屋根入母屋造、本瓦葺、嘉祿二年の創建なるも、應永年間、足利義持の大修理を経たり。妙雲閣の扁額をか、げ、左右兩足に山廊を附す。様式は京都鎌倉五山のそれと同じく主として唐様なるも、此山門のみは斗拱は三手先、挿射木の天竺様を用ひ、結構を取らず、屋根の勾配稍や緩にして禪刹的ならざるも規模雄大、樞衛整美、本邦御刹山門最古の巨擘たり。閣上内部は中央を鏡天井として天人を圖し、其他虹梁長押の層等、内装の彩畫は光嚴司並に東殿司の合作なり。中央須彌壇上には南無持金剛海菩薩像脇士月蓋長者善財童子像を安置す。共に康永の作と傳ふ。後壁に佛定朝作十六羅漢を併置せり。三門を入りて左側に南面して禪堂あり。佛堂至選佛場の扁額を掲ぐ。一に僧堂又は講堂と稱し、三默堂の從來の假本堂たり。構造は桁行九間、椀間六間、重層、上層屋根切妻造、本瓦葺、創建當初のものは建武元年に焼失し、現今のものは貞和二年の再建なりといふ。上層より出たる向拜は下層屋根を破りて前面に突出し、是を入口



(實蹟) (堂 禪 寺 福 東)

とし、形態に變化を興ふ。本邦御刹中特有なる形式を存し、現存遺構中、特異なるもの、一なり。この遺佛場の南に東司あり、室町時代の再建にして七間四、

の古き型を窺ふべき好資料なり。三門の東畔社間に浴室あり、寺傳に貞和年間の建立とし、一説に天文年間建立なりと云ふ。桁行三間、椀間四間、單層、屋根切妻造、本瓦葺、細部の手法唐様に成り室町期の特徴を具備す。以上の四棟は何れも現に國寶建造物たり。選佛場に北接して經藏あり、曾て文安三年、剛中玄業元板一切經を日向大慈寺より納入せしことあるも、現に宋版一切經を所藏す。經藏を左にし猶も北進すれば通天橋あり、洗玉の齋洞に飛架し、奇構風流を盡し、古來觀極の名所として人口に喧傳せらる。通天を過ぎ雲際松樹の間を見上ぐれば淺香山普門院あり。東福寺本坊にして、もと觀音堂と稱し、寛元四年、道家未だ東福寺成らざるを以て、同院を今の海藏院の地に敷め、辨圓を請じたる所なり。康暦三年十月に開り、後ち現今の地に移轉改築せり。月下門(一に月華門)は即ち本院の總門にして、四脚門、屋根切妻造、本瓦葺、もと御所の門なりしを、文永年中、後龜山天皇より賜ひて茲に移建すと云ふ。構造頗る簡單なれど、暮殿の綽勢雄渾濃潤たり。鎌倉期の建立と推知さる。現に國寶建造物に指定せらる。普門院の右接、正面して常樂祖堂あり、萬年山と號す。開山辨圓入定の所なり。康永二年、乾孝十聖、道家の像か光明筆より移安して當山の鎮護となし、翌年、虎關國師外二百十五員け開山木像を造立點眼供養せり。實永二年、一條家に於て實經の像を作り茲に祀れり。常樂の東北橋上に昭憲皇太后御遺爪髪の実體塔あり。又南に離れて成徳堂、納骨堂あり。再び通天を打戻れば、左邊門跡の内に大方丈あり。東西十六間、南北十一間より成る。其表門を恩賜門(明治四十五年建立)と云ひ、此門を左にし正面に向ひて庫裡(香積院、明治四十二年建立)あり。恩賜門の南、山門との間に新築佛殿あり。桁行十八間、棟高八十三尺



の一大梵宮にして遙に善觀を渡けり。又浴室の近傍に鐘樓、大塔倉基、淨頭寮殿あり。なほ十三重塔は藤原道家の病中に建てしものなり。成就宮はもと五社明神と稱し鎮守なりしが、明治維新後吒根尼天を祀る。成就宮の東二町に内山本廟あり、藤原兼實の廟所、近年眞宗各派本山協力して建營す。寺寶中國寶に指定せらるゝもの次の如し。絹本着色釋迦三尊像三幅は朱衣金紋、古來榮道子筆と傳へて著名なるものにして、色彩法より見て南宋時代のものなるべく、顔面の寫實精透にして、衣紋の風曲殊に剛健なり。同五百羅漢圖四十五幅は、光嚴司(明光)の筆にして、もと一幅に十羅漢づゝ五十幅ありしが、中古散逸して四十五幅となれり。他に持野孝信補寫に係る二幅を存す。明光之を製するや、前後數年を閱し、至徳三年三十五歳の時成就せし苦心の作なり。圖樣は宋畫に基調を置き細緻精美なり。因みに本寺室町期に明光が殿司の職たりしより其遺筆甚だ多く世稱して殿司の寺と云へり。紙本着色聖一國師(明光筆)は、畫風磊落、よく國師の面目を傳ふ。絹本着色無準師範像一幅は上に嘉應二年無準の自贊あり。南宋寫實派佛畫の特色を示現し、顔面に淡く皴染を用ひ、胡粉彩色を施せり。紙本淡彩建曆殿裏懸掛像三幅(明光筆)は知恩寺所藏願輝の同圖を寫し背景に多少の創意を加へしものなり。紙本着色四十羅漢像四十幅(明光筆)は、初祖達磨より天柱宗要に至る臨濟四十祖師の半身像にして、同じく古圖の模寫なり。絹本着色羅漢居士像一幅は支那畫にして、描線流麗、寫實精妙、よく老居士の眞面目を彷彿せしむ。紙本淡彩東福寺伽藍圖一幅は、上に永正二年六月二十二日南禪了庵の題文を有し、東福寺伽藍の由来を記し、併せて圖は數年前の作品たる事明らかになり。雪舟筆と云ふも恐らく其の門流の作ならむ。筆蹟の都ては紙本墨

畫東福寺莊園文書七通・同聖一國師度牒二幅・同聖一國師或牒二幅・文書の部では同無準師範行狀(徳如筆)五幅・同支那師範圖式(傳大宋諸山圖)一卷・同參天齋五齋山記八册(卷第五に承安元年八月書寫の奧書あり)等あり。右の中、釋迦三尊像・五百羅漢圖二十幅・聖一國師像・東福寺伽藍圖・聖一國師度牒・同或牒・無準行狀記の七點は恩賜京都市博物館に、又羅漢居士像一幅は東京帝國博物館に出陳中なり。尙ほ他に巨幅を以て有名なる光嚴司の涅槃像を藏す。風に日本第一の巨幅として著聞し、應永十五年六月、明光五十七歳の時の筆なること落款に明記あり、縦三丈九尺、横二丈六尺あり。享祿三年十二月、細川兵衛の野天陣幕用に徵せられ破損甚だかりしが、近年修復せらる。此外殿司の作及び其



(寶蹟) (圖 東福寺伽藍圖)

他の佛畫三十三尊身三十三幅(但世稱義持筆)・白衣觀音像・開山樹下石上背像・殿司水鏡自像等約二百幅に及ぶと云ふ。境内に東福十地あり、即ち潮音堂、蓮佛場、妙雲閣、栴檀林(兼寮)、五社宮、千松林、通天橋、洗玉淵、思遠池、甘露井等はなり。山門より東南二丁餘の山腹に仲基天皇陵及び皇嘉門院陵あり。同じく附近に九條道家の方二間餘の寶篋印塔墓を存す。又佛殿の東南二町の山中に藤原俊成及び光嚴司の墓あり。

●例年三月十五日光嚴司畫大涅槃圖を展觀す。これを開倉期と云ひ、十一月十七日に修する開山忌を取倉期と稱し、共に洛中人士群參す。

萬壽寺

京都市東山區本町十五丁目。

●臨濟宗東福寺派。

●京城山と號し、もと臨濟宗五山の第五位にありしが現に東福寺塔頭なり。永長二年、白河上皇勅して都芳門院藤原理子の遺宮を率めて佛寺とせし、同十月十四日供養を行ふ。世に六條御堂と稱す。正嘉二年萬壽禪寺と改め、東山湛照(實覺師)を開山とす。元徳二年、後宇多天皇皇女崇徳門院皇子五條樋口に寺地を寄すや、元弘三年、住持紹隆就きて報恩精舎を建立す。後本寺を同精舎に合一す。爾來寺運大いに榮え、至徳三年七月、京都五山の位次を定め、本寺其第五に列す。其頃萬壽寺通り御馬場の西にありしが、永享六年回縁に罹り久しく再興せず、天正三年、東福寺山内三聖寺(開山東山湛照、現に廢絶せるも愛染堂以下の諸堂宇は其遺構なり)に遷し、爾來寺號對立せしが、維新後萬壽寺を再稱し、明治十九年東福寺所轄の特例地となり今日に及ぶ。近世寺領八十石五斗を有せり。

●堂宇中、仁王門は八脚門、屋根切妻造、本瓦葺に

して明徳二年足利義滿の建立と云ひ、愛染堂は一に八角圓堂にして、單層、屋根寶形、棧瓦葺、屋上に寶珠を頂ぎ、外柱のみありて内部に柱と稱すべしものなく出組の斗拱、外面に棧唐戸を有し、内部は三手先、鏡天井にして、須彌壇あり、愛染明王像を安置す。形態優雅ならざるも、室町時代に於ける八角圓堂建築中類例少き遺構として注目すべし。鐘樓は三間二面重層、袴腰、屋根入母屋造、棧瓦葺の建築にして、愛染堂と同時代の建立に係り、四方廻縁を繞らし、高欄を附す。袴腰の出張り少なく権衡の美に乏しと雖、構造手法よく室町期の特色を具ふ。以上三建築何れも國寶建造物に指定せらる。此地は往昔平景清の邸址と云ひ、現に其庭園にありしと傳ふる鼻燈籠あり。寺寶中、絹本着色八相涅槃圖一幅・木造阿彌陀



(寶蹟) (堂 東福寺伽藍圖)

如來坐像一幅・木造金剛二力士立像二軀(傳源慶作)は何れも國寶なり。彫刻は共に恩賜京都市博物館に出陳せられ、前者は定期式定印の彌陀像にして、藤原末期の作、後者は慶應の作に係る鎌倉期の遺形なり。

●東福寺塔頭。正應五年(一に永仁二年)白雲慧曉(佛照師)の開創に係り。後二修天聖聖壽寺の號を下賜せらる。慧曉は讃岐の人、比叡山に登りて行泉法師に師事し、法華支義を學ぶ。十七歳得度受具、二十五歳泉涌寺に投じ、開觀律師に就く。後東福寺の聖一國師に參す。文永三年入宋、瑞巖寺の希聖宗室に謁して大悟する所あり、即ち杖拂を附せらる。歸朝の後東福寺に在りしが、晩年常庵を創して常所に住す。永仁五年十二月二十五日入寂す。開創以來、曾て住持職をおかず、輪番制なりしが、昭和五年、現住大喜、初めて入りて第二世住持となる。古來、皇室との關係深く、現に菊花紋章を許可せらる。現に東福寺特例地として其派下に靈雲院、大機院、同聚院、一華院、善慧院の五院あり。

●境内三千坪、本堂・庫裡・寶藏・山門・支關等を具ふ。寺寶には天目中峰和尚佛照師畫像一幅・希聖宗室柱杖一握・佛照師贊釋迦左右墨梅三幅・聖一國師書簡・檀子品筆羅漢像六幅・性徹和尚草草根集十册一箱等を藏す。境内に歇聖散書記(松月庵正歌)の碑あり。

龍吟庵

京都市東山區本町十五丁目。

●臨濟宗東福寺派。

●東福寺塔頭。正應四年秋、東福寺第三世、南禪寺開祖無獨門(大明國師)の創建なり。同年十二月十二日國師遷化し、茲に奉養す。現に東福寺特例地として其派下に莊嚴院、桂昌院、即宗院、願成寺、芬陀利華院、東光寺、天得院の七箇院あり。

●堂内、御樂の間は龜山天皇數日の間御手づから國師の爲に湯茶の勞を擲はせ給ひし御室なりと云ふ。今境内に國師の塔あり、靈元塔と云ふ。足利尊氏之に額字せり。寛政二年の擴築に係る。

●開山忌(十二月二十二日)。

●靈雲院 京都市東山區本町十五丁目。

●臨濟宗東福寺派。

●絹土山と號し、東福寺塔頭にして、現に聖蹟庵下に屬す。明徳元年の創建にして、東福寺第百八世岐陽方秀之が開基たり。方秀、五十八歳にして天龍寺を領せしが、俄かに風痺に罹り、後ち稍々瘥えて南禪寺に遷り、未だ幾許ならずして東福寺山内に不二庵を築きて之に退く。本院是れなり。方秀は廣く經書に通じ、殊に明徳四年我が使船四書及び詩經集傳等を舶載するや初めて之を講じ、程朱の新註を公開し、將軍足利義持の歸依を受けしが、六世集雲亦文雅を愛し、後陽成天皇屢々禁中に召問し給ふ。七世淵雪肥後太守細川忠利と心交厚く、愛敬の益石を贈り、淵雪これに林道春、松永昌三、石川丈山、澤庵和尚等に請て記文をなせしむ。文化年間、靈雲院と改稱し、以て現在に至る。

●境内三千餘坪。本堂・書院・茶席・表門等の堂宇あり。寺寶中、絹本着色岐陽和尚像一幅は應永二十七年の自贊あり、國寶に指定せらる。其他宋版、五山版の書籍、前記岐陽師遺愛石並に記文二卷等を藏す



開山忌(三月三日)

靈源院 京都市東山区本町十五丁目。

臨濟宗東福寺派。

東福寺塔頭。在光善護、應永初年の創建に係り、其師龍泉令淨を開山とす。後水野和泉守之を中興す。現に海蔵院下に屬す。

境内千五坪。寺寶中絹本着色在光善像一幅は明光の筆にして在光の贊あり。紙本着色松山集二册・北越吟一册・海藏和尚紀年録一册の三書は、龍泉令淨の著にして、以上四點何れも國寶たり。

孟蘭盆大施儀集會(八月八日)、開山忌(三月四日)。

法性寺

京都市東山区本町十六丁目。

淨土宗西山派。

本寺舊地は鴨河の東、九條の南、現に法性寺大路の名を存する所にして、藤原忠平之を開創し、延暦寺座主法性房尊意の名に因みて法性寺と號す。延長三年五月、新堂の供養會を修し、始め辨日、後餘慶入りて座主となる。當時境内方八町、堂塔伽藍發榮を速け、莊嚴四邊を壓したりと云ふ。同七年九月、忠平の子四人、當寺に其父の五十年の賀齋會を修して金造兼師知來像を安置し、且つ六角殿内に養賢淨土の圖を描く。承平四年十月、定額寺に列し、尊意當寺に灌頂を始修す。同七年十二月、當寺に佛經を度す。天曆八年、塔婆落慶し、寛弘三年七月、五大堂を建立す。長元五年十二月、舊九條殿殿上の際、當寺亦之に類焼して堂宇烏有に歸す。其後頗久しかりしが、久安四年七月、藤原忠通諸堂を再建し、新堂供養の御、特に鳥羽

法皇臨幸あり。應保二年、忠通六十六歳にして當寺に隱棲、法性寺殿と稱せらる。永萬元年、關白藤原伊通周忌に方りて西御堂を供養す。正治元年、藤原兼實寺内に第宅を構へ、こゝに移住す。宣和門院應永臨幸あり、尊崇淺からざりき。建永二年二月、源空(法然)配流の際、兼實の計らひにより一夜西御堂に泊す。後應仁の兵火に遭ひて堂宇兼實悉く燒亡し、僅かに本尊三面千手觀音像外數軀を残すのみ。

爾來久しく頗廢の儘なりしが、後三西面千手觀音を現の地に移し、堂宇を再建し、淨土宗の寺とし、以て今日に及ぶ。



(寺性法)

堂宇に本堂・庫裡を具ふ。寺寶中、木造三面千手觀音立像一軀は現に國寶に列せられ、藤原時代の佳作にして、舊法性寺灌頂堂の本尊なりと傳へ、現存佛像中の異例に屬し、注目すべき遺品なり。

養源院

京都市東山区三十三間堂廻。

天台宗。

蓮華王院(三十三間堂)

京都市東山区三十三間堂廻。

天台宗。

舊くは法住寺の一院にして現に妙法院所屬の境外佛堂なり。俗に三十三間堂の名を以て字内に著聞す。長寛二年、後白河法皇の院宣により、平清盛之を造營し、内に一千一體の千手觀音及び二十八部衆を安置す。僧正尋常導師となり、同年十二月十七日、之が落慶供養を修す。もも寺城の東南に法住寺殿あり、上皇、之に移りて當院を專管し給ひしが、建久二年、法住寺と共に妙法院の昌靈に附せられ、爾後妙法院の所管となる。仁安二年以後、不動堂、鎮守社、五重塔、北斗堂等順次造立せられ、諸堂輪奐壯麗を極めし。元暦二年七月、落中に震災あり、得長壽院(鳥羽上皇御建立)最勝光院(建春門院御願寺)等と共に倒壊す。仍て建久二年、中原廣元、同規能等源賴朝の命により、堂宇を修造せし事吾妻鏡に見ゆ。然るに建長元年三月、實藏堂に鎮守廟を除き、塔婆、本堂、北斗堂等悉く祝融の災に罹りて表上す。同三年、再建に着手し、八月十日上棟式行はる。文永三年四月、諸堂悉く成るや、龜山天皇、後醍醐、後深草兩天皇臨幸、落慶供養會修せらる。後ち慶長、慶安、享保の各年間に堂舎を修營す。明治十五年、西大門(俗稱大佛の崩れ門)を教主護國寺(東寺)に移して其南大門となす。近年本堂を修營して現在に至る。

堂宇中、本堂(桁行三十五間、梁間五間、向拜七間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺)は俗に三十三間堂と稱せられ、實尺桁行六十五間二尺三寸、梁間九間一尺八寸五分、柱百五十八本あり。建長三年の造營、慶長、慶安、享保の各度到大修理を経たり。廻縁を以て四周し、前面中央に三間の向拜を設け、前面悉く板唐



(寶國)(堂本院王華蓮)

戸を嵌入す。其結構は、長寛二年造立當初のもの之規を一にし、姿態権衡を缺くも深き破風の位置は緩やかなる屋蓋の勾配と相對し優雅なる趣致あり、建長三年の造營とするも、寧ろ藤原期の面影を留めたり。されど細部の手法に鎌倉時代の特色を存す。廊下甚しき

文祿三年、淺井長政道福の爲め其女道君之を創建し、寺號、長政の法號養源院に因み、長政の遺子成伯法印之が開山たり。同四年、秀吉朱印三百石を附し、慶長二年、兼衣勅許を蒙る。後ち回祿のこゝあり、元和七年、徳川秀忠夫人(淀君の妹伊豫)重興し、桃山城の舊殿材を以て造營す。是れ現今の建築なり。天井は慶長五年關ヶ原役前、大阪方軍の爲に桃山城に圍まれし徳川方の將鳥井元忠等が自盡の板間を張りしものにして今日尙は血痕を見ることを得、俗に血天井として著聞す。第三世慶算の時、輪王寺宮の御奏請により毘沙門堂脇門前となり、當寺住持は大僧正たるの寺格に昇進し、朝廷への諸願總て直奏たりき。もも塔頭數院を有せしも今は廢絶せり。

寺城舊法住寺址の一部にして、境内三千五百坪を有す。本堂・元三大師堂・歡喜天堂等あり。堂内松の間横八面・殘戸横四面・杉戸四枚何れも徳川宗連の筆と傳へ、國寶に指定せらる。この他都林泉名所圖會に據れば、大客殿欄間の間・南扉杉戸二枚・小客殿簾の圖・菊竹の間・菊の間等すべて宗連の筆に係る圖ありといふ。松の間は全部金襴に青緑を以て大松樹を描き、二三の岩石を配せるに過ぎざるも、布局雄大

着色豐麗、桃山式手法の他に一機軸を出せり。杉戸四枚の内西側の二枚は東面扉、西面獅子を描き、東側の二枚は東面象、西面獅子を描し、其大膽なる畫技は後人の追隨を許さず。落款の微すべきものなきも宗連筆たること疑ひなく、畫史會要にも「京大佛養源院杉戸宗連筆」と記せり。其他豐臣秀頼公畫像、淺井長政畫像、豐臣秀忠夫人畫像其他を藏す。附近に後白河天皇法住寺院あり。

大般若轉讀會(正月、五月、九月の吉日)

徳川時代殊に盛行す。堂の内外相間に存する大小無數の古額は其數と姓名を記して奉納せるもの、其最も多きは貞享三年紀州藩士和佐大三郎の八千三百三十三本なりとす。南大門は八脚門、屋根切妻造、本瓦葺にして、鎌倉時代の創建なれども、現存のものは豊臣秀吉の造營に係る。形構雄大にして、手法殊に自由瀟灑能く桃山時代の精神を表現す。兩建築共に現に國寶建遺物なり。本尊木造千手觀音世音菩薩像一軀は後述の二十八部衆と共に建長三年、後深草天皇の勅を奉じ大佛師深慶、小佛師唐國、唐清等の作れるものにして十一尺餘の巨像なり。台座は十重、船形後光には三十三化身を配し、天蓋を頭上に戴く。肢體の均衡配置極めて良く當代彫刻中の傑作なり。木造二十八部衆立像二十八軀は何れも玉眼嵌入、全身には鍍金彩色を施し刀法殊に雄渾堅實、各軀の形相變化の妙を極む。現に此内八軀は恩賜京都博物館に出陳せらる。木造風神雷神像二軀と共に以上悉く國寶に指定せらる。寺城東方に後白河天皇御陵、藤原良房の墓あり。

戒光寺

京都市東山区泉涌寺山ノ内町。

眞言宗泉涌寺派。

泉涌寺塔頭に於て、準別格寺院たり。僧堂照(淨業字は法忍)律學を修して安貞二年、宋より歸朝するや、京師に入りて盛に律法を説き、後堀河天皇の勅命を奉じて本寺を八條の北堀川の西に建て、律義興行の法窟となす。後ち之を法弟淨因に附し再び入宋せしが、歸來後、更に東林寺を創して本寺の子院とせり。其後、本寺は一條小川に轉じ、更に天正年間三條の北京極の東に移れり。後關成天皇皇后深く本寺本尊を御尊崇あり、御誓願ありて皇子(後水尾天皇)御臨



生ありしかば、年々六十石の供養を賜ひ、後西院天皇の御宇、本堂建立せられ、萬治二年二月、三條より泉涌寺山内に移る。因みに東林寺は白河古園及び中京師内外地圖等に依りて東福寺の西に存せし事を知らるも、爾後實類遂に廢滅す。

●境内千三百坪。本堂・禮拜堂等あり。本尊木造釋迦如来立像一軀は國寶にして、玉眼入、肉身金泥、經衣極彩色、面貌衣帶等に宋畫の影響を看取し得べく、鎌倉末期の製作たり。古來開運出世英難厄除の驗揚局なる尊像として世に著はる。

雲龍院

京都市東山区今熊野泉山。

眞言宗泉涌寺派

●泉涌寺別院なり。後光嚴天皇の勅により竹廣聖象の開創に係る。後光嚴、後圓融、後小松三天皇の御歸還厚く、屢次、本寺に臨幸せらる。後圓融天皇は特に如法高經を料として揚州伊川庄を御寄進ありしが、應仁の兵火に罹りて一山焦土と化するや、妙法高經の法儀も退轉し所領亦沒收せらる。寛永年間、住持如周後水尾天皇の御親信を享け、同十九年四月、後圓融天皇二百五十回の御忌に當り、如法高經を復興せしめられ、以て今日に至る。

●後光嚴・後圓融二天皇の宸影を安置す。今後山に三天皇の御殿あり。

●如法高經會(六月八日より十四日)。

觀音寺

京都市東山区今熊野泉山。

●眞言宗泉涌寺派。●俗に今熊野觀音と稱し、西國三十三所中第十五番

札所なり。現に泉涌寺塔頭に於て、准別格寺たり。天長年間、空海此地に草堂を建て觀音像を彫みて安置す。齊衡年間、藤原緒嗣御齋僧房を造營す。文暦元年八月後堀河上皇崩じ給ふや、本寺に轉し奉り。應仁の兵亂に諸堂宇大破せしが、爾後漸次復興、以て現在に至る。



(堂本寺音觀)

泉涌寺

京都市東山区今熊野泉山。

●眞言宗泉涌寺派。

●境内四萬千八百餘坪。東山の最南今熊野の幽邃なる淨地に位置し、老松鬱蒼たる間に諸堂を建ぬ。佛殿は重層入母屋造、本瓦葺の建築にして西面す。中に釋迦・彌陀の三尊を安置す。舍利殿は佛殿の東に在り、後佛の弟子深海が宋國白蓮寺より將來せし佛牙舍利を奉安せり。其後方に開山堂ありて後佛の像を安置し、張即之筆泉涌寺の額を掲ぐ。靈明殿は寛文八年の創建にして、歷代天皇、皇妃の尊牌を安置し、後西院上皇宸影の額を掲ぐ。釋迦堂には釋元禪師將來の三平釋迦像、觀音堂には深海將來の玄宗皇帝が楊貴妃の爲に作らしめしものと傳ふる聖觀音像を安置す。所藏の紙本墨畫後佛附法狀一紙(嘉祥三年二月二十三日、恩賜京都博物館出品中)、同中御門天皇宸筆正法國師加號勅書一紙(享保十一年二月八日)、彩繪聖德太子像(同前)・大刀一口(館大和則長、持統卷大刀、東京遊就館出品中)は國寶に指定せられ、其他明光筆絹本着色釋迦三尊像一紙・宋の周丹士筆等の後佛像三幅・古洞筆涅槃像・絹本着色草鞋天像等を藏す。境内に泉涌水、夢の浮橋等の名跡あり。本寺後山に四條天皇陵以下の月輪十二陵、後光嚴・後圓融・後小松各天皇の泉涌寺陵・光格・仁孝兩天皇の後月輪陵・孝明天皇の後月輪東山陵・英照皇太后の後月輪東山東北陵等存す。



(寺涌泉)

●境内千三百坪。本堂・禮拜堂等あり。本尊木造釋迦如来立像一軀は國寶にして、玉眼入、肉身金泥、經衣極彩色、面貌衣帶等に宋畫の影響を看取し得べく、鎌倉末期の製作たり。古來開運出世英難厄除の驗揚局なる尊像として世に著はる。

●當派本山にして、古來、皇室至聖院として著聞す。天長年間、空海此地に一字の佛舎を營み、法輪寺と號せしが、爾後次第に衰頽せり。降りて齊衡二年、藤原緒嗣、僧神修に歸して之を再興し、仙遊寺と改號す。建暦元年、所謂北宮律興行の祖後白(月輪大師)南山律を究めて宋より歸朝するや、大和守中原信房深く之れに歸依し、建保六年、其請に依りて遂に本寺に入る。時に本寺の荒廢甚し。後佛即ち承元二年十月、勅遣諸を作り、堂宇再興の志を後鳥羽上皇に奏するや、上皇嘉納ありて、其實を賜ふ。伽藍成るの時清泉涌出の瑞あり、依て泉涌寺と改め、台、密、禪、律四宗を兼學し、併せて武法興隆の根本道場となす。貞應三年秋、官符を賜はりて、勅官寺に列せらる。嘉祥三年、重圓講堂を建立し、翌年安居並びに講席を啓く。二儀皆宋士の規に則り、法制軌則肅然たるものありしと云ふ。仁治三年五月、四條天皇崩じらるや、之を本寺に葬し奉りしより以後、歷朝の山陵多くは本寺城内に設けられ、歷代皇室の廟所として他に異なる尊崇を享く。即ち四條、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園天皇の月輪十二陵、後光嚴、後圓融、後小松天皇の泉涌寺陵、光格、仁孝兩天皇の後月輪陵、孝明天皇後月輪東山陵、英照皇太后後月輪東山東北陵等はなり。應仁二年八月、兵火に燒かれて諸堂悉く灰燼に歸す。後土御門天皇直に再興の輪旨を賜ひしも、時に亂世遂に其功を究みせず。織田信長長畿に勢を得るや、天正三年正親町天皇の勅を奉じて再興に着手せしむ、之れ亦成就を見ず中途に止む。次で豐臣秀吉寺領五百八十石を附し、徳川氏千三百石に増録す。寛文四年、後水尾天皇の勅願によりて再興を企てられ、佛殿、釋迦堂、舍利塔、開山堂、中門、方丈等逐年造營せられ、同九年遂に竣工、漸く

舊觀に復す。爾來、特に御陵寺たるの故を以て修理意の事なかりき。慶應元年、朝廷制して本寺を海内各寺院の上座に列す。明治四年九月、勅願所及び勅修の法會廢せらるや、内裏の佛像、諸寺の尊牌等本寺に悉く移安せらる。明治五年、兼學を廢止して、現宗に定め同十五年十月、尊牌殿、庫院等其上せしが、同十七年、宮内省より之を遺營す塔頭の主なるものに靈龍院(同項、參照)、法安寺(同項、參照)、悲田院(も)、洛北大應寺の地あり、文

法安寺

京都市東山区今熊野泉山。

●眞言宗泉涌寺派。●一に保安寺に作る。虛無僧の本寺なり。開基年代共に詳にせず。初め、伏見大龜谷の地にあり、光明天皇御落飾の後御座ありし寺なりしが、後年茲に寺基を移轉す。

延仁寺

京都市東山区今熊野總山。

●眞言宗大谷派。●洛東山と號し、觀音茶毘所の舊地として著聞す。此地古の葬地鳥邊野の南邊にして、藤原氏累代の墓寺亦此處に在りしと云ふ。弘長二年十一月二十八日、觀覽九十歳を一期として、押小路南、萬里小路東の禪房に示寂するや、其遺骸を本寺に於て茶毘に附す。即ち覺如の觀覽傳卷下に曰「はるかに河東の路を歴て洛



陽東山の西麓、鳥邊野の南のほとり、延仁寺に奉納... 其後、觀應二年一月十九日、本願寺三世覺如亦本寺の原上に移らる。爾來、眞宗門徒の歸崇遠からざりしが、應仁の大亂後、寺運大いに退轉し、一時茶毘所の所在埋没に歸せり。文政年間、佛光寺派僧大行寺僧曉、安政年間、泉涌寺の湛然等、現今の地を以て茶毘所の實跡なりとし、次いで泉州大津村南派寺洗心之が復興に務む。明治十六年に至り、大谷派本願寺二十一世世如沙汰して茶毘所の地並に延仁寺の舊地を求め、泉涌寺に保管ありし本尊阿彌陀像を迎へて再興し、以て今日に至る。

●境内三百七十坪。本尊阿彌陀如來の他に地藏尊一區あり。觀應迎地蔵尊又北向日地藏尊と呼ばれ、現覺還勢の初化僧となりて鴨川の邊に迎へたりと傳ふ。境内に明治三十七年一月十七日、靈宗の極、東本願寺大門前にて自盡せし見玉治郎吉の墓あり。寺域北方二町餘にして觀覺茶毘所に達す。

毘沙門堂

京都市東山区山科安見毘沙門堂町。

●天台宗。當宗門跡寺院の一なり。本寺靈龜遠く天武天皇大寶年間ありと傳ふるも、延暦年間、傳教大師最澄草庵を京北出雲路に構へ、自刻毘沙門天像を安置して護法山安國院出雲寺と號せしを以て起源とす。世之を稱して毘沙門堂と呼ぶ。後、漸く興隆し、延喜式には七寺の隨一となり、落北の巨刹として、法親王の御住院となりしかば又毘沙門堂門跡と云へり。平治の亂後、應保元年北岩倉に移る。長寛元年復び兵火に罹り永萬元年、之を大原來迎院に移し、堂宇を建立す。建久六年、民部卿入道圓智出雲寺の舊地に堂宇を再建す。



(堂本堂門沙見)

後、應仁の兵火に三度炎上せしが、直に再建せらる。天正年間、織田信長の爲に焼かれ、四度堂宇灰燼に歸す。爾後數十年荒廢に委せられてたゞ寺名のみを存せしが、慶長十六年、後陽成天皇天海僧正に勅して、重興を計らしめ給ひ、幕府亦安祥寺増城を劃きて寺域に充てしめ、果さずして天海示寂す。仍りて其高足久遠壽院公海其志を繼ぎて寛文五年遂に現地に再興す。次で後西院天皇第六皇子公辨法親王入室あり、貞享三年、後西院天皇の舊殿を賜はり新書院を遺營し、寺域千七百十石を享け、寺勢半り殿閣亦整備するに至る。爾來法親王相次いで入寺し、毘沙門堂門跡號を公稱し、日光山輪王寺の靈寶所たりしが、明治維新後、更に延暦寺直屬となれり。現に塔頭として双林院(寛文五年創建)、龍華院(元禄十七年創建)、妙光院(寛文五年創建)の三院を有す。

安祥寺

京都市東山区山科御陵平林町。

●古義眞言宗。吉祥山と號し當宗門跡寺院の一なり。俗に高野堂と稱す。仁壽年中、清和天皇御母、五條后藤原順子の本願により靈雲之を創建す。初め靈雲、承和五年入唐し、同十四年佛經卷を携へて歸朝す。仁壽年中、五條后の御願により山上山下の堂宇伽藍を建立し、唐の御眞筆類多數藏す。

岩屋寺

京都市東山区山科西野。

●曹洞宗。神遊山と號し、天壽寺末なり、創建年代不詳。本尊不動明王は智證大師の作と傳へ大石其雄の念持佛たりしと云ふ。久しく荒廢の儘なりしを嘉永年間、一尼僧京都町奉行淺野長許等に授養を受け之を再興す。●境内四百二十坪。本堂・毘沙門堂等を具へ、毘沙門堂には本尊の左右に四十七士の木像を安置す。寺寶に四十七士の位牌、淺野長許畫像、大石其雄遺品、赤穂城勅書、大高源音遺言狀等を藏す。●義士忌(十一月十四日)。

十禪寺

京都市東山区山科四宮町。

●天台宗寺門派。●楊柳山と號し、一に河原觀音堂と號す。仁明天皇の第四皇子人康親王(山科宮)の御所址たり。親王深く禪門に歸依せられ、自ら法性禪師と號せられしが、貞觀年中、養老の後宮殿を改めて寺刹とし、親王を以て開祖とす。往時御藏安社を極めしも、嘉吉より承應年間に至るまで八回の回縁に罹り、寺觀悉く廢壊す。承應二年、眞慶之を中興し堂宇を再建す。明暦元年、明正天皇深く本寺本尊に歸依せられ、二重高閣を賜ひ重興し、特に祈願寺となし、勅額を賜ひ、院家大僧正地とせらる。元禄十五年十二月、徳川氏之に三十六石の朱印狀を附す。●境内二百五十坪。本堂佛龕龕風上に十禪寺の額を

徳林

京都市東山区山科四宮泉水町。

●臨濟宗南禪寺派。●天文年間、南禪寺靈英正悟禪師の開創にして靈慶作と傳ふる聖觀音を本尊とす。爾後之沿革不詳なり。●境外佛堂に山科地蔵堂あり、洛陽六地蔵の一にして、舊時は近郷の共同所管なりしが、今本寺の所轄に屬す。保元二年七月、平清盛の發



(堂藏地科山)



願により、伏見六地藏堂(大善寺項參照)より茲に分祀されしものと傳ふ。六道に因みて六角の堂に臺上八尺五寸の地藏菩薩像を安置す。

山科別院(山科)

京都市東山区山科竹鼻堂ノ前町。

眞宗大谷派

山科東御坊と稱し正しくは長福寺と稱す。文明十二年蓮如創建の松林山本願寺に淵源を發し、本願寺派山科別院と同系なり。同項參照(享保十七年、大谷派本願寺十七世眞如久しく荒廢せし本願寺址の畔に本山寺内の長福寺を移し、元文元年二月、工を竣り三月落慶法要を修す。同四年三月大門落成の供養を行ふ。天明七年兼如堂宇を再興し以て現今に及ぶ。



(景全院別院山)

西宗寺

京都市東山区山科西野廣見町。

眞宗本願寺派

放意山と號す。文明十三年、蓮如の法弟淨乘の開創に係る。淨乘は俗性を海老名遠江守五郎左衛門尉信忠と云ひ、深く蓮如に歸敬し、遂に其門に入る。文明九年自己所有の地に御堂建立を願ひしが、同十三年、本寺の建立を終ふ。其子結信、明應八年二月、蓮如示寂に際し、上人自高の影像を與へらる。是れ所謂蓮如形見の御影なり。天文元年秋、本願寺、大阪石山に寺基を移すや、蓮如、結信に命じて中祖蓮如の墳塋を監守せしむ。爾後數世其子孫相繼いで御佛修理に任ず。境内千九百一坪、本堂に本尊阿彌陀如來・蓮如筆宗祖畫像・蓮如自作木像等を安んず。此地また蓮如入寂の遺址南殿の舊地と云へり。寺寶として蓮如筆山科本願寺建立勅章一通を藏す。

山科別院(西御坊)

京都市東山区山科東野廣見町。

眞宗本願寺派

享保十七年、西本願寺第十五世住如の建立に係り、山科西御坊と云ふ。是れより先き文明七年本願寺

八世蓮如、越前吉崎を出で近畿に歸來し、河内、和泉、紀伊の間を行化せしが、同九年十月、金嶽道西(善從)山科の地に一字の建立を遂げず。依りて同地野村の里に地を相し、同十一年三月土木の工を起す。同十二年八月、祖堂先づ成り、十一月近江近松より祖像を遷す。更に同十三年、本堂成るや、號して松林山本願寺と云ひ、以て一宗の本寺となす。

眞宗本願寺派

買如の時細川氏の變に當り祖像を奉じて難を近江國堅田に避け翌年十一月、歸山せり。同十三年四月、小佛殿を野村南殿の傍に營む。天文元年、六角定頼日蓮宗徒と共に來寇し、堂宇爲に燒毀せられしを以て、蓮如寺基を大阪石山に移轉せり。二水記に「天文元年八月廿四日、山科本願寺に於て早且より合戰、已刻許政落之、抑本願寺者四五代に及び、寺中廣大、寺邊莊嚴只佛國の如し、在家も亦落中に異ならず、今日一時に滅亡して、



(前本人上如蓮)

元慶寺

京都市東山区山科北花山河原町。

天台宗

華頂山觀中院と號し、一に應徳寺又は東山寺と稱へ、俗に花山寺と云ふ。延喜式に花山寺觀中院とあり。其寺系圖に觀中院は即ち僧遍昭の遺堂なりとす。元享釋書によれば初め、清和天皇貞觀十八年、勅に依りて御堂を建立し、遍昭之に止住す。翌年陽成天皇即位次で改元に當り、此の年十二月、年號に取つて元慶寺と號す。同時に勅詔ありて定額寺にして、年分度者三人を賜ひ、大悲胎藏院、金剛頂業、摩訶止觀業を修せしむ。當初、天台宗に屬して今の地より西北山上寺ノ内にあり。仁和二年九月、近江國高島郡の内寺領百五十三町を賜はる。同三年、封戸を寄せらる。次で遍昭弟子五大院安樂之に住して二世住り。花山天皇寛和二年六月二十三日、潛に此寺に行幸ありて、尋覺に就き佛佛し給ひ、法名入覺と稱せらる。當時寺門頗る盛にして公家恒例讀經を行ひし二十一箇寺の隨一たり。後ち、應仁の兵燹に罹りて一時中絶せしが、明應、萬治の頃に至り、愚堂東定今の地に再興し禪宗に改む。天明三年、(一)に安永八年)妙嚴、妙法院一品入道慈基親王の遺志を奉じ堂舎を再建し、本宗に復す。

法嚴寺

京都市東山区山科小山町。

法相宗

牛尾山と號し、世に清水寺奥院と云ふ。もと嚴法師と稱す。寶龜年間、清水寺開山延鏡、木津川の源にて行寂居士に奇遇し、後ち其足跡を尋ねて此地に來り一字を創建す。是れ清水寺の派屬にして、今同寺奥ノ院と呼ばる、所以なり。往時は現地に四五町山上に在り、て巖然たる伽藍なりしが、中世大いに衰頹し、近世に到り漸く再興す。

勸修寺

京都市東山区山科勸修寺仁王堂町。

眞言宗山階派

龜甲山と號し、現に當宗大本山にして、門跡寺院の一なり。一にクワジエジと訓す。此地初め宇治郡大領宮道徳益の邑たりしが、徳益の女列子、藤原高藤に嫁し一女を生み胤子と云ふ。胤子字多天皇の妃となり醍醐天皇を生む。寛平八年六月、小野山陵に傳らる。同九年、醍醐天皇即位せらるや、母后の御願を繼承し給ひ、高節の子右大臣定方をして、宮道氏の宅址に伽藍を建立せしめらる。昌泰三年、其工を竣へ、勸修寺と號し、東大寺僧承俊之が寺務を管掌す。延喜二年

念傳三昧の阿彌陀堂とて、沙頭に露の痕々たる哀れ也と見え、以て其壯大知るべきなり。爾後、山科本願寺址は本山の領有たりしも、久しく廢墟の儘なりしが、慶長年間、到り十二世蓮如、官符に請ふて蓮如の墳塋の傍に坊舎を建立せんとせしも聽されず、寛文年中、十四世寂如亦先志を繼ぎ之が再興を遂げんとせしが大谷派本山と舊址の件に就きて異議を生じ、之亦素志を果さず、享保十七年に至り十五世住如山科講の請に依り北山別院の堂宇を移して寺宇を營む。本院是れなり。寶曆年中、十七世法如講徒の請に依りて寺城を擴張し殿宇を再建せんと企て、安永元年三月に至りて工事竣成す。時に佛殿は縱橫十二間、舊本堂は之を改めて對面所となし、其他に香積厨、書院等増築修理せらる。天明元年三月、蓮如の三百回忌に先ち、鐘樓、鼓樓、接待所、集會所等を増設す。文政六年、十九世本如更に中祖堂を本堂の南に新築せり。

眞宗大谷派

境域三千九百餘坪を有し、本堂・中祖堂・鐘樓・鼓樓・集會所・香積厨・書院等を具備す。寺寶には蓮如上人自作木像一軀を藏す。當院の西半町(西野古屋敷)に中祖蓮如本廟あり。天文元年秋、本山石山移轉以來西宗寺統の監守する所たりしが、寛文年間、大谷派本山との間に該地に關して紛議を生じて決せず、爾來、本願寺派西宗寺、大谷派光顯寺共に之を守護せしが、維新後官有となる。同十五年監獄宣下の際し、二百十二坪の墓地を兩山に再下賜せられ、爾後兩山共同の監守に屬す。近年拜堂を改築す。同じく東南方數町の松林中に眞如、蓮如同じく東北三十町大字小山に眞如等の墓あり。



三月、其高弟清高別當職となる。同三年七月、天皇本寺僧綱以下百七十の高僧を請じ、寫經の法華經を供養せられ、同五年九月、定額寺に列し、年分度者を置き眞言、三論兩宗を兼習す。延長三年八月、贈皇太后胤



(堂本寺修勳)

子の追福の爲め別當職清高内院茶室及び院軍法華經の供養を修せらる。扶桑略記に依れば時に菅原茂淳卿願文を作り、小内記小野道風之を書きせりといふ。天曆元年五月、六條齊宮太子内親王多賀塔を供養せらる。

當時朝廷聖びに藤氏の歸崇厚く、所領亦多く堂塔、伽藍安莊にして、輪奐の美を極めたり。別當職は清高の後、貞譽、遷覺、雅慶、濟信、深覺、光慶、信覺、嚴覺、寛信と相繼ぎしが、就中、嚴覺、寛信は特に事に相に勝れ、嚴覺の内より所謂小野三流出づ。寛信即ち其隨一にして勸修寺流の祖なり。爾來、富山其本寺となれり。永祿元年九月、二百五十四町の寺領を附する旨の官符を賜ふ。元祿二年七月、大地震あり、ために諸堂宇傾倒す。後伏見天皇第七子寛胤法親王入寺せられてより、代々法親王の住持する所となり、宮門跡と定めらる。建武三年八月、長束坊回縁に攝る。嘉慶二年九月、足利義滿八幡の田領を寄進す。文明二年七月の時、兵燹に罹り、諸堂宇悉く烏有に歸せり。後ち直に再興せしむ。豊臣秀吉桃山築城に際し、換地を要請せしに之を容れざりしかば、秀吉の激怒を買ひ、文祿三年寺領の大半を失ひ、殿舎僧坊を毀ら、境内を横斷して深草の谷口より大津に通ずる道路を拓きしに依り大いに寺領を損じたり。爾來寺運漸く傾く。徳川氏の世に至り、寛永年中、宮殿を賜はり、野殿、書院を再興して寺觀稍や改まり、寛文九年、元祿八年の兩度の増修にて寺領一千二百石となる。延寶年間、假内侍所を下賜され、本堂を建立す。元祿十年、明正天皇の宮殿を賜ひて書院、書院を建立す。明治維新に際し、第三十二世清徳法親王に復舊の旨あり。山階宮親王の之なり。明治四十年十二月、隨心院、泉涌寺等と共に東寺より分離して一派を獨立す。もと塔頭に西竹林、慈惠院、普門院、密藏寺、金剛樂院等十二箇ありしが皆廢絶に歸す。現に末寺百五十七箇寺、教會所六を統ぶ。



(寶國) (院書寺修勳)

●寺域約一萬坪、本堂(佛殿)・講堂(五大堂)・靈明殿・辨天堂・書院・茶室(有樂齋)等の堂宇を具ふ。就中、書院は國寶建造物に指定せられ、文祿十年、明正天皇の宮殿を賜ひて書院、書院を建立す。明治維新に際し、第三十二世清徳法親王に復舊の旨あり。山階宮親王の之なり。明治四十年十二月、隨心院、泉涌寺等と共に東寺より分離して一派を獨立す。もと塔頭に西竹林、慈惠院、普門院、密藏寺、金剛樂院等十二箇ありしが皆廢絶に歸す。現に末寺百五十七箇寺、教會所六を統ぶ。

### 大黒寺

京都市伏見區富原町。

#### ●古義眞言宗

●初め長福寺と號し、空海の開基なりと傳ふ。元和元年、伏見奉行山口龍河守、薩摩島津氏の命を受け、武運長久の新願所と定め、現稱に改む。王政維新の際西郷隆盛等の志士屢次本寺に相會して天下の大事を議せしと云ふ。現に其居室を存す。

### 伏見別院

京都市伏見區大坂町。

#### ●眞宗大谷派

●創立及び沿革不詳なり。口碑に依れば、慶長年間本願寺十二世教如の創立にして、寺域は家康の寄する所、蓮池を埋めしを以て時人之を蓮池御坊と云ひ、又教如最初の創立なるを以て二葉御堂と呼びたりと傳へたり。蓋し家康伏見に在るや、教如之に屢次往復したるを以て其間建立の事ありしなるべし。其後、同十七世眞如之を再建し、時に從來東面せる本堂を南面せしむ。文久年間、殿舎を再營す。明治維新前迄本山の直轄なりしが、明治十八年、初めて崇敬部下を定め、移して地方維持となす。

### 安樂壽院

京都市伏見區竹田内畑町。

#### ●新義眞言宗智山派

●鳥羽宮東殿の地にして、保延三年十月、鳥羽上

して説法し、前後左右に菩薩聖閣圍繞し上方に歌舞せる飛天を刻繡す。貼付せらる。記録には延長三年醍醐天皇の寄進と云ふ。作の精妙なる中宮寺天壽國總攝と共に其比すべきものなし。蓮花壽樹經宮(増城金泥大日經等十三卷入)、紙本墨書仁王經眞言讀(傳空海筆)と共に何れも現に國寶に指定せられ、恩賜京都博物館に出陳せらる。此外、不動明王像一軀・愛染明王像一軀・歡喜天像一軀・十一面觀音像一軀(醍醐天皇御納物と傳ふ)、不動明王像一軀・鳥羽正軍受染明王畫像一軀・同十二天畫像十二幅・弘法大師筆兩尊茶室二幅等の重寶を藏す。附近勸修寺山上銅岡の地に藤原高藤の所謂小野墓あり。夫人列子の墓は小栗酒に在りて後ち小野墓と稱せらる。贈皇太后胤子陵は西方大日山上に存す。

### 隨心院

(小野門跡)京都市東山区山科小野御靈町

#### ●眞言宗普通派

●眞言宗普通派。仁海僧正、當地に一字を建立し、號して曼荼羅寺と云ひ、如意輪觀世音を本尊となす。これ本院の祖廟なり。第五世仁海は學徳一世に高く、屢次兩を祈りて驗あり、時人稱して兩の僧正と云ふ。仁海より成尊に傳へ、成尊より義範、範俊出でしが、二人正嫡を争ひ、遂に御室の愛媛と成るに及び盛大なりし曼荼羅寺漸く衰運に向ふ。範俊の内に勸修寺覺あり、覺の法弟増俊即ち入りて第五世となり、本寺を中興し始めて隨心院と稱す。而して小野三流の一隨心院流亦増俊を以て其流祖とす。第七世親嚴に至り、安祥寺流と隨心院流とを傳へ一異方を立つ。所謂觀嚴方と稱するものはなり。



皇、藤原家成に勅して佛殿を離宮内に創建せしめらる。金堂是れなり。地に因みて又東殿御堂と云ふ。時に覺行法親王之が導師たりき。本尊は鳥羽上皇の念持佛阿彌陀如来にして、胸邊に卍字あるを以て、卍字阿彌陀と云ふ。次で同五年、三層の寶塔成る。人呼ぶ本御塔と云ふ。久安四年、上皇寫筆の法華經を石函に納め、本御塔柱下に置き寺鎮となす。保元元年、七月鳥羽上皇崩じ給ふや、本寺に葬り、美福門院(藤原得子)本御塔の淨規に換し、五層の寶塔を建立す。安樂壽院院と稱す。保元二年、東塔(新御塔)成り、門院の墓塔所となるべかりしが、永曆元年十一月、其喪去に際し遺命して紀州高野山に葬らしめしより、長寛元年、先に崩御ありし(久壽二年七月)近衛天皇の御骨を洛北知足院より茲に移し奉る。今安樂壽院南院是なり。本寺並に所領は皇女八條院(美福門院所生)傳領し、春華門院、安樂門院より龜山、後宇多、後醍醐天皇の大覺寺統に傳領せらる。史上著名なる八條院領是れなり。其後衰頹し、又兵火に罹りしが、天正十三年、豐臣氏寺領五百石を附し、次で本御塔には佛殿を立て、近衛天皇の御殿には二層の寶塔を建つ。明治維新の後は二院(宮内省の直轄に屬し、寺領は土地となる。

●境内方一町に亘り、中に梅林あり、本堂は境内の北位に在り、所謂本御塔之れなり。鳥羽法皇崩御後本塔下に納め奉る。即ち安樂壽院院と稱せらる。所なり、本尊水遣阿彌陀如来に現に國寶にして、寺傳によれば鳥羽上皇の御念持佛なりと云ひ、一に卍字阿彌陀と稱せらる。繪巻、定印、十二重の寶座に坐し、舟形透彫の光背を有す。藤原時代の作なり。本御堂の南に新御塔あり、本尊は地藏菩薩にして、美福門院の念持佛なりと云ふ。脇壇に鳥羽上皇眞影並に美福門院、八條女院の御影を奉安す。新御塔の南に東面して多寶塔あり。

り。近衛天皇安樂壽院南院是れなり。塔は三間四方、慶長十一年豊臣秀頼の再建にして、御歴代御陵中唯一の古建築物なり。内陣に阿彌陀如来、外陣に大日如来の尊像を安置す。此外、新堂・東西兩門・赤門等を具ふ。本堂本尊阿彌陀如来の外、寺寶中國寶指定に係るもの次の如し。絹本着色孔雀明王像一幅は、肉身胡粉に朱筆を施し、優麗なる華文を描き、幾金を置く。書法精細、藤原時代の遺作なり。同書寶菩薩像一幅は、一童子の先導にて普賢菩薩像に乗り、變奴之を控へ、之に四菩薩の隨侍し、雲に乗せる圖にして、支那畫を模せるものなり。同阿彌陀二十五菩薩來迎圖一幅は彌陀三尊を始め諸菩薩が雲に乗じ、下に不動と毘沙門天とを描けるものにして來迎圖中特種なるものとして注目せらる。鎌倉末期の作なり。以上三點共に恩賜京都博物館に出陣せらる。尙ほ院の西方三町にして白河天皇成菩提院院あり。院前、松樹多し。

●本堂・鐘樓・歡喜天嗣・樂師堂等を具備す。本堂は北面し寢殿造なり。堂前に鳥羽院御遺愛松、西二町餘に白河天皇成菩提院院、西南二町に城南宮(式内眞轉寸神社)等あり。

●不動院(北向不動) 京都市伏見區竹田内畑町。

●西行庵 京都市伏見區竹田町。

●天台宗。●俗に北向不動の名を以て著聞す。大治五年、鳥羽上皇勅して、鳥羽宮東殿内に創建せしめ、王城鎮護寶許長久の勅願所となし給ふ。興教大師を開山とし、同大師作不動明王を本尊に安置す。佛堂北面せしより北向不動と稱せらる。久壽二年、藤原忠實勅を奉じて再興し、播磨大國庄を寺領に當つ。後藤原仁長兵衛に美上し、寺領亦土家の押領する所となる。文明六年再興せられしも、大永六年に復び美上し、文祿五年、震災に罹る。其後、寛永二年に至り諸堂修繕する。後水尾天皇御骨を下して其御前所に定め給ふ。明治十七年、宮内省より堂宇修繕料下賜せらる。現に當宗別格

●所屬宗派なし。●西行は俗姓を依藤義清と云ひ、鳥羽殿に侍する北面の士たりしが、故ありて僧となり一笠一杖を身に著け、潭泊の底をつゞく。詩懐到れば三十一字に賦し、自適の餘生を送る。今諸國に其の舊跡と傳ふるものあり、本地も亦其一にして、在俗時、鳥羽殿に奉仕せし頃の宅址なりと傳ふ。●堂内本尊は地藏尊なり。前庭中、月見池、割髮塔あり。

せしに依り、時の寺主康道、歡喜、眞宗二院を合して寺内に再興す。後次第に願殿におもむきしが、寛文五年、誓願寺離宮之を安樂行院の東方に中興し、以て深草一流の發源地を記念す。近年更に衰頹し、本堂又同様に罹り、幾に書院を残すのみなりしが、近年廟所を新築し、面目を一一新す。●寺境は古の深草院の光城に屬し、喜元二年、後深草天皇崩御の後此處に法華堂を建立し、其御骨を欲め奉る。後伏見、後伏見二天皇も亦同所に奉葬せられ給ひしが、本寺退傳の際之を安樂行院に移安し奉れりと云ふ。

●天台宗。●もと持明院の佛堂にして安樂行院と云ひ、今の上京區新町通寺ノ内が安樂小路町にありしと云ふ。後光嚴院の頃現地に移建すと云ふも確證なし。明應九年安樂行院内の法華堂に後土御門天皇を葬り奉る。菅原和長の記に、「本院者久遠轉、此一室相殘計也、平家(行願寺執行役等)とあれば、此頃既に廢頹せし事明かなり。其後再興せしと見え、弘治二年、後奈良院を葬り奉りしと云ひ、又御湯殿上日記元龜三年十二月二十二日の條に「ふかくさのあんらくさやうあんよりも御くわんしゆまゐる」とあり。寛文年間、僧空心之を再興し、嘉祥寺(仁壽年間、創建、後廢絶)號を繼承し以て現今に及ぶ。●寺南隣に後深草、伏見、後伏見、後光嚴、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成各天皇陵あり、深草法華堂陵と云ひ、又深草十二帝陵と稱す。

●深草山と號し、元政の廟を以て著はる。明暦元年元政上人古極樂寺師堂の遺址(藤原基經創建)に就き本寺を創建す。元政は近江彦根の人、初め菅原氏、後母氏の姓を習し石井元政と稱す。慶安二年、二十六歳にして妙顯寺日豐の門に投じ剃髮して日政と號す。明暦元年、茲に草庵を創し、父母を迎へて孝事す。萬治元年、父を喪ひ、翌年母に隨ひ身延山に詣り、歸途母を萬生井伊邸に託す。既にして母を具し復び深草に歸り、佛殿、僧坊を築き、深草山瑞光寺と號す。遠足宜翁を上座に擧げ、共に法華を行じ、持律頗る嚴なり。後世之を草山律又は法華律と稱す。寛文八年二月十八日、享壽四十六にして遂に本寺に寂を示す。元政特に文道に秀で石川丈山、清人陳元晉と交遊深く草山集三十卷、草山和歌集一卷の著あり。就中、紀行身延道の記は三論に値し、扶桑隱逸傳にては其風格を偲び得べし。尙ほ元政の後本寺は日輝、日隆等相承す。●寺城園遊園雅、堂宇亦之を土階草莊と號し、元政の風格を傳へたり。什寶中、紙本墨書大般若經卷第二百四十六(一帖)和銅五年の奥書あり。は國寶に指定せらる。他に元政の遺墨草山集等多く藏す。堂の西南竹林中に元政の墓あり、たゞ竹樹兩三竿を植えて墓標に代ふ。北路傍に古墳あり、一に陽成天皇外祖母藤原長真夫人(清和皇后高子母)の碑と云へども評ならず。今番神と稱するは法華宗の徒後世茲に三十番神堂を建てしによる。●元政忌(三月十八日)。

●淨土宗西山派。●眞宗末末なり。現奈良縣宇智郡榮山寺に傳存する道澄寺鐘(傳小野道風筆、國寶)の延喜十七年十一月三日の銘文に依るに本寺は大納言兼右近衛大將藤原道明參議左大臣藤原藤原權守橘澄清兩者の建立に係り、兩名の頭字を取りて寺號とす。時に堂宇南北に雲を列け輪奐の美を極むと云ふ。此鐘應仁の兵亂に割取せられ後榮山寺の所有に歸し、爾來天下三名鐘として同寺の重寶となる。本寺、舊道澄寺號を稱するも、既に舊時の遺制は失はれたり。

●嘉祥寺(安樂行院) 京都市伏見區深草坊町。

●眞宗院 京都市伏見區深草直達橋七丁目。

●眞宗本願寺派。●寺傳に、法性寺小御堂の舊跡にして、關白忠通の創建と傳ふ。忠通の子九條兼實殊に此地を愛し、依りて花園御殿とも稱せり。後白河法皇廢次當寺に御

●日蓮宗。●瑞光寺(元政庵) 京都市伏見區深草坊町。

●日蓮宗。●墨染寺 京都市伏見區深草墨染町。



●天正年間、豐臣秀吉の殊遇を享けし日秀尼(秀次母)の開創に係る。寺地は之れ清和天皇御降臨に際し寶神の無窮を祈りて藤原忠仁公(良房)の創建せし貞觀寺の故址なりと傳ふ。

佛國寺

●天王山と號す。延喜年間、黃檗山第五世高泉(性澄、大圓禪師)の開創にして、伏見御香宮殿氏寺地を寄す。靈元上皇よりは勅額を賜ひ、古來黃檗宗の一名刹たりしが、近年寺運漸々衰微、寺廢存時に及ばず。

●寺城、伏見桃山城址の東北角に位し、御香宮御旅所に接す。堂宇には天王殿・開山堂等あり。寺寶中、高泉和尚御碑一基は紙本墨書近衛家庶孫名草本二幅を附して國寶に指定せらる。碑は圓刻、支那風を模し龜を齧らす。筆者近衛家顯は豫樂院の稱を以て夙に入道史上に著る。本碑文は其楷書を窺ひ得る典型的雄作なり。

寶塔寺

●日蓮宗。

●深草山と號す。嘉祥年間、藤原基經創建に係り、もと極樂寺と稱す。延慶年間、寺司藤原良経、日蓮の法弟日像に論破され、其門に歸し、寺を改めて法華の道場とし、日像を開基に請す。後塔を築き日蓮、日蓮及び日像の遺骨を分瘞す。一宗の徒稱して御塔と云ふ。寶塔寺の號こゝに起る。其後、一時廢絶せしが、天正年間、日蓮之を再興し、輪奐然に復す。



(寶圖)寶塔寺本堂

●寺境七面山上にありて眺望佳絶、就中、花時の風景最も著る。四脚門(總門)・本堂・多寶塔・鐘樓・鐘守社(三十番神祠)・七面廟(身延七面社)・岡木の靈像を安置す。等を具備す。其中、多寶塔・四脚門は現に國寶建造物なり。多寶塔は三間二層塔、屋根本瓦葺にして、室町時代の建立に係る。軒端著しき反轉を有し、規模極めて小にして、手法唐樓の特色を存せしむ。甚だしき繪彫彫刻を加へず、上下兩層の欄間調和し、趣致優雅なり。四脚門は本寺の總門にして、屋根切妻造、本瓦葺、室町時代前期の遺構とす。其構造極めて簡素にして、屋根の勾配緩く、軒端の反轉亦微妙なり。全般の形態瀟灑、よく室町初頭の風調を存す。

月橋院

●曹洞宗。

●京都市伏見區桃山町奉長老。

●指月山と號す。文明年間、後土御門天皇の勅に依り善空此地に般舟三昧院を創建し、梵苑の内道場に擬せられしが、文祿三年、上京に移轉す(上京般舟三昧院項參照)。其後、其寺址に就き禪院を再興せらる。開基不詳なり。天正の末年、向島成成り、豐後橋架せられしより月橋院と號し、以て今日に及ぶ。

●寺地伏見の高丘に倚り、宇治川ラインの眺望殊に優る。附近に月見丘、月見池、指月庵址等の名蹟あり。

大善寺

●淨土宗。

●法雲山淨妙院と號し、洛陽六地蔵の隨一として著聞す。寺傳に文德天皇仁壽二年十二月、勅を奉じて圓珍諸堂宇を建立し淨妙院と號せしに創まり、小野菴六道能化の姿を象り、六體の地蔵尊を自刻して、安置すと云ふ。山城誌によれば寛弘二年、藤原道長が木料の東北御藏山麓に創建せし淨妙寺の一支部なりと稱す。此地、古來安其街道の正に京都に入る咽喉を扼する要地たりしより、帝都鎮護として地蔵尊を安置し、併せて旅路の安全を祈願せしものならむ。後保元二年平清盛の發願により此地に一體を殘し、餘の五體を山科(現、徳林庵)、鳥羽(現、淨壽寺)、桂(現、地蔵堂)、常盤(現、源光庵)、御香院池(現、上善寺)の六箇所に分配せりと云ふ。往時は天台宗、禪宗等に隨せし事ありしが如きも、現在には本宗知恩院末に屬す。

●本堂・地蔵堂(六角堂、六道に因むと云ふ)・觀音堂・鐘樓等を具備す。寺寶として寛文五年の奥書を有する六地蔵縁起一巻を藏す。

●地藏會(八月二十四日)。

懸塚寺

●淨土宗。

●利劍山と號し、近隣法傳寺の末寺なり。草創年代不詳、寺傳に遠藤盛遠、源渡が妻袈裟を懸ひ、終に其貞節に謀られ、誤りて女を斬る。即ち此地に來りて其首を埋め、堂宇を建立す。後人稱して懸塚寺と云ふ。然して上鳥羽小枝淨壽寺亦同じく懸塚寺と稱し、同様の傳説を存し、林羅山撰文の碑述てり。(下京區淨壽寺參照) ●本堂前面に懸塚あり。

光臺院

●眞言宗醍醐派。

●醍醐寺塔頭に於て、地蔵院流の本寺たり。寛喜三年、遍和院道教の開創に係る。永和二年五月、再建後ち又弘喜之を再興す。近世山内の加行所となり、其加行年間は門跡之に住するを以て故らに無住とす。明治十八年、圓明院の建物に此院號を附し、山上の事務所に充てしが同二十八年山下に寺基を移し、もと成身院の建物を以て之に充てたり。其寶藏には一山の古文書悉く蒐集せられ、六百有餘の函中に藏せらる。一として國史の資料たらざるはなし。什寶中、絹本着色文殊渡海圖一幅(恩賜京都博物館出陳中)・同地蔵菩薩像一面(奈良帝室博物館出陳中)・同尊勝曼荼羅圖一幅・紙本墨書不動明王像五幅は國寶に指定せらる。就中、文殊渡海圖は傳へて珍海の作と云ひ、文殊菩薩に架し

●醍醐王御を執り、善財童子先導し、遊戯仙人、佛陀渡利三藏隨從して白雲を踏みつ、海上を渡る圖にして、各者の配置よく、用筆著色整ひ、技巧殊に精妙なり。作期亦鎌倉初期を下らざるべく、此種作品の最古最優を以て目する。地蔵菩薩像は、鎌倉初期の作にして、總じて温雅なる趣致に富む。

金剛王院

●眞言宗醍醐派。

●醍醐寺塔頭の一にして、俗に一言寺と稱す。初め僧林神一字を營み西光院と號せしが、大治年間、源運これを改修し、本尊に愛染明王、兩尊曼荼羅を安置し金剛王院と改稱す。然して其師聖賢を開山に推す。聖賢は醍醐寺第十四世の座主にして三寶院の開闢たる覺の門に出で、一宗事相上に一義を立つ。所謂醍醐三流中の金剛王院流はれなり。爾來本院其本寺となり、三寶院以下の諸院と共に醍醐五門跡の一たり。明治二十八年附近の一言寺址(始め禪那院と稱し、阿波内侍眞阿の開創と傳へ、近世隨心院之を發端せしが、明治七年廢寺となる)に移りて再興せらる。現に當派別格本山たり。

●境内地千六百八十坪。境地甚だ清閑にして、堂宇に本堂(觀音堂)・内侍堂・庫裡等を具ふ。内侍堂は本堂の後にありて一に真堂と稱し阿波内侍像を安置す。地方道俗の詣するもの多し。

三寶院

●眞言宗醍醐派。

●京都市伏見區醍醐町。

●醍醐寺の一院にして現に同派大本山たり。古來理性院・金剛王院・無量壽院・報恩院と共に醍醐五門跡に數へられ、醍醐三流の隨一三寶院流の本寺にして、明治維新に至るまで修驗道當山派の本山たりき。永久三年十一月、醍醐寺第十四世の座主覺の開創に係る覺は源後房の男にして、嘗て義範、定賢、龍徳の三師に就て密法を受く



(寶圖)(門唐院寶三)

本尊大日、導師、釋迦の三尊並に兩尊曼荼羅を安置し始めて結緣灌頂を行ふ。鳥羽上皇命じて御願寺とし、阿闍梨數口を置かしめ給ふ。正治二年六月、火災に罹り、第七世成賢之を再興す。貞永元年、再び燒失し、經藏、四脚門のみしかに其災を免る。第十一世憲深碩學を以て醍醐寺の座主となり、報恩院を開きて三寶院



流幸心方の祖となる。時に寺運隆盛、坊舎五宇修築さる。後定濟に至りて愈々興隆す。定濟以後輪住の制を廢して獨住となる。文保二年二月又英す。第二十五世滿濟は今小路師冬の子にして、足利義滿の嫡子となり醍醐寺の座主となりて一山を檢校し、准三后に際る。是より先き醍醐寺の座主職は醍醐五門跡の交代補任たりしが、此時より三寶院門主の專任する所となる。永和年間、足利義持殿舎を修營せしが、應仁文明の兵火を経て寺境大いに荒廢す。既にして通海、金剛王輪院を建て、灌頂堂を再興せり。天正、慶長の際、義演、二條晴真の子を以て門主となる。豊臣秀吉大いに傾依し、慶長三年茲に觀櫻の宴を張るに當り、金剛王輪院の殿堂、庫院敷字を重修し、三寶院の堂舎に充て聚樂第の樹石を移して林泉を興す。其結構布置偏に秀吉の指揮に出づ。同十一年七月發成、寺領六百石を附す。古來門跡寺院として龜山院、後二條院、伏見院等の皇子、有栖川、伏見宮等各宮家の王子、又は五攝家より入りて之を重せしが、明治初年伏見宮王子易宮、閑院宮(義親王)御復御あり。門跡の稱號を廢せられしが、同十八年復び稱號を許され、宗内の碩徳之を繼席し以て今日に至る。現に醍醐一山を總管す。尙ほ修驗道醍醐法流に就きて一言すれば、往古聖賢小角の遺志を繼ぎ之を振興せしが、白河天皇の時に至りて二派に分れ本院と京都聖護院とに分屬す。爾來兩門徒互に爭論し先達と稱する者之を制する能はず。遂に本長十八年五月、徳川幕府令して之を二分し富山派、本山派と稱せしめ、各眞言天台の兩宗に依歸し、本院を以て富山派本山修驗道根本醍醐法流と定む。聖護院の熊野入を順峯と云ふに對し、三寶院は金峰よりするを以て逆峯と稱せり。明治五年、布告に依りて派號を廢し本院に歸入せしに依り、本院にては之を基印部と稱し、眞言部

と區別せしが、大正になりて此區別をも廢せり。●寺域五千九百八十一坪。奈良街道に面せり。一山の總門を入りて左側に本院諸殿宇存す。表門を入れば突當りに南面して玄關あり。單層、屋根正面入母屋造棧瓦葺にして、入母屋の正面に唐破風を造設す。次で藥の間、秋草の間あり、兩間共に屋根の形態略々前者と同じく、唐破風に存する玄關、幕設及び正面唐縁の高欄等に明かなる桃山時代の風調を存す。内部天井は竿縁天井にして西室の壁張りに賀茂祭圖を模寫す。東室は二室に分れ、奥の間を勅使間とす。口の間棧瓦葺は野山樂の軍に成れる秋草の圖を描く、前縁に大櫻樹あり。陽春櫻花の候欄に倚れば大開醍醐花見の宴を偲び得べし。表書院は桁行七十七尺九寸、梁間三十二



(泉林苑實三)

尺六寸、屋根入母屋造、棧瓦葺、前面右隅に切妻造の一屋出て泉池に臨めるは寢殿造に於ける泉殿の形式に成る。唐縁は高欄を以て繞らし、舞真戸、明障子、兩端の杉戸の裝飾等よく桃山時代の豪宕なる精神を發露す。内部は數室に分ち、襖繪は野野水徳、石田蘭汀等の筆に成る。前面の林泉は秀吉の意匠に成ると傳へ、中に泉水あり。東醍醐の山を望み、古樹奇石多く、景致極めて優雅、現に指定庭園たり。有名な藤戸石は足利氏の室町幕府に存し、當園築造の際秀吉之を寄すと云ふ。表書院の裏中庭を隔て、北に庫裡あり、單層屋根入母屋造、棧瓦葺にして、其の構造頗る簡素なり表書院より廊を登り、東に純淨觀あり。桁行五十五尺二寸餘、梁間三十尺餘、單層、屋根入母屋造、上部草葺、下部軒先廻棧瓦葺にして高欄を有し、下に低き舞臺造なり。其構造様式表書院と其規模を異にし、一見田舎家の如き、清談味あり。此の右側後方に寢殿あり、桁行四十九尺一寸、梁間四十二尺八寸、單層、屋根入母屋造、棧瓦葺、純然たる書院造にして、内部を上段の間とし、次ぎを四間に、上段の間後方も四間に分け學問所及び化粧間となす。上段の間に本床、造欄、帳臺等あり。殊に造欄は一に醍醐稱と稱し、意匠殊に觀るべし。襖障子、壁張りに野野派の墨畫あり。寢殿の後方に講堂あり、桁行五十三尺、梁間三十二尺五寸、屋根重層、上層本瓦葺、下層の扉は棧瓦葺にして悉く塗籠式の土蔵造の觀あり。此種建築物中最古のものとして注目せらる。以上の諸殿舎慶長三年、秀吉座主義演に命じて再建せしめ、同十一年發成せしものなり。各宇相連結して一大殿堂を形成す。然もこれを林泉の築山に立ちて臨むる時、玄關、表書院、純淨觀、本堂は一線上に相並び、各舎の構造一にせず、玄關より本堂に至るに隨ひ、棧高徐々に高く、變化の妙を極

む。全體の構造書院造なるも、尙ほ開池に臨みて突出せる舞臺造は泉殿の如く、又正面に上段あり、左右及び縁先に勾欄を廻らすは寢殿母屋の體裁にして彼此寢殿造の佛歷然たり。加之奥書院の襖の裝飾は表書院の夫に比して變化あり。即ち前者の武家造には水墨山水の清淡なる裝飾を以てし、前面庭園と連致を合せしめ、表書院の室々は華麗彩色にて花鳥風俗共に王朝時代の風ありて變化の度頗る人目を惹く。其建築の立面も唐破風、切妻破風を隨所に用ひ、瘦雜の間に、よく唐一せり。同時の建造物として寺前の櫻馬場に面し、唐門あり、一に勅使門と云ひ、三間平唐門、屋根檜皮葺にして秀吉の醍醐觀花亭の遺構なりと云ふ。形態整齊し、平唐門の一典型とすべく、門扉及び左右支柱間の板壁に菊桐紋を浮彫す。以上是等諸堂宇に能く秀吉一代の豪華を窺ひ得べく、すべて之れ現に國寶建造物なり。尙ほ本堂は純淨觀の東方にあり、一に彌勒堂と云ふ。本尊木造彌勒菩薩は、鎌倉時代の作に係り、現に國寶たり。本寺長く一山の座主坊たりしに依り、藏する所の名寶珍蹟頗る多し。殊に豊臣秀吉の恩顧厚かりしかば、其關係の寶物殊に多數なり。其中、國寶指定のものも列記すれば次の如し。絹本着色虚空藏菩薩像一幅(慶長時代初期作、恩賜京都博物館出陳)、同五秘密像一幅(鎌倉時代作)、同愛染明王像一幅(義演の昔書に寶泉の筆にして、慶長七年修覆の由を記す)、金地着色舞臺圖二曲屏(法橋宗達と號し、對青軒の印あり、恩賜京都博物館出陳)、同扇面散圖二曲屏(雙傳儀屋宗達筆、絹本着色詞聖帝母像一幅、絹本着色六字經曼荼羅圖一幅(應永十七年七月滿濟修覆の裏書あり)、螺鈿如意一柄、紙本墨書大日經開顯一卷(弘法大師筆)、同聖寶處分狀一卷(延喜七年六月二日)、紺紙金泥般若心經一卷(後奈良天皇宸筆)、紙本墨書理趣經一卷(

●眞言宗醍醐派。●深雪山、又笠取山或は萬葉山と號し、醍醐派の總本山たり。往古の二十五大寺の一にして西國三十三所第十一番札所たり。眞觀年間、聖賢(理源大師)の開創に係る。初め聖賢深草普明寺に住せしが、顯密修道の靈境を求めて富山に來り、山上に草廬を結び、準提、如意輪兩觀音像を刻み、同十八年、元慶寺通照を開眼導師として供養を修す。翌元慶元年、傍に住房を造營し、愛留曼荼羅圖寺と號す。是れ本寺の濫觴なり。醍醐天皇厚く聖賢を敬信せられ、延喜四年本寺に臨幸あり勅して山下に釋迦堂を建立せられ、同七年、山上に藥師堂、五大堂の二字を建營す。同十三年、定觀寺に列し、同十九年九月、官符を下して座主三綱を置き、寺領を附し、顯密の大遺蹟とせらる。此時聖賢既に示寂の後なりしかば、其弟子親賢命を拜して始めて本寺の座主となり、先師の遺訓の昭隆に務む。延長八年、醍醐天皇崩ぜらる、や、本寺の北畔に奉葬す。同九年六月、上座延賢の請により、諸國に命じて木材を採運せしめて諸堂を造營し、親王諸公相繼ひて其寶を寄附せり。天曆三年、朱雀上皇清涼殿を賜ひて法華三昧

堂を建立し給ひ、同五年、村上天皇、藤原忠平に命じて五重塔を建設せしめ給ひ、翌六年、落慶供養を修す。先に醍醐天皇の釋迦堂を創建し給ひしを以て、之を三代の御願と稱す。其他歴代君主崇敬して多く寺領を寄せしかば、寺運益々隆にして、山上山下に伽藍充満し當時本寺の境域東は岩間寺の西、西は檀河、南は桂御房堀、北は高河川に及びりと云ふ。康平二年十月第十二代座主覺源、其職を弟子定賢に譲る。この時始めて檢校職を置き、覺源を之に補す。應徳三年、白河天皇護持僧覺第十四世の座主職に就き、永久三年、寺中に三寶院を創す。康治二年十一月、鳥羽上皇詔して其御願寺となし給ふ。爾後、山下に金剛王院(聖賢、理性院(賢覺)、無量壽院(元海)、山上に報恩院(成賢)、光壽院(道教)等次いで興り、三寶院流、理性院流、金剛王院流、松橋流(無量壽院)、地藏院流(光壽院)報恩院流の六流を樹立す。右の中光壽院を除きて他五院の住僧交々座主職に任じ一山を支配す。稱して醍醐の五門跡とす。尙ほ三寶院流、理性院流、金剛院流の三流は嚴覺門下寛信の初めし勸修寺流、宗意の安祥寺流、増後院の隨心院流の三流を小野流と稱するに對し、醍醐三流と云ひ、以上總稱して小野六流と呼ぶ。室町時代に到りて賢俊、滿濟の如き大徳出で、一山の極盛期を現出し、一宗學徒の淵藪となる。賢俊は足利尊氏の權輿に參し、其歸依を得、食邑六萬石を附せられ、寺門を一新す。應永年間、三寶院門跡滿濟は足利義滿の嫡子として第三十八代座主に任じ、准三后に叙せられ、政教兩面に權横の才腕を振ふや一山の主權は三寶院の門主に歸す。これより本寺座主職は同院の專任となり他の四院は殆ど末寺の觀を呈するに至れり。足利氏の中葉以後寺運漸く衰微し、殊に文明二年の兵亂に山下の諸堂宇五重塔一基を燒して悉く燒燬し、次で山上の諸



伽藍も亦壊廢に歸せしが、義演座主職を襲ぐに及び、豐臣秀吉の歸依を受け一山復興漸く成る。先づ紀州湯淺より金堂大門を移建し、山上に御影堂、不動堂を再建し、更に金剛輪院、成身院、湯屋の三院を合一し西大門北方にありし三寶院を現地に移し、緊要部の樹石を徒して雄麗の構を遂ぐ。時に秀吉大いに家臣を集めて觀禮の宴を催せしこと、況んや人口に餘る所なり。慶長十五年、徳川家康印を下附し、四千餘石の寺領を附す。當時山下に四十九院を算し、山上に八十有餘の僧坊を連れたり。明治維新に至るまで寺領の累計三千九百餘石、山林四百餘町歩を有し、末寺約四千を擁せしが、維新の際寺領の公收、山林の土地により寺運漸々退轉し、寺院の頽廢亦其極に達したり。爾來、漸次復興し、明治三十三年八月、御室派以下と共に別派獨立し、醍醐派を公稱す。昭和四年、醍醐天皇一千年御忌を修するに當り、一山の諸堂宇を修繕せられ、寺觀を一刷新す。尙ほ昭和七年四月、山上五大大堂災火に罹る。現に子院三寶院(別項参照)、理性院(別項参照)、光壽院(別項参照)、報恩院(別項参照)、無量壽院(唐治年間、元海の建立、其弟子一海を開祖とする松橋流の本寺たり)、金剛王院(一言寺、別項参照)菩提寺(本寺の墓所)等あり、末寺千八十箇寺、教會四百十箇所を統ぶ。本寺は古來眞言事相の諸傳を以て聞え、特に寛濟、鸞雅等は其雄として目せられ、小野の諸流並に修驗道の諸傳を傳へ、教相は専ら本地説に依る。殊に三寶院は天台宗聖護院と共に全國の修驗道を支配し、常山派の根本道場として著名なりき。

●寺域は山上、山下に跨り、深山幽谷を抱擁して百萬餘坪を有す。山下を下の醍醐といふ。山科街道に面せる總門を入り、三寶院を左に、鸞雅館、報恩院を右にして東すれば山門あり。左右に金剛輪院の儀、樓上



(寶圖) (金剛寺 御影)

に至り豐臣秀吉茲に花見の宴を催すや、其再建を發願し、紀州湯淺根來寺より移建し、同五年四月竣工すと傳ふ。屋根の勾配急にして入母屋大に失し、樞衛府や齊ならざる、概して木割証遺蹟大にして平性天井虹梁

等細部の様式手法によく鎌倉時代の特色を表現す。も之前面に三間の向拜を附せしが、最近の大改修に際し之を除き原形に復せるに依り、著しく形構の美を革めたり。内部後方須彌壇上に本尊木造樂師如來及び兩脇侍像の三軀(鎌倉時代作何れも國寶なり)を安置す。其東に開山堂(御影堂)あり、聖賢の像を安す。五重塔は金堂の南に在り、方三間五尺、本瓦葺、五層塔婆、天曆五年の落成に係り、現存最原形遺物中最古の遺構なり。内部心柱は四角板を以て圍み、天井並に四壁悉く彩色を以て曼荼羅及び八祖圖像を描く。現に大部分を剥落せりと雖も、尙ほ其巧妙緻密の美歴然として當時を思はしむ。相輪の高き全長の三十三パーセントを占むるは注意すべく、木割大にして尙ほ弘仁期の佛を存し、各層の配飾宜しきを得て樞衛美なり。永祿十四年の地震によりて大破に及びしが、慶長三年、秀吉大修理を加へて現今に至る。現に國寶遺物なり。五重塔の左側欄間を出で、更に東し、左に傳法學院・大傳法院・辨財天廟・不動明王堂等散在し、衆丹の殿宇前方の泉池に映じ、萬緑と相對して景勝極すべし。理源橋を渡れば女人堂(成身院)あり。これより登る事三十有餘町にして山上に達す。山上に上の醍醐と云ふ。女人堂より東五町餘に館山あり、一名を千疊地と云ひて墨習極めてよく、慶長三年、豐臣秀吉花見の盛宴を張りし所なり。不動堂を過ぎ十町餘にして常山圓守清樞現に至る。開山聖賢の勳請にして、その拜殿は永享六年の再建に係り、桁行七間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺、懸崖に据して東面し、殿の前半は所謂舞臺造をなす。屋根の流れ緩やかにして軒端に反轉あり、北側に南を突出して向拜狀の設備をなす。其制廟堂建築と云はんよりは寧ろ住宅建築に近く、室町時代中期にありて尙ほ鎌倉時代の殿殿の風調を傳ふ

る一遺構なり。現に國寶遺物なり。其側に開山井あり、常山草創の御、白髮の老翁現れ淡底の水を飲みて醍醐味なる哉と嘆賞せる遺跡なりと云ひ、今尙ほ淡々として遺す、病者之を或は飲用し、或は浴す。醍醐は建久六年後乘房源の建立するところと云ひ、樂師堂の屋下、南側に在りて南面す。桁行三間、梁間二間、單層、屋根四注造、檜葺、廂間より經堂に入るに中央一間に唐扉を立て内三間二面の小經堂を作る。其屋根低く、切妻板屋根にして世に三重屋根三重戸と喧傳せられ、東中央側壁に架を設け宋國請來の一切經を藏し、他に平重衡の舍利頭と傳ふる頭蓋骨を安んず、本堂蓋し一字にしてよく和様、唐様、天竺様の各様式手法を併用し、建築史上最も注目すべき遺構とす。其背後上に樂師堂あり、保安二年正月、再建、同五年四月落慶す。五間四面、單層、屋根入母屋造、檜皮葺にして、牙樑間の中幅として置ける本蓋は宇治上神社、中尊寺金色堂の夫と共に日本三藝殿の一に屬す。各部の樞衛及び温雅輕妙よく藤原時代の特質を表現す。國寶遺物に指定せらる。中に木造樂師如來像一軀(會理齋作と傳へ、藤原時代初期の作)及び日光、月光兩脇侍二軀(一本彫成の小像、藤原時代初期作)を安んず。三軀ともに國寶に列せらる。准謁觀音堂は開創井後背丘上にあり。西國三十三所觀音第十一番の札所にして、四時參詣者絶えず。樂師堂の東南に醍醐天皇の御廟に成る五大大堂あり、慶長十一年の再建に係り、國寶遺物に指定せられしも、昭和七年四月三日火を失し惜しくも焼亡せり。其東北に如意輪堂、祖師堂あり、祖師堂内部には開山聖賢、左右に空海、觀賢の像を安置す。常山蓋し古來著名なる秘密教の一大大寶窟として所藏の寶物頗る多く、近く其大部分は昭和五年醍醐天皇一千年御忌大法要記念に新築せられつゝある嚴

寶窟に陳列公開せらるゝ著なり。現在國寶指定のものに列挙すれば次の如し。先づ彫刻には前述金堂及び山上樂師堂の三尊を始めとして木造開闢天像一軀(大治年間作と傳ふ)・同帝釋天像一軀(寺傳善賢菩薩藤原時代作)・同吉祥天立像一軀(開闢天像と同時代作)・同聖觀音立像一軀(蓮肉木造、藤原時代初期)・同阿彌陀如來坐像一軀(藤原時代作)・同地藏菩薩立像一軀(鎌倉末期作)あり、繪畫には絹本着色五大尊像五軀(鎌倉法大師筆)・同大日金輪像一軀・同阿彌陀三尊像一軀。紙本墨書密教圖像三十九點(不動明王像三幅・金翅鳥及び大輪明王像一幅・大日金輪像一幅・毘沙門天像一幅・善女龍王像二幅・普賢延命像一幅・求聞持法根本尊一幅・阿梨帝母像二幅・毘摩勒及天像一幅・五大尊像一軀・孔雀明王像一軀・金剛童子像一軀・仁王經法本尊像五幅・諸菩薩像八幅・五大尊像二卷・八大明王像一卷・大元帥明王像一卷・九曜星圖像一卷・諸尊圖一卷・五大虚空藏坐居諸尊圖像一卷・三十七尊瑞勝形一卷・馬頭・大勝金剛・馬鳴曼荼羅六字圖像一卷・新雨法・源妙大將等諸像一卷・大天部尊像一卷・十八會曼荼羅圖像一卷・八大明王圖像一卷・妙見菩薩圖像二卷・佛眼、金輪、佛頂、燈籠光五秘密寶樓閣圖像一



(寶圖) (塔重五寺御影)

●不動明王圖像一卷・四極護摩本尊及び寶輪圖像一卷・明王部圖像一卷・三摩耶形三卷・諸文殊圖像一卷・十二天形像一卷・御軍四種護摩壇三十七尊、賢劫三摩耶形一卷・三十七尊賢劫十六尊外金剛部二十三天形一卷・天部圖像一卷・四家鈔圖像三卷・十二神將圖像二卷・傳山樂筆紙本着色調馬圖六曲屏一雙(恩賜京都博物館出陳)・絹本着色仁王經曼荼羅圖一幅(曾定海の圖せしめし)・天福元年の蓮口抄に見ゆ、現に恩賜京都博物館出陳)・同開闢天像一軀・同大元帥明王像三幅(三十六臂、八臂、四臂)・同毘沙門天像一軀・傳釋迦曼荼羅圖一幅・虚空藏曼荼羅圖一幅等あり、工藝品に金銅佛具四箇(如意、九針杵、五針鈴、金剛懸)・鍍金輪寶輪殿紋體寫一合。筆蹟に黃紙墨書淨名經集註(卷第九)一卷。紙本墨書經毛筆奉獻表(弘法大師筆、寛永二年六月十九日義演の奥書あり)、書册に紙本墨書醍醐雜事記一卷(卷第七、紙背に久壽二年具注評及び文書あり)・同諸寺緣起十八帖(東大寺、樂師寺、唐招提寺の三帖に建永二年七月書寫の奥書あり)・同法華經釋文三帖(仲算撰)・同孔雀經音義三帖(眞寂法親王撰、天永二年五月書寫の奥書あり)・同多羅樂記帖三(心覺撰、建保三年及び文曆二年五月書寫の奥書あり)・同佛刹比丘六物圖一卷(紙背に音義あり、久安三年八月書寫の奥書あり)・同江談抄二册(建久九年正月五日成賢の奥書あり)・同大唐西域記二卷(卷第十一、十二、建保二年書寫の奥書あり)・同論語一卷(卷第七、文永五年閏正月六日書寫及び同七年十二月二十三日二十八日中原師秀の奥書)等あり。尙ほ附近に醍醐天皇後山科陵、朱雀天皇醍醐陵及び坂上田村麿墓等存す。◎初聖賢(二月五日)、仁王會(二月二十三日)、火鑿願御守札を授與す、此日之を受くる賢者一山に雲集



す、開山是（八月五日、當日は虫除御守札を授與す）。  
**報恩院** 京都市伏見區醍醐町。

●眞言宗醍醐派。  
醍醐寺塔頭にして古くは三寶院、理性院、金剛王院、無量壽院と共に醍醐五門跡の一なり。寛喜三年、遍賢院成賢の開創に係り、舊時に山上西谷に在りき。成賢の高足憲深其法脈を茲に傳へしより遂に本寺三寶院流承心方の本寺となれり。蓋し此流、現今眞言宗新古各派を通じて最も廣く行はる。弘安九年、後宇多法皇臨幸の時、院務道順理趣三昧を修せし事あり、明治三十七年、釋迦院の本堂を現地に移建して之に報恩院の寺號を附す。現に當派別格本山なり。

●本堂一字を存す。什寶中、紙本着色過去現在因果經一卷、絹本着色普賢延命像一幅、紺緞金泥六字經變茶羅圖一幅（永享十二年修覆の裏書あり）、紙本墨書後宇多天皇寫真一卷（當流祖降敕一通及び四月二十九日御消息一通）、同後宇多天皇御遺蹟遺通（徳治二年四月十四日寫真）一通の五點は國寶に指定せらる。就中、過去現在因果經は上品蓮台寺本、久遠宮家本、東京美術學校本と共に天平遺畫の一にして、下段に經文を書し、上段に教義を圖現す。畫法拙劣ながら高古の感あり、本院所藏本は第三卷の途中に屬し、巻末に、四月七日寫真生從八位とあり。普賢延命像は剝落多きも其描線彩色流麗にして鎌倉初期の一傑作なり。

**理性院** 京都市伏見區醍醐町。

●眞言宗醍醐派。  
醍醐寺塔頭。舊時醍醐五門跡の一にして、醍醐三

流の隨一理性院流の本寺なり。永久三年、賢覺交賢同の住坊を受け理性院と號す。賢覺は辨覺の門に出て、理性院一流の法脈を創始す。曾て菩提に於て大元帥御修法を行ひてより、法譽高く、歷朝登極の際大元帥法を修せしめらるゝ例となる。當院一派の重大行事として今に相承す。現に當派別格本山なり。

●本堂に大元帥明王を奉安す。  
●大元帥修法は當派に於ける重大なる秘法にして、初め小栗橋法華寺に常曉、仁明天皇の御宇、入唐して花林寺元照より秘法を享け、歸朝の後朝に奏し、鎮護國家の御願として嘉祥四年正月八日より一七日行ひしに創まる。本院累代の院務は法華寺別當を兼帯せしより、文明年間、法華寺兵火に罹りて退轉して以來、修法全く本院に歸す。

**法界寺**（日野樂師）京都市伏見區日野西風呂町。

●眞言宗醍醐派。  
●東光山と號し、俗に日野樂師又は乳樂師と稱せらる。弘仁十三年、參議日野家宗の創建にして最澄を請じて開山す。且つ最澄より相承の樂師如來を本尊とし、貝多羅樂師經を納む。其死後更に規模を率め樂師堂を建て、次で觀音堂五大堂を建立し、莊嚴を極む。永承六年三月其裔式部大輔實業日野の山莊に退き諸堂を重興し、普く群書を聚め法界寺文庫を置く。承安三年四月一日、眞宗開祖觀覺此地に誕生すと傳ふ。其後應仁年間、香西又六亂入の御兵燹に罹り阿彌陀堂一字を残して悉く燒燼す。天正年中、織田信長の兵燹に罹り樂師堂を燒失す。爾後、阿彌陀堂を本堂となし、樂師如來及び十二神將の像を茲に移安す。文化年中、本願寺第十八世文如祖師觀覺誕生の靈跡を傳へんため境内

に別堂を營む（日野別堂參照）。往時天台宗に屬せしが徳川時代に至り眞言宗に改め、醍醐寺祿中百石の分配を受けたり。維新時塔頭眞業坊、新坊、樺木坊、樹下坊、井脇坊、照行坊、角坊、南坊等の住持交替に之を監守せしが、明治初年之を廢し獨住寺となる。同三十七年、大和國法隆寺塔頭龍田傳燈寺本堂を茲に移建して樂師堂とす。



（寶國）（堂本寺東法）

●眞宗本願寺派。  
●此地、眞宗開山宗開山觀覺、承安三年四月一日誕じ、舊跡なり。云々、文化年中、本願寺本願寺第十八世文如祖師觀覺誕生の靈跡を傳へんため境内

**日野別堂** 京都市伏見區日野西風呂町法界寺境内

●眞宗本願寺派。  
●此地、眞宗開山宗開山觀覺、承安三年四月一日誕じ、舊跡なり。云々、文化年中、本願寺本願寺第十八世文如祖師觀覺誕生の靈跡を傳へんため境内



（景全堂別野日）

法界寺の古雅なる阿彌陀、樂師兩堂と相對す。  
**石峯寺** 京都市伏見區深草石峯寺山町。  
●眞宗宗。  
●百丈山と號す。正徳元年（一）に寶永年中、黃檗山第六世千景性俊の開創に係る。寛政年間、伊藤尊冲當寺に草庵を結び、五百羅漢の原圖を描き、これに依りて當寺第七世密山と共に石峯五百羅漢を協力して設置す。明治初年、弘法大師作と傳ふる鎮宅靈符神を西九條より本寺境内に移轉安置す。大正四年一月、野火の爲に本堂燒失し、大正十年再建せり。

●境内九百坪。本堂・庫裡・靈符堂等の堂宇あり。寺寶には即非贊野元信筆釋迦文殊普賢像三幅及び若冲の畫多數を藏す。境内に若冲墓、同筆塚等あり。  
●靈符神御千度會（四月十月）、羅漢供法會（十一月）

**實相院** 愛宕郡岩倉村大字岩倉。

●天台宗寺門派。  
●同派大本山にして、實相院門跡或は岩倉門跡と稱す。寛喜元年三月、圓珍の法孫にして關白基通曾孫靜基僧正の開創に係り、三井常住院退轉の故を以て宣下を蒙りて門跡に列す。爾來世々親王、攝家より入室するを例とす。當寺初め、紫野今宮北上野村にあり、後ち今出川小川に移りしが、應仁の兵燹に罹りて堂宇喪失せり。依りて寺地を岩倉大雲寺塔頭成金剛院の地に移して伽藍を再興す。寛永十八年、道尾親王眞母弟義尊入りて十七世門跡となるに及び、寺勢漸く興り、次で



大雲寺を兼帯し、寺運隆盛を極む。後、後西院天皇、皇子義法親王入室あり。享保五年、二十世義周の時宮裡の故殿を賜はりて本堂とし、且つ四脚門を寄せられ寺觀大いに華まれり。當時境内地四萬九千餘坪、寺領六百二十石餘、塔頭二十八坊に及べり。然るに安政五年二十四世義賢親王、法統中絶する。二十年、明治維新に至り石座密道、後を繼ぎて寺運を復せり。現在塔頭悉く廢絶し、末寺三箇寺を有するのみ。

●境内地千六百餘坪。堂宇に本堂(享保五年建立)、方丈・書院・庫裡・四脚門山等を具へ、本堂には本尊不動明王像を安置す。寺寶中、紙本墨書後陽成天皇宸筆假名文字遺一册は現に國寶に列せられ、他に後水尾天皇宸翰・圓形將來親王御書並に關城寺古圖等を藏せり。附近に大雲寺(別項參照)昌子内親王墓、義法親王廟、僧餘慶廟、對雲閣等を存す。



(門表院相實)

### 大雲寺 愛宕郡岩倉村大字岩倉

●天台宗寺門派。  
●一に石倉寺と稱し、又觀音院とも稱す。天祿二年、圓融天皇の勅願に依り、日野文範之を創建し、眞覺を請じて開山とす。後朱雀天皇、文慶を別當職に補し、寺領及び大雲寺の勅號を賜ふ。永觀三年、昌子内親王(冷泉天皇皇后)の本願に依り、境内に觀音院を建立、餘慶に歸依して之に住せしむ。時に比叡山上にありては慈覺、智證兩門徒の區執漸く盛んなりしが、正暦四年遂に智證門徒千餘人山を下る。依て餘慶之を率ひて本寺に入り、一山を三塔に分ち、大伽藍を起し、大いに法義を唱へ山門に對抗せり。爾後暫くは本寺の極盛期にして、堂舎僧房山の上下に亘りて雲を連ねたり。建武年間、藤原康房遺世して當山に入り、不二房法一を拜して出家し、授翁と號せり。傳ふるも、詳ならず。天文十五年、細川國廣の爲に燒かれ、寺運漸く傾きしが、同二十年九月、三好長慶又兵を以て本寺に屯し、天正年間再び織田氏に燒拂はれ堂塔灰燼に歸し、一山全く荒廢す。寛永十六年、實相院門跡義尊再興し、爾後、大雲寺は實相院門主の兼帯することゝなれり。

●寺域二千三十餘坪。本堂は南面し方七間、義尊の再興に係る。堂内東福門院下賜厨子中に十一面觀音像を奉安す。像は行基作と傳へ、もさ仙洞に在りしを藤原敦忠、時平より受けて、本寺に安置せしものなりと。鐘樓は後水尾天皇の再建なり。其他地藏堂・法華堂・圓伽井堂・新羅堂等あり。寺寶中銅鐘一口はもと延暦寺西塔寶輪院の有にして、内側に天安二年八月九日の左文銘を有し、形體細長く、寶輝に相似す。現に國寶に指定せらる。

### 長源寺 愛宕郡岩倉村大字長谷

●淨土宗。  
●寛正四年の創建なりと傳ふるも、其後の沿革不詳なり。  
●奉安の木造藥師如來立像一軀は昭和七年十二月國寶に指定せらる。一木造の塗箔像にして體觀豐滿、衣裳の形法に藤原時代初期の特質を存す。頭部頂大にして鼻目小く特殊なる形容を表現す。兩手足先に後補の部あり、古座また後世の補作に係る。

### 圓通寺 愛宕郡岩倉村大字鶴枝

●臨濟宗妙心寺派。  
●大悲山と號す。圓光院瑞雲文英尼の開基に係り、禿翁賢性を開山とす。一説に文英尼の妹新廣義院基子の開基にして、開祖は景川とも云ふ。文英尼は關基任の女にして、中和門院(後水尾天皇生母)の侍女たりしが、後出家して此地に隱居し、德行を以て聞ゆ。當時、變相觀音經を印行して支那經山の靈隱寺に送りしこと有名なり。延寶六年四月、輪王寺守澄法親王の靈力に依り、幕府の允許を得て一寺となし、禿翁を請じて第一世となす。後水尾天皇、轉願圓通寺を賜ひ、靈元天皇また勅願あり、梵鐘を鑄造して御塔運あらせらる。次で同八年十月に至り、天皇勅して、毎年供養料として内幣より三十石を賜ひ、特に、大悲圓通の靈輪を下して、當寺を新願所となし給ふ。爾來皇室の歸依厚く、屢次金帛を賜ひ供養料となし給ふ。元治元年七月、一條實良等京都の戦亂を避けて當寺に入りし際、一行中に後の昭憲皇太后も加はり給へり云ふ。慶應元年、勅ありて毎年供養料を賜ふ事となり、以て

今日に至る。

●境内六百七十八坪を有し、建物に本堂・百華庵・潮音堂・京見亭等あり。本堂本尊は定朝作と傳ふる觀世音像にして古來靈驗を稱せらる。潮音堂は西國三十三所の土を採りて敷置すと云ふ。本尊不空罽索觀音は靈元將軍と傳へ、別に安置の觀音三十三體は、西國三十三所の各觀世音を表し、靈元、明正、東山天皇各内幣を賜ひ助成し給ひしものなり。堂宇一時廢絶せしが、大正七年六月、皇室の御恩召に依り、金千五百圓を賜ひて再建せり。寺寶中靈元天皇宸筆御消息一編紙本墨書(延寶八年十月二十六日、附、女房奉書一編)は國寶に指定せらる。その他靈元、後水尾二帝御遺品等多く、後水尾天皇宸翰山鏡寺號も現存す。因に本寺に九重の御守なるあり。靈元天皇、皇子の折、本寺に滞在して本尊觀世音に御信仰あり、即位の後其像を印刷して御守とし給ふ。享保十七年三月、刻板の下附を請ひ、開帳の際、印刷して天覽に供し、御内儀にて御守を調成、當寺に下附せられ、諸人に施與す。稱して九重の御守と云ふ。然るに明治の初年より、此例廢絶せしが大正六年舊儀を復興し、今日に至る。

### 三千院(梶井門跡) 愛宕郡大原村大字大原

●天台宗。  
●妙法院、青蓮院と共に天台宗三門跡の一たり。圓融院或は圓德院と號し、魚山、梶井宮、梨本御所等の別名あり。延寶年間僧最澄叡山中堂創立の時、東塔南谷(中堂の南方)に假に一字を結構す。これ本院の濫觴なり。貞觀二年清和天皇の勅を受けて僧承雲之を改裝し、最澄自作の藥師如來を本尊とし、三千院圓融房と號す。天皇屢次臨幸あり。堀河天皇第二皇子最雲法親



(實圖)(堂本院千三)

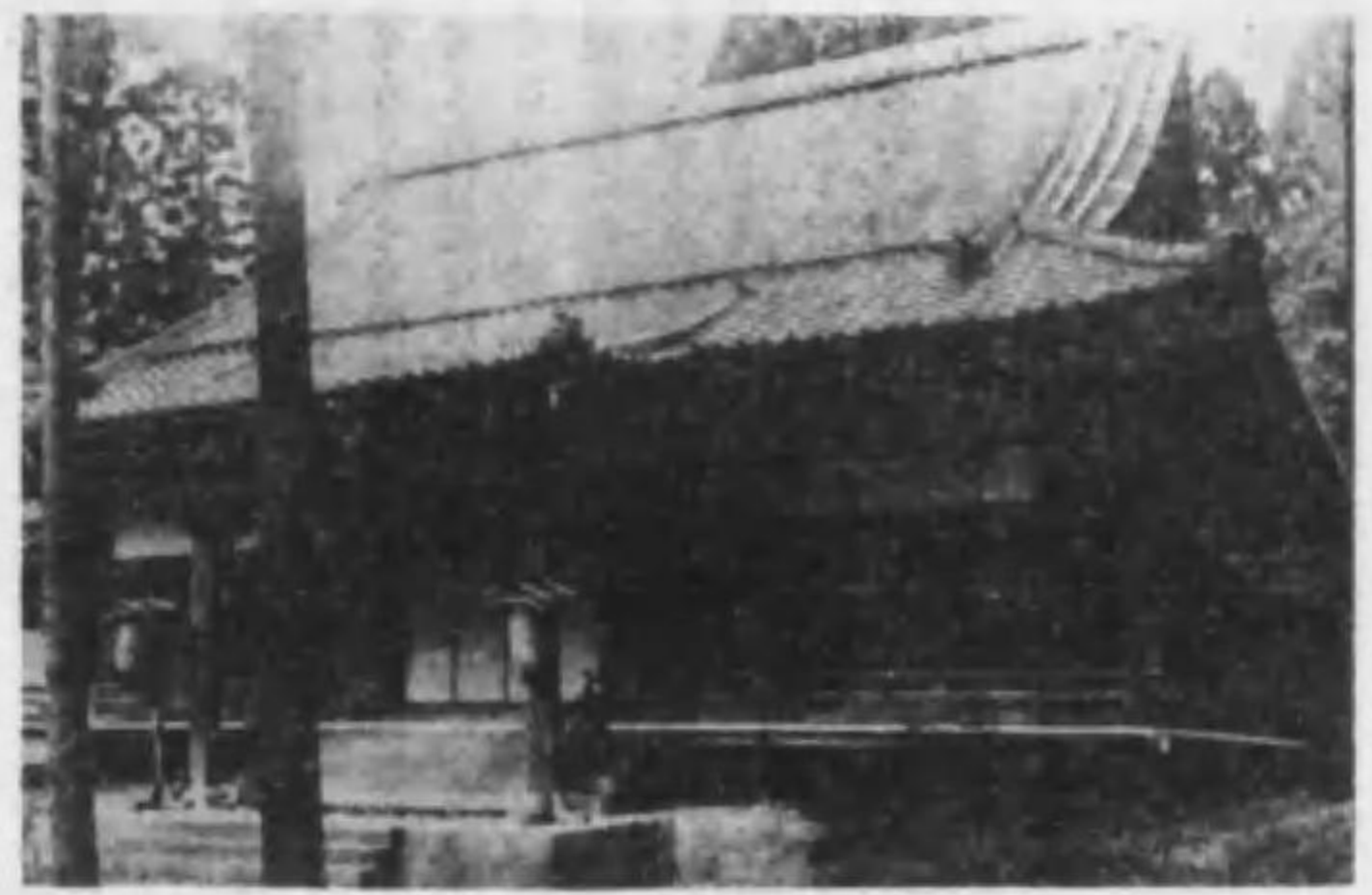
王入りて住し給へるを最初の門跡とし、爾來皇族御住持の寺となり、三門跡の一と定められ、宮中儀式講の時には本院の法親王これが導師たり。應徳三年六月、中宮賢子御菩提の爲に、近江國坂本村梶井里に、殿舎

より大原の地に移轉せしが、再び燒じせり。天正年間重興せしも亦舊觀に復するに至らず。元祿十一年、京都御車路跡小路に地を賜はり、宮殿を構築して里坊と稱す。これより世々法親王は此殿に居住し、大原なる本院は法規修行の住山となれり。明治四年、門跡の號を廢せられ、本院第五十世昌仁法親王は勅命を以て復舊し、梨本宮守修親王となり給ひ、最雲法親王より約八百年間皇子皇孫相承せられし皇族御住持の事絶えしが、同十八年門跡の稱を復せり。江戸時代には千六百七十石の寺領を有し、本寺門主たる者は天台座主に任ぜらる例なり。尙ほ慈覺大師圓仁に由りて我國に傳へられし聲明は、本院に傳はりて魚山聲明とて名高く、聲明音律を統綜せり。眞忍又本院にありて頗る其秘曲に鍊達して之を申與せり。現今行はる、各宗の聲明法式の大部分其源を當山に發すといふを得べし。

●境域四千七百七十一坪、小野山を負ひ、大原の郷に臨み、呂川、律川を左右に控へて幽邃閑雅を極む。一山の内外楓樹殊に多く秋季錦繡の美普く人口に膾炙す、山内所在の堂宇は本堂(往生極樂院)・靈殿・客殿等にして、就中、本堂は夙に國寶遺物に指定せらる。本堂は所謂往生極樂院にして、永觀三年花山天皇の御願により創むる所、惠心僧部の寛和元年の建立なり。桁行四間、椀間三間、向拜一間、單層、屋根入母屋造、棟葺にして、天井は所謂船底天井、外部は數丈の改修により舊態を損すと雖、構造簡單、木割纖細最も輕快優雅の風趣に富む。然して藤原時代の特質を表現せるは外部より、寧ろ堂内に於て、内陣の中央に佛壇を設け、源信自作と傳ふる木造阿彌陀如來兩脇土坐像三軀を安置す。脇土の後膝を屈して坐せる相は常に見ざる様式にして、天保年間經衣座を改めて蓮座とし、且つ新に金箔を押し古風を失せざるは惜しむべし。今三



願共に國寶に指定せらる。堂内壁面の兩部曼荼羅と天井及び欄間の二十五菩薩とは真心の筆と稱す。現に剥落甚しきも、古色尙豊ぶべし。一般に本堂は、常行三昧堂の古式を表現し、然も阿彌陀堂式建築の先驅をなせるものとして貴重なる遺構なり。窟殿は藤原の御聖忌に御法講を奉修する道場にして、本尊藥師如來、左脇に如意輪觀音其體を奉安し、天下毒平之寶許無窮を新願す。其中、木造不動明王立像一軀は室町時代の作に係り、國寶に指定せらる。客殿(書院)は西の間、精の間、聖の間、上の間、御座の間等より成る。尙ほ見るべきは本院林泉の美にして、金森宗和の築く所と云ひ、上なる有清閣、下なる繁樹園と呼ぶ。山を後として湖を築し、石橋横ばり、泉池溢へ、老樹古楓幾差して景致頗る幽寂なり。寺寶中、前記佛像以外國寶に指定せらるるもの多し。



(殿窟院千三)

のに慈覺大師傳一卷(紙背長承具注釋)、聖德太子傳記殘篇一卷(承安三年奥書)、古文孝經一卷(建治三年奥書)、性空上人傳記遺稿集一帖、王代一覽一卷の古書籍五種あり、他に光格天皇御勅紙金泥般若心經、後水尾天皇御懷紙、宮中御儀法講繪卷等多數を藏す。當院附近一帶所謂大原山の名勝地にして、先づ呂川を渡りて古歌に名高き清和井の乳水、護法石を見て院に入る。蓋し魚山と云ふも、呂律川と云ふも、之れ皆唐土天台山上に據せるのみ。呂川に沿ひて右行すれば羅漢橋あり、此邊楓樹極めて多し。この奥に淨蓮華院(一に融通念佛寺と稱し、融通念佛宗祖真忍の開基に係る)。來迎院(別項参照)あり。來迎院背丘に法華堂(梨本門主尊快法親王、後鳥羽順德二天皇の冥福を祈りて仁治元年創立)及び音無總懸る。三千院を出て右に律川を渡れば右方に後鳥羽天皇大原法華堂院、順德天皇大原院あり。其北方に尾井宮御龜及び護國阿彌陀院にて著名なる勝林院(別項参照)存す。此外西林院(梨本門主承嗣龍居の地)、法然腰掛石、同衣かけ石、賣炭翁舊跡等の名跡多し。

●天台宗。本寺は法親王御住持たる、聖明の根本道場たるを以て、古より法親王御法講會に預れり、御法講は後白河天皇の保元年中仁壽殿に於て修せし以來、宮中仁壽殿或は清涼殿に於て聖上の御思に當り本寺住持を導師として修し奉れり。明治初年より本院窟殿を専門道場として奉修し、侍者女官等の参拜あり、宮内省より伶人を派して雅樂を尊嚴に捧ぐる等往時法親の御儀法講を偲びしむるものあり。

●一に大原寺と云ひ、延暦寺の別院にして、圓光大師二十五靈場二十一番札所なり。慈覺大師の開創に係る。長和二年、一條左大臣雅信の五男時信出家して、名を寂源と改め、本寺を中興し六時行道を修む。享保二十一年本堂裏上し、次で安永七年再建せらる。維新前境内の賣泉、理覺、實光、普賢等の四院を總稱して勝林院と稱せしが近年、以上の四院、三千院に合し、勝林院は一寺の專稱となれり。

來迎院 愛宕郡大原村大字大原。

●天台宗。仁壽年間、圓仁の開創にして、其唐より歸朝後、支那天台宗を傳へて堂塔を建立す。傳へ、覺明の本源地たり。初め觀山西塔の北谷に屬し、坊舎一百餘に及びしが、後次第に廢壊し、山逐漸く萎靡す。享保年中(元亨釋書)には承徳年間と云ふ、融通念佛の開基真忍(聖德大師)富山に入りて梵唄を振興し、美を稱せらる。

音律の各派を一統せり。爾來來迎院は一山の總稱となり、淨蓮華、普蓮、蓮部等の諸院境内に連りて法運隆盛を極め、次で鳥羽上皇の御願により更に一堂を創立して、彌陀、釋迦二尊を安置す。應永三十三年、觀融の災に罹りて堂宇烏有に歸せしが、次で永享年間再建し、天文年間、改修を遂げて今日に至れり。本院内各員は古來宮中御法會參勤の主職にして、現に本院別格宗別格寺たり。



(院迦東)

師阿彌陀の三幅にして、各集像、傳へて行基作と云ふも、何れも典型的なる藤原式彫像なり。現に國寶に指定せらる。堂内、此外、慈覺、慈惠、聖座(真忍)三大師の像を安置す。所藏の寺寶中、紙本墨書傳教大師度緣一卷は國寶なり。堂後に真忍の塔墓存す。寺東方に音無池より流れ出づる呂川、律川あり。當院に遊びて

真忍住持淨蓮華院(南坊)及び経藏・如來藏・維摩等あり。僅かに往時隆盛の一端を窺ふべし。附近に魚山鎮守勝手神明あり。中興真忍大和吉野より勧請する所と云ふ。

●天台宗。草創沿革詳ならず。寺傳に聖德太子の創建にして、本尊六萬體觀音の地蔵尊は太子の作なりと云ふ。安徳天皇御母建禮門院、文治元年四月西海より歸洛し給ふや、直に東山長樂寺に於て御齋變あり、次で本院に闡居し、高倉、安徳兩天皇及び平氏一門の冥福を祈り給ふ。同二年四月、後白河法皇の臨幸ありし事は平家物語、源平盛衰記等に依りて遍く人口に膾炙する所なり。慶長八年、豐臣秀頼の母淀君の本願に依り片桐且元之を再興す。近世、近江守山の西郷氏の女、世々本寺に住するを例とせり。

●淨土宗。古知谷光明山と號し、總本山知恩院に直屬す。慶長十四年、木食僧彌誓の開基に係る。彌誓、尾張國に



(堂本院兜)



生れ九歳にして出家す。後諸國を巡遊し奇蹟を感じて當山に寺を建立す。時に滋賀郡南庄村の信徒之を授く云ふ。

古知ヶ茶屋の山腹に位置し、三千院の北方約二十町の地なり。本堂・薬師堂・方丈・庫裡等の堂宇を具へ、開山堂に本尊釋尊像・藥師堂に本尊藥師如來、觀音堂に十一面觀音を各安置す。釋尊像は自作にして自らの髪を植へたりと傳ふ。依りて世に植髮の尊像と稱す。堂後、山上に開山窟、禪公窟、經掛松、自然石の佛堂等所在す。

毎歲正月、來迎院、講林院の僧徒來りて法事を營み、果入りて舞踊をなす。所謂大原舞居の遺風を傳ふるものと云ふ。近年久しく廢絶の後之れを復活して大原念佛會と稱す。

鞍馬寺 愛宕郡鞍馬村大字鞍馬。

天台宗。松尾山金剛壽命院と號す。寶龜元年鑑眞の高足鑑續の開基する所と傳へ、白馬鞍轡の奇蹟に依り鞍馬寺と號すと云ふ。延暦年間、大中大夫藤原伊勢人堂宇を建立す。同十五年、勅して定額寺となし、山林寺田を賜ふ。清和天皇貞觀五年權門の御建立あり。時に本寺法相宗に屬し、洛北の巨刹として法威盛んなりしが、其後一時衰頹す。寛平年間、東寺十禪師の一人たる峰上人再興して眞言宗に改む。天永年間、天台座主忠尋僧正、更に之を興隆し、天台宗に改め、青蓮院に屬せしむ。當時朝廷武門の崇敬漸く厚く、白河、後白河兩院の龍幸あり、四脚門筋、下馬石、御寄寄等建設の勅許を賜ひ、源賴朝亦諸器を獻納せり。延元元年、後醍醐天皇觀山に幸し給ふや、當山の徒徒亦比叡の大



(門山寺馬鞍)

衆と協力して行宮を守護し奉れり。室町時代以後漸く衰へしが、豊臣、徳川兩氏の出するありて領地下附の朱印狀を與へられ、漸次寺運舊に復す。時に寺城洛北の鞍馬鞍轡の山に買りて、堂宇子院山上下下に相連り、輪奐の美を極めたり。當寺古來同縁の事三度あり、崇徳天皇大治の災には重情之を再建し、更に阿彌陀堂を建てて丈六の佛像を安じて融通念佛を弘通す。長祿の災禍に罹りて、足利將軍支援の下に加茂の訖河原に勸進能行し其收益を以て重建す。最後は文化十三年にして、此時又、住持見秀直に再建に着手せしむ、時宛も幕末擾亂の世にして僅に本堂中の竣工を見て止みたり。明治四十四年、仁王門、勸使門、筋筋等再建さる。大正の初年現住眞純入寺するや大いに寺運の興隆に努め、第一期造營とし

て本堂の修理、講堂の再建、御供所、法務部、御札守授與所、寢殿、其他本坊と本堂及び諸堂舎をなす七十餘間の大規模を成就す。次で第二期本堂内陣の増築、寶藏殿の建設、御茶所の改築等の工事は目下進捗中にして、以上の諸堂宇竣工の時は山頭再び往古の美觀を現出すべし。

洛北の名山鞍馬山の中腹に位置し、一山老杉巨樹鬱々として畫尚暗く、梢吹く風、谷渡る怪鳥の聲、自ら神祕の靈域をなす。本堂(現に桁行十二間、梁間九間半なるも擴張工事竣成後は桁行十八間、梁間十四間)は中央に本尊毘沙門天王、東の間に本地千手觀音、西の間に護法龍王大僧正を安置し、龍王の脇侍として其左右に遮那王磨、神變大菩薩等並安さる。講堂は大正十二年十二月の再建、寢殿は同十三年十月の建設なり。他に御札守授與所、法務部、本坊等あり。本堂前の石礎を下れば、仁王門及び勸使門迄の間八町七まりをつゞらなれと呼び、羊腸たる坂路をなす。此間、上より義經公守本意川上地蔵堂、東光坊菩提、義經源の磯、舊當山御守村社由岐社等あり。又引返して本堂の東には當山竹伐り會式と共に由緒ある開闢井堂あり、開闢井護法善神を祀る。護摩堂横の奥ノ院門をくゞれば、義經首比へ石、大杉權現(俗に天狗院)、僧正ヶ谷、不動堂、義經堂等所在す。更に進みて奇岩怪石錯落層層せる間に、奥ノ院龍王殿あり。二間三尺餘の廟堂にして延喜年間崇徳の感得せし所と傳へ、當山第一の靈場なり。兵法場又は牛若丸修行場と云ふは、當堂を中心とする此邊一帶の地にして、牛若の現石、ひざつき石、笛吹き櫻の跡等の舊跡多し。龍王殿に向ひて左へ急坂四町にして、官幣中社貴船神社に至る。多數の寺寶中國寶に指定せられしものは、木造毘沙門天及び脇侍吉祥天・普賢童子立像三軀・阿彌陀天立像(鐵守夜

障定寺 愛宕郡花守村原地新田。

天台宗。大慈山と號す。久壽元年二月、觀空西念、鳥羽法皇の勅旨を奉じて創建し、本尊に十一面千手觀音を安置す。其年四月法皇、不動明王、毘沙門天の像を奉納供養せらる。保元元年、白山妙理權現を勸請、廟堂を建立す。平清盛政權を得るや平治元年、佛舍利一粒、唐羅漢像十六軀を安置し山門を造營す。中世、山門、寺門の僧徒、交互に來り住して爭止まず、寺門大いに衰へしが、貞和六年定賢住持の時、一會會を營繕す。後漸次衰頹に傾きしが、享保年間、貴成院院の元快、後西院上皇の加持を修して觀感あり、仍て聖護院宮二品法親王道祐に勸して元快をして本寺を中興せしめらる。而して正徳二年、三井長定道承親王會旨を下して聖護院に屬せしめ、大いに保護を加へらる。天保三年庫裡より火を發し、寶藏を燒く。大正八年本堂、仁王門等の修營あり。

寺境三千七百餘坪。大慈山の奥區、奇峯怪岩の地に在り。山下を大井川流れ、山水清淑地勢靈奇なり。山上を九品界に擬し、其中峯を大慈山の巔頂と爲す。山麓仁王門より崎嶇たる石段をのぼる數町にして本堂に達す。本堂は一に觀音閣と稱され、桁行五間、梁間五間、單層、屋根四注連、栴蓂、傾斜地に南面して建つ。舞臺造なり。軒二重本繁種、斗拱三斗にしてよく鎌倉中期の特質を具ふ。建物の外観普通の建築と異なり、正面面共中三間にして兩脇間より狭く、大和實生寺金堂側面と共に異例なり。細部の手法に於て特に見べきもの少なければ、舞臺造の脚柱高く断崖に止まりて全體としての構衡よく安定莊重の姿態を現じ、本邦舞臺造建築として看過すべからざる遺構なりとす。

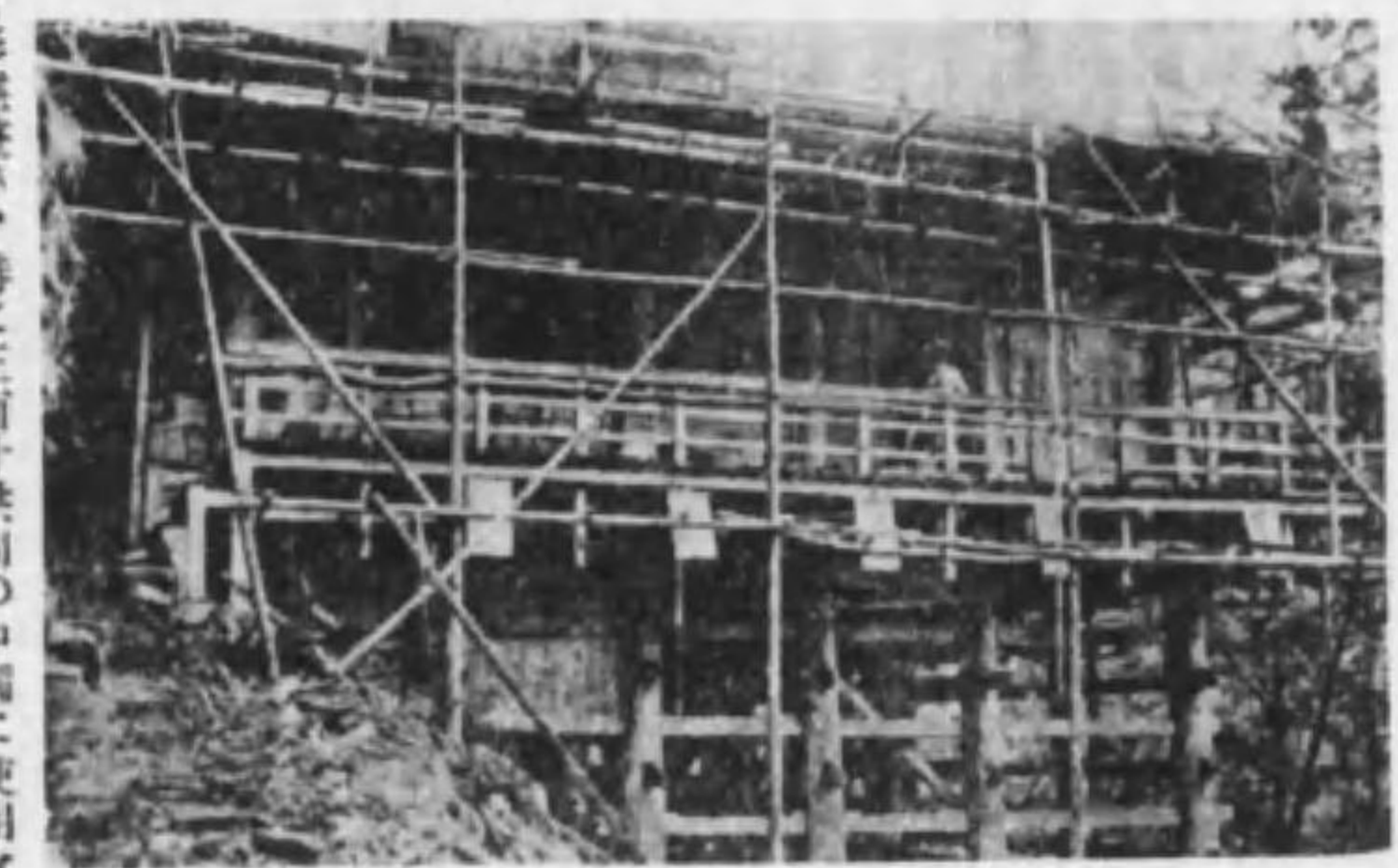
又毘沙門天)一軀・阿彌陀觀音立像(定康作)一軀・銅燈籠(正嘉年間)の銘、元祿二年補作)一基・紙本墨書鞍馬寺文書(建長三年十月二十三日將軍賴朝願文、延元元年六月二十三日新田義貞書狀、八月十三日名和長年書狀外八通)一巻・墨漆劍(寺傳坂上田村麻呂佩劍)一口・劍(無銘、持三結柄墨漆鞘)一口なり。尙ほ當山第二期造營工事中本堂裏山より多數の經塚遺物を發掘せしが、種々の逸品として、昭和八年一月二十三日國寶に指定せられたり。即ち銅經筒殘片共十六、瓦製經筒一、銅寶塔一、鐵寶塔一、銅如來座像一、銅菩薩立像一、銅佛殘片一、銅佛殘片四十四、銅板押出佛殘片一、銅銅結片一、鏡九・白磁合子類十二、硯一、銅錢二十五・其他伴出物一切とす。其國寶指定の説明書に依るに、本經塚は元本堂後方の山腹に存し、四圍に石を以て圍繞せし墓壇上に石造寶塔を建て、其標識となし、内部に小石室を設け、經筒並に諸種の副納品を石室内部に納置せし外、その四圍の土中に埋納せしもの、如く推定せらる。是等は明治十一年以降昭和六年三月に至る間三次發掘の厄を蒙り、殊に昭和七年春本堂増築工事に際し殆ど破壊遺蹟に歸す。上記の諸遺物は七年度發掘を主として、本寺に保存せられたるものを編纂し、總數約百數十に及ぶ。これ等の中、經筒は其大半藤原時代の製作にして、中に保安元年、治承三年等の記録あるもの存し、且つ重情上人の名を銘せしものもあり、又形式上經筒中の最優秀品を存す。其他八角寶輪型經筒の如きは鎌倉期の製作、同種經筒中の最古のもの認め得らる。二基の寶塔は經塚遺物稀有的のもの、其様式手法は藤原期小寶塔の典型たり。佛像銅結片等は藤原期經塚遺物中類例稀し。銅製佛殘片には文應元年云々の刻銘を存す。現石の如き未だ他に類品の



(堂本寺馬障)

出さざる例を見ず。其他多數の懸佛等の如き主として鎌倉室町時代の埋納に係り、本經塚が藤原時代の營造以來逐次遺納せられて保存せられたるは本邦經塚中稀に見る所、また以て最も重要な資料となすに足るとあり。當寺には其他、田村麻呂所用宝鏡一雙・福富の御印(銅印)一箇・義經所用兜及び鏡の破殘數箇・花の刺札多數等を所藏す。





(實圖) (堂本寺定祥)

堂周界特繞り、高欄に倚れば白雲閣下に油然として起り、遙かに流る、溪流の潺湲たるを聞く。本堂の東北隅に供所にあり、井屋も稱され、本堂と略ぼ同期の建築なるべし。早く、扉、層、根向唐破風造、板葺、方一間の小建の造りに過ざるも形整ひ、特に正面斗拱間の中欄に使用せる双斗は天竺様の系統に屬するものとして、唐破風屋根と共に鎌倉時代に在りて轉に見る所なり。尙ほ堂は今一間二面の妻堂に入る。仁王門は一に大門とも稱し、登山口南面す。三間一戸八脚門、屋根入母屋造、柿葺にして、貞和六年の建立なりと云ふ。桁二十五尺、梁間十五尺八寸、軒高十三尺四寸、(機高二尺六寸八分)外殿桁は高なるも、よく背後の峻峯、四隅の松杉に調和せり。三間一戸の扉門にして入母屋造の屋根を

卓駘ありと稱したり。

志明院(岩屋寺、金峯寺) 愛宕郡雲ヶ畑村。

●古義眞言宗。  
●岩屋山金光峰寺と號し、俗に岩屋寺、或は金峯寺と稱せらる。孝德天皇白雉年間、小角の開創と傳ふ。天長六年七月、淳和天皇の勅願に依り、空海宗字を再建し、専ら鎮護國家の祈禱を修す。菅公又手刻の不動像を寄進し、宇多天皇王城乾障の勅願所に定められ、寺運大いに隆興せしが、天徳二年四月、回祿に罹りて堂宇燒燼す。次で再建成りしも承久の亂に遇ひ再び荒廢に歸せり。仍て貞和五年住僧密藏律師の歸依を得て、堂宇を再造す。幕府又之れに寺領を附す。大永八年、後奈良天皇、天下泰平の御



(堂本院志明)

傳に延暦十三年桓武天皇平安遷都の途次、雷雨傾りに至りしより、難を西土川原なる一基三幹の老松の下に避け給ひ、普門品を誦して祈念せられしに忽ち一天洗ふが如く星影水に落ちる奇蹟あり。仍りて其松樹を以て不空羅刹觀音像を刻せしめ給ふ。これ三日八臂の觀音なりと云ふ。翌年春伽藍を建立し、星水山泉福寺の號を賜ひ、楞嚴學院院號を別當に補して本寺第一世とせらる。萬治三年、別當職を廢し、徳川幕府未印狀を寄す。天文元年三月、粟生光明寺僧大空聖道入りて住せしより、現宗に轉す。仍りて之を中興第一祖とす。明治五年、二百十五坪。本堂・書院・庫裡・玄關等を具備す。本尊松樹觀音は一日三觀音と稱し、眼疾の靈驗著しとて衆庶の信仰厚し。

寶善提院 乙訓郡向日町寺戸。

●天台宗。  
●佛華林山顯德寺と號す。持統天皇の草創に係る。傳ふ。開創詳かならず、承和十四年十月、圓仁唐より歸朝して本寺に三部灌頂の秘法を傳へし以後、法孫相繼いで住せしが、嘉慶年間、忠快の時、清盛、伽藍僧房を建立し、寺戸、大河の兩庄を附せり。爾來次第に輪奐の美整ひも、壽永の戰亂に遇ひて殆んど廢滅せしかば、後醍醐天皇の勅願に依り、承讓之を再興す。天皇勅して、佛華林山顯德寺寶善提院の號を賜ふ。中興忠快は平教盛の子、世に小川法印と稱し、台密を但馬阿闍梨契沖に受け、小川流の祖となる。法孫、澄庵の時、分派して西山流を稱するにたり、本寺之より西山流根本道場となる。其後、龜山天皇皇孫承憲法親王、後醍醐天皇皇孫眞法親王、同く眞法親王、王子仁惠

寂照院(海印寺) 乙訓郡海印寺村大字奥海印寺。

●古義眞言宗。  
●木上山と號し、一に海印寺と稱す。弘仁十年、僧道雄の開創にして初め華嚴宗に屬せり。延喜式に寺料三千束の歲額を載せらる。舊時寺觀廣大を極め、城内八町支院十字あり、總稱して海印寺といひ、年分度者二人をおく。然るに應仁の兵火に罹り、一山燒燼し、今寂照院一坊を殘すのみ。永祿十一年、織田信長青龍寺城攻めに際し、本寺を其陣營に充てり。  
●寺境四面山岳にして老樹蒼鬱たり。一に奥海印寺の稱行はる。奥ノ院は此の北方に在り。

觀音寺 乙訓郡大山崎村大字大山崎。

●古義眞言宗。

新願あり、志明院の勅額を賜ふ。慶長十三年には後關成天皇、修理料金百兩を寄せ給へり。同二十年六月、勅願成就の御慶として南無不動明王五字の寫繪を賜ひ、東山天皇亦櫻樹八百本の御寄附ある等、歴代皇室の尊崇厚し。天保二年參籠者火を失し、一山焦土となり、僅に鐘樓、仁王門、鐘樓を殘せり。爾後、次第に復興し、昭和五年、境内に四國八十八箇所靈場を開設す。現に同宗仁和寺末なり。  
●寺地鞍馬山連峯の西部に位し、石室岩洞の奇あり。春は石楠木、秋は紅楓によく、山雲水明の幽靜境たり。境域往時は八萬五千餘坪を有し、眞言修驗道の靈場たりしが今尙殘甚しく坊舎僅か志明院及び庫裡・山門・役行者堂を殘すのみ、本尊は不動明王なり。山門岩屋山の三字は小野道風の筆と云ふ。  
●毎年春秋二回大法要大護摩祈禱執行。

青龍寺 愛宕郡八瀬村。

●天台宗。  
●黒谷と號し、延暦寺の別所にして西塔寶輪院に屬す。眞源(慈慧大師)の開創に係り、洛東黒谷金武光明寺に對して、元黒谷の稱あり。本尊觀世音を安置す。承安年間、法然、本寺觀音堂に入りて一切經を披閱し遂に専修念佛門を開創す。現に堂内に其像を置く。文明年間、眞盛派の祖、眞盛亦、之に修學し、龍夢を感得せりと云ふ。

泉福寺(三日觀音) 乙訓郡向日町森本。

●淨土宗西山派。  
●星水山不空羅刹院と稱し、もと天台宗に屬す。寺



妙香山と號す。昌泰二年の創建に係り、寛平法皇を開基とす。其後久しく荒廢に歸し、沿革亦明かならず。一時本尊千手觀音を同村八幡宮南倉内保に移せしことあり。延寶九年木食以空、諸堂を再建し、以て、中興開山となる。寛文二年、以空の飛行寂滅に達し、真景二年五月、金剛菩薩の號を賜ふ。次で、後水尾法皇、堂宇及び總門を御建立あり、妙香山三字の勅額を賜ひ、且つ勸願寺に列せらる。元治の兵燹に罹り、本堂を除くの外、悉皆灰土し、一時頓廢を極めしが、漸次重修、明治二十七年、本堂成るに及び、寺觀舊に復す。

●寺城天王山中腹に在り、脚下を流る、從、桂、木津の三流を隔て、八幡の翠巒に對し、遠く笠置の連山を望む景勝の地にして、隱居絶佳なり。堂宇は南面し本堂・庫裡・書院・聖天堂・浴油堂等より成る。本尊千手觀音像は、寺前に行基山崎橋を架する時、祈願の爲彫刻せしものと云ひ、俗に橋架觀音と稱す。また現在聖天堂安置の石佛樂師如來像は此地開創の折土中より涌出せしものと傳へたり。寺寶に豐臣秀頼の文書等を藏す。

●聖天浴油供(毎月一日、十六日)。  
●新義眞言宗寶山派。  
●細陀落山と號し、一に寶寺と稱す。舊く又山崎寺と呼ばれたり。聖武天皇の勅額にて神龜四年、行基奉創すと云ふ。本尊十一面觀音は、延喜年間、慈信、攝津中山寺よりこれを移せり。寺前に依れば天安二年、文德天皇橋梁を架設せらるゝに當り、本尊老翁に化して指揮を爲す。依りて竣工後使を遣し、御物を納め給



(寶國)又基重三寺積寶

●寺城天王山中腹に位し、淀川を距て、前方男山に對し土地高峻風色佳趣に富む。堂宇には本堂・方丈・客殿・山門・鐘樓・三重塔あり。就中三重塔は天正年間、山崎の遺蹟に係り、現に國寶建造物なり。内部は黒漆塗中央に唐樓の須彌壇を置き、大日如來を安置す。本堂は其西北にあり。堂前に聖武天皇九層石塔遺存す。寺寶中、板繪彩色神像四面は、元治年間焼失せし觀守堂十九所補現に安置せられしもの、一部にして各面表に

ひしより寺號起ると。長保四年、寂照入宋の蘭母の爲め本寺に於て法華八講を修し、靜昭を以て講師とす。隨喜して出家する者五百餘人に及びしと云ふ。嘉慶三年、勅して定額寺に列せられ、當時、山上、山下に子院多く、寺運盛なりしが中世稍々荒廢せり。天正十年、秀吉山崎の合戦に際し、一時本寺を陳所とす。幕末海内勤王の士四方に起るや、元治元年、眞木和泉守、久坂義助等兵七隊を率ひて當寺に屯す。住僧探玄又頗る義氣あり、之に參して大いに謀議す。同七月、會津勢と天王山に戦ひて利あらず、遂に眞木以下十七士屠戮し

●臨濟宗東福寺派。  
●明應年間、佛人山崎宗室此地に草庵を營みしを以て本院の濫觴とす。宗室は近江の人、佐々木氏の一族にして初め彌三郎純東と云ひ、足利氏の家臣たり。延德元年三月、將軍足利義尚、近江の六角高頼を征して其陣中に受するや、純東亦亦壯烈奮して援護尼崎に閉居せり。後一休宗純、之を新、願庵に招き提揚する所あり、宗室、遂に其禪風を傳へ、宗純寂後山崎に庵を結びて住す。庵を對月庵と名づく。これより山崎を以て姓とし、風月を友として連歌に耽り、油を荷ひて京師に出て、終日油を賣り歩きて歸庵するを常とす。後世宗室の油筒を模して花入とす。これ妙喜庵名物の一なり。宗室晩年庵を聖一國師七世の孫春樹士芳に譲りて西國に渡り、天文二十二年讃岐に歿す。爾來、本庵東福寺に屬する禪刹となれり。天正十年六月山崎の合戦にあたり、秀吉當地に陣し、既にして中原事定

妙喜庵

乙訓郡大山崎大字大山崎。

まるの後も尙此處に在りて、軍機を運らし大勢を操摩す。其間、屢次本庵にて千利休茶を獻す。秀吉即ち利休に命じて山内に茶亭を構へしむ。即ち現今の茶室、持庵之れなり。  
●堂宇中、書院及び數寄屋は國寶建造物なり。書院は文明年間の建立にして、後世幾度かの改修を経たりと雖、尙よく室町末期書院風の風を示せり。その制桁行二間、梁間三間、單層、屋根切妻造、檼瓦葺にして前面に廣縁、落縁あり、左側前方に別當の書院と數寄屋とを附加し、後面庫裡に接續す。室内を奥、口の二間に分ち、仕切りに腰高の明障子を用ふ。後方中央部を



(寶國) (院書庵茶持)

切りて佛壇を作り、十一面觀音像を安置す。各部何れも清酒、燗置にして恣致優雅なり。數寄屋は書院左前方に矩形に交はれる別の書院の東南隅に接續せるものにして、二間二面、單層切妻屋根檼葺の一小茶室なり。茶室は所謂二帖躰目にして、柱は丸太形を使用し、檼又自然雜木を用ふ。四面土壁にして北壁、下地窓二箇所を作り、東壁南壁赤下地窓ありて光線を導く。北壁に障行口あり、室内、四方鋪壁にして西北隅に床を設く。床前北脇に燈あり、燈の後壁に吊棚をおく。棚の南は入口にして、西に出づれば、水屋をなす。全體の構造頗る清楚にして簡朴、室内よく幽靜の氣溢りて殊

に玄妙なり。桃山時代千流茶亭の軌範として、新道に遊ぶもの、味賞指かざる所、書院と共に國寶建造物たり。數寄屋の室外三面庭園にして、室の裏に一株の老松あり、天正十年秀吉當地寶積寺を本陣となし、徒然の餘り當庵に臨み利休をして茶を點せしめしに、當時この松小さく秀吉の袖を摺りたりといふ。現に享々として繁茂す。又宗室の遺物、水琴盤と銘せる手洗鉢ありて名高し。宗室の書畫軸數幅、豐太閤陣太鼓等を藏す。

●清原山と號す。天曆年中、僧千親の開創する所と傳ふ。往昔は寺内に十二坊を敷へしも、應仁の兵火に罹り、古記録亦焼失し、沿革の詳知る能はず。  
●境内三百五坪。本堂、地藏堂・千流供養塔等を具ふ。寺寶中、絹本着色佛唐人筆釋迦金胎出現圖一幅は國寶に指定せらる。釋尊涅槃に入り給ひし後再び金棺より出で、光明を照らし給ふを菩薩・羅漢・四衆・鳥獸等群拜する圖相にして、畫風摩耶夫人經に出づ。各人物の配置、緊迫せる状態の表現甚だ巧妙にして筆力雄勁、彩色優秀、高野山の涅槃圖に見らるゝ幾金法應用せらる。我國佛畫中の一傑作にして、宋畫の影響受けし藤原時代の作なり。

彌谷寺

乙訓郡海印寺村大字淨土谷。

●淨土宗西山派。  
●立願山と號す。寺前に據れば大同年中、洛東清水寺の開祖延鏡の創立に係ると。又一説に承保年間僧水鏡の創立せしものなりと云ふ。久安年中、立岩山西清水寺の勸願を賜はる。後ら雷災に罹り諸堂破壊し、久しく再興する能はざりしが、慶長十九年に至り、土釜本堂を建立し、淀君の捐財を得て本尊厨子を造る。次で元和年中勸願所に列せられしが、其後漸々衰頹せり。元祿年間、是海本堂を重修するに及び、諸堂漸次具備し、以て今日に至る。

●寺境天王山古戰場に續く閑靜なる山中にあり、本尊觀音は眼病に靈驗ありて遠近より參拜者多く、境内より出づる楊柳水は空海の奇蹟に依ると傳へ、今に眼病其他諸病平癒の御供水として珍重さる。本寺の北方十餘町に慈心僧都が淨業を修せりと傳ふる淨土谷の舊跡あり。

長法寺

乙訓郡乙訓村大字長法寺。

●天台宗。

●淨土宗西山派。  
●報恩山念佛三昧院と號す。本宗四萬本山の一にして圓光大師二十五靈場第十六番札所なり。建久九年、熊谷謙生房落西栗生野に一座を開創し、其師源空(法然)を請じ、開堂供養を修す。元久二年之を幸阿に讓與し、自らは故山に歸す。其後、承元元年九月、謙生寂するに及び、遺命して遺骨を本寺に納めしむ、仍りて源空を開山とし、謙生を第二世とす。嘉祿三年六月山門の衆徒、源空の大谷廟を發かんとするや、遺弟等廟かに遺骸を奉じて西郊來迎院(太秦)に移し、安貞二年正月更に栗生野に於て之を茶見に附せり。一七日供養の後ち一半は遺弟に、一半は本寺境内に廟所を營きて葬る。仁治三年正月、四柱天皇光明の奇蹟に觀感あり、勸願を賜ひて光明寺と號す。第四世善慧證空(西山派祖)御影堂前に樓門、三重塔等を造立す。第六世法隆淨音、後醍醐、龜山兩天皇御歸依を得、文永元年七月、龜山天



皇より御遺法然人自畫像を賜はる。第七世普空親性の時、延元年間兵亂相續ぎ、爲に寺門漸く荒廢に傾く。加之、應仁、文明の兵燹は遂に一山の諸堂宇を悉く灰燼に歸せしめ、寺領亦武邊の掠奪に委せられ、寺觀の荒廢其極に達せり。永正四年七月、西山一宗の第一寺たるを以て、  
 第十五世 乘蓮空徹  
 帶參内の 繪旨を賜  
 ひ、天文 三年には 後奈良天皇より淨土門根元地たるの繪旨を賜ひ、宗風漸く興る。天正十年山崎の合戦に際し、一山兵燹に罹りて焦土と化す。其後再建を企て、成らざりしが、第三十世道空純長の時漸く再興の氣運に向ふ。次で純長二條城に徳川家康と會し西山一流の繪目を受け、寛永元年六月には新衣の繪旨を賜へり。爾來、御影堂、祖廟、鐘樓堂、大方丈、小方丈、内佛殿、庫裡等漸次竣工す。第三十二世倍山俊意ら又大いに諸堂を修營し、學學を開きて僧門の向項に資する等寺門の興隆に盡す所多し。依て後意を仰ぎて傳法相承の中興とす。第三十九世龍空臥雲の時三度回縁にかけり、祖廟と鐘樓を遺して他悉く烏有に歸す。元文元年、一山の再興に着手、爾來第五十八世覺空俊鳳に至る迄、諸堂殆んど修營せられざるはなく、寺觀漸く整ふ。明治九年、單稱淨土宗、淨土宗西山派と稱す。後、更に光明寺派の一法を確立し、其の本寺となす。寺領は貞享二年徳川綱吉高野郡友岡村の内三十石を寄せ、維新迄之に準ず。もと塔頭五院ありしも現在、深心院、安樂院、圓地院のみ存し、現に淨土宗西山派の大本山として末寺六百三十三箇寺、教會所三十二箇所統轄す。



(門總寺明光)



(堂影御寺明光)

●新義眞言宗豐山派。  
 大慈山と號し、一に法皇寺とも稱す。推古天皇の創建に係り、聖德太子の開基と傳ふ。爾後荒廢せしを以て、弘仁二年冬、僧空海を當寺の別當に補し、眞言秘密法を修せしむ。嘉祥三年、仁明天皇初七日勅修の時、使を七箇寺に遣して功德を修せしめらる。寶皇寺の名を以て本寺又其一に加はれり。

乙訓郡 乙訓郡乙訓村大字今里。

●天台宗。  
 西山と號す。西國三十三所第二十番の札所なり。長元三年、僧源空の創建に係る。長久三年、後朱雀天皇の勅に依り、落東鷲尾寺本尊仁弘作千手觀音像を弟子章圓、眞峯に移し、本尊となせり。第三祖慈圓の時頼朝歸依して越南國龜島庄を寄す。建久三年官寺に列せらる。嘉祿元年九月、慈圓示寂するや、善惠嗣と、更に後醍醐天皇勅願所に定めらる。承久三年北條義時三上皇を遷し奉るや、後鳥羽天皇の皇子道覺法親王顯

宇多天皇院展の後本寺を再興して行宮となし給ふ。法皇寺名、これより起る。室町時代、寺中に争論の事あり。將軍義滿、南禪寺僧伯英に命じて之を諒かしむるに共に曲なり。依つて之を逐ひ寺を伯英に與ふ。爾後、禪刹となり金地院に屬せしが、後東山の文殊院と交換して、眞言宗に復す。應仁文明の兵亂に寺寶を失し、漸次廢頽し、現に鐘に大師堂一字を存して其遺址を留む。  
 ●境内二千餘坪あり。寺寶中、木造毘沙門天立像一軀は極彩色の像にして藤原時代の作に係り、現に國寶に指定せらる。此の外合體大師像・十一面觀音像・高麗刻及び附近出土の古瓦等頗る多し。

●天台宗。  
 西山と號す。西國三十三所第二十番の札所なり。長元三年、僧源空の創建に係る。長久三年、後朱雀天皇の勅に依り、落東鷲尾寺本尊仁弘作千手觀音像を弟子章圓、眞峯に移し、本尊となせり。第三祖慈圓の時頼朝歸依して越南國龜島庄を寄す。建久三年官寺に列せらる。嘉祿元年九月、慈圓示寂するや、善惠嗣と、更に後醍醐天皇勅願所に定めらる。承久三年北條義時三上皇を遷し奉るや、後鳥羽天皇の皇子道覺法親王顯



(堂本寺輪十)

●天台宗。  
 西山と號す。西國三十三所第二十番の札所なり。長元三年、僧源空の創建に係る。長久三年、後朱雀天皇の勅に依り、落東鷲尾寺本尊仁弘作千手觀音像を弟子章圓、眞峯に移し、本尊となせり。第三祖慈圓の時頼朝歸依して越南國龜島庄を寄す。建久三年官寺に列せらる。嘉祿元年九月、慈圓示寂するや、善惠嗣と、更に後醍醐天皇勅願所に定めらる。承久三年北條義時三上皇を遷し奉るや、後鳥羽天皇の皇子道覺法親王顯



(堂本寺野善)

●天台宗。  
 小磯山と號す。傳へて嘉祥三年、後醍醐皇后(藤原明子)安産御祈願成就の報賽として、圓仁の法弟慧亮に勅して建立せしめられしものと云ふ。爾來、小磯山十輪寺と號し勸願所に定まり、毎年正月十四日より同月二十三日迄聖朝安産庶民豐樂の爲め除災の法會を嚴修し、寺運大いに榮へたり。然るに室町末應仁の兵燹

●天台宗。  
 西山と號す。西國三十三所第二十番の札所なり。長元三年、僧源空の創建に係る。長久三年、後朱雀天皇の勅に依り、落東鷲尾寺本尊仁弘作千手觀音像を弟子章圓、眞峯に移し、本尊となせり。第三祖慈圓の時頼朝歸依して越南國龜島庄を寄す。建久三年官寺に列せらる。嘉祿元年九月、慈圓示寂するや、善惠嗣と、更に後醍醐天皇勅願所に定めらる。承久三年北條義時三上皇を遷し奉るや、後鳥羽天皇の皇子道覺法親王顯

●天台宗。  
 西山と號す。西國三十三所第二十番の札所なり。長元三年、僧源空の創建に係る。長久三年、後朱雀天皇の勅に依り、落東鷲尾寺本尊仁弘作千手觀音像を弟子章圓、眞峯に移し、本尊となせり。第三祖慈圓の時頼朝歸依して越南國龜島庄を寄す。建久三年官寺に列せらる。嘉祿元年九月、慈圓示寂するや、善惠嗣と、更に後醍醐天皇勅願所に定めらる。承久三年北條義時三上皇を遷し奉るや、後鳥羽天皇の皇子道覺法親王顯



所謂阿波之れなり。寺境二萬九千四百七十六坪、所在の堂宇は本堂(桁行七間、梁間五間半、元禄五年再建)・樓門(桁行四間、梁間二間半、元禄五年再建)・鐘樓(貞享二年建立、鐘は綱吉元年除の爲め桂昌院の寄進に係る)・講堂(開山廟所(桁行二間、梁間二間、元禄四年再建)・多寶塔(桁行梁間各一間四尺、二重塔)・經藏(法華塔)・鐘守社(釋迦堂(桁行五間、梁間三間半)・藥師堂(桁行四間、梁間三間半)・阿彌陀堂(桁行三間、梁間三間)・寶藏(一間五尺四寸)・地藏堂等なり。境内に五葉の松あり、院庭十四間に及び遊龍の松と云ひ、桂昌院の栽植に係ると傳ふ。其佛所臺と通稱する所に開基源流並に覺快、道覺、慈道、尊圓、尊道等五法親王の御墳墓あり、尙ほ寺域櫻楓園の類頗る多く、其秀拔なる風光と相俟つて夙に城州有数の名刹たり。

金藏寺(御指堂) 乙訓郡大原野村大字石作。

●天台宗。●西岩倉山と號し、一に御指堂とも云ふ。蓋し之れ中世本堂近傍に三椽堂ありしに由る。養老二年、元正天皇の勅により、定意の弟子隆豐の開創する所と云ふ。聖武天皇神龜五年、金藏寺の額を下賜せらる。天平元年勅して華嚴普門品等の諸經を寫し、之れを名山靈地に埋藏せしむ、本寺又其一なり。更に桓武天皇、平安朝都に當り、勅して京師の四圍に靈地を相しして經文を埋めしめ給ひし時、本寺又其一に加はり、西岩倉山の號を賜ふ。其後一時退轉せしが、天徳二年、真源の弟子實登申興し、現宗に歸す。降りて文明、永祿兩度兵燹に罹りしも直に再興成りて舊觀を維持したり。時に寺領百二十八石を有せしが、爾後大略武家のために押

領せらる。天文十八年別格勅願所となり、舊觀を復せしが、天正十七年に至りて没收せらる。慶長十年、徳川氏、山林境内東西十三町、南北十八町の租を免す、貞享年間、將軍綱吉母桂昌院御慶の再興を企て、且つ六十餘石の寺田を寄せたり。元禄十年、幕府より朱印百五十石を附せらる。も寺域内に子院六坊存せしも維新の際悉く本寺に合併せらる。

●堂宇は本堂・講堂・客殿・開山堂等を具ふ。本堂東方の山中に經塚あり、往昔平安朝の經文を埋めたる遺跡なりと傳ふ。其他、矢坪石、烏帽子石、向日明神腰掛石、護法石、梅若丸塚、仙人窟等の名蹟あり。

三結寺(往生院) 乙訓郡大原野村石作。

●天台宗。●長元年間、源氏此地を相して小庵を建立し、自ら阿彌陀如來の像一軀を刻して本尊となし、往生院と號す。これ本寺の靈廟なり。應保元年、法橋親性來りて一室を營み、本尊如法佛眼曼荼羅曼に釋迦、彌陀如來を安置す。曼荼羅は、親性手づから作り置せしものと云ふ。後ち寺を慈願に讓り、次で官寺に列せしめらる。建保年間慈願これを善慈院に附屬して、靈堂は西山上人とも號し、淨土宗西山派の祖師として、後醍醐天皇の戒師となり、寺號を改めて三結寺と云ひ、勅願所の宣旨を賜る。三結の名は山容に因む所なりと云ふ。靈堂は又不斷如法念佛を興行し、西山名道場となせり。寶治元年善慈白河の道院に寂するや、本寺に葬して、華蓋廟を建つ。實信房蓮生(俗姓宇都宮賴朝)其傍に多寶塔を造り觀念三佛院と號せり。其後兵革相續し、諸堂四十九院悉く退轉せり。天正三年見空再興の始旨を賜

はりしも、舊觀に復する能はず、以て今日に及びり。●西岩倉山上二十四町にして達し、北東南の遺蹟頗る住なり、現存の建物に本堂・方丈・華嚴廟・鐘守社等あり。本堂は東面し、近年の再興にして中央厨子に佛眼如來像の畫幅を安す。方丈は本堂の北にありて又最近の建立に係り、南壇に拘止阿彌陀如來を安す。宇都宮賴朝入道蓮生の持佛本尊なりと云ふ。華嚴廟は善慈の廟なり。元は當山中腹にありしが、年を経て廢絶し、其後現地に遷して堂宇を建つと云ふ。

勝持寺(花の寺) 乙訓郡大原野村。

●天台宗。●小鹽山と號す。白鳳年間、役小角此地に一字を創立し、藥師如來を安置せしを本寺の起原なりと云ふ。延暦十年、桓武天皇最澄に勅して伽藍を建立せしめ給ふ。後ち最澄日吉山王の神託により、自ら藥師如來の坐像二軀を彫刻して本尊となし、寺號を小鹽山大原坊と稱せり。仁壽年間文德天皇住持佛院をして寺宇を興隆せしめ、また四十九院の僧房を營み子院となさしめ給ふ。次で佛陀春日の別當職となるに及び本寺亦春日明神の供僧寺となり、號を大原院勝持寺と改む。貞觀年間、清和天皇皇后本寺に御誓あり、爲に皇子御誕生あるや、天皇報賽として多寶塔一基を建立せしめ給ふ。延長五年、醍醐天皇行幸あり小野道風勅を奉じて寺額を書す。後ち足利尊氏本寺に歸依し、寺運盛大を極めしが、應仁年間兵燹に罹りて衰頹し、天正年間四方に勸進して幾かに佛殿を再建し、本尊を安置す。爾後又衰頹せしが、明治維新後漸次復興、以て現在に至る。●境域八百四十餘坪。本堂・講堂・仁王門・寶藏。

不動尊等具はる。本尊本造藥師如來坐像は藤原時代の手法を遺せる鎌倉時代の作、他の本造藥師如來一軀は高さ齋座共に五寸二分、刀法鋭勁、技術精妙なり光背は圓形扁平なる板面に浮彫にて一面に寶相華を地として七佛及び十二神將を牛肉に刻み、齋座亦浮彫の裝飾を施す。藤原時代の製作にして本尊と共に國寶たり。寺寶として足利氏關係の古文書多くを藏す。境内幽邃にして樹多、滿開時には全寺花中に埋れ花の寺の稱空しからず。往昔々々木造藝が此處に觀樓の案を造りし事太平記に見ゆ。本堂前に西行樓あり、西行庵は不動堂後山に在りて西行像を安置す。又古來風流に富める清和井の水、淨野の沼と稱するも亦此附近に在りしもの如く、或は今門前の放生池は蓋し其址ならんかと云へり。

●本尊會(四月八日、十二日)、不動尊會(八月二十七日)、役行者會(十月七日)。

西導寺 宇治郡宇治村大字五ヶ庄。

●淨土宗。●草創沿革不詳なり。●寺寶中、本造藥師如來坐像一軀、毘沙門天立像一軀の二點は現に國寶にして共に藤原時代の作に係る。

松隱堂 宇治郡宇治村大字五ヶ庄。

●黃檗宗。●黃檗山萬福寺境内にありて、當山開闢元隆坊隱棲の遺跡なり。寛文四年、隱元萬福寺在住四年にして當堂を建立し之に退隱す。後ち元禄七年、堂の改修増築成り、以て今日に及びり。現に別格寺にして、當宗管長の住坊たり。

●堂は開山堂の西にあり。梁間七間、桁行十間、單層にして、開山隱元が明の閩州黃粟山に繼いで選定せし當山十二院の一たり。隱元の風説に曰く、采隱奇逢十八公、無經壽在其中、歲寒分有凌霜志、天喜冷然大雅風。また、眞興孫枝増翠茂、亭亭老幹長豐隆、環園日映龍蛇會、感影堂裡一映翁と。寺寶中、紙本普色隱元和尙像(元規筆八十番隱元自題)一軀は現に國寶に列す。筆者元規は長崎の畫人にして其傳詳ならざるも隱元像を描きて名あり。

萬福寺(黃粟山) 宇治郡宇治村大字五ヶ庄。

●黃檗宗。●黃粟山と號し、黃檗宗の本山なり。承應三年七月、明僧隱元隆琦應じて來朝し、先づ長崎の興福寺に留錫し、次で同國崇福寺、攝津普門寺に巡錫す。萬治元年、江戸に入りて將軍徳川家綱に謁して留錫最厚く、列侯群臣歸依する者多し。同二年六月、家綱洛南大和田(今の寺地)の地を寄せ、寛文元年工を起し、其年總門、西方丈、執事寮、厨房等を建て、八月、普山し、明の閩州黃粟山萬福寺の號を用ひて之に名付く。翌年、酒井忠勝の寄附に依り法堂成る。同三年隱元開堂の典を奉ぐるや、皇駕特に臨幸せられ、幕府亦寺領四百石を寄す。次で同年禪堂、東方丈等完成す。同四年、隱元松隱堂に退隱し、弟子木庵第二世となる。此年眞空塔成る、塔は開山塔所なり。同八年佛殿(大雄寶殿)を上棟し、尋で天王殿、鐘樓、鼓樓等落成す。翌九年、祖師堂、伽藍堂成る。元禄七年、五代住持高泉在僧の時に至り、諸堂漸く完備し、輪奐の美を極む。寺宇の結構總て明の遺制に據り自ら特殊の風致を備へ彫工、畫工を始め、木像、畫像悉く明より將來せり。



(寶圖) (門山寺圖風)

本寺創立當初より木庵、慧林、福海、高泉、千景等の支那僧相繼いで法燈を傳へしが、元文五年四月、邦人龍統、壽命を齎けて第十四世を繼ぐ、蓋し邦人を本寺法席に補する始めなり。後ち第二十一世に至る間は龍統の外、第十七世の祖源を除き、他悉く支那の黃粟山より渡來して相承す。第二十二世以後は支那僧の住持跡を絶つと雖、法式、儀制等は總て開山當時の制を改むることなし。もと塔頭三十餘坊ありしも、廢合行はれ、僅かに十八坊を存するに過ぎず。現に末寺四百九十二箇寺、教會或牧所四所を統ぶ。●寺域宇治五雲峯の西麓緩かなる斜面に位置して西面し、前方宇治川を挟みて山城平野を望む。現境域四萬三千百餘坪、一山制を明の禪刹に採れるに依り、一步入れば宛然彼國に遊ぶの感あり、山門を出れば日本の茶摘歌の句よく其實狀を穿てり。總門(漢門)は西面せる三樓制にして、重層屋椽、開き一間三尺の建築なり。門を入りて右折數歩にして伽藍の正中廳に達す。正面に放生池あり、石段を昇れば三門に至る。三門(通天)は三間一戸、重層、入母屋造、本瓦葺にして、黃粟山の整頓、萬福寺の横額(共に隱元筆)を掲ぐ。其



東に天王殿・佛殿・法堂・威徳殿等一線上に並列す。天王殿は(五間三階)、單層、本瓦葺、木造の天王殿、即非華の威徳莊嚴の扁額を掲ぐ。本尊は彌勒菩薩にして、外に草駄天、四天王の諸像を安置し、中央を通路とす。天王殿歩廊を進めば鐘樓・伽藍堂・齋堂・庫裡等其右に、鼓樓・祖師堂・禪堂等は其左に建並ぶ。佛殿は大雄寶殿といひ、五間六階、重層本瓦葺にして、釋元筆の大雄寶殿、木造の萬徳尊の扁額、殿内に明治天皇宮軍眞空の額を掲ぐ。中央に明人范道生の作本



(寶國)(本寺)三室戸

尊釋迦坐像、脇士迦葉、阿彌の三尊を安置せり。佛殿の東に法堂あり、單層、入母屋造の建築にして、もとは説法の所なりしと、現在は鐵眼開版に係る所謂寶鏡版一切經六萬餘の版本を蔵せり。法堂の後に威徳殿、法堂の左右には東西方丈あり、東方丈の壁張附の書は池大雅の筆に成る。禪堂は寶鏡と相對し、坐禪堂にして内に觀音、普賢童子、八歳龍女像を安置す、其西に祖師堂ありて、達磨及び隆元の師費隱の牌を安じ、其他阿彌堂等整然として閑寂の境内に建ち、明神判の制なる左右相稱の伽藍の配置を見るべし。本堂(寛文八年建)・天王殿(同上)・齋堂(同上)・禪堂(寛文三年

建)・伽藍堂(寛文八年建)・祖師堂(同上)・鐘樓(同上)・鼓樓(同上)・三門(延寶六年建)・總門(元禄六年建、以上本瓦葺)・法堂(寛文二年建)・東方丈(寛文三年建)・西方丈(寛文元年建、以上本瓦葺)は國寶建造物に指定せられ、東方丈上の間壁貼付西欄間四面・同衣鉢寮壁貼付波瀾一面・其他西欄間四面・虎溪三笑圖八幅・五百羅漢圖八幅・瀑布圖四枚の六點は何れも紙本淡彩池大雅の筆に成り、國寶たり。本寺開山堂の西に松隱堂(別項参照)あり、初め釋元の隱棲せし所、今本寺の別院にして本宗管長の住坊たり。塔頭寶藏院には寛文年間僧眼が十餘年を費して彫刻せしめし大藏經の板木を鑿藏す。

願行寺

宇治郡宇治村大字木幡。

●淨土宗。●尊勝山と號す。もと觀音寺と號し定惠(藤原鎌足の子)の開創にして其入寂の遺跡なりと稱す。後、これなめぐり南都北嶺の争亂の際、伽藍荒廢す。其後其忠(記主釋迦)門の逸足、眞空慈心此處に留陽して一寺を開き、尊勝寺と號し、鎮西六流の一たる木幡流(尊勝寺流)を高唱し、本寺となし、末寺八十餘箇寺を有せり。其後其門流振はず、久しからずして其法統を絶つや、末寺亦廢散し、遂に知恩院所管に歸せり。明治初年八箇寺の支院を有せし、同十九年之を廢合し現に本寺一字となる。●定惠遺跡の遺物と稱する石棺及び十三層塔斷片あり。

三室戸寺

宇治郡宇治村大字菟道。

●天台宗・門庭。

●明星山と號し、俗に三室堂と云ふ。西國三十三所第十番札所たり。光仁天皇寶龜元年、行表の開基に係る。初め光仁天皇御宇、禁中に奇蹟あり、即ち勅して離宮を改めて寺となし、南都大安寺行表を召して開山とし、且つ御室戸寺の勅號を賜ふ。當初喜撰西谷志津川東北の地にあり。延暦二十四年、勅願によりて本尊千手開眼檀金觀世音供養を修し、且つ堂宇を再建し大いに寺域を擴め給ひ、爾來三十三年毎に勅旨により本尊開眼供養の事定めらる。寛平年間、圓珍當寺に留謁して大いに寺運を興し、花山天皇御宇、當山に離宮を設けさせ給ふ。長和年間、三條天皇法華三昧堂を建立、且つ寺田を寄せらる。次で白河、堀河兩天皇、當寺隆明に御歸依深く、堂宇修營、寺田寄進等のことあり、寺勢愈々揚る。即ち隆明を以て當寺中興とす。當時白河法皇皇子靜澄親王當寺に入り、修道のことあり後ち寺號を改めて三室戸寺とす。後醍醐天皇建武元年寺領若干を賜ふ。然るに後花園天皇寛正元年十二月十三日、祝融の災に罹りて堂宇、寺寶等概れ烏有に歸す。後ち文明十九年に至り勅によりて現地に移り堂宇を再建す。かくて寺運再び隆盛に赴きしが、天正元年七月織田信長、足利義昭を宇治權島に圍むや、當寺衆徒義昭に參ぜし爲め後ち信長當寺を悉く沒收し、一山次第に荒廢す。寛永年間、聖護院道見法親王、若王寺澄存に命じて當寺再興の事あり、寺領を附せられ、次で承應二年、梵鐘鑄造あり。元禄二年、聖護院道祐法親王御願により鐘樓建立さる。明和の頃、堂宇再び廢頽し、金藏院忍興之が重修を志して果せず、堂宇年間に至り、法如改修を遂ぐ。明治初年、慈學堂宇を補修、更に同二十六年より大正年間に入り、漸次境内擴張、庫裡、客殿改築、三層寶塔建立等ありて寺門の面目次第に華まり、以て今日に至れり。

●境内地九百五十餘坪。堂宇に本堂(八間四面、入母屋造)、阿彌陀堂・不動堂・鐘樓・寶藏・三重寶塔・庫裡・鎮守祠等を具ふ。境内に櫻、栴、山吹、萩等多く老杉繁茂し其に塵外の靈境にして、西南宇治川を隔てて巨椋池に臨み、附近に不動觀(圓珍彫刻不動)、喜撰、阿彌陀遺跡、浮舟塚等の古蹟あり。寺寶中、木造阿彌陀如來及び兩脇侍坐像三軀(阿彌陀堂安置)・木造釋迦如來立像一軀・木造毘沙門天立像一軀は現に國寶に列す。彌陀三尊像は藤原期の極めて種相なる傑作にして中尊彌陀は定印の坐像、脇侍觀音、勢至は邦俗に従へる造坐なり。この様式は一には引接の意を更に切實にせるものにして、又一方佛教美術日本化の一端とも見得べし。釋迦如來立像は寺傳に承徳年間、當寺中興隆明、嵯峨清涼寺釋迦像に模せるものと云ふ。即ち鎌倉期を通じて盛んに造立せられし清涼寺式像の一な



(本寺)三室戸

●眞言律宗。●常光寺と稱し、俗に橋寺と云ふ。孝徳天皇大化二年、元興寺道登(一説道昭)勅を奉じて宇治創橋の際、其東端に一字を敷せしを以て當寺の草創となすと傳ふ。後一時衰頽せしが鎌倉初期、觀尊之を再興す。往昔城廓の廣大、堂宇莊嚴なりしが、後ち次第に荒廢して、今僅かに一字を遺すのみ。●堂宇に本堂・庫裡等を具ふ。寺寶中、木造地藏菩薩立像一軀・木造不動明王立像一軀は共に現に國寶に列し、前者は鎌倉期の作、後者は藤原末期の作に屬す。又當寺境内には有名なる宇治橋斷碑を存せり。大化二年宇治橋竣工の際、朝廷有司に命じ、銘を刻して橋畔に建立せしめしものにして、後ち埋没して所在不明となりしに、寛政三年四月、其上部を土中に發掘し、寛政年間、尾張人中村維禎、帝王編年記載する所の文に從ひ補充して今の地に建立し、裏面に其次第を彫せり。扶桑略記に「件橋之北岸之石銘」と見ゆるは即ち之なり。蓋し千二百八十餘年の古碑として陸前國多賀城碑、上野國多胡碑と共に日本三古碑と稱せられ、史學上

能化院

宇治郡宇治村。

●曹洞宗。●俗に不燒地蔵と云ふ。教山の開基に係る。●寺寶中、木造地藏菩薩坐像一軀は鎌倉期の作に係り、明治四十三年四月、國寶に列せらる。

放生院

久世郡宇治町宇治郷。

●眞言律宗。●常光寺と稱し、俗に橋寺と云ふ。孝徳天皇大化二年、元興寺道登(一説道昭)勅を奉じて宇治創橋の際、其東端に一字を敷せしを以て當寺の草創となすと傳ふ。後一時衰頽せしが鎌倉初期、觀尊之を再興す。往昔城廓の廣大、堂宇莊嚴なりしが、後ち次第に荒廢して、今僅かに一字を遺すのみ。●堂宇に本堂・庫裡等を具ふ。寺寶中、木造地藏菩薩立像一軀・木造不動明王立像一軀は共に現に國寶に列し、前者は鎌倉期の作、後者は藤原末期の作に屬す。又當寺境内には有名なる宇治橋斷碑を存せり。大化二年宇治橋竣工の際、朝廷有司に命じ、銘を刻して橋畔に建立せしめしものにして、後ち埋没して所在不明となりしに、寛政三年四月、其上部を土中に發掘し、寛政年間、尾張人中村維禎、帝王編年記載する所の文に從ひ補充して今の地に建立し、裏面に其次第を彫せり。扶桑略記に「件橋之北岸之石銘」と見ゆるは即ち之なり。蓋し千二百八十餘年の古碑として陸前國多賀城碑、上野國多胡碑と共に日本三古碑と稱せられ、史學上

地藏院

久世郡宇治町白川。

●淨土宗。●一に金色院とも稱す。照澄の開創に係り、本尊文殊菩薩を安ず。往昔は不動堂、虚空藏堂、經藏等を具へし、今は大いに退轉せり。●寺寶中、板影兩界曼荼羅二面・銅造阿彌陀如來立像一軀・同阿彌陀如來及脇侍像一軀・木造觀世音菩薩坐像一軀・同大威徳明王像一軀・木造觀世音菩薩坐像一軀・同阿彌陀如來立像一軀の七點は國寶に指定せらる。兩界曼荼羅は高野山に在るものと略々同一にして、彫刻甚だ精密なり。其中、金剛界のものは台密に於て用ふる成身會のみを彫り、下部に明王部八體を刻せり。製作期は藤原時代なり。阿彌陀如來は白鳳時代の作にして、當時の佛像の形式に倣ひ、右手は下方に伸し、左手は屈して衣角を持つ。阿彌陀及び脇侍像は數室に分れたる蓮臺の中央に彌陀、左右に脇侍、(尊缺)を置く。在來の彌陀三尊像と意匠の異なる點に於て注目し、天平初期の作と推せらる。釋迦如來像は基臺の支花より出たる蓮臺尖端の臺上に置かる。全體の構造、雄健なる趣致深し。大威徳明王像は藤原時代の



作にして、通常の牛に乗れるものなれど、素材の銅なる事及び小型の像なる點に於て貴重視せらる。以上四點現に恩賜京都博物館寄託中なり。觀世音像は九重の台座上に右膝を屈して跪座する藤原時代の作。阿彌陀像は上品下生の像にして、台座には精密なる寶相華の浮彫施さる。同じく藤原時代の作なり。

興聖寺

久世郡宇治町。

●曹洞宗。佛道山と號す。本朝曹洞宗初祖道元の開基に係り本邦開宗最初の古刹なり。初め、道元宋より帰朝の後ち洛南深草安養院に隱棲せしが、天福元年、弘誓院正覺禪尼、深草極樂寺の舊地に於て新に伽藍を興し、道元を請じて開山とす。道元即ち觀音導利院と號して之に居る。後ち法堂、僧堂等を建立して一山整備するに及び、支那五山禪刹の一たる徑山聖愚禪寺に擬し興聖賢林禪寺と號し、青蓮院尊純親王より同寺號の額を賜ふ。後ち寛元元年、道元當寺を註慈に託して越前に赴き、彼地吉田郡志比町に金松峯大佛寺(寛元四年永平寺と改號)を創して之に隱棲す。建長以降、屢次觀融の災に罹りてより寺門荒廢に墮せしが、慶安二年隆城主水并尙政、之を今の地に移して再建し、萬安を請じて住せしめ、檜島の地二百石を寄す。蓋し之れ尙政父直野の遺志にして池田信輝(池田氏祖)遺稿の爲めなりと云ふ。即ち萬安は當寺中興の祖たり。もと塔頭東禪院ありしが、後ち廢絶す。現在末寺五十一箇寺を統ふ。

●境内地二千三百十坪。宇治川東岸朝日山中腹に位置して風趣幽雅、一山悉く宋朝禪刹に擬して結構自ら異彩を放てり。堂宇に本堂、客殿、方丈、庫裡、山門等をも具ふ。

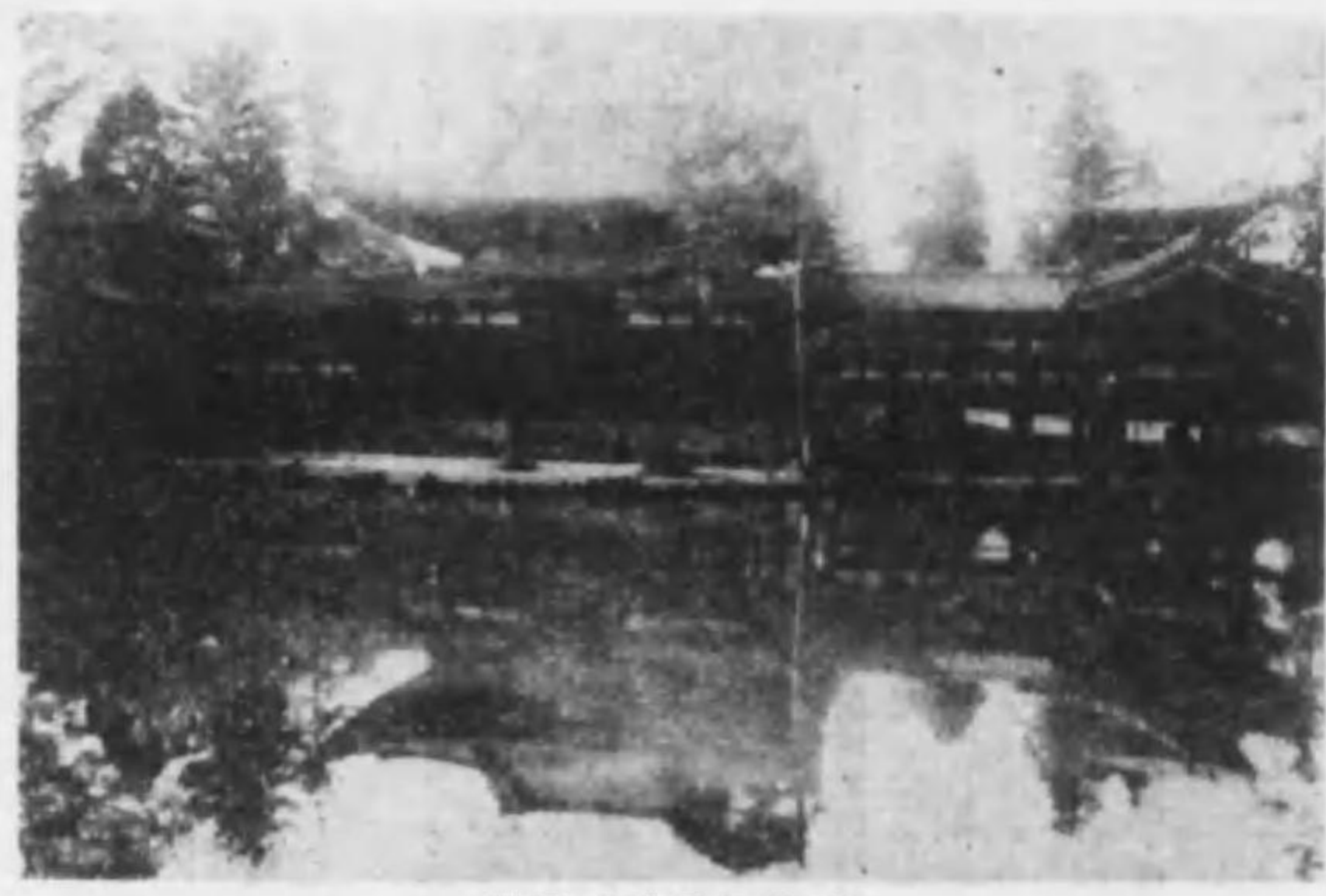
淨土院

久世郡宇治町。

●淨土宗。平等院塔頭たり。初め、平等院は久しく天台宗三井圓滿院門主の發願所たりしが、明應年間に至り榮久其荒廢を歎き近衛家に請ひて修營を加へしより、天台淨土兩宗に屬するに至る。蓋し本院の草創此時なるべく、爾來當院は最勝院と共に輪番にて其事務を掌り、以て今日に及ぶ。

●寺境四千三百餘坪。急流瀉々たる宇治川の西岸に位置し、水を隔て、翠鬱蒼蒼朝日、佛徳の諸岳に對し、山水の明媚秀麗、風光の佳絶なる風に人口に膾炙する所なり。我國古美術の萃を集むる風流堂は境域の中央にありて北面し、幾多の兵燹を免れて阿字池の明鏡に今尙其秀容を映し、九百年前の藤氏一代の榮華を物語る。堂は無量壽院と稱し、本院の本堂なり。天喜元年圓白賴通の建立に係る。中堂、兩翼及び後尾部より成り、中堂は三間二面重層にして案階を有し、翼廊其左右に在り、其の兩端は矩形をなして前面に突出し、隅角に寶形造の欄干を置き、寶珠、露盤を冠す。尾廊は單層にして後方に出で、中堂屋蓋は入母屋造、其他は切妻とす。中堂の大棟の兩端には青銅製大風凰をか、其の前後中央を一段高くす。屋根は悉く木瓦葺にして、唐草、巴等當代特色ある文様を有せり。全態の制全く古の皇居の制を模せるものにして、彼の豐樂殿の左右に懸畫、露臺の兩樓あるに似たり。形態變化に富み、種々の様式を混用して、しかも其中自ら調和統一あり。細部の手法優美にして木割繊細、屋蓋の勾配極めて緩なるは軒先の出深きと相俟つて姿態一段の美を加へたり。尙は本堂にて看過すべからざるは建築と周圍自然との調和にして、其建築的美は更に秀麗なる山水と渾然融和する事に依り、造者の企圖をより完全なるものたらしめしものなり。内部は床面を除

外悉く寶相華文様を以て彩飾す。天井下小壁には五十一體の飛天像を懸く。像は木造にして、もご彩色色なりしも、今は其大部脱落す。通、再、太鼓をもて雲の裾を請み、神羅廻りて歌舞踏踏し、巧みに境上木尊を



(景全堂風鳳院等平)

相、來迎の歡喜を表現して餘す所なく、圓上に書する觀經の文亦當代の能書源俊房と稱す。中央に須彌壇あり、もと平座地に螺鈿を以て寶相華文様を表現せしも今なし。壇上丈六阿彌陀像は定印の坐像にして定朝の作に係り、一代の傑作と稱せられ、後背優麗なる飛天を眞ひ、全身金色にして、天衣飄々かに身に纏ひ、慈眼深く垂れ、以て哀愍攝取の態相を現す。上部に方形の天蓋を重く、折上小八角塔の四方に寶相華文透彫りの薄板を垂れ、中央八棱形の圓蓋を吊す、共に金箔をおき、圓蓋中央に蓮瓣にて縁られたる鏡を附せり。堂は國寶建造物にして、本尊・天蓋・雲中供養佛五十一軀共に今國寶に列す。斯の如き内部の裝飾、繪畫、彫刻、彩色、髹漆等總て當代美術の粹を集め、善美を盡せるものにしてよく時代の高尚を物語る。阿字池は信心作と傳へ、群多く風致あり。附近一帶史蹟名勝庭園に指定せらる。堂前の石燈籠は賴通の好み、所謂平等院形として著名なり。風流堂の前面阿字池を隔て北寄に觀音堂あり。一に釣殿と稱す。七間四面、單層、屋根四注造、木瓦葺、構造頗る簡素にして、單純の美を有し、風流堂の秀麗に對し、實に對照の妙を得たり。寺傳によれば風流堂と同年(天喜元年)の建立と云へども、鎌倉初期の建築とすべし。安置の木造十一面觀音立像一軀は本堂阿彌陀如來像より稍々古朴味を有し、寺傳に康國(鎌倉時代)の作とすは誤解なるべきも、其彩色、鍍金文様は鎌倉期の補修に成るものと推せらる。建築、像共に現に國寶たり。堂邊の北を扇芝と稱す。治承四年、源三位賴政、平氏と戦ひて利あらず遂に自盡せし所と傳へ、現に自然石一基を立つ傍に龍掛松、胸繫松等賴政關係の遺跡あり。風流堂の南小丘上に鐘樓あり、國寶の銅鐘を懸く。銅鐘は契造形に飛天、獅子を鑿出し、口部の開き強く、朝鮮鐘の

平等院(鳳凰堂)

久世郡宇治町。

●天台宗寺門派。朝日山と號す。永承七年三月藤原賴通の創立に係り、僧明尊を開山とす。初め此の地、右大臣源融の別業たりしが、後ち關成天皇行宮を建て、宇治院と稱せらる。宇多、朱雀の兩天皇亦屢々此處に行幸あり、深宮を設け給ひしが、長徳四年、道長の之を領するや己が山莊となし、其子賴通に譲る。賴通別業を捨て、寺となし、佛像を安置し、初めて法華三昧を修して平等院と號せり。翌天喜元年三月大宮を建立し、丈六の阿彌陀佛を安置し、僧四百を招じて之を慶す。其儀御會に准せらる。同四年に法華堂成り、康平四年には皇后宮御願に依り多寶塔を造營せらる。治承二年十月、師實、父賴通の病弱平德新願の爲め五大堂及び鐘樓を建て供養す。同三年十月、後冷泉天皇行幸あり、寺家に封二百戸を加へ、賴通に准三宮の勅書を賜ふ。延久元年五月、本寺に始めて一切經會を修し、以後以て恒例とす。承保三年十二月、教通阿彌陀堂を供養し、應保元年四月、行慶史に新たに堂宇を起し、白河上皇の新願所となす。上皇、院宜を以て定慧法親主に附し、其の從弟をして相承せしむ、故に平等院宮の稱ありき。時怡も藤原氏全盛の世にして寺房欄の美を極め、巨多の寺領を有して寺運比びなく天下の寶窟名器盡く此處に蒐められりと云ふ。然るに治承四年、源賴政、平氏と戦ひしより數回の兵燹に罹りて漸く衰運現る。文曆元年、大修理を加へたるも、延元元年、並に元龜元年兵燹に罹り佛殿寶庫等多くを失ひしが、風流堂、鐘樓、釣殿等僅に難を免れて今に存す。平等院の執行



様式を加味せしと思はる、點あり、其秀美なる形相を以て夙に本邦三名鐘の一として喧傳せる。尙ほ鳳凰堂西北隅に塔頭最勝院あり。天台宗に屬し古來本院別當寺たり。開基は明尊にして、後ち最勝院澄榮之に住す。爾來其院號を以て寺號となせり。院内に桓政の墓あり。哀願甚しかりしを近世大河内信古修理を加へて石輪塔を建立せり。附近所謂宇治の名勝にして舊跡名所數多し。就中、浮舟島、十三重寶塔、蘇神社等殊に著はる。

永福寺 久世郡佐山村市田。

●眞宗大谷派。
●延暦十八年、最澄の眞弟教觀の開基に係る。初め叡山西谷教觀院を兼帯せしが、後ち實開寺の時、親鸞に遇し隨喜して弟子となり、寺を改めて念佛の道場となせり。其の後本願寺八世蓮如山科居住の頃、當寺に一七日滞在す。同十一世親如の時、住持警珍、身を挺んで石山本願寺に加勢せしを以て、織田信長威つて悉く堂舎を焼亡す。仍て江州赤野井の御堂を留守すべき由あり、警珍五年の星霜を同所にて送り。天正八年、赤野井の古堂を得て當寺の本堂とす。後ち又再建せりと云ふ。
●寺實には親鸞筆唯信鈔文意一帖・親鸞聖人肉附齒・覺如筆執持鈔一帖・同筆願々鈔一帖・同筆十字六字名號二幅・同筆宗意鈔・同筆和讃等あり。

稱名寺 久世郡佐山村大字佐古。

●淨土宗。
●天正二年創建と傳ふ。明治十四年、本堂新築せらる。

●境内二百十三坪。所藏の木造樂師如來坐像一軀は藤原末期の作と推定せられ、現に國寶たり。
●西遊寺(橋本寺) 綴喜郡八幡町。
●淨土宗。
●善理山と號す。神龜三年、僧行基、山崎の橋を作り、橋邊に一字を創して行人往復の安息所とす。時人之を橋本寺と呼ぶ。是れ本寺の蓋源にして、現在八幡庄を一に橋本と稱するは、こゝに由来すと云ふ。後ち元龜元年、増上寺十世感譽、北條家の臣平政繁の男北條氏康の命を帯びて上洛の節、弟子欣譽に命じて本寺を現地に移轉せしむ。天正元年、欣譽、堂宇の落成するや、師の西國遊遊に因みて西遊寺と公稱し、感譽を開山となす。慶長五年五月、徳川家康、朱印加藤し、石清水八幡山淨土宗寺院三十五箇寺の朱印頭となる元祿年間、聖譽善阿、本堂を改築し、寶曆三年、常譽信阿、庫裡及び書院を改造す。文化元年、眞阿顯興の代、本堂の再建成り、大正十三年、現住眞導、大に土木を起して本堂庫裡を修繕す。創立以來明治五年まで獨立の無本寺たりしが、其後金戒光明寺末となれり。
●境内千五百三十坪、寺域高壁にして洛南の平野を一時に收むる景勝の地なり。本堂・書院・庫裡・觀音堂等を具ふ。
●春(五月)、秋(十月)、二季茶會法會を修す。

神應寺 綴喜郡八幡町。

●曹洞宗。
●嵯峨山と號し、もと應神寺と稱せり。貞觀二年、行教勸許を蒙り豐前宇佐八幡宮を勧請して當地に男山八幡宮を創祀し、次で當寺を建立して其の別當寺とす。初め法相宗なりしが、足利氏の時現宗に改む。豐臣秀吉深く當寺に歸依して寺號寄進あり。後ち葛伏見城の遺構を移して書院を建立す。明治初年、神佛分離の際、石清水八幡宮に安置せし開山行教律師像を當寺に移せり。
●寺域男山半腹にありて四邊閑寂、眺望絶佳なり。堂宇に本堂・開山堂・書院(伏見城遺構)・庫裡等を具ふ。又境内に行教創觀に係る不動堂杉山不動・産屋辰五郎墓・天然記念物に指定せられし大樟等あり。寺寶中、木造行教律師坐像一軀(開山堂安置)は現に國寶に列す。明治初年八幡宮開山堂より移安置せしものにして、弘仁時代の作風を存し、兩手先の別木後補なる外、全軀一木彫なるも彩色剥落せり。他に當寺三世弓禮作豐臣秀吉木像・狩野山樂筆襖畫(書院所在)・狩野水徳筆杉戸畫(書院所在)・眞火八幡宮御影・行教律師畫像等を藏せり。

八角院 綴喜郡八幡町。

●淨土宗。
●其草創、建保年間、順徳天皇の勅願に係ると云ふ堂形を八角形に造營せしより其名あり。爾後の沿革詳かならず、後ち豐臣秀頼之を再造す。
●本尊たる木造阿彌陀如來坐像一軀・大師堂安置の木造元三大師坐像一軀は共に國寶に指定せらる。前者は下品中生の印を結べる巨像にして前々古體に見ゆれど、作風は純然たる安阿彌式なり。尙ほ光背に附する千佛像亦同時の作、鎌倉時代一種の特色あるものと見て注目するに足る。後者は極彩色、玉眼嵌入、鎌倉期の

作なり。境内小丘に車塚あり、一に坊主塚と稱せらる。

藥園寺 綴喜郡八幡町。

●淨土宗。
●京都市五條坂安祥院の末寺たり。行基の開創にして、本尊樂師如來なるを以て後世樂園寺と稱すと云ふ。
●本尊木造樂師如來立像一軀は善名稱吉祥王如來と稱せられる異形にして藤原末期の作に係り、廣隆寺所藏樂師如來立像と同一形式のものなり。現に國寶に指定せらる。

福壽寺(達磨寺) 綴喜郡八幡町。

●臨濟宗妙心寺派。
●俗に達磨寺と稱す。禪學專門道場にして江湖道場と號す。文化四年、海門和尚、田中僧正家傳の達磨の像を得て之を安置し道場を開く。像は初め、大和國片岡山達磨寺に在り。寛正元年、片岡光次、島山政長と戦ひ敗れて山城八幡に移れしが、當時此像を携へて一堂に安んぜしを、後ち此處に移せり。明治四十一年有志に依りて堂宇を修繕し寺門の繁昌を來せり。
●寺地、山城河内の境なる洞ヶ峠の麓を占め、境内閑靜にして、禪門道場相應の地たり。堂宇に、本堂・庫裡・達磨堂・道場等を具備す。木像達磨大師坐像一軀は今達磨堂に安置す。寛正年間、大和達磨寺より傳來せしもの、稱して日本三達磨の一と云ひ、本邦達磨像中最古最後の作と稱せらる。玉眼彩色形相、通例の坐禪姿にして、顔より法衣を纏ひ、兩手を膝上に重ね。手法雄健にして、造形寫實の妙に徹し、よく達磨坐禪の面目を發揮す。鎌倉時代の作にして、現に國寶に指定せらる。

正法寺 綴喜郡八幡町。

●淨土宗。
●徳田山と號す。建久二年、源忠國の開創に係り、圓誓之れが開山たり。天文十六年、勸願所となり、徳田山正法寺の勸願を賜はる。後ち徳川義直の母相應院(善願寺)の菩提所となるや、徳川氏五百石の朱印地を附せり。寛永七年、尾張徳川氏の臣志水甲斐守忠繼(善願寺)堂宇を修理改築す。現在の堂宇即ち是れなり。
●境内廣闊にして諸堂完備す。唐門に東面し、後奈良天皇宮、徳田山の勸願を掲ぐ、本堂は南面し、同じく後奈良天皇宮正法寺の勸願を掲げ本尊彌陀三尊を安す。祖師堂は本堂東に在りて東面し、開祖及び中興の祖像を安す。其他方丈・庫裡・鐘守厨等の堂宇あり。庭園又風致に富む。所藏の紙本墨畫石格筆二祖調心圖二幅(附・虞集跋一幅)は現に國寶たり。水墨の減筆體にて二個の人物を描けるものにして、一幅には乾徳改元年八月八日、西蜀石格寫二祖調心圖の落款見ゆ。描法の面部に密にして、衣紋に粗なるはよく石格の特色を表せども、落款、書風より見ても恐らく模寫に非ざると思はる。されど彼の手法をよく傳持せし點、支那繪畫史上珍重すべき一遺作なり。附近に頼風塚、女郎花塚あり、小野頼風夫妻の墓と傳ふ。

善法律寺(紅葉寺) 綴喜郡八幡町。

●律宗。
●一に西寺、紅葉寺と稱す。行基の創建する所と傳

恩庵(一休寺) 綴喜郡田邊町。

●臨濟宗大徳寺派。
●通稱一休寺と云ふ。現在大徳寺眞珠庵末なり。もと本庵西方の地にあり、龜山天皇の勅に依り大應國師(南浦紹明)之を開基して龜山山妙禪寺と號す。元弘年中、兵燹に罹りて廢滅に歸せしが、後ち康正年間一休宗純之れを再興し、且つ其側に一庵を營みて虎丘と號し、以て退休の所となせり。これ當庵の草創にして、庵の名は法祖の恩に酬ゆる意なり。文明七年、一休皮丘に塔を作り、慈揚塔と稱す。同十三年、八十八歳にて當庵に示寂せり。村田珠光、一休に參禪して



聖廟の淨苑を作り、榮屋軒宗長、亦師事して待月軒を作り、山崎宗鑑、曾我範定等皆一時此處に住せしことあり。慶安年中、佛殿及び方丈等修理せらる。近世寺額九十石を有せり。



(寶洞) (堂本庵忌願)

●境内約三千坪。堂宇に本堂・方丈・庫裡・大應堂・鐘樓・虎丘等を具ふ。其中、本堂は、永享三年足利義教の建立する所にして、現に國寶建造物なり。桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺の建築に

して、段組石段上におり、軒の反轉著しく姿態頗る輕快、二重の層檼、二手先斗拱を初め、内部の構造手法に至る迄、其の制、鉅くまで、唐様なり。柱間は前後側面共に中央間廣く、正面は圓の如く、後面は半圓の廂を突き出し、内部にて之を脇佛壇とす。内部は總瓦敷にして、後方二本の來迎柱間板壁を用ひ、其の前面に本尊釋迦、文殊、普賢の兩脇侍を安置す。而して四個圓を化粧圓根裏となし、また後方來迎柱上より二本の虹梁を前方に架し、出組斗拱を組み立てて方一間の鏡天井を支持する等、其形態より木割組織、建具、彫刻等に至るまで、よく唐様の特徵を發揮すると共に、又よく禪宗殿堂の形式を具備す。蓋し室町中期禪堂建築中最も優れたる遺構の一なるべし。方丈は慶安三年前田利常の再建に係る。堂内國寶木造一休和尚坐像一軀を安置す。本像は玉眼入段上極彩色にて竹篋を持ち椅子に坐せる像にして、寺記には一休の高弟聖濟の作、髪髪は一休のものなりと見ゆ。尚ほ絹本善色宗繪筆一休禪師像一軀を藏し、同じく國寶なり。方丈前面の庭は松花堂、佐河田靈齋、石川丈山の合作にして、十六羅漢遊園圖に因るものとして知らる。



(法塔石寺泉法)

法泉寺

●新義眞言宗智山派。

觀音寺

●新義眞言宗智山派。

●新義眞言宗智山派。●草創詳かならず、寺記に、弘仁元年再興と見ゆ。寛文中中智積院末に屬して今日に至る。●寺域三百六十坪。堂宇は本堂・庫裡等を具ふ。境内、南方に十三重石塔あり。基礎三段の石段よりなり、總高二尺餘、今相輪を缺く。最下層石の兩面に銘あり、一面に弘安元年十一月二十六日建立の旨を記し、

大智寺

●眞言律宗。

●大武天皇勅願に依り、僧表瀧の開基する所と傳ふ。當時觀山寺と號し、七堂伽藍壯麗を極めしを以て、世人簡城大寺と呼べり。其後一時衰頽せしを、聖武天皇御宇、再興す。延暦十三年、堂宇回廊に罹り、仁壽三年、堂宇修興せらる。治暦四年、再度表上せしが、大業院賴實により再建せらる。文治五年、大業院眞信、藤原基通(普賢寺殿と號す)の援助を得て、堂宇修理に着手し、嘉祿三年に至り、造營完成し、息長山普賢教寺と改稱せり。弘安二年、三度祝融に遭ひ、一山悉く焼亡す。仍て正應三年、源越藤原基公再興せしが、後永享九年、又も寺内より失火し、屋舎の大牛焼亡し漸く衰頽に傾く。同十一年、大御堂、小御堂の再建ありしが、永祿八年、四度火災に罹り、大御堂のみ再築せられ、觀音寺と稱して現在に至る。斯くの如く、本寺は創建以來祝融の災に罹ること屢次なりしにより、往昔七堂伽藍を具備し、僧坊二十宇、境域十萬餘坪を有せし距離全く失はれ、現在大いに退轉す。

●境内六百五十九坪。(乾達)本尊十一面觀音立像一軀は現に國寶なり。天平末期の傑作にして、流暢平靜なる衣褶雄大な體格を包み、よく天平期の特徴を表現せり。尙ほ境内に五輪石塔あり、近衛基通の墓と傳ふ。●本尊鎌日(八月十七日)。

禪定寺

●曹洞宗。

●補陀山と號し、正暦年中、僧平崇の創建と云ふ。初め奈良東大寺に屬し、華嚴天台二宗を兼學す。長元二年、藤原賴通本寺を以て祝國道場となし、寺運大いに振ふ。永暦年中、藤原忠實再興し、また延寶八年に

して、段組石段上におり、軒の反轉著しく姿態頗る輕快、二重の層檼、二手先斗拱を初め、内部の構造手法に至る迄、其の制、鉅くまで、唐様なり。柱間は前後側面共に中央間廣く、正面は圓の如く、後面は半圓の廂を突き出し、内部にて之を脇佛壇とす。内部は總瓦敷にして、後方二本の來迎柱間板壁を用ひ、其の前面に本尊釋迦、文殊、普賢の兩脇侍を安置す。而して四個圓を化粧圓根裏となし、また後方來迎柱上より二本の虹梁を前方に架し、出組斗拱を組み立てて方一間の鏡天井を支持する等、其形態より木割組織、建具、彫刻等に至るまで、よく唐様の特徵を發揮すると共に、又よく禪宗殿堂の形式を具備す。蓋し室町中期禪堂建築中最も優れたる遺構の一なるべし。方丈は慶安三年前田利常の再建に係る。堂内國寶木造一休和尚坐像一軀を安置す。本像は玉眼入段上極彩色にて竹篋を持ち椅子に坐せる像にして、寺記には一休の高弟聖濟の作、髪髪は一休のものなりと見ゆ。尚ほ絹本善色宗繪筆一休禪師像一軀を藏し、同じく國寶なり。方丈前面の庭は松花堂、佐河田靈齋、石川丈山の合作にして、十六羅漢遊園圖に因るものとして知らる。

●古義眞言宗。●開運山と號し、高野山金剛峯寺に屬す。草創、沿革詳かならず。もと寺屋敷なる地に在りしを、木津川の洪水を避けて、現在の地に移れり云ふ。●境内五百坪。寺寶の木像千手觀音立像一軀は藤原時代の作にして現に國寶なり、一に厄除觀音と云ふ。●觀音鎌日(四月十七日)。

西明寺

●古義眞言宗。

●古義眞言宗。●寺傳に依れば行基、藥師佛及び十二神將像を建立し、堂宇を今の堂畑の地に營み藥師山華頂寺と號せり。以て本寺の草創とす云ふ。承和元年、空海、本寺に留滞す。以後現宗に轉す。治承年中、兵燹に罹り、堂舎焼亡し、古記録の大牛を失ふ。應永二年、行賢、寺運の挽回に盡力し、日光、月光兩菩薩及び十二神將の像を新に造りて安置し、併せて寺田若干を寄進す。元祿年中、木津川氾濫し、堂宇の被害少なからず。仍て享保三年、三町餘西方なる現在の地に移りて之を再興す。明治十三年、塔頭東之坊、地藏堂の二寺を合併す。現に同宗仁和寺末なり。●境内二百二十餘坪。堂宇は本堂・觀音堂等を具ふ。寺寶中、木造藥師如來坐像一軀は國寶なり。藤原時代の作と推考せらる。他に日光月光菩薩二軀、十二神將十二軀、持國天及び增長天像各一軀、聖觀音像一軀、地藏尊像一軀、彌陀三尊像三軀、六字名號版木一枚、法堂茶羅版木一枚、如意輪觀世音像二幅、不動明王像一軀、解深密經五卷等を所藏す。●千燈明會(二月八日、十二日)。

●俗に橋寺と稱す。上古、泉河橋の橋頭にありしを以て此名あり。行基開創の五畿内四十九院の一なりと云ふ。天平十三年の春、行基當寺に海留の御、聖武天

泉橋寺

●淨土宗。

●眞言律宗。●往昔、橋柱寺と稱せり。行基親むる所の泉橋廢墟として後ら橋柱水府に残りしを、弘安年間、觀尊(一に慈信とす)柱をとり、佛土安阿彌に命じて文殊像を作らしめ、以て一字を創建せしより橋柱寺の名ありと云ふ。寛文中中僧本寂之を改め、文殊の大智に因み大智寺と稱せり。●寺寶中、木造文殊菩薩坐像一軀、同十一面觀音立像一軀の二點共に國寶に列す。前者は鎌倉末期の作になり、玉眼入、全身極彩色、後者は藤原時代の作と推定せらる。

●古義眞言宗。●寺傳に依れば行基、藥師佛及び十二神將像を建立し、堂宇を今の堂畑の地に營み藥師山華頂寺と號せり。以て本寺の草創とす云ふ。承和元年、空海、本寺に留滞す。以後現宗に轉す。治承年中、兵燹に罹り、堂舎焼亡し、古記録の大牛を失ふ。應永二年、行賢、寺運の挽回に盡力し、日光、月光兩菩薩及び十二神將の像を新に造りて安置し、併せて寺田若干を寄進す。元祿年中、木津川氾濫し、堂宇の被害少なからず。仍て享保三年、三町餘西方なる現在の地に移りて之を再興す。明治十三年、塔頭東之坊、地藏堂の二寺を合併す。現に同宗仁和寺末なり。●境内二百二十餘坪。堂宇は本堂・觀音堂等を具ふ。寺寶中、木造藥師如來坐像一軀は國寶なり。藤原時代の作と推考せらる。他に日光月光菩薩二軀、十二神將十二軀、持國天及び增長天像各一軀、聖觀音像一軀、地藏尊像一軀、彌陀三尊像三軀、六字名號版木一枚、法堂茶羅版木一枚、如意輪觀世音像二幅、不動明王像一軀、解深密經五卷等を所藏す。●千燈明會(二月八日、十二日)。



●覆雲山と號す。草創年時及び開基評かならず。元...

●日蓮宗。草創期並に沿革不詳。堂宇中、本堂(桁行五間、...

燈明寺

相樂郡加茂町免道。

●新義眞言宗。普門山と號し、一に紙輪寺、蟹満多寺と稱し、...

蟹満寺

相樂郡備前村大字崎田。

●新義眞言宗。北吉野山と號し、一に金剛藏寺と云ふ。...

神童寺

相樂郡高麗村大字神童子。

●古義眞言宗。創建年次及び沿革不詳なるも、現に仁和寺の末寺...

法泉寺

相樂郡相樂村。

●古義眞言宗。創建年次及び沿革不詳なるも、現に仁和寺の末寺...

岩船寺

相樂郡富尾村大字岩船。

●眞言律宗。淨瑠璃寺末院なり。聖武天皇天平年間行基の開基...



(岩船三寺) (岩船寺)

●眞言律宗。小高き所に立ち、弘和二年の建立に係る。其形式三間...

淨瑠璃寺

相樂郡富尾村大字西小森。



(寶園) (浄瑠璃寺)

●眞言律宗。田原山法雲院と號し、本堂に安置し、瓜生山觀世音寺と號せり...



帝室博物館に、同法起菩薩立像(仁治二年の胎内銘あり)は奈良帝室博物館に各出陳中なり。

海住山寺

相樂郡瓶原村大字例幣。

眞言宗普通寺派。

天平七年、眞跡の開創に係り、聖武天皇の勅願寺なりと傳ふ。其後一時衰頹せしが、承元二年、貞慶(解脫上人)笠置寺より本寺に移り之を中興せしより寺運亦隆盛に向ふ。貞慶始め興福寺に在り、法相宗の頓學



(實圖) (相樂郡瓶原村大字海住山寺)

たりしが、建久二年、笠置寺に遷道し、居ること十六年にして海住山寺に移る。其後六年にして、再び本寺を高足懸心に託して笠置に去るや懸心繼いで當山の興隆を成就す。往時は寺領三百町を有し、室町時代迄は住坊五十餘字を存せし巨刹なりしが、今は廢頹して三四の堂宇を存するのみ。

靈盤等を具備し、屋根の流れ緩やかにして、手法輕妙なれど軒に反轉乏しく、重麗の感なき能はず。之れ後世に於て椽皮葺より、本瓦葺とせし結果なり。各層其のプラン及びエレベーションを異にし、上層に向ひてその軒高、及び廣さを漸減す。初二三層にのみ廻縁勾欄あり、四面中央に扉を、兩脇に櫺子窓を施す形式を用ふるも第四、第五層になき如き、各部の構造樣式著しく異なりて變化に富み、然もよく諧調を保てり。其手法亦雄麗にして以て、當代遺構中の尤とすべし。外部は總丹塗、初層齋輪上に裝飾の痕跡あり、内部は金箔押にして其上に各種の紋様を配す。中央壇上に大日如来を奉安す。今八枚の扉ありて八尊の圖を描く、よく鎌倉時代の繪畫紋様の特質を窺ひ得。塔の北側に文殊堂あり。三間二面、單層、屋根四造、檜瓦葺の建築にして、其の建立年代を知らずと雖寺藏の古文書に永正九年九月二十一日上蓋、奉加十年十二月十三日上葺、正徳元年八月修補の事見えたり。極めて小堂宇なれども極尙優麗、軒窓に、鎌倉時代の特質を見るを得べし。寺寶中木造十一面觀音立像(弘仁時代作)同十一面觀音立像(藤原時代作)あり、前者の素朴なるに反し、後者は刀法精緻にして、檀像彫刻の日本化せる一例として看過すべからず。他に胡本若色法華變茶經圖一幅(恩賜京都博物館出品中)あり、何れも國寶に指定せらる。尙ほ本堂の北數町の地に奥ノ院あり。十一面觀音を本尊とし、貞慶、慈心兩上人の像を安置す。兩上人の石塔は本堂の南方二町にして至る。

國分寺

相樂郡瓶原村大字例幣。

新義眞言宗智山派。聖武天皇大養徳に都を遷し、慈仁京と稱し給ひし

が、後ち大極殿を賜ひ、國分寺に充てらる。此事續日本紀に見え、更に寶龜元年、行幸御鹿原宮、四年、山背國國分寺捨便略二十町を出で、此地即ち宮殿の地たりしが如し。注古聖武天皇勅願の一國一寺の國分寺として寺運隆盛なりしが、後世水く廢頹に歸せしを近年に至り一草堂を再興して現在に及ぶ。

正法寺

相樂郡中和東村大字南。

臨濟宗水源寺派。

臨濟宗水源寺派。天平年中、聖武天皇安積皇子の冥福を觀めん爲め本寺を創建し、僧行基を開基とす。一に轉寺、佛法寺と稱せり。當初佛法寺山にあり、多くの寺縁を經し、寺運盛んにして地方稀有の名刹たりしが、元弘、建武の頃、屢々武將の陣所に充てられ、寺領亦沒收せられて荒廢其極に達せり。爾後、久しく廢絶のまゝなりしが、寛永十八年佛法寺城主田村氏、草堂を營み、本尊無量壽佛を移安す。正保元年、開山寺指雲庵址に小堂を建立し、如雲を請じて中興の開山とす。次で田村貞清、佛法寺山の舊堂宇を移して本堂となせり。後水尾天皇、東福門院の御歸崇厚く、明暦二年、境内の山林を寄せらる。此時寺號を改めて正法寺とす。寛文五年、東福門院、四脚門、其念持佛觀世音、黃金七十兩等を寄せらる。爾來皇室の勅願所となれり。

金胎寺

相樂郡東和東村大字原山。

古義眞言宗。

寶峰山と號す。白鳳四年、役小角之を開創し、養老六年、夢遊險難を冒して五箇の堂宇を造營すと傳ふ。古來修驗道の靈場として著はれ、行基、經眞、弘法、傳教の頓學文々來りて續行すと云ふ。永仁六年九月、伏見天皇勅して多寶塔を建立せしめ竣工に際しては御臨幸あり、自ら供養會を修せらる。然して正保年間、當山に入御あらせらる。元弘元年八月、後醍醐天皇南都



(實圖) (相樂郡東和東村大字原山)

よりこゝに淨幸あり、次で笠置に移り給ふ。時に兵變に罹り、多寶塔を除きて他悉く烏有に歸す。後ち文政九年に至り、眞寬之を中興す。現に塔頭として中の坊、西の坊、東藏坊、新藏院、上の坊の五箇院を有す。

くの如き双手肘木は本塔礎に初めて見ゆ所なり。屋根各層勾配緩やかに反轉多く、其の繊細なる二重重椽と簡素なる組物の對照優雅にして、全體の姿態、高麗典麗、石山寺、高野山金剛三昧院の多寶塔と共に鎌倉時代に多寶塔中最も優秀なる建造物なりとす。内部極彩色にして中央壇上に伏見天皇御守の愛染明王像を安置す。現に國寶建造物なり。寺寶中木造彌勒菩薩坐像(一軀(鎌倉時代作)・錢弘敏八萬四千塔(銅製、舍利塔補作あり)・一基は國寶に指定せらる。塔に就きて宋人程瑛の龍山轉相寺記の語す所によれば支那五代の末吳越の王錢弘敏、阿育王の故事に倣ひ、佛塔八萬四千を造り、諸方に頒布し、本邦へも其中の五百塔を送ると云ふ。蓋し本塔其遺塔の一なり。塔の四面に釋迦の本生譚を鑿出し、内面に仁の字あり、こは千宗文の順序によれる記載なり。尙ほ境内附近に鎮守石、金剛童子社あり、繩頂を空鉢峯と稱し、寶篋印塔を建て、北斗星の拜所となせり。東山腹の行場と稱するは役小角、夢遊修練の跡なり。伏見天皇行宮の舊跡は虚空藏居に存す。

笠置寺

相樂郡笠置村大字笠置。

新義眞言宗智山派。

鹿路寺と號し、も修驗道の道場なりき。寺傳に大友皇子曾て此地に遊獵せらる、や、馬嘶崖に臨みて嘆然たり。即ち皇子山神の神諭を祈念して奇蹟より免れ給ふ。故に其證として、若御の開堂を廢して還幸あり、後ち此地に佛閣を建立し、彌勒石像を本尊とし、彌勒寺と號せり。一に又白鳳十二年天武天皇創建と傳へたり。聖武天皇の御宇僧良辨勅を奉じて秘法を修す。建久年間、貞慶(解脫上人)本寺を中興し、一山を分ちて上ノ堂、下ノ堂とし、大いに堂塔を經營す。

法明寺

相樂郡笠置村大字有由東部。

新義眞言宗智山派。

草創並に沿革不詳。寺寶中木造釋迦如來立像一軀・同吉祥天立像一軀・同增長天立像一軀の三點は國寶に指定せらる。釋迦立像は高さ五尺三寸餘、手足を缺き損傷甚しけれど、刀



法體にして豊満なる肉體に薄き袖衣を纏ひし手法等  
室生寺金堂釋迦像と其趣きを一にし、藤原初期佛像の  
一佳作なり。吉祥天像及び増長天像共に前釋迦像と同  
時代の作になり、前者は破損甚しく、彩色亦殆んど剥  
落せり。後者は此時代作品に見らるゝ重厚性乏しく、  
寧ろ輕快なる趣致に富む。

大智寺

相樂郡湯船村。

●臨濟宗永源寺派。  
●百丈山と號し、近江國水原寺末寺たり。貞治二年、  
山名伯耆守時熙及び米山義高の二人一字を冠して、理  
有（大觀轉經）を請じて開山す。これ本寺の草創にして、  
て、工事完成するや、後光嚴院勅額を賜ひ國家  
鎮護の道場となせり。また足利義隆寺跡若干を寄附す。  
天正年間、同様に頼り寺遷退轉せしが、明野元年、後  
水尾天皇、東福門院の本願に依り、一絲文守（佛頂國  
師）の門下如雲文嵩（圓興禪師）（一説妙覺）に再興せし  
め、佛殿を賜へり。

穴太寺

南桑田郡曾我部村大字穴太。

●天台宗。  
●穴太はもと穴種に作る。善隣寺と號し、西國三十  
三所觀音第二十一番札所にして、丹波の名伽藍なり。  
本寺本尊は藥師如來にして、文武天皇慶雲二年天下に



(堂本寺太穴)

成本性猛意にして、感世の受けし蘇物を奪はんとして、道  
に離して之を射る。翌日本尊を拜するに像の胸前に昨  
日の矢立ち御肌より鮮血流る。然も感世は疵害を被ら  
ず、宮成大に怖畏し、前に奪取せし所の蘇物を感世に

疫病あり左大神大伴古殿新念のため創建すと稱す。村  
上天皇應和二年、當郡曾我部の住人宇治の婦深く佛法  
に歸依し、宮成佛工感世を請じて金色聖觀音を造らし  
め、藥師如來と並べて本寺に安置す。緣起に依るに宮

金剛寺

南桑田郡曾我部村大字穴太。

●臨濟宗天龍寺派。  
●福壽山と號し、藤原年間高峯願日（佛國國師）の草  
創に係る。後ち間もなく無住となりしが、天正六年夢  
窓疎石第十三世の法孫虎孝より分派して天龍寺派とな  
り、後ち玉堂中興再建す。現今の建造物、これなり。我  
部山派の祖圓山應舉は享保十八年五月一日この地に生  
る。幼より書に親しみ、耕耘の業を努めず、九歳の時  
父、本寺住持盤山に託し僧となせしも、毫も經卷を習  
はざれば、師、父母を説きて書技を學ばしむ。後ち京  
都に大火あり、應舉避けて故郷に歸り、天明八年、祖  
先及び兩親菩提の爲に本寺本堂の礎等に播く。俗に應  
舉寺と稱する所以なり。  
●寺域三百八十餘坪。所藏の紙本淡彩渡瀧圖二曲屏  
一雙、二十八幅・同群仙圖十二幅・紙本墨書山水圖十三



(堂本寺洞金)

神藏寺

南桑田郡藤野村大字佐伯。

●臨濟宗妙心寺派。  
●朝日山と號す。僧最澄延暦寺建立の後ち當地に來  
りて紫雲寺と旭日に映じて赫々たるを見、延暦九年、  
一字を建立して朝日山神藏寺と名づけ、座像三尺七寸  
の藥師如來を刻みて安置すと云ふ。一條天皇深く尊崇  
あり、正暦年間、源賴光に勅して堂塔並に二十六の僧坊  
を造營せしめ、佐伯庄五百五十石の寺領を寄進し給ふ  
に及び、寺運甚だ盛大に赴く。治承四年、源賴政兵を



(堂本寺藏神)

舉ぐるや、一山の衆徒皆之に應ぜしが、賴政宇治に敗  
死するに及び、僧徒散亂、寺領の沒收あり、堂塔頽廢  
す。其後、嘉祿元年建源當寺の荒廢を慨き、爾來七年銳  
意再興に力め、仁治三年之を完成す。更に應永年間、  
國主細川頼元之が修補を加へて寺運益々發展し、諸寮  
の歸依後からざりしが、天正三年、明智光秀の兵燹に罹  
り堂塔僧坊悉く烏有に歸す。正保四年、淨土宗の僧願西  
洛西光明寺より來り、鐘樓を建て、承應二年、本堂及び  
阿彌陀堂等を建立して淨土宗となす。其後之を嗣ぐ者  
なかりしが、延寶元年、龜山（後の龜岡）の太守松平忠晴  
高懸を  
請じて  
禪刹に  
改め、  
山林田  
莊等を  
寄進し  
て新願  
所とな  
す。當  
時四至  
東は仁  
王門よ  
りあり  
谷のみ  
その印  
杭迄、  
西はよ  
こ尾の  
峯を限  
り、南は  
あみ谷、  
北はきつたの尾山道に達し、  
寺域頗る廣潤なりき。後ち寶曆十二年、大岩講堂を寺

千手寺

南桑田郡藤野村大字鹿谷。

●臨濟宗妙心寺派。  
●大同元年、空海の開創に係り、もと眞言宗に屬せ  
しが、天慶年間兵燹に罹り、堂宇燒燼す。應永年間建  
長寺關漢道隆の闢止庵によりて中興され禪院となる。  
天正五年、明智光秀の兵火に炎上し、後ち妙心寺の法  
孫願岩之を再興し、現派に轉す。寶曆二年、有栖川宮  
の御祈願所となり、明治四年、徳仁親王の染筆額面を  
賜ふ。  
●寺境頗る風趣に富み、所謂十四景の勝あり。

法常寺

南桑田郡藤野村大字千ヶ畑。

●臨濟宗妙心寺派。  
●大梅山と號し、正しくは法常皇寺と稱す。後水尾  
天皇、一絲文守（佛頂國師）に御歸依あり、近臣に命じ  
て加茂に靈源院を建て、住せしめ給ひしが、次で天皇、  
千ヶ畑の舊草庵を改めて大梅山と號せしめ、寛永十八  
年三月、舊殿及び御門を賜ひて本寺を創建、爾來永く  
一絲を闡基とせらる。香華院として皇室の御崇敬を受  
け、御由緒寺院として殊遇を蒙れり。明治十年、諸堂  
表上せしが、翌る十一年再建成る。  
●境内千三百餘坪。寺境老杉の鬱蒼たる間九占め、



開創の趣あり。本堂は明和年中光格天皇の勅を奉じて造營せしもの、奥殿には歴朝の尊牌を奉安す。方丈は寛永十八年創建、明治十年焼失、後再建し、時國忌を修する道場たり。其他寛永十八年當山勅創當時宮中より移されし勅使門、當寺鎮守八幡社等あり。寺寶中、紙本墨書後水尾天皇宸筆一紙和尚山詩並に御次額和歌一巻は國寶に指定せらる。尙ほ他に當山草創の時賜はりし「大梅山法常寺」の宸筆勅額あり。



(法常寺本堂)

寶林寺

南桑田郡宮前村大字神前。

●臨濟宗大徳寺派。  
●曹溪山と號す。開創年代詳ならず。往古天台宗に屬し寶積寺と稱せしが、明智の亂に兵火に罹り、寛文

年中、春峯福温之を中興し、寺號を今の如くに改む。  
●境内九重石塔婆は「正應五年壬辰三月十六日造立」の銘あり、現に國寶建造物たり。什寶中、木造樂師如来坐像一軀・同阿彌陀如来坐像一軀・同釋迦如来坐像一軀は國寶に列せらる。共に、藤原末期の製作になり五智如来の一部をなせしものならん。

極樂寺

(出雲の極樂寺) 南桑田郡千歲村大字千歲

●淨土宗。  
●吉祥山と號し、百萬遍知恩寺末たり。正保三年、光榮雪哲によりて創建せらる。沿革明かならず。  
●境内百六十餘坪。奉安の木造十一面觀音立像一軀はもと神宮寺本尊にして、明治四年本寺に移す。檜材の一木彫、藤原期の作に係り、丈高六尺二寸五分、座一尺七寸五分、現に國寶に指定せらる。  
●御忌會(二月二十五日)、觀音千日會(八月十日)、十夜法要(十一月十四日)。

國分寺

南桑田郡千歲村大字國分。

●淨土宗。  
●護國山と號す。聖武天皇御宇、諸國に建立せられたる國分寺の一なるべく、延喜式に「丹波國國分寺料四萬束云々」とあるに該當するものか。今甚だしく退轉す。  
●本尊木造樂師如来坐像一軀は藤原初期の製作になり國寶に指定せらる。高さ二尺八寸五分、後世の修補拙劣にして、尊容甚しく損はる。尙ほ境内及び附近丹波國分寺址として史蹟に指定せらる。

常照皇寺

北桑田郡山田村大字井戸。

●臨濟宗天龍寺派。

●大雄山と號す。貞治元年、光嚴院の御開創に係る。初め觀應元年、院御齋堂あり、勝光智無範と號せられ、伏見に開地を遷して住せられしが、後此地に御駐馬あり、本寺を創建し給ふ。貞治三年、御不豫あり、七月七日、崩御あるや、光明院及び梶井宮承胤法親王下向せられ、寺後丘上に葬り奉る。山國院是れなり。御遺詔により陵上には楓柏榿の三樹を植うるのみ。南禪寺第三十七世清深通叡、院の法統を嗣ぎて第二世住持となる。後花園、後土御門兩天皇、光嚴院を崇敬し給ふ事極めて厚く、其御遺勅により、山國院の御側に葬り奉る。後山國院及び御分骨所是れなり。天正十年、明智光秀の亂起るや、其兵燹に罹りて堂宇



(常照皇寺)

多く焼失す。加之、もと三百六十石に及びし莊園並に寶物法器等大牛暴兵に掠奪され、衆徒散散して、法燈將に滅せんとして、住持第九世雲室一人残りて、よく祖塔を守る。後陽成天皇、觀感あり、幕府に命じて寺額五十石を附せしめられ、次で堂宇再建の御下命あり、漸く復舊す。後水尾天皇また寺運再興に留意を注

がせ給ふ等歴朝の御崇敬厚く、慶應二年には孝明天皇より紫衣地に列せられ、歴代住職は光嚴院の法系たるべき旨の編旨を賜はる。  
●境内九千五百七十六坪。四周、北桑の峯嶺群立して、幽邃閑寂の靈地なり。堂宇は總て高治以後の再興に係り、開山光嚴院御廟(拾遺庵)・方丈・勅使門・庫裡・舍利殿・開山御遷榿所(風栖軒)等を具へ、寺寶として開山御所持品二十七點(後水尾天皇御寄進の篋中に存す)・開山、後醍醐、後花園、後土御門、後伏見、後水尾、靈元、後醍醐、後西院、孝明各天皇の宸筆・寫翰並びに御下賜品・佛畫十數點等を所藏す。寺後丘上に山國、後山國の二皇陵あり。  
●後花園天皇御忌(二月二十七日)、菊花供及び羅漢供(三月二十五日)、光嚴院御忌(五月七日)、後土御門天皇御忌(九月二十八日)。

中道寺

北桑田郡弓削村大字上中。

●古義眞言宗。  
●草創年代並に沿革不詳。現に同宗大覺寺末たり。  
●寺寶中、木造増長天立像一軀は丈高五尺一寸、現に國寶に列せらる。

福徳寺

北桑田郡弓削村大字下中。

●曹洞宗。  
●玉泉山と號し、永平寺末なり。元明天皇和銅四年、行基の開基にして、勅して玉泉山福徳寺の號を賜ふと云ふ。もと法相宗に屬せり。天平年中、聖武天皇勅願により、樂師七重塔建立せられ、歷次行幸ありき。孝謙天皇天平勝寶年間、七堂伽藍の造營あり、天皇より

福徳西國寺の號を賜ふ。當時塔頭十有餘を創して寺運盛大なりしが、其後漸次退轉せり。道元此地に留錫せしことあり。天正七年、明智光秀、周山に築城するに方り、本寺堂宇をこれが用材に充てしを以て本尊を一時境外の假堂に移すの患運に際會せしが、寛文六年、樂師堂を建て、假堂に充つ。但し古文書什器等は悉く未寺たる檜尾山平等律院に保管せしめ、總かに寺號のみを存置せり。天和年間、僧釋智本寺を再興して一小字を營み、富春庵と稱し、永平寺に屬せしむ。貞享元年、樂師堂を現地に移し、更に享保七年、新たに寺地を購入して堂宇を再築する等漸く舊觀に近づきしも、安永八年、不幸祝融の災に罹る。翌九年復興即ち現在の堂宇是れなり。明治十五年、福徳寺の舊稱に復す。尙ほ寺傳に依れば、本寺は天平十三年、國分寺建立の事あるや、當國國分寺に充てられ、爾來連續として其の寺務を司りしが、天正七年以後、未寺たる檜尾山平等律院に移管せりと云ふ。按ずるに、當國國分寺は其舊址を南桑田郡千歲村國分に見出す。其間の消息如何にや、記して以て後考を俟つ。

五雲寺

船井郡須知町市森。

●曹洞宗。  
●雲山と號す。初め、應永十八年、大和國補光寺の太尊梵清諸國巡錫の途、當地に草庵を結ぶ。時に鎮主須知慶吉、太尊に歸依する事厚く、同二十三年、當地

龍興寺

船井郡八木町八木。

●臨濟宗妙心寺派。

●米山と號す。享徳元年、細川勝元之を創建し、妙心寺義天玄承(大慈惠光禪師)を請じて開創とし、以て香華寺となす。當初、寺額二百五十石、山林十數町を有し、雪江、景川、橋溪、特芳、東陽、露林、大休、月航、太原等の碩學相承し、寺運頗る隆盛を極め、七堂伽藍整然とし、塔頭支院九箇寺を算し、結構亦壯麗なりしが、天正七年、明智光秀八木城を攻略するや、諸堂兵燹に罹り、悉く灰燼に歸す。徳川時代伯耆、角倉了以俗系の故を以て家康の歸依厚く、其撥賣により中興の大業を完成す。其後一時寺運退轉して無住なりしが、天和三年十二月、塔頭橋院院禪曹山して方丈を董し、獨住地となせしより、爲天亦後を嗣ぎ方丈を改築する等、寺觀漸く整ひ、以て今日に至る。

普濟寺

船井郡東本榑村大字若森。

●曹洞宗。



◎大慈山と號す。延文中、足利貞氏の女傳心全正尼の開基に係り、天下太平萬民普濟祈願の爲めに之を創建、夢窓疎石を請じて開山となし、太平山普濟寺と稱せり。弘治年中、新たに傳心作十一面觀音像を奉安、山號を大慈山と改稱す。足利季世、寺門大いに衰退せしが、寛永年間、龜山城主菅沼權盛正定、其歸依せる曹洞宗僧天外を請じて中興開山とし、以て現宗に改め、且つ境内山林東西二町餘、南北一町半餘の賦役を免ぜし、寺運再び隆盛に赴く。

◎堂宇に佛殿・法堂・庫裡・鐘守堂・鐘樓・禪堂等を見ふ。就中、佛殿(觀音堂)は桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺(一時茅葺なりしも、昭和六年改修に際し、復舊して現狀に改む)にして、延文二年の遺蹟と傳ふ。其構造様式よく室町時代の風を存し、細部の手法及び須彌壇また禪宗建築の特徴を示す。現に國寶建造物なり。

◎千日會(八月十日)に觀音詣りと云ふ。

◎古義眞言宗。仁和寺末なり。弘仁元年空海の開創と傳ふ。永保年中、伽藍を建立し、寺領を附せられ、本坊、成就坊、奥之坊、中之坊、上之坊の六坊を置き、仁和寺第三世覺行法親王中興す。永正年中、回縁に遭ひ、天正年間、寺領を没收せらるゝ等、一時荒廢せしが、元和九年、領主小出吉次之を修理せり。但し樓門のみは永正の火災を免れ今日に至る。

◎大野原護國山と號す。弘仁二年、空海、本村大字長田の地に創建する所と傳ふ。爾來眞言宗を奉ぜしが、

天正七年、明智光秀福知山城を攻むるや、其兵變に罹り、諸堂悉く烏有に歸せり。仍りて同國(現在兵庫縣水上郡)圓通寺威靈堂宇を再興し、以て現宗に轉す。後威靈福知山久昌寺に住するに及び、本寺を其の末寺となし、實嚴を推して中興開山とす。寛政八年、火災に遇ひ、同十年、寺を現地に移して再興す。

大福光寺(巖の毘沙門) 船井郡高原村大字下山。

◎古義眞言宗。仁和寺末なり。崇延の開基と傳ふ。崇延、もと東寺に住し、十禪師の一人なり、寛平年間、鞍馬寺に入り、該寺を再興、後此の地に來り毘沙門天の靈異に感じて本寺を開創す。一時寺運退轉せしが、嘉祥年間、足利尊氏本願となり再興を企圖、二年落成せり。現今の本堂棟札に「嘉祥二年十月廿四日再建」の旨を記す。徳川初期祝融の災に罹りて古記録亦焼失し、沿革明かならざるも、維新前までは將軍家及び領主の祈願所たりしと云ふ。現に本堂、大門等の礎石を存す。

◎本堂(毘沙門堂)は方五間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺、軒二重檜重木、斗拱和様三ツ斗出組、内陣入側化粧屋裏裏、内陣中央に須彌壇を設け、懸所に極彩色を施す。棟札に嘉祥二年十月二十四日再建の旨あり、蓋し構造様式上又此年次是認せざるべし。多寶塔は方三間二層、屋根檜皮葺、内部は鏡天井、中央に須彌壇を置く。室町初期の建築に屬し、本堂と共に國寶建造物たり。所蔵の紙本墨書方丈記一卷は國寶に指定さる。其他建武四年制札・狩野元信筆皮圖等あり。

◎初寅、月會會(毎月三日)。

◎曹洞宗。天田郡下六人郡村大字多保市。

◎曹洞宗。大野原護國山と號す。弘仁二年、空海、本村大字長田の地に創建する所と傳ふ。爾來眞言宗を奉ぜしが、

◎曹洞宗。天田郡下六人郡村大字多保市。

◎曹洞宗。大野原護國山と號す。弘仁二年、空海、本村大字長田の地に創建する所と傳ふ。爾來眞言宗を奉ぜしが、

◎曹洞宗。天田郡下六人郡村大字多保市。

正曆寺 何鹿郡神部町寺。

◎古義眞言宗。那智山と號し、高野山實城院末なり。天慶五年、空也當地遷化の朝、聖觀音像を刻みて須知山々頂巖山ヶ嶽に安置せるを本寺の靈廟と傳ふ。後一時庶民の參詣至難の故を以て、山麓大岩谷の溪口なる中ノ堂に移せしが、正曆二年、聖樂更に之を現在の地に安じ、堂宇を造營して、以て密教流通の道場となす。工成るや、年號に因みて正曆寺の稱を許され、勅願寺に準ぜらるゝと云ふ。其後、平重盛、熊野三山を當地に移し、本寺山號を那智山と號せしめ、莊園若干を附す。其後隆替常ならずと雖も、中比武邊の障依厚かりしもの如し。天正年中、朝祐堂宇の修理を企圖せしも、當時、明智光秀の福知山城を築くに方り、其用材を悉く没收するあり、幾かに古材を以て造營の工を竣ふと云ふ。寛文十二年、藩主九鬼隆季寺田若干を寄せ、また自家の新願所と定めしより、寺運漸く盛なり。天保九年、住持深信、九鬼氏始め道俗の援助を得て、堂宇の修理改築を行ふ。現在の堂宇即ち是れなり。

◎寺前、由良の急流漸く流れ緩かにして、四時風景に富む景勝の地たり。堂宇は本堂・庫裡以下整備す。所蔵の絹本着色佛涅槃圖一幅は國寶にして、鎌倉時代の作になり、寺傳、作者を先般司に擬するに非なり。文化年中修補の旨あり。其他大般若十六善神像・不動明王木像・千手觀音木像等を藏す。

◎古義眞言宗。草創年次並に沿革不詳。現に金剛寺末たり。

◎古義眞言宗。草創年次並に沿革不詳。現に金剛寺末たり。

岩王寺 何鹿郡西八田村大字七百石。

◎古義眞言宗。神宮山と號し、沿革不詳ならざるも、現に高野山實城院末たり。空也を開基とす。

◎眞言宗東宗派。景徳山と號す。草創年次詳ならず。當初、光福寺と號し、兩丹一圓の守護寺たり。曆應二年、足利直義、夢窓疎石の勸に従ひ、國土安穩を祈り、元弘以來戰役者供養の爲め全國に一寺一塔の建立を企圖するや、本寺を以て當國のそれに充つ。仍て正平元年十二月、寺號を改めて安國光福寺と稱せり。是れより先、足利尊氏の生母上杉氏は本寺を安地蔵に祈りて尊氏を生めりと云ふ。康永年中、上杉朝定自家累代の菩提寺たるの故を以て、天田郡夜久郷今西の地を寄進せり。

◎寺境宏闊にして、櫻花、紅葉によく、當地公園として知らる。本尊木造地藏菩薩一軀は藤原末期の作に係り、現に國寶なり。像は、古來于安地蔵と稱せられ、安産の靈驗著して四時參詣の婦人絶えず。他に天龍

光明寺 何鹿郡奥上林村。

◎眞言宗醍醐派。君尾山と號す。寺傳に推古天皇七年、聖德太子の創立と云ひ、往古は上林谷七里間を寺領とし、山上山下に七十二坊を並べ、この地の開墾及び聚落をなすの最初なりと。白鳳元年、役小角此地に來りて修驗修行し、延喜年中、聖賢中興して密教の道場とす。大永七年十一月、兵燹に罹りて仁王門を除く外本堂、法華堂、常行堂、鐘守、拜殿、三重塔、行者堂、鐘樓及び坊舎等焼失せり。天文二年、上羽丹波守再興せしが、其後、衰微甚しく廢頽漸く極まる。天正十五年管領高田豐後守より寺領山林を寄せ、慶長八年、管領藤原美作守土中より圍出せし梵鐘を改鑄し、寺領を寄進する等興隆に力む。享保十八年、山下の二十三坊焼亡、天保七年、住持弘道、領主藤原家等の助を得て今の本堂を建立せり。大正三年五月庫裡、方丈、客殿等五棟を焼失す。

◎本堂には貞享二年藤懸信濃守の日光三本杉を以て彫刻せし千手觀音を安置す。仁王門は三間一戸の樓門にして、屋根入母屋造、檜皮葺、軒は二重檜重木、斗拱は三手先、支輪附、内部は小規模天井にして内外を丹塗りとす。構造手法によく鎌倉時代の風を存し、現に國寶建造物たり。寺寶として嘉吉元年右京大夫源朝臣の制札・文明十一年右馬頭制札・承慶三年明曆二年



の藤懸水俣の寄附状等を蔵す。江戸時代には塔頭十七坊あり、明治初年には山上に四坊ありしも今は一箇寺のみ。寺境樹木に富み、風光頗るよく、大像は周圍四十尺の名木たり。

桂林寺 加佐郡舞鶴町桂屋。

曹洞宗。

天香山と號す。寶徳三年、三善雄仙の創祀に係る。沿革詳ならずも、現に寺觀整備し、近郷の一名刹たり。

境域千三百餘坪。本堂・開山堂・禪堂・經藏・衆寮・方丈・庫裡・鐘守室・山門等を具備す。

圓陸寺 加佐郡舞鶴町引士。

古義眞言宗。

草創沿革共に不詳なるも、現に京都仁和寺末たり。寺寶中、木造阿彌陀如來坐像一軀・同樂師如來坐像一軀・同釋迦如來坐像一軀・不動明王立像一軀・同毘沙門天立像一軀の五點は何れも國寶に列し、毘沙門天は鎌倉期、他は藤原時代の作に係る。

平安の木造毘沙門天立像一軀は國寶たり。寺傳に

興禪寺(毘沙門堂) 加佐郡倉橋村大字多聞院。

臨濟宗天龍寺派。

天香山と號す。當初眞言宗を奉じ、七堂伽藍具備せしも、中古衰頹甚し。後ち權藤之を再興して臨濟宗に改め、以て中興の開山となる。弘化三年焼失して舊記、寶物等を失ふ。

平安の木造毘沙門天立像一軀は國寶たり。寺傳に

行基作にして朝護孫寺、鞍馬寺のそれと共に一木を以て此三尊を彫刻せしものと稱するも、様式手法明かに藤原末期の特徴を示す。

天台寺 加佐郡余内村大字天臺。

天台宗寺門派。

青葉山と號す。初め、本宗に屬する修驗道場にして南、實性、教學の諸坊を總稱して天臺院と號せり。慶長七年、細川氏の屬依厚く、寺領若干の寄進あり、寛永年中京極高治亦之に歸依し、明暦二年高直の時、開城寺々中萬徳院實徳を請じて中興せしむ。當時、最初の坊舎を併合して經學院、正學院の二箇院を建立、徳川家光の靈柩を安置し、寺制を更改せり。次で延寶八年、更に徳川家綱の靈柩を安置し、佛舍利の寄進を受く。寛政十一年、方丈・庫裡回廊に罹り、寺寶、舊記と共に烏有に歸す。現に丹後四郡を道し唯一の台教寺院たり。

興原山と號し、一に慈惠寺と稱す。眞如法親王の草創にして淳和天皇長六年本堂、鐘守堂を建立せらる。天安年間文德天皇時水田五百五十町の下賜あり白河天皇永保二年、請願の法及び除病法を修せしめ共に驗あり、勅して伽藍を再建せしめられ、又眞如法親王の爲めに、三重の齋塔を建つ。久安二年、勸願寺となり、平安盛衰を奉行して本堂を再建、且つ美福門院

金剛院(慈惠寺) 加佐郡志樂村大字鹿原。

眞言宗東寺派。

興原山と號し、一に慈惠寺と稱す。眞如法親王の草創にして淳和天皇長六年本堂、鐘守堂を建立せらる。天安年間文德天皇時水田五百五十町の下賜あり白河天皇永保二年、請願の法及び除病法を修せしめ共に驗あり、勅して伽藍を再建せしめられ、又眞如法親王の爲めに、三重の齋塔を建つ。久安二年、勸願寺となり、平安盛衰を奉行して本堂を再建、且つ美福門院

智恩寺(切戸文殊堂) 與謝郡吉津村大字文殊。

臨濟宗妙心寺派。

天橋山と號す。俗に切戸の文殊堂と稱し、日本三

の御願に依り阿彌陀像を本堂に安置せしむる等朝廷の御歸崇甚だ厚し。應永九年、後小松天皇御不豫の故を以て不動明王に祈願し御平癒ありと云ふ。中世以降寺運振はず。現に西南の山頂に眞如法親王の遺骨を埋むと云ふ塚あり、傳へ云ふ、元慶五年、親王天竺羅越國に寂せらるゝや、其後、恒寂法親王遺骨を持ち歸り當寺に奉葬すと。

境内に本堂・三重塔・鐘樓・仁王門・勸使門・方丈庫・經等あり。就中三重塔は國寶建造物たり。塔は本院北方山麓に建ち、三間三層塔臺にして屋根は現に各層瓦葺なるも當初檜皮葺なりし如し。各層軒二重繁



(寶圖) (塔塔院金)

徳、和樓三手先斗拱を組み、今、屋頂相輪を缺き、形態美ならず、屋蓋の洗れた急なるも、其木割様に雄大なり。外陣天井平葺、内陣天井雲支輪折上小組となせども、何れも後世の修補に成り、創建年次、永保年間と稱するも、様式手法、室町中期に屬す。内部壇上には眞如法親王木像を安置す。寺寶中國寶に指定せられしもの次の如し。絹本着色樂師十二神將像一軀は中央八重蓮座に樂師如來、左右に日光月光を配し、其各左右に十二神將を描き、各々其肩に短扇形を置きて其名を記せり。寺傳に願輝の筆と傳ふれど、恐らく鎌倉時代の邦畫なるべし。木造阿彌陀如來坐像一軀は藤原初期

の作に係り、繪材の定印細陀にして今は塗箔剥落し、光背二重玉輪輪の輪郭中に寶相華を現す。木造深沙大將立像一軀は快慶の作に係り、鎌倉時代彫刻中の逸品として聞ゆ。木造執金剛神立像一軀・同增長天・同多聞天立像二軀・同金剛力士立像二軀等皆國寶たり。

松尾寺 加佐郡志樂村大字松尾。

眞言宗醍醐派。

青葉山と號し、西國三十三所第二十九番札所たり。慶應年間、唐僧感光富山に於て馬頭觀音像を感得し、草庵を結びて之を安置せしを當寺の起原なりと云ふ。元

明天皇和銅五年勅か乘りて新に馬頭觀像を刻し、五間四間の本堂を創建して之を安置す。

元正天皇養老年間、唐僧法師勅を奉じて青葉山上に興ノ院を開き、爾後歴代の勸願道場たり。正暦年間、春日爲光勅



(堂本寺尾松)

を奉じて本尊大像を刻み、其胸内に開山感光の感得せし寶像を納むと云ふ。中比、美福門院の尊像殊に深く、惟尊の時、命じて七堂伽藍を建立せしむ。當時、末寺六十五字に及び、寺領四千石を有せりと云ふ。後ち續田氏の兵燹に罹りて一山悉く烏有に歸せしが、天正九年、細川幽齋本堂を再建し、次で慶長七年京極高知之を重修す。正徳三年、攝州池田の住人藤屋平兵衛祖饗のために茶室を建立す。次で享保十五年、牧野英成講堂字に大改修を加へ、寺觀舊に倍す。明治十七年、高野山より電法親王御作空海像を勸請して當寺大師堂に安置す。現に當寺中本寺格にして寺勢頗る隆盛なり。

當山は舞鶴要港東面に聳ゆる青葉山(扶桑馬耳山)腹に位し、山頂興ノ院は學坂約二十町、眞寶珠に廣瀨なり。堂宇に本堂(大悲殿)・大師堂・通夜堂・庚申堂・經藏・寶藏・鐘樓・方丈・庫裡・茶室・勸使門・仁王門等を具ふ。寺寶中、絹本着色普賢延命像一軀、同孔雀明王像一軀は共に國寶に列し、現に東京帝國博物館出陣中なり。前者は純然たる藤原式佛畫の典型的作例にして、その相貌柔和なるのみならず、衣には巧緻なる微金彩色を以て七寶つなぎの丸花文等種々の文様を描き、其他光背の唐草文様並に細網彩色の蓮座等悉く精巧なる手法を示し、その優雅なる裝飾趣味の横溢は正に當代佛畫の特色を發揮せるものと云ふべし。後者は彩色鮮麗なる鎌倉時代の作にしてその裝飾趣味描線畫法等の細緻優美は當代佛畫に於ける藤原期手法踏襲の傾向を示す好作たり。其他後陽成天皇寫輪を初め歴聖皇軍・賢臣武將の遺墨等甚だ多し。

對眞言集會式(佛舞)(五月八日)、曾祭會式(舊六月十七日)。

寺境天橋南方の岸頭に在り、遙かに成相寺と相對して景勝の地たり。堂宇は本堂・多寶塔・寶藏・鐘樓等具はる。就中、多寶塔は國寶建造物にして三間二層、屋根檜皮葺、楹は各層二重繁檼、勾欄緩かにして階様に唐樓特有の反轉を有す。屋頂相輪を冠し、上層は腰に廻縁あり柱八角柱にして、柱頭尾椽を備へたる四手先斗拱を用ひて上層を支ゆ。下層は平方面三間、出組



(寶圖) (塔塔寺恩智)

文殊の一なり。寺傳に、大同三年平城天皇の勸願により創建、延喜四年醍醐天皇天橋山智恩寺の勸願を賜ふと云ふ。當初眞言宗を奉ぜしが、嘉祥年中、嵩山入りて住するに及び、臨濟宗に轉す。明應年中丹波府中の城主延永春信、多寶塔を建立す。永正四年小笠朝經職に敗れ、一族門黨八十二人と共に本寺に自盡せり。寛永年中國守京極高廣、別源を請じて住せしめ、寺田五十石を寄せ、爾來妙心寺派に屬せしむ。明暦年中文殊堂を改修せり。一説に今智恩寺の地は興佐宮の舊址にして、本寺も波路村に在り、中古以來今の地に移ると。

寺境天橋南方の岸頭に在り、遙かに成相寺と相對して景勝の地たり。堂宇は本堂・多寶塔・寶藏・鐘樓等具はる。就中、多寶塔は國寶建造物にして三間二層、屋根檜皮葺、楹は各層二重繁檼、勾欄緩かにして階様に唐樓特有の反轉を有す。屋頂相輪を冠し、上層は腰に廻縁あり柱八角柱にして、柱頭尾椽を備へたる四手先斗拱を用ひて上層を支ゆ。下層は平方面三間、出組



平拱を組む、本塔は大正七年修理の際見せし墨書銘に據りて延永修理進修信の遺立に係り、明應九年三月起工、翌十年(文龜元年)卯月二十五日竣工せし、こ

國分寺 與謝郡府中村大字國分

●古義眞言宗。高野末なり。舊國分寺の遺址にして、延喜式に丹後國分寺料二萬束、文殊會料一千束と見ゆるは當寺の事なり。宮津府に國分寺舊記を引きて、「本尊、嘉祥三年十月、自權助忠宿所奉渡、供養、大願主國司内大臣正二位藤原朝臣公賢、勅使五位下行内匠藤原朝臣光遠云々」の事を記せり。されど國分寺址は今加佐郡八雲村大字中山の邊(一説同村大字和江)にありと云ふ。僧尼兩國分寺の兩郡に分立せしものか確ならず、現に成相寺に屬す。

妙立寺 與謝郡府中村大字中野

●日蓮宗。●榮昌山と號す。寺傳に、泰澄の開基と傳え、初め天台宗を奉じ、法華堂と稱せり。其後沿革明かならざるも、後花園天皇御宇、身延山の日養本寺に留賜せられたる際、日蓮宗に改め、且つ近郷の興内、萬福二寺を末寺となせり。蓋し本寺丹後國最初の法華道場なり。守護代一色五郎、日養に歸依し、法華殿、供養を寄進す。●寺域、前方に天橋の名勝を控へ、後に、成相、該の聖體を負ひて風光甚だ明媚なり。所藏の髮漆厨子一基は高さ一丈二尺、室町初期の作に係り、現に國寶たり。

成相寺(橋立觀音) 與謝郡府中村大字成相寺

●古義眞言宗。●成相山(一に世野山に作る)と號し、高野末なり。西國三十三所第二十八番札所なり。寺傳に慶應年間、應眞の草創に係り、文武天皇勅願の道場なりと傳ふ。貞和四年本願寺三世覺知遷化の際、本寺に詣せし、こあり、當時山内六坊を有し、堂宇莊麗を極めたりと云ふ。應永七年山崩れありて堂宇倒壊するや、三重村大江越中守、同族沙彌圓庵と發願して再興す。永正四年若州の武田氏、一色義有と交戦、武田氏本寺に陣せしを以て義有火を放ち、堂宇を燒く。慶長年中、賢長之を再興し、寛永年間、別源亦重修すも舊觀に復せず、昭和二年七月火災、庫裡、客殿を燒く。●境内地二千餘坪。寺域成相山の中腹に位し、眼下に、與謝の海濱あり、遙かに天橋の清景を一眸に收め、



(堂本寺相成)

眺望の絶佳なる宇内に冠たり。堂宇に、本堂・鎮守堂・地藏堂・鐘樓堂・奥ノ院慈眼堂・蓮池辨天堂・仁王門等を具し、多く天文、寶曆、文化各年度の建造に係る。奥ノ院慈眼堂は應真本尊を感得せし地と傳え、側に瀧泉懸り、摩外の仙境を成す。寺寶中絹本着色紅瑠璃阿彌陀如来像一幅は遺例極めて少く、僅かに高野山の正智院、櫻池院等に見るのみ、中央蓮座に寶冠の彌陀を插き座を支ゆるに五結を以てし且つ金泥を以て彩せし五結を全幅の周圍に配す。裏書に永享七年入寂せる安養寺住持宗惠圓宣大德所持の本尊なりし由記せる天文九年の銘あり。他に、紙本着丹後諸庄攝保總田數帳目録一册(正應元年八月注進太田文)あり、前者と共に國寶に指定せらる。

金剛心院 與謝郡日置村

●古義眞言宗。●秘密山と號し、金剛峯寺末たり。開基詳ならずも、當初、寶光壽院と稱せり。永仁二年、相州極樂寺の開山忍性、攝津四天王寺を管し、且つ本院住持を兼帯するに及び、一時極樂寺末たりしこあり。當時、當郡日谷莊松田頼盛の女子手姫、後宇多天皇の側近に侍せしが、上皇御落飾後、本寺中興二世祖慶(南都大安寺の出入り)の門に入りて禪染し、願蓮と號し、金剛心院の勅號及び傳空海作愛染明王像一幅を賜ひ、官寺に陞して寺領を附せらる。次で願蓮堂宇再興に着手し、元亨二年に至りて講堂完成し、輪奐の美を極む。同四年、兩六波羅禁制を下して寺門安泰を保證す。正中二年、灌頂堂建立せられ、嘉祥三年、講堂再建の落慶供養を修す。元徳元年、松田頼貞(願蓮尼甥)寺地山林若干を寄す。元弘三年、建武三年の兩度、足利尊氏禁制を下して寺門を守護す。當時寺運最も隆盛を極めしが、其後漸く廢頽す。天正九年、細川忠興、慶長六年京極高知、延寶五年水井尚長、元禄二年阿部正徳、正徳三年奥平昌春等當地領主となるに及び、各々寺領若干を附せしが、往時の額運亦盛ぶべくもなし。當時成相寺に屬せり。寛政三年、安政元年の兩度回祿に罹り、堂宇の大半を失ふ。明治二十年四月、金剛峯寺末に轉す。●寺寶中、木造愛染明王坐像一幅(厨子入)は鎌倉末期の作に係り、國寶に指定せらる。其他、元亨四年の兩六波羅禁制・足利尊氏筆文書等を藏す。

海寺 與謝郡日置村

●臨濟宗妙心寺派。

織城寺 中郡丹波村大字橋木

●古義眞言宗。●大覺寺末なり。寺傳に、養老元發信貴山と號す。年、天然僧善無畏三藏の草創に係り、弘仁年中、空海之を中興すとあるも、按ずるに善無畏の渡來はなく、蓋し空海の開創に係るか、記して後考を俟つ。往古は二十五坊を有し寺觀盛大を極めしが、明治初年、支院五箇院を西明院に合併し、同二十年頃、更に西明院に本寺を合併し、以て今日に至る。●本堂・多寶塔・樓門・勅使門・寶藏・庫裡等を具備す。本堂に千手觀音木像、多寶塔に安阿彌作大日如来・小野菟作地藏尊を安置す。寺寶として後白河天皇宸筆富山繪起二巻・足利尊氏筆地藏尊像・古文書等を藏す。

宗雲寺 熊野郡久美濱町

●臨濟宗南禪寺派。●常喜山と號す。本寺も、多茂の木なる地に在りて常喜庵と稱し、天台宗を奉ぜりと云ふ。後永享四年、住持慈庵、當時谷村(今、津部村)に隱棲せる千載周竹(愚中周及の弟子)に歸依し、之を請じて開山となし、臨濟宗に轉じて、寺號を宮谷山常喜院と改む。周竹は俗系近衛氏の出なれば、近衛家より山林を附し、また嗣、吉澤、黒崎の三氏を遣して堂宇を造營せしめ、一切の寺務を監せしむ。將軍足利義政また莊田百石を附與す。當時寺門隆盛を極め、安藝の佛通寺、丹波の天寧寺と共に愚中派の三本寺となり、各々獨立本山として互に輪番交住する事九世、當國有數の名僧たりしが、開年百四十餘歳にして、千載の傳燈斷絶し、寺門大いに衰ふ。仍て天正六年、丹波國守細川藤孝(隆慶)、久美松倉の城主松井康之と共に之が再興を企て、講堂を再建、南禪寺第二百六十六世支圖康三(康之叔父)を請じて中興開山となす。而して康之の父、正之(天性院殿清月宗雲大居士)の法説に因みて、宮谷常喜山宗雲寺と改號し。南禪寺に歸す。天正十年及び同十八年の兩度、山内也足季に於て支圖、細川隆資等相會して和漢聯句の撰集をなせしこあり。其後、寺運再び衰頽に赴き、山内塔頭並に末寺も次第に廢寺となり、或は分派し、現に最勝、臨江、安養の三末寺を存するのみ。後三種々經營せられしも、未だ舊觀に復せず。●境内三千六百十三坪、寺有山林五萬坪。堂宇に方丈・庫裡・禪堂・觀音堂・鐘樓・寶藏及び洗心亭・開



雲居等を具ふ。寺實には和漢雜句・撰集・涅槃像・十  
六菩薩像等あり。

●觀音會(三月十八日)。

**本願寺** 京都府熊野郡久美濱町。

●淨土宗。

●聖鳴山と號す。寺傳には圓仁(一説行基)の開創に  
して、

寛弘元

年六月

真心の

中興に

係ると

云ふ。

建久三

年、領

主伊賀

守某、

白河法

皇の誓

提奉弔

の爲め

源空を

請じて

一夏九

旬の念

佛會を

修せり。

●本堂は國寶建造物たり。桁行五間、梁間五間、單



(寶國)(堂本寺願本)

層、屋根入母屋造、栴蓐にして前面一間の向拜、四方に  
廻縁を附す。勾欄緩やかにして、軒端反轉す。軒は單  
檼を用ひ、一般に木割極めて繊細、屋蓋との権衡よく、  
清酒なる感と與ふ。異色と見るべきは正面中央間兩脇  
の極めて狭小なる事なり。近年修補に際し、前面向拜  
の繁紅襷上幕殿を原形に復す。細部の手法を見るもよ  
く鎌倉時代建築の特色を具備す。尙ほ堂内中央須彌壇  
上木彫小形の千體佛を並列す。又類例少し。

# 大阪府

**國分寺** 大阪府北區天滿橋筋西四丁目。

●古義眞言宗。

●正岡山金剛院と號し、高野末なり。神龜四年、行  
基の開創にして、聖武天皇勅額寺たり。天平八年、聖  
武天皇、左大臣橘諸兄を遣寺檢校使に任じ、寺領千二  
百石を附せらる。後ち荒廢に歸せしが、近世、快園尼  
之を中興して、律院となす。明治三十年、教界諸堂を  
修營し、聖武天皇尊像及び記念碑を建立す。

**天滿別院** 大阪府北區岩井町二丁目。

●眞宗大谷派。

●慶長十六年、本願寺教如の建立に係る。初め、明應  
五年、蓮如當地主山の地を相して一寺を開創せしが、  
顯如の時、織田信長の來攻に遭ひ、天正八年四月、勅に  
依りて紀伊豐後縣に遷す。同十三年閏八月十三日、當地  
の門末顯如を請するや、乃ち法嗣教如と共に來りて天  
滿(川崎の里)に移住す。時人呼びて天滿本坊或は川  
崎本山と稱す。同十九年閏四月、豐臣秀吉、顯如の請  
に應じ、京都堀川の地を寄せて寺基を同所に移すや、  
蓮如奉安に係る本尊を茲に留む。慶長十六年、教如、  
徳川家康の援實を受け舊址を再興し、寺觀を一新し  
て本山掛所とす。爾後、享保九年三月、安永六年十二  
月、天保八年三月の三度頻焼の災を被りしが、弘化四年  
九月、本山假本堂を下附して建營せしむ。明治二十七  
年、本山假本堂を之に移建す。

●寺域二千五百餘坪を有し、堂宇に本堂・廣間・東  
書院・西書院・鼓樓・鐘樓・茶所・講社詰所等を具備  
す。

**天滿別院(産寺)** 大阪府北區河内町一丁目。

●眞宗興正寺派。

●俗に産寺と稱す。文永九年春、觀賢の法弟源海(傳  
興正寺三世)西國遊化のため攝津に下り、當地天台宗  
の古刹に就きて別房を營みしを本寺の濫觴となす。  
文明年中、興正寺十四世蓮教此處に住して西成、川邊の  
兩郡及び河内一百餘村を化攝す。後ち天文元年八月、  
山城山科本願寺、六角定頼及び日蓮宗徒の燒却に遭ふ  
や、同地興正寺亦頗焼す。依りて同十五世蓮秀本山の  
寺基を茲に移す。天正十九年、本願寺の京都堀川移轉  
に伴ひ、興正寺亦西成の地に從る。爾來本寺は別院  
とされり。承應の初、同十九世蓮秀、月感に薫して本  
寺に抵抗して遂に本寺に入り、同三年六月、安心相違  
覺書を発表して本願寺を非難す。後ち蓮秀越後に幽閉  
されしが、明暦三年、茲に復歸す(京都興正寺項參照)。  
天保八年、興正寺、安政三年再建。本別院は當國  
御堂中最初の寺院なりと傳へ、徳川幕府卷納宗判の制  
を布くに方り、本院を以て天滿國郡人民卷納の所と定  
む。されば郡民は宗派の如何を問はず出産の事あれば  
宮詣と稱し、本院の本堂に賽するを例とし、今に之を  
行ふ。是れ産寺と稱せらる、所以なり。  
●寺域千二百餘坪を有し、本堂・對面所・書院・庫  
裡・鼓樓・鐘樓・四足門等の堂宇を具ふ。

**太融寺** 大阪府北區太融寺町。

●古義眞言宗。

●佳木山と號し、同宗金剛峯寺に屬す。初め、空海  
此地を過ぎ、觀者たる樹間に靈木あるを見て之を母木  
として地産菩薩、毘沙門天を刻し、一字を草創して寶  
樹院と號せしが、清和天皇御宇、左大臣源融難波に遊  
び、一日當山に詣り、其靈地なるを感じ、方八町を寺  
域として七堂伽藍を造營す。時に清和天皇太融寺の號  
を賜ふと云ふ。承元年間、後鳥羽上皇の臨幸あり、建  
武元年、足利尊氏倉橋莊を寄せ、同三年、吹田莊寄進  
の繪旨を賜ふ。中世以降、寺觀荒廢し、往昔の大門口  
は今本寺の西方三町の地に存し、堂宇の名稱亦近年迄  
田園の字に残れり。近世快濟、快芳の中興あり、又明  
治に至り、眞空、寂照の興隆するありて稍々舊觀に復  
したり。現に准別格本山なり。

●境内千六百餘坪を有し、本堂・大師堂・觀音堂・  
愛染堂・辨天堂・釋迦堂・庚申堂・寶藏等を具備す。  
寺實として後醍醐天皇建武三年二月朔日吹田莊寄進の  
繪旨及び歴代監筆・足利尊氏寄進狀等を藏す。境内に  
檀君の墓、紫藤等あり。附近の地は古菟野(國菟野)  
と云ひ、仁德天皇、八田皇女と共に野に鳴く鹿の音を  
聽き給ひし所、今は店舖並ぶ市街地たり。

●大師遷り(毎月二十一日)、庚申の歳日には「喜多  
庚申」として參詣者群集す。

**妙香院** 大阪府北區西寺町二丁目。

●淨土宗。

●草創年次並に沿革不詳なり。  
●奉安の木造毘沙門天立像一軀は兜鍪形の毘沙門に  
して、藤原初期の製作に係り、現に國寶たり。



清風寺

大阪市此花區上福島北二丁目。

●本門法華宗。
●開創年代不詳なり。もと助給庵と號せしを、明治三十五年、現稱に改む。現に大本山妙蓮寺末なるも、近時本門佛立講大阪支那道場として寺運漸く揚る。
●境内七百五十七坪。
●法會(毎月四回)、大法會(毎年三回)。

圓満寺

大阪市此花區五川町一丁目。

●眞宗本願寺派。
●天文元年、六角定頼、日蓮宗徒と共に本願寺證如を山科の御堂に改むるや、證如逃れて當地に来る。野田、福島の間徒等之を擁して大いに防戦す。當寺は其舊跡なり。
●境内に石碑ありて、證如の爲に戦死せし者二十一名の靈を鎮め、併せて其願末を刻せり。

淨土宗

●永祿元年の草創にして、玄譽永徹を開基とす。初め泉州堺神明町にありしが、明治三十八年、豊田氏の力に依り大阪に移り、昭和五年當所に移建す。
●本堂・書院・庫裡・觀音堂等あり。本尊木造阿彌陀如来坐像一軀は國寶なり。下品下生の彌陀にして、鎌倉初期の製作なれども、體貌圓潔、よく藤原期の遺風を存す。他に南吹阿彌陀如来像一軀を安す。
●別時念佛會(毎月九日)、開山忌(五月)、轉轉記念日(十月)。

佛光寺別院(光尊寺)

大阪市東區平野町三丁目。

●眞宗佛光寺派。
●東山光尊と號す。寛元二年四月、親鸞の弟子嘉清房天王寺莊内百濟野の地に創建す。後、南北朝時代に至り、境城屢次交戦の衝となれるを以て、正慶元年第四世正清寺基を現在の地に移す。寶永元年、第十八世文智官許を得て本山佛光寺の兼帶所となし、輪番を置く。同五年、同様に福子、正徳三年再建す。享保九年、再び同様に遭ひ、元文四年之を遺營す。現今の堂宇是れなり。
●境城五百九十二坪、堂宇に本堂・庫裡・使者間・玄關・書院・鐘樓・詰所・茶所等を具ふ。

津村別院(北御堂)

大阪市東區本町四丁目。

●眞宗本願寺派。
●舊くは大阪御坊と稱し、俗に北御堂と呼ぶ。慶長二年、本願寺十二世准如の建立に係る。初め明應五年、本願寺八世准如當地主山に一字を創設し、其體積地となす。寺地現大阪城附近に在り、今に蓮如池、製炭松等の名残りて昔を偲ばしむ。天文元年、山城國山科の本山、六角定頼及び日蓮宗徒の攻略する所となり、十世證如祖傳を奉じ此處に移る。石山本願寺即ち是れなり。本朝通稱に「光教(證如)本願寺を大阪に建つ。其構營の大なること殆ど城郭の如し」と見ゆ。其壯觀思ふべし。天正八年、十一世顯如勅を奉じて、紀州葛森に移り、次で和泉具塚に轉じ、同十三年閏八月、樓岸及び天滿に遷る。同十九年、本山を京都福知川に移すに及び、大阪の門徒一字を樓岸に建立す。是れ本寺の先驅なり。慶長二年、准如樓岸坊會を今の津村南之町に移

し、同三年、坊會の遺營成る。同十年、舊石山の規模に擬し本堂を再營す。大阪津村之坊邊境内並に修造之繪圖に依れば當時の本院は、東方御堂前町に面し、南北四十四間、西は渡邊筋に接し、南方淨覺町に面し、東西四十八間餘、北は津村南町(今の備後町筋)を以て境とし、東西五十三間にして現在境地の約三分の一なりき。明暦元年九月、當院坊會を以て朝鮮使節の旅館に充て、爾來長く朝鮮使節江戸下向往復途次の旅館となれり。元禄五年、十四世寂如再興を企て、同七年、渡邊筋及び安土町の地を求めて境城を擴張す。翌年正月、再建の工を起し、同十一年上棟、同十二年、寂如を迎へて遷座式を舉ぐ。同十四年鐘樓成る。享保七年、寂如又御影堂(二尊)建立す。然るに同九年三月、諸堂類燒の厄に罹りしかば、一時、本尊並に什寶を木津順泉寺に移す。同十九年、更に寺地を擴張して五千四百八十坪となし、諸堂を建營す。元文二年六月、偶々明の



(景全院別村津)

難波別院

大阪市東區北久太郎町四丁目。

●眞宗大谷派。
●本願寺津村別院を俗に北御堂と稱するに對して本院を南御堂と呼ぶ。文祿四年、本願寺教如の創建に



(景全院別波難)

に遺ひしを以て堂會を現地に移す。翌四年二月起工、同八年三月、落慶供養を修す。時人呼んで難波御堂と稱す。是れより先き同七年、教如、徳川家康の意を承け大谷派本願寺を京都烏丸に興すや、即ち本寺を以て別

圓珠庵

大阪市東區御堂町。

●古義眞言宗。
●雲光山と號す。國學の中興契沖の開創に係る。契沖は寛永十七年、攝津國尼崎に生る。俗姓下川氏、字は空心、十一歳にして攝津妙法寺に入り、手定につきて受學し、十三歳齋戒して高野山に登り、東室院左學頭快賢に謁し、密教の奧義を究む。後、生玉曼茶羅院、和泉久井里、攝津池田川畔等に轉住し、此間雲水に託して諸國を遊化し、精進に努むる傍ら古今の佛典、國書を涉獵し、經史を明らかに、歌學に達す。延寶五年、河



内延命寺覺摩に就き灌頂を受く。開八年、妙法寺平定示寂するや、遺囑に依りて其席を領し、寺側に一庵を構へ、母堂を奉じて孝養す。母堂歿後、延命寺を退く。時に泉州泉郡萬町村伏屋長左衛門重賢、契沖の爲め邸内の養壽庵を東高津の地に移す。契沖之に圓珠庵の名を附し、俗客を厚謝して清修自適し、元祿十四年一月二十四日示寂す。乃ち庵の屋隔にして史蹟に指定せらる。庵は現に同宗御室末に屬す。

●**境城** 百九十六坪、本堂、庫裡、書院・大師堂・藥醫門等を具備す。妙法寺寶山比丘作と傳ふる不動明王を本尊とす。又堂内奉安の觀世音菩薩は靈驗顯著特に願の疾患を除き給ふを以て衆庶の信仰厚し。寺實に契沖の遺墨多數を藏す。境内に遺愛の梅及び古楓あり、古楓樹下に鐘八轉あり、傳に、眞田幸村戰勝を祈願し、鐘を樹間に打込みて驚駭あり、爾後、願者之を慣例とし現に樹間鐘を以て充つ。庵の後庭に契沖の墓あり。



(慶 珠 園)

の墓、衣川長秋、石津良澄等の墳墓あり。

**實相寺**

大阪市東區上本町四丁目。

**淨土宗**

●草創年次並に沿革不詳。  
●所藏の絹本彩色淨土變茶羅圖一幅は國寶なり。當麻呂茶羅の忠實なる模寫にして、鎌倉時代の作と推考す。

**興徳寺**

大阪市東區小橋寺町。

**古義眞言宗**

●隆法山と號す。法時藥師院と稱し、行基の開創にして、畿内四十九院の一たりと云ふ。天文年間、兵變に罹りて堂宇烏有に歸せしが、天正年間、結業之を再興し、以て本寺中興の第一世となる。二世覺意の代、山寺號を現稱に改む。現に高野山教會大阪支部として都下の各講社、信徒を統ぶ。

●堂内に行基作藥師如來木像を本尊とし、別に銀天大聖歡喜天像・佛圓珍作三十三體觀世音像・空海作大黒天立像を安置す。

**廣教寺**

大阪市西區藤原北ノ町。

**眞宗本願寺派**

●風松山と號し、俗に藤原堀御堂の稱あり、同派の別格寺たり。初め天台宗を奉じて願慶寺と號し、攝津國東成郡玉造石山城の南に存す。後寺觀克廢せしを、慶長十一年、本願寺覺知の奇善宗(善權寺善勝弟)入寺し、現宗に改めて善宗寺と稱す。寛永年間、徳川家光

**和光寺**

大阪市西區北堀江下通四丁目

**淨土宗**

●蓮池山智善院と號し、阿彌陀池の稱を以て世に著る。現今當宗の別格尼寺たり。傳へて此地欽明天皇の朝、物部尾與、中臣鎌子等論奏して小墾田向原寺の佛像を流棄せし古跡なりと云ふ。之に因りて、元祿十一年、信濃善光寺大本願智善院により本寺を開創す。此時、堀江新田阿彌陀池を開墾し、境内地一千八百坪を除地せられ、善光寺大本願の末寺に加へらる。

●本堂に寶鏡寺宮理實德聖女の筆と傳ふる扇額を掲ぐ。境内の北に阿彌陀池あり、中央に放光閣ありて内に阿彌陀三尊を安置す。用明紀に云ふ佛像を投棄せし瀬波堀江の古跡なりと稱す。

**久島院**

大阪市西區本田町二丁目。

**眞宗**

●寛文十年、三島郡富田村慶福寺福漢偶々此地に来るや、暴風強雨過かに起り、海濱地を浸し、遊浪家を倒す。福漢安禪して一偶を遺し、水中に没す。開十一年、後水尾上皇宣して一寺を修營せしめ、且つ水燈會を修せらる。法弟遺通其開基たり。現に當宗別格寺なり。

**久本寺** 大阪市天王寺區谷町八丁目。

●本門法華宗。  
●當宗小本寺にして尼寺なり。永祿五年、平野福彌屋新兵衛本寺を創建し、久本院日理を請じて開山とし以て久本寺と號す。明治四十年迄、大阪五箇寺の一として本山出格の權威を有せる風指の巨刹たり。現に本興寺に屬す。

●本堂・祖師堂・大書院等を具備す。大書院は桃山時代の遺構なりと云ひ、其張壁、襖、杉戸の如き皆野渡の古蹟なりと傳ふ。什寶亦見るべきもの多し。

**願生寺** 大阪市天王寺區谷町八丁目。

●淨土宗。  
●秀譽の開基に係り、超譽之を中興す。超譽曾て平野町心光庵にあり。庭中に跨池ありて群蛙喧呼し、讀經之が爲めに亂る。超譽即ち法を修し蛙聲を封ず。世に超譽を蛙封じの上人、池を蛙封じの池、蛙鳴かす池と呼ぶ。其碑移して當寺境内に在り。又心光庵は本寺の靈帶たり。

**法妙寺**(近松寺) 大阪市天王寺區谷町八丁目。  
●日蓮宗。

●本覺山と號し、俗に近松寺の名を以て著聞す。永祿五年、玉樹院日勝大阪東區の杜石山の地に一庵を創し本石山と號す。是れ本寺の靈廟にして、慶長三年、日勝入寂の後日惠第二世となり、諸堂の建營に努めしが、寛永七年、玉泉院日社の時、頓焼の厄に遭ふ。元祿十年十月、第七世支成院日教現地に移りて諸堂の重興を圖り、享保六年七月、第八世智定院日色の代に至りて再建の工を鼓ふ。依りて日教を推して中興の開基とす。同九年十一月二十一日、近松門左衛門殿するや本寺に歸る。安永年間、山號を現稱に改め、以て現在に及ぶ。因みに近松門左衛門墓地に關して兵庫縣川邊郡小田村廣濟寺(其項參照)にも同説を傳へて其墳墓、過去帳、位牌等を存す。一に廣濟寺を以て其墳墓の地となし、本寺は其遙拜所なるべしとの説あるも、果して如何にや、暫く記して後考を俟つ。

●奉安の日蓮祖師像は妙願寺第二祖妙實の自作と稱し、俗に兩請ひの祖師として著る。境内に近松門左衛門夫妻の墓碑、其息と傳ふる杉森由泉、律師師小野紹連並に其孫近松徳叟、大石義房等の墳墓あり。

**妙法寺** 大阪市天王寺區谷町八丁目。

●本門法華宗。  
●元和二年の開創に係る。もと光嚴寺と號し、淨土宗を奉ぜしが、正保二年、川崎宗齊諸堂を重興し、現宗に改め、兩山二十二世日嚴を開山に請す。當時、御蔭莊嚴にして隣寺久本寺と共に稀有の名刹たり。明治四十年迄、大阪五箇寺の一として本山出格の權威を有せしが、現に本興寺末尼院なり。

**本覺寺** 大阪市天王寺區西高津中寺町。

●本門法華宗。  
●眞如山と號す。天正二年、日守の開創に係る。日守、武田彈正入道義次の三男にして、其妹は豐臣秀次に嫁す。秀次自刺の後追福のため、當地唐物町に本寺を創建す。秀吉之に眞如山の號を附す。後兵變に罹り、現地に移る。時に隱士植林庵、日守に歸依し、大いに之を稱補し、寺觀を一刷新す。當時一に石垣寺と稱せり。明治元年十一月十九日、回縁に罹りしが、翌年再建す。近年大書院を建立し、以て現在に及ぶ。

**本經寺** 大阪市天王寺區西高津中寺町。

●本門法華宗。  
●慶長十四年、日精の開創に係る。久本寺等と相並び、寺觀安壯なりしが、明治三十一年一月、回縁に罹り、本堂、書院、庫裡等を焼燬し、鐘樓、番神堂、表門等續に其災を免る。其後、日精の代、本堂、庫裡の再建成る。明治末年迄、大阪五箇寺の一として本山出格の權威を有せし、現に本興寺に屬す。

●本堂は重層にして三大秘法の額を掲ぐ。他に鐘樓、庫裡等を具備す。

**本行寺** 大阪市天王寺區西高津中寺町。

●本門法華宗。  
●天正元年、日尊の開創に係る。寶曆年間、回縁に罹り、山燒燬せしが、爾後、歴代住持之が再興に努め、寺觀漸次復舊す。現に本興寺末尼院なるも、明治四十年迄、大阪五箇寺の一として本山出格の權威を有せり。



妙樂寺 大阪市天王寺區西高津中寺町。

●本門法華宗。
●慶長十一年、久本寺二世妙樂院日結の創製なり。
第七世日要の時、同様に頼り、諸堂烏有に歸せし。
後、日秀本堂を重建す。其工竣へんとして、又復南
區の大火に遭遇せしが、危く頼焼の厄を免れたり。爾
來世に火除けの祖師と稱す。明治四十年迄、兩山來大
阪五箇寺の一として本山出格の權義を有せり。大正元
年、東津及び寺境を整修す。現に本興寺末なり。

淨土宗。
●成就山と號す。貞享四年二月、祐天の開創なり。

●曹洞宗。
●最乘山と號す。天正十六年、北條氏房の女武藏國
比企郡岩槻村に一寺を建立し芳林寺と稱せしが、兵亂
を避けて此地に來り、寺基を移し、同郡市川村萬壽山
鳳林寺 大阪市天王寺區六萬體町。

源正寺 大阪市天王寺區土本町六丁目。

●淨土宗。
●成就山と號す。貞享四年二月、祐天の開創なり。
古來無縁、無檀家にして寺觀齊はず、明治維新の際、
寺運の廢頹其極に達し、明治十五年、遂に寺觀廢止の
運命に達せし。龜山貞立之が挽回に努め、同十九
年、樓門成り、二十七八年、三十七八年兩度の戦役に戦
死者を弔し、忠魂堂を建て北白川能久親王の尊體を奉
安す。大正三年、日獨戦役殉死者の爲め地蔵尊千六百
體を建立し、爾後春秋二季追弔大法會最修を例とす。
●本堂・開山堂・樓門・大方丈・庫裡等を具ふ。

勝鬘院 (愛染堂) 大阪市天王寺區夕陽丘町。

●天台宗。
●四天王寺の別院にして一に愛染堂と稱す。聖德太
子四天王寺を攝津玉造の岸上より難波荒陵の東たる現
地に移し給ひし時、施樂院、樂樂院、悲田院、敬田院
の四院を構へ、經宮、孤獨、貧窮者救濟の機關とせら
る。永福寺六世才庵を請じて開山とす。後、寺門に鳳凰舞
ひ降るの奇蹟ありしより、現稱に改むと云ふ。



(寶國) (塔寶多長登勝)

れしが、本院は其四院の一なる施樂院の遺跡なりと云
ふ。中古、勝鬘院と改稱せしは、聖德太子尊體經御講
讀に因み、本堂に勝鬘夫人を安置せしに依ると傳ふ。
古來屢次變災に罹りしが、天正四年、織田信長石山本
願寺と對陣の際、其兵變に罹燒す。文祿三年、豐臣秀
吉修造の命を下し、慶長五年、再建の工を遂ぐ。是れ
現存の堂塔なり。
●本堂は桁行八間、梁間四間五尺、三ツ斗瓦葺、彩
色を施せり。愛染明王を本尊とす。多寶塔は屋根本瓦
葺、三間三尺五寸四面、一層塔婆にして、文祿三年豐臣
秀吉の再建に係り、様式よく當代の特徴を發揮し、内

四天王寺 大阪市天王寺區元町。

●天台宗。
●荒陵山敬田院と號し、本尊に因みて四天王寺と云
ひ、地名に依りて古來荒陵寺、難波寺、御津寺等と稱
せらる。所謂聖德太子七所の隨一、本邦最古の寺刻た
り。聖德太子傳曆等に依れば、用明天皇二年、太子の
發願に因り、難波玉造の岸上に建設されしが、次で推
古天皇元年、改めて荒陵東國の地に移されしと云ふ。初め
用明天皇即位二年四月、天皇御不豫あり、依りて天皇
群臣に佛法に歸依するの可否を謀り給ふ。大連物部守
屋と大臣蘇我馬子とは互に説を異にし、遂に兩者間に
隙を生ず。同五月、守屋權勢を藉りて厩戸皇子(聖德
太子)を排斥し、穴穗部皇子を立て、天皇となし、佛
法を廢せんとして、同七月、遂に厩戸皇子、大臣馬
子等軍士を率ゐて物部氏を河内湊川の宅に攻む。時に
皇子軍後にありて白藤木を以て四天王の像を刻み、戰
勝の曉、四天王の爲に寺塔を創建せしむ事を誓願す。か
くて物部守屋誅せられ、亂茲に平定するや、厩戸皇子
即ち誓願に依りて直に攝津玉造の岸上に一寺を草創せ
られ、四天王像を奉安し給へり。是れ即ち本寺の遺跡
にして、次で推古天皇即位元年、地を南方荒陵の東丘
に下して諸堂宇を建立し給ふ。時に近江、信濃、相模、
上總、常陸の諸國にて各五十煙の封戸を置き、施樂、

に歸し、寺額亦横領せられし。同六年、信長前非を
改めて地子六十二石を免じ、再興を許らしむ。同十一
年、豐臣秀吉錢五千貫文、米五千石を獻じ、次で文祿
三年、生母大政所の三周忌を追慕すべく當寺の再興
を企畫し(時の豐公自筆の天王寺建築見積書一通現存
す)、秋野亨順を督して諸國に勸進せしめ、遂に之を修
造す。其功に依り亨順を別當執行政所に補す。慶長六
年、豐臣秀頼寺領千石を寄せ、降りて徳川秀忠亦千七百
十七石の朱印狀を與ふ。享和元年十二月、雷火に罹り

鳳林寺 大阪市天王寺區六萬體町。

●曹洞宗。
●最乘山と號す。天正十六年、北條氏房の女武藏國
比企郡岩槻村に一寺を建立し芳林寺と稱せしが、兵亂
を避けて此地に來り、寺基を移し、同郡市川村萬壽山
鳳林寺 大阪市天王寺區六萬體町。



(寺王天四)

て表上し、金堂講堂、五重塔以下四十餘宇を建設す。
文化九年、大阪白銀町淡路屋太郎左衛門自ら小列二千
兩を獻じて諸國を勸進し、堂塔漸く舊に復す。現今の諸
堂即ち是れなり。明治六年八月、境内地を以て公園と
なせしが、同三十四年、之を廢して再び境内地に復す。
翌三十五年、聖德太子頌德會を起し、同三十六年、大梵
鐘を鑄造、萬僧供養を修す。本寺はもと八宗兼學の道
場たりしが、淳和天皇御宇、天台宗に歸し、徳川氏の
世、日光山輪王寺の支配を受けたり。其後幾許もなく
延暦寺支配下に屬し、以て現在に及ぶ。
●寺域二萬九千三百六十餘坪。現今の諸堂概ね文化
九年の建造に係り、其配置法に推古式佛寺建築の一
端を遺し、百濟様の流を汲める所謂四天王寺式の特徴
を存す。即ち特に中門と講堂との中心を南北に貫く直
線上に塔婆・金堂を置き、講堂後方に鐘樓・經藏相連
り、之を包むに東西北の三面僧坊を以てせり。現在所
在する堂宇は金堂・五重塔・講堂・廻廊・仁王門・聖
靈院・三昧堂・經書堂・無常院・大師堂・引聲堂・短
聲堂・東西南北の大門・石鳥居等にして、本寺特色の
一なる石鳥居は西大門の西に在りて、永仁二年、忍性
之を石造に改む。鳥居を入りて右に納骨堂・引聲堂・
左に一音院・短聲堂ありて、引聲堂は一に法華堂と云
ひ、釋迦像を安置し、短聲堂は常行堂亦は念佛堂とも
稱し、阿彌陀如來の像を安置す。久安年間、鳥羽法皇
の建立に係り、圓光大師二十五靈廟の隨一たり。後二
條天皇の皇子守邦親王の女官出家して之に住せしより
元和年間に至る迄は尼衆の住院たり。天皇、攝家等の
參詣ある時此堂を居館に充つるを例とす。門内の北に
輪藏、南に五智光院、萬燈院あり、五智光院は治承元
年、後白河法皇の御建立に係り、毎年此堂にて結緣灌
頂を修すべき料足として土佐國高岡庄を寄せらる。明



治三十五年、之を本坊境内に移せり。萬燈院は嘉祿四年、攝政藤原道長萬燈會を修せし所として著る。金堂は別當の中央にありて丈高一丈八尺の本尊如意輪觀音以下四天王像、彌勒菩薩、五重塔、舍利塔等を安置す。五重塔は金堂の南にあり、方四間、高さ二十四間中にして釋迦如來畫像、四天王木像を安ず。金堂に北開して阿彌陀三尊を本尊とする講堂あり。金堂、塔の周圍には饗饗百五十間に亘る廻廊ありて南、西の二方に中門を開く。南門は金剛神像を置く故に仁王門と通稱す。其南に南大門あり。是れ即ち當寺の正門にして其東に聖德院あり。太子殿是れなり。其北に當りて三昧堂あり、太子二歳の像、文殊菩薩四天王像を安置す。堂前に經書堂・御供所・龜井水あり。參詣の衆井水を經木に手向けて冥福を修す。俗信古來盛んに行はれ、春秋彼岸は勿論毎月二十一日には寺内參詣の衆隨を接す。龜井の東に東大門あり、三間一戸構門、桁行六間半、礎間四間二尺、屋根切妻造、本瓦葺にして、當寺中最古の建造物なり。桃山時代の比較的大建築にて手法豪健、寧ろ當時發達せる城門と見做さるべし。現に國寶建造物なり。北に相輪樓・寶庫(俗稱成堂)あり。西北に本坊・中の院・東光院・吉祥院・靜專院あり。本坊は四天王寺住職の止住する所にして、兼て當寺事務を總轄す。餘の諸院とは往古の西僧坊、東僧坊及び中世十二箇院の今に遺存せるものなり。東光院の前に食堂あり。文殊菩薩の像を安置す。其前に六時堂あり、晝夜六時に勤行を修し、樂師三尊、千手觀音、四天王、不動明王等を安置す。聖德會は此堂に於て修せらる。前に蓮池あり、之に縱七間五尺、横六間の石橋を架す。石の舞台と稱し、聖德會以下の當寺三大會の際、此橋上にて舞樂を奏す。池側西南に鐘樓あり。無常院と稱し、鐘は真鍮の音ありてて人口に

膾炙せしも、現今のものは後年の改竄に係る。其西に上の池あり。其他大黒堂・大師堂(元三大師)・樂師堂・推寺・北大門・中の門等の諸建造物存在し、諸堂の配置大略創建當初の形式を傳へたり。尙ほ南門外に庚申堂遺存す。本朝最初の庚申之傳へ、日本三庚申の隨一として衆信を集む。數多き什寶中、現に國寶に指定せられしもの次の如し。金剛觀世音菩薩半跏像一軀は寺傳に試の觀音と稱し、御物四十八體佛と同類にして天平初期の作なり。千手觀音及び二天龍佛一箇は弘法大師の作と傳へられ、源滿仲の護持たりしものにして方形の厨子中に十一面千手觀音を安じ、兩扉の内面に二天を刻す。觀音には唐朝風の姿態を存し、内部に沈彫の蓮井文様を施せるは其基調を外邦藝術に置けるものと云ふべし。製作甚だ精巧にして藤原末期の一優作たり。木彫納骨筒、陵玉の舞臺の二面は室町時代の作なり。紙本着色結葉裝幀面法華經百二枚は聖德太子御筆なりと傳へたり。原形は妙法蓮華經全八卷八帖と無量義經一帖、觀音經一帖合計十帖變形紙形式なりしが、現存せるは法華經序品殘六卷、卷六、卷七各一帖十一葉、無量義經一帖十一葉、觀音經八葉。其他殘片を併せて全數五十一葉なり。下繪は大和繪の手法になり經文に何等の關係を有せず、素麗な藤原期の貴族の生活並びに舟井一般の風俗を取り、頗る裝飾的趣致に富み、優美極まりぬ。彼の源氏物語繪卷、鳥島平家納經と共に藤原時代此種作品の代表作なり。懸守七箇は聖德太子御所用のものとも傳ふるも室町時代の作にして、技頗る巧緻なり。銀鍍金光背一箇(舟後光)は高八尺未滿、總て透影唐草より成り、優雅なる氣品に滿つ。藤原時代銀小佛像に附屬せしものと推知せらる。銅鏡一面は花鳥の文様を有し、意匠、技巧共に鎌倉時代古鏡の特色を具ふ。銅鏡一口は藤原朝人

大村綱骨造たりしものといふ。現に皇親京都博物館に出陳せらる。丙子板林劍一口は聖德太子の御劍なりと傳ふ。七星劍一口も亦太子の御劍と稱せられ、推古時代の製作にして本邦に於ける象徴の古き遺例として注目せらる。尙ほ當寺の鐘は、世界一の巨鐘として夙に著聞す。明治三十六年の鑄造に係り、明治の代表的遺作として看過すべからず。其他寶物館に左甚五郎作と傳ふる虎の木彫以下、江戸時代の諸佛像を存せり。

●聖德會(二月二十二日)は涅槃會、念佛會と共に三大會の一として最も著聞す。即ち聖德太子の忌日に行ふ法會にして本寺六時堂に於て修せらる。當日辰の刻金堂の衆會ありて金堂より舍利、聖德院より太子像を茲に移し三綱衆徒は法服を著して列座し、童子は花をかざし、俗人は堂前の石の舞台上にて舞樂を奏す。僧徒は總禮、回向、法用、讚、願文、誦誦文、祭文等の法事あり、酉の刻、法議を終ふ。巳の刻、太子眞筆の楊枝の御影を開帳して御手水式と稱するものを行ふ。

●淨土宗 ●坂松山高岳院と號し、圓光大師二十五靈場の一なり。もと天王寺の別所にして、文治元年、四天王寺別當慈願、法然の爲めに四間四面の庵室を結び、新別所と稱す。後白河法皇天王寺臨幸の朝、法然と共に日想觀を修し給ひ、其唱和夫木葉に見ゆ。天正年間、下總佐倉清見寺住僧存岸來りて本寺を中興し、壽山山觀稱院一心寺と改稱す。慶長十九年、大阪冬の役に際し、徳川家康此處に營所を建つ。亂後大阪城の殿材を以て堂宇を重修し、坂松山高岳院と改め自筆の額を寄す。現今の堂宇是れなり。

●心寺 大阪市天王寺區邊阪上之町。

●淨土宗 ●坂松山高岳院と號し、圓光大師二十五靈場の一なり。もと天王寺の別所にして、文治元年、四天王寺別當慈願、法然の爲めに四間四面の庵室を結び、新別所と稱す。後白河法皇天王寺臨幸の朝、法然と共に日想觀を修し給ひ、其唱和夫木葉に見ゆ。天正年間、下總佐倉清見寺住僧存岸來りて本寺を中興し、壽山山觀稱院一心寺と改稱す。慶長十九年、大阪冬の役に際し、徳川家康此處に營所を建つ。亂後大阪城の殿材を以て堂宇を重修し、坂松山高岳院と改め自筆の額を寄す。現今の堂宇是れなり。

●本堂に圓觀陀佛及び普光寺如來に稱せる一光三尊の金佛を安んじ、菩薩堂は一に納骨堂と稱し、彌陀、釋迦二尊及び二十五菩薩を置く。他に三尊佛堂・彌勒堂・開山堂・書院等あり。前門は大坂五道口黒門を移したるものと云ひ、什寶に家康筆坂松山の額、狩野常信筆山水樓閣・同永徳筆杉戸畫等あり。家康好み八咫茶室、駒松、本多忠朝主従十名並に十萬堂來山の墓等あり。

●正法寺 大阪市天王寺區上之宮町。

●古義眞言宗 ●由緒沿革不詳なるも、光顯山と號し、金剛峯寺末たり。

●所藏の銅鐘一口は宋の天祐三年鑄造の銘あり。高麗の顯宗十年に相當する朝鮮鐘にして、天蓋、佛像、兩脇侍、飛天、瑞花等技頗る優秀なり。現に國寶に指定せらる。

●國分寺 大阪市天王寺區國分町。

●眞徳宗 ●天平年間勸建の國分寺の舊址にして、菩提場部那の開創と云ふ。中世荒廢せしを、延寶八年、眞徳山僧性源(南源)之を再興し、現宗に改む。元禄元年、東大寺公慶大佛重修の朝、性源請ぜられて法會首領に充てらる。同三年、光嚴、報恩の爲め、寺地に聖武天皇の御塔を建立す。

●本堂に聖武天皇御念持佛黄金觀世音菩薩を奉安す

●法藏寺(南坊) 大阪市南區大和町。

●古義眞言宗 ●古義眞言宗。

●志宜山法家寺と號し、南坊と通稱す。もと生國魂神社別當職たり。初め聖德太子生玉明神の奇蹟に感じ、志宜野に社殿を建立し本寺を創して法家寺と號し、勸願所に列せられしが、中世衰頹せしを以て應永年間松永政廣稱光院の勳を奉じ一子正意に命じて之を再興せしむ。後第三世正教の時、本願寺蓮如に歸依して眞宗に改め別當職は之を祐淳に附し、爾來眞言、眞宗の兩寺に分離す。明應五年、別當寺を南の坊と改稱し、眞宗寺は藤祐光寺と改めしが、正教寺地を擧げて蓮如に寄す。元龜年間、總田信長石山本願寺を興築するや、本寺亦其兵燹に罹りて灰燼に歸す。天正十三年豊臣秀吉本願寺址に就きて大阪城を築きし時、新に寺地を馬場崎に得て、堂宇を重修す。其後、第六世深祐の代徳川家康、生國魂神社に社領三百石を附し、本寺をして管せしむ。古來寺中九坊を有し、寺運盛なりしが、明治維新一旦廢寺となり、同十二年再興せられ以て現在に至る。現に同宗高野末にして准別格寺たり。

●本尊木造聖觀音立像一軀は國寶に指定せらる。

●大福院(三津寺) 大阪市南區三津寺町。

●古義眞言宗 ●俗に三津寺の名を以て著聞す。攝津徵書所收三津八幡宮記によれば、神龜年間、僧行基此地に八幡菩薩の本地堂を營み、彌陀を安置せしに創まると云ふ。寛永年間再興せられ、以て現在に至る、現に本宗御室末に屬し准別格寺たり。

●行基作十一面觀音を本尊とす。堂宇には本堂・庫裡・鐘堂・地藏堂等を具備す。

●大乗坊(毘沙門堂) 大阪市南區日本橋筋四丁目。

●古義眞言宗 ●大覺寺に屬する准別格本山にして、俗に毘沙門堂と稱す。もと聖德太子の開基と傳ふる葛高山寶藏寺の一院たり。天正年間、兵火に罹り堂宇烏有に歸せしが元禄年間、本坊を建立す。寶曆年間、諸堂再建せらる。

●境内六百五十六坪を有し、本堂・寶藏院・陀根尼天堂・護摩堂・大師堂・書院等を具備し本尊木造毘沙門天立像一軀は國寶に指定せられ、信貴山、鞍馬、北山本山寺の三尊と合せて、本邦四毘沙門天と稱せらる。彫法雄健にして姿勢飄動す。鎌倉時代の作なり。

●瑞龍寺(鐵眼寺) 大阪市浪速區元町二丁目。

●眞徳宗 ●慈雲山と號し、俗に鐵眼寺の名を以て稱せらる。もと樂師寺と號せしが、寛文十年、鐵眼道光之を中興して現宗に歸し、延寶四年、現稱に改む。鐵眼俗性佐伯氏、寛永七年、肥後に生る。明暦元年、長崎東明寺にて隱元に謁せしが、次で其高足木庵の弟子となる。寛文二年、大阪月江院にて大藏經開版の志を陳べ、爾後拈提經十四年、遂に天和元年全六千七百七十一卷を完成す。所謂眞徳版是れにして、現に其版木を宇治眞徳山内寶藏院に藏す。翌二年大阪地方に大饑饉あり即ち大いに之が救済に努む。時人尊びて救世の居士と稱す。同三年、五十三歳にて本寺に寂す。蓋し本寺を鐵眼寺と稱する、鐵眼の高徳に依る所なり。現に本宗別格寺なり。



●寺域二千三百餘坪、堂房街區中に雄然たり。本堂に坐佛及び十二神將、天王堂に彌勒佛、四天王、草駄天の諸像を安置す。他に  
 禪室・阿彌陀堂・觀音堂・彌守堂等をも具備す。寺實に隆元禪師筆光明禪師類を始め、木庵、鐵眼、寶洲、高泉等の筆蹟多數を藏す。



(堂本寺龍瑞)

願泉寺 大阪市浪速區鳴町三丁目。

●眞宗本願寺派。  
 ●日下山と號す。推古天皇十一年、僧水鏡の草創に係り、もと無量壽院と號し天台宗たり。小野妹子八男多住慶法華の海濱に住す。推古天皇元年、聖德太子四天王寺を荒陵に建立し給ふに當り、巨木多く多住慶の宅前に到着し、之を運搬するに苦しむ。一老肥海邊より出て、荒陵の間を往返す。多住慶夢に曉の音を得て今の院川を鑿り、容易に材木を運搬することを得たりと傳ふ。後ら割壁して永證と號し一字を削む。享德三年、

年、第二十七代聖德太子に傳す。永正四年聖德太子再興し第三十一世定龍に至りて日下山願泉寺と號す。定龍は千利休の高足にして伊達政宗の師たり。豊臣氏の亡後政宗陸奥に歸るに及び其邸宅を興へて今に傳ふといふ。  
 ●客室・茶室・石燈籠・水盤等は伊達政宗邸宅當時のもの云ふ。

瑞光寺 大阪市東淀川區大道町。

●臨濟宗妙心寺派。  
 ●天然山と號し、聖德太子の創建と傳ふ。建武年間同縁の美に罹り、爾來寺運衰頹し、寺門の荒蕪著しかりしが、延寶年間、中津之を再興す。時に松林中に靈光あり、依りて以て寺號となすと云ふ。  
 ●寺境松樹蒼鬱、風色亦佳なり。本尊は聖德太子自作と傳ふる聖觀音にして除厄安産の靈驗を稱せらる。有名なる雪藏橋は境内にあり。寶曆年間紀州熊野より寄附せしものにして現在高欄のみ觀骨なるも、往時は悉く觀骨に成りしと云ふ。所藏の寺寶には空海作毘沙門天像・圓仁作不動明王像・後小松、靈元、光格各天皇寶輪・馬遠、牧溪、雪舟等の畫蹟等あり。

崇禪寺 大阪市東淀川區山田町。

●曹洞宗。  
 ●凌雲山と號す。天平年間、行基菩薩の創建にして聖德太子御作と傳ふる觀音像を安置し、法相宗に屬せしが、嘉吉元年六月、播磨國守赤松滿祐其子教康と共に事を以て將軍足利義教を弑し其西走の途、首級を當山に懸る。依りて同二年、管領細川持賢義教菩提の爲に伽藍を再興し、享隆を以て開山となし、曹洞宗に改



(景全寺禪崇)

む。爾來、足利幕府の崇敬厚く、寺額三萬餘石を賜はり、境内八町四面の廣さに亘りしも、天明十五年以來兵燹に罹り、殿宇遂に烏有に墜せり。慶安年間、當寺第十世大通全勝之を歎き、諸國を勧進し再び堂宇を營

んとして、却つて返討に遭ひて死せりと云ふ。

光用寺(彌陀寺) 大阪市東淀川區西町。

●眞宗佛光寺派。  
 ●瀧國山と號し、俗に彌陀寺と稱す。天平十九年、僧行基の草創に係り、もと瀧國菩提院と名づけ法相宗なりしが、正中三年、三十八世務空專の時、佛光寺七世了源に歸依して眞宗に改め光用寺と號す。文明二年四十四世幸圓の時本堂を改築す。

●境域六百坪、本堂・書院・鐘樓・庫裡・表門等を具備す。了源上人自畫像一幅・血脈相承系圖一軸・佛涅槃像一幅・行基所用と傳ふる瓦鉢等を藏す。境内の杜鵑花は赤松滿祐の親植する所と傳へ、其開花期には日々觀客接踵し、彌陀寺と稱して著名なりしが、明治三十六年の水害にて多く枯木となり、今漸く小なる數株を存す。

彌滿寺(觀音) 大阪市東淀川區長柄東通一丁目。

●天台宗眞盛派。  
 ●雲松山と號し、一に百體觀音と稱せらる。創立は古く奈良朝末期に屬し、室町時代迄は河内に在りて派祖眞盛化縁の中心地たりしと云ふ。其後、攝津南方に



(景全寺彌彌)

を安んず。觀音堂は世に百體觀音と稱し、忍藏中興の朝、寶曆五年西國三十三所の觀音、秩父、坂東の各札所の觀音像を刻み百體觀音として其堂を建立せしに始まる。他に普光寺開・納骨堂・護摩堂・客殿・庫裡・

大日寺(萩寺) 大阪市東淀川區中津道。

●古義眞言宗。  
 ●中臺山通明院と號し、仁和寺末に屬す。醍醐天皇の御願寺にして空海の開基に係る。延喜式に「攝津國正稅公廟、大日寺料五千束」と見え、往時は當國の一名譽たりき。後ら兵亂に遭ひて廢頹せしが、後深草天皇再興して勅額所と定め給ふ。中世に至り再び兵燹に罹りて衰頹せり、雖も漸次復舊し、以て現在に至る。  
 ●境内萩頗る多く、俗に當寺を三番の萩寺と稱す。本堂・聖天堂・護摩堂・地藏堂等整備す。龍蟠、龍闕、後深草三天皇の宮影を本安す。寺實に雪舟筆跡・近衛前久の三十六歌仙・菅原道真和歌等を藏す。

大願寺 大阪市西淀川區中島町。

●本門法華宗。



●五雲山と號す。寺傳に依れば推古天皇の朝、長柄川の長橋を築するに際し、人柱を募りし所、垂水の里の岩氏之に應ず。後朝延之を憐みて勅して當寺を創し、以て岩氏の靈を祀せしむ。本尊は岩氏の持佛開洋檀金の釋迦佛なりと云ふ。寛仁三年、勅して本寺を再興せしめ、佛師定朝に命じ、古橋の杭を以て地蔵尊を彫刻せしむ。刻成りて其開眼會に際し、勅使藤原公任參向拈香して誦歌せし所、地蔵尊突如大笑す。爾來浪花の笑ひ地蔵と稱し、民間の信仰厚し。爾後數百年禪寺となりて橋本寺と呼ばれしが、寶永年間、久木寺檀越天王寺屋孫右衛門頼主となりて之を再建す。時に改宗して本宗に歸し、兩山三十九世日度を迎へて開山とす。

**舍利寺** 大阪府東成區舍利寺町。

●黃髮宗。  
●南岳山と云ひ寺傳に據れば往昔此地に長者あり。其子生來啞者なりしが、聖德太子に謁せし際口より舍利を吐出し、これよりよく言ふを得、長者奇縁に感じ家を寺となす。寛文年間、木庵堂宇を重修して再興す。  
●本堂に本尊釋迦如來像、太子堂には聖德太子像を奉祀せり。釋元、木庵、悅山諸禪師の書畫幅、聖德太子自畫像、土佐昌信涅槃像・巨勢金剛赤童子像等を藏す。

**大念佛寺** 大阪府住吉區平野上町。

●融通念佛宗。  
●大源山念佛院と號し、本宗本山なり。宗祖其

忍年二十三歳にして叡山を辭し、大原來迎院に入りて龍居する事二十餘年、其間只管、阿彌陀經を誦して念佛修行に心を凝せしが、永久五年五月、年四十六歳にして遂に融通念佛を感得し、初めて融通念佛宗を唱ふる。後攝津四天王寺に駐りて念佛せしが、時に聖德太子の夢告に感じ上奏して今の地に一道場を建立し、諸佛護念院融通念佛寺と號す。之れ即ち本寺の濫觴なり。保元元年七月、第三世明廣の代鳥羽天皇の靈殿を建立し、宮影堂に御尊牌を安んず。壽永元年、同縁に攝る。後第六世眞鏡の時、再び火災に罹りて寺運漸次衰微せしが、元亨年中、法明第七世を繼ぐに及び大いに堂宇を復し宗風を發揚せしより、推して一宗の中興とす。正慶元年五月、御靈の一部兵災に罹り寶物等多く焼失せり。嘉慶二年、後小松天皇は第十四世道音に歸依し給ひ、宮輪念佛勸進御序を賜ひ、且本寺所傳の融通念佛縁起に宮筆を染めさせらる。慶長十六年、後陽成天皇三十六世道和を召され、念佛御入會ありて宮額を賜ふ。元和元年、大阪役の時兵火に罹りしが、徳川家康道和を訪ひて治國の要を問ひ、こゝに青銅五百文を寄せて再建に資す、尋で家光二百貫文を寄附して修葺料に充てたり。第四十三世覺空の代寛文元年、山城大原來迎院南坊一宗の本山を争ひしが、遂に二寺別立となり、本寺を一宗の本山と定む。同三年、殿堂の再建に着手し、同七年、總行二十間の本堂成り、從空初めて登壇して念佛札を獻上す。寛文十二年後西院天皇覺空を召し、念佛御入會あり、宮筆の名額を賜ふ。第四十六世大通學進に高く、朝廷幕府の歸依を受けて一宗の興隆に力を盡し、元禄四年、學頭寮を棟建し、翌年阿彌陀堂、位牌堂を建立、同九年、客殿、庫裡を重修し、翌年所化寮、齋堂を造營、更に同十五年、侍者寮を建立せり。されば覺元天皇勅して紫

衣を賜ひ、且本寺を以て一宗の檀林となし給ひ、元禄十五年舊儀に倣ひ御宮輪融通念佛勸進御序を賜ふ。享保十七年、第四十八世信海の代寶鏡寺の宮御新願滿願報賽として板輿を納進せらる。寛政九年、第四十九世曉海光格天皇より殿上輿を拜領す。爾後皇室との關係愈々深く或は禁裡に天得如來を迎へて御拜あり、或は内帑金を下賜して諸堂の修葺料に充てられたり。徳川歴代將軍亦厚く歸依し、屢次一山の修營の資を寄せ施物を進む。當時境内廣闊にして寺觀頗る雄偉なりしが、明治三十一年、同縁の異に遭ひ本堂、阿彌陀堂、靈明殿(保元元年明應親建、元亨三年法明再建、天保十三年教彌重修、御影堂(正徳六年忍通親建、文久二年教彌再建)、齋堂(元亨二年法明親建)、位牌堂、堂司部屋(大通建立)、骨堂(貞享二年眞鏡再建)、方丈(大治二年眞鏡親建、寛永二年法覺再建、役守寮(寛永二年法覺建立)、小書院(天保元年眞海建立)、同(寛政五年曉海建立)、侍者寮、支關(寛永年中法覺再建)、演述所(寛永年中法覺建立)、礎松院(天文二十年道祐親建、正徳元年祐海再建)、學頭寮、所化寮等二十餘字焼失し、燒かに正門、毘沙門堂、圓通殿、羅漢堂、地藏堂、經藏、鐘樓のみ災を免れたり。爾來一山の再興に盡力し、本堂、阿彌陀堂、大典、骨堂、靈明殿の再建成り、以て現在に及ぶ。現に一宗本山として東寺四百九十一寺、教會町四箇所を統べたり。  
●境内三千七百餘坪。正門に寶鏡寺宮眞軍大源山の額を掲ぐ。本堂、阿彌陀堂、靈明殿、毘沙門堂(寛政十一年、曉海再建)、圓通殿(第四十六世大通再建)、地藏堂、羅漢堂(何れも弘化元年、教彌建立)、寶藏、經藏(何れも元禄年中、大通建立)、鐘樓(文化三年、海海再建)、侍者寮(明治三十七年竣工)、別時寮、骨堂(何れも明治三十四年再建)、大典、齋堂、浴室等を

具備す。寺寶中本尊書毛野郎等本(一巻(周山編撰篇)は國寶に指定せらる。他に聖觀音像(最澄作)、多聞天像(空海作)、本尊天得如來圖、龜鏡龜結縁起(近衛惠雲院大相國詞書、同右大臣家禮佛書、長谷川等伯書)、融通念佛縁起(青蓮院尊圓法親王圖書、土佐光信書、靈司關白房公外題、後小松天皇宣諭融通念佛勸進帳、後陽成天皇宣諭止觀明靜類、同天皇、後西院天皇宣筆名號、東山天皇宣筆法華經提婆、勸賜紫衣給旨、勸諡大師號口宣二通、其他佛書、經典等數十點を藏す。

●古表眞言宗。  
●醍醐天皇の御宇坂上田村麻呂の子野野麻呂、當平野郷(現在住吉區内)の地を賜ひしが、其子孫當地に居住して世に平野郷と稱す。本寺は田村麻呂の女慈心尼(桓武天皇皇后母)の開創に係り、坂上氏後裔の創建なる今の統全神社(住吉區平野宮町)と共に一族の氏寺、氏神たりしものなり。現に金剛峯寺末なり。  
●寺寶中、絹本着色佛涅槃圖一幅は箱の蓋に述武二年の記録あり。人天諸衆愴哭の間に種々なる動物間諒なく描き込まれ、構圖に於て明光の先驅をなすものなり。年記は後人の筆なるも、大略其製作年代を傳ふ。洞窟一口は述久三年七月の銘あり、二者共に國寶たり。境内の北方に田村麻呂墓あり。

●河内山と號す。天正年間、増多山の開創なりと稱す。本尊地藏尊は傳説に建武年間、増に乘り、當地の海上に出現せしものと云ひ、一に地蔵尊と稱し、土俗其靈驗を説仰す。  
●諸堂整備し、地方の一名譽なり。  
●緣日(毎月二十四日)。殊に七月二十三、二十四の兩日は御齋りと稱し、信徒本堂に參集して夜を徹す。

**惠光寺** 大阪府住吉區平野泥室町。

●眞宗大谷派。  
●大徳山と號し、大谷派の五箇寺の隨一なり。文明二年、本願寺蓮如攝河原諸州巡攝の關、門徒の請に應じ一字を芳江郡萱振村(現八尾町)に創建し、其十三子蓮淨を住せしむ。四世眞慧の時、石山本願寺に織田氏來攻するや、萱振坊舎其兵燹に罹り、天正八年八月、眞慧、顯如と共に紀州雜賀に避難し、翌九年九月二十六日、難に死す。眞慧の子眞超第五世となり、父の遺志を繼ぎ新坊再建を圖り、苦心經營十餘年、慶長二年遂に其工を竣ふ。同十五年、東本願寺に歸し初めて院家に補せらる。同十七年本願寺派に復歸す。第七世一行は前住昭嚴と共に心を東本願寺に致し、貞享二年六月、萱振を去るや東本願寺宗主一如之を遇し、攝津平野道場迎春寺を以て惠光寺と改稱し之に住せしむ。後ち寺格を進めて別院となせしが、明治十年、宗制改革に際し一般末寺となる。

●融通念佛宗。  
●遍照山南源院と號し、貞和三年、大念佛寺七世法明の開創に係る。初め、元亨元年、宗祖眞忍の遺風を慕ひて攝津平野の舊址に來り、佛殿、方丈を經營して一宗を中興せしが、貞和三年四月、法席を弟子興善に譲り、別に一道場を當地に開創す。本寺即ち是れなり。仍て世俗本寺を本山大念佛寺の住持隱室また長者寺と稱したり。現今四箇中山の一に數へらる。  
●寺寶に融通念佛縁起二軸・藤原基勝筆般若心經一巻等を藏す。

●眞宗本願寺派。  
●後醍醐天皇正中元年十月、僧覺應の開創に係り、文明二年再建、以て現在に及ぶ。  
●現今の本堂は文明二年の再建にして堺市古建築の一なり。寺寶に後柏原天皇宣諭色紙十八枚、同天皇御寄進爪紅末廣・尊鏡、眞純、道見各法親王書蹟・土佐光起筆源氏委卷・覺如筆阿彌陀佛像・顯如筆同像・國

●境城八百五十坪。寺寶に安阿彌作阿彌陀如來・蓮如持佛香山科南殿安置佛・葛石山城安置火中出现畫像等を藏す。

●淨土宗。  
●淨土宗。

●眞宗大谷派。  
●僧行基の開創に係り、往時は天台、眞言兩宗を兼學し、七堂整備せし大伽藍にして諸堂宇の外に文殊院、寶鏡院、玉鳳院、普賢院、寶藏院等の支坊を有せしが、後醍醐天皇御宇兵燹に罹りしより、規模著しく縮小し僅かに法燈を維持せり。了圓住持の時本願寺第七世存如に歸し永享三年眞宗に改めしを以て、了圓を中興とす。慶長三年寺基を現地に移し、以て今日に至る。  
●寺寶に後奈良天皇・後西院天皇宣諭・後井長政陣中守護佛・覺如筆拾遺古傳九帖・教如石山合戰感狀一巻等を藏す。



後銘短刀等十数點あり。

堺別院(信院) 堺市神明町東二丁。

●真宗本願寺派。
●信院と號す。初め、足利義氏の第四子祐氏幼にして父を喪ひ、母と共に堺に來住す。出家して道祐と號し、天台の教學を修めしが、後、真宗に歸し本願寺第三世覺如の門に入り、延元年間、覺如を櫻屋町に創す。文明二年、第五世道顯堂字を再興せしが、同八年、又境内に一字を營つて信院と稱し、本願寺第八世蓮如に獻す。蓮如此處に寓し、十字名號、撰文類持名抄を書して道顯に附與す。後、兵亂に依りて大いに廢頽し終に今の地に移る。本願寺十二世准如、同十四世寂如共に再興を企圖し、享保十二年三月遂に上棟す。明和三年七月、同十五世住如大谷本願を模して中宗堂建營の工を起し、安永七年九月其工を竣す。當時境域二千三十六坪を有し、國內蘇尾村、山城山科に於て寺領三百石を領し、末寺又温河泉八十五色に亘れりと云ふ。
●本堂・中宗堂・庫裡・鐘樓・鼓樓・書院等を具備す。寺寶として觀聖人等身畫像一幅・蓮如上人畫像一幅等を藏す。

真宗寺 堺市神明町東二丁。

●真宗大谷派。
●當派五箇寺の一なり。正慶元年、僧道祐(前項參照)の創建に係る。初め、天台宗に歸せしが本願寺第三世覺如に歸依し真宗寺と改め、堺北の庄山口に堂宇を建て念佛の餘生を送る。後、文明二年、道顯之を再興し、本願寺蓮如を請じて入佛供養を行ふ。同八年、

堺別院(南御坊) 堺市南御坊東四丁。

●真宗大谷派。
●俗に南御坊と云ふ。初め眞言宗に屬し羅漢院と稱せしが、慶長七年、此地の西熱寺二世善願大谷派本願寺第十二世教如に歸し眞宗の道場とし、之を教如に獻す。爾來年を逐ひて堂宇を増設し、寺觀を整へたり。明治二十年其上、現在の堂宇は其後の再建に係る。
●現今寺域千四百二十七坪、堂宇に本堂(桁行十五間、梁間十四間)・庫裡・書院・廣間・鐘之間・鼓樓・鐘樓・茶所・總會所等を具備す。

妙國寺(蘇鐵寺) 堺市材木町。

●日蓮宗。
●唐香山と號し、俗に蘇鐵寺の名を以て著る。現に本宗本山たり。足利の末年、三好豐前守之康阿波より兵を起し播磨三國を侵略せしが、偶々、この地の大蘇鐵を見、之を歸愛して此地に留まる。時に堺の豪商油屋常言の子に佛心院日號あり、之唐之に歸依し入道して實休と號す。永祿五年、實休島山紀伊守高政の爲に兼田に戦死すや、實休の弟義長は亡兄の菩提の爲に其の邸宅及び蘇鐵の靈木等を日蓮に獻じ、常言又請堂



(景寺國妙)

●本堂・多寶塔・實休堂等の堂宇あり。本堂前に英士割腹の跡と記せる石碑あり。維新前土佐藩士堺浦を警固せしが、慶應三年二月十五日佛國の水兵我に亂暴せるより、其小隊長實浦猪之吉以下其水兵を討つ。爲

の建營を責し、日號を以て開山す。天正十年五月以降徳川家康康次本寺に留り、大友義興亦同十三年三月秀吉に應ぜんとして當地に着し本寺に泊せり。萬寺領百二十石を有す。

に佛國より遊東なる抗議ありて、同月二十三日實浦隊長以下十名當寺境内にて割腹せつけられ、當寺裏の寶珠園に葬る。石碑は其割腹の舊址なり。寺寶中、朱鎗長義の脇差一口(附、正徳三年彌生の折紙一通)・鎗國光の短刀一口(附、劍、墨、鞍柄及白鞘)は共に國寶なり。他に隆徳天皇宸筆紙金泥經・伏見、靈元天皇宸筆御製・御歴代輪旨數通・日蓮眞蹟・深草元政筆蹟・楠正成、伊達政宗、三好義長各筆蹟・筒井順慶所持相州五郎正宗の刀・三浦傳太光世の刀・各武將寄進什器等多數あり。境内に高麗より移植せるものと稱し、種種の傳説を傳ふる大蘇鐵あり。一樹よく十餘株に別れ高さ二丈に餘る。今天念記念物に指定せらる。

祥雲寺(松の寺) 堺市大町東四丁。

●古義眞言宗。
●龍谷山と號し、俗に松の寺と稱す。大覺寺末寺たり。寛永二年、深庵(宗影)海會寺の舊址に就きて之を開創す。同十一年九月、堂宇の落慶供養を行ふ。
●照堂・方丈・小方丈・庫裡・玄關等を具備し、本尊聖觀音、別に達磨大師・深庵像等を安んず。寺寶中、絹本着色釋迦二尊開像一幅は臺座上に設法する釋迦に阿難、迦葉と思考せらる二尊開を配せしものにして、筆致暢達なり。同深庵和尚像(白費あり)一幅と共に國寶に指定せらる。庭に五葉松あり、枝幹左右十間、高さ一丈九尺に達す。

顯本寺 堺市宿院町三丁。

●本門法華宗。
●成就山と號す。永享、嘉吉年間、壽八品派祖日隆尼

ヶ崎止任の時、當地木屋、餅屋某、日蓮に歸依し、實徳三年兩人の邸宅を合して寺刹に改め、日隆の法弟本成院日淨を開山に請す(一に文明十三年の創建なりとも云ふ)同四年、隔州法相宗碩徳義房林應來りて上人の教化を蒙り、薩隅日の三州に涉り、百有餘箇寺院を當寺に屬せしむ。當時大本山格として規模宏壯、子院、學林等數多を有せしが、末刻兩山に遷居して以來舊時の盛衰なきに至る。天文二年、細川晴元、其臣三好宗三、水澤長政等をして本願寺一額を請ひ三好元長(海雲入道)を當山に於て設けしむ。此時足利義満また四條の寺より當寺へ入り、金光寺に預けらる。永祿天正以降屢々武將の陣屋に充てらる。元和二年、開口神社西門附近より現地に轉す。舊くは寺領二百七十石を有せしが近世二十七石に減す。
●寺域二千三百八十坪、本堂・庫裡・鐘樓・鼓師堂・持佛堂・三光堂等軒棧相接す。境内に三好元長墓あり、表に歸本海雲善室大居士、裏に天文二癸巳年六月廿日と刻す。

大阿彌陀經寺(白蓮社) 堺市寺地町東三丁。

●淨土宗。
●甘露山と號し、一に白蓮社と稱す。もと白蓮流義の一本寺たり。正中元年、後醍醐天皇の勅に依り、智演(澄圓菩薩)之を創建す。智演是より先き文保年中、入元し、嵐山東林寺に到り、優曇華度に師事して白蓮社念佛の證悟を得たり。在留五年歸朝の後、正中元年、嵐山白蓮社に歸して本寺を營む。是れ本邦蓮社の嚆矢なり。光明天皇、後村上天皇の數信厚く、建武四年、二千六百貫の寺田を寄せらる。時に殿堂三十八宇、塔頭僧坊三十餘舎を具備する一巨刹にして専ら念佛修行の

少林寺 堺市少林寺町東三丁。

●臨濟宗大徳寺派。
●元徳年中、小林某の建立にして、嵯源和尙開基とす。最初、小林寺と書せしが、後支那靈山の少林寺に倣ひ今の寺號に改む。中世大徳寺の塔頭黃梅院の末流となれり。初め、寺域廣大なりしが、織田信長の爲に一部を没收せらる。後三好長政吉岡地寺地町、少林寺町より地子本寺に納進す。塔頭蘇鐵地は狂言釣狐の故事を以て有名なり。

長泉寺 堺市新在家町東四丁。

●淨土宗。
●天龍山玉光院と號し、元龜元年、僧十萬之を創建す。以後の沿革不詳なり。
●所藏の絹本着色圓覺王圖一幅は寺傳に隆信忠の筆と稱するも、南宋以來流行の圖樣を我邦にて模せし



のなるべく、一般の十王圖とは稍々趣を異にし、圓極描寫共に著しく日本化さる。鎌倉時代の作にして現に國寶たり。他に熊谷蓮生所用鼓・法然自筆畫像等あり。

大安寺

堺市南波龍町。



(大阪府 堺市 大安寺)

●臨濟宗東福寺派。●布金山と號し。●壽くは一國寺と稱せり。●應永元年、聖一國師五世の法孫徳秀の開創に傳る。元和元年兵燹に罹り、一山の諸堂烏有に歸す。是より先き天正、文祿の頃、魚屋助左衛門と云へる者ありて頼に呂宋に往來し、貿易を以て巨利を博し、其居館を精舎と稱し結構善美を盡せしが、豊臣秀吉の忌諱に觸れ、一家没落す。一族追廻のため其邸宅を擧げて本寺に寄せ、方丈の再建に資す。時に大安寺と改稱す。往時、泉州

大島郡築尾村に二十九石餘の寺領を有せりと云ふ。●方丈は南北九間、東西六間建て四方柱の檜材より成る。棟檜は建て狩野元信、同永徳の筆として著聞し筆致の巧、丹青の妙を極む。就中枝添松の圖、鶴の圖は最も著名にして、是に關する逸話は夙に人口に膾炙する所なり。往時和州信貴城主松永久秀其結構に驚歎し、物置れば必ず缺く、我れ子孫の爲に後患を除かんとして小刀を以て柱に斬付けたりと稱し、今に刀痕を存す。寺實に助左衛門呂宋より將來の茶壺・香爐等あり。本堂の後庭に千利休が自ら煎を採りて瀾ると傳ふる時雨の井あり。頗る雅趣に富む。利休愛好の手洗鉢あり。

南宗寺

堺市南波龍町。

●臨濟宗大徳寺派。●龍興山と號す。初め、軸の松の傍に在りて南宗庵と云ひ、正覺普通國師(大林)隱棲の地たり。時に三好長慶深く國師に歸依し、弘治二年、庵を宿院の南に移し先考海雲入道元長追師のため一字を建立し、寺額二千貫を附す。京都大徳寺を本寺とし、天正元年六月十割の位に準す。當時佛殿、法堂、禪堂、七層塔、鐘樓、經藏、山門、總門、廻廊、塔頭百有餘、以下殿宇完備せしが、同二年、松永久秀の兵火に罹り、尋て元和元年兵燹に罹りて堂宇悉く燒失す。後、慶應しくもなく澤庵之を再興し、奉行喜多見忠勝、岸和田城主小出吉英等大いに之を資援せしより數年を出でずして造營の工を竣ふ。乃ち澤庵を以て中興の祖となす。曾て豊臣秀吉朱印狀を降して税田百石を寄せ、徳川秀忠及び歴代の將軍又印券を進む。現に當派別格寺にして塔頭に天慶院、四南庵あり。

神峯山寺

三島郡高槻町成合。

●天台宗。●根本山寶塔院と號す。古來北山本山寺(次頁參照)南山安國寺の本院とせられ、歷朝の數倍厚く靈刹なり。文武天皇の御宇後小角の開創に係ると云ふ。緣起に依れば後小角葛城山より此地に來り靈木を得て四郎の毘沙門天像を刻みて加持すれば、四郎各々光を放ちて一は山城鞍馬に、一は河内の信貴山に、一は富山の北の峯に飛び去り、一體は靜かなるまゝ、動かざりき。これ即ち鞍馬寺、信貴山、當寺奥ノ院本山寺及び當寺の本尊となれる尊像なりと傳ふ。寶龜五年六月、開成皇子彌勒寺より入山し給ひ中興の祖となり給ふ。當時坊數二十一、寺領千三百石を有せりと云ふ。陽成天皇元慶八年、本寺並びに本山寺兩堂の建營あり。大治年中、權

輔元富山毘沙門天に歸依して眞忍を師として僧となり眞忍と號し、大いに土木を起し伽藍を造營す。慶長九年、豊臣秀頼諸堂を重興し、慶安二年、徳川家光朱印地若干を附す。明和二年、同縁に罹りしが、安永六年再建す。現に寶塔、寂光、龍光の三院を有し、准別格寺たり。●寺域三千五百餘坪を有し、一山、北は丹波に接し、東に山城を控へ雄峻の地にして、泉石林檜の奇勝あり。堂宇に總門・本堂・輪藏・觀音堂・光仁天皇御分骨塔・開成皇子埋髮塔等具はる。奉安の木造阿彌陀如來坐像一軀は來迎相をなす藤原末期の作、同聖觀音立像二軀の中、一は寶髻を戴く藤原末期の作、一は彫出しの寶冠を著けたる藤原前期の作なり。絹本着色佛涅槃圖一軀と共に何れも國寶に指定せらる。他に託摩筆釋迦三尊畫像・狩野元信筆千手觀音像・祐定作刀劍・足利義滿寄進玉龍硯等あり。

本山寺

北山毘沙門天(三島郡高槻町原)。

●天台宗。●北山靈雲院と號し、俗に北山毘沙門天の名を以て著る。古來神峯山寺(前項參照)奥ノ院とせらる。文武天皇御宇、役行者此地に靈雲たなびけるを見、自ら毘沙門天像を刻みて一字を創せしもの當寺なりと云ふ。後ち開成皇子本寺が役小角草創なるを信ぜられ、御堂を造營し中興の業を遂げ給ふ。大治年中、權輔元富山加持水に病を癒し得て大いに喜び、財を蓄積して堂宇を修造し、眞忍を師として父子出家して父を眞惠子と認惠と云ふ。眞惠は境内に庵を結びて専ら融通念佛を弘め、忍惠即ち當寺第十八代の住持となれり。後ち近郷五百住なる松永善右衛門なる者本寺に祈りて出世し、松永

經正久秀となりしに依り、其親妻として數多の莊田を寄せたり。天正年中、高山右近の兵火に罹る。豊臣秀吉、同秀頼又本寺を崇敬し、慶長九年、秀頼は本堂、樓門、鐘樓其他を修葺し、慶長十七年莊田を寄進す。後ち元禄年中、徳川綱吉(桂昌院)大いに修繕を加ふ。●境内約三萬坪、開山堂は本堂の東に在りて小角の像を安置し、本堂の後五町許にして五水の溝、方丈の南に忍惠の舊庵あり、奉安の本尊木造毘沙門天立像一軀は山城鞍馬、大和信貴山と共に本邦三毘沙門天と稱せらる。ものにして、頭部は藤原時代のものなるも、嗣は後世の補作に係る。木造聖觀音立像一軀と共に國寶に指定せらる。他に不動明王圖一幅・豊臣秀頼寄進の膳具・足利義政寄附の沈南石硯及び鴻靈石・徳川綱吉寄進の多寶塔其他元龜天正年間諸大名の下知狀等の寶物を藏せり。●初寅會(毎年一月)、修正會(一月三日)、花供養(四月十四日、十五日)、勸請掛會(十二月二十五日)。

伊勢寺

三島郡高槻町古曾部。

●曹洞宗。●泉王山と號す。王朝女流歌人伊勢女(藤原繼隆女)の隱栖の舊址と傳へて草庵ありしが、其後改めて寺刹となし伊勢寺と號す。天正年間兵燹に罹り、諸堂舊記を燒燼す。元和元年、僧祖水之を中興し、新に伊勢の廟堂を興す。慶安年中、高槻城主水井直信古墳を修補して碑を建立し、林羅山の撰文を刻す。●寺實として深草元政作緣起一巻、傳伊勢所用古硯、古鏡等を藏す。本寺の北山に能因法師の墳墓と傳ふるものを存す。

金龍寺

三島郡高槻町成合。

●天台宗。●磐手森山と號し、延暦九年、參議阿部是雄の草創する所にして初め、安瀟寺と稱せり。應和三年、千觀内供來りて草庵を結び止宿す。時に金龍、山中靈遠の池より出づる瑞祥ありて寺號を金龍寺と改む。天延二年、天台別院となり、長曆元年、歇僧能因寺中松林坊に來住す。天正十年、兵火に堂宇等烏有に歸せしも、慶長年間、宗像の代豐臣秀吉大阪城鬼門の鎮とし、命じて本堂、大正殿、開山堂、鐘樓を造立せしむ。元禄十二年天台別院となる。文明年間當寺に文福あり、茶湯に於て一派を開く、所謂文福流は是れなり。●文福鑄造の茶釜を存す。境内に雲雲塔ありて秀吉の分骨を納め、又能因標あり。

茨木別院

三島郡茨木町。

●眞宗大谷派。●慶長八年、東本願寺十二世教如の創立に係る。此地大阪より京都に達する所謂京街道に當り、教如大阪に下向の節は常に宿泊せる所にして、城主片桐且元城内の一部を割きて寺地となし、教如に附す。慶長八年より坊舎を建立し、同年十一月落慶す。後ち百餘年を経て大破せしが、寶曆八年、再建を企て、同十三年落成せり。現本堂是れなり。●境内千三百三十八坪、本堂・書院・御殿・客殿・法中詰所・鼓樓・茶所・講社詰所・輪番所等を具備す。寺實に蓮如消息一通・教如消息一通等を藏す。



護國寺 三島郡吹田町。

●曹洞宗。
●牛頭山と號す。康平二年、大敵の開創にして牛頭山護久寺と稱す。康應年間、足利義滿之を祈願所となし、伽藍を造營し、七堂具備するに及びて護國寺と改め、寺額を寄す。其後織田氏の兵燹に罹りて諸堂灰燼に歸す。慶長五年以降竹中氏の菩提所となれり。寛文年間、僧直印堂字を建て、本寺を再興し、以て現在に及ぶ。

●所藏の絹本着色般若菩薩像一幅は國寶にして現に東京帝室博物館に出陳中なり。他に足利義滿寄進狀・前田利家畫像・大敵和尚所持の拐杖等を藏す。

慶瑞寺 三島郡富田町。

●黄檗宗。
●鮮雲山と號す。持統天皇八年、道昭の開創に係り、始め法相宗に屬すと云ふ。後ら廢絶せしを、應永年間僧松嚴之を中興し、景瑞庵と稱す。文祿三年、淺野長政其故跡たる故を以て境内を除地す。明暦元年、普門寺僧龍溪之を中興し、黄檗宗となし現稱に改む。寛文五年、後水尾天皇御念持佛觀世音像を本寺に施入らる。延寶二年、後水尾上皇方丈を建立せしめ給へり。●禪堂に後水尾天皇念持佛觀世音を奉安す。開山塔は同じく後水尾天皇の勅建にして靈元天皇天光塔の名を附し給ふ。寺寶に後水尾、靈元兩天皇の宸筆を藏す。

普門寺 三島郡富田町。

●臨濟宗妙心寺派。

總持寺 三島郡三島村大字總持寺。

●古義眞言宗。
●補陀落山と號し、高野末に屬す。西國巡禮三十三所二十二番の札所なり。寛平二年、越前守藤原高房の男中納言山隆先考の遺志を繼ぎて開創し、遺唐大使大神御井に託して白檀香木を唐土に求め、觀音像を刻して本尊とす。これ本寺の靈鷲なり。緣起に云ふ、承和年間、中納言命を以て太宰府に到る。途次偶々漁民の龜を殺さんとするを見て、錢を與へて海に放たしむ。其後船に搭じて西航の際幼兒飄て海中に墜り、中納言大いに悲む。時に一龜ありて兒を背に載せて海上に浮ぶ。中納言大いに喜び觀音の加護を謝し、數年の後唐より白檀を得て觀音像を刻せしむ。今の本尊これなり。古來一統、後一統、白河、鳥羽等の諸天皇の臨幸あり、歴代勅願所に列せらる。又別當三綱、定額僧を置き、當國、播磨、和泉三國の租を割きて御施入ありき。元龜二年、織田信長の兵火に罹り烏有に歸せしが、慶長八年、豐臣秀頼、片桐且元に命じて再建せしむ。●寺境高丘に倚りて三千餘坪を占む。現今本堂・總門・開山堂・奥ノ院等の堂宇あり、寺寶に安阿彌作樂師如來・後小松天皇寫聖緣起・足利尊氏祈狀・楠左馬頭繪圖・山隆繪像・片桐且元念持佛等十餘點を藏す。境内に山隆廟、靈塚等あり。

本照寺(教行寺) 三島郡富田町。

●眞宗本願寺派。
●富山養徳院と號し、現今本願寺派の別格別院たり又嘗て蓮如、本宗本興教行信證を數世せる舊跡なりとて教行寺とも稱す。應永年間、本願寺七世存如の開創に係る。初め存如富國を遷化するや、從僧正信房一字を此地に創して光照寺と號し、存如を仰いで開基となす。其後、正保三年、本願寺十三世其如の弟其教、富國の末寺並に門徒の請に依りて住持し、大いに化導に努め、寺門を興隆して寺號を本照寺と改む。爾來西本願寺連枝の住職寺となる。第六世法廣、第八世深依(本願寺明如の弟)共に寺運の維持に力む。近くは小濱寺

本照寺(教行寺) 三島郡富田町。

●眞宗本願寺派。
●富山養徳院と號し、現今本願寺派の別格別院たり又嘗て蓮如、本宗本興教行信證を數世せる舊跡なりとて教行寺とも稱す。應永年間、本願寺七世存如の開創に係る。初め存如富國を遷化するや、從僧正信房一字を此地に創して光照寺と號し、存如を仰いで開基となす。其後、正保三年、本願寺十三世其如の弟其教、富國の末寺並に門徒の請に依りて住持し、大いに化導に努め、寺門を興隆して寺號を本照寺と改む。爾來西本願寺連枝の住職寺となる。第六世法廣、第八世深依(本願寺明如の弟)共に寺運の維持に力む。近くは小濱寺

勝尾寺 三島郡豐川村大字東生。

●古義眞言宗。
●歷頂山菩提院と號し、本宗高野末、西國三十三所第二十三番の靈場たり。攝津守藤原政房の男善仲、善賢、天王寺榮墳に師事せしが、神龜四年、富山に入り安居清修す。光仁天皇の皇子幼より眞敬佛法に志厚かりしが、後年宮を出で、入山し、仲、算二師に就いて受戒し、開成と號せらる。寶龜六年、開成大般若經書寫の功を遂げ、道場を建立し彌勒寺と稱す。時に光仁天皇攝津國豐島郡福一千里の官租を施入し、更に島下郡水田六十餘町を寄せ給ふ。同八年に至り講堂造立の工に着手す。天應元年、開成入寂す。延暦元年、勅して開成の爲に法華八講を修せしめ給ひ、爾來之を恒例とす。清和天皇嘗て行幸あり、勝尾寺の勅額を賜ふと云ふ。陽成天皇又行幸あり、爾後、歷代皇室の御歸崇厚し。一條天皇長保年間、初めて一山に檢校職を置かれし如く、先づ大僧正明察、次いで天仁二年十月、勝察之に補せらる。元暦元年、源平合戦の時焼失し、源賴朝之が再興を授けず。承元三年八月(一)に元年十二月(一)淨土宗祖法然配流を免ぜられて先づ當寺に入り西各に草庵を造り棲む。二階堂は其遺跡にして現に開光大師二十五靈場第五番たり。拾遺古德傳卷八に「富山に一切經よしまさる由開えければ、所持の經論を納め、聖覺法印を唱導師として開風供養あり」と見えたり。寛喜二年、境内保護の太政官符を下し、後深草上皇、文永九年、院宣を以て三口の阿闍梨職を置き勅願寺とせらる。元弘三年五月十日、護良親王當寺の軍忠を賞せられ、同年七月、本寺衆徒御前參數を進め兵糧米を提供せしこと所藏の古文書寫に見ゆ。以て南朝



(號 勝 二 寺 尾 勝)

●本寺との關係後からざるを知るべし。光明天皇寺内東谷に草庵を結び給ひ、之を光明院と稱せしが、康暦二年六月二十四日此地に崩御あらせらる。文祿三年、豐臣秀吉若千の朱印狀を寄せ、慶長八年、豐臣秀頼片桐且元に命じて本堂を再建せしむ。現在の本堂是れなり、同十九年、徳川秀忠禁制狀を附す。現に本坊小池坊を有す。
●寺境東面山の東に接し三千三百餘坪春櫻秋楓の候自然彩色の美稱すべし。本堂講堂には妙觀律師作の十一面千手觀音を、開山堂には開成皇子、善仲、善賢の影像を、藥師堂(一)に如意堂と稱す)には俗に開成皇子遷化の折落涙せりと傳ふる所謂泣樂師を安置す。二階堂は今昔物語等に見ゆる證如の創庵、また法然來住の遺蹟にして現今のものは天保十三年の再建に係る。繪藏は元祿二

佐井寺(山田寺) 三島郡千里村大字佐井寺。

●眞言宗。
●時井山と號し、山田寺とも云ふ。もと伊射奈岐神社別當寺にして、既に三代實錄に見ゆる古刹なり。寺傳には天平年間、僧行基の開創に係ると云ふ。天平年間、兵火に罹りしが、正保年間再建さる。
●繪日(毎月十八日)、大會式(八月十八日)。

大廣寺 豐能郡池田町。

●曹洞宗。
●彌増山と號す。應永年間、邑主池田筑後守光正の開創にして、僧天胤を開山とす。天正年間、歌人牡丹花竹本寺に寄寓せし事あり。
●五月山中に位置して寺境二千五百餘坪、境内清淨



にして風光又見るべし。山門・本堂・庫裡・方丈・如客寮・經藏・鐘樓等軒楹相接す。寺寶に牧溪筆跡見觀音・横川景三書望海亭記・宵柏書影・遺墨等を藏す。境内佛殿の下方に宵柏舊居址・望海亭址(文明年間、僧山祥の創建、天保年間其故址に一時を建立す)等あり。

久安寺

豊能郡細河村大字伏尾。

古義真言宗。



(寶蹟)(門楹寺安久)

度重興す。時に近衛天皇久安寺の號を賜ひ、又歴代の勧進寺となる。往時寺額頗る雄偉なりしが、文祿年間、

寺額を征韓の資に供し、講堂の規模亦縮小せらる。寺境約千八百坪、頗る風致に富み、四時の賓客絶へず。樓門・御影堂・鎮守白山祠・辨天祠等を具備す。就中樓門は現に國寶建造物にして、三間一尺、屋根入母屋造、本瓦葺の建築なり。全態の形構、屋蓋桁や大に過ぎ権衡を失するも、木刻莊重雄大ななり。久安年間の遺立寺傳するも、樓式に室町時代初期の特色を存す。奉安の木造阿彌陀如来坐像一軀又國寶にして、藤原時代の作に係る定印の彌陀像なり。境内に小鶴庭あり、豊臣秀吉嘗て富山に遊びし時の宿坊にして、珍奇奇石多く庭庭の標識せらる、所なり。他に朱雀池・蓮川、千代橋、車籠、八幡城址等の名蹟あり。

龍安寺

豊能郡箕面村大字平尾。

天台宗寺門漢。

箕面山吉祥院と號し、一に箕面寺とも稱す。京都聖護院に屬し、別格本山にして、古來竹生島、江之島、興島と共に四所神天の稱あり。白蓮元年、役小角の開創に係り永く修驗道の靈場たりき。應和年間、千觀の供物を奉じ富山に請雨法を修す。其後引續き此處に庵居して法華三宗相釋釋文を撰す。元弘の亂後、後醍醐天皇隱岐に遷幸あらせらる、や、同三年閏二月二十二日、日蓮親王當寺に令して天皇の運命を祈禱せしめ給ふ。應長八九年の交、兵火及び雷災のため、堂宇崩壊せしが、後水尾天皇明應二年、勅して諸堂を再興せしめらる。櫻町天皇亦其御門を下賜し給ふ。塔頭に寶槌坊の一院あり。

東光院

豊能郡南豊島村。

曹洞宗。

佛日山と號し、萩の寺の稱を以て世に知らる。天保年中、行基の開創に係り、天和元年、相模國津久郡根小屋村功雲寺住僧兼全來住してより曹洞宗となる。其後、寶曆二年、本寺二十世清源中興す。もと西成郡豊崎村南濱に在りし、大正三年六月二十三日、移轉の許可を得、同十二年七月十二日現地移轉を完了す。境内八百坪を有し、華嚴門・胸木門・開山堂(本尊聖師如來)・地藏堂(本尊地藏尊、不動明王)等あり、所藏の木造釋迦如來坐像一軀は國寶に指定せらる。

能勢妙見堂

豊能郡東郷村大字野間中。

日蓮宗。

長元年中、多田滿仲三代の嫡孫能勢左馬頭賴國の開創にして爾來同氏の鎮守たり。舊時は瀟家若しくは陸奥二年、僧行基の開創なりと傳ふ。天平年中、勅して御堂を建營し、寺田を寄せ鎮護國家の道場とせらる。寛仁年間、惠心慈に參籠して阿彌陀如来千軀を刻し、安置せりと傳ふ。高倉天皇の御宇、寺號を現稱に改む。應仁の兵燹に罹り、寺運衰頹せしが、天正年間、眞海之を中興す。徳川氏の時、小出氏廟墓を山内に營み、寺田を寄せ、堂宇を修して大いに寺觀を興隆し、以て現今に及べり。

法道寺

泉北郡上神谷村大字鉢ヶ峯。

古義真言宗。

鉢ヶ峯山と號し、もと閑谷院長福寺と稱し、白風十一年、法道仙人の開創に係る。世々の勧進所にして、往古は七百餘院を擁する大伽藍なりしも元龜、天正の兵火に燒かれ規模大いに縮小せり。元禄年間尙に十坊



(寶蹟)(鉢ヶ峯寺法道)

家原寺

泉北郡八田莊村大字家原寺。

古義真言宗。

一乘山清涼院と號し、本宗高野末なり。行基菩薩誕生の故址として著聞す。父は史羊、母は蜂田樂師姫、百濟王の後裔なりと云ふ。天智天皇七年、誕生、白風十三年、十五歳にして樂師寺に投じ、法相を究め、唯識を修す。應徳元年、故宅を捨て、本寺を創す。後年諸國に遊化して或は觀法を勤め、或は淨業を講ふ。傍ら濟世利民、大いに世道人心を啓發す。天平二十一年二月、八十二歳にして大和宮原寺東南院に寂を示す。是より先き天平二年、聖武天皇勅して本寺の堂宇を改修せしめ、其所願所に列せらる。寛元三年、假尊(興正菩薩)本寺に來りて之を中興し、別受法を行す。

境内二千五百八十七坪。本堂・行基堂・樂師堂・不動堂・大師堂・地藏堂・聖天堂・稻荷神社等を具備す。本尊文殊菩薩は其白毫中に一寸八分の黄金像を納め、總持門附正菩薩像の將來せるものと傳ふ。所藏の紺本着色行基菩薩行狀繪傳三幅は國寶に指定せらる。附近には濱寺公園(大辯寺址)、誕生木、善光寺塚、白龍洞、赤龍洞、經塚等の名蹟あり。

高倉寺

泉北郡西關器村大字高倉寺。

古義真言宗。

修惠山と號し、修惠寺とも大修惠山寺とも稱す。

朝川寺

豊能郡東能勢村大字木代。

曹洞宗。

向陽山と號す。推古天皇二十四年、聖徳太子大圓村の地に一字を創建し、寶樹山普門院と號す。是れ本寺の舊稱なりと云ふ。永和年間、臨濟宗南禪寺に屬し、大圓寺と改稱す。寶徳二年、進家來りて大いに諸堂を建營せんとせしが、封境狹隘の爲め享徳二年、現地に移して再建を成就す。八幡宮門跡享清を開基とす。此時現宗に改め向陽山朝川寺と稱す。建永前迄大本山總持寺の勸進番地たりき。明治三十九年十月、回縁に罹り山門を除き一山焼滅す。大正元年、諸堂を再建し、



を有せしが、現在常眞院と塔坊の二字を存するのみ。
●本堂・食堂・多寶塔・鐘樓・總門等を具備す。就中多寶塔は現に國寶建造物に指定せらる。三間二層、本瓦葺にして寺内中央に在り、造立沿革詳ならず。...

國分寺 泉北郡南池田村大字國分。

●古義眞言宗。舊くは福徳寺と號し。現に金剛峯寺末に屬す。聖武天皇勅建の諸國分寺の一にして、續日本後紀に「以在和泉郡安樂寺、爲國分寺、置講師一員、僧十口、但不置講師。」と見え、延喜主稅式に「和泉國分寺料五千束、文殊會料一千束」と記されたり。...

施福寺(横尾寺) 泉北郡横山村大字横尾山。

●天台宗。横尾山仙樂院と號し、俗に横尾寺と呼ぶ。西國三十三所中第四番の札所なり。寺傳に欽明天皇の御願にて、行滿の開基に係り、役小角法華二十八品を分ち、葛城の支峯に置けり、當山は其巻尾を納めし所なるを以て巻尾山の名ありといふ。...

を修す。延暦十二年、空海本寺動搖に就き虚空藏求聞の持法を受け、修練に専念す。其後其眞言宗を開くに及び當寺又同宗に歸す。高僧順徳の留錫する者多く、殊に皇室の御歸崇極めて厚かりき。延喜主稅式に觀音堂料として五百束を賜ひし事見え、延喜十六年。定額寺に列し三綱の職制を布かる。天徳年中。別當慶住房回祿に罹り、國宣符、國宣、寄文等を悉く焼失す。長元七年正月、天台の願學覺超示寂するや、其誕生地たりしより遺言し、當山に埋葬せしむ。後鳥羽天皇往古より管領し來れる吉田の祖を舊例に任ぜて免除し給ひ、後堀河天皇安貞二年同様の宣旨を下賜せらる。四條天皇延應元年、横山郷を以て當寺結縁灌頂の用途に充てられ、仁治元年灌頂堂を建立す。後深草天皇建長二年三月十六日、結縁灌頂を動行し、翌年宣陽門外亦萬壽萬慶會を修し、其料として和泉國日根郡吉見の地を配せらる。正嘉年間、法華經一部(後白



(堂本寺國施)

河天皇御讀誦經、金剛阿字、同愛樂明王一編並に種子十編、同普賢像一編、不動尊一編、佛舍利三粒等の御納進あり。南北朝時代に至るや、延元年間、本寺の衆徒摩和田一族と共に王事に勤めて功ありき。往時八百餘坊を有し、寺門盛大を極めしが、織田信長の兵燹に罹り、全山烏有に歸す。次で豐臣秀吉、其一部を再興せり。文祿三年、坊地六石の朱印狀を附し、徳川氏歴代之に從ひ、堂宇の修補に努め、七十餘坊を存して稍々舊觀に復す。寛文年間、高野山と勢力を争ひ、天台宗に轉向し、延暦寺末となる。其後次第に衰微し、現に中の坊、北室院、靈山院、蓮華院、井上坊、觀音院、智積院の七坊を存するのみ。●寺地の東南内國との國境を經る峯嶺中の最高所たるを以て深達嶺にして歴聖を設す。登路二徑を存し、大字坪井より登るを表道とし、南河内郡高向村大字諸畑より登る路を裏道となす。登道險峻、寺門に近くして磴級八百、蹊徑として雲に昇るが如し。封境四千五百九十坪、樓門・金堂・拜堂・講堂・大師堂・虚空藏堂・愛樂堂・鐘樓堂等を具備す。金堂には本尊彌勒菩薩を安んじ、脇壇に千手觀音・馬頭觀音、文殊菩薩、四天王を置く。就中、虚空藏堂は弘法大師求聞持法を修せし靈蹟と傳へ、愛樂堂は中の院の跡にして同じく剃髮の舊址なりと稱し、大師守本尊たり。愛樂明王を安置す。堂後の高所に隱曜天皇塔あり、同天皇の御分骨を納めたる所にして五輪の塔を置き木櫓を繞らす。寺内に美術工藝品上の逸品多く、兩庫に充満す。中にも正平十五年書寫に係る紙本墨書横尾山大縁起一巻は國寶に指定せらる。諸堂中、兜率ヶ嶽、卒都婆峰、捨身ヶ嶽最も名高く、其中、四十八箇三十六洞を數ふ。捨身ヶ嶽は弘法大師の捨身修行の靈蹟なりと云ひ、兜率ヶ嶽には覺超僧都の塔墓を存す。境内に寶惠

松尾寺 泉北郡南松尾村大字松尾寺。

●天台宗。阿彌陀山と號す。寺傳に據るに用明天皇の本願にて、役小角之を親立し、僧奉澄中興すと云ふ。承和六年、定額寺に列せらる。平安末期の住僧福祐靈異を以て知られ、此事今昔物語、日本往生極樂記等に見えたり。鎌倉時代の末より寺門大いに興隆し世に著はる。徵古雜抄所載の松尾寺僧徒言上狀に據れば、元弘元年九月十四日、後醍醐天皇諭旨を下され、翌年六月二十七日、建武元年二月十九日、四月十九日大塔宮令旨を賜ひ、本寺に朝敵滅亡の御祈願並に衆徒の義旗を掲ぐべきを促し給ふ。延元元年八月、後醍醐天皇當寺を御祈禱所とせられ、同三年十月、和泉國大島莊領家職を寄せらる。正平十六年十二月二十五日、後村上天皇は特に近江に潰走せる足利義詮追討の祈禱を命じ給ひ、興國二年八月二日、和泉國春木莊廣國刀福職及び同太耶實季跡を寄進され、又後醍醐天皇御菩提の爲め毎年結縁灌頂を修する旨を聞召され、之を賞せらる。等、久米田寺、攝津瀧安寺、攝津大山寺等と共に南朝諸帝との關係を深し。後足利義満を初め義滿、義持、義教等深く本寺に歸依して祈禱御教書を下し、足利義教の水享十一年以後の御教書には段鐘以下臨時設役の免除、守護入部停止の事を命ぜり。天正九年三月、織田信長其部下なる寺田又右衛門、松浦安太夫等をして山内を襲はしめ、三月五日、講堂を悉く破却し、寺領

を没收す。時に當寺日輪院長増は八十一の高齡なりしが幸うじて寺寶の古文書類を携へて遁ると云ふ。其後再興せられしが、元祿十五年頃には十八の塔頭寺院を見る。●寺域三萬餘坪、山下より石階重疊す。本堂・不動堂・三天堂・經堂等あり。首堂は樓門の側に在りて、一の谷源平合戦戦死者の白骨を収めしものと傳ふ。寺寶中建武二年十二月二十三日弘法相傳の奥書ある紙本墨書如意輪陀羅尼經一巻、後醍醐山天皇御筆光賢の奥書ある紙本墨書寶篋印陀羅尼一巻及び其光賢寄進狀一巻(應永三年二月二十五日)は國寶たり。他に貞應元年官宣旨、後醍醐、後村上兩天皇の諭旨等を藏す。所屬佛堂冬堂(字春木川)は弘法大師が一冬を茲に安居せし遺蹟と傳へ、附近の叢林を冬堂林と稱す。

の問本寺に住せしより具本願寺と稱せり。當時の住持を下す入とす。慶長年中、本願寺東西に分るや末寺門徒を具して本派に屬せし元和元年四月、大野治房大阪城より紀州に遊撃の際半軍の爲に功ありしを以て、徳川幕府寺地方四町を給與し上野寛永寺の院家に列するに至れりと云ふ。●境域三千七百八十四坪を有し、本堂・庫裡・鐘樓・鼓樓・講中詰所等備はる。寺寶には聖徳太子木像一軀、涅槃像一軀、觀經變茶羅一編、觀變影人筆和讃切一編、古鏡等を藏す。●毎年十一月の報恩講には具家全町之が爲に賑ふ。

願泉寺(貝塚御坊) 泉南郡貝塚町。

●眞宗大谷派。金原山眞教院と號し、俗に貝塚御坊と稱す。本願寺派の別格寺たり。和銅元年行基菩薩の創立に係り、四十九院の一なりしが、其後積弊に及びしを天文十九年了珍之を眞宗に改む。了珍は日野大納言内光の息にして、大永七年、内光洛西川寺にて戦死の後、新井川宰相唯光及び菊川車人佐光輝に伴はれて和泉國日根郡に没落し、佐野川に寓居す。享祿四年、紀伊國根來寺福永院に入りて出家得度し、名を右京坊と改め、天文十九年、密宗を改めて其宗に歸し、堂宇を再興して金原山願泉寺と號す。天正五年二月、織田氏の兵火に罹り堂宇悉く焼失し、同八年再建す。同十一年、本願寺十一世願如紀伊羣島退散の後、祖儀を奉じて當寺に入り、同十三年閏八月、大阪天満の假堂成る迄三年

●臥龍山隆池院と稱し、現に本宗高野末に屬す。僧行基の開創に係る、畿内四十九院中の一なりと云ふ。此地方往古灌木に乏しく、早天の際ば農民の辛苦甚しきを以て、聖武天皇極諸兄、僧行基に命じ、池を鑿り灌漑の便を計らしめ給ふ。仍て神龜二年二月起工し、十四年の後天平十年に至りて竣工す。時に天皇光明皇后と共に百官を率ひて行幸あらせらるると云ふ。これ今の久米田池にして、池の開鑿竣工と共に行基諸兄を禮越として、池畔に佛堂を建立す。之れ即ち本寺なりと傳ふ。寺記に當寺の四至を「限東角河春木津川東峯七層峯限南葛木橋峯、限西松村登路並延年峯、限北大道」と云ひ、又當寺所藏の天平勝元年十一月附の久米田寺領流記附帳に就きて寺領を見るに久米田里二坪肆段貳佰肆拾步、下久米田里四坪壹段佰捌拾步、吹井里一坪參段、波多山里一坪參段、瀬良谷陸拾步、岡田里二坪伍段、上池田里十坪伍段、小松井里七坪肆







に至り、忽ち毒蛇を噛み殺す、獵夫即ち犬の死を悲しみて落髪して佛門に入れりと。犬鳴山の山號即ち是れに因す。

尾崎別院

泉南郡尾崎村。

●真宗本願寺派。

●慶長二年、桑山伊賀守の家人石田次郎左衛門一字を創立し、之を西本願寺十二世准如に寄す。依りて准如命じて別院とす。元禄十三年十一月、同様に福り、堂宇並に法寶物悉く焼失せしが、寶永二年再建せらる。後同二十世廣知當院に遊化し、殿堂を修理す。

●境域一千二百五坪。對面所・磨殿・小書院・立花所・長屋・茶所あり。

興善寺

泉南郡多奈川村大字各川。

●天台宗。

●風樹山金剛院と稱す。仁壽年間、文德天皇の勅願によりて僧圓仁の開く所と云ふ。後元龜天正の兵火にて焼失し、數十年を経て僧海之を再興す。

●本尊木造大日如來坐像一軀(保安元年八月廿三日の銘あり)。木造釋迦如來坐像一軀(胎内に寛治七年六月佛師源増、小佛師僧京尊と記せる長文の墨書銘あり)。同樂師如來坐像二軀の四輪共に藤原時代末期の作にして何れも國寶に指定さる。境内に石燈籠あり、正平二十一年九月廿八日遺施主沙彌宗實云々の文字を刻し、其古色撫すべし。

富田林別院

南河内郡富田林町。

●真宗興正寺派。

●興正寺第十六世禮秀の開創に係る。初め弘治元年禮秀當國權長の聖德太子廟に參詣し、其途上道俗を教化す。歸山せんとするや、道俗の懇望ありて當地山中を開きて本寺を創建す。時に寺地東西二十六間、南北二十間餘を有すと云ふ。

極樂寺

南河内郡長野町古野。

●融通念佛宗。

●錫浪山と號す。元亨元年、時宗中興法明、宗門弘通の爲め當國巡錫の御、攝河二州に建立せし六別寺の一なり。慶長八年、結算大いに寺門を振興す。慶安年中、領主本多氏寺僧法善に歸依し、其善處所に準じ佛供料を附す寛政年中、洞山本堂を再建す。明治初年末寺を廢せしも、現に當宗中本山として郡内の名刹たり。

●寺内に樂師堂在り。聖德太子開創の温泉寺の遺蹟なりと云ふ。本堂東方丘陵頭に五木稻荷あり。俗に火の見の神と稱す。

葛井寺

南河内郡葛井寺町。

●古義眞言宗。

●紫雲山三寶院剛琳寺と號し、仁和寺末に屬す。西國三十三所第五番の札所とす。寺傳に神龜二年聖武天皇の御願により、僧行基の開創に係り、後平城天皇の朝阿保親王之を再興すと云ふ。又一説に永長元年、大和加留里に藤井安基なるものあり、當地寺塔の荒廢せるを復興して藤井寺と稱す、これ本寺なりと。惟ふに此地は百濟辰孫王の葛葛井氏舊居の地にして、本寺即ち同氏の創創に係る氏寺なりしなるべし。延元二年



(堂本寺井葛)

三月、岸和田氏細川氏之當寺附近に合戦し、又正平二年、楠正行此地に陣し、手兵三百を以て細川顯氏を豊田林に敗北せしむ。時に正行、本寺に戦捷を祈念し、從奉と共に大般若經六百卷を書寫奉納すと云ふ。明應

觀福寺

南河内郡觀長村大字太子。

●古義眞言宗。

●觀長山聖觀院と號し、石山寺、轉法輪寺、觀長寺、御廟寺等の諸名あり。俗に中河内郡觀華町將軍寺を下ノ太子と云ふに對し上ノ太子と云ふ。推古天皇二十七年、聖德太子此地を相して墓所を築き、翌年母后崩じ給ひしかば此處に奉葬せらる。次で同二十九年二月二十二日、太子其妃と共に斑鳩宮に薨じ給ふや、遺命を奉じて、尊骸を此處に葬る。乃ち穴徳部間人皇后(御母)を中央とし、其東に太子、西に膳部善岐々美耶女(御妃)の廟を配し奉る。世に之を三骨一廟と稱す。即ち推古天皇、太子御追福の觀願を發し給ひ、其御靈廟を守護せん爲め坊舎十楹を普華所として建立せしめ、六町四方の地を賜ふ。聖武天皇神龜元年、勅願に依り東西に御靈を構へ、東を轉法輪寺、西を觀福寺と唱へ、東は東觀院を中心とし、西は御墓を中心とせり。弘仁元年、弘法大師一百日間茲に參籠し、太子の教命を請け、三地を證得す。歴代天皇の御崇敬他に絶し、醍醐天皇(承和二年)一條天皇(正曆五年)、後冷泉天皇(天喜二年)、崇徳天皇(大治元年)、此時水田二十五町を寄せらる。近衛天皇(久安三年)各御臨幸ありて施物を納進せしめ給ふ。高倉天皇承安年中、平清盛勅を奉じ、重盛大檀主となりて堂塔の壞損を修補し、伽藍を再興す。次いで治承三年、天皇茲に臨幸あらせらる。後鳥羽天皇の御宇勅願により、聖德太子三經御講讀に擬して始めて大業會を修せらる。建久二年、觀覺十九歳にして參籠し太子の告諭を受けたりと云ふ。永仁二年九月十三日、龜山上皇臨幸して當國高安莊を御寄進あり。爾後皇室より賜りし莊園一時は二萬石に達せりと云ふ。

天正二年、兵燹に罹りて諸堂灰燼に歸せしが、慶長八年、豐臣秀頼勅を奉じて本堂、聖觀院を再興す、爾來淨土堂、多寶塔、金堂等十餘宇の建築、本堂と相前後して武門及び富豪等の懸志に依り建立せらる。元禄元年の記録に十六箇院、八坊、四庵と見え、維新前塔頭十三箇寺ありしも現に東觀院、聖光明院の二箇院を存するのみ。

中河内郡平岡村の地を寄す。徳川氏累代又之に準じて朱印狀を附し、以て維新に及ぶ。  
●寺域千七百七十五坪。堂宇に本堂・觀音堂・不動堂・樓門・庫裡等二十六棟を具ふ。本尊千手觀音像は釋文會・釋首勤の作・脇土聖觀音及び地藏尊は行基作と傳ふ。寺寶に三條西實隆筆の葛井寺勸進帳一軸並に南北朝時代の古文書多數を藏す。  
●初觀音(一月十八日)、星供會(二月節分)、三千佛名會(三月十六日―十八日)、萬靈供養、大般若會(四月十六日―十八日、九月十八日)、千日會(八月九日)觀音會(毎月十七日、十八日)。  
●融通念佛宗。  
●由緒沿革不詳なり。  
●奉安の木造十一面觀音立像一軀は現に國寶に指定せらる。刀法精秀にして稍々異國的なる趣致注目に値す。衣裾の全面に後世精細なる鍍金文様を置きし爲め頗る調和を損じたり。藤原初期の製作に係る。

得生寺

南河内郡石川村大字山城。

●淨土宗。

●大佛と通稱す。明治維新迄は大寶寺と稱せしも、以後無權の爲め廢寺となれり。明治四十五年大阪の信徒某に依りて再興せられ、現稱に改む。  
●本尊丈六木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶に指定せらる。  
●別時念佛會(毎月八日)。



心經一巻・願後西院天皇宮筆・本文常子内親王御筆  
法華經八軸・後醍醐天皇宮筆・文章子内親王御筆  
影・梵字御陀名號及び漢字御陀名號書各一軸・土佐  
光信筆聖德太子繪傳八幅・觀覽軍阿彌陀名號一軸・同  
經文一軸等多數を藏す。寺内に聖德太子御遺墨三骨一  
副を始め、前大宮院御遺骨塔(正應元年)・後醍醐天皇  
御寫經塔(正安二年)・後深草天皇御寫經塔(嘉元元  
年)・五字ヶ峯寶篋印塔(正保四年)・願蓮、四天王寺  
中興忠輝各石塔、瓦忍上人塚、源朝朝及び政子五輪  
塔・伊藤伊賀守、丹南城主高木氏累代各石塔等存す。  
又福石なるものあり、世に未來記と稱し、太子御墓  
を築かるゝに當り、未來を記して未申の方に埋めたる  
石にして、後天喜二年九月二十二日、忠輝上人塔婆  
建立に際し發掘す云ふ。今寶庫に藏む。古事談卷五  
にも之を記載し、記文に符合する所あるも眞疑を知ら  
ず。附近に敏達天皇河内磯長中尾陵、用明天皇河内磯  
長原陵、推古天皇磯長山田陵、孝德天皇大阪磯長陵尚  
ほ蘇我馬子、高屋連、蘇我石川山田麻呂、小野妹子等  
の墳墓所在す。

西方尼院

南河内郡豐長村大字太子。

淨土宗

●南向山と號し、舊觀福寺々中なり。聖德太子、推  
古天皇二十九年、御歲四十九を以て薨じ給ふや、太子  
の侍女日登、月登、玉照の三女髮髮をおろし、太子御  
廟の時に一字を建立し其御菩提を形す。これ即ち本寺  
の靈廟なりと傳ふ。時に法樂寺と稱す云ふ。後ち寺  
門免れ果て、昔日の面影を存せざりしが、寛永十六年

壽正尼之中興す。明治維新まで觀福寺塔頭聖光明院  
なりしが、後ち知恩院末と成る。  
●寺域五百餘坪、本堂・觀音堂・茶室・書院等を具  
備し、庭苑頗る清麗なり。中將姫が頭髪にて刺繍せり  
と傳ふる三尊佛及び惠心僧都、慈雲律師の筆蹟等を藏  
す境内の南方に本寺開祖三尼の墳墓あり。

妙見寺

南河内郡豐長村大字春日。

曹洞宗

●天白山と號す。寺傳によれば蘇我馬子の開創なり  
と云ひ、舊時堂塔坊舎頗る盛なりしが、後ち衰頽す。  
明治維新後、東方數町の山腹より現地に轉じて今日  
に及ぶ。  
●本堂奉安十一面觀音は大和長谷寺觀音を模形せる  
ものと傳ふ。寺中茶白塚あり。寺寶中、紀古繼墓誌一  
枚(蓋附)は國寶に指定せらる。横瓦長八寸二分、廣五  
寸一分、厚二寸、背に織布痕を印し、「維延曆三年歲  
次甲子□□朔癸酉丁酉參議從四位下陸奥國按察使兼  
守將軍勳四等紀古繼墓誌之吉繼墓誌」の銘を四行  
に刻す。他に又古墓標あり、長二尺餘、廣一尺、飛鳥  
淨原大朝臣大納言眞大武采女竹具所請造墓所形浦山  
地四十代他人莫上致木取磯傍地也、己丑年十二月廿五  
日と六行に録す。附近に蘇我馬子の墓、春日佛師宅  
址等存す。

高貴寺

南河内郡白木村大字平石。

古義眞言宗

●神下山と號す。現に高野末に屬し、葛城山中の巨  
刹なり。初め香華寺と號し、後小角之を開き、後ち空

海亦此山に入りて修練し、諸堂を建て高貴徳王菩薩の  
像を安置す。因りて高貴寺と改めし事河内誌に見ゆ空  
海高野山に赴くや、寺を上足智泉に附す。長治年間東  
寺一の長者鳥羽範俊僧正之が住持たりし事あり。後  
鳥羽天皇熊野行幸の儀、特に駕をめぐらして本寺に御  
參詣あり。次で元弘元年、後醍醐天皇景行に遷幸あり  
し時、本寺に軍調伏を祈らしめらる。時に北條氏の  
兵燹に罹り、一山焦土と化せしが、聖正慶元年、金堂  
の跡に一字を建立し、本尊を安置し、寺門六坊を再興  
す。爾來、法隆寺内花園院、當國東一院、同觀心寺等  
より僧侶保護を加へたり。安永二年八月、慈雲律師入  
山し、流季の混濁を起説し、一旗幟を樹立して正法律  
の復古を唱導す。遂に勧願の内宜を賜はり、堂宇を興  
し、一派の本山となる。  
●寺境葛城山中にして遠く塵埃を脱せる幽寂の淨境  
たり。金堂には五大尊を、講堂には辨財天を安置し、別  
に後鳥羽院、櫻町院、桃園院、後醍醐院、開明門院等の靈  
牌を置く。坂路を上る事二町餘にして奥ノ院に達す。  
入口に近く鳥羽範俊僧正の塔あり。御影堂・戒壇塔・尊  
勝塔・慈雲庵・柳澤中守守保光法師等存す。寺  
寶には慈雲律師一代の心血を注ぎし梵學律儀一千巻を  
始め、印度渡來貝多羅葉卷書、黃栗山唐僧唯一血書華嚴  
經八十卷・空海將來金剛寶鈴等十數點を藏す。尚ほ奥  
ノ院右側に奇木五彩の楓ありて晩秋の候景致を添ふ。

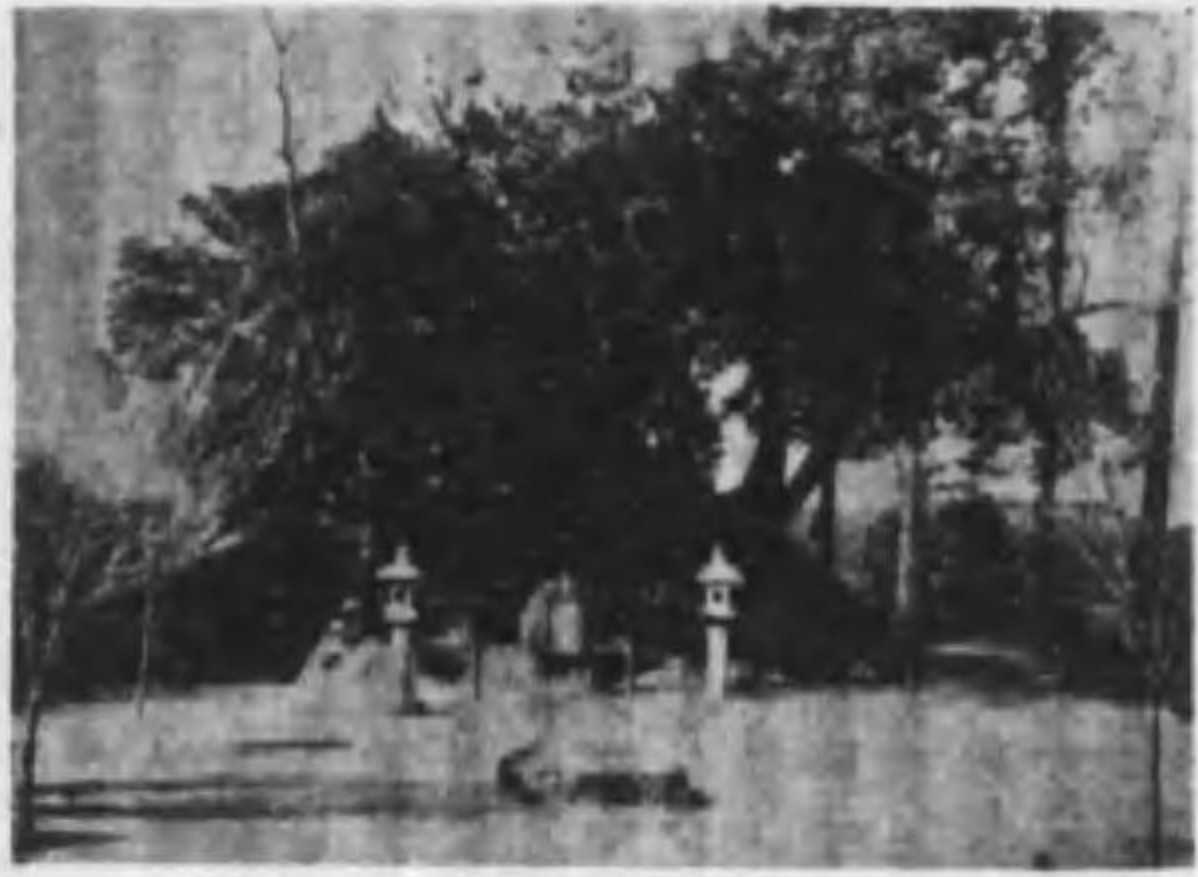
弘川寺

南河内郡河内村大字弘川。

眞言宗醍醐派

●龍池山瑞峯光院と號す。天武天皇の勅願所にして  
役小角の開創に係り、葛城七坊の一なり。天平九年行  
基菩薩此處に安居す。元亨釋書に寶龜年中沙門光意

當山に住せし事見ゆ。弘仁三年、空海本寺を一新せし  
より、後世仰ぎて中興と稱す降りて平安末期、後鳥羽  
天皇本寺に臨幸あらせらる。建久元年二月十六日、源  
泊の賦前西行本寺に於て遷化す。寛正二年、高山氏の  
兵亂に遭ひ、一山悉く焦土となる。近世似實(時人呼び  
て今西行と云ふ)臥に西行の高風を慕ひ、其墳墓の地  
詳ならざるを歎き、四方に探歴して石山觀音の靈告を  
受け、本  
寺に之を  
求め、墓  
の東に花  
之庵を營  
みて幽栖  
す。現住  
快芳諸堂  
を修葺す  
●寺境  
頗る清閑  
にして本  
堂・大師  
堂・地藏  
堂・西行  
堂・奥ノ  
院等を具  
備す。西  
行堂には  
傳文覺上  
人作西行  
の像を安  
置す。寺  
寶に後鳥  
羽天皇勅  
願西行法  
師消息等  
を藏す。  
本堂奥二  
町餘に西  
行の古墳  
あり、周  
圍十五間  
高二間の  
圓墳なり。  
花之庵下  
二町餘に  
似實の墓  
あり。櫻  
樹、五  
葉松、柳  
水等の名  
木を存す。



(續古關法行西寺川弘)

龍泉寺

南河内郡東條村大字龍泉。

古義眞言宗

大 阪 府 (南河内郡)

●牛頭山醫王院と號し、現に高野山末に屬す。寺傳  
に據るに推古天皇二年、蘇我馬子勳を奉じて創建すと  
云ふ。後弘仁十四年、僧空海再興して善女龍王を祀  
る。天長年間、眞如法親王本寺に而を祈りて驗あり。  
依て同五年、勳命を奉じて藤原冬實堂舎を再營し、甘  
南備山龍泉寺の號を賜ふ。正平年間、楠氏の一族當寺  
の西北方龍泉城に龍る。時に本寺兵燹に罹り仁王門を  
除くの外悉く烏有に歸す。  
●本堂・毘沙門堂・庫裡・仁王門等を具備す。本堂  
奉安本尊藥師如來は聖德太子作と稱せらる。境内の西  
に辨天池あり。又龍水ありて龍泉と稱す。寺域の四む  
所なりと云ふ。

明王寺

南河内郡被方村。

新義眞言宗智山派

●龍谷山と號し、俗に龍谷不動の稱を以て著る。弘  
仁年間の創建なり。楠正成本寺不動尊を崇信し、屢次  
參詣すと傳ふ。南北朝の頃、足利義隆龍泉山を攻撃す  
るや、本寺其兵燹に災せられて堂塔悉く烏有に歸す。  
爾來、永く殿堂の備なりしが、後ち慈惠四方に勸請し  
て遂に諸堂を再興す。現今の堂宇即ち是れなり。  
●本堂、本尊不動明王は龍谷不動と稱して、衆庶の  
信仰厚し。  
●緣日(毎月二十八日)。

金剛寺

南河内郡天野村大字天野山。

古義眞言宗

●天野山と號し、俗に女高野を以て知られ、仁和寺  
末に屬す。寺傳に據るに本寺は聖武天皇の勅願に基き



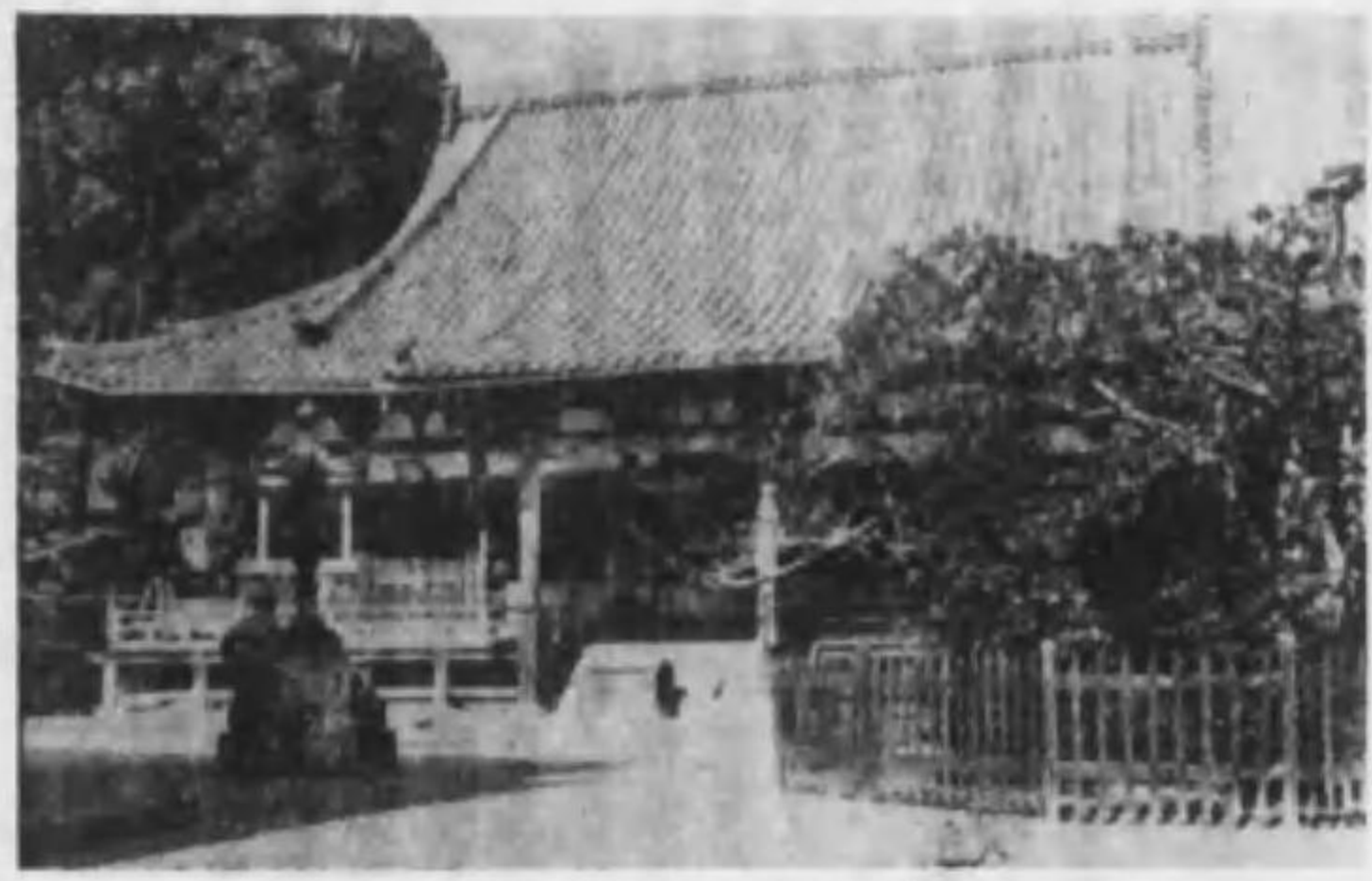
(寶圖)(門樓寺南金)

天平年間僧行基草創し、後ち僧空海密教修業の靈地と  
なすと。爾後、四百年、堂宇殆ど頽廢に歸せんせしが、  
永萬元年、僧阿彌の奏請に依り、承安元年、後白  
河法皇高麗朝臣憲貞に勸して重修せしむ。僧空僧坊完  
成して寺號を金剛寺と稱し、阿彌を推して中興の開基  
とす。治承四年八月、源貞其私領河内郡都都内山の  
野田島  
を寄進  
せしが  
其寄進  
狀に本  
寺が禪  
定山院  
(八條  
女院  
子)の  
御祈願  
所とし  
て、不  
退の御  
祈願の  
爲め相  
傳の私  
領を寄  
せし事  
を述べたり。後ち女院眞如親王の御眞筆弘法大師畫像  
を御影堂に安置し、毎年御影供を勤修せしめられ、大  
衆の威儀悉く高野の風を移す。又八條女院、宜秋門院  
に奉仕せし大威局、六條局の姉妹阿彌を崇信し、落海  
して淨覺、覺阿と改めしが、阿彌、建久八年寺務賑を



比丘尼淨覺に譲り、淨覺又妹覺阿をして相承せしめ、當寺愈々女人結界相應の地となり、世に女人高野の稱起る。これより先き元暦二年三月、源賴朝下文を出して寺内の山狩、材木切取を禁じ、文治四年正月、石川義俊寺領を安堵し、寺威細々揚る。建久九年以後後白河院御再興の緣由と八條女院御祈願寺たるの關係より、後白河法皇第二皇子守覺法親王の總法務たる仁和寺を本所と仰ぐに至り。降りて南北朝時代に入れば、南朝と當寺との關係殊に緊密なり。惟ふに當寺の學頭禪惠は後醍醐天皇の御歸依厚き僧文親の高弟にして、文親亦正平十二年十月九日當寺の大門口に生院にて入寂す。其事禪惠の記に最も詳しく見れば、本寺が後醍醐天皇元弘以後大覺寺皇統の爲に盡せし由來を知るに足らん。されば元弘二年十二月、當寺より戰捷の祈禱を重んじし報告を大塔宮に送るや、翌年五月、宮より播磨西河井庄を寄進し給ふ。建武二年十二月十五日、後醍醐天皇當寺に輪旨を下して天下靜謐を祈らしめ給ひ、延元二年四月二日、南朝官軍の當寺に亂入するを禁じ、同時に和泉國大島莊領家職を祈禱料として當寺に知行せしめられたり。正平七年三月、北朝持明院三上皇又亂を避けて當山に行幸す。後村上天皇は賢名生の行在所山深くして息運の帳復に便ならざるを憂へ給ひ、即ち當寺に幸し食堂と摩尼殿に御座し給ふ。本寺所藏滿草子口決第二十の奥書に依れば正平九年十月二十八日より同十四年十二月二十三日迄、前後六年間其行在所となり、衆徒又寺塔の損亡をも顧みず山水等を切拂ひ奉仕せし事見えたり。世に之を天野行宮と稱す。官軍將軍の宿舎亦當山中を充てられたり。本寺所藏日經疏第三卷草奥書に然も三條實實記に依るに文中二年まで南方主上天野行宮に在し、其間一時他に行幸ありしことあるも約二十年の行宮たるの光榮を有したりと。か

かる間に武士の亂入屢々にして堂塔の燒失せしこと一再ならず、正平十五年、足利義隆等の賊軍亂入し、大門以下講堂坊舎第三十坊兵火に見舞はれ、文中二年三月、細川氏春行宮を祀せり。足利氏以後皇室の御崇敬武家の歸信厚く所當官物以下の免除寺領の安堵等變る所なかりき。越えて天正十一年九月、豐臣秀吉寺領三百七石を安堵し、秀頼又慶長十一年、諸堂宇の大修繕を行はしめたり。文祿三年十一月の天野山檢地帳寫に依るに塔頭子院三十餘宇を數へ、田畑屋敷段別三十三町六段二畝餘高四百五十八斗を算す。江戸歴代將軍又三百七石領地の安堵朱印狀を出せり。元祿十三年、徳川綱吉堂宇に再修を加へしが、明治維新後、寺觀稍々廢頽して堂宇半餘に減す。



(實圖) (堂本寺廟金)

●境内二萬一千餘坪、權門・食堂・金堂・御影堂・觀月亭・護摩堂・開山堂・三社・多寶塔・五佛堂・樂師堂・求聞持堂・加持井堂等を具備す。就中金堂、御影堂、觀月亭、權門、多寶塔、鐘樓は國寶建造物なり。權門は三間一戸、重層、屋根入母屋造、本瓦葺にして形整莊重鎌倉初期の優秀なる建造物なり。金堂は即ち本堂にして桁行七間、梁間七間、單層、入母屋造、本瓦葺慶長十年の建築にして前面に存する。一間の向拜は後世の補作なるべし、屋蓋入母屋上方に突出する事甚しく軒深く反轉あれど踏調の美に乏しく、繪棟、木鼻等尙ほ俗態の感あり、内陣中央には本尊木造大日如來坐像、左に降三世明王坐像、右には不動明王坐像を安置す。多寶塔は三間二層、屋根檜瓦葺にして慶長五年の建築に係り、全體の形狀優美にして其構造細部の手法に當代の特徴を存す。内部四柱に十六大菩薩を描き他に眞言八祖の像を彩色し、本尊大日如來を置く。觀月亭は本堂の西、御影堂の東端に突出し、桁行南面一間、北側二間、梁間一間、單層、向唐破風造、繪皮葺にして慶長十年の建造に係りよ桃山時代の風趣を存し、權衡極めて優美なり。背後に天野山の翠嶽を眞し前面本堂、權門を俯瞰して風致よし。後村上天皇行在所の御觀月の宴を催されし所と傳ふ。其西に據して御影堂あり、桁行四間、梁間四間、單層、屋根寶形造繪皮葺にして、同じく慶長十年の營造に係る。屋蓋の流れ緩且輕妙にして形式に尙ほ室町時代の遺風を存するも、細部の手法に桃山期の特色を見る。鐘樓は金堂、食堂との中間後方にあり、桁行三間、梁間二間、重層、袴腰、屋根入母屋造、本瓦葺にして様式手法全く唐樓建築の特徴を示す。屋蓋大いに失し、下層、腰袴狹窄の感あり。細部の手法、一般の形式より南北朝を下らざる建築と推知す。本堂後方の北門を出づれば、

當時七十餘坊の遺院たる觀藏院・摩尼院・吉祥院あり、權門を出て天野川を渡れば當山の守護神たる丹生明神社存在す。金堂奉安に係る本尊木造大日如來坐像一軀、同降三世明王坐像一軀、同不動明王坐像一軀は何れも運慶の作と稱するも、鎌倉末期の遺作にして、現に三軀共國寶に指定せらる。寺寶中、國寶とされるは先づ繪畫に絹本着色五秘密鈔茶圖一幅・同虚空藏菩薩像一幅・同金堂三尊像一幅・工藝に薄華毒繪經一箇(京都勸修寺經寫と意匠略々同じく鎌倉末期作・楠氏一族所用と傳ふる觀卷五領(白革威二、藍革威一、藍革威一、藍革威一)・花鳥文様の白銅鏡一面・經卷に蓮喜の跋ある紙本墨書寶印陀羅尼經一卷・正平十四年六月十日の奥書ある後村上天皇宣筆紙本墨書大般涅槃經(卷第七)一卷・紙本墨書梵漢普賢行願經一卷・藤原基衡願經にして久安四年閏六月十七日の奥書ある紺紙金泥法華經(卷第八)一卷・筆蹟に紙本金泥寶印陀羅尼經(料紙消息及歌集物)一卷・書蹟に紙本墨書延喜式神名備前簡一卷等なり。殊に所藏の古文書は大本古文書家わけ第七金剛寺文書として五百餘點收載せられ、國史研究の重要な資料なり。就中、南朝に關する古文書は皆天下の至寶にして、其内楠氏一族の尺牘は觀心寺のそれと並び稱せらる。境内に中興開山阿觀の墓、光嚴法皇御分骨所等あり。

地藏寺

南河内郡天見村大字清水。

●古義眞言宗。  
●九華山と號す。元祿四年、蓮體此地に隱栖し、本寺を創す。初め玉井山と號し、關東眞言律の本寺なりし靈雲寺(京都市本郷區湯島新花町)に屬して一派の重鎮たりき。後ち本多忠純本寺に詣り、九華山と改む。

延命寺

南河内郡川上村大字鬼住。

●古義眞言宗。  
●樹山と號し、仁和寺末に屬す。僧化海巡の御藥樹葉草の多く生ぜしを見弘教の適地なりとて地藏菩薩を造りて本尊とし  
●法羅山寶幢寺と名づく。是れ本寺の流傳なり。延寶年間、僧淨慶(覺色寶幢寺の資願せるを歎き、之が再興を洛西仁和寺に奏す。即ち故宅を捨て、寺刹となし藥樹山延命寺と改稱す。淨慶は如法眞言律の祖にして、元祿四年、徳川綱吉の歸依を受け、江戸湯島靈雲寺を



(堂本寺命延)

觀心寺

南河内郡川上村大字寺元。

●古義眞言宗。  
●僧尾山と號し、高野末なり。文武天皇大寶年間、役小角の創立に係り、觀心寺と云へり。弘仁年間、空海之を再興して觀心寺と改め、天長四年、高弟實意に譲る。實意大いに之を興隆し開山と稱せらる。承和十四年、實意寂し、眞紹繼ぐ、朝に奏して定觀寺に列し淳和天皇御宇、伽藍を造營す。勸修觀心寺寶財帳に承



和三年の官符を載せて「敷地拾伍町計、四至、東限大尾崎、南限(以下不明)、西限小仁深、北限龍泉寺山」と見え、堂舎のことも「三間檜皮如法堂一間、五間檜皮葺講堂一間、六間板葺講堂一間、寶蓋三間、鐘堂一間、六間檜皮葺房一間、北端爲經藏、檜皮葺寶藏二宇、僧房、檜皮葺五間室一間、九間室一間、大衆院、食堂、神殿等凡九間」とあり、以て其の盛衰を知るべきなり。爾後、歴代皇室の御臨幸厚く、降りて建武中興の業成るや、後醍醐天皇補正成を奉行して、金堂を再建せしめ給ふ。延元元年五月、補正成兵庫に戦死し、其首級を當寺に葬る。興國五年寺大あり。正平十四年十月、畠山清國東の兵を率ゐて當國天野行宮を祀さんとし、同十二月、足利義隆吉野に遁りしかば、後村上天皇當寺に行幸し塔中總持院を以て行宮とせらる。翌年正月、崇光の本堂愛染明王を當寺に賜ひ、金堂に安置し水代の勧願寺となし給ふ。四月、内陣常燈料は紀伊國の正税を以て充つべき給旨を下し給へり。同二十三年、後村上天皇住吉行宮に崩じ給ふや、當寺に葬り奉りて檜皮葺と云ふ。室町時代畠山氏當國の守護となり、大いに崇敬して屢次段錢以下臨時課役を免除す。永正三年、金堂の檜皮葺を瓦葺とせり。天正年間、織田信長親心寺七福の寺領を減じて一郷とす。豊臣秀吉二十五石を寄せ、慶長十八年、秀頼、片桐且元を奉行として金堂を修理す、現に棟本院、中院の二箇寺を有す。



(寶圖) (堂本寺心觀)

三派を混和し、建築史上觀心寺様の一派を開けるものなり。内陣正面に本尊木造如意輪觀音像を安置す。本堂下石段の右方に阿彌佛母天女あり、一間社春日造、屋根檜皮葺にして棟札銘に「天文十八年己酉九月云々」とあり。書院は桁行七間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺にして天正年間遺傳と推知され、桃山時代建築の特色を存す。他に經藏・行者堂・大師堂・二層塔(一に建掛塔と稱し、補正成建立を志し其工を全うせずして終ると云ふ)等を具備す。諸堂奉安の佛像中國寶に指定せられしもの次の如し。先づ本堂本尊木造如意輪觀音像一軀は弘法大師の作と傳へ、秘佛にして、弘仁期に於ける六臂如意輪像最古の遺作なり。願願豐盛にして然も神祕の相を湛へ、透彫寶冠の彩飾優る。就中藥座蓮花の繡網彩色に至りては天平時代寶相華を剪製たらしめ、我密教彫刻中の最大傑作となすべし。厨子入木造愛染明王坐像一軀は寺傳に後村上天皇御念持佛と稱し、鎌倉末期の精巧なる作なり。木造多聞天・持國天・廣目天・增長天各立像四軀の中、前二者と後二者とは別手の作なれども、其製作年代は相違せるものと認むべく、何れも藤原前期の作なり。木造聖觀音立像四軀の内二軀は弘法大師の作と稱せられ他の二軀亦藤原初期を降らす。次に寶藏安置の木造十一面觀音立像又弘法大師の作と傳へ、同地藏菩薩立像一軀・同聖觀音立像二軀何れも藤原初期に溯り得べし。厨子入木造聖觀音像一軀は元慶七年の本寺寶財帳にも記され、一木造、彩色の小像なれども藤原初期の特質を傳へたり。厨子は室町時代の作にして禪宗に於ける開山堂を模寫せる小建築の如し。木造如意輪觀音像一軀は、寺傳に本尊の試作品なりと稱せらるるも、藤原末期の作なり。金剛觀世音菩薩立像二軀・同如意輪觀音坐像一軀・同釋迦如來坐像一軀何れも天平より弘仁期に亘る古作にして、殆ど古拙の趣あるも、特に觀世音像は端麗なる容姿に於て、釋迦像は形構の自由なる點に於て優る。木造愛染明王坐像一軀・同不動明王坐像一軀は共に弘法大師の作と傳へらるる、古像なり。二層塔内奉安のものに木造藥師如來坐像一軀・同釋迦如來坐像一軀・同寶生如來坐像一軀・同彌勒菩薩坐像一軀あり。次に繪畫絹本着色大願求像一軀は構圖正置にし

て彩色美麗、藤原末期の傑作なり。工品には藍革扉赤威願卷一領(寺傳に楠木正成所用のものと稱す)、寶藏所在金剛蓮花三尊一對(附金剛花瓶一箇・觀燈籠一基(貞永二年中春真心遺立の銘あり)等あり。筆蹟にては元慶七年の紙本墨書觀心寺勸進寶財帳一卷等を存す。他に古文書頗る多く、其大部分は大本日本古文中に收載せらる。特に南北朝時代の資料に富み、楠氏、畠山氏等に關係あるもの多し。尙ほ寺内に開山寶懸願、補正成墓、鎮守社、七星塚等あり。當寺後山に後村上天皇檜皮葺心寺陵存す。

●大般若轉讀修行(一月一日より三日間)、星祭法要(二月部分)、楠公祭(五月二十五日)、千日會(八月九日)、牛總法會(八月二十五日)、大晦初夜會(十二月三十一日)。

●融通念佛宗。諸佛山圓念院と號す。寺傳に天平十三年、明開當地に毘沙門天像を祀りしに起原し、もと護法山多門院と稱す。後鳥羽天皇の朝、真忍留錫して阿彌陀寺と名付く。爾後屢次來住して化導を垂る。天徳年間、法明融通念佛宗を中興し、自ら感得の阿彌陀佛像を本寺に勸請す。元亨三年、堂宇を再興し、正中元年、寺號を現稱に改む。後ち故ありて感得像は他所に遷安せられしが、元和年間、眞清靈託により本寺に迎へ、領主高木水頭御藏を遺傳す。近世は同宗中山山の一に加へられ、末寺三十一箇寺を領す。

●古義眞言宗。●宜珠山と號し、仁和寺末に屬す。皇極天皇二年の創建と傳へ、往時は觀心寺、金剛寺と並び河内の三大佛刹と稱せらる。●本堂・護摩堂等あり。本尊十一面觀音は補正成の念持佛と傳へ、別に毘沙門天を安置せり。所藏の木造多聞天立像一軀及び同持國天立像一軀は、寫生頗る精到、筋肉の隆起天衣の飄揚に至るまで巧みに生趣を捉へ、其眼は木眼なれども殆んど玉眼と見紛ふ許りなり。藤原、鎌倉兩期の過渡的作品なるべし。木造大日如來坐像一軀は優麗なる藤原式彫刻の一例にして、二重光背周縁の唐草透彫は珍奇にして注意すべく、以上三軀共に國寶なり。寺寶に歴代の輪旨・院宣・武將の文書等を藏す。境内に寛保三年八月建設の碑あり、服部南

●淨土宗。●五手山と號す。眞宗大谷派の學匠先啓の著大谷道蹟錄卷四に本寺の沿革を述べて「高祖聖人(觀覺)神足弟子、眞阿彌西法師化益の遺跡也。當寺は往昔行基菩薩說法利生の古跡也。夫より以來五百餘歲、興廢數度に準べり云々」と記せり。同書に據るに建長の頃多田左衛門尉光雲なる者ありて河内を領知せしが、彼の聖跡の廢頽を歎き、其請によりて觀覺の下せる慶西房の弟子となり、光雲房信西と號し、遂に行基の古跡を興せり。慶西より六世法西寺務の時、國の太守安福宗正、法西の徳を慕ひ、淨財を授じて堂宇を重建す。文明八年の冬寺基を美州室原郷に移せしかば、後ち法西の實元年、細川三好の亂に際し、織田信長の爲に奠上し、寺亦近隣なれば共に灰燼に歸せり。其後百年、和泉寶泉寺の西日、山科圓信寺の阿彌に勧めて寛文十年、一字を遺傳せしむ。時に尾張の徳川光友什器を施入し、田圃二十町を寄せたり。阿彌は百萬遍知恩寺の流れを汲みしかば寺亦淨土宗となれり。

●黃檗宗。●大寶山と號す。舊くは神福山長安寺と稱し、僧空海の遺蹟なりと云ふ。寛文十二年、北條遠江守氏朝之を中興し、黃檗山第二世木庵(慧明)の上足道明(慧極)を開山に請じ、寺領七十二石を附す。水和年間、狭山池決潰せしため流水の難に遇ふ。延寶元年、現稱に改め現に同宗別格寺たり。●本尊として明人印宜觀道生作三千佛體を安置す。觀音堂に吳月感得の觀世音を安んず。



野中寺(中ノ太子) 南河内郡道生村大字野々上。

●古義眞言宗。
●青龍山道隆院と號し、俗に中ノ太子と稱す。金剛峯寺末寺たり。聖德太子の開創に係る傳ふ。延暦十八年、菅原眞通其先祖葛井、船、津三氏の墓地當寺の南邊にあり、熾夫蓋りに其家樹を伐採するを禁ぜられ心事を請ひしこ日本後紀に見ゆ。中世、荒廢せしを、寛文年間、僧覺英、慈忍、惠猛相次で本寺を再興して眞言律宗の道場となす。

●本堂・地藏堂・觀音堂等あり。奉安の金剛彌勒菩薩半跏像一尊は其圓形龕座の周に「丙寅年四月大舊八日癸卯開創觀音菩薩之等語中宮天皇天御身勢皇之時誓願之奉彌勒御像也友等人數一百十八是依六道四生人等此教可相之也」とある刻銘あるを以て著聞す。丙寅は天智天皇五年なりと稱せらる。地藏堂に安置せらる。木造地藏菩薩立像は鎌倉時代の遺作にして前記彌勒半跏像と共に國寶に指定せらる。東城小丘に楊枝の井戸ありて、行基楊枝を以て穿つと傳ふ。寺境近く仁賢天皇の墳生坂本陵あり。

道明寺 南河内郡道明寺村大字道明寺。

●古義眞言宗。
●もと土師寺と云ひ、現今仁和寺末に屬す。推古天皇の朝、土師八島連家を捨て、寺となし土師寺と稱す。是れ本寺の遺構なり。神護慶雲三年、若江郡稻葉、兼江二村及び當村を土師領と定めらる。聖武天皇の朝、土師古人に菅原の姓を賜り、以後菅原氏を稱す。後、菅原道眞の伯母覺壽尼本寺に出家して住持す。されば道眞或著へ左遷の時、ここに一宿して別辭をなし、影響を遺せり。昌泰元年、宇多上皇此地に巡幸あらせらる。天慶四年、傍に社殿を營み、其像を移祀す。時に道眞の一名道明に因み、現稱に改めたり。今の道明寺天滿宮(土師神社)、神社爲參照は是れなり。治安三年、藤原道長亦當寺に參詣す。中世寺産多く寺運隆盛なりしも高山氏の兵亂に之を失ふ。天正年間寺社再興され、寺領百石を附せらる。明治維新後、神社を分離して今に至る。因みに有名な道明寺橋は土師氏の祖乾飯根に遺構せしものと云ひ、今尚ほ境内の坊中に之を築して詣者に賜給す。

慈願寺 中河内郡八尾町八尾。

●眞宗大谷派。
●福井山と號し、觀覺の門第二十四衆の第十三たる信願房法心の開基たり。寺傳に據るに信願房初め下野國那須郡栗野庵時に一字を創せしが、弘安三年、觀覺の遺命に依り、河内國道明郡福島久寶寺に一字を建立し慈願寺と稱す。第九世法悟、蓮如に奉仕し、自壽自贊の影像を受く。後、片岡俊榮なるもの南北二町東西三町の寺地を寄せし、久寶寺村に於て異議を生ぜしかば、豊臣秀頼の時片岡且元奉行して若江郡八尾の中にて田島方四町を附し、慶長三年、此地に移轉せしむ。

惠光寺 中河内郡八尾町寶振。

●眞宗本願寺派。
●もと豐振御坊と稱す。明應五年、本願寺蓮如の第三子蓮淳の創立にして、明治四十四年三月、別格寺に昇り、以て今日に及ぶ。
●境域六百七十坪、本願寺二十世所知消息・觀覺繪傳四幅等を藏す。

常光寺(八尾地藏) 中河内郡八尾町西郷。

●臨濟宗南嶽寺派。
●初日山と號し、八尾地藏の名を以て著る。寺傳に天平十七年、行基之を開創し、新堂寺と號すと云ふ。後、小野菟白ら地藏尊を刻して本寺に安置す。寛治二年、白河法皇熊野御幸の時、駕を駐めて舍利を寄進せらる。至徳二年、五郎大夫盛澄なる者個像を再興し、康應二年、足利義滿祈願所となし、初日山常光寺の扁額を寄す。慶長十九年、大坂役起るや藤堂氏此處に陣し、長曾我部盛親の軍と對し、敗北せし所にして、此時兵燹に罹りて堂宇多く廢壞せり。
●今境内に本堂・圓覺堂・舍利堂・觀音堂・阿彌陀堂・樓門・鐘樓・鐘守堂等あり。本堂延命地藏は小野菟作と稱せられ、世俗八尾地藏と呼び信仰厚し。境内に藤堂氏臣七十餘氏の墓、八尾別當願寺の墓等存す。

八尾別院(大信寺) 中河内郡八尾町。

●眞宗大谷派。
●大信寺と號す。慶長十二年三月、徳川家康若江郡八尾莊の内方四町を以て東本願寺教如に寄せ一寺を創し、大信寺と號す。家康即ち伏見桃山城の鼓樓を本院に移し、片桐且元をして役を督せしむ。爾來運枝をして住持せしめしが、常に本山にありしより、輪番を置きて寺務を管す。萬治三年、第二世實鏡の時寺基を現地に徙し舊地を幕府に返還す。幕府依て現地五段六歩を寄せ、元禄十年、更に該地餘地の教旨を下す。天明八年正月京師大火あり、本山焼燬するや本院の本堂を京都に移して本山の假本堂とせしが、寛政十一年十二月、再び還附せらる。
●境域三千二百六十二坪あり、堂宇に本堂・廣間・書院・鐘樓・鼓樓・庫裡・茶所等あり。本尊に傳聖德太子作阿彌陀如來にして、別に觀覺の畫像を置く。世に之を開運の御影と稱す。書院庭中に成思庵あり、山城國妙喜庵より移せしものと傳ふ。

勝軍寺(下ノ太子) 中河内郡龍華町太子堂。

●眞言宗。
●標樹山と號す。南河内郡龍長の觀福寺を上ノ太子と稱するに對し、本寺を亦下ノ太子或ひは單に太子堂と稱す。聖德太子の創建に係ると稱し、太子の御影(世に槓像と稱す)を安置す。傳へ言ふ物語守屋を遠川阿都の別業に攻撃し給ひしに、戦一時不利なりしかば、此地に在りし標樹の蔭に隠れて機かに危難を免れ給へり。乃ち戰捷後此地に伽藍を創し標樹山勝軍寺と號す。往古は寺城十六町を有し、聖武天皇臨幸あらせら

教興寺 中河内郡南高安村大字教興寺。

●眞言律宗。
●舊くは高安寺と號す。崇峻天皇元年、時覺の開創なり。往時寺田三十餘町を有し、伽藍亦壯麗なりしが、後、火災に罹り、寺觀衰頹す。近年覺彦、堂宇を復興す。現に高宗別格本山なり。
●本堂に聖德太子作彌勒菩薩を安置す。境内の泉池風致幽邃を以て聞ゆ。

神宮寺 中河内郡南高安村大字恩賀。

●古義眞言宗。
●高野末に屬す。もと三宅寺と稱し恩賀神社(神社爲參照)の供僧寺たり。其後の沿革不詳なり。
●觀音堂安置の木造十一面觀音立像一軀は藤原初期の作にして現に國寶たり。

光德寺 中河内郡聖上村大字雁多尾畑。

●眞宗大谷派。
●照福山雁林堂と號し、圓融法皇の勅願に依りて永延二年に建立さる。初め東廣山照耀峯寺と號し、延暦寺法圓を請して別當とし合密二教の靈區たり。天永年中、興福、延曆兩寺廢ありて興福寺衆徒の爲に火災に

往生院 中河内郡編手村大字六萬寺。

●淨土宗。
●岩綿山六萬寺と號す。天平十七年行基菩薩の開創に係り、聖武天皇勅願所の一と云ふ。開創の時封七十戸、一百畝を賜はり、宇多天皇の時修補を加へ、食地



三十餘町を附す。貞和五年、楠正行に據りて北軍を討ちしが大敗し、高師直寺を焼き寺領を没収す。天正の末浄土宗の僧淨泉之を再興し、以て現在に及ぶ。

顯聖寺(久寶寺)

中河内郡久寶寺村大字久寶寺。

一に久寶寺御堂の稱ありて富源の別格別院たり。文明二年冬、本願寺蓮如此地に修行せしが歸する者多く、同十一年、此地に一字を創して西蓮寺と云ひ、蓮如の第二十一子實願をして主たらしむ。實願歿して其子實願嗣ぐ。實願早世し、請に依りて大津南所別院に在りし蓮如の第十三子蓮淳來りて住持す。天文八年、其子實淳に譲りしも、實淳歿せしかば蓮淳復住持す。後ち蓮淳、顯淨、准誓、准教、寂淨、寂影、寂峰、法眞等相續せしが、寂峰は西本願寺第十七世を繼ぎ、同二十世廣如亦本寺より出づる等本願寺との關係殊に密接なりき。

顯得寺

北河内郡門真村大字門真。

一に同郡門真村光善寺、同四條壇村本泉寺と共に富源五箇寺の一なり。蓮如第十六子蓮情(兼縁)加賀國清澤

(石川郡龜來町)に一字を創製し清澤坊と號す。是れ本寺の靈廟なり。永正年中、蓮如第二十三子實情(兼縁)嗣ぎて住す。此時本願寺實如顯得寺の號を寄す。反古裏書に「又實情の弟實情は出生百日のうちに北國へ下り申され、本泉寺蓮情の養子たり(中略)右兵衛實情出誕ありしかば別に一字をばじめ、實情住持、清澤顯得寺と號す。實如上人御在世の時なり」と見ゆるは即ち本寺の事なり。天文十九年十一月、加州來勘氣免の時實情亦免されて本寺に寓し、弘治二年以來大坂殿に何候す。永祿年中、富國美田郡土居坊及び同郡世本坊(今本泉寺と號す)を創す。又古橋坊を創して舊稱を廢し、顯得寺と號し、之に住す。天正四年、院來に補せられ、後ち顯情(兼縁)、教情(兼明)、宣情(兼秀)、運情(兼瑞)、常情(兼晴)、一情(兼海)、眞情(兼性)、從情(兼越)、乘情(兼通)、達情(兼愛)等相繼承す。

來迎寺

北河内郡庭窪村大字佐太。

一に淨土宗。新山聖院と號し、もと大念佛佐太派の本寺たり。貞和三年八月、實尊(西願)同郡下之仁和寺の庄守口村に本寺を開創し大念佛宗の本所とす。後村上天皇御持佛の御遺像並に放光殿の號を賜ふ。開創以來屢次寺地を轉せしが、延寶六年、千四百坪の餘地を得て現地に移る。實永三年七月十六日、第三十二世慈海の時常衣の繪旨を賜はる。明治五年十一月、大念佛宗を改め淨土宗佐太派と稱せしが、同年十二月三日、知恩院の所轄となる。同二十二年二月、武藏小村村泉谷寺の檀林號を移し、派名を除き檀林に列す。

光明寺(八幡宮寺)

北河内郡庭窪村大字八幡宮。

一に古義眞言宗。仁和寺に屬す。由緒沿革不詳なり。奉安の木造十一面觀音立像一軀は國寶に指定せらる。もと善願像なりしを後世改造して十一面を附せしもの、弘仁期の作なり。

本殿寺

北河内郡友呂木村大字三井。

一に本門法華宗。本門法華院と稱す。舊くは最勝園と號し、聖德太子の開創なりと傳ふ。後大同元年、最澄此處に來りて弘法に努む。後醍醐天皇の御宇勅して諸堂を經營せしめ、五藏山觀音院本寺と號す。應永二十五年寺主圓澄、日隆の門に歸し、寺號を現稱に改む。本宗最初發願の靈刹として聞え、本興寺、本能寺等と共に富源に於ける一重鎮たり。

光善寺

北河内郡庭窪村大字出口。

一に眞宗大谷派。瀨田山と號し、同郡門真村顯得寺、同四條壇村本泉寺等と共に富源五箇寺の一なり。文明七年、本願寺第八世蓮如の創立に係る。同年八月、蓮如顯前吉時を出で、若丹の地より播河泉に入りて大いに進化する。時に河内國美田郡中振郡出口の住人石見入道空念房法住蓮如を請じて同地に開創せしむ。而して梓原の深淵を堰め、方四町の地を得て本寺を創す。蓮如かくて文明七

年八月より、同十年正月に至るまで四年の間在任せしが、其後も屢々本寺に來往す。當時蓮如の長子顯如(光助)病に由りて此地に退居す。依りて之を以て當寺第二世となす。第三世光輝は京都常樂寺蓮覺の第三子にして蓮如の外孫なり。其歿後、瑞泉寺蓮如の第三子實願(兼珍)入りて第四世を繼ぐ。天文三年、同縣の災に罹る。時宛も戰國亂世の際なりしかば、寺亦播磨國島下郡島岡、河内國美田郡大場等に移轉せり。慶長年間播津島下郡島岡を開創せしが、幾許もなくして出口の舊地に還る。第五世實玄(兼智)の時、寺號を光善寺と號し、永祿三年、院來に補せらる。第六世顯勝(佐珍)石山本願寺の職に功を樹つ、教如東本願寺創立の際、留りて西本願寺准如に従ふ。慶長年間、第七世蓮勝(兼雅)の時、惠光寺真超、顯興寺印盛と共に東本願寺に屬せしが、程なく再び本願寺派に歸參す。寛永十四年寺宇を再建す。第八世准玄(兼雅)の時、第九世真珍(兼珍)を経て第十世實玄(兼雅)の時、元祿九年正月、眞を立て東本願寺に屬す。同十四年七月、別に京都東洞院に光善寺を創し、後ち島丸に移す。第十一世を一玄(兼顯)と云ひ、以下眞玄、從玄、乘玄等相繼ぎ今日に至る。

獅子窟寺

北河内郡船橋村大字私市。

一に古義眞言宗。境内地二千百坪。本堂・庫裡・客室・鐘樓・鼓樓等を具ふ。庫裡の林泉は石川丈山の設計に成り、池を穿ち、島を築き、竹樹、蓮池瀟灑として雅趣深し。寺の南方二町に蓮如懸掛石あり。尙に附近懸掛山には踐踏天滿宮あり、香里園は島山氏の舊址にして俗に御所山と稱し、現に遊園地たり。

一に眞言律宗。普賢山と號し、大覺寺末なり。役小角の靈蹟にして後ち聖武天皇の勅命に依り行基之を創立す。天長年中、空海當山に登りて、佛眼佛母の法を修す。後ち寺號顯得せしが龜山天皇御病の時、臨幸ありて寺前に祈らしめ給ひて靈驗あり。勅して堂宇を修理せしめらる。後ち遺蹟に依り天皇を此處に奉養す。後ち再び荒廢せしを、寛永八年、光影之を再興せり。今の堂宇は寛永年中、大坂の豪商無極なる者の建つる所なり。寺は普見山の上に在りて、遠くは大坂、尼ヶ崎を望み、近くは淀川を瞰下し風景極めて佳なり。本堂本尊木造藥師如來坐像一軀は國寶に指定せらる。體軀豐滿秀美なる織波式の衣紋を繞らし、刀法纖柔にして然も寫實味あり、藤原時代初期の趣致を存す。本堂の背後に岩窟あり。中に巨石相藉りて其狀宛ら獅子の吼ゆるが如し、寺號の依り起る所以なり。寫前に燈籠堂あり。山中に觀音巖、德雲石、大黒石、笈掛石、鏡石、龍石等の奇石時顯たり。寺地の北一里餘に龜山院あり。

久條園院(釋迦堂)

北河内郡釋葉村大字釋葉。

一に眞言律宗。俗に釋迦堂の名を以て著る。元正天皇靈龜二年、行基開創に係り、聖武天皇勅して院領を賜はりしと云ふ。現に富源別格本山たり。寺實に釋迦立像・宗覺作愛樂明王・傳行基作不動明王等あり。

慈眼寺(野崎觀音)

北河内郡四條村大字野崎。

一に眞言律宗。福聚山と號す。俗に野崎觀音の名を以て著聞す。

本泉寺

北河内郡四條壇村大字瀨田。

一に眞言大谷派。同郡門真村顯得寺、同庭窪村光善寺と共に富源五箇寺の一にして、加賀國河北郡淺井村本泉寺(其項參照)と同系なり。同寺第三世蓮情、寺を加賀若松に創し、弟實情を養うて嗣ぐ。然るに實教生誕せしより實情は出で、同國清澤坊(顯得寺參照)に移る。天文年中、北國兵亂のため、實教母と共に難を避けて能登府中に住す。文祿三年、實情の孫教慈播津天滿に本寺を復興す。其後、更に現地に移り、以て現在に及ぶ。



### 兵庫縣

#### 切利天上寺(摩耶山) 神戸市灘區摩耶山。

●古義眞言宗。  
 ●佛母摩耶山と號し、高野末たり。大化二年、法道仙人の開創に係り、仙人の徒弟印海伽藍を營み、僧坊三百を建て、大いに寺門の興隆を計ると云ふ。天平勝寶五年五月、雷火ありて伽藍僧房悉く灰燼に歸せし。天平勝寶二年、眞眞の徒智純來りて恢復に力む。延暦二十一年二月、再び大災に罹り堂宇燬盡す。空海唐より歸朝の際、佛母摩耶夫人像を本朝に傳へ、本寺に納めたりと云ふ。元弘年中、赤松圓心山中の摩耶城に籠りて六波羅軍を潰滅せしむ。慶長元年七月十二日、大震あり、爲めに講堂燬盡せしが、伊勢の人矢田半右衛門尉、近江の人増田右衛門尉等之を再興せり。然るに同三年九月二十七日、又颶風ありて寶塔、鐘樓等一時に墜壞す。次で、高野山五院の僧徒來りて本堂を再建す。豊臣氏本寺を崇敬し公田數畝を割き、朱印十石並に山林七十町歩を給して本尊供養の資に充つ。徳川氏亦之に従ふ。明治初年本堂燬融の災に遭ひしが、王藏院智隆其再建に努め、同三年竣工す。近年、神戸市の發展と共に寺運隆昌に向ふ。現に大乗院、王藏院、蓮華院の三支院を有す。  
 ●寺境、摩耶山頂の景勝地を占め、紀、淡、攝、河、泉、播磨諸州の山野雙峰に寛まる。山頭に仁王門あり、それより石階三百九十八級を登りて觀音堂・祖師堂・摩耶夫人堂・多寶塔・鐘樓堂・寶藏・繪馬堂・觀守堂等あり、觀音堂を登りて三町、裏山の山嶺に奥ノ院あり。

り。八十八箇所靈場を置く。寺寶として法道仙人鐵鉢・同錫杖・持寶門院筆紙金泥法華經八卷・赤松圓心陣太鼓・所持太刀一口等を藏す。附近に赤松圓心の摩耶山城址あり。  
 ●修正會(一月十七日)、初午會(二月)、釋尊降誕會(五月八日)、九日會(八月)、骨堂施餼鬼會(十月十七日)、緣日(毎月十七日)。

#### 歡喜寺

●曹洞宗。  
 ●草創年代並に沿革不詳なり。  
 ●奉安の木造十一面觀音立像一軀は國寶たり。鎌倉初期の作なれども優麗よく藤原期の遺調を存す。

#### 長樂寺(南京寺)

●黃髮宗。  
 ●慈眼山と號し、俗に南京寺と呼ぶ。初め、河内國澁川郡布施村にあり、推古天皇の勸願所と傳へ、法相宗に屬せり。中世長く廢刹たりしが、文化五年、觀心之を再興して現宗に改め、明治二十五年、現寺地に移す。近來、義昌入住してより、寺門大いに興る。檀信徒は主に神戸、大阪在住の中華人なり。  
 ●境内三百餘坪、本堂・庫裡・支關・寺門等の堂宇を具ふ。本尊十一面觀音は聖德太子の作と傳ふ。別に關帝天后聖母を祀る。建築宋風に擬せしを以て、異人南京寺と呼ぶ。

#### 徳照寺

●眞宗本願寺派。  
 ●本堂・毘沙門堂・講堂・聖天堂・阿彌陀堂・靈符堂・奥ノ院(四國八十八箇所の靈符を安置す)・大師堂・鐘樓・仁王門等具はる。本尊木造菩薩立像(傳如意輪觀音像)一軀は寺傳に行基一刀三禮の作、和氣清盛感

●草創年代並に沿革不詳。  
 ●寺寶中、劍鏢一口は長寛二年七月改鑄の銘を有し、現に國寶たり。

#### 善福寺

●眞宗本願寺派。  
 ●慶長八年、教結の開創に係る。教結は武田信成の四男にして、俗姓上野介信久と稱せしが、本願寺願如の弟子となり教結と改め、一寺を創して善福寺と稱す。



(堂本寺福善)

●云ふ。明治四十一年十月、本派本願寺別格別院となる。大正六年、大災に罹り本堂、庫裡、大鼓堂等全焼す。同十年、庫裡及び書院を新築、昭和三年一月二十二日、本堂再建の工を起し、同五年十一月二十四日、開堂慶讃法要を修す。  
 ●境内六百七十五坪、本堂は石造鐵筋混凝土三層閣にして、高さ七十五尺、中央塔風の尖塔は九十八尺あり、地階は日曜學校教場に充てられ、第一階は希臘古代神殿の様式を模し、事務室・小講堂・圖書室・客間等具はる。第二階は匈牙利寺院の様式に倣ひ、千人を收容する大講堂なり。第三階及び塔屋は機軸及び音樂

#### 大龍寺

●眞言宗東寺派。  
 ●再度山と號し、古く摩尼山と云へり。神護景雲二年、和氣清盛、稱徳天皇の勸をうけて建立せしに創まる。後延暦二十三年、空海渡唐に先ず、當山に參籠所願成就を祈念し、大同年間歸朝するや、入洛の途、再び登山參籠せしより再度山と稱すと傳ふ。鎌倉時代の末葉、同縁の災に罹り殿堂擧げて灰燼に歸せし。觀應二年、攝津河守赤松範之當寺に歸依し、新たに七堂伽藍を建立し、山林田畑數十町歩を寄す。而して又善妙を迎へて山主とす。其後、戦亂の爲め寺觀廢頽せしが、寛文年間、南都招提寺寶祐、其實賢正復興に意を用ひ、稍々景観を改む。時に寶祐四國八十八箇所の靈像を安置す。延寶七年、高泉當山に詣り、大龍寺之記を作る。明治維新に際し、無稽無縁の故を以て廢せられんせしが、住持徳順諸堂を改修し、且つ靈跡たる所以を奏し、其厄を免る。

●寺境再度山上にありて、境域二千三百餘坪。前面蒼海を控へ、後方に重巒を負ふ絶好の勝地なり。堂宇



(堂本寺龍大)

得の靈像なりと稱し、高さ齋産共に五尺九寸七分、木彫成にして、然も天平時代の作風を示す。現に國寶たり。寺寶に傳聖德太子御所持錫杖・空海筆蹟一軸等を藏す。尙ほ附近に蛇谷、圓伽井、大師御杖塚等の遺

#### 廣嚴寺(楠寺)

●臨濟宗南禪寺派。  
 ●寶王山と號し、俗に楠寺と稱す。寺傳に、元德二年、請に依りて我國に來れる元僧明極覺後を開山とす。從來、明極行狀に據り、澁川合戦の前日、楠正成此寺に來り明極と問答して生死の關門を透徹せしが、戰利あらすして此寺に退き、建武三年五月二十五日、一族十三人郎黨六十餘人と共に客殿に入りて對面すと傳ふるも、參考太平記及び大日本史既に天正本太平記を引きて其妄を辯じ、正成對明極の法問答を疑へり。一に又本寺は明極門人の開創にして、澁川合戦後三年、初めて赤松氏の建立せるものとすものあり。果して如何にや、記して後考を俟つ。

#### 祥福寺

●臨濟宗妙心寺派。  
 ●天門山と號し、當派別格地なり。貞享二年の創建にして、默傳を開山とす。爾來法燈連續、市内の一名刹たり。現に參禪の徒毎日數十人に及ぶと云ふ。  
 ●寺境高丘に倚り、展望開豁なり。境内八百五十坪、本堂・庫裡・支關・禪堂・衆寮・經藏・寶庫・鐘樓・寺門等完備す。境内糸織一株あり、附近の地蔵院の櫻



薬仙寺

●時宗。●醫王山と號す。寺傳に、天平年中、行基の開創にして、聖武天皇御醫平癒の爲め禮文會、積首勤に命じ本尊を彫刻せしめらる云ふ。建武年中、後醍醐天皇隠岐より還幸の御、御不豫あり。本寺觀音堂の靈泉を以て湯藥に調進す。依りて藥仙寺の號を賜ふ。延文中、時宗八世國阿來歸し、爾來時宗と名たり。●寺寶中、絹本着色施餼鬼圖一幅は國寶にして、現に奈良帝室博物館に出陳せらる。

順成寺

●淨土宗。●上野山と號し、天平年中、行基の開創に係る。住時鳥原の地に在り。後法然の徒弟住蓮房之を中興す。住蓮、俗姓を伊賀四郎左衛門信國と稱し、對馬守源賴親の苗裔、白河院北面の士にして兵衛尉に任じ、初め平家の侍なりしが、後法然の門弟となり、次で、本寺を興隆す。壽永年中、福原遷都の際、富山は福原五山の第二に置かれ、平家滅亡後、住蓮、平三位通盛夫妻の菩提を弔ひ、今に住蓮の墓を存す云ふ。近世現寺地に移り、以て現在に及ぶ。●墓域に通盛墓、其室小室相塔、乳母免服塔等あり。

久遠寺

●淨土宗。●寺域二千坪餘を有し、堂宇に本堂・客殿・地藏堂・庫裡等あり。所藏の木造十一面觀音立像は國寶に指定せらる。寺寶頗る多く、惠心筆山越龍陀及び般若十六善神圖・後醍醐天皇宸筆勅額・妙法院宮務知法親王、尊圓法親王各筆蹟・忠快筆成菩提集・平清盛血書菩薩戒經・阿自書像・平家一門寄進狀・片桐且元寄進狀・天海書蹟等其主要なるものなり。尙ほ境内に忠快法印九重石塔・貞婦横山家子碑・大佛等存す。大佛は毘盧舍那佛にして胎内に阿彌陀如來を安置す。佛身二丈八尺、臺石高一丈、東西三丈八尺、南北四丈、青銅を以て鑄造し本邦稀有の巨像なり。明治二十二年十月起工、同二十四年三月竣工す。世稱して兵庫大佛と云へり。

福海寺

●臨濟宗南禪寺派。●大光山と號す。往昔此地に觀音堂ありしが、建武三年、足利尊氏西國没落の時、急迫の手を逃れ、觀音堂下に匿れて一命を全うす。依りて其觀音の爲め興國五年、伽藍を建立し、寺額若干を附して福海興國禪寺の匾額を寄せ、僧圓有を開山に請ふ云ふ。足利義滿亦山寺號を書して納む。爾來、同氏歴代の崇敬厚き名刹たり。●境内七百坪、觀音堂は即ち尊氏潜居の跡たり、寺寶に傳空海作十一面觀音像、運慶作釋迦如來像・足利尊氏木像・同筆匾額・足利義滿筆額・牧溪筆釋迦如來畫像・古文書數通等を藏す。

能福寺

●天台宗。●具さには寶積山龍福國密寺と號し、俗に福原寺又は岡の藥師と稱す。京都青蓮院末なり。延暦年中、最澄より歸朝の御、留錫して本寺を草創し、自ら藥師佛を刻みて安置すと云ふ。後三世惠快之を中興す。惠快は平清盛の甥と稱す。仁安三年二月十一日、清盛當山に於て入道し、養和元年二月四日薨すや、即ち本寺に葬る。壽永二年七月、清盛の廟前に遺善法會を修し、一族連名を以て近江國佐々木庄の内に於て千僧供料を寄進す。當時堂塔輪奐の美を極めし、其後兵燹に罹りて衰頹せり。もと眞光寺附近の地にありしが、慶長四年、長盛實積ヶ岡の現地に移して復興す。同十五年九月、片桐且元より如八筆調役の事あり。寛永六年四月、青山寺僧、清盛供料として高五十石を寄す。近

福嚴寺

●靈鷲山と號し、俗に濱の寺と云ふ。開創年代不詳なり。もと眞言の古刹なりしが、正平二年、僧大覺の教化に歸して現宗に改め、大覺を以て開山とす。中比貞頼せしが、享徳二年、之を再興す。住時伽藍宏壯にして、當地風指の巨刹たりしが、明治二十三年、回祿に罹る。後再建成りしも、舊觀に及ばず。因みに濱の寺の俗稱は兵庫築港以前、當地の濱邊なりしに因る之云ふ。現に當宗中本寺たり。●境内一千餘坪、堂宇に本堂(八間四面)・庫裡を初め數棟を具備す。本尊は中央扉目、左釋迦如來、右多寶如來を安置す。

福濟宗南禪寺派

●具さには巨龍山福嚴大聖禪寺と號す。南北朝の初、當地の長者木下源太なる者の本願に依りて創建せられ僧徒石積せられて開山となる。元弘三年五月晦日、後醍醐天皇隱岐より還御の御、本寺を以て行在所に充て給ふ。此日赤松圓心父子參向し、次で新田義貞の使者來りて北條氏數誠の由を奏す。六月二日、瑞興を回らさるゝに際し、楠正成亦七千餘騎を具して參若し、嚴靈堂・京師に還幸ありと云ふ。天正年中、兵燹に罹りしが、幾許もなくして復興せらる。●寺域千七百坪を有し、堂宇に本堂・庫裡・地藏堂・客殿・山門・鐘樓等あり。本堂天井に張付けし蟠龍の圖は法橋周貴貴信の筆なりと云ふ。境内に一株の大老松あり。普賢護國松と稱し、後醍醐天皇御命名に係る之傳へたり。

來迎寺

●淨土宗。●經島山不斷院と號し、世に經島寺と云ふ。平清盛の草創に係ると稱せらる。傳に曰く、初め承安三年、清盛當所に經島を計畫せしが、海濱に墮崩せられて成らず。即ち無數の石面に經文を書して海中に投じ、且つ往來の人を提へて人柱に供せんせり。時に清盛の恩從松王之を憐み、自ら之に代らん事を龍神に請ひ、入水して歿す。因りて築かれし島を經島と號せり。後年松王供養の爲に一寺を創す。當寺はなりと。蓋し松王人柱の事は長門本平家物語にも見えず、印本平家物語には「人柱立らるべきなんぞ蓋しありしが、それは中々加業なるべしと云々」とありて俄かに信すべからず、法古は七堂伽藍完備せしが、建武年中、兵亂に遭ひて破却せられ、爾後漸く衰微す。後慶安五年、僧觀空堂宇を復興して淨土宗に屬せしめ、以て現在に

福嚴寺

●曹洞宗。●延喜山と號す。天保八年、僧覺願此地に來り、關西の慶願なる開港地に禪刹に禪刹なきを遺憾とし、一寺を創建せんと欲せしが、先づ八王子社

福嚴寺

●曹洞宗。●延喜山と號す。天保八年、僧覺願此地に來り、關西の慶願なる開港地に禪刹に禪刹なきを遺憾とし、一寺を創建せんと欲せしが、先づ八王子社



(門山寺昌圖)

眞光寺

●時宗。●西月山と號し、法道仙人の開創に係ると云ふ。正應二年八月、時宗の開祖一蓮錫を本寺に留めしが、其寂近きを知りて一日門弟を集め自著の書冊を火中に投じて曰く、「一代の聖教皆盡きて南無阿彌陀佛になりはてわしと。同月二十三日、遂に本寺に於て寂す。時宗二世他阿法燈を繼ぎ寺宇を營み塔廟を起し、稱して眞光寺大道場と云ふ。天皇爲に勅額を賜へり。次で赤松圓心大檀越となり、境内八町寺領數百石を附す。慶安二年八月、龜山天皇皇孫恒明親王の王子尊親法親王、僧渡船に就きて剃度し、入りて本寺第六世となり給ふ。次で嘉慶元年二月、一宗の法燈を承けて遊行上人とならせらる。爾來、本寺遊行上人の輩多くなり、院代を置きて法務を管す。元祿八年五月、第四十四世遊行尊通留錫中、當山に遷化し、此處に葬らる。●寺域六千餘坪を有し、本堂・客殿・方丈・觀音堂・開山堂・地藏堂・庫裡・書院・鐘樓・山門等あり。門前に時宗宗祖一蓮上人示寂之地大道場眞光寺の大標

眞光寺

●時宗。●西月山と號し、法道仙人の開創に係ると云ふ。正應二年八月、時宗の開祖一蓮錫を本寺に留めしが、其寂近きを知りて一日門弟を集め自著の書冊を火中に投じて曰く、「一代の聖教皆盡きて南無阿彌陀佛になりはてわしと。同月二十三日、遂に本寺に於て寂す。時宗二世他阿法燈を繼ぎ寺宇を營み塔廟を起し、稱して眞光寺大道場と云ふ。天皇爲に勅額を賜へり。次で赤松圓心大檀越となり、境内八町寺領數百石を附す。慶安二年八月、龜山天皇皇孫恒明親王の王子尊親法親王、僧渡船に就きて剃度し、入りて本寺第六世となり給ふ。次で嘉慶元年二月、一宗の法燈を承けて遊行上人とならせらる。爾來、本寺遊行上人の輩多くなり、院代を置きて法務を管す。元祿八年五月、第四十四世遊行尊通留錫中、當山に遷化し、此處に葬らる。●寺域六千餘坪を有し、本堂・客殿・方丈・觀音堂・開山堂・地藏堂・庫裡・書院・鐘樓・山門等あり。門前に時宗宗祖一蓮上人示寂之地大道場眞光寺の大標



石を建つ。又蓮池に金剛の釋迦像を安置す。寺寶中、紙本着色遊行緣起十巻は一蓮上人繪傳の別本にて、弟子平宗俊の編纂せる所、調書の筆者は三井寺行願、元亨三年七月に書せるもの、現に國寶たり。他に傳運慶作彌陀三尊像・後宇多天皇宮輪・後醍醐、伏見、東山各天皇勅額・土佐光信筆藤原定家寶持本人慶像等數十點を藏す。境内に西國三十三所靈場に擬して三十三觀音石像を置く。尚ほ宗祖一蓮上人本廟あり。

福祥寺(須磨寺) 神戸市須磨區西須磨。

古義眞言宗。上野山と號し、俗に須磨寺と稱す。高野末たり。寺傳に據るに、天長年間、漁夫和田野の海底より檀木の聖觀音像を得、之を小宇に安置せしが、靈應の顯著なること遂に朝に聞え、仁和二年、光孝天皇、聞説に勅し本寺を創建して安置せしめ給ふと云ふ。久壽年中、源賴政諸室を再興す。慶長七年、震災に罹りしが、豐臣秀頼堂宇を重興す。壽時は七堂、十二坊を有せしが、明治維新後甚しく頽廢し、近時漸く復興せらる。寺寶中、木造十一面觀音立像一軀は室町期の作、絹本着色普賢十羅刹女像一軀は圓様に異色を存し、和様の羅刹を描けるは注目すべく、二者共に國寶に指定せらる。其他、平教盛の青葉笛・辨慶(錯に攝津矢田郡丹生山田原野村安養寺あり)・辨慶若木櫻制札・法然筆平家赤紙名號・教盛畫像・同筆和歌二首等存す。境内に義經櫻掛松、首洗池、相生松あり、附近に釣竿竹、教盛首塚、若木の櫻等の名蹟存す。首塚より本堂背後の山を一周して八十八箇所巡りを行ふ。尚ほ境内及び附近一帯遊園地なり。

福昌寺(紅葉寺) 神戸市須磨區福昌寺町二丁目。

臨濟宗南禪寺派。神護山或は寶島山と號し、俗に紅葉寺の名を以て著る。正平年間、月庵宗光の開創に係る。古來朝暮の歸依厚く、室町時代地領三十六石を賜ふ。天正八年、豐臣秀吉、別所氏を三木城に攻むるや、兵變に罹りて焼失す。後秀吉伏見桃山城内建業の一部を附與して現地に復興せしむと云ふ。徳川家光の時、境内十四町歩の未印を附せらる。もと山内寺院敷坊を有せしが、明治十二年、興上す。大正四年、大阪藤田家の寄附により堂宇を再建す。現に當派別格地たり。境内一萬五千坪、楓樹に富む。紅葉寺の稱ある所以なり。本堂・開山堂・山門・庫裡・豐國亭・法雲庵・鐘樓等具備す。山門は左甚五郎作と稱し、其開閉時に美音を發す。本尊十一面觀音像は安阿彌作と傳へ、寺寶に狩野永徳筆屏風・雪舟の羅漢圖等を藏す。境内に戸澤右京亮政盛の墓あり。開山忌(四月二十三日)。

曹洞宗 福洞寺 姫路市吉田町。

具さに古蹟瑞松山無量壽禪寺と云ふ。明徳四年、通幻寂靈開創に係る。もと攝津國六瀬に在りしが、天正年中、十一世宗亮の代、兵亂を避けて當地坂田町に移る。後姫路城主池田輝政本寺を崇敬し、之を中興せしむ。寛延二年、二十六世默宗の時、松平大和守の歸依を受け現地に轉す。現に末寺四十七箇寺を有す。境内一萬五百坪、本堂・樓門・專門僧堂等を具備し、寺寶に宮本武藏筆寒山拾得圖・狩野等墨筆屏風。

赤松氏寄進大般若寫經等を藏す。

姫路別院(本徳寺、附、清ヶ岡支院) 姫路市地内町。

眞宗大谷派。本徳寺と號す。本願寺八世蓮如、中國未だ法雨に霑はざるを慨き、空齋を遣して教化せしめしが、明應年中、當國英賢に一寺を創して、弘教の道場となす。是れ本寺の濼源なり。天正十年、四世蓮如の室願妙尼の時、豐臣秀吉を附近龜山に移せしめ、寺領三百石を寄す。慶長七年、本願寺教如復職して東本願寺を建つるや、本寺亦教如に屬せしむ。同十四年、第五世教圓並に姫路城主池田輝政、本山と隙を生じて本派本願寺に歸參す。同十八年正月、輝政卒し、元和三年、本多忠政代りて姫路城主となるや、教如と親交ありしを以て、翌四年、池田氏の組屋敷地を寄せ現地に再興せしむ(備前町龜山本徳寺項參照)。慶安三年、松平忠次地内町を寄附し、寛文三年、本山船場御坊の稱號を下附す。同八年、龜山本徳寺第六世昭澄の室眞照院眞春尼故ありて末寺三十六箇寺を率ふる當派に歸し、本寺に入る。明治十八年、明治天皇の行在所に充てらる。昭和七年十月、火を失し庫裡、書院、廣間等焼亡す。寺域六千六百二十四坪餘を有し、堂宇に本堂・山門・鐘樓・鼓樓あり。又境内に龜居松と稱する老松ありて其名聞ゆ。尚ほ本院支院として備前郡荒川村字井ノ口に清ヶ岡支院あり、寶永七年、第八世海澄本堂再建の圖、寺域狹隘の爲め當寺本山歴代分骨所を之に移し以て支院となす。境内地二千四百坪、本堂・庫裡・客殿等を具備す。

正明寺 姫路市五軒區。

天台宗。姫路山と號す。康治二年、正覺房道遠の開創に係る。初め姫路山上に在りて姫路山稱名寺と稱す。後一乗院下向の途、留攝して化導せしより、一乗寺と改稱す。建治二年、後醍醐法皇の御願寺となる。建武元年四月三日、新田義貞宣を下し、寺領若干を寄せ且つ武士の亂入嚴禁を停止す。貞和二年、赤松貞範當山上に築城するに方り、當寺を山下青見川邊に移建す。天正年中、更に池田輝政現寺地に移し、現稱に改む。慶長五年十二月二十日、輝政寺領として平野村内二十石を附す。寺寶として輝政使用の衝立・開山道遠木像・古文書數通等を藏す。境内に眞經築城當時遺立の供養塔あり。

長遠寺 尼ヶ崎市寺町。

日蓮宗。大龜山と號す。觀應元年、永存院日恩の開基に係る。初め同地新町に在りて寺城廣瀨、講堂宇完備し、子院十六坊を數へたりと云ふ。天正十五年十一月、後關成天皇より六世日蓮に法印を賜はり、同十六年三月、本寺を勧願道場となすの論旨を賜ふ。元和三年、戸田左門寺基を現寺地に徙して大いに堂宇を修興す。寺域二千坪を有し、堂宇に本堂・祖師堂・書院・方丈・庫裡・鐘樓・中門・表門等あり。

本興寺 尼ヶ崎市開明町。

本門法華宗。

精進院と號し、本宗五大本山の一たり。應永二十七年三月、當國領主細川右京大夫滿元通々此地に布教せる京都本應寺と(本能寺)日隆に歸し、封内なる八幡神社苑方八町を寄せ、七堂伽藍を建て、日隆を開山に請す。當時寺中、十六を推し寺門頗る賑ふ。日隆は京都妙顯寺日隆の門に出て、法華經中本門八品の優勝を唱へて別立す。所謂八品道場として名を馳せしを所謂尼崎派の學系を傳へたり。長祿年間、第四世日興參内して法華經を講じ權大僧都に補せられ、應仁二年、紫衣着用の勅許を蒙る。第七世日誦亦紫衣着用の宣旨を蒙る等學僧輩出せり。第八世日承は伏見宮六世眞親親王の連たりしを以て、同宮家の嫡子となり、爾後、本寺に住職する者は同宮家に參殿して、嫡子となるの例規



(實圖) (本山開山堂)

となる。かくて崇徳の信望と共に武將の尊崇する者多く、教書、制札を受くること數十度に及べり。初め大物浦にありしが、元和六年に至り、幕府現地に替地を命ず。文政五年、東隣なる全昌寺より出火し、當寺堂宇の多數尙有に歸す。文化年間、再建成り、以て今日に及ぶ。現に塔頭六院を有す。寺域二千八百餘坪を有し、佛殿・祖堂・開山堂・多寶塔・三光堂等具備る。就中、開山堂・三光堂は文政の火災を免れ、現に國寶建造物たり。開山堂は文正元年、四世日興の建立にして、元和六年、現地に移建されしもの、室町桃山兩朝の特徴を具へたり。桁行九間、梁間三間、單層、屋根檜木造、木瓦葺にして、開山堂建築として其制頗る奇抜、且つ變化多し。即ち屋根前流に軒唐破風と其下に板庇を設け、後流には切妻屋根を後方に突出し、内外陣の腰四間に廻縁を施す。内部の構造亦奇巧にして、斗拱、虹梁唐檼の手法に出づ。堂内悉く極彩色又は金箔押しにして其華麗美なる、京都高麗寺開山堂に及ばずと雖も、尙ほ當代佛寺内裝飾の冠とすべく、其外觀形態の異彩なると共に、桃山期佛堂建築中、珍重すべき遺構とす。堂内の木造日隆上人坐像一軀は玉眼入彩色、法服合掌像にして舊記に享徳三年堺の佛工淨傳の作なりと云ふ。現に國寶なり。三光堂は三間社流造、木瓦葺にして、慶長二年の再修と傳ふ。正面中央の軒唐破風は頗る雄大にして桃山期特有の風尙を表せり。繪棟、彫刻等の裝飾斬新善美を盡し、本殿内部天井鏡天井には雲を描き、三方壁に金泥を以て風凰を描く等よく當代華麗麗澤なる特色を發揮す。堂内に三光天子・鬼子母神・法華經守護神の三靈を祀る。寺寶中、太刀(銘恒次、數珠丸)一口は國寶に指定せらる。



月照寺(人麿寺) 明石市人丸町。

●曹洞宗。

●人麿山と號し、人麿寺の名を以て著る。弘仁二年、空海此地巡錫の嗣、一字を赤松山(今の明石城址本丸の地)に建立し、湖南山揚柳寺と號す。爾來天台、眞言の兩僧交々在住せしが、仁和三年、住僧覺證一夜靈夢を感じ、もも、大和國上郡初瀬村本寺に安置せし海上。



(堂本寺照月)

●波切船 乘十一 而觀世 音菩薩 の尊像 を勸請 し、新 人に棟本 人麿の 廟堂を 今の明 石城本 丸敷地の小丘に遺營して當山の鎮守となし、寺號を月照寺と改む。後天正三年、當國三木城下なる靈隱寺僧安室來住し、禪宗に改めたり。同六年、豐臣秀吉中國征討の嗣、當國三木城を攻むるや、當寺に軍利祈禱を請ひ、同國渡津に及び、同九年、三十石の領地を寄進山林竹木の諸役を免す。元和二年、小笠原忠政當地を領し居城を赤松山に移すや、本寺亦現地に移り、鎮城の爲め元の寺廟敷地の外領地大半を失ひしかば、其の替地として當郡長坂寺村に於て三十石の領地を寄附せらる。正保二年五月、四世兼山諸殿堂を改築す。享保

十八年、七世別仙再び諸堂の大改築をなし、同十九年、庫裡及び玄關を修築せり。其後八十八年を経て、文政四年、十四世掌櫃の時、諸堂大修理をなす。もと棟本社の祭祀等本寺に於て之を行ひしが、明治初年、神佛分離と共に之を廢す。明治十五年、山門を遺營せり。●境内千三百十二坪。本堂・庫裡・山門・鐘樓等を具備す。寺寶中、明治三十四年國寶に指定せられたる紙本墨書櫻町天皇宸筆及び一座短冊(五十葉)一帖は延享元年櫻町天皇御下賜のものなりと云ふ。他に正親町天皇宸筆・平忠度木像・松尾芭蕉短冊等を藏す。尙ほ境内に赤穂義士の手植と傳ふる八房梅あり。

昌林寺(賴光寺) 武庫郡今津町今津。

●淨土宗。

●松原山と號し、俗に賴光寺と云ふ。僧惠心の開創なりと稱す。其後の沿革不詳なり。

●寺寶中、木造阿彌陀如來坐像一軀、同善導大師坐像一軀は國寶なり。其中、阿彌陀如來像は寺傳に安阿彌の作と稱するも、室町時代の作と推せらる。境内に源賴光の墓並びに美丈丸、幸壽丸の塚及び其首洗池(明風池)と稱するものあり。

無動寺(普求寺、福寺) 武庫郡山田村大字福地。

●古義眞言宗。

●一に普求寺又は福寺と稱し、高野末たり。草創年次並に沿革共に不詳。

●寺寶中、木造大日如來坐像一軀(藤原末期作)・同釋迦如來坐像一軀(藤原末期作)・同阿彌陀如來坐像一

軀(藤原末期作)・同不動明王坐像一軀(藤原末期作)・同十一面觀音坐像一軀(藤原時代作)は國寶に編入せらる。

神咒寺 武庫郡甲東村大字神咒。

●古義眞言宗。

●甲山(一に摩尼山)寶珠院と號し、仁和寺末なり。聖武天皇の朝、役小角の草創に係ると云ふ。元亨釋書に據るに、淳和天皇の次妃、諸妃の嫉妬を避けて此地に來り、空海を請じて諸尊を彫刻せしめ、之に就きて剃髮し如意尼と稱せらる。天長五年、堂宇を營構し給ふと。承和二年、淳和天皇本寺に行幸ありて寺田近里百町を寄せ給ふ。尼公遷化の後、法燈相傳ふる事數十代、輪奐の美を誇りし伽藍次第に荒廢す。依りて壽永年間、源賴朝、藤原景時を奉行して之を再興せしむ。天正年間、伊丹の兵火に罹り、堂宇燬滅す。後徳川氏の代、漸次復興せられ、以て今日に及ぶ。

●如意輪觀音堂・護摩堂・大師堂・不動堂・三十三所觀音堂・鬼神祠等を具備す。本尊木造如意輪觀音坐像一軀は通行の六臂像なれども、坐形の脚部甚だ高く從つて膝の廣さに比して全身の高さを増す。六臂は細長く直線的にして、素朴の中に一種優美なる手法存するを注意すべく、藤原初期の作と推知さる。又木造聖觀音立像一軀は藤原時代の一木造なるも、膝以下は後世の修補に係る。不動堂安置の木造不動明王坐像一軀は全身に布張をなして彩色を施す。刀法頗る精美にして、鎌倉初期本寺再興の時の製作なるべく、大師堂安置の木造弘法大師坐像一軀亦不動尊と同時の作と推考せられ、比丘形背儀中の佳作たり。以上四尊悉く國寶に指定せらる。山中に大井池、乾池、鳴池、辨天影向

石、荒神石、白龍石等の奇蹟あり。

●初大師(一月)、二月節分には弘法大師の秘法による國家安穩、萬民豐樂等の如意寶珠融通守を授與する爲め登山者殊に多し。

彌福寺 川邊郡川西町火打。

●眞宗本願寺派。

●寶塚山と號す。寺に正長元年遺造せし小鐘ありて銘に本寺の緣起を略記せり。右に依れば、往古中山寺の僧善了の建立に係り、初め眞言宗に屬し、中山寺末院にして高貴の附依を受くること後からざりしが、貞治年間、本願寺七世存覺此地に於て専修念佛の法を弘めし際、本寺遂に之に歸して眞宗の寺刹となれり。●本尊阿彌陀佛像は惠心の作と傳ふ。寺寶に正長元年遺造に係る梵鐘あり。

廣濟寺(近松寺) 川邊郡小田村大字久々知。

●日蓮宗。

●久々地山と號し、俗に久々地の近松寺と云ふ。天徳三年、多田滿仲妙見大菩薩を勸請して之を草創す。元弘三年、赤松圓心此地に六波羅勢と對陣の嗣、其兵火に罹り荒廢せしを、正徳四年、日昌之を再興して日蓮宗となす。後ら當寺檀越に尼崎屋吉左衛門と稱するものあり、近松門左衛門と親交ありしが、享保九年十一月二十一日、近松受するや、其遺骸を當寺に葬れりと云ふ。尙ほ近松の墳墓に就きては大阪市天王寺區谷町八丁目妙法寺(其項參照)にも同説を傳へ、其墓碑と稱するものあり。一に本寺に過去帳、位牌等存するを以て眞の墓所となす者あるも明確なる文獻なく、未だ決定

に至らず。

●寺寶に後西院天皇宸翰・近松母智法院寄進法華經二十八卷・應舉、蘭汀、關月、一畫、水常、常信、光信、雪舟、五哲等筆の畫幅あり。境内に近松門左衛門夫妻の墓を存す。

塚口別院(正玄寺) 川邊郡立花村大字塚口。

●眞宗興正寺派。

●正玄寺と號す。應永七年、當村の興正寺門徒結信之を開創し、同寺第十一世性益を仰ぎて開基とす。當時境内千四百四十坪を有したり。後ら織田、豐臣、徳川の三氏より靈場保護の令狀を附せらる。●寺寶に興正寺第二十一世寂帳、同第二十二世寂永並に寂水派方の墓碑あり。

昆陽寺 川邊郡船野村大字寺本。

●古義眞言宗。

●崑崙山と號し、高野末なり。天平五年、僧行基の開創にして、畿内四十九院の一たり。行基此地に池を穿ち、田を墾して憐福田となし、以て難忍孤獨を厭恤し難病痲疾を治療せりと云ふ。往古攝津第一の名産なりしが、天正年間、兵火に罹り一山悉く烏有に歸せり。其後、次第に諸堂を再興し、稍々舊觀に復す。

●本堂・開山堂・大日堂・觀音堂・主水堂・護摩堂等を具備す。就中主水堂は天平九年、行基修法して諸人の袍袴を治療せし靈殿なりと云ふ。又寺當北方に昆野の池あり。行基の開創せし所なりと云ふ。

中山寺 川邊郡長尾村大字中山寺。

●古義眞言宗。

●紫雲山と號し、仁和寺末にして、西國三十三所第二十四番の札所なり。當地も仲真天皇の紀大中絶の跡所たり。神功皇后攝政元年、紀の所生弘勝王親きて宇治に歿するや、此地に葬る(攝津誌)。時に聖德太子其葬地につき寺宇を建立せらるる傳ふ。後に寺號、西は御子山(武庫山)を限り東は猪野川に至る伊原の中山(長尾山)一帶に亘れりと云ふ。宇多天皇深く本寺に御歸崇あり、中山の南院獨結尾に別墅を營み給ひ、屢次臨幸あらせらる。昌泰二年十月、仁和寺に出家せらる。や、當別墅を寺刹に改め、堂宇を遺營せらる。此時法相三論學の道場を改めて眞言宗に歸す。多田滿仲當國を領するに及び、本寺の四至を定め、東は岩神川を限り、西は有馬街道を境とす。又一山の堂塔大いに修理を加へ、其祈願所とす。花山、後白河兩法皇本寺觀音に深く御歸依あり、屢次臨幸ありしより、靈刹の名響々高く、一時比較、高野と並稱せられしが、壽永年間、源平二氏の兵燹に罹り、諸堂悉く燒却せらる。亂後、源賴朝、源家重代の祈願所たる由緒を以て本寺の諸堂を重興す。室町時代、足利義隆將軍の頃境界訴訟を起し、貞治二年、之が裁決を與へらる。當寺、一山に金堂、阿彌陀堂、不動堂、十王堂、五重塔、講堂、太子堂、慈悲菩薩堂、獨結尾別墅院、鐘樓堂、羅漢堂、經藏、護摩堂、灌頂堂、多寶塔、地藏堂、藥師堂、愛染堂等三十有餘宇を連り、壯觀を極めしが、應永三十年、回祿に罹り、堂塔悉く烏有に歸す。天文年間、當地彌川伯耆守國滿の領有に歸するや、國滿深く本寺に歸依し諸堂を遺營し、同十八年九月には諸役



本代免除の符を下す。天正年間、荒木村重の兵亂に燒失、寺觀廢壊せしが、慶長八年、豐臣秀頼片桐且元を奉行とし之を再建す。同十年正月、寺領百石を附せらる。從來御室御所直轄寺なりしが、寛永十二年、寺社の制定よりや、改めて仁和寺末となる。延寶二年、秀頼の時、中の坊、杉本坊、松本坊、西の坊、池本坊、辻本坊、新坊、成就坊、辻坊、寶泉坊、岩本坊、教尊坊の十二坊を廢合し、寶藏院(辻坊)、觀音院(寶泉坊)、華藏院(松本坊)、成就院(松本坊)、總持院(西の坊)の五院に改め、他を本寺に合併す。寛保三年、畿内大暴風の爲め本寺諸堂亦大破せしが、延享より寶曆に至り修理を加へ、舊觀に復す。近世まで寺領二百三十町を越え、地方有数の大寺にして現に支坊五院を有し、准別格寺なり。

●境内約二萬坪、山門を入れば左右に華藏院(本坊)寶藏院・觀音院・成就院・總持院等の寺坊あり。石階を上りて左に鐘樓堂・食堂・圓覺堂・禮堂・右に記録所・納札堂・誂歌堂・羅漢堂・繪馬堂・香爐堂等列なる。更に石階を上れば正面に金堂・其右に太子堂・護摩堂・左に寶藏・藥師堂・納骨所其上段に彌守辨財天・地藏堂あり。金堂より約十町にして善種子峯なる奥ノ院に達す。聖德太子十六歳登山像を安んず。本堂本尊木造十一面觀音立像一軀は寺傳に三國傳來と稱し、歷代皇室の御敬信厚かりしものにして、衣帶の彫鑿深く麗衣の反轉甚しく精妙なる刀法を示す。丈高五尺二寸四分、藤原初期の作なり。太子堂安置木造聖德太子坐像一軀は極彩色玉眼入、唐冠朱靴、時髪經講讀畫像の彫刻的表現にして、特に經机・經卷・寶座・禮盤を附す。鎌倉時代末期の作なり。藥師堂安置木造藥師如來坐像一軀(藤原時代作)、地藏堂安置同大日如來坐像一軀(藤原時代作)と共に國寶なり。此外藏する所の寺寶



(堂本寺山中)

●石の唐櫃と稱し、大仲懸陸臺、安産手洗鉢(一説に忍熊王石棺なりと云ふ)、大悲水、聖德太子駒足跡石、舊中山寺址、美丈丸學問所址等の名蹟頗る多し。●初観音(二月十八日)、初大師(二月二十一日)、星祭

●古義眞言宗。●蓬萊山と號し、仁和寺末なり。宇多天皇寛平年間の勅建にして、僧益信を開基とす。即ち寛平五年四月天皇佛工定圓に勅し、釋迦、彌陀、彌勒の三尊を造進せしめ給ひ、同七年二月、重いて丈六の三佛を刻せしめ米谷七瀬七溪に亘り、大いに伽藍を造立して茲に安置せらる。時に寺境三十餘町歩、支坊七十二院を有し、大塔玉殿極めて莊麗なりしが、壽永年間、慈心房尊憲の代、源平二氏の兵燹に罹り、一山悉く灰燼に歸す。次で建久元年、親慶の代源頼朝之を再建す。後天正年間、再び兵火に伽藍炎上す。其後久し再建の業成らず、寺寶を龍藏院に移し、辛うじて清輪を維持せしが、近世淨界之を現地に移して再興し、以て現在に至る。

●峰岳四周し、境内廣潤たり。山門・本堂・庫裡・方丈・書院・荒神堂・歡喜天廟・拜殿・水神廟・鐘樓・寶庫等を具備す。就中、荒神堂は清荒神を祀り、本寺創祀の當初、以降毫も其位置を變ぜず、宇多法皇より日本第一清荒神の尊號を賜ふと云ひ、衆庶最も敬祭す。本堂本尊木造大日如來坐像一軀は國寶にして、金剛界大日如來なり。作風幾分古式なるも、鎌倉時代の模古作なるべし。寺寶中、絹本着色千手觀音像一軀は寺傳

●眞宗本願寺派。●出雲路山と號し、當派別格別院なり。越前眞宗出雲路派本山毫攝寺(其項參照)第五世善幸の長子善秀の開創なり。初め本山毫攝寺京都出雲路にありしが、其後兵亂の爲め衰頹す。善幸の代に至りて遂に善秀を京都に留め、善幸は二男善福、三男善智を伴ひ、越前横越の豐盛寺に下りしが、天正年間に至り、善秀當地に來り本寺を創建す。是れ本寺の濫觴なり。明治維新の後本願寺派となる。同十一年二月、越前毫攝寺出雲路派を公稱して別派獨立せしが、本寺は依然として本願寺派に屬し、明治四十二年一月、別格別院となり、以て現在に及ぶ。

毫攝寺 川邊郡小濱村。

●清荒神緣日(毎月二十八日)。●眞宗本願寺派。●出雲路山と號し、當派別格別院なり。越前眞宗出雲路派本山毫攝寺(其項參照)第五世善幸の長子善秀の開創なり。初め本山毫攝寺京都出雲路にありしが、其後兵亂の爲め衰頹す。善幸の代に至りて遂に善秀を京都に留め、善幸は二男善福、三男善智を伴ひ、越前横越の豐盛寺に下りしが、天正年間に至り、善秀當地に來り本寺を創建す。是れ本寺の濫觴なり。明治維新の後本願寺派となる。同十一年二月、越前毫攝寺出雲路派を公稱して別派獨立せしが、本寺は依然として本願寺派に屬し、明治四十二年一月、別格別院となり、以て現在に及ぶ。

滿願寺 川邊郡多田村大字滿願寺。

●古義眞言宗。●神香山と號し、高野山末たり。寺傳に聖武天皇の

●神龜元年、比叡山の北、細川の邊に千手觀音の靈蹟あり、處士荒木、井口、富山、江口、佐伯、阪本の六氏川邊郡版根村に移し、假に草庵を結びて安置す。後山頂の巖上につきて一字の高堂を草創して供養す。今の奥ノ院はれなりと。時に智德戒律の高僧勝通當山に來り、大悲の尊像を拜して大伽藍を建立し、滿願寺と號す。圓融天皇御宇源滿仲居城を此地に構へ、厚く當山に歸依し、天祿年間、堂塔を造營す。彼の藤原仲光之幸壽丸父子の忠節により、危き生命を救はれし滿仲の末子美丈丸(小童寺參看)は、叡山に入りて源賢と號し、學成るや本寺に入りて金堂、常行堂及び千手堂等を造營し、圓覺院を報して之に居る。依て源賢を中興の祖とす。萬壽年間、美濃守源頼國先祖菩提の爲に寺領を寄進し、此頃より多田源氏の祈願所として一族の崇敬を蒙る。後北條泰時三層塔を造進し、同長時權門を造營する等、鎌倉時代以後諸武門の厚崇厚し。乾元年間、源氏の祖母敬法尼二親遺福の爲め九重石塔を建立す。正中二年、後醍醐天皇勅願所の繪旨を賜ひ天台座主無量法親王の御執奏によりて官寺に準ず。建武年間、足利尊氏其祈願所となし、寺領を附す。正平十六年、村上天皇御嘗餼を賜ふ。其後、同様の災に罹りて一山殆んど廢墟に歸せしを、承應寛文の頃、徳川家綱の外護の下に堂塔房舎を復興す。明治三十一年、圓覺院を改めて滿願寺の舊號に復す。近時新西國三十三所第十三番靈場となる。

●寺境小物重疊して中に溪流あり、山若水明の閑寂境たり。金堂は承應三年の再建に係り、本尊無量壽佛は勝通作と傳へ、美丈丸新嘗して母の首目を開き助け給ふと云ひ、世に眼あき阿彌陀と稱す。前佛毘沙門天は滿仲の自作と云ひ、開運厄除を稱せらる。本堂前に長生の松あり、周圍二丈餘の大木にして、滿仲六十三

淨土宗。●忠孝山と號し、多田神社奥ノ院なりと云ふ。多田滿仲の季子美丈丸學を中山寺に修む。時に年十五、山野に滯留して師父の教を奉ぜず滿仲怒りて其臣藤原仲光に命じて害せしむ。仲光之を害するに忍びず、美丈丸に勸めて叡山横川に登らしめ、己が子幸壽丸の首を

●淨土宗。●忠孝山と號し、多田神社奥ノ院なりと云ふ。多田滿仲の季子美丈丸學を中山寺に修む。時に年十五、山野に滯留して師父の教を奉ぜず滿仲怒りて其臣藤原仲光に命じて害せしむ。仲光之を害するに忍びず、美丈丸に勸めて叡山横川に登らしめ、己が子幸壽丸の首を



削れて之に代ふ。美丈丸仲光等の忠節に感して精勵大いに力め遂に學成りて源賢阿闍梨と號す。後父に請ひて幸壽丸の爲に此寺を建て自ら開基となる。以て本寺の草創とす。

金心寺 有馬郡三田町。

●古義眞言宗。

●如意山と號し、仁和寺末たり。孝徳天皇の朝僧定慧の開創に係り、彌勒菩薩を本尊とす。天正年間、兵亂に遭ひて堂舎多く荒廢せしが、寛永年間、高野山新別所の祐儀來りて再興せり。

●本尊木造彌勒菩薩坐像一軀は藤原末期の作、同不動明王立像一軀は鎌倉末期の作、紙本彩色十一面觀音像一軀は鎌倉時代の作、何れも國寶に指定せらる。其他藥師如來坐像一軀・十一面觀音像一軀・十二神將像十二軀・阿闍梨如來坐像一軀等の寺寶あり。

清涼院 (温泉寺、藥師堂) 有馬郡有馬町。

●眞宗宗。

●靈泉山と號し、温泉寺又は藥師堂と稱す。僧行基の開創に係り、もと眞言宗なりしが、後ら現宗に改む。建久二年、大和國吉野前仁西之を中興し、永徳十二年を置き一山の寺務を掌持す。天正十三年、豐臣秀吉夫妻此地に來り堂宇を修造す。住持種現坊、阿闍梨坊、

蘭若院、施樂院、菩提院等の諸支院ありしが、總て廢絶す。

●寺地有馬町の中央に位し、土地高燥にして堂宇壯麗、頗る麗望に富む。本尊丈六藥師佛・傳空佛作日光・月光・傳運慶作十二神將を安置す。十二神將中、木造波夷羅大將立像一軀は國寶に指定せらる。鎌倉末期の作なり。寺寶中、黒漆厨子一基は信實の筆と傳ふる諸佛集會の圖を有し、鎌倉時代の作に係り、現に國寶なり。他に仁西自作木像・龜山天皇御輪轉紙金泥法華經・平清盛筆法華經・慈心房筆法華經等を藏す。

善福寺 有馬郡有馬町。

●曹洞宗。

●光徳山と號し、もと温泉寺に屬し、阿闍梨坊の本坊たり。行基の開創に係り仁西の時之を中興し現稱に改む。其後、豐臣秀吉の一旗大講宗廟の本願により、興聖寺第五世英權住持となり、法相宗より現宗に改む。

●本尊は金剛阿闍梨一光三尊佛にしてもと川邊郡多田院に安置せしを、正徳三年、本寺に移安置せらる。云ふ。寺寶中、木造聖德太子立像一軀は胎内に法印菩薩、法華經あり。一に南無佛太子像と稱す。半渡、朱袴合掌の影像にして、室町時代の作たるべし。現に國寶なり。

菩提寺 有馬郡三輪町尼寺。

●古義眞言宗。

●東光山と號し、御室末なり。白徳二年、法道仙人の開基に係り、初め紫雲山觀音寺と稱せしが、長保年間、花山法皇臨幸の時、現稱に改む。後ら皇后御佛ありて入室せらる。故に尼寺の稱あり。時に寺領に小野莊を賜ふ。弘治元年、荒木村重の兵變に罹り、舊記什寶焼失し、櫻本房、塔司、岩本坊、西坊、明王院、成就院、阿闍梨院、花山院、大門、中門、仁王門等燒かに其災を免る。兵亂當寺の住僧、法皇の尊像、藥師、觀音、不動の諸像を灰燼中に得、更に一草庵を結びて安置し、法皇の御陵を守護し奉れり。元禄十年、寺僧空遍大いに十方に勸進し、本堂及び諸堂の再建を遂ぐ。

多聞寺 有馬郡長尾村。

●曹洞宗。

●草創沿革不詳なり。

●寺寶中、木造毘沙門天立像一軀・同吉祥天立像一軀は共に藤原時代作、同地藏菩薩立像一軀は鎌倉時代作にして、何れも現に國寶に編入せらる。

教行寺 有馬郡鹽瀨村大字名瀨。

●眞宗本願寺派。

●當派の別格別院にして、文明年間、本願寺八世蓮如の開創に係る。文明年中、蓮如越前より攝津に入り當村に一字を建立し化導す。蓮如、地山間に歸在し教法弘通に便ならず。依て當國富田に移り一字を建立し、教行寺と號し其二十子兼房をして住持たらしむ。然るに名瀨の村民法道を慕ひて、富田に到り名瀨の地に化導せんことを乞ふ。依て兼房をして兩寺を兼住せしむ。これ名瀨一村が當寺の與力門徒たるに至りし原由なり。大永三年三月二十八日兼房寂せし後ら長男實野は富田に住持し、次男實壽は當寺を相續す。

淨橋寺 有馬郡鹽瀨村大字生瀨。

●仁治元年、證空の開創に係り、現に當派准檀林に列す。

●本尊木造阿闍梨如來及び兩脇侍像三軀は何れも漆箔にして、中尊は鎌倉前期の通有なる藤原式を遺存するも、觀音、勢至は其體衣の制に異色を見るべく、衣帶肉身に著著し、鬘藻硬固の感あり、全體として製作優れ、現に國寶たり。寺寶中、銅鑄一口は髮髻形の内に寛元二年の銘を存し證空の願主たりし事を知る。龍頭及び権座以外裝飾皆無にして、素朴の感あり、形態よく、脚の張り硬威にして古蹟中の逸作なり。現に國寶に指定せらる。

明德寺 有馬郡山口村大字上山口。

●眞宗大谷派。

●創建年代不詳なり。もと山口總道場と稱せしが、東本願寺十二世教如より明德寺の額を受けしより明德寺と稱す。貞享三年十月八日、頓焼の厄に遭ひ堂宇、寶物、古書類悉く焼失せり。攝津風土記に見ゆる濟生庵、照明庵の二箇の末庵を有せる明德寺を當寺の前身とすし、のれども遠に信じ難し。

●境内四百四十四坪、本堂・鐘樓・太鼓堂・茶所等具備す。本尊木造阿闍梨如來立像一軀は室町初期の作にして、安阿彌流の佳作となすべく、國寶に指定せらる。他に、觀音九字名號・蓮如筆六字名號等を藏す。

護國院 有馬郡鹽瀨村大字下相野。

●曹洞宗。

●寶永四年五月の創立と傳ふ。大正十年伽藍を再建せり。

●本堂・寶物堂等の堂宇あり。所藏の木造持國天立像一軀・同多聞天立像一軀は丈高各三尺三寸五分、共に國寶に指定せらる。

●毎年一月六日をトとして國寶祈願會を行ふ。

觀音堂 有馬郡中野村大字東野上。

●曹洞宗。

●草創沿革不詳なり。

●本尊木造如意輪觀音坐像一軀は室町時代の作にして國寶に指定せらる。

永澤寺 有馬郡小野村大字母子。

●曹洞宗。

●青原山と號す。應安三年、細川頼之の開創に係り、通幻靈巖を開山となす。後ら同宗通幻派の根本道場となり、衆徒群集して隆盛を極めしが、其後、漸次衰運に傾き、復興時の如くならざれども、なほ同地方の巨刹たるを失はず。

●本尊金銅の觀音像は後醍醐天皇皇后の御念持佛たりしものと傳ふ。境内に活埋坑の遺址と稱するものあり。傳へ云ふ開山靈巖が皆て杜撰の禪徒を陥入せし所なりと。

多聞寺 明石郡垂水町多聞。

●天台宗。

●吉祥山と號す。貞觀五年、慈覺大師圓仁の開創と傳へ、往昔七堂伽藍壯麗にして、寺領數百町に及び、寺中十四坊を有し、寺運極めて盛大なりしと云ふ。其後の沿革不詳なり。

●境内千五百七十六坪を有し、三覺の佛地を表して三段の階級に分ち、上段に本堂(七間四面二重屋根本瓦葺、正徳二年の再建)あり、傳慈覺大師作毘沙門天を安置す。中段に藥師堂・鐘樓・御供所等具ふ。下段に著名なる杜若花の心字池あり。本堂を去る四町餘に仁王門を構ふ。藥師堂に安置せる木造藥師如來坐像一軀・同日月光菩薩立像二軀(藤原時代の作)は國寶に指定せらる。他に青色舍利塔・慈覺大師傳來と傳ふる横笛二管等を藏す。

●大般若會(毎年一月五日並に一月、五月、九月の寅の日)、祖師會(十一月)。

轉法輪寺 明石郡垂水町名谷。

●古義眞言宗。

●龍華山と號し、高野末なり。大同元年、平城天皇の勅願にて開創、開山を西尊とし、太平興國龍華山轉法輪寺と號す。天長二年十二月、火災に罹りしも、宇多天皇、平城天皇の勅願寺なるを遺慈し、延長二年、七堂伽藍を再建せらる。慶安元年、徳川家光寺領五十石を寄す。

●境内八百四十一坪を有し、本尊木造阿闍梨如來坐像一軀は國寶に指定せらる。面相豐麗、體軀肥大にして、藤原時代の佳作に屬す。舟形光背は鎌倉時代の補作、齋座亦近年の作に係る。



### ◎追願會(一月七日)。 太山寺 明石郡伊川谷村大字前岡。

◎天台宗。靈龜二年、藤原宇合之が創設し、鎌足の子僧定惠之が開基たり。當時宇合は養師如來七體を作り、福林、高泉、興樂、清水、神應及び本寺に安置し、七佛樂師の靈場とす。元正天皇即ち勅願所となし給ふと云ふ。後ち白河、後宇多天皇臨幸あらせられ、世々國守寺領を寄する者多し。元弘元年、源氏親王義兵を奉げ給ふや、同三年、天台座主の資格を以て令旨本寺に賜ふ。其文意詳密鄭重にして、當寺衆徒の勢力侮り難きものありしを知るべし。衆徒又擧げて王事に盡し、赤松氏と共に京師に入れり。觀應二年八月、寺領を寄せらる。

◎寺境山中深遠の地を占め、溪間に男題、女題、乾闥、照明諸あり。境内四千五百五十餘坪を有し、堂宇に本堂・阿彌陀堂・羅漢堂・觀音堂・彌摩堂・三重塔・釋迦堂・大日堂・地藏堂・庫裡・鐘樓・仁王門等具はる。就中本堂、仁王門は現に國寶建造物なり。本堂は桁行七間、椽間六間、單層、屋根入母屋造、木瓦葺、嘉元二年の造立と傳ふ。大棟一直線より成り、軒端反轉を有せず、厚重の感ありて樞軸必ずしも雅美ならずと雖、高さ石壇上に立ちて姿勢極めて雄大なり。細部の様式手法は唐様にして鎌倉時代の特色を發揮し、仁王門は八脚門、屋根入母屋造、木瓦葺にして境内入口に建ち、松並木前面に横けり。軒の出極めて少く、柱太く、屋蓋小にして樞軸を失する事甚だし。室町時代の建築なり。阿彌陀堂に安置せる木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶に指定せらる。丈高九尺餘金箔裏定印の

巨像にして、藤原式を傳ふるも、觀應三年本寺大火後の新作なるべし。寺寶中國寶指定に係るもの次の如し。絹本彩色不動二童子像一軀は中央に不動、岩石上に割多迦、岩瑞羅の兩童立ち、山房瀑布を背景として波濤之を繞る。構圖精巧、配色美麗にして室町時代初期の逸作たり。同



(寶圖) (堂本寺山太)

兩界曼荼羅四幅は大曼荼羅中曼荼羅の二種にして、何れも鎌倉時代の彩色に係る。大曼荼羅は時代附、古く、書法亦優る。同釋迦三尊像一軀は中央に朱衣金紋の釋迦、左右に騎獅の文殊、騎象の普賢を配し、張墨墨の流を洩めるものにして鎌倉時代末期の作なり。同金剛經十六菩薩神像一軀は元書の高寫にして、室町時代の作とす。同不動四童子像一軀は不動兩童の外に掌善掌惡の二童子を描く。前記二童子像と相似せるも技法稍異、室町時代の

の作なるべし。同法華曼荼羅圖一軀は台密に於ける法華經の本尊にして、朱線に金金を交へて精細に描ける鎌倉時代曼荼羅圖の遺例なり。同愛染曼荼羅圖一軀は中尊に愛染明王を置き、之に四明王、四童子を配して内院とし、外天に十二天を繞らせしものにして、儀軌正しき愛染曼荼羅に非ず、室町時代の作、同白衣觀音像一軀は京都大徳寺藏吳道子筆觀音圖と同形式にして、同圖は一時盛に模寫せられたり。本圖亦其一遺例にして室町時代の作に係る。同十六羅漢像十六幅は光嚴司筆と傳へ、同じく室町時代作現に奈良寧寧博物館に出陳せらる。同十一面觀音像一軀は前記十六菩薩神像と同様元書の高寫にして、室町時代の作なるべし。紙本墨書法華經三十二卷は寺傳に平家一門の筆と稱す。法華經二十八卷・無量壽經三卷・觀音賢經一卷にして白紙に金銀を敷けて墨書し、天地に金銀切箔砂子を散らす。裝飾意匠は各卷之を異にし、題名は多く金泥を以て表紙に直書す。平家一門の筆と云ふも奥書一も存せず。或は嚴島神社平家納経より附會せられたりとのなるか。要之、藤原末期の古寫經として注目されるべき作品なりとす。同大塔宮金旨及び注進狀四通は元弘三年北條氏征討に關する文書なり。武器類八箇(觀卷二、兜一、鞍籠三、櫛當一、前立一)は當時太山寺衆徒の遺物と見るべきものなり。因みに舊六月二十五日賣物虫十會を修し什貨一切を展覧す。

◎追願會(一月七日)、無緣經法要(舊四月八日・十二日)、大般若會(一)に梅參りと稱す。五月二十八日。

### 雲龍寺 美祿郡三木町。

◎曹洞宗。

◎高源山と號す。天徳二年、真源の創立にして、村上天皇、其勸願所とせらる。もと七堂を具備し壯麗なりしが、保元年間、兵亂に罹り、廢壞せしを、元亨二年赤松圓心朝に奏し殿堂を修營す。時に後醍醐天皇詔して高源山と號せしめ勸願所に列せらる。應永年間、城主別所氏御靈を改修し、僧興忠を請じて禪林となす。天正六年、三



(景全寺龍雲)

木城主別所長治、豊臣秀吉と干戈を交へ、同八年正月遂に落城す。此時本寺亦兵火に罹り、堂宇烏有に歸せり。秀吉山林竹木野八町楯三町の境内並びに高三十石の寺領を寄せ、且つ制札を附したり。後ち城主杉原氏語堂を再建す。現に末寺三十六箇寺、孫末寺百餘箇寺を有する中本山格の大寺たり。

◎境内千二百餘坪、本堂・開山堂・羅漢堂・鐘守堂・鐘樓・山門・庫裡・寶藏等具はり、三木城攻戰の圖、豐

### 慈眼寺 美祿郡久留美村。

◎曹洞宗。

◎大化四年、法道仙人の開創に係ると云ふ。觀應二年、赤松圓心堂宇を建立し、許多の田畑山林を寄せ、禪刹となし、大藏宗禪師を請じて開山とす。三木城主別所長治、厚く富寺を保護せしが、天正六年、豊臣秀吉假城を富山頂に構へ、長治の居城を攻む。同八年正月城陥り、長治自及するや、本寺又其禍を蒙り、寺領殆ど之を失ふ。後ち池田輝政數次田畑山林を寄附し、又明石城主、小笠原右近大夫忠政之に若干の朱印地を附す。現に小本寺格にして、末寺十二箇寺を管し、近郷の一名刹たり。

◎境内一千五百坪、本尊千手觀音を安置す。佐伯寺の古鐘を傳へ、其銘に延元二年とあり。

### 伽耶院 美祿郡志染村大字御坂。

◎天台宗寺門派。

◎大谷山と號し、孝徳天皇大化元年、法道仙人の開創なりと傳ふ。爾來、歷朝勸願寺として御歸依處からず、花山法泉亦此地に行幸あらせられ、五部の大乗經を納め給ふと云ひ、經が尾の名今に存す。かくて數十の堂宇、一百三十餘の坊舎櫛比して輪奐壯麗を極めしが、天正八年三木の落城と共に當院亦羽柴秀吉の兵火に罹り、一山悉く烏有に歸せり。これ當寺別所氏の祈願寺たりしに依り、一山の僧徒三木城に籠り、別所長治と共に秀吉に抗せしを以てなり。今舊記に依りて天



(塔寶多及堂本院耶伽)

修營す。依りて富山の申興と稱せらる。即ち同九年、先づ金堂成り、次で鐘守社深蛇大王の小殿、大藏大明神社並に仁王門を再建し、同十年六月、役行者堂を、文祿二年、本坊並に寺家數宇を建立す。慶長六年、當



國守源田輝政三十二石を寄せ諸役を免除し、回復の業略は完成せし、東一房澄政の代慶長十四年十二月金堂より出火し金山再度烏有に歸せり。然して翌十五年、金堂を再建、寛永六年、明石城主小笠原忠政不動堂を造進、續いて同八年、雙蓮堂に鐘樓を寄せ、豐前小倉に轉封後も崇敬厚く、同十年寺領として小倉領なる京都郡片島にて百石の所領を寄せ、正保四年には多寶塔を寄進せり。天和元年十一月、後西院上皇御耶院の勅號を下賜せらる。當時本寺修驗道の道場として洛東聖護院の院家に列し、寺運又盛大なりしが、明治維新後稍々衰へたり。大正七年以降堂宇を改修し、寺觀を平めたり。近時新西國三十三所第二十六番となる。

●境内四千二坪、老松老松繁茂し、青山前山の景と相俟ら頗る風趣に富む。本堂(金堂)は慶長十五年再建にして、本尊に開浮檀金毘沙門天を安置す。其前立たる木造毘沙門天立像一軀は藤原末期の作にして國寶たり。其他行者堂(寛永七年)・開山堂(明暦二年)・多寶塔(正保四年)・二天堂(慶安二年)・仁王門(大正十四年改修)等具備す。寺寶には千手觀音像・不動明王像・十二天佛畫等を藏す。

**石峰寺**

●古義眞言宗。  
●孝德天皇白雉二年、法道仙人の開基と傳ふるも、其後の沿革明らかならず、舊寺領七十石を有せり。現に本宗高野派に屬す。  
●境内六千餘坪、諸堂中、中堂・三重塔は現に國寶建造物なり。中堂一に藥師堂と云ひ、新行五間、雙閣



(寶圖) (堂中寺峰石)

五間、單層、屋根入母屋造、上部を茅葺とし下部を本瓦葺とし頗る珍奇なる形態をなす。下部の勾配緩やかにして相當の反轉を有し、上部との調和よく、様式手法簡明、佛寺建築として稍々莊嚴味に乏しと雖も極端な安定の姿態を存し、斗拱の制よく室町中期の特徴を現はせり。三重塔は三間三層、塔身、屋根栴檀(大威して現に亞鉛板の覆ひを成す)にして弘仁十四年弘法大師の建立と稱す。其の今其の存影のものなし。屋根の勾配緩やかにして、腰高く各層の軒高、屋差の出、屋根の相輪等稍々権衡を缺ぐ。細部に室町時代の特徵を有す。其他金堂・仁王門・鎮守堂・辨天堂等あり。

**淨土寺**

●古義眞言宗。  
●極樂山と號し、高野派に屬す。聖武天皇の勅願により行基菩薩の開創せし廣度寺の遺址たり。建久四年、東大寺大佛殿大勸進後乘房重源其弟子觀阿に命じ、相共に伽藍を建立す。爾來、寺門隆昌し、天正年間には豐臣秀吉、慶長年間には徳川家康各々寺領朱印を寄す。近世五百五十石の寺領を有せり。

●境内廣瀨、堂宇に本堂・淨土堂・開山堂・大師堂・講堂・經堂・鐘樓・食堂・行者堂等を具備す。就中、本堂、淨土堂は國寶建造物なり。本堂は一に藥師堂と稱し、方五間、單層、屋根實形造、本瓦葺、建久四年重源建立の儘にして、同じく重源に依つて營まれたる奈良東大寺南大門、鐘樓及び開山堂等、その手法様式を一にし、所謂天竺様の特質を發揮せり。屋根四方の勾配緩なるも軒端の反轉殆んど無く、軒は一重の扇窓極にして莊重なる大圓柱を立て、形式自由奔放にして雄大の精神を發揮す。内に本尊藥師如來を安んず。淨土堂は一に阿彌陀と稱し、本堂と對立し、建久五年の遺立に係る。方三間、單層、屋根實形造、本瓦葺にして、屋根の勾配、軒端の反轉藥師堂と全く同様にして、軒には頗る粗大なる扇窓を伸べ、内より外方に長く突出せる尾樑は丸桁及び軒桁を承け、雄大なる圓柱に突出せる三重の拂射木は尾樑の末端と軒桁とを支承す、全般の形式東大寺眞舞堂に比し規模著しく大、内外斗拱の配置亦複雑、奇抜なり。本堂と共に本邦天竺様建築の尤なり。内に安置する木造阿彌陀如來兩脇土立像三軀は、中尊の丈高十七尺六寸の巨像にして佛師深度

の作と傳へ、現に國寶に指定せらる。堂宇中、この外國寶となるもの次の如し。開山堂安置木造重源上人坐像一軀は背面に「天福二年歲次甲子二月十日、勸進智阿彌陀佛、爲後生菩提、奉營之、自南都、御入國云」・棟瓦に「御影堂建立次第、建長六年歲次寅三月十七日、棟上也、建久八年歲次丙辰四月二十九日」とあり。東大寺を始め各地に存するものと略々同型なり。尙ほ胎内にも墨書銘を存す。又木造阿彌陀如來坐像一軀あり。繪畫にて繪本若色眞言八祖像八幅は此種類品中究存せる古作の一例なり。關機畫法共に古本を襲ひ、就中、不空一行とを最も優作とす。世尊寺風の能書を以て各祖師の行狀を記せり。同佛涅槃圖一幅は南北朝時代の逸作なり。工藝に銅製五輪塔一基あり。工藝史上の好資料なり。

**光明寺**

●古義眞言宗。  
●五峰山と號し、高野派に屬す。法道仙人の開創なりと傳ふ。後醍醐仁明天皇の勅により、常行堂、阿彌陀堂を増築して自作の阿彌陀像を安置し、唐土將來の善導大師自畫像を塔頭大慈院に遺せりと傳ふ。天文元年八月、本堂焼失す。其後、再建せられしも、安政六年再び火災に罹り、本尊は常行堂に移遷合祀する状態なりしが、大正十四年、武田博士の設計により鎌倉時代の様式になる本堂を再建せり。現に塔頭多聞院、大慈院、遍照院、花藏院等を有す。  
●境内三千餘坪。寺地東面し、重櫓背後に峙立して五峰を爲す。これ山號の起る所以なり。本堂は正面高

地在りて懸崖住なり。他に仁王門・文殊堂・大師堂・阿彌陀堂等の堂宇あり、寺寶として多田高仲、豐臣秀吉、小野寺十内其他武將名族の寄進證文等を藏す。

**來迎寺**

●淨土宗西山派。  
●引接山と號す。建久元年、東大寺大勸進後乘房重源の開創にして、第二世を其弟子善阿彌とす。天正八年、豐臣秀吉、三木城攻めの際、兵燹に罹りしが慶長年間、攝津尼ヶ崎の唯念これを再建す。寛文年間、饑饉更に諸堂を改築して大略舊觀に復せしむ。依りて候空を中興とす。

**慶徳寺**

●曹洞宗。  
●龜嶺山と號す。應永元年、小堀城主三枝氏の創建にして、春庭見芳を請じて開山とす。永享年間、後花園天皇、和向を召して禪要を聞こし召され、特に吉祥龜嶺山福壽庵慶徳寺の山寺號を賜ひ、更に日月星三光の繪影並に紫衣を下賜せらる。現に米寺十一箇寺を有す。

●境内六百八十餘坪、本堂・開山堂・東經・玄關・禪堂・衆寮・寶藏・土藏・鐘樓・表門・裏門等完備す。

堂後の寺山に登れば、古古の清流を俯瞰し、郡内の風景を一眸裡に看取し得る景勝地なり。

**朝光寺**

●古義眞言宗。  
●聖相記に法道仙人の開創なりとす。爾後の沿革不詳なり。現に本宗高野派に屬す。  
●堂宇中、本堂は新行七間、雙閣七間、單層、屋根注造、本瓦葺にして、室町時代の遺立に係り、大正十二年三月國寶建造物に指定せらる。

**清水寺**

●天台宗。  
●御嶽山と號し、洛東清水寺と區別して新清水とも云ひ、西國三十三靈場第二十五番札所なり。寺傳に據るに景行天皇の御宇法道仙人の開創に係り、神功皇后三韓征伐に當りて戦捷の新願を命じ給ひ、又仙人が、この山嶽の水神に祈りて八功の靈水を得しより清水寺と名づくと傳ふ。固よりかゝる説は今其證據の存する者もなければ、許くとも佛敎渡來以前に於て、この秀麗なる御嶽山が民族信仰の對象として仰がれしこと想像に難からず。推古天皇三十五年勸願を以て根本中堂を造營せられ、神龜二年、僧行基此地に行脚し、勸命に依りて諸堂を刻し大講堂を建立して安置す。時に聖武天皇燈明料として但馬國鶴居莊を寄せらるると傳ふ。播磨名所巡覽圖會卷二に寛治五年、光善の中興とし、平清盛の母感園女御當山觀音靈像に歸依し大寶塔を建て、後



白河法皇は常行堂を、池の二位は樂師堂を、源賴朝は阿彌陀堂を寄進建立せし等の事見えたり。壽永三年二月、源義經平氏討伐の爲め丹波街道を下るや、富山麓の民家に火を放ち、三草山城に平實盛を攻め、敗れて富山に籠り却つて平氏の爲に焼打に遭ひし事平家物語、源平盛衰記に明らかなり。建永元年二月九日附の當寺古地圖に依れば、此頃僧榮西本寺の長吏たり。承久三年閏十月、本寺住僧等が幕府に訴へし申狀案中には、一百餘坊の塔頭寺院の存せる旨を記す。また貞應三年正月、皇后臨聽下文案に依れば此時本寺皇后宮邦子内親王の御祈願寺となり、寺領の注進を命ぜらる。其後、後深草天皇の厚き御階依を受け、堂舎の修造料として播磨吉田莊を賜ひ、正和五年四月、堂塔修理の奉加として、後伏見院より龍踏一疋を、久明親王より細馬一疋を寄せらる。等歷代皇室の御崇敬を蒙れり。かくて南北朝時代當寺中興の頃には寺領に播磨細田保、雲莊、吉川下御莊、丹波小野原莊市原、東置田莊墨田郷、吉田本莊、但馬氣比水上莊等あり、僧坊寺院又三百六十坊を數へたり。南北兩朝の戦亂に際しては、當寺衆徒又戦に参加せしもの、如く、其去就一に守護赤松氏に従ひたり。建武二年三月九日(一説建武三年二月五日)火災に遭ひ、千手堂、十一面堂、東堂、阿彌陀堂、多寶塔、經藏、鐘守五社以下悉く烏有に歸す。後、廣海、將軍足利義滿に之が再建を請ひ、應安四年遂に成る。十一月二日、諸堂落慶供養の勤會行はれ、當日には難波四天王寺の俗人参加して、舞樂を勤仕せしこと天王寺俗人勤仕交名注文に見ゆ。至徳元年、京都相國寺春屋妙法華經三十三部等を寄進せり。應永七年、大塔落慶の勤會を修す。永享十年正月二十日、回縁に罹り、常行堂、食堂、往生院等を焼燬す。天正年間遠一山三百六十坊を有し、大講堂燈明田として但馬國龜

居莊、赤松交氏遺善料として有馬郡東賀茂村の内二町餘を有せしが豊臣秀吉の没収する所となり、寺運次第に衰微し、遂に六十五坊に減す。維新前尙ほ十八箇院ありしが、明治三年、塔頭十一院の焼失に端を發し、同二十四年、更に二院を、同四十年十一月、大塔を、同四十四年、山門並びに運善院を燒き、大正二年八月二日、山火の延焼に罹り、一山燒土と化せり。爾後、大正六年、同九年、同十三年の三期に分ち復興を計畫し、輪奐の美再び備はるに至れり。昭和五年三月境内修補の折、古杉の株より白鳳乃至天平初期と推定さるる聖觀音像を得、本堂に安置す。現に知足院(里坊)、廣濟院、慈門院、兜月庵、運善院の五院を有す。

●御登山は海拔約二千尺、北は丹波、東は攝津、西は播磨に境し、景勝の地たり。當寺は、の山頂にあり境内二千四百餘坪を有し、仁王門(大正九年竣工)。本坊及び客殿・大講堂(何れも大正六年再建)・鐘樓(大正九年再建)・根本中堂(大正六年再建)・寶塔(大正十二年竣工)・樂師堂・月見亭等完備す。本堂近に立て朝三界高麗塔は慶長七年の刻銘あり。寺寶として平安朝より慶長(寛文に至る古文書)遺物を藏す。境内に赤松氏範切石(元中三年九月二日丹波城城戸北峯星齋に自及す)同墳墓、芭蕉、俳句碑、稚子殿白絲の礎、辨慶力士、淡淨水、龍池、天狗櫻掛石等あり。

●無緣經會(四月十七日より三日間、傳教大師會(六月四日)、觀月大會(八月二十六夜)、開山會(十二月八日)、天台大會(十二月二十四日)、緣日(毎月十八日)。

●高寺山と號し、高野來なり。天仁年中、寂信(九條民部卿顯頼男)の開創にして、始め興善院と號せしが後八條院の御願寺となり、保元年中現稱に改む。天福二年十二月、地頭中原氏より寺田二段歩を寄せらる。文明十年、兵火に罹りしが、天正年中真淵之を中興し、郷士矢田部長久と共に樂師堂を建立す。慶長年中、領主池田輝政境内地二段を寄す。弘化二年七月回縁に罹り、堂宇烏有に歸せしも、直ちに再建さる。明治三十四年、境内に八十八箇所靈場を創設し、以て現在に及ぶ。

●臨濟宗妙心寺派。

●龜船山、一に若耶連山と號す。開創年月不詳なれども、應永八年春、周及(佛德大通禪師)金山より當國に來り、本寺に遊び、景徳庵を結びて住す。後、慶長年中、妙心寺開山慧玄(無相大師)十四世の法孫空山玄東、之を中興す。現に當派別格地たり。

●寺域一千三百三十餘坪、佛殿・開山堂・東禮・方丈・鐘樓・山門・其他數棟・輪奐の美を觀ひ、近郷の名伽藍たり。寺寶として伏見宮一品貞敬親王御軍雲門禪叢の扁額・傳聖德太子筆帝釋天畫像を初め所藏頗る多し。

●古義眞言宗。

●泉生山と號し、高野山來たり。天平年間行基此地に遊歴し、酒見明神に祈念し、其靈告によりて堂宇を創建す。乃ち公田四十餘町を賜ひ、酒見神社(現稱住

●古義眞言宗。多可郡中町天田。

●古義眞言宗。高野山來たり。天平年間行基此地に遊歴し、酒見明神に祈念し、其靈告によりて堂宇を創建す。乃ち公田四十餘町を賜ひ、酒見神社(現稱住

吉神社社(舊龜船山)別當寺となる。平治元年正月、回縁の災に遭ひ、二條天皇勅して堂宇を再建せしめ給ふ。天正年間、再び災上し、寺運衰頹せしが、嚴路城主池田輝政精舎補修の料を寄せ、本寺忠政亦其高を増加す。寛永年間、僧隆惠大いに伽藍を復し、諸堂を再建し富山中興の業を完成せり。明治初年、本坊の工成る。

●本堂・祖師堂・開山堂・毘沙門堂・多寶塔等具はり、寺の西北もと富山支院の舊址と傳ふる爲に五百羅漢の石像あり。

●祖師御影(四月二十一日)、大般若會(七月一日)本尊緣日(四月六日)(七月九日)、地藏會(七月二十三日)、引學會(八月十一日)より七日間、寛弘八年(西暦一〇七〇年)引學會(八月十一日)より七日間、當所住吉神社の開闢と並び稱せらる(祖師講(十月二十一日))。

年間、常行堂を改造す。近年境内に櫻樹を植ふ、寺地に清涼公園を設けて面目を全く一新せり。現に塔頭地蔵院、月輪寺、明王院、彌聖院、歡喜寺等を有す。

●境内二十三萬四千坪。老樹蒼鬱たる淨境にして、背に法華山の八峰聳立す。堂宇は本堂(十二間四面)・行者堂・常行堂・開山堂・太子堂・善光寺堂・辨天堂・妙見堂・護法堂・三重塔・方丈・東禮・山門・寶庫等を具備す。就中、妙見堂、辨天堂、護法堂、三重塔は國寶建造物なり。妙見、辨天堂は東西に相並び本堂の背後に南面して建つ。辨天堂は一間社春日造、屋根本瓦葺、棟上の藝設の意匠奇抜、手法和様と唐様を混

石階下に東面して建ち、屋根の流れ輕妙、軒端僅かに反轉を有して生動の氣あり、一般木割雄大、鎌倉初期建築の風を帯び、京都法觀寺八坂塔、奈良興福寺塔婆に次いで整備せるものと稱せらる。寺寶中、國寶に指定せられしもの次の如し。彫刻に銅造聖觀音立像二軀あり、繪畫の中、絹本着色聖德太子及び高僧像十幅は色彩文様頗る麗麗優美なるも圓渾の氣乏しきを憾みとす。藤原時代の作に係り、現に奈良帝室博物館に出陳せらる。同阿彌陀如來像一幅は金彩華麗、描線勁健にして、形相に宋朝佛畫の影響を思はしむ。鎌倉中期以後の作と推知さる。同五大力士像一幅は鎌倉末期の遺作たり。

●法道忌(九月十五日)。

一 乘寺 加西郡下里村大字坂本。

●天台宗。

●法華山と號し、西國三十三所靈場第二十六番の札所たり。白鳩二年、法道仙人の開創に係る。孝德天皇仙人の高徳を慕はれ、法華山一乘寺の勅號を下し給ふと云ふ。後、聖武、孝謙、仁明の勅願所となし給ふ。天長三年空海尊に參籠す。後、正和五年、後醍醐天皇勅して講堂を建立せしめられ、正中二年、落成、建武二年、文親に命じ供養せしめらる。元弘三年、隱岐より還幸あるや、莊園を寄せ給ふ。大水三年、山名氏の兵變に堂宇燒亡、永祿五年、地蔵院水邊、赤松義祐の實孫を承けて講堂を再興し、所領の公租を免ぜられ、且つ尼子、池田兩氏より寺領を安堵せらる。元和三年、本堂鐘樓表上し、寛永五年、本寺忠政堂宇を重修す。慶安元年、徳川家光百十二石餘の朱印狀を附す。安政

和し、全體の植樹稍々莊重にして鎌倉時代の特色を見らる。妙見堂は三間社流造、屋根本瓦葺、藝設又略々辨天堂と同様にして手法に著しく唐様を存す。二建築共様式上鎌倉末期を下らざる造立なるべし。護法堂は辨天堂の東北一段高所に南面し、一に毘沙門堂と稱す。一間社春日造、屋根本瓦葺にして其構造様式全く辨天堂と規を一にし、僅かに、廻縁に高欄を存し、紅燈及び頭貫の末端に繪影彫刻を施せる點を異にするのみなり。建築年代前記二堂と同期なるべく、現に三堂共軒端に支柱を加へ、大いに美觀を殺ぐ。三重塔は三間三層塔、屋根本瓦葺、永祿五年の建立なり。本堂前面



(實圖) (聖法寺寺東一)

●天台宗。加西郡多加野村大字河内。

●天台宗。

●蓬萊山と號し、神龜五年、藤原房前の本願に依り徳道之を創建し、大和長谷寺の觀音堂の餘材を以て十一面觀音像を造立し奉安すと云ふ。初め法相宗なりしが、後、天台宗となる。徳治元年十二月十四日、火を失し講堂、常行堂、三重塔、鐘樓、經藏等燒失せしが貞和三年十月再建せり。近世山林九町四方、寺領五十石を有せり。

●境内に觀音堂・開山堂・不動堂・阿彌陀堂等あり。

●林寺(刀田太子堂) 加古郡加古川町北左家。

●天台宗。

●刀田山と號し、俗に刀田太子堂の名を以て著る。寺傳に用明天皇の十二年(一説二年)、聖德太子奉川勝に



命じ創立し給へる所云ふ。然るに本寺建立の事は上宮法王帝説にも見えざれば、太子薨去後の興隆なるべきか。



(寶圖) (堂本寺林館)

一説に武藏國大目身人部春則の本願なりとも傳ふ。鳥羽天皇の御宇勅願寺に列し勅額を賜ふ。時に嶋林寺と改むと云ふ。

往古は寺領二萬五千石ありしと云ふも、織田信長の時、六百石に、豊臣秀吉に至り、二百石に減じ、徳川家康に至りて百七十石となれり。古來、西播磨嶋寺と共に大和斑鳩寺の別院たり。



(寶圖) (堂行堂寺林館)

層、屋根入母屋造、本瓦葺、養老二年の創建と傳ふるも、堂内厨子の棟札により應永四年の再建なるを知る。屋蓋大なるも流れ緩く、反轉を作るが故に比較的輕妙の姿あり。手法は和様、唐様、天竺様の三様を混じ、觀心寺様を更に一步進めしものと云ふべし。太子堂は本堂の前方左側にあり、波瀾を以て接續す。方三間、單層、屋根寶形造、檜皮葺、構造頗る簡明輕快にして、京都法界寺阿彌陀堂を縮小せる感あり。内部の柱、壁面に優美なる佛龕を掛けりと云ふも、今剥落して辨じ難し。手法頗る法顯、藤原時藤原時代末期の特色を發揮す。内に安置せらるる木尊三尊、木造釋迦三尊、佛三尊は現に國寶に列せられ、太子堂と同様の遺作とせらる。常行堂は太子堂と左右均勢の位置にありて同じく波瀾を以て本堂に連る。桁行三間、

梁間四間、單層、屋根四注造、本瓦葺の建築にして構造頗る簡素、屋蓋の勾配緩やかに、軒の出可成りに深く、軒下廻縁と補衡を保ちて安定す。手法極めて自由、建築年代は恐らく太子堂と同時なるべし。護摩堂は境内の東邊にあり。方三間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺にして永祿六年再建なり。外形大和法隆寺地蔵堂に彷彿し、屋蓋の形態稍々整備す。今軒端に支柱を設けて之を支承せるは美觀を損ず。鐘樓は本堂及び太子堂の後背にあり。桁行三間、梁間二間、重層、袴腰、屋根入母屋造、本瓦葺にして應永十四年の建立と傳ふ。全態の形状整備し、補衡を保ち、木割手法よく室町時代中期の特色を存す。尙近年本堂西に寶物館を建立し寺寶大部は茲に展觀せらる。國寶指定となれるものを擧ぐれば次の如し。先づ彫刻の部に前記太子堂本尊木造釋迦三尊像三尊の外、銅造聖觀音立像一尊は藤下隨一の名作と稱せられ、唐風の立像にして少しく腰部を捻轉して天衣を左右に擱き、右手を擧げ左手を垂下し、安定の姿態と變化の妙を極む。肉身緊張して、然も均整の美あり、鬘澤淺くして又流轉爽快の感と與ふ。手法若實にして圓熟し、天平期遺品の優美として彫刻史上に光輝を添ふるものなり。木造十一面觀音立像一尊は藤原時代の作たり。木造嶋林寺願一尊は鳥羽天皇の宸筆と傳ふ。木造天蓋一箇は光心八葉の外方に雲紋を刻し、外邊に寶相華を彫り、八枚の吹返を附す。形體頗る優麗にして藤原時代を下らざる作なるべし。繪畫に就きて絹本着色聖德太子繪傳八幅は其内六幅は太子傳にして他二幅は之に關係せる善光寺緣起なり。南北朝時代の作に係る。同聖德太子像一幅は鎌倉時代の作にして現に奈良帝室博物館に出陳せらる。同慈惠齋正像一幅は天台の高僧良源の肖像を曼荼羅式に描けるものにして南北朝時代の遺作なり。同阿彌陀三

尊像一幅は慈悲慈式のもの、高麗末期の作なるべし。工藝にありて、木造漆塗厨子一基は徳川時代初期の精作なり。銅鑪一口は形體通常、裝飾簡單にして佛像天人等の牛内彫もなし。高麗朝の作とせらる。今加古郡高砂町尾上神社(神社舊高砂神社參照)、攝津國嶋滿寺(其項參照)に藏するものと並稱せられ、播磨名所遊覽圖會に「嶋林寺の古鐘は尾上鐘と共に漢製にして、日本の物にあらず。龍頭の傍に管の形を附け、孔子擔水座その餘の模倣より大さままで相似たり、攝州長柄嶋滿寺の鐘に比べ、千四五百年の物と鑑定せらる」と見ゆ。境内に太子鐘塚あり、附近には尾上神社、相生松、片枝松、高砂神社等存す。

十輪寺 加古郡高砂町。

●淨土宗西山派。●寶瓶山と號し、圓光大師二十五箇靈場第三なり。弘仁六年、弘法大師の開基に係ると傳ふ。始め眞言宗に屬せしが、後次第に類廢す。建永二年、法然此地を過ぎ、流夫治郎太夫なる者を化す。即ち右の者村民と圖りて法然を當寺に迎へ、仰ぎて中興開山となす。承元元年、淨土宗に改む。後ち堺浦の僧十萬護岐小松の庄神福寺に於て、弘法大師寶瓶の御影と云へるを得て本寺に納む。依りて地蔵山の舊號を改めて寶瓶山と號し、今日に至る。

●念佛山法泉院と號し、加古教信沙彌の遺蹟なり。教信沙彌は興福寺の碩學にして深く唯識、因明を究めしが、厭離厭土の念止み難く、同寺を出で、此地に來り草庵を結びて止住す。是れ本寺の遺蹟なり。教信、別に本尊を置かず、日夜唱名懈らず、世人稱して阿彌陀丸と云ふ。貞觀七年(一説八年)八月十五日寂す。往古寺製頗る隆盛にして、封境廣闊、支坊五十餘院寺領八百石、且佛供料三千貫を有せしが、後ち兵火に罹り衰頹す。後深草天皇の御宇、寺領三百石を賜り、寺門再び隆盛となる。後醍醐天皇元亨三年、一區の門弟深阿諸國に勸進し、常行三昧念佛を修す。是れ野口大念佛の起源なり。元龜、天正年間、再び兵燹に罹り、堂塔什寶悉く烏有に歸し、且寺領の沒收に遭ひて、寺運頹に廢頹す。其後漸次復興し、現に地方屈指の名刹たり。

權藏寺 加古郡平岡村大字新在家。

●曹洞宗。●野口大念佛に現に執行せられ、遠近の道俗參集す。古來八月十五日を以て結願の例なり。

●道林山と號す。白雉二年、法道僧人の開基に係り、後ち仁和年中、光孝天皇の勅願所に列す。次で宇多法皇茲に游幸し、本堂を建立し給へりと傳ふ。慶長年中關室堂秋の代池田輝政之に高十石、山林六町歩を附す。正保三年觀音堂を、寛文四年本堂を再建す。現に郡内右數の名刹たり。

長樂寺 印南郡西志方村大字水室。

●淨土宗西山派。●治承二年、僧慈心の開基に係り、初め眞言宗なりしと云ふ。豐臣氏の時、全山火災に罹り唯本尊地蔵菩薩のみ残りしが、後ち寶永年間、専空念教今の所に堂宇を建立して地蔵尊を安置す。爾來、淨土宗となれり。●本堂は六間四面、外に阿彌陀堂、庫裡等を具ふ。本尊木造地蔵菩薩半跏像一尊は極彩色、玉眼入、鎌倉後期の作、京都壬生寺の地蔵より更に寫實的にして現に國寶に指定せらる。俗に延命子安地蔵と稱して衆庶の信仰厚し。●地藏盆法會(八月二十三日)、近郷より賽者雲集して盛大を極む。

時光寺 阿彌陀堂 印南郡阿彌陀村大字阿彌陀。

●淨土宗西山派。●遍照山と號し、一に阿彌陀堂とも云ふ。建長元年、僧時光之れを創建す。時光は多田滿仲九代の孫に當り、



俗名を源經家と云ひ、天福元年、淨橋寺西山の法弟となり、時光坊と號し、伊保崎村心光寺に入る。後、建長元年、阿彌陀佛像を感得し、同國曾根天滿宮の傍に一字を建て、安置す。是れ本寺の濫觴なり。同六年、後醍醐天皇勅使を下し、北原の地十餘町を寄せ、勸願寺とせらる。後、同様に擴りしが、文永十年、今の地に移りて再興さる。

本徳寺 (龜山御坊) 佛曆郡佛曆町龜山。

●眞宗本願寺派。●俗に龜山御坊と號し、本願寺派の別格別院なり。明應年中、本願寺八世蓮如の開創に係る。初め、佛西郡英賀村に在りて蓮如の第二十五子實玄之に住持たり。爾來、本願寺連枝を以て法統を嗣がしむ。天正八年、豐臣秀吉より寺領三百石を寄せられ、寺基を現地に移す。慶長七年、本願寺東西二派に分る。や、本院大谷派に屬せしが、同十四年、池田輝政の後援によりて本願寺派に轉ず。仍て大谷派にては別に本徳寺を龜路に再興するに至り、里人之を區別して龜山本徳寺と號す。近世幕府より寺領として米印四百三十石を附せらる。●境域五千三百餘坪を有し、堂宇に本堂・蓮如堂・集會堂・方丈・經藏・茶所等を備ふ。寺實には實如筆御文章一通・天正八年豐臣秀吉寺領寄附狀一通・後關成天皇宸翰和歌・後奈良天皇御色紙・後西院天皇御色紙各一幅を藏せり。

隨願寺 佛曆郡水上村大字白國。

●天台宗。

定額寺 佛曆郡花田村大字小川。

●黃檗宗。

●金剛山と號す。開創年代不詳なり。もと定額山金剛寺と稱せしが、數度の兵燹に堂塔の燒失一再ならず、殊に弘治永祿年中別所小寺の兵亂には國分寺と共に境内焦土と化し去れり。寛永年中、臨濟の周道此地に來謁し、本寺を再興して現稱に改む。承應三年、黃檗山の隱元來朝するに及び、雪堂首座、宗風舉揚の志を以て、經路河間の雲松寺(高治三年安桂開基)二代揚宗を請じて中興となす。爾來、黃檗宗に屬し、現に同宗別格寺なり。●境内七百七十餘坪、寺境高敞にして老松繁茂し、頗る深遠の氣あり。所在の堂宇は本堂・庫裡・經藏・土藏・鐘樓堂等なり。寺實には光嚴司軍三佛・隱元禪師筆扁額等あり。

圖教寺 (書寫山) 佛曆郡曾左村大字書寫。

●天台宗。

●書寫山と號し、西國三十三所第二十七番の札所たり。康保三年(一説永延二年)、僧性空の創建に係る。初め性空日向の露島山に在りて法華經を讀誦し、苦修練行せしが、後、當山に來り草庵を結び、道俗の歸依を受く。遂に國司藤原季厚佛堂を造立し、莊田を寄せ漸く伽藍を成す。寛和二年及び長保四年の兩度花山法皇行幸ありて國家鎮護を祈念せられ、勸願所となし給ひ、承安四年には後白河法皇行幸あらせらる。源賴朝又崇敬厚く、吾妻鑑に「又播磨國書寫山事、二品御歸依異他、性空上人聖跡、不斷法華經讀誦之靈場也云々」と見ゆ。貞永年中に至り、後醍醐皇統して堂舎を再興し、

●増位山と號す。寺傳に初め聖德太子此地に於て、自像を岩石に刻まれしが、天平七年、行基菩薩其靈跡を訪うて山麓井出村に泊し、藥師佛の示現を蒙り一寺を創す。乃ち藥師、日光月光、十二神將の像を安置し、尙ほ自像を其奥ノ院に置く。これ本寺の起原なりと。後嘉祥年間、觀山義眞の弟子法勢、仁明天皇の勅を奉じて寺を天台宗に改め、勸願を賜はる。寛平十年、勸により長吏職を置く。昌泰三年、醍醐天皇此地に臨幸あり。正曆二年、國守藤原信理七間の講堂を造る。後鳥羽、土御門の兩天皇本寺を崇敬せらる。こと厚く、勸して最勝講を修せしめ給ふ。元徳元年洪水あり、堂塔傾倒せしより、白國山に移建す。後、經路城西に再燒失す。同十三年舊地に伽藍を重興す。近世經路城主楠原氏の墓所となる。舊寺領四百八十石を有す。現に寺中三箇寺を有し、書寫山圖教寺と並稱せらる名刹なり。

國分寺 (牛寺) 佛曆郡御國野村大字國分寺。

●古義眞言宗。

●牛堂山と號す。俗に牛寺と稱し高野末なり。神功皇后三韓征伐の朝、行在所となし給ひし舊址と傳へ、又靈異記に見ゆる遺蹟の遺址と稱せらる。推古天皇の朝聖德太子伽藍建立あり、次で天平年中聖武天皇、當山を以て播磨國分寺と定めらる。寺記に依れば、當時、南大門より奥ノ院まで南北二里、東院西院の間東西六十餘町あり。南大門址は本寺より二十町南、見野本郷の二階堂と云ふものは是なり。奥ノ院は八重畑の觀音堂之なりと云ふ。また印南郡阿彌陀に東院の址と傳ふるものあり。以て當時の盛觀を窺知し得べし。然るに中世の兵亂に喪上し、其後次第に衰微して今日に至る。●境内二千二百五十餘坪、本堂(七間四重)、庫裡・觀音堂・開山堂・金毘羅堂・辨天堂・鐘樓・山門等を具へ、外に四國八十八箇所所寫しなる小堂宇あり。本尊藥師如來は行基の作と傳ふ。寺實として傳弘法大師作辨財天像・五大力明王畫像・菅菴相賀像・金剛薩埵像其他佛畫及び古文書數通を所藏す。寺境附近に大饗の境りたる多し。國分寺址として史蹟に指定せらる。●寺の東南二町餘に火山と稱する地あり、神功皇后征討の時、靈牛の出現せし舊跡にして、靈牛は大威德明王の化身なりと言ひ傳へ、爾來山號を牛堂山と稱すと云ふ。又附近壇場山古墳同じく史蹟指定地なり。

延命寺 佛曆郡御國野村大字御著。

●天台宗。

●大同年中、圓仁の開創にして、圓仁自刻の阿彌陀佛を本尊とすと傳ふ。往古寺運大いに振ひ、伽藍亦莊麗を極めしが、戰國時代兵燹に罹り、一山焦土と化してより、寺觀著しく衰頹す。寶曆年中に至り、惠輪堂文曆二年、九柱道家五重塔を造立す。寛元二年、二重十五間の食堂、並びに梁屋、經藏等を改修す。實治二年、後醍醐上皇同國餘部莊を寄せて寺領とし、初めて五種妙行を二位法眼經性建立の理教院に行はる。弘安年中、如意輪堂を八間に改造す。元弘元年三月、雷火に罹り、講堂、食堂、常行堂等喪上せしが、兩三年の後に再興成る。●同三年五月二日十七日、後醍醐天皇隱岐より還幸の途、御參詣ありて安室郷を寄せ給ふ。足利尊氏又丹後志樂莊を寄す當時近江延曆寺、伯耆大山と並び天台の三大道場として寺運大いに振ふ。天正六年豐臣秀吉、軍を此國に進めし時當山に陣すと云ふ。江戸時代寺領八百三十餘石を有す。明治三十一年、寶庫に火を失し、寶器、文書等多く燒失し最近又本堂喪上せしが、近年之が再建に着手し、昭和



(實圖) (堂講大寺教圖)

八年、落慶供養を修す。現に寺中十一箇院を有す。●經路市を去る西北約二里、坂路を登る二十五町、標高千二百四尺の書寫山上に在り。境域九萬二千七百七十餘坪を占め、老杉古柏鬱蒼たる間に摩尼殿(本堂)、大講堂・鐘樓・食堂・常行堂・開山堂・法華堂・根本堂・如意輪寺(女人堂)・輪觀音堂・本坊・庫裡・山門・奥ノ院・金剛堂等隱見す。就中、大講堂、鐘樓、金剛堂は現に國寶建造物なり。大講堂は本寺の奥區に當り食堂、常行堂時に在り、桁行七間、梁間六間、重層、屋根入母屋造、本瓦葺の大堂宇なり。元弘元年の建築と云ひ、細部の手法様式に於て著しき特徴を有せざるも、稀に見る大建築なると共に、天台宗開創當時の堂宇の形式を傳へ、我邦佛宇建築中貴重なる遺構とす。堂内木造釋迦、文殊、普賢三像を安置す。三尊共に一木彫成の塗箔像にして相觀及び鬘藻に弘仁期の特色を存し、作風剛快なり。中尊光背、臺座は鎌倉時代の補作なるも尙に能く調和の妙を得たり。同天王立像四軀亦一木彫の古法を用ふるも、よく飛動の趣を加へ、曠目開口の姿も雄々しく、中にも持國、增長二天の如きは頗る動的なる相を示す。藤原時代の作にして何れも國寶に指定せらる。金剛堂は奥ノ院にして三間四面、單層、屋根入母屋造、本瓦葺、構造簡單なるも木割極めて緻細、屋根幾分重壓の感あるも軒端反轉に乏しからず、姿態優美なり。其建立年次明らかならざるも、様式手法上室町時代の建築となすべし。鐘樓は大講堂前を左に折れ、金剛堂に至る途中にあり。桁行三間、梁間二間、重層、袴腰、屋根入母屋造、本瓦葺にして元弘二年の建立と云ふ。屋蓋重厚にして腰の廻縁輕く袴の張り出し少く、樞衛必ずしも美ならざれども、木割雄大にして室町中期の手法を見るべし。尙ほ境内に後醍醐天皇御車寄址、和泉式部石塔、雲水の井(一に



辨慶の井) 山中に天吼石、甲石、六本杉、如意輪等名蹟景勝多し。  
●摩尼殿修正會(二月十八日)、開山堂開山忌(四月十日)。

彌勒寺

御郡菅野村大字寺。

●天台宗。



(寶蹟)(家本寺勸修)

●通寶山と號し、書寫山園教寺の別院たり。康保三年、性空當國書寫山に入り圓教寺を開きしが、次で長保二年、更に當地に來り、四圍の風光宜すべく修行の地に選ぜざるを以て一字の草庵を結び、晩年茲に止住す。是れ本寺の草創なりと云ふ。長保四年三月、花山法皇、平公誠、權則光、延源阿闍梨等と共に圓教寺行幸の節、本寺にも御覽を向はしめ給ひ、一七日の間に空に法問ありしが、法皇觀感深く播磨宿禰延昌に命じ諸堂を建立せしめらるると云ふ。

●本堂・奥ノ院(性空自作自像を置く)・三聖堂(日吉山王二十一社)・護法堂(性空隨侍乙天、若天の二童子像安置)等具備る。本堂は康保二年の建築に係り、桁行三間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺にして、其格子天井は精緻を極め、現に國寶建造物に指定さる。安藤作彌勒菩薩を本尊とし、性空自作自像津姫像(安藤守護神、本地子安大菩薩を安んず)。

●元三會(一月三日、開山會(三月十日)、山家會(六月四日)、法會(八月十五日))。大般若會(九月十六日)、天台會(十二月二十四日)。

金剛城寺

神時郡福崎町田口。

●古義眞言宗。

●七種山と號し、高野山に屬す。もと滋潤寺と稱せしが、後ち金剛城寺と改め、中世更に作門寺と改稱す寺傳に據るに推古天皇の御宇聖德太子の地三寶相應の靈地なりとて、僧惠灌を請じて開山とし、國家安穩の新願所となし給ふと云ふ。惠灌は高麗の僧、隋に遊學して高僧吉藏より三論の深義を受け、後ち來朝して元興寺に住し、日本三論宗の開祖と稱せらる。本寺亦三論宗の遺蹟たりしも、後ち空海本寺に留稱して護

摩秘密の修法を行ひしより眞言宗となれり。天平四年機亡し、聖武天皇勅して再建せしめらる。降りて觀應元年、再び機失す。時に足利尊氏御靈遣營の實として當郡名柄の庄を寄せしが、文明十年、三度回祿の災に遭ひ、繪旨、古記録、什寶等多く機失す。慶長年間、表願其極に達せしを、明覺堂塔を復舊せり。慶安二年、復又大災に罹り、堂塔烏有に歸す。明治維新に際して寺領上地し、次で阿彌陀堂及び庫裡の七種山上にありしを、田口村の中央西山の麓に移せしが、近時本堂、仁王門、客殿、寶藏、廻廊を移轉して御靈堂塔の結構往古を想起せしむるものあり。昭和三年諸堂の完成を期し、金剛城寺の舊稱に復す。

法樂寺(大寺)

神時郡栗實村大字栗實町。

●古義眞言宗。

●金樂山と號し、世に大寺の稱を以て著る。現に高野山に屬す。元亨釋尊像誌に據るに、往古蘇我入鹿の臣秋夫なる者從軍して不在の際、其僕秋夫の妻と通じ、秋夫の歸宅するに及び、山嶽に託し深山に誘うて之を試せんすとす。時に秋夫の愛養せる二犬隨ひて傍に在りしが、之を知り却つて僕を殺して想に報ひて。秋夫大いに喜び、歸宅して妻を逐ひ、約して二犬を我子となす。犬の死後一寺を創し千手觀音を奉安して永く其冥福を修せり。後ち桓武天皇勅して官寺に列し田數嶺を寄せ給ふと云ふ。慶長年間、領主池田輝政領三十石の永代黒印を附せり。

神積寺(田原文殊)

神時郡田原村大字東田原。

●天台宗。

●妙徳山と號し、俗に田原文殊の名を以て著る。もと田原神社供僧寺たり。峰相記に據るに、正曆二年、慶芳内供(大納言範朝の息)田原庄有井村に一宿し、粟師如來の靈夢を感じ、遂に本寺を創建す。時に範朝の室、一條、三條兩天皇の乳母たるの故を以て其御願寺となり置土兩州の貢を以て多寶塔、常行堂を建て、三條天皇第七皇子覺願内供の弟子として寺務を管す。延慶二年、回祿に罹り烏有に歸せしが、寺僧四方に勸進し、再興を遂ぐと云ふ。

岩屋寺

神時郡豐富村大字神谷。

●天台宗。

●有乳山と號す。孝徳天皇の御宇法道仙人の開創に係り、同天皇の勸願所なりと云ふ。往時本院六院、衆徒十八坊を有し、寺門盛觀なりしが、天正五年十月、別所氏來りて燒却す。慶長六年、姫路城主池田輝政の臣坂太夫宗徳當山の麓麓を噴き、城主に請ひて境内を定の堂宇を建立せり。寛永二年、當村修験僧眞惠一小坊を建立し岩屋寺を復興し、同十四年、千壽院秀山奉加を企て、承應二年大破せる本堂を修營す。寛文二年、比叡山行光房第六世靈當山を重せしが、其遺願以來無住となり、殆んど廢寺に近し。時に城主松平直矩、嗣久太郎を得しに、夫人乳なし、即ち當寺本尊を祈りて驗ありしかば大いに崇敬し、本堂を改築せり。有乳

山の山號是れに基づくると云ふ。

●毘沙門堂安置の木造毘沙門天立像一軀は大正十二年三月國寶に指定せらる。高さ三尺二寸二分、寄木造極彩色の像なるも、一木造の如き充實さを示し、諸所に殘る彩色と幾金との美しき文様、全體より受ける柔軟性に、藤原時代の特色を窺ふを得。

●初實會(舊曆一月初實の日)、夏會式(七月十五日)。

八葉寺

神時郡香呂村大字須加院。

●天台宗。

●八徳山須加院と號す。正曆年間、僧寂心の創建なり。寂心は實茂忠行の第二子にして、俗名を慶滋保胤と云ひ往生傳の遺失たる日本往生極樂記の著者として著名なり。家世々天文、呼號を以て朝に住へしも、保胤生來才に富み文に巧みにして純論と稱せらる。身官にありと雖、心常に淨刹を慕ひしが、寛和二年、遂に齋巖して叡山横川に登り、止觀を増實に勵き、淨業を源信に學ぶ。後ち四方に遊歴し、晩年當山に入り、其地勢八葉の瑞相を表せるを以て正曆年間一字を報し、之れに處居す。書寫山性空との交遊殊に深かりしと云ふ。長徳三年、洛東如意輪寺にて寂す。後ち三條天皇繪旨を下し、其勸願寺となし給ふ。

圓光寺

揖保郡龍野町龍野。

●眞宗大谷派。

●文明三年、結全の開創に係る。初め當國御郡栗實村に在りて、本總寺又は栗實御坊と呼ばれ、當國に於ける眞宗最初六坊の一と稱せらる。第四世祐惠の代之を現地に移し、圓光寺と改む。寛永五年、本山より

如來寺

揖保郡龍野町龍野。

●淨土宗西山派。

●天文二年、賢正の開創に係る。寛文六年十二月、現堂を再建す。同十二年、脇坂中務大輔安政、信州飯田より移封するや、當寺を其菩提所となし、寺田若干を附す。郡内に末寺十餘院あり、西播に於ける本宗第一の巨刹たり。

大覺寺

揖保郡千町與濱。

●淨土宗西山派。

●龜立山と號す。天福八年(一)に同元年(定壽)の創建に係る。後ち釋淨新殿造營の本願を發し、一字三禮の小經を書寫し、有縁の地を渴仰せしが、時に白鶴翔舞の瑞祥あり、始めて龜立山大覺寺と號すと云ふ。初め眞言宗に歸せしが、弘治年間現宗に歸す。舊時寺領若干石の朱印地を有せり。



龍門寺

掛保郡細町濱田。

臨濟宗妙心寺派。領主京極高豐、僧水塚(佛智弘濟禪師)の徳風に歸し、萬治元年(一)に寛文元年(古寺の舊址を興して本寺を創建し、水塚を請じて開山となす。水塚字は盤柱、本寺所在地濱田の人、隨應寺雪祥に就きて得度す。後美濃日立幡五龍庵、慶安三年長崎崇福寺、同四年大和吉野山、正應三年備前三友寺等に轉住し、幾許もなくして郷里に歸り、母に孝養す。萬治二年本寺に入りしが法威大いに振ひ、寺門亦興隆す。元禄六年九月三日、本寺に寂す。現に西播磨指の禪刹たり。

寺域六千三百坪を有し、古松鬱蒼たる間に本堂・觀音堂・地藏堂・不動堂・禪堂・開山堂・瑞鳳庵・庫裡・方丈・鐘樓等あり。本尊十一面觀音は盤柱一刀三體の作なりと傳ふ。寺寶として不動像・刺繡涅槃像・櫻町天皇御綸等其古文書類多數を藏す。門前刈谷街道の左側に水塚手植の松並木あり、俗に片根の松と稱す。

天宮寺

掛保郡細町嶋。

一に嶋寺に作り、太子寺と俗稱す。もと大和國法隆寺の別院なり、上宮聖德法王帝説に據るに、戊午年(推古天皇六年)四月十五日推古天皇聖德太子の岡本宮に於ける講經の講經を聞き給ひしが、天皇即ち布施として掛保國掛保郡佐勢の地五十萬代を賜ふと云へり。次いで聖武天皇十年には更に掛保郡十二町二段の畑地

と五箇所の山林並に掛保郡佐々山池畔、又米穀を貯藏すべき莊倉として掛保郡に一所並に食封二百戸の内掛保郡林田郷五十戸を寄進し給へり。されば當地方の饑多なる産米は古來法隆寺の有力なる資源たりしなるべし。自ら法隆寺の支院設置の必要に逼られしなり。寺傳推古天皇十四年聖德太子創建説は今之を明瞭にして得ざれども略々之に従ふべく、早く王朝時代に堂塔伽藍の盛時ありて法隆寺と深き關係を有し、朝廷の厚き尊崇を得たるは想像に難からず。文治三年三月、本寺領、地頭金子某により押領せらるゝを知り直ちに後白河院の院宣に従ひ、其押領の禁止を會する事書妻鏡に見ゆ。是れ此地聖德太子の靈蹟たるを以て特に厚き保護を加へしものなり。建武以來南朝の主將新田氏の所管となり、足利尊氏親征後、當寺附近屢次大會戰地となりし事太平記に見え、法隆寺文書の一に、新田義貞が延元元年の激戦に際し、法隆寺領にして鹿嶋寺の所在地たる嶋村附近の損害を受ける事認め、四條隆實に其由を報告せしものあり。この文書中鹿嶋寺の名見えざりしものなるべし。當寺所藏の應永記録に據るに、應永二十五年には寺領二百五十石を有せしもの、如く、永正十三年六月、本寺の修築行はれ、爲に大和法隆寺より人を派せし事見えたり。天文十年四月、兵火に罹りしが弘治年間、嶋々山圓壽寺の僧昌仙公に勸助して之を再興し、天宮寺に屬せしむ。天正年間、豐臣秀吉中國毛利氏を伐たんとして西下し、本寺に陣するや豊軍會を執行して祈禱を行はしめ、同八年三月、寺領を三百石と定め、翌年滅して掛保郡寺内村にて五百五十石を寄進せり。慶長十八年十二月、姫路藩主池田輝政より百五十石を寄せ、明治維新前百三十石に減す。寺傳には往時寺内には三十六の塔頭寺院ありしと云ふも、今僅かに寶壽、佛壽、双樹、禪林の四院存するのみ。

寶林寺

掛保郡掛保村大字門前。

臨濟宗大徳寺派。大徳寺開山宗業妙超(大徳國師)の誕生地にして、妙超其師に一字を創し、安居の地となせしが、中世、兵燹に罹り、廢刹となる。其後、天文年間、萬切、其遺蹟に庵を結び、寶林庵と號す。明治十四年に至り、眞田精時、本山の命に依りて其庵を興し、寶林寺を公稱して現在に及ぶ。

福壽寺

掛保郡大田村大字東保。

眞宗本願寺派。眞宗本願寺の巨刹なりしが、明應年間、住僧惠玄眞宗に歸依し、後安永年間、秀慶の時遂に改宗して

本願寺派に屬せり。其後、惠門なる者あり、傳學にして萬信の開き高く、化を四方に布き、また寺内に護國寮舎を設けて宗意を宣揚す。本山其徳を賞して權律師となし、易往庵と號せしむ。之を東保一流の鼻祖とす。惠門の後二世を隔て、惠了出づ、特に唱導に巧にして、夏の二期は寺内の寮舎に徒を集めて布教學を講ず。門下遂に三千人に及ぶと云ふ。寮舎は其後尙ほ布教學を講究するの道場として今も繼續され、創立以來其門に集まりし者一萬人を超ゆと云へり。

大日寺

掛保郡掛保村大字朝日谷。

古義眞言宗。朝日山と號し、俗に朝日山觀音の名を以て著聞す。大化元年、法道仙人之を開創すと云ふ。爾來寺門隆昌を極め伽藍壯麗なりしも、天文年間、兵火に罹り、一山廢土と化す。其後、再建成りしも遂に舊觀に及ばず。現に同宗仁和寺末たり。

見性寺

掛保郡室津村。

臨濟宗相國寺派。室津山と號す。俗傳に往古當地長者の女(室君と通稱す)深く佛道に歸依し、見性、淨名、大雲、正洞、正法の五箇寺を建立す。本寺は其一にして開山は玄海龍符なりと傳ふ。後衰頹せしを京都相國寺在中之を再興す。依りて在中を中興の開山に推す。

花岳寺

赤穂郡赤穂町加里屋。

曹洞宗。靈雲山と號す。常陸國笠岡正福寺住僧秀慶、時の國主淺野長直と親交あり。正保二年三月、内匠頭長直封を掛保赤穂に移さるゝや、其途次近江青龍寺に轉住せる秀慶を屈請して赤穂に來り、直に本寺を創建し、之が開基とし、笠岡の舊名を追ひて正福寺と稱せしむ。明暦二年、長直父母の法號に期りて靈雲山花岳寺と改む。元禄の事變により淺野家斷絶の後水井、森氏等領主の香華院たり。享保十七年、當寺七世益龍の時、義士水儀堂を建立す。

境域約一千八百餘坪、本堂には釋迦如來像を安置し、義士水儀堂には大石眞雄守本尊手觀音を安置し、義士三十三回忌に彫る義士水儀其他義士に關する多くの書畫・器具・刀槍・武器等を陳列す。山門は維新



(花岳寺山門)

の際赤穂城破門を移せしものなり。寺寶頗る多く、其大部分は義士關係のものなり。即ち四十七義士連名狀・大石眞雄歎乞狀・大高源吾母への嘆乞狀・復讐報告祭文・觀音妙理劍・大石眞雄留別品縁起書・四十七士出立書像等其他數十點なり。前庭に大石眞雄名殘りの松あり。眞雄幼少の頃赤穂の東なる相生の山中より手づから移し植へしもの。現在のものは其代木たり。境内には義士の遺骸を埋めし墓、淺野公大石内藏助、山鹿素祀りし靈廟、淺野家歴代の墓碑、大石家一門の墓等あり。其入口に忠義塚ありて元禄時代義士論議者として名高き藤江忠臣文を草し、藤田温信之を著し以て義士を表彰す。側に大石邸より移し植へたる櫻ありて忠義櫻と名付け、大野九郎兵衛屋敷より移し來れる柳を不忠柳と云ひ、二者を相對せしむ。



●義士命日法會(二月四日)、淺野長矩公命日法會(七月二十四日)、山鹿素行命日法會(九月二十六日)、義士追善會(十二月十四日)。

赤穂別院(妙慶寺) 赤穂郡赤穂町。

●興宗大菩薩。

●妙慶寺と號す。東本願寺第十三世宣如の開創に係る。もと江戸淺草地内にありて妙慶庵と號せしが、當時赤穂城主淺野内匠頭長直宣如に歸依し、萬治元年、此地に境域を寄附し其臣近藤三郎左衛門をして赤穂城建築の餘材を以て建立せしめ、東本願寺御坊と稱す。同年、釋玄正を輪番とし、以後交代輪番の制とせしが文化年間、常在の制となれり。明治十三年、大谷派本願寺赤穂別院と改稱す。

最明寺 佐用郡三日村大字春蔵。

●古義眞言宗。  
●草創沿革不詳なるも、現に御室末なり。  
●寺寶中、木造北條時頼坐像一軀は國寶なり。嘗て時頼諸國巡歴して此地に來り、一小堂を造り、當像を刻みて遺せりと傳ふ。事實に就きては明確なる證據なきも、製作年代少くも時頼を去る事遠からずと推知せらる。

光久寺 栗東郡安師村大字安志。

●眞言宗臨頓派。

●草創年代並に沿革不詳なり。  
●寺寶中、木造不動明王立像一軀・絹本着色迦伐羅尊者像・注茶半託迦尊者像各一軀は國寶に指定せらる。不動明王像は寺傳に承安元年正月高倉天皇より小笠原氏の遠祖加見道光に賜ひしものにして、爾來小笠原氏の重寶たりしが、享保元年此地に封せらるるや、納めて當寺に奉安せしものと傳ふ。首を左方に傾けし異像にして製作期大略寺傳を信じ得べし。尊者像二軀は現に恩賜京都博物館に出陳せらる。

瑞瑠寺 栗東郡三河村大字船越。

●古義眞言宗。

●船越山南光坊と號し、高野山末なり。當寺緣起に據れば聖武天皇神龜五年二月、當國茂美の方に夜光ありて萬民驚愕せり。事蹟聞に達し、其光の源、栗東郡乾岳なる深林の巖洞に發せる事判明するや、勅して行基を乾岳船越山の麓横坂に至らしむ。時に一老翁若勝黄金の相を示現するの奇蹟あり、行基此靈驗を奏せし、併せて伽藍を建立し醫王靈體出現の姿を自ら刻せる千手千眼觀世音像を奉安す。次いで伽藍の工成りて千軒千貫の寺田を賜はり、瑞瑠寺樂師院と號し、郡内諸寺悉く末寺たるべき宣旨を賜ふと云ふ。往古山内十二院、七十二の坊舎ありて盛火を誇りしが、建武年中、兵燹に罹り寺觀衰頹す。正平年中、領主赤松則村之を修築し、寺領山林を寄せ、覺祐を推して中興開山とす。寛永九年十月、同縁に罹り、堂宇、寺寶一切を燒燬せしが、領主松平輝澄寺領五十石を附し以て再興に實す。萬治三年東福門院、護摩堂、東照宮社等を建立せらる。當時聖護院兩峯大先達繼に補せられ、西部三十三箇國修驗道を管領す。

光行寺 城崎郡豐岡町滋茂。

●眞宗本願寺派。

●護法山と號す。神龜三年、眞光抄存の開基と云ふ。初め本郡五ノ莊村字高屋に創設せられ、光妙寺と稱す。後承久の役にあたり北條義時、後鳥羽院第三皇子雅成親王を當國に遷し奉る。嘉祿二年、親王本寺に遷座あり、建長二年、寺内に薨去し給ふ。親王の靈應京都にありて體胎せしが、親王の後を追ひて當國に下り、氣多郡松岡村にて王子を分獲し、遂に入水して果つ。光妙寺の住持圓空、王子を養ひて弟子となし淨圓と名付く。後淨圓京師に上り大いに佛法を修め、歸りて光妙寺に住すと云ふ。永仁二年、本堂を高屋村より今の地に移し、眞言宗を改めて眞宗とし、正徳二年、光行寺と改稱す。現に末寺四箇寺あり。  
●境内二千五百坪、本堂・庫裡・方丈・眞影堂等を具備す。雅成親王御墓は本寺の西一里、五莊村大字高屋の内御所谷にあり。

養源寺 城崎郡豐岡町新屋敷。

●曹洞宗。

●大原山と號し、慶長二年豐岡城主杉原重刀の創めし所、天室青巖を以て開山とす。近世寺内に認可僧堂設けられ、當國有数の名刹たり。現に末寺三十箇寺を有す。  
●境地もと京極邸址にして、北に來日嶽・南に龜山を望み、門前朝來川流れて風光殊に見るべし。寺域二千三百餘坪、本堂・開山堂・位牌堂・衆寮・地藏堂・禪堂・澄懷亭・書院・方丈・鐘樓等の堂宇完備せしむ。大正十四年五月の大震災に罹り、堂宇多く燒亡す。  
●地藏堂子安地藏尊の信仰厚く、毎年舊曆三月、九月各二十三、四日兩度の供養會には賽者接踵す。

温泉寺 城崎郡城崎町湯島。

●古義眞言宗。

●末代山と號し、高野山末なり。天平九年の草創にして、城崎温泉の開祖僧道智を開山とす。初め佛師精文會病を治せんとして城崎にあり、一日海邊に遊び嘗て己が作りし觀音像の溺着せるを拾ひ、道智に圖りて伽藍を營む。是れ本寺の濫觴なりと傳ふ。天平十一年、聖武天皇勅して末代山温泉寺の號を賜ふ。後兵燹にかゝり衰頹せしむ。至徳二年に至り清禪之を再興し、寺運大いに振興す。仍りて清禪を中興開山とす。降りて正徳元年、祐赴再び伽藍を修營す。舊時寺領に若干の朱印地を有し、別當坊(現温泉寺)の外に歡喜院、北の坊、中の坊、深海坊、中性院、大門坊、無量壽院、喜見坊等ありしが、明治維新後廢合せられ、近年まで中性、大門の二院存せしは是亦遂に廢せらる。



(寶圖) (堂本寺泉温)

●寺境甘藷芋半畝に當り、江に臨み石被三折す。本堂は大悲殿又は圓通閣とも稱し、桁行五間、椀間五間、單附、屋根入母屋造、茅葺の建築にして屋根の勾配頗る急、且つ厚重にして樞衡を失す。今軒端支柱を以て支へ、外觀を損ずと雖、尙ほ軒下原形を維持するを見らるべし。全態として構造様式頗る自由、和様、唐様、天竺様の三様を演進せし所を深究す。寺の伽藍は、堂宇、寺寶一切を燒燬せしが、領主松平輝澄寺領五十石を附し以て再興に實す。萬治三年東福門院、護摩堂、東照宮社等を建立せらる。當時聖護院兩峯大先達繼に補せられ、西部三十三箇國修驗道を管領す。

大乘寺(應舉寺) 城崎郡香住町森。

●古義眞言宗。

●龜居山と號し、俗に應舉寺の名を以て著聞す。高野山末なり。天平十七年、僧行基の開創に係ると云ふ。初め、字森の下にありしが、安永年中、住持密藏堂字の再興を企て、成らず、其弟子密英遠志を繼ぎ、天明年中、寺基を現地に移して再興す。密英嘗て京都に在るの日、圓山應舉に寶を與へて江戸に繪畫を修せしむ。應舉業成るや本寺に來り、其弟子慶雲、源崎、吳春等と共に寺内の棟、屏風、軸物等に揮毫し、以て恩誼に酬ゆ。應舉寺の稱之れより起れり。  
●堂宇に本堂・樂師堂・鎮守社・寶庫等を具ふ。本堂安置の木造聖觀音立像一軀は丈高三尺三寸一分、共木彫出寶冠を戴き、白毫に水晶を嵌す。面相温雅、寺傳に行基作と傳ふるも藤原時代の作なり。兩手足、龕座は後世の補作に係る。同觀音立像一軀は丈三尺二寸兩手足、龕座は後補、藤原初期の作なり。同十一面觀音立像一軀は丈高四尺六寸、藤原末期の作にして同じく兩手足、龕座後世の補作なり。三軀共に國寶たり。堂



内上段の間張付及び襖の懸架の筆になる紙本墨画山水圓四枚は天明七年筆者五十五歳の時の筆にして畫面平遠廣闊の氣に滿つ。芭蕉の間の紙本着色郭子儀圓機八枚は金地に濃彩を以て芭蕉の傍に懸る、六人の童子及び白髮の郭子儀を描く。次に佛間なる紙本着色圓機十六枚は金箔地に水墨を以て三羽の孔雀及び松樹岩石を描く、寛政七年筆者應舉六十三歳の時の筆なり。三間を通じて畫面の統一と圓熟せる其寫生的技法は驚嘆に値す。各畫何れも筆を存し、現に國寶に指定せらる。尙ほ此孔雀間に隣接し、吳春の筆に成る四季耕作の間あり、又上段の間裏手に當りて應舉一派の筆と稱せらる、龜の間、獅子の間等存す。此外、應舉の筆蹟として保存せらるるもの頗る多し。

●大法會(陰曆六月十八日)。

**常釋寺(上寺)** 城崎郡香住町下濱。

●古義眞言宗。  
●一に上寺と稱し高野山末たり。開創年代不詳なり。もと殿堂御堂具備せし大寺なりしが、年々共に衰頹せしを、文武天皇壬寅大寶二年の年、僧道照來りて復興すと云ふ。仍りて道照を中興開山と仰ぐ。  
●境内五百七十九坪、本堂・客殿等を具備し、本尊に薄聖德太子作帝釋天王を安置す。奉安の水造聖觀音立像一軀は杉材の一木彫にして、着色剥落し腰以下に衣紋及び右手掌等甚だしく腐朽せり。寺傳照作と云ふも藤原初期の製作に係り、現に國寶たり。  
●毎年一月及び八月の十五日に會式あり、中にも八月十五日は手踊り等ありて參詣殊に多し。又本尊帝釋天王の開扉供養を十三年目毎に行ひ、近くは昭和四年に執行せり。

**文常寺** 城崎郡三江村大字鎌田。

●古義眞言宗。  
●草創年代並に沿革不詳なり。現に本宗高野山末たり。  
●奉安の水造聖觀音立像一軀は國寶なり。丈高二尺一寸八分、刀法纏細にして藤原時代の特色を存す。但し臺座は後世の加補なり。

**長松寺** 城崎郡田鶴野村大字下鶴井。

●曹洞宗。  
●高野山と號す。開創年代不詳なり。もと龜山の境にありしもの、如く、今其舊礎を殘せり。永享年間、眞言宗を改めて禪宗となす。竹堂慧嚴之が中興開山たり。其後、若州妙徳寺の末系となる。天正元年、兵亂に遭ひ、境内焦土と化し、現地に移る。後、庭心、樹敬と云ふ兩院、相繼ぎて再建に盡力し、田畑山村を寄附し、稍々舊觀に復す。明治十九年五月、村内火を失し、本堂其他十二棟及び什寶悉く焼滅せしが、同二十年、住僧僧德、十方に勸進して再建に努め、同三十年春、再興の工成る。現に末寺五箇寺を有し、郡内名刹の一たり。  
●境内六百四十八坪餘、寺寶に行基作延命地藏尊立像を存す。尙ほ焼失せし什寶中には、善心僧都作觀音立像一軀、同軍部院三尊畫像・光嚴司筆十六善神影像等ありしと云ふ。

**東樂寺** 城崎郡中筋村大字清冷寺。

●古義眞言宗。  
●七尾七谷に分崩し、長方に面するは七尾開創七福即生の靈地なりとて佛堂を創建すと傳ふ。往古堂閣善美を盡し、堂房百二十餘宇を連れしが、天正年間、明智氏の兵變に罹り、堂宇、什寶悉く烏有に歸す。元禄年中、真海之を再興し、以て現在に及ぶ。  
●境内二十四餘坪。普門橋を渡り仁王門を入りて進めば事務所あり。更に本坊の前を通りて本堂に達すれば、其左方に開山堂あり。其他位牌堂・藥師堂・鐘樓・客殿・庫裡等を具備す。本尊開創十一面千手觀音立像一軀は藤原初期の作にして、刀法等素朴なれども五重の臺座等を具備す。藥師堂の本尊木造藥師如來坐像一軀は鎌倉時代の作にして以上二軀共に國寶に指定せらる。他に古鬼面等を藏せり。山中に西國三十三所並びに西國八十八所靈場を設く。また本堂中本堂、大塔ヶ谷、比丘衆谷等の舊址存す。  
●修正會(二月十二日、護摩供(四月二十一日))。

●草創年代並に沿革不詳。現に高野山末なり。  
●奉安の木造四天王立像四軀は丈高約五尺、後世の修補多く著しく原作の趣致を損す。寺傳源信作とするも、藤原末期の作に係る。

**隆國寺** 城崎郡三方村大字荒川。

●曹洞宗。  
●布金山と號す。弘安三年の創建とも云ひ、一に天正十五年、山名持豐の臣垣谷繁章、其祖隆國道祖の爲め創建する所にして開山は大儀宗持なりとも云ふ。現に末寺十五箇寺を有する地方の大道場たり。  
●寺域二千七百坪、堂宇の完備せること郡内に冠たり。本尊觀世音菩薩を安置す。寺後に牡丹を植ふ、盛花時の眺め頗る佳なり。

**專福寺** 出石郡高橋村大字平田。

●眞宗本願寺派。  
●放光山と號す。草創年代不詳ならざれど、もと眞言宗にして香積寺と稱し、粟谷口にありき。明應年中、住僧、本願寺八世蓮如に歸依して現宗に改む。其の後久しく衰頹せしが、寛文中、僧道照開創地に再建す。元禄年中、僧貞山、現地即ちホゴヤ山の麓に移し、文政五年、六世人眞房大藏、本堂を再建す。當寺には學僧輩出し、一貫、實行の如き多くの著書を殘し、大藏及び其二子得生、聞名は、學徳に高く、本願寺に用ひられ、父子三師、北海道函館、小樽の兩別院を創設し、其他各地に布教し、又遺書數多を殘せり。聞名はまた里俗訓育の功多く、現に寺側に其記念碑あり。  
●寺寶に古書畫、古文書等所藏多し。

**進美寺** 養父郡宿南村大字赤崎。

●天台宗。  
●寺傳に、應雲二年、文武天皇勅して十三間四面の伽藍並に四十三坊を建立せられ、寺領は赤崎、岩中、日置三村の中に於て、又燈油田は石和田、保岩、出野等三箇所に賜ふと云ふ。後、鳥羽天皇の勅願寺となり、大般若經六百軸を寄進せらる。建久八年、源賴朝五輪塔八萬四千基を造立、内五百基を當但馬國に充て、二百基は國中の大名に遣らしめ、三百基を當寺に遣つ。是れ平氏の冥福を修せんが爲なりと云ふ。至徳年中、州内三十三番巡禮第一の札所となる。因みに大田文に、根本中堂領、進美寺三十二町五段、領家聖憲法師、地頭河内木小三郎入道蓮忍と記し、但馬考には、進美寺大田文に氣多郡に入ると書く。蓋し郡中第一の古名刹たり。

**大明寺** 朝來郡生野町黒川。

●臨濟宗妙心寺派。  
●靈頂山と號す。正平二十二年秋、月庵宗光(勳諡正續大祖禪師)南紀勢落を経て當地に遊び、其胸襟を受して駐錫す。鎮主山名宮内少輔時隆大いに歸依し、本寺を創して開山に請す。應永十五年、時隆卒するや、當山に繼り、諡して大明寺殿巨川照公と云ふ。宗光、別に自ら圓通、大同、禪昌の諸寺を開けり。永享以來堂塔衰頹し、天文年中、回縁に罹り、現存の祖堂を殘して悉く灰燼に歸す。其後、澤庵之を修營し、正保年中、大恩再興して中興開山となる。  
●寺寶として開山宗光、元より將來せる禪月大師筆十六羅漢圖等を藏す。境内に山名時隆の墓、宗次入道

**相應峯寺** 美方郡濱坂町。

●天台宗。  
●大華寺とも稱す。天平九年、行基の開基に係ると云ひ、其後の沿革不詳なり。西樂院、西光坊、安養院の三塔あり。  
●本堂を初め十六字を有し、西國三十三所、西國八十八箇所靈場を置くを以て知らる。寺寶中、本尊木造十一面觀音立像一軀は國寶に指定せらる。山上興ノ院に安置され、高さ七尺餘、相貌雄偉にして藤原時代の作と推定せらる。寶冠、瓔珞、持物、光背、蓮座は總て後補に係る。  
●法會(一月十八日、三月十八日)、觀月會(七月二十六日)。

**乘寶寺** 水上郡柏原町柏原本。

●古義眞言宗。  
●草創年代並に沿革不詳。現に高野山末たり。  
●寺寶中、紫紙金字法華經八卷は建長五年六月施入の奥書あり。類品少く紫紙の一遺例なり。紺紙金字大威德陀羅尼(卷第十六)一卷は仁平四年五月一日の奥書により、美作守藤原家長の寫經なるを知る。二點共に國寶に指定せらる。

**常勝寺** 水上郡久下村大字谷川。

●天台宗。  
●竹林山と號す。孝德天皇大化年間、法道仙人此地

**藥師堂** 水上郡久下村大字岡本。

●不詳。  
●草創年代並に沿革不詳。  
●奉安の木造藥師如來坐像一軀は光背及び八重臺座を具備し、光背は三枚の板を合せ、光心八葉及び周圍の寶相華文様を墨にて描く。藤原末期の作なり。

**石龍寺(岩屋寺)** 水上郡小川村大字岩屋。

●古義眞言宗。  
●高野山末にして、古來岩屋寺と稱せらる。寺傳に聖德太子の草創に係ると云ふ。村上天皇の御歸依厚く、伽藍坊舎を建立せらる。觀應年中、足利義隆、仁水頼



草、義長兄弟を従へ二千餘騎にて本寺に籠る。此時、此岩屋寺の衆徒元來無貳の志を存せしかば、城郭の便も心安く覺えたる上、萩野、波々伯部、久下、長澤一人も残らず籠せ盡る(太平記)。程の忠勇振りなりしかば、足利義隆より小川庄三百町を寄せ永代の寺領せり。天正年中に至り兵火に罹り、諸堂坊舎灰燼に歸せしが、寛永年中、再興せらる。

遷身寺 水上郡葛野村大字下。

●曹洞宗。●十九峯護國山と號す。もと行基菩薩の開創する所と傳へ、往時は蓮華深間に堂塔を連ねたりと云ふ。天正年間、織田氏の兵燹に遇ひて全山の堂宇悉く灰燼に歸し、中島氏の寄せし田一段を以て茶湯の料とする有様なりき。爾後、久しく荒廢のまゝにして、佛像亦深谷に流されし、精ふものもなかりしが、元禄年間疫癘起りて里人多く死す。是れ即ち三寶を侵すの咎なりとなし、大いに山谷に求めて泥土に散亂せる佛像を蒐め、たるみ堂の残材に補足して現地に本堂を建立せり。寶曆年中、圓通寺二十五世大座清徳名刹の願願を歎きて曹洞宗の法地となし、第二世提山を中興として、法燈を繼がしむ。後ち東嶽今の庫院を建てたり。●寺寶中、佛像の優劣なるもの頗る多く、國寶に編入せられたるもの次の如し。木造阿彌陀如來坐像一軀は寺傳に信心作と傳へ高さ七尺九寸六分、藤原式定印彌陀通行の形にして、後世修理の際、建久三年施主藤原氏女なる銘文を見せり。同十一面觀音坐像一軀は高さ三尺五寸、寺傳行基作とするも、藤原期の遺作にして、本寺諸像中の佳作となすべし。同坐像如來坐像一軀また行基作と傳へ、丈高三尺八寸、衣襷甚だ多く、胎髪を存し、藤原末期の製作に屬す。此外、木造坐像如來坐像一軀(高さ五尺四寸五分)、同觀音立像一軀(丈高五尺七寸)、同吉祥天立像一軀(丈高五尺五寸二分)、傳小野草作、同十一面觀音立像三軀(丈高五尺八寸、五尺七寸八分、五尺八寸)、同坐觀音沙門天立像一軀(丈高五尺八寸、傳空海作)、同阿彌陀如來坐像一軀(高さ二尺九寸六分)、同地藏菩薩坐像一軀(高さ四尺五寸)の九體は共に藤原時代の作なるも、何れも破損甚し。



(寶蹟) (傳東如陀彌阿歲寺身遺)

圓通寺 水上郡寺村大字御油。

●曹洞宗。●水谷山と號す。丹波譜に依れば、足利尊氏の四子莫中(勳直親成國師)の開基に傳り、後醍醐院の勅願所なりと云ふ。後ち天正の兵亂に際し、一千餘石の寺領を失ひしが、寛永年中、寺境の朱印を厚け、五山格式、其中一派の本寺に列し、また輝家丹播但三州の觸頭となる。慶安二年、徳川家光諸堂を修營す。時に御藏の規模宏大、二十四棟の建物鑿次せしが、文政八年正月、諸堂悉く焼失し、今は僅かに其中數を再建するのみ。往古米寺二百餘を有せしが、現今五十六箇寺を存し、近郷風指の巨刹たり。●寺城千百餘坪、本堂(桁行十三間半、檼間十間半)、庫裡・開山堂・接實・懸梁・土藏・鐘樓・總門・仁王門等完備す。本尊に如意輪觀音を安す。寺寶として足利尊氏陣中守本尊と稱する佛舍利及び黄金塔(高さ五寸)、傳空海筆十六善神・野野探幽筆三幅對・海北友松筆人物畫・雪村筆山釋迦像・道元筆抄軸・澤庵筆跋等を懸藏す。

高源寺 水上郡神樂村大字檢倉。

●臨濟宗妙心寺派。●瑞巖山と號し、正中二年の開立にして普應國師の法嗣深溪祖額を開山とす。遠溪は足光光基の三男にして、徳治元年元波に渡り、普應に就きて參究す。正和四年、歸朝し、後ち本寺を創す。後柏原天皇御宇、勅願道場とせられ、臨濟宗中興派の一の本寺となる。現に當派別格地なり。●寺城千八百六十坪、極樹多くして頗る風致に富む。佛殿・方丈・庫裡・山門・總門・鐘樓・三重塔・阿彌陀堂等を具備す。寺寶中、絹本着色普應國師像一軀は國寶に指定せらる。普應は元の高僧明本(至治三年示寂)にして、本像は組織在元中に描かしめしもの、上部に明本の自像あり、其中に組織の名も見え、傳來最も正しく、宋元頂相の一例たり。現に墨蹟京都博物館を歸藏す。

大燧寺 水上郡神樂村大字賴土。

●臨濟宗妙心寺派。●惠照山と號す。もと惠堂山と稱したり。應永年間、僧一休當地に草庵を結びて隱居す。時に後小松天皇勅して七堂伽藍を遺營せしめ給ふ。永正年間、兵火の爲に諸堂燒燼せしが、是等は今の大堂と稱する阿彌陀堂の地に存したり。天文三年、足立修理大輔安秀寺を南陽に再建し、其後梅林寺の湘山を請じ本寺の始創とす。三世南叟を経て四世安禪、寺を西岳に遷せし、功を師に譲りて南叟を中興とす。爾來開山一休禪師の遺風を守りしが、十三世萬水に至り、掃磨雲門寺中興九世倚州の法を嗣ぎ、其法地となし、方丈、庫裡を再建す。十五世寛海復た庫裡、佛殿、表門、鐘樓等を再建せり。寛海は文政十二年、大本山妙心寺輪住の請に應じ、參内、普衣を賜ひし高僧にして、天保元年、勿疑庵を遺營して之に住す。第十七世寛勲、現住寛通共に講堂の再興に努め、以て現在に及ぶ。もと塔頭に福林寺、永澤寺、西林寺、寂光庵、勿疑庵、法輪院、慶長庵、淨光庵の八院ありしも今は廢絶せり。●境内五百三十三坪、佛殿・方丈・庫裡・表門・玄關・鐘樓等の堂宇を具ふ。寺寶に一休筆色紙あり。堂後の山麓には一休の塔所を存す。

西光寺 多紀郡日置村大字畑市。

●曹洞宗。

兵庫縣(水上郡・多紀郡)

洞光寺 多紀郡雲部村。

●曹洞宗。●寶鏡山と號す。丹波譜に依れば、應安七年、天童の開基にして、明徳三年、足利義滿、尊氏の爲に法華經一萬部を内野に修すあり。天正年間、明智光秀の兵火に罹り、堂宇烏有に歸すと共に寺領亦沒收せらる。現堂は其後の再建に成り、本尊風指の大伽藍にして、現に米寺四十九箇寺を統ぶ。●寺城一千二百三十三坪餘、本尊如意輪觀音を安す。

大國寺 多紀郡味間村大字味間南。

●天台宗。●大化年間、空體仙人の開基に係る傳ふ。天曆年間、兵燹に罹りて全山燒亡し、正和年間、再興せり。●本堂・庫裡・大日堂・天神堂・辨天堂・鐘樓等あり。本尊木造大日如來坐像二軀、同阿彌陀如來坐像一軀、同持國天立像一軀、同增長天立像一軀は國寶に指定され、前三軀は後世の修補多きも、佛像及び菩薩の姿態等明かに藤原時代の優雅なる趣を窺ふべし。其他緣起一卷・涅槃圖一軀等の寶物を藏す。●大日如來會(二月二十八日)、星祭(二月節分)、大施餼鬼會(八月二十四日)。

文保寺 多紀郡味間村大字味間南。

●天台宗。●松尾山と號す。本郡古市村高仙寺、同城南村龍藏寺と共に丹波三山と稱せらる、古刹たり。法道仙人の開基にして孝徳天皇、其遺業を慕し給ひ、堂宇を御遺營あり、仙人自刻の聖觀音を本尊として安置せしに起原すと傳ふ。往時は七堂伽藍完備し、坊舎數多隣次せしが、天曆年間、兵燹に罹りて境内焦土と化し、終に法燈斷絶す。正和年間、花園天皇勅して其舊址を再興せしめられ、文保寺の寺號を賜ふ。後ち天正年間、豐臣秀吉山林一圓の買役を免じ、領主青山氏寺田若干を附したれば漸次舊觀に復したり。現に眞如院、大勝院、觀明院の三支院を有す。●境内廣瀆、本堂・本坊・庫裡・土藏・鐘樓・仁王門等あり、本尊聖觀音を安す。仁王門には後小松天皇の勅額を掲ぐ。

龍藏寺 多紀郡城南村大字眞南條。

●天台宗。●大化年間、法道仙人の開創と傳へ、當郡高仙寺、同文保寺と共に丹波三山と稱せらる、古刹たり。細川兩家記に「弘治二年十月、三好長慶の衆また丹波屋上へ出陣して、龍藏寺を資落す」とあるは本寺の事なり。●境内二百餘坪、寺城如意ヶ嶽北麓に位し、後山は古來極崖を以て名高く、風致極めて幽邃なり。本堂・庫裡・勝軍地藏堂・總門等の堂宇所在す。本尊は藥師如來なり。●勝軍地藏繪日(舊正月、三月、七月各二十四日)。



高仙寺 多紀郡古市村大字南矢代。

●天台宗。
●當郡文保寺、同龍藏寺と共に丹波三名刹と稱せらる。大化年間、法道仙人の開基にして、後ら廢絶せしを、大同年間、僧量澄其遺址に就きて七堂伽藍を再建し、初めて高仙寺と號すといふ。爾來寺門繁榮して僧坊二十五棟を具備し、當國に於ける本宗隨一の巨刹たりしが、天正年間、兵火に遭ひ、同十七年、豐臣秀吉山林若手を附し、諸堂を再建せしむ、遂に舊觀に及ばず。

●境内四百二十餘坪、背後に高仙寺山を負ひ、山中の風光絶佳なり。本堂・本坊・位牌堂・寶庫・鐘樓・山門等あり。本尊は觀世音なり。また山腹に勝軍地藏堂あり。頂上に高三丈餘四丈餘の巨岩あり、法道仙人修法の遺蹟なりとて仙人岩と稱す。

常陸寺 津名郡仁井村大字仁井。

●古義眞言宗。

●應永院と號し、御室末なり。寺傳に據れば、淳仁天皇天平實字八年、親位のこありて當國に遷幸せられ、皇太后人親王追善の爲に本寺を創建せらる。依りて應永院と云ひ、當時住僧の名によりて常陸寺と云ふと。一説に桓武天皇の朝早眞觀王皇太子を廢せられ當國に遷されんとて途に驚ぜらる、當國に歸り崇道天皇と號し、延暦二十四年、其追福の爲に一寺を建立し常安寺と稱す。是れ常寺の起原にして、後ら常陸寺と改稱す。天正年間、兵燹に罹り、舊記悉く焼失し沿革を詳にせず。慶長十九年、再建を遂ぐ。

●境内千二百坪、寺域常陸寺山頂に在り、既望廣瀬を以て開け。本堂・佛殿・大師堂・行者堂・庫裡・鐘樓・仁王門等あり。

千光寺 三原郡加茂村大字内膳。

●古義眞言宗。
●先山清淨皇院と號し、高野山來たり。延喜元年、寂忍の創建に係る。寂忍は播磨上野の人、もも娘夫たり。一日塔を射、之を追ひて當地に來り、圓らず觀音の靈異を感じ出家して寺を創すと云ふ。天正年間、豐臣秀吉寺領二百石を寄せ、次で蜂須賀氏の祈願所となる。元和八年、本堂を再建し、文化十一年、三重塔を再建す。

●寺域八千餘坪を有し、堂宇に本堂・講堂・三重塔・六角堂・千體佛堂・鐘樓・仁王門等あり。鐘樓の鐘は弘安六年忍阿、忍聖等の鑄造に係り、永正十六年寄進の銘文を刻す。

國分寺 三原郡八木村大字國分。

●律宗。

●淡路國國分寺にして、天平十三年、聖武天皇の勅に依り建立せらる。日本書紀中に、紀伊國安曇郡吉備郡生れの人、紀の馬養、祖父廣の兄弟漁師をこせしが、光仁天皇實龜六年、暴風雨に遭ひて漂流し、釋迦如來の威徳に依りて全きをを得、遂に淡路國分寺に留りて佛道を行はる説話を載せたるが、これ現在文獻の上に淡路國分寺の往昔を偲びしむる最古のものとする。又延喜式主税上に「淡路國正稅三萬五千束、公廩四萬五千束、國分寺料五千束」と記す。本尊釋迦如來の胎中銘文に「(前略)敬白、曆三年歲次庚辰、三月手摩始、同四月二十七日庚戌、本開眼、四年歲次辛巳、六月二十

五日辛未、御安座、新開人僧乘(式圓房同寺住)大願主僧盛尊(尊忍房當寺住)大施主海氏女、大佛師兵部法橋僧命圓(觀地房普若洛陽住今者阿州名西庄第十蓮福寺住)結縁師工番匠僧流泉(或忍房入太)光寺住僧盛弘(眞忍房上田八幡住)僧重信(性圓房當時承住)信心結縁僧(道賢房阿州名西庄中島郡延福寺僧)平光久、治部允藤原近實(僧尊尊若盤)と見え、當時の本寺狀況の概略を知るべし。後柏原天皇大永五年八月、沙門俊泉の筆録に係る淡路國分寺本堂再興勸進帳には「(前略)世及、後季、寺社供料墜落、佛關朽損、安六十六部聖某至干此、款伽藍之敗壞、有志復於是勸進云々」とあり、既に大永年間荒廢に歸せし事明かにして、加ふるに、寺傳の如く天正年間兵火に遭ひし事なれば荒廢の狀推知すべく、正保年間、鐘かに一院を存し、僧快厚住し、本尊を草堂に奉安せしと云ふ。寛文五年、僧照運に至り漸く之を再興し、貞享元年、本堂の再建を遂げ本尊を移安す。往昔七堂伽藍整備し、本覺院、正壽院、成就院以下の塔頭四十九院を列し、今は西蓮坊、寶幢坊、彌勒坊、法界寺、十輪寺、法蓮寺等々其名を残すのみ。

成相寺 三原郡八木村大字天野。

●古義眞言宗。

●神護山、俗に成相寺と號し、大覺寺末なり。仁治四年、高野山僧實弘此地に配流の向、高野山に模して本寺を創すと云ふ。往時金堂、大塔、大門、中門、講堂、釋迦堂、大日堂、聖天堂、祖師堂等整備して寺門盛觀なりしが、中比に至り寺運衰轉す。後ら僧乘源之を再興す。文明年間信秀、明應年間賢秀等當寺に止住す。

●本堂・大日堂・成相院・鐘樓・大門・中門等具備す。本尊木造釋迦如來立像一軀は國寶なり。境内に共に一木造にして藤原時代の優作なり。奥ノ院址は谷奥にあり、往生谷と稱す。林中菩提樹多く、傳に實弘の播種せるものとす。

護國寺 三原郡賀集村大字八幡。

●古義眞言宗。

●現に大覺寺末にして、もと賀集八幡宮供僧寺たり。文明年間の古文書に僧坊田十四町、修理料八町、樂料三十町、齋料五町、一切經費料等を有せし事見ゆ。同元年六月、陳天の免除を請へる狀にも「賀集神宮寺大藏に及、運幣を企んとするに、毎月一人陳夫を出す故、一山運盛なり云々」とあり。

●本堂・講堂・寶塔・經藏・庫裡等を具備す。寶塔安置木造大日如來坐像一軀は寺傳に空海作と云ひ國寶に指定せらる。他に寺寶頗る多く、圓珍作不動像・同見沙門天像・十六善神畫像(唐繪)・五大尊畫像・尊勝畫茶羅・文明二年護國寺結番定書・應永四年賀集庄高座觀音運狀を始め古文書類多し。尙ほ本村字原瀧觀音堂には天然記念物たる千年の松を存す。



滋賀縣

義仲寺(無名庵) 大津市馬場町。

●天台宗門派。
●俗に無名庵と云ふ。此地もと栗津原と稱し、元暦元年一月二十日、木曾義仲戦歿するや、乃ち此處に葬る。延享五年義仲寺略縁起に、義仲戦後、巴御前來りて草庵を營み、巴寺と稱せし由見ゆ。天文二十二年、近江の守護佐々木高頼石山寺參詣の歸途、義仲の古墳に詣り、一堂を建立して食田を寄す。元禄三年九月、松尾芭蕉聖田本福寺千那の許を辭して當寺に來り、無名庵に遷住す。翌年八月、門弟一同此處に觀月の宴を催すと云ふ。同七年、其大阪に客死するや、遺命により當寺に葬る。當寺は初め石山寺に屬せしが、後ら當派光淨院末となり、以て現在に及ぶ。

●今、朝日堂・無名庵・新堂等の堂宇あり。當寺古圖には他に本堂・粟津文庫・茶堂・對月庵等見ゆれど今亡し。新堂には芭蕉以下其門人三十六名の畫像を置く。寺實として伊藤若冲筆翁堂天井畫・維村筆朝日堂繪・吳越筆粟津文庫額面等を藏す。境内に義仲塚、芭蕉塚相並びて存す。義仲塚は二株の信濃柿を植ゑて其標とす。此處に義仲の後裔菅原義長、大學頭林衡に文を請ひて建てし碑有す。芭蕉塚の碑銘は寶井其角の筆と云ふ。他に「木曾殿之背合せの寒きかな」の其角の句碑及び今井堂平墓、内藤文章遺蹟等あり。又手向松と稱する古木は、略縁起に義仲塚に手向けし松枝、後世根ざしを生じて今に繁茂するに至りしものと傳ふ。

●義仲忌(一月二十一日)、奉願會(七月十二日)、時雨忌(十一月十二日)。

華嚴寺 大津市西原町。

淨土宗。

●旭高山と號す。天文九年、西念萬休の開創に係り、大津五箇寺の一に列す。萬休は足利義澄の次子と傳へ、其保護厚くして、當時寺城方八町を占めたりと云ふ。天和年間、祝融の災に罹りしが、近世堂宇を再建す。
●皆て藤原秀郷の晩年、佛道に歸して此地に講居し、以て三井園城寺に願密の法を學びたりと傳へ、今境内に藤太月見岩と稱するものあり。

大津別院 大津市菅屋町。

眞宗大谷派。

●文祿三年、本願寺教如法燈を弟准如に譲りて北殿に退身す。慶長四年、大津に來り、當地に掛所建立の志あり、同五年、遂に造營の工畢り、同年六月、移徙供養を修す。爾後、鐘磬を置き寺務を管掌せしむ。徳川家康上洛の際、必ず本院を以て其居館に充てたり。元和三年、鐘樓を新築す。慶安二年、舊堂改築の工に着手し、翌年工竣る。承應三年、鼓樓の再建を遂げ、爾來相次で坊舎を重修す。明治元年八月二十日、明治大佛堂院を以て行在所に充て給ふ。
●境内地千三百二十坪、本堂・御殿・客殿・輪書所・鐘樓・茶所等の堂宇を具す。門前に教如手植松と稱するものあり。

乘念寺 大津市下百石町。

淨土宗。

●天正十六年、信譽の開創に係り、古來大津五箇寺の一に列す。
●境内廣瀬にして、地藏堂・辨天堂・彌音堂等の堂宇を具ふ。寺實中、木造聖觀音立像一軀は國寶に指定せらる。藤原前期の作にして後背の柱に貞享三年の修理銘を存す。

近松別院(願證寺) 大津市南町。

眞宗本願寺派。

●近松山願證寺と號す。寛正六年一月、山門の僧徒東山大谷の本願を襲ふや、本願寺八世蓮如自ら願影を奉じて此地に來り園城寺塔頭滿德院に隱る。次で文明元年、南別所近松寺内に一字を建立して、近松山願證寺と號す。即ち當寺の濫觴たり。時に三井寺より寺料五石を分附す。同三年、蓮如北陸教化の途に就くや、其第三子蓮淳を之に留め、以て當寺住持たらしむ。同十二年、蓮如山城山科に本坊を營み、願影を其地に移すに及び、別に等身の願影を描きて當寺に安す。是より先き同十一年、蓮如、河内國久寶寺村に西蓮寺を建立して其第十一子寶順を之に住せしめしが、其嗣を亡ひし爲め蓮淳に轉住を命ず。因りて享祿二年、蓮淳願影を具して該寺に移り、之を願證寺と改めて當寺を同寺號稱す。永祿三年、第四世蓮淳の時、院家の勅許あり。武門の歸依亦後からず、織田信長、豊臣秀吉等寺領若干を寄す。慶長三年、第五世願證の時、輝元、景勝、秀家、利家、家康等連署の朱印狀を受け、當郡五別所村及び見世村の内に於て四十四石九斗五升

安養寺 大津市上關町。

眞宗本願寺派。

●智證大師圓珍の開創に係ると傳へ、明暦年中、憲證之を再興す。
●境内に觀音堂あり。本尊觀音菩薩は一に立間觀音と稱し、往古輝丸の琵琶彈奏を立聞せしより此名ありと傳ふ。堂内安置の木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶たり。もと關寺の本尊なりと傳へ、藤原末期佛彫彫刻の特徴を示す。

光淨院 大津市別所。

天台宗門派。

●園城寺塔頭なり。嘉吉年間、山岡美作守景廣の創立に係る。其後、山岡景冬二男雄盛して當院の住持たりしが、後ら遺俗して山岡道阿彌と稱し、織田信長、徳川家康に仕へて偉功あり。慶長六年、當院を再興す。昭和八年一月、堂宇に大改修を加へたり。
●堂宇は園城寺金堂の北方にあり。其中、客殿は國寶建造物たり。桁行七間、椀間六間、單層、屋根入母屋造、柿葺にして、慶長六年、山岡道阿彌の再建に係る。其平面頗る奇にして、鎌倉期に發生し室町期に略完成せる所謂主殿造より更に書院造に移らんとする過渡期の様式を示せり。其形式規模醍醐三寶院表書院に酷似して、稍々其大きさを縮小し、更に殿殿風の趣致を濃厚ならしめたり。堂は東面にして妻部正面、軒端中央に唐破風を作り、其直下貫子縁端に階を設く。即ち殿殿風の餘影を留めしものにして、更に軒唐破風の右方、入母屋屋根正面、面左端に切妻屋根を南方に長く突出せしめ、其屋下を玄關とす。是れ殿殿造の象殿を玄關に轉用せるものなり。各軒に輕快なる礎礎を延べ舟肘木を加へて樞紐なる方柱を立つ。内外仕切の建具中、上階戸或は板唐戸を用ひたるは又殿殿風の遺影にして、其貫戸は純書院造の系統なり。内部懸疊敷、天井は主として竿縁天井、四室に區別して其西南隅の一室を奥之間とし、床を設け向つて左側後方附書院あり、床には二間松の一樹を描



(實圖) (殿客院淨光)

勸學院 大津市別所。

天台宗門派。

●園城寺塔頭にして、三井一山の學寮たり。創立年代不詳なれども、其客殿は慶長五年、豐臣秀頼、毛利輝元に命じて造營せしめしものなり。
●南院通を山手に向つて進む一町餘の地にあり。客殿は現に國寶建造物にして、方七間、單層、屋根入母屋造、柿葺、慶長五年四月の建立に係る。其形式園城寺塔頭光淨院客殿と同じく、所謂武家造中の主殿造に屬す。堂は東面、妻部正面、其中央に小なる軒唐破風を造り、直下香説の階を設く。唐破風より南方切妻屋根を突出して玄關に充て、腰四方に貫子縁を作り、細部構造極めて樞紐樞麗なり。光淨院客殿と稍々異なる所は、光淨院客殿に其玄關と略相對的に突出せる附書院あるも、當殿には之を缺き、客殿の正面北方には稍々長き廊ありて庫裡に續けるも、當殿は正面北端に直に別園の唐破風造玄關(後世加修)を附して一方客殿に通じ、他方庫裡に及ぶ。其内部の區別、建具等概ね光淨院客殿に同じく、夫を稍々簡單にせる趣あり。又奥之間床、附書院ありて床二間半壁張り雄大なる禪の圖を描く。蓋し





(寶園) (觀客院學藝)

類例乏しき新建築の遺構、相續して關城寺内に存せるは頗る特異なるべし。尙ほ金地着色床間壁貼付欄干三面・同機貼附梅枝及び花卉圖四面・同機貼附櫻杉及び花卉圖四面・同機貼附梅枝及び花卉圖四面(以上十五面客殿  
一之間  
所在)  
紙本着  
色襖貼  
附松に  
山鳥、  
鴨、意  
竹に雀  
圖十六  
面・同  
機貼  
附竹に  
雀及び  
鷹に鷺  
圖八面  
(以上  
二十四  
面客殿  
二之間所在)は總て國寶に指定せらる。

**正法寺** (順禮觀音堂) 大津市別所。  
●天台宗寺門派。  
●關城寺境内佛堂の一にして、俗に順禮觀音堂と云ひ、西國三十三所第十四番札所なり。もと聖願寺又は

如意輪觀音堂と稱す。延久四年、後三條天皇の勅願に依り富山華谷兩方の地に一字を創し、聖願寺の勅願を賜ふ。後現寺に改め、文明十三年、觀音の夢告を蒙りて堂宇を現地に移すと云ふ。貞享三年五月、回祿の災に罹りしが、元祿二年、再建の工成る。即ち現在の堂宇なり。明治十一年十月、聖駕北陸東海巡幸の御、此處に行幸あり。同四十二年十月、同四十五年四月東宮行啓、大正十一年皇后行啓等數次の光榮に浴す。  
●境内琵琶湖に面して大津全市を一眸の下に瞰下し湖を隔て、近江富士の秀峯あり、唐崎、聖田の景趣、更に北方比叡、比良、伊吹の諸峯を収めて展覧絶佳、湖南隨一の勝地とす。今、觀音堂前面に舞臺を設け、觀月舞臺と稱す。又境内に不動堂・天神祠等あり。本尊如意輪觀音は圓珍の作と傳ふ。寺寶中、木造愛染明王坐像一軀は現に國寶にして、鎌倉期の作に係る。  
●觀音講(毎月十七日)。

**尾藏寺** 大津市別所。

●天台宗寺門派。  
●關城寺の一支院なり。圓珍の開創と傳へ、慶祿之を中興して滋賀寺の十一面觀音像を此處に移すと云ふ。古來土俗の信仰厚く、賽者雜沓して、往還の際笠外る。程なれば、時人之を外れ笠觀音或は笠脫の觀音等と稱す。正曆年間、慈覺、智證兩門徒相争ふや、慶祿を避けて山城岩倉の大雲寺に到りしが、幾許もなくして遷り、當寺龍雲坊に住す。永祿二年、後白河法皇關城寺御幸の御、又龍雲坊に入り給ふ。  
●寺城關城寺内東境に位置す。寺寶中、木造十一面觀音立像一軀は國寶なり。所謂龍雲の佛像にして、像身蓮肉一水彫成、刀法纖細、若衣に數金文様を施す。

**關城寺** 大津市別所。

●天台宗寺門派。  
●關城寺塔頭にして、同寺三門跡の一に列し舊宮門跡なり。もと平等院或は櫻井の室と稱し、關城寺長吏の住坊とす。法果は圓珍を始祖とし、門跡は付上天皇第三皇子明王院宮入道信圓親王(寺門第九世)を祖とす。天元四年五月、親王、觀音院餘慶に就きて出家し關城寺明王院に在りしが、次で京都岡崎の地に當院を創立す。同三年三月、山門の僧徒來襲して之を燒く。次で明尊遺跡を傳領し、以て三井寺門の礎礎となせしもの如し。明尊は餘慶の門に出づ。時に藤原賴通之に歸する事深く、其建立に係る宇治平等院を以て之に兼帯せしむ。爾來平等院は宇治別院の專稱となり、當院は號を關城院と改むと云ふ。其後、行尊、行慶等相承す。當寺拍、櫻井の稱あるは行慶の號を傳へたるなり。文安四年十二月、後村上天皇皇孫五當院宮圓胤親王遷俗して紀伊北山に起兵せしが成らず、島山氏の爲に害せらる。世に之を關城院遺俗宮と稱す。大永、享祿の頃、屢次兵火を蒙りて衰運に向ふ。天文年間、關城寺内の現寺地に移る。天正八年、養徳遷化の後無住たりしが、慶長十二年、足利義昭の孫常陸入りて中興す。徳川氏の時、寺領六百九十石を有す。寛永十八年、明正天皇舊殿を賜はり、正保四年六月、此處に移建す。現在の堂宇即ち是れなり。明治十一年十月、天皇行幸あり。維新後、一時門跡の稱を止められしも、同十八年復舊す。同四十三年十月、四十五年四月の再度に亘り東宮行啓の榮を賜ふ。



(寶園) (觀客院學藝)

●堂宇中、寶殿(桁行十間、梁間七間、單層、屋根入母屋造、檜瓦葺)は國寶建造物に列せられ、玄關西方にありて南面す。寛永十八年、明正天皇舊殿を賜はり、正保四年移建せしものにして、其構造様式等總て桃山期の特徴を帶ぶ。移建以來數度の改修に依りて著しく舊觀を損し、殊に内外仕切建具を硝子戸とし、入母屋檜皮葺の屋根葺を檜瓦葺とせる等、其甚しきものなりと雖も、破損の制、欄干、細なる方柱、寶子廻縁に施せる高欄等昔風の遺風を存し、宮室建築殊に殿造の餘影を傳ふ。内部敷室に分ち縁座敷あり、上段之間、壁に描ける金地の山水畫の秀麗見るべし。東方附屬の玄關亦桃山期の特徴を示し、大唐破風屋根を冠し正面紅檜下頭貫間に施せる幕殿及び頭貫端の繪形彫刻亦同じく當代の手法に據る。葺し本

寶殿、仁和寺本堂、御影堂、南禪寺方丈等と共に桃山期宮室建築の貴重なる遺構とすべし。寺寶中、絹本着色應樂筆孔雀牡丹畫一幅・同虚空藏菩薩像一幅・同淨土曼荼羅圖一幅・紙本着色應樂筆雜畫三卷・同關城寺境内古園十二幅・金地着色床間及び遠隔壁貼附住吉社頭圖六面(寶殿一之間所在)・同機貼附風俗圖四面(寶殿五之間所在)は總て國寶に列す。孔雀牡丹畫は關城院宮祐常法親王、應樂に命じて描かしむる所と傳し圖に亦辛卯夏應樂の落款あり。蓋し辛卯は即ち明和八年にして應樂三十九歳の作なり。圖は太湖石上巖壘の孔雀を描き、紅白の牡丹を添ふる獨得の寫生風彩色畫にして、應樂の代表作として古來著聞す。雜畫亦祐常法親王の命に依り應樂の描きしものにして、俗に七難七福圖と稱す。上中下三卷より成り、上中二卷は天災、地變、刑罰等厄難七種を、下卷には人間一生の慶事賀喜等吉慶七種を描く、卷末に明和五年秋畫の識あり、孔雀圖と共に應樂學生の大作なり。他に後深草天皇、後醍醐天皇、靈元天皇各宸翰・足利氏歴代消息・牧溪筆左右龍虎圖・顏輝筆十六羅漢像・足利義持筆月見觀音・探幽筆六枚折屏風耕作之圖・應樂筆老子乘牛之圖・同浪蕪之圖・同蓬萊之圖等を藏す。

●天台宗寺門派。  
●正しくは長等山關城寺と號し、専ら三井寺(御井寺)の稱を以て著る。又延曆寺を山門と云ふに對し、當寺を寺門と稱し、古來京畿四大寺の一に數へらる。現に天台宗寺門派本山にして末寺六百三十六箇寺、教會所百十八を統べたり。天武天皇二年、弘文天皇皇子大友與多王、父天皇の遺詔により奏請して天皇舊御



當寺に置かる。長元三年、村上天皇孫水園當寺長吏に補せられてより、世々親王子或は攝關の子孫之に任ぜられ、遂に圓通院、聖護院、實相院の門主交々之に補し、以て一派の權威を掌る。長曆二年十月、明尊を天台座主に補すや、慈覺の徒之を拒む。次で明尊圓通寺長吏たるに及び、翌三年五月、寺内に戒壇建立の事を請ふ。長久元年、常行堂を再建し、藤原頼通の北政所、土佐國和食庄を寄す。同二年、戒壇建立の許否を諸宗に問ふや、延曆寺獨り之に抗す。延久二年六月、再び之を諸宗に問ふ。同四年十一月、當寺、延曆寺、東寺の三所を御願寺と定め、各々阿闍梨三口を置く。翌年二月、戒壇の事に就き觀山大乘齋ぐ。承保元年、戒壇院建立を許されしが、山徒敬訴して之を破却す。爾來兩寺齟齬して降らず、承曆より文保二年に至る間山徒の燒却に遭ふ事實に七度に及ぶと云ふ。永保元年四月、日吉神社祭使の事より山門乘徒の忿怒を買ひ、御願十五所、堂院七十九箇所を初め多數の坊舎悉く灰燼に踏せしめらる。應徳三年、重興せしむ。保安二年、保延六年、應保三年の數度に亘り、山徒に燒毀せらる。其後、源平二氏の對立と共に兩者の抗争熾々激化し、治承四年、當寺、以仁王平家討滅の舉に與して平家の攻略に遭ひ、金堂一字を残して一山堂塔悉く燒亡す。蓋し源家は當寺新羅明神の崇拝より寺門に好意あり、寺門亦之に依る。從ひて鎌倉開幕以來、山門兎角白眼せられたる觀ありて、兩門の抗争益々擴大し、建保二年、文永元年、文保二年、元應元年の數次、當寺、山徒の怨火を浴ぶ。北條氏歴代當寺に隨依厚く、南北朝に入り、寺門、源氏の嫡流たる足利氏に加擔すや、山門亦兩朝擁護に多大の犠牲を情ます。延元二年、足利尊氏旗下細川定輝の營所となり、爲めに新田義貞、北畠顯家山徒と共に之を攻めて滿山の堂舎悉く兵燹



(寶圖) (堂金寺城圖)

に罹る。しかも足利氏歴代の保護最も厚く、屢次堂舎再興、寺領寄進の事ありき。天文二十一年、觀音寺城主佐々木氏と大津四宮祭に就きて争ふや、其焚燒に遭ふ。文祿四年、豐臣秀吉當寺宇を破壊し、寺領を没收

寺に移建す。即ち現在の釋迦堂是れなり。次で徳川家康父子山内に三谷、四十九箇院、五別所、二十五箇坊の堂舎を再興し、慶長六年、舊大和比叡寺三重塔及び當國西寺常樂院仁王門等を當寺に寄附移建す。翌七年、毛利輝元の發願に依り經藏を再興す。同十九年、方廣寺供養の事に依り、當寺末照光院門跡中絶す。寛文五年、徳川家綱四千六百十九石餘の朱印狀を寄す。明治元年、長吏聖護院門主權仁法親王復佛の勅、朝命を蒙りて當寺長吏職を停め、嘉言親王を以て當寺別當に補す。同年八月、別當宮覺去以來、又此職廢せらる。同五年、天台一家に當寺を置き、後ち更に寺門一派に別置す。同十七年、内務省の認可を得て長吏の名稱を復す。因みに當寺もと支院勸學院以下二十四箇院を有せりと云ひ、又圓通院、聖護院、實相院を當寺の三門跡と云へり(各項參照)。

●境内地七萬五千二百六十七坪。長等山中腹に位置し、近く琵琶湖に面して大津全市を俯瞰すべく、北方比叡、比真、伊吹の諸峯を遠望し、風光殊に佳なり。城内金堂・唐院(浦頂堂)・大師堂・三重塔・一切經藏・開佛井屋・食堂・大門・新羅善神堂・護法善神堂・總樓・古鐘堂・長日講摩堂・神變行者堂・童子四緣鐘樓・觀月舞臺並に境内佛堂順觀音堂(正法寺)の項參照)及び支院勸學院・光淨院・尾藏寺・圓通院(各項參照)以下の諸堂宇相連る。就中、金堂(奧ノ院)一切經藏(經堂)・開佛井屋・三重塔・食堂(釋迦堂)・大門(仁王門)・新羅善神堂及び光淨院客殿・勸學院客殿・圓通院客殿(以上三宇別項參照)は國寶建造物に指定せらる。金堂はもとの中院中谷にあり、今、寺域中央に位置し、一に奧ノ院と稱す。堂は南面、方七間(梁間前方第二間目の一柱間に通柱二本を附加し、此部の幅他の柱間に比し大なり)、正面三間向拜附、單層、屋根入母屋造、

繪皮葺の大空宇にして、文祿年中、豐臣秀吉當寺舊金堂を延曆寺に移して其轉法輪堂となせし後、慶長四年北政所、秀吉の遺命を受けて建立し、同六年竣工せしものなり。其構造形式よく天台宗佛堂の特徴を具し、其裝飾殊に繪彫彫刻等遠慮なく桃山再建當時の風調を傳ふ。軒二重繁樑、圓柱及び斗拱等一般木製の制頗る雄大、桃山豪宕の氣風に溢れ、四方廻縁には高欄を附して縁附々高し。柱間施設、斗拱組織等は一新形式に據らず、恰も鎌倉以前の建築に見るが如き觀あり。向拜軒裏手袂には精巧なる牡丹、蓮花、唐草等を浮彫し或は透彫類等の彫刻を施す、莖花、唐草等を浮彫して最も卓絶す。内部總樑敷の制は四方廻縁施設と共に延曆寺轉法輪堂及び根本中堂等天台伽藍の特性に一段の日本趣味を加へしものにして、近江西明寺本堂、大和室生寺本堂等と共に、天台、眞言兩宗佛堂様式の折衷と見るべきも、尙ほ其内外陣の區別嚴重なるは天台佛堂の規矩を墨守せるものなり。内陣中央一間一面に壇を設け、欽明天皇御宇百濟傳來の靈佛と傳ふる本尊丈六彌勒菩薩の像を安ず。古來著名なる常燈不斷の三燈は圓珠の點燈し所と傳へ、觀山根本中堂等の法式に一致す。蓋し本堂は桃山天台宗佛堂様式を傳ふるものとして、看過すべからざる一遺構とす。一切經藏は即ち經堂と云ひ、金堂南西丘上にありて東面す。初め足利尊氏の創建にして、慶長七年、毛利輝元之を再建す。堂は桁行三間、梁間四間、重層、屋根寶形造、繪皮葺、兩層共に軒端反轉著く、繪彫彫刻唐様に據る。上層一間二面、台輪頭下各窓を作りて内部採光に便す。下層出三ツ斗斗檜柱を用ひ、台輪頭貫と飛貫の中間立浦形欄を附せるは唐樓新種堂宇の一般に準ふ。内部床土間、内陣中央觀天井、後寄に一間一面の内に一段高く八角形の轉輪藏を作り、其上部屋蓋を冠し略八角圓堂



(寶圖) (堂食寺城圖)

形をなす。中に文祿役職利品高麗版一切經を藏し、其形式構造等本邦輪藏中最古の標本とす。蓋し本經堂は様式純唐樓精神に則り、又よく桃山期の特徴を傳へ、以て當代稀有の經藏建築とすべし。開佛井屋は金堂西側にあり、當寺開佛井上を覆へる建築にして、慶長五年建立に係る。井屋は東向、三間二面、單層、屋根向唐破風造、繪皮葺にして、屋蓋大唐破風の形式等桃山期建築の特性を發揮し、雄大莊重の氣に満つ。各方面に斗拱頭貫の下に長押を押し、其下蓋形の欄間を附して、正面格子戸、三面板壁とす。正面繫虹梁下斗檜間の裏股の尾は一種の雲形に彫り、殿間に裏股より突出して丸彫の龍を挟む。内部床を設けず、地下は即ち井泉三井なり。上部は唐破風輪藏の屋根裏を現し、左右後三壁は黒漆として、上部狩野元

信象飛龍圖を彩描す。三井を一に觀池と稱するは是れに因れり。蓋し當屋極めて小宇なりと雖も、構造様式手法裝飾悉く桃山期の特徴を示して微妙然も壯快の感深く、殊に東大寺及び山城峯定寺以外に類例少き新種建築遺構の一として珍重さる。尙ほ右三寺の開佛井堂何れも本堂側に接して建つは、茲に以て兩者關係の重要性を推し得べし。三重塔は金堂の西南丘上經堂南方にあり、慶長二年、豐臣秀吉大和國吉野比叡寺の塔婆を伏見城内に移せしが、同六年、徳川家康更に之を當寺に移せしもの即ち是れなりと云ふ。三間三層塔婆、每層屋根本瓦葺にして、屋根寶珠、九輪、請花、伏鉢、露盤等より成れる相輪を冠し、各層腰に廻縁を繞して高欄を組む。内部は中央四柱を立て、内内陣とし、茲に厨子入釋迦三尊像を安ず。即ち後陽成天皇七回御國忌禁中御八講の本尊と傳ふるもの是れなり。各層屋蓋輕快、總體の均衡整美、木割亦雄大にして、よく鎌倉期の遺風を傳へ、以て室町初期の建立と推知さる。食堂は一に釋迦堂と稱し、大門内右側に南面す。舊御所清涼殿の一部を賜はりて建立し、元和元年の改修を経たりと云ふ。堂は桁行七間、梁間四間、前面一間唐破風附、單層、屋根入母屋造、棧瓦葺にして、其屋根頗る重厚の感あるは、舊繪皮葺なりしを改めし結果とすべく、其痕跡現に歴然たり。四方廻縁を設け、總端支柱を立つ。四隅の柱のみ面取せる方柱を用ひ、他は圓柱とす。柱間は前面一間通を全部開放し、第二間には仕切あり、中央五間は部格子、兩端一間は板壁とす。次の二間通を外陣に充て、床摺板敷、天井草蓆天井、後端一間通は即ち内陣にして、中央須彌壇上に本尊釋迦如來及び歴代尊像を安置す。須彌壇の手法よく時代の特徵を示す。蓋し當堂の平面配置、通行佛宇建築に見ざる所にして、其構造様式明かに室町時代書院建築の